講談社文庫

ビビビ・ビ・バップ

奥泉 光

講談社

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ビビビ・ビ・バップ　CONTENTS

CHAPTER 1	開幕――大正池に郭公は啼く	7
CHAPTER 2	The First Session with Dolphy	47
CHAPTER 3	密室と封じ手の謎	127
CHAPTER 4	新宿ワンダーランド1969	225
CHAPTER 5	Dream Team of Jazz All Stars!	381
CHAPTER 6	海にて	541
CHAPTER 7	世紀末新宿／赤き死の跳梁	627
CHAPTER 8	閉幕――宇宙の音楽	719
解説	大森望	823

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CHAPTER

1

開幕——大正池に郭公は啼く

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

When you hear music,
after it's over,
it's gone in the air.
You can never capture it again.
——Eric Dolphy

1

吾輩は猫である。名前はＸＸＸ。日本語小説作成ソフトが流布してからこちら、上記の冒頭文句が無数と云ってよい回数書かれてきたのは、大概の市販ソフトに「夏目漱石」が内蔵されているからで、使用言語を「近代日本語」に設定し、語り手に「猫」を選べば、こう書き出される確率はきわめて高いわけだ。夏目漱石（１８６７〜１９１６）……日本国の紙幣の肖像にもなった、近代日本文学を代表する作家。処女作に『吾輩は猫である』。ほかに『こころ』『明暗』などの作品を残す云々、と云った註釈も、「読者の識字教養」を

一定数値以下に設定した場合には必ず付されるのはよく知られているとおり。

I am a cat. 語り手の虚構性をかように明示するのは、メタフィクションがあたり前の技法になった、いわゆるポストモダン期以降の文芸に馴染んだソフト制作者らにとってはごく自然なもの。先行テクストに対するパロディーも同様。もちろん西欧十九世紀来のリアリズム、あるいはその影響下で二十世紀零年代に成立した日本語の自然主義リアリズム、ジャンルの王道とも云うべきこれらスタイルの枠内に物語を押し込めることは可能だけれど、なにしろ当方は猫だ。魚屋の天秤棒と窮屈な拘束をなにより嫌う動物だ。しかも吾輩には漱石の猫と違って立派な名前があるのだ。と云う次第で、あらためて冒頭から。今度はゴチック体で。

吾輩は猫である。名前は、ドルフィー。

勢いで傍点まで付けてしまいましたが、Dolphy——この名前は知る人ぞ知る伝説のモダンジャズ演奏家（プレイヤー）、Eric Dolphy に由来する。二十世紀は中葉、北米大陸に生まれた modern jazz と呼ばれる音楽、その活気溢れる運動体（ムーブメント）を主導した芸術家のなかにあって、最も個性的かつ自由な演奏を繰り広げたジャズ巨人（ジャイアンツ）の一人がエリック・ドルフィーだ。である以上、その名を持つ吾輩が杓子定規に振る舞うわけにはいかないよね。できるかぎり自由に、と云っても何をどうしたら自由（フリー）になれるのか、はっきりした指針があるわけじゃない。和声（コード）や音階（モード）の制約を脱したフリージャズがかつてそうであったように、リア

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

リズムの檻から逃れ、何をどう書いてもよろしいです、の放任のなか、小説の鳥が言葉の空に羽撃くのがかえって難しくなったのは常識だ。いかにも前衛っぽく勝手気儘に振る舞うのは簡単だけれどね。とにもかくにも自由の標語を高く掲げ、自由の理念の音響化ともいうべきドルフィーの即興演奏を理想に据えつつ、手探りで進んでいく所存です。

ところで「吾輩は猫である」といま陳述された、この場合の「猫」を和名イエネコ、すなわち Felis silvestris catus と、カール・フォン・リンネにより命名分類された一生物と考えるならば、吾輩は全然猫ではない。とこう述べると、え、冒頭からいきなりのデタラメ？ と呆れる向きもあろうが、いくら自由型を標榜するからと云って、そこまで向こう見ずにはなれぬので、すなわち吾輩は猫と全然無縁の者ではない。ざっくりくれば猫の類縁、云ってみれば吾輩は猫の図像であり、あるいはかつて猫であった者だと主張することも、いくぶん感傷的な仕方ではあるが、可能である。感傷——。たしかにそれはそうなので、人間の感傷が吾輩を産み出した、とこう述べて大きく的は外れてはおらぬ。

感傷を抱いたのは誰か？ と申せば、木藤桐と云う名の日本人女性。彼女は一九年間生活を共にした飼い猫が死んだとき、ウェッブサイトにペット墓地を開設した。と云っても猫の2D動画があるだけの、これはごくささやかなもの。通常なら誰の眼も惹かぬ。無辺に広がる情報の海に浮かぶ泡ですらない。ところがである。感傷に捉えられた彼女が亡きドルフィーの「墓」を手ずから作成したことが、ほとんど地球規模と申して過言ではな

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

い、と——ここで唐突ながら、古来通俗小説で使われてきた定型文句を失笑覚悟であえて導入するならば、驚くべき事件の渦中へと彼女を導く発端となったのである。

2

それでまずは手始めに、当物語の主人公であり、吾輩の主人でもある木藤桐と吾輩が出会った日——長い一日から話をはじめようと思うのだけれど、木藤桐はこの時点で三四歳、結婚歴出産歴ともになく、東京シティーは三鷹市に母親と二人暮らし。職業はジャズピアニスト。モダンジャズはこの時代、正規の教育の場で教えられる古典ではあるものの、二十世紀の隆盛と熱気からは遠く離れて、他の音楽ジャンルと同様、演奏活動専一でやれる人はほんの一握り、一流と認められた者でも学校等で教えねば生活が立ち行かぬなか、彼女がそれで食えているかと云えば難しく、しかし当人はジャズ音楽家を天職と考えていたので、いちおうそう紹介してみました。天職は神が定めるもの。しかし神の声を聴くのは本人、聴いたと思い込むのも当人の勝手次第。ただし収入面から見た場合、彼女を音響設計士と呼ぶのが妥当なところだろう。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

音響設計士とは、文字通り、家や公共空間の音響をデザインする仕事。ニューヨークのイーストマン音楽学校で学んだとき、学費分の元は取らねば損とばかりに、日頃の猫と争う懶惰な性質はどこへやら、朝の授業に皆勤して音響設計士の資格を取得したのが今日に繋がった。実技試験に寝坊して、パジャマで試験を受けたのヨ、とは、自分はこれでなかなか根性のある人間なのであると、人に顕示する際に彼女が必ず紹介する挿話であるが、なるほどネ、意外と根性あるんだネと、認めた人間は残念ながらまだない。むろん世の中資格がそのまま仕事に繋がるほど甘くないわけだが、ちょっとした幸運に恵まれ収入の路が開けたのは——と、この辺りの事情は「事件」にも直接係わるので、また後に詳しく述べるとして、まずは彼女の呼び名を確定しておこうと思います。

木藤桐は本名、つまり戸籍名で、母親が昔住んだ家の庭に桐の大木があったからだと彼女は聞いている。ちなみに母親の名前は檜、祖母が欅、祖母の弟が楡だから、一族の伝統に則った命名でもある。「桐」を本人はまずまず気に入っていて、桐の葉を意匠化した印章を作って悦に入ったりしていたが、ピアノ弾きとして活動をはじめたとき、Foggy.Kの芸名を使い出した。Foggyは「桐」の音からきたもの。桐→kiri→霧→fog。しかし、じつは別にも由来がある。とは、すなわち、彼女の先祖、具体的には母親の祖母にキリコと云う名の人がいて、フォギーと異名をとるジャズピアニストだったのだ。

子供の頃からピアノが好きで、将来は音楽家になれたらと夢見ていた少女がこれを知っ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ていたく興奮したのは当然だろう。自分の曾祖母はピアニストだったのだ！　しかも芸名がフォギー。「foggy［fɔ́(ː)gi］adj. 霧深い／ぼんやりした／混乱した」It's cool, isn't it!? 曾祖母などは遺伝子相からすれば他人同然、とは云えこの思いがどれほど音楽の夢を支えてくれたか分からぬ。だから後年図らずもジャズ演奏家となり、活動をはじめるに際してフォギーを名乗るにためらいはなかった。つまりは二代目だ。二代目フォギー。なんだか噺家か歌舞伎役者みたいでそれもクール。

　で、ジャズピアニストFoggy.Kとしてぼちぼち仕事をはじめ、紆余曲折、艱難辛苦、まれに欣喜雀躍、と、いろいろありながら曲がりなりにもキャリアを重ねるうち、彼女をフォギーと呼ぶ人間は次第に増え、海外ではFoggyの方が通りがよいこともあって、ピアノ仕事の外でもFoggy.Kを使うようになって——と、こう云う次第であるからして、向後は彼女をフォギーと呼んでいきたいと思います。

3

そのフォギーはいま——すなわち日本現地時間で9/25. a.m.0:00、水辺の四阿にひとり

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

佇んでいる。八角をなす木組みの四阿がそれへと突き出す形になった、さして広からぬ湖沼が碧色の水面を秋の陽に晒し、岸辺近くに微かに立った漣が光を散らす。周囲は紅葉を織り出す綾絹の森山。正面遠景に聳える、湖面に影を映す冷ややかな蒼色の連なりは穂高連峰、手前にせり出し眉に迫る山稜が焼岳。沼のところどころに立ち枯れた樹木が杭のごとく突き出したここは——日本列島本州中央部、日本屈指の山岳景勝地、上高地は大正池である。

標高一四九〇米、空気はあくまで清涼に澄み渡って、頬を撫でる絹の微風が心地よく、モミジ葉の紅が光に映えて眼に鮮やかである。前回来たときは、空の光が明るすぎる印象があり、紅葉の色彩パターンがもっと単調だった気がするから、あれからまた手が入ったと見える。気になった微かな金属臭も消えている。

しかしフォギーが意識を向けるべきは眼でも鼻でもなく耳。遠近に聞こえる野鳥の声は、オオルリ、カワセミ、ヒヨドリ、キセキレイと云った鳥声の混合、ときおり郭公も啼く。郭公は、いまは休止中。が、そろそろ出番のくる頃で、フォギーは風景左手奥から届くはずの音響に神経を集中する。と、きた。郭公の叫びは他を圧し、あたかも地対空ミサイルのごとくに風景を震わせる。「うう、カッコー、ふかし気味だ。完全にワク外してるかも」フォギーは呟きつつ、かくりと首を折り曲げたが、これはまあ予測の範囲内でもある。音だけ聴けばいいようでも、空間に嵌め込んでみるとまるでしっくりこないことは多

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

い。それにしても郭公は厄介だ。好きな鳥と云うのはフォギーはとくにないが、嫌いな鳥は？と問われればいまや即答できる。郭公だ、郭公。とにかく郭公の啼き声と云うやつは、どう案配しても作り物感を脱せず、風景から突兀として浮き上がり、全体を台無しにしてしまう。フォギーはなかなか納得がいかず、天然郭公の声を求めて富士の裾野の方まで出向いたりしたのだけれど、実際に生で聴いてみると、明瞭な音響輪郭と持続音程を持つ郭公の啼き声はそれ自体偽物感が強い、とは、変な云い草だが、つまり波形がそもそも人造音に近いのである。だったら作り物めいてかまわないんじゃないの、とは、音響設計上としては参らぬので、いかにも「自然」な情緒を醸し出すには、天然自然をただ写すのでは駄目で、ときに自然を裏切ることが必要だとは、音響設計のいろはである。

湖面に突き出した木組みの四阿に立ったフォギーは、眼をつむり、さらに耳へ意識を集中した。今回は鳥声の他に、遠い川のせせらぎと、森の獣のたてる雑音をほんの微かだけ足してみた。現実の大正池には梓川から落ち来る水流があったと云う。それがどの程度周囲に響いていたのかは分からぬが、全体に厚みが欲しくて、思い切って音響背景に置いてみたのである。こうした場合、現地へ足を伸ばしてみるのも一法だけれど、大正池はだいぶ以前に上流から流れ込む土砂に埋まり、もはや存在していないのだから行きようがない。

しかし郭公は啼きすぎだ。フォギーは眼をあけて断じた。このところずっと郭公郭公と

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ばかり考えすぎたせいで、冥公について神経過敏になっている面は否めぬにしても、この際はいったん冥公をメンバーから外すことを考えたほうがいいかもしれぬ。Fucking chicken die away！フォギーはいささか下品に音声くそを残した。下品にする必要はいささかもないが、冥公野郎にはもう上品に接する気になれぬ。

冥公を除けば、今回新たに足した部分を含め概ねうまくいっているようである。フォギーは少し安心した。とはいえ問題は、長い時間そこに居てどうかなのであって、時間が長くなればなるほど、耳は機械的なパターンを捉えてしまうから困る。一度パターンが認識されてしまうと、闇中の羽虫のように耳について離れず、神経のざわざわは避けられぬ。この辺りは慎重にして慎重にしすぎることはないので、なにしろここに棲む人はほぼ半永久的に棲むかもしれないのだ。

背後に足音がたった。コツコツと鳴る音を聴いて、うん、まずまずだなとフォギーが頷いたのは、この木板を踏む足音も彼女が作ったものだからだ。納得しつつ振り向くと、屋根のついた四阿（あずまや）の中央、円形の木卓の脇に人がいる。

「お邪魔じゃないかね」と喋りかけてきたのは、山萩貴矢（やまはぎたかや）氏。『大正池』の音響設計をフォギーに依頼した当の本人である。つまりは施主様であるからして、ええ邪魔ですと返す立場にフォギーはない。「いいえ全然」と応じてから、足音の質感を再度確かめつつ木卓へ向かって歩き、うん、悪くないなと、またも自賛しつつ、勧められるまま木卓を囲む椅

台に腰をおろした。山荻氏も向かいに座る。尻を板につけた瞬間、軋み音が小さく鳴って、こちらはどうもわざとらしい気がして、着席直シノ要アリ、とフォギーはまた声にしてメモした。

卓に手を置くと、風雨に晒された木質のざらつく感触が伝わって、それがじつに現実的(リアル)で、フォギーは驚いてしまう。この質感を出すのにどれほどの労働力が投下されたかと思うと気が遠くなる。

「なかなかのものでしょう?」向かいの人が云う。

「すごいです」フォギーは素直に答える。

「これで水辺まで降りていけるといいんだけどね」と云った人は頭をあげて遠い山並へ眼を遣る。『大正池』の可動域は「四阿(あずまや)」限定。木の階段を無理に降りても、数段しかないはずの段が無限に連続して下へは永遠に到達できず、手摺を乗り越え沼に飛び込もうとしても、水へ落ちる前に元の位置に戻されてしまうことは、架空空間(ヴァーチャルスペース)を体験した人なら誰も知るところ。むろん可動範囲を水辺まで広げることは可能だけれど、そうした場合、音響設計に限っても、砂地やら枯葉やらを踏むに応じて音を作らねばならず、手間を考えただけでフォギーは目眩(めまい)がする。さすがに山荻氏もそこまでは考えていないので、だからと云うべきなのか、その横顔はいくぶん淋し気に見える。

ただしこれはフォギーの完全なる感情移入。なぜなら山荻氏が使う作業用分身(アヴァター)には表

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

情の変化が一切ないからだ。フォギーの前に居るのは、マネキン人形を想わせる中肉中背の、容貌にこれといった特徴を欠いた三〇歳代と見える作業衣の男。これはフォギーの方も同じ。分身（アヴァター）に表情をつけることはいくらもできるが、フォギーが自宅で接続（アクセス）する端末（ターミナル）がおそろしく旧式であるため、表情のある分身（アヴァター）が使えないのだ。山荻氏の方は最新式の接続（アクセス）キットで分身（アヴァター）を操っているんだろうが、フォギーとここで会うときは、相手に合わせてと云うことなのか、いつも同じ木偶（でく）の坊である。胸の窓板（ウインドウボード）に表示（ディスプレイ）された名前と作業ID以外、だから外見からは両者を区別できず、もし大正池を散策するハイカーがいま現れて、四阿（あずまや）を眺めたら、ぎょっとすること請け合いである。もちろんそんなことは原理的に起こらぬわけで、それは分かっているのに、本物としか思えぬ四阿（あずまや）に居て本物としか思えぬ風景を眺めていると、いまにも森陰の小径にひょっこり人が出てきそうに思えてしまう。実際にはどれほど細密であるにせよ四阿（あずまや）の外は3Dの書き割りにすぎない。

「しかし、ここは素晴らしい」山荻氏は自分に云い聞かせるような調子で呟いた。もっともこれも作業用分身（アヴァター）の合成音声で、他の音響と違って指向性もないから、ニュアンスの識別は聴き手の想像力次第である。

「ですね」とフォギーが追従（ついしょう）気味に応じると、山荻氏は正面からフォギーを見た。

「本当にそう思いますか？」

「もちろんです」

CamScannerでスキャン

一拍おいた後、フォギーは声に力を込めて応えた。とは云えフォギーの声も個性を欠いた合成音声であるからして、熱が伝わったかどうかは心もとない。山萩氏は黙ってフォギーの顔を覗き込む。作業用分身（アバター）の顔など眺めて面白いはずはないから、この凝視にフォギーはたじろぐ。表情はないと分かってはいても、こう見詰められると顔色が変わるのを悟られそうで、どぎまぎしてしまう。

ここが素晴らしいかどうか。じつのところフォギーにはよく分からないのだ。一個の作品として大したものである点は疑う余地がない。ここまで徹して現実感（リアリティー）を追求した架空（ヴァーチャル）環境はそうはないだろう。だが、ここがお墓だと考えた場合、全体にどうなのか？　そうなのである。つまりここは山萩氏が自分用に誂（あつら）えた「墓」なのだ。

4

フォギーが山萩氏と知り合ったのは、遡ること十年前、フォギーが駆け出しの時分、浅草のジャズレストランに出演したとき、お客さんで来てくれたのがはじまりだ。その後もときおりライブに足を運んでくれて、古い言葉で云えばつまりタニマチ、山萩氏の口利き

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

でピアノ仕事もいくつか貰い、フォギーが音響設計士の資格を持つのを知ると、今度はそちらの仕事を回してくれるようになったのだから、いわゆる足を向けては寝られないと云うやつです。先に述べた「ちょっとした幸運」とは山萩氏と知り合ったことを主として指すわけで、これは客観から眺めればちょっとしたどころの話ではないので、と云うのも、最初のうちこそ顎髭生やした変なオジイさんだな、くらいにフォギーは思っていたのだけれど、知ってみれば驚いたことに、山萩氏はモリキテックの偉い人だったのだ。

Morikiteck Inc. と云ったら、ロボット製作販売の多国籍企業、いわゆる超巨大企業と云うやつだ。超巨大と云ってどれくらい巨大なのか、フォギーのごとき者に分かるはずもないけれど、軍用ロボット生産で世界第三位、企業ランキングでは、評価方法によってまちまちだけれど、二〇位を下ることはないと云うのだから、まず凄い会社であるのは間違いない。で、そこの偉い人。これもどれだけ偉いのか、肩書きだけではフォギーのごとき者にはやはり見当がつかなかったけれど、東京、ニューヨーク、南アフリカほかに家を持ち、フロリダ、パリ、サイパンに別荘を所有し、普段の移動は自家用飛行機だと聞いて、地球の富の半分を独占する一％の人々、いわゆる超富裕層に属する人物だとは理解できた。

フォギーが山萩氏から墓の音響設計を頼まれたのが三年前。最初は山萩氏の妹の墓で、これは〝お墓〟のごとき具体的な場所の指定はなく、金色の魚の泳ぐ澄んだ湖と畔の花

園と云う、ごくありきたりなもの、音響も鳥の囀りと森の梢を渡る風音を軽く作ればよかった。カネはそれなりにかかるとは云え、まずは標準的な墓。それから較べると建設中の山萩氏の墓は、妹さんの墓を『子供バイエル』とすれば、バッハ『平均律クラビア曲集』くらいの差がある。金額で三桁は違うだろう。なにしろ山萩氏の墓は『大正池』だけでなく、学生時代に通った新宿のジャズクラブや寄席小屋、京都苔寺の庭園などが作られつつあるのだから大変なものだ。

架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の歴史は二十一世紀初頭に遡る。はじめは墓にビデオ再生装置をつけて、故人の生前の姿を眺められるだけの素朴なものだったが、3D映像や架空（ヴァーチャル）環境技術の進展に歩調をあわせて改良され、ここ二〇年ばかりは、墓参者が分身（アヴァター）を使って架空墓（ヴァーチャルトゥーム）内の「故人」に「直接」会う方式が主流である。俗名「いたこ方式」。ただし云うまでもないことだが、そうしたハイテク墓が買えるのは一部富裕層だけ。架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の中身もカネ次第、金額に応じて様々なランクがありオプションがあり、最新かつ最高級の機種はAI制御された「故人」が生きて在ったときと同様に動き回り、墓参者と闊達（かったつ）に会話すると云うもの。もちろんこれもAIの性能に応じて松竹梅的ランクがあり、「故人」の人としての質感や、表情の動きなどがそれで決まってくる。生前の「故人」の口癖や思考の特徴などを映像資料などをもとに解析して加味するオプションもあると云うから、カネが落ちそうなところへの改良工夫には限りがないですね。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

もっとも金持ちならば誰もが架空墓（ヴァーチャルトゥーム）を買うわけじゃない。そもそもどれほど立派な墓を建てたって、死んだ当人には関係ないと云えば関係ないわけで、どんなにその人らしく動き喋ったって、それは死んだ本人ではない。早い話が遺された者の満足や感傷や見栄のために墓はあると云う、身もふたもない事実があるだけ。故人側からしたら、墓参してくれる遺族や友人に心地よく過ごして欲しいとか、なるだけ頻繁に来て欲しいとか、立派な墓だなと感心しつつ業績を偲（しの）んで欲しいとかの願いがせいぜいあるくらい。だから死んでしまえばそれでおしまいと、淡白に考える人は、カネがいくら有り余っていようが架空墓（ヴァーチャルトゥーム）などには見向きもしない。空や海に散骨してサヨウナラ、それが一番清々する、と考える人も多い。逆に、熱心に架空墓（ヴァーチャルトゥーム）を求めるのは子供や恋人を亡くした人。あと犬猫等のペット愛玩者。これについては心理的葬送が阻害され、遺族の精神に悪しき影響を与えかねぬと、警鐘を鳴らす専門家が多いのもよく知られたところ。

と云う次第であるから、山荻氏が自分の墓の建設に贅を尽くす、その心根をフォギー1は測りかねるところがあった。どれほど凝った空間を作ったって墓の主たる山荻氏本人はそれを享受できない。山荻氏自身も間抜けなマネキンではなく、山荻氏本人としか思えぬ姿で墓に入るんだろうが、やはり山荻氏自身はそれを見ることができぬ。墓参者からすれば、墓中の山荻氏は風景の一部であり、風に吹かれて葉裏を閃かす樹の葉と変わらない。ロボット工学の分野で数々の発明をなし多数の特許を持つドクター山荻の墓である以上、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

情報工学の粋をきわめた墓を遺したいと願った、と云うのもなんだかぴんとこない。この手の技術は日進月歩どころか分進秒歩、新技術があっという間に古びるのを知らぬ山荻氏であるはずがない。オレオレ、オレと云う人間がいたんだぜ、と後世に墓の威容でもって宣伝吹聴したいのなら、クフ王や始皇帝を真似て巨大墓でも建てた方がいい。断然目立つしね。

　となると、フォギーならずとも、思いあたる理由は一つしかない。山荻氏が墓中で、つまり電脳内疑似宇宙のなかでなお生きるつもりでいる可能性だ。いわゆる全脳送信(Total Brain Uploading)、生体脳の情報をまるごとデジタル情報に移し替え、肉体を失った後も電脳空間内でその人として生きると云う例の方法である。例の、と枕詞が付くのは、古よりSF小説等で繰り返し描かれ、その可能性につきしばしば人々の話題になってきた技術だからだけれど、いまのところ虚構の域を出ていない、とするのが常識だとフォギーは聞いている。もっともモリキテックの技術力と山荻氏の天才をもってすれば、何が出来てもおかしくないとも思えて、逆に云うなら、電脳架空環境内で生き続ける気がないのだとしたら、ここまで住環境を整備する理由が分からない。

　この点について、フォギーと同じく墓の製作に携わるある人が、山荻氏が電脳内の人格、デジタル人格として生き延びたいと願っているのはたしかだろうと断じたことがある。少なくともモリキテックとその関連会社が研究を推し進めているのは間違いなく、し

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

か。現状では当の技術は越えがたい壁に突き当たって、完成の見通しはなく、だから将来の技術的突破に期待して、とりあえず居住空間だけでも準備しておこうということではないかと、その人は憶測を述べ、おそらく山萩氏は世界の金持ち連中がやっているように、脳の冷凍保存も準備しているはずで、冷凍脳から人格情報をデジタル再生する未来技術に期待しているに違いないと付け加えた。実際モリキテック関連と見られる会社が、電脳空間での永遠の生命を謳い文句に、投資と墓の予約を募っているとも云う。

聞いて、なるほどとフォギーは頷いた。どちらにしても、いますぐではないにせよ、山萩氏はそこに半永久的に棲むつもりがあるらしい。そこまでして長生きしたいものなのか、歳若いフォギーには理解しがたいものがあったけれど、とにかく山萩氏への恩義に報いる意味でも、いい加減な仕事はできないなと、あらためて気を引き締めたあたりは、フォギーの真面目なところだと評価してよいと思います。

5

鯉なのかどうか、ぬっと黒い影が、水面に姿を現したが、あっと思ったときには魚影は水底に消え

て、波紋が、碧の水に黒い翳（かげ）が溶け込むように、静かに広がる様子を四阿（あずまや）の二人は黙って見詰めた。光を鈍く散乱させて、微細な渦模様を滑らかな鉱物質の表面にちらつかせた波が、朽ち葉の堆積した岸辺まで到達するのを見届けてから、「新宿の方は進んでいますか？」とフォギーは話題を変えた。

「だいぶね。なかなか悪くないですよ」マネキン山萩氏が答えた。「また遊びにくるといい」

「ぜひうかがいたいです」とフォギーが応じたのはお世辞ではない。なにしろ建設中の「新宿のジャズクラブ」は、二十世紀東京に実在した新宿 Pit Inn を再現したものだと云うのだから、フォギーに興味を持つなと云う方が無理な話。できればそちらを担当したかった。新宿 Pit Inn と云えば、東京の老舗中の老舗ジャズクラブ、いまも名前だけは残るが、再現されたのは一九六五年に開店した当時の、新宿駅東口、紀伊國屋書店の裏手にあった店舗だと云う。普段は作業中で入れぬが、フォギーは一度山萩氏に誘われ、作業用IDを使って訪れたことがある。

　店のフロア後方に張り出し（バルコニー）ふうのスペースがあって、分身（アヴァター）の可動範囲はこの狭い空間のみ。客席に座ることはできない。もちろん酒を飲んだりも無理。要は客席とステージを張り出し（バルコニー）から見下ろす形で、四阿（あずまや）から大正池の風景を眺めるのと理屈は同じだ。その意味では3Dのホロ映像を見るのと大きくは変わらない。観客の後ろ頭の並び具合に若干のパ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ターン臭があるのが気になったものの、平台ステージの演奏者の質感はよく、それでもやはり3D映像を見るのと基本は同然。逆に云うなら、最先端の3D映像技術はなかなかなので、とにかく問題は、いまそこで実際に演奏が行われている、と云うふうに思えるか否かである。で、じっくり観察したフォギーの結論は、やや微妙かな、であった。

楽器の音や人声が簡単に合成できるのは当然、その質感も近頃は飛躍的に向上して、たとえばモーツァルトの交響曲で、一流オーケストラが演奏した録音と機械合成のそれとを聴き分けるのは簡単じゃない。いまでは玄人素人入り交じった「指揮者」が機械合成した古典の名曲がネット上にたくさん流布していることは、音楽好きの人なら当然知ってるよね。で、ジャズはどうかと云えば、少なくとも二十世紀五〇年代六〇年代のスタイルを機械合成したものはあまり見かけない。クラシックと違って譜面が基本でないこともあるんだろうが、モダンジャズ好きには概してアナログ志向の酔狂人が多いから、わざわざ機械で演ってやろうなどと志す、酔狂を二乗したような人がいないだけの話。逆に通常のポップスでは「歌手」の像を含め機械合成は昔から常識だ。

フォギーの知る限りでは、ベルリンのSchmutzigberg（汚い山）と云うふざけた名前の会社が唯一、モダンジャズの機械合成に取り組んでいて、ここが出した音楽ソフト『Bill Evans』は、どんな曲でもビル・エヴァンス風のピアノアレンジで演奏し、即興演奏も繰り広げるとの謳い文句で、実際に聴いてみたフォギーは、うむむとしばし

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

唸った。けっこうヤルのである。絶対にビル・エヴァンスふうにはできないだろうと、「猫ふんじゃった」をやらせたらビル・エヴァンスだった。あとで知ったのであるが、Schmutzigberg はモリキテックの子会社で、どうやらモダンジャズの機械合成を推進する黒幕は、筋金入りのジャズマニア、山萩氏その人らしいのであった。

あらゆるジャンルで人間が機械に負けつつある現在、ソフトウエアの性能に驚きはなかったけれど、生ピアノの白黒鍵盤に生身でしがみつくフォギーとしては、内心穏やかならざるものはあって、だからはじめて『新宿 Pit Inn』で演奏を聴き、音を含めた演奏者(プレイヤー)の現実感(リアリティ)と云うか、肌触りと云うか、空気感と云うか、全体にイマイチだなと感じたときには、山萩氏には申し訳ないがやや安堵したりした。

それでもフォギーが『新宿 Pit Inn』を是非とも再訪したいのは、出演演奏家(プレイヤー)のラインナップが凄いからだ。なにしろチャーリー・パーカーやマイルス・デイビスが「生(ライブ)」で聴け、フォギー永年の偶像(アイドル)、エリック・ドルフィーとバド・パウエルだって依頼(リクエスト)すればひょっこり出てくるのだから、モダンジャズ好きにはもう堪りません。勉強にもなるし。それにしてもあの伝説の時代、ピットインと云うのは大変なところだったんだな、とフォギーが感動していると、実際にドルフィーやマイルスが出演したわけではないと、山萩氏が笑って教えてくれた。

郭公(かっこう)がまた啼き出して、フォギーの意識は自然そちらへ向かった。二声啼いて、すると

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ここへ風が吹き寄せ、また一声、風に混ざり込めば聴けないこともないな、などとフォギーが思案していると、山萩氏が「だいぶいいかもしれないよ」と呟いて、いやいやいや、まだまだです、と押し返そうとしたところへ、「このところ急によくなっているからね」と山萩氏が重ねて云うのを聞いて、新宿の方の話だと気がついた。

万事に言葉の少ない山萩氏がここまで云うからには、相当に自信があると見た。たしかに『新宿 Pit Inn』の質感に一番こだわっているのは山萩氏に違いなく、この人が本気だとすると、フォギーの訪問から数週間、飛躍的によくなったのかもしれず、そうでなくてもこの先水準はいよいよ高くなっていくに違いないと思えば、フォギーはいささか脅威を覚えた。

「まあ所詮は架空空間の話なんですけどね。しかし、山下洋輔トリオもようやく装備できたんですよ」山萩氏は謙遜しつつも、やや声を弾ませる、と思える感じで報告した。山下洋輔は二十世紀六〇年代から二十一世紀はじめにかけて活躍したピアニスト。アルトサックスとドラムスを従えて、ときに肘打ちの荒技を織り交ぜつつ、猛烈に疾走感のあるフリースタイルで鍵盤を叩く坊主頭や、河原で燃やしたピアノ（！）を弾く消防服姿をフォギーも映像で見たことがある。

「僕が聴いたのは八〇年代だから、ドラムス小山彰太、サックス林栄一だったと思うんだけれど、今回のは初期のトリオだから、森山威男と中村誠一だね。サックスは坂田明のヴ

アージョンもある」

訊かれもしないのに人名をすらすら羅列する辺り、ジャズマニアの地金剥き出しの感があるが、山荻氏の興奮ぶりはフォギーにも理解できるので、なにしろ若かりし山荻氏のジャズとの出会いが、新宿 Pit Inn（架空でない）で聴いた山下洋輔トリオだったと云うのだから無理もない。学生時代の山荻氏は新宿や中央線沿線のジャズクラブへ通いつめ、ささやかながら青春を謳歌したそうだ。しかし一九八〇年代に学生だったと云うことは、いったい何歳になるのだと、計算するたびフォギーは仰天する。正確な生年は知らぬが、まず一三〇歳にはなるはずで、百歳を超える人はいまは珍しくないけれど、一三〇歳で元気な人はそうざらにはいない。もっともフォギーの世代ならば一三〇歳くらいは当たり前になっているはずで、ただし長寿に恵まれるのは一定以上の収入があって高度医療を受けられる層に限られるのは厳然たる事実。だから今後は貧困層が増大するがゆえに、平均寿命は延びていかぬだろうと云うのが、多くの識者やコンサルティング会社の予測である。

「末廣亭のほうもだいぶ進んでね。立川談志と三代目古今亭志ん朝がプログラムに入ったんです。ネタの方もずいぶんと充実してきている」

「そうですか」とフォギーは頷いたが、落語方面は全然知識がないので、凄さがよく分からない。建設中の「寄席小屋」は、新宿 Pit Inn から遠くない新宿三丁目にあった新宿末廣亭を再現したものだとは聞いている。ここも若かりし山荻氏の思い出の場所なんだろ

う。

「新宿はもうほとんど完成です」

山荻氏はそう云ってまたも穂高連峰へ眼をやる。郭公が啼いた。風が吹いて四阿脇の楓の葉が身を翻す魚の群れのように揺れた。新宿はもうほとんど完成です――。このときフオギーは、相手の言葉に、そろそろ墓に入る頃合いです、との響きを聴きとってはっとなった。同時に、ずっと抱かれていながら漠としていた或る印象がはじめて言葉になるのを覚えた。山荻氏は「永遠の生命」を得ること、すなわち電脳内の人格として生き延びることなどには端から関心がないのではないか。技術の進展にもさして期待はなく、架空墓への情熱は、人生の幕を閉じるにあたって、思うさまノスタルジーに浸ること自体が目的なのではないか。作って満足、眺めて納得、あとは長らく人類がそうしてきたように、死の側へ静かに身を移すつもりなのではないか。と、つまりそのような印象である。

たしかに山荻氏の佇まいには、なにがなんでも死を克服してやる、グロテスクとなじられようが、未練千万と嗤われようが、断じて永遠不滅でいてやる、と云った飽くなき欲望の油じみた感じがない。財力にものをいわせて驕奢を極めんとするあくどさがない。もっとも一三〇歳になっていること自体、巨費を投じて肉体の維持整備をしてきたのは疑えず、まあフオギーが知る山荻氏などは、彼の全体像の、ごく一部分にすぎぬわけです。

「フォギーさんには、いまの貴女のＩＤがそのまま使えるようにしますんで、いつでも遊びに来てください」

「ありがとうございます。楽しみです」とフォギーは弾んだ調子を声に加味しつつ応じたけれど、蟲に入った山秋氏はいまの山秋氏とは別人、と云うか別物だと思うと、やはりどうにも気分爽快とは参らない。

　山秋氏はそれきり黙ってしまう。この分身には表情がないから、沈黙の時間が非常に長く感じられるのが困る。とりあえず何か言葉を繋ごうとフォギーがしたとき、

「遊びに来るといえば、フォギーさん」とこちらへ向き直った山秋氏が気を取り直すような調子で云った。「はい」とフォギーが相づちを打てば、山秋氏が続ける。

「ちょこっとリアルにこれまで出て来られませんかね。じつは見て欲しいものがあるんですよ」

　マネキン人形の表情は動かず、声も平板であるけれど、どうやら山秋氏は笑っているらしい。

「まあ、なんでしょう？」相手にあわせた軽快な調子でフォギーは応じる。

「それは見てのお楽しみ。ビットイン以上に貴女が興味をもってくれるのは間違いないと思いますよ。と云いますか、貴女にピアノを弾いてもらいたいんです。もちろんギヤラは出ます」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

　ピアノ仕事ならば否も応もない。先に云ってよ、と思いつつフォギーが了解すると、山萩氏が言葉を加えた。

「それから、ちょっとしたプレゼントもあるんですよ」

　プレゼントと聞いてフォギーは胸をときめかせ、同時に、あるいは形見分けに類するものかも知れぬと心付けば、山萩氏の作業用分身、その無表情の奥から寂寥が沁々と透け出るようで、胸に悲哀の水が流れ込むのを僅かに覚えた。

「いつ伺えば？」フォギーが問うと、山萩氏はいよいよ笑いを含んだと感じられる調子で答える。

「今日では」山萩氏が云ったとき、紅葉に染まった森山で郭公がまた一声啼いた。

6

日本現地時間 9/25. a.m.8:57。

　作業用分身との接続を切ったのが午前一時少し前。端末のヘッドパッドを外し、郭公の手入れ等はあとにすることにして寝台に入り、普段は使わぬ睡眠誘導剤の作用で数十秒

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

後にはデルタ波が出て、それから約八時間、現在のフォギーは自宅で就眠中である。愛用の今治タオル地の寝間着で寝台にうつぶせになった姿が水死体のように見えるのは、長い真っすぐの髪が恒温フォームに散っているせいだ。

仕事場を兼ねるフォギーの住まいは吉祥寺、井の頭公園近く、母親が親から受け継ぎ、二〇年ほど前に建て替えた二階建ての一軒家は、だいぶ旧式だけれど、内壁と家具の一部がプログラム次第で様々なパターンに変えられる、いわゆるSD様式。もちろん家事無用の独立太陽知能住宅だ。屋根や外壁にあたる太陽光、太陽熱を効率よく利用して家庭用蓄電池に溜め、自家用のエネルギーをまかなう。外部との接続は地下に埋設された上下水道管と、これに併設された多目的管のみ。

母親は昨日から不在。内臓外科医である母親は当年とって七〇歳、いまだ現役で、年の半分は香港やイスタンブールに出張する。母親がフォギーを産んだのは三六歳のとき、父親は当時付き合いのあった複数の男性のいずれか。子供の遺伝子をあらかじめ選択する「設計された赤ん坊」がすでに一般化し、カタログ販売の冷凍精子で受精することも当然できたが、母親は遺伝病リスクの除去以外は「自然」妊娠を選んだと云う。もちろんDNA型を参照すれば遺伝情報の由来は容易に判明するわけで、母親は父親が誰であるかを知っているはずだが、フォギーは聞いたことがない。フォギーの髪の色や目鼻立ちからして、モンゴロイド系だと推測できる相手の男にも母親が報せなかったのは、父親面して出

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

てこられるのが億劫だったからなんだろう。つまりは高収入の女性が「趣味」で子供を持つ、「裕福な母子家庭」と云うやつだ。母親が出産した時代、日本人の結婚率は最低にまで落ち込んだが、最近また回復傾向にあるのは経済的貧窮から脱する目的で家庭を持つ人が増えているのが原因。子供も増えている。国や自治体の優遇策もさることながら、もうけた子供を一家の労働力、財の一部と見做す貧困層に固有の発想が、全体の貧窮化の結果、中間層にまで広がったからであると云うのが、昨夜のNHK網ニュースの論説である。

母親は彼女の両親、つまりフォギーの祖父母が老後を過ごすべくタイのアユタヤに移住することになった際、腰が抜けるほど高額の贈与税を払って吉祥寺の家を取得し、建て直したわけだが、シカゴの医大に学んで、臓器移植の専門家としてイスタンブールの医療機関に長らく働き職業的な地歩を固めた彼女がそうする理由はほとんどないと思える。「どうして日本に家を建てたの？」フォギーがあるとき訊いたところ「決まってるじゃない。日本が好きだからよ」と返答があって、フォギーは吃驚した。淳良かつ柔和な人の住む国ニッポン、歴史と技術と礼儀の国ニッポン、豊葦原の瑞穂の国ニッポン、日本サイコー！　と、官民歩調をあわせ喧しく宣伝する永年の風潮を母親はなにかにつけ冷笑していたからである。歌舞伎観劇から戻って、「やっぱり日本が一番落ち着くわね」と云いつつ番茶をすする姿を見て、母親も歳をとったものだと、フォギーは感慨を抱いたが、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

抗老化医療（アンチエイジング）のおかげでフォギーと姉妹と思われるどころか、うっかりするとフォギーの妹だと思われかねぬほどに見た目が若く、七〇歳にして老若の恋人を常時複数確保するばかりか、ときに痴話喧嘩（！）までしている母親を見れば、年齢を超脱した感は深い。

一方、娘のフォギーには東京に棲むべき理由がある。すなわちモダンジャズを愛好し、たまには生演奏（ライブ）でも聴いてみようかなどと考える奇特な人の濃度が、ニューヨークと並んで最も高い街がトーキョーだからである。ベルリン、パリ、ストックホルムと云った新EUの諸都市がこれに続いて、横浜も上位に食い込んでくる。ジャズ専門のライブハウスも東京に二、三はあるし、専門ではないがジャズの生演奏（ライブ）を聴かせる店は、ピアノバー風の店まで含めれば少しはあって、つまりはこれがフォギーの仕事場であるからして、東京に棲むのが便利がいいわけである。

東京の治安が比較的よいこともある。昔は路地裏や公園を夜間独歩して平気だったと云うが、さすがにそれは無理としても、完全防犯システムを備えたタワーマンションか、傭兵が常駐する「城壁」に囲まれた「武装都市」に住まぬ限り安全を確保できぬ北米南米やユーラシアの街々から較べたら東京はだいぶマシだ。むろん生まれ育った吉祥寺への愛着も少しはあって、さらにもう一つ、彼女が東京に棲むべき理由はあるので——と、その話はまたあとですることにして、時刻は日本現地時間（ローカルタイム）a.m.9:00。そろそろフォギーを起こす時刻です。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

7

フォギーの眠る寝台脇の壁に有機発光ダイオードの2Dスクリーンが浮かび上がり、青空と草原を背景に河馬めいたアニメーションキャラクターが登場した。正面向きで「フォギー、起きなよ、朝だよ」と中性的な声で喋り出したのはムーミン・トロールだ。『ムーミン』はフィンランド人作家トーベ・ヤンソン（1914〜2001）の手になる小説および漫画シリーズ、日本では何度かアニメ化されて根強い人気がある。これは母親の趣味で、フォギーは好きでもなんでもないが、AIソフトウエアの家族割を利用しているので仕方がない。

「ねえ、フォギー、起きてよ」ムーミン・トロールがまた云い、むううううと、うつ伏せのままフォギーがゾンビ声を出したきり動かずにいると、「フォギー、起きなくちゃ駄目だよ、出かけるんでしょ」ムーミン・トロールがさらに云う。四回目に声をかけられて、ようやくフォギーは身を起こし、「ドルフィーをお願い」と嗄れ声で云うと、アニメキャラはスクリーン右上の小さなアイコンに変わって、画面にドルフィーの「窓」が現れ

2D画像のドルフィーが、お気に入りの寝椅子の上で顔を洗ったり、羽根の玩具に飛びついたり、まるい背中を見せつつ餌をカリカリ食べるのを眺めつつ、横に別の窓を開いて、夜のうちに届いたメールにざっと眼を通した。近頃では侵襲式の端末を脳に結線して、情報を自動的に記憶中枢に注ぎ込む方式もあるが、これは人生の濃度を無闇と高くしたいと望む人向きであって、珈琲でも何でも万事薄めを好むフォギーには縁がない。生化学的な手段でもって脳を瞬時に目覚めさせることもできるが、フォギーがソフトウエアから声をかけて貰う方式を好んでいるのは、自然の寝覚めを大切にしているから、と云うと人聞だが、要は眠りと覚醒の狭間でうだうだするのが好きなだけの話。

フォギーは世に云うところのアナログ人に属するので、でなければいまどきモダンジャズなどと云う古臭い音楽を、それも生ピアノを使ってやったりはしない。しかしモダンジャズが古臭いのは間違いないとして、じゃあ古くない音楽がどこかにあるのかと云えば、だいぶ疑問だ。二十世紀終盤からこちら、新しい音楽！と誰かが叫んでも、だいたいが売らんかなの空虚な掛け声、どれもが焼き直しか反復にすぎぬのは瞭然。いわゆる西洋クラシックの世界でも、演奏会プログラムの大半がベートーベンやらマーラーやら、古典派浪漫派で占められる現況を眺めれば、情報伝達速度が光速となった状況下、中心と周縁の差異は失われ、新奇なものなど出現しようがないとの、百年も前から指摘される美学上の

真理は動かしがたいと断ぜざるをえない。

いわゆる藝術の領域で、この数十年に大飛躍を見せたのは、３Ｄ映像や体感ゲームの分野。しかしこれはあくまで科学技術の前進であって、中身の物語や虚構イメージは古色蒼然、前世紀にシンセサイザーが発明されたとき、はじめのうちこそそのサウンドは驚かれたが、あっと云う間に新鮮さを失ったのと同じことが当の領域でも起こりつつある。音楽に限らずあらゆる藝術分野において、資本の論理に突き動かされた商品開発競争の渦中で、何かしら魂を震撼させる表現が出現するのでは、との仄かな期待と、土台無理な話だよね、とする冷ややかな諦めがないまぜになった愚図愚図した気分がもう百年も続いている。百年！　これは近代以降の人間の時間感覚からすればけっこう長いです。

実際には体感ゲームの刺激と興奮があればそれで十分、藝術なんて余計だよ、と恬然嘯く人がほとんどだから、愚図ついた気分を抱くのは一部の藝術マニア限定。もちろんフォギーは立派なマニアであって、この果ての見えぬ反復と停滞の時代、モダンジャズ、それも二十世紀五〇年代六〇年代のスタイルにあえて拘泥し徹底するフォギーの姿勢は、マニアなりにひとつの選択であると云えるかもしれぬ。まあ単純にそれが好きだからと云っても同じことなんだけど。

山萩氏のＡＩ秘書から座席の予約その他の手続きが完了した旨のメールが届いているのを確認して、寝台から出たフォギーはトイレで用を足し、洗面所で乳酸菌入り洗口剤で口

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

を漱（すす）いだ。洗面台に吐き出したものが穴に吸い込まれるのを見れば、下水へただ流しただけのようだが、実際はフォギーが洗面所に立った瞬間から健康診断システムが作動しはじめ、穴の奥では感知機（センサー）が、フォギーのごとき者には窺い知れぬやり方で、唾液サンプルから健康状態を調べていて、これはトイレも同じ。尿や便が検査されて医療情報管理センターにデータが送られる。以前はトイレに入ったり顔を洗ったりするたび、装置を起動しIDを入力しなければならぬのが面倒だったが、顔認証で自動化され楽になった。とは云え、自分の日々のうんこ、おしっこが細かく監視されている、と思うと、どうもなんだかナ、と云う気持ちにはなる。実際何を食べたかはもちろん、性行為の有無まで分かってしまうと云うから気分爽快とは参らぬ。

しかし嫌でも日々の健康精査（ヘルスサーチ）だけは欠かせぬので、と云うのも、健康保険に加入する際の必須条件だから。健康精査（ヘルスサーチ）を怠った場合、月々の保険料が何十倍にも跳ね上がるのだから、いくらアナログ人かつズボラ人であるフォギーと雖（いえど）も、日々の排泄物をただ下水に流すままにはできぬ。うんこのお陰で月々の支払いが十数万円節約できていると思うと、あだやおろそかにうんこはできぬ。近頃ではナノセンサーを体内に入れて二十四時間データをとり続ける方式もある。これだと微細な癌細胞まで瞬時に発見できるし、保険料が一五%安くなるからと、保険会社は頻々と勧めてくるが、いまのところフォギーも母親もその気はない。二十四時間隙なく見張られる。その感じが嫌だからだ。いまどきは誰かが誰か

を二十四時間監視しようと思えば、軍用の防御装置（ガードデヴァイス）でも使わぬ限り防ぎようがないので、とりあえず気分だけの話なんだけれどね。

最後に顔をちゃちゃちゃちゃといい加減に洗ったフォギーは、寝間着のまま庭で植物に水をやった。ここ十年ほどの日本列島は冷夏傾向、今夏も八月中は長雨続きだったが、九月半ばを過ぎて暑くなり、本日も太陽は空に健在、しかし盛夏の湿熱とは空気が違い、まずは秋晴れと云うわけで気分はよい。

庭の植物はどれも母親が植えたもの。ローズマリーやらミントやらの香草のほか、季節季節の花が咲く。いまは桔梗と日日草、それから千日紅が花をつけている。猫の額ほどの地面があれば、細々と草花を植えたり鉢を並べ愛でるのは、江戸の昔からの東京人の伝統だ。いまは様々なタイプの水遣りロボットが市販されているけれど、フォギーの家では昔ながらの蛇口に繋いだビニールホース、それからブリキの如雨露（じょうろ）である。このあたりは母親の趣味で、フォギーも同調している。祖母も花の好きな人で、柵を覆う見事な蔓薔薇（つるばら）を育て、花壇に幾種類もの薔薇が植えられていたが、母親が庭をやるようになってから薔薇は駄目になってしまった。フォギーも母親も留守が多いから、これは仕方がない。とは云え草花に水をやるたび、おばあちゃん、まことにあいすまぬ、とフォギーは心で手を合わせる感じになる。

如雨露を脇へ置いて、うううと、青空に向かって二度目の背伸びをしたとき、庭に面し

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

た硝子戸にムーミン・トロールが現れて、「フォギー、早くしないと、遅れちゃうよ」とのんびりした調子で注意した。へいへいと返事をしたフォギーは、ゆっくり家に戻って、それから急にどたばたと動き出した。この急激に動き出す感じ、水辺でのたり寝ていた鰐が突然獲物めがけて走り出すのに似た感じは、フォギー親子に共通の特徴である。友人と鍋を囲んで、フォギーが鍋に箸を伸ばすと、ああビックリした、急に動くんだもの、と驚かれることがしばしばある。しかし、いまはたしかにフォギーは少しばかり急いだ方がいい。予約便に乗り損ねても取り返し（リカヴァリー）は利くとは云え、なにしろ今日中にケープタウンまで行かねばならぬのだ。

8

山荻氏の東京の家は千駄木にある。築地塀に囲まれた楠や竹が鬱蒼（うっそう）とする庭に黒瓦の和風平屋が建つ姿は、一見世捨て人の陋屋（ろうおく）のようであるが、地下には八〇人ほどが収容できる小ホールがあって、ここでフォギーは二度ほどサロンコンサートを開かせてもらったことがある。ホールには古いベヒシュタインが置かれ、このピアノの音が古雅で優美で、コ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ンサートのあとしばらく恋い焦がれて暮らした。だから山秋氏から「リアルにこっちまで」と誘われたときには、あれにまた触れられるのかと、胸をときめかせたのだけれど、今回の「こっち」はケーブタウンの研究所なのであった。うわ、ケーブタウンか、遠いゼヨと、フォギーは内心慌てたが、スケジュール上は問題なし。かりに少々問題があったにしても、ここは山秋氏を優先すべきなのであって、原則出不精のフォギーはやや億劫にも感じたけれど、雇主様の意向を無視できるほど剛胆ではないのでした。

で、なんだかんだと慌てたり、どたばたしたりしたあげく、フォギーが家を出たのがa.m.10:38。予定より八分しか遅れなかったのはフォギーにしては上出来だ。戸締まりその他はA-Iがやってくれるので、身支度だけで飛び出せばいいのは、ズボラ者には有り難い。ムーミン・トロールが呼んでおいてくれたTaxiに乗りこめば、座席前の硝子板に女性の像が現れて、安全注意をする間にも車はするすると走り出す。もちろんAI制御の自動運転車。目的地のYokota国際空港もムーミンが伝えてくれている。横田へはいつもなら吉祥寺から電車を使うのだけれど、今日はモリキテック関連だから鷹揚にかまえて大丈夫。豪華客船でケーブタウンまで行こうが、途中で月観光の寄り道をしようが、全額を払ってくれるのは間違いない。もっとも航空便は向こうの指定。横田からケーブタウンへの直行便はないので、シンガポール乗り継ぎになるが、これはAI秘書が横田が吉祥寺から近いのを勘案してくれたからだろう。フォギーにも文句はない。

CMに変わった画面を消し、フォギーはぼうっと窓の景色を眺め出した。こういうふうに何もしないで、つまりゲームもせずメールも読まず、電脳網を経由した情報になに一つ接することなく乗り物移動をする人物は、いまどき非常に珍しいと云っていいだろう。英語の『霧』には「ぼんやりした」の意味があるが、まさしくそれ。もっとも実際にフォギーが眼にしている風景は外部カメラが捉えた映像で、無人Taxiに本物の窓はない。その代わり天井から足下から周りじゅうを外景モードにすれば、中空を進んでいるかのような気分を味わうこともできる。

ごくふつうにしていても、眠いの？　とよく訊かれるフォギーは、こうして見ると、何もしていないばかりか、何も考えていないようですらある。が、頭の中身を覗いてみれば、これで結構いろいろ考えているので、たとえば、ケープタウンには上海蟹を出す中華料理屋があるから、是非あそこへ行きたいと考えたのがその一つ。ほかに天然クロマグロを供す寿司屋があると聞くからその方がいいかなとも考えた。あるいは、両方行けたら、それはもう御の字だけれど、いくらなんでも罰当たりかも、などとも考えた。そうしながらフォギーが足首を掻いているのは、先刻庭で蚊に刺されたから。これもいまどきは珍しいので、皮膚に防虫防黴処理を施さぬまでも、ごく小さな発信膚布を貼るだけで蚊でも蜂でもかなり防げる。フォギーがそれをしなかったのは単純に油断したから。頓馬です。

うおっ、蚊に刺されたア、と叫んだフォギーが患部に痒み止め軟膏『ムヒ』を塗ったの

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

も珍しいと思われるだろう。そんなのまだ製造していたのかと云う話だけれど、近頃はむしろ『ムヒ』の販売が拡大していると云うから驚きだ。それと『キンカン』も。かつて北海道を除く日本列島にマラリアが蔓延したことがあって、蚊のプーンと云う羽音を聞いただけでパニックになる人が続出、偏執的なまでに蚊の駆除が実施された一時期があった。その後マラリア禍は聞かれなくなったものの、最近ではインフラを欠いた貧困地区が増殖し、そのせいで蚊が増え、しかも蚊自体、発信腐布などものともせぬハマダラカなど熱帯生まれの獰猛なのが入ってきて、結果、古式ゆかしい蚊取り線香とともに痒み止めが売れ出したと云うことらしい。日本には二十世紀後半、「総中流化」などと呼ばれる時代があったと云うけれど、地球規模で進む二極化の磁場のなかで、いまや貧富の差は眼がくらむほどである。遺伝子治療をはじめ先端医療の恩恵をうけて百歳を超えてなお元気な者が居る一方で、保険料を払えず医療を受けられぬ者が増え、衛生状態の悪化もあって、チフスやコレラなど伝染病発生のニュースがしばしば流れる。

五日市街道を西へ進んで、立川モノレールを越えた辺りまで来ると、その貧困地区が左右に見えてくる。一帯が貧困地区と一目で分かるのは、他地域の多目的管（チューブ）が埋設式なのに対して、せいぜいが四階建ての低層住宅群を電柱電線がごたごたと見苦しく覆っているせいである。その外観ゆえに貧困地区は「蜘蛛巣地区」などと渾名されるが、空港のごとき現代的な施設の周辺に貧民街が広がるのは、大昔から世界の各都市で見られた現象だ。す

なわち「蜘蛛巣地区」を抜ければもうそこがYokota国際空港。敷地の北西側半分は軍用で、南東側が民生用空港。近づいて真っ先に眼に飛び込んでくるのは国際線ターミナル、通称アルバトロス。翼を広げた鳥を模したという白と焦げ茶の建物だが、しかしこれは海鳥というより、まるで蜘蛛の巣にかかった蛾だ、とは、一般道から自働車で接近する誰もが抱く感想である。

角度によって黒くも銀にも見えるメタリック塗装の楕円張り出し陰のエントランスに自働車が静かに停まって、硝子板の像の女性が笑顔で到着を告げ、いってらっしゃいませの挨拶とともに三〇度のお辞儀をする。車から出たフォギーは、方々に潜んでいるはずの感知機の凝視を受けつつターミナルへ向かう。小さなトートバッグしか手にしていないのは、「TaNi」に積んだ旅行鞄はそのまま旅客荷物の集積場へ運ばれるからである。

遮光硝子張りの入り口からなかへ入ると、正面左手にStarbucks Coffeeのスタンドがある。珈琲を飲みたいな、と思ったけれど、時間がないので、そのまま搭乗門へ向かいかけたとき、床に散った卓の一つに座った人物にフォギーの眼はとまった。と云うのは、その女性が身につけた、妙に時代錯誤なデザインの、けばけばしい桃色——ピンクとは呼びにくい桃色のスーツが異様に目立ったからなのだが、国際線ターミナルのごとき場所で、ここまで遠慮なくおばさん臭さを発散する人物も珍しかった。おばさん臭さは、ここ数十年来、癌と並び徹底的な撲滅の対象となってきたものの一つ。しかも、いまどきは見

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

た目で年齢は分からぬとは云え、案外と若い人のようなのである。なかなか凄い人だ。服飾センスについては必ずしも人のことは云えぬフォギーは深く感心し、しかしもちろん注意はすぐさま他へ散じたのだけれど、実はこのとき、桃色スーツの方もまたフォギーに眼をとめ、接眼レンズ（コンタクト）に繋いだインターネットを通じ、それがフォギー本人であることを確認していたのである。

　この、おばさん臭い桃色スーツは何者か？　すでにこれだけ主人公と係わってしまった以上は、今後の物語の展開に欠かせぬ人物であることは云うまでもない。語り手（ナレーター）たる吾輩はむろんその正体を知っている。だが、ここでまたも古くから通俗小説で使われてきた手法を臆面なく使わせていただくなら、物語への興味を先へ繋ぐ必要上、当面は明かせません。どうかあしからず。

　搭乗門（ゲート）へ向かって歩き出したフォギーを見送った桃色スーツは、「標的捕捉（ターゲット）」の通信（メッセージ）を暗号を使って送った。それからマグカップに残っていた抹茶ティーラテを飲み干すと、静かに椅子から立ち上がった。時刻はa.m.11:47。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

CHAPTER

2

The First Session with Dolphy

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

9

南アフリカ標準時間午後三時、フォイヤーはケープタウン国際空港に降り立った。東京からの時差は七時間だが、乗り換えを含めば八時間の空の旅。どの航空会社の超音速ジェット機もデフォルトものを除く体感ゲームや架空旅行のソフトを揃えているが、フォイヤーはうとうとする合間に小説を読んで過ごした。液晶表示装置を埋め込んだ接眼レンズに映せば、文字は虚空に浮かび出て、慣れれば意外に疲れない。けれどもフォイヤーは世の多くの小説読者と同様、本を好んでいる。フォイヤーが持参したのはハヤカワ・ポケット・ミステリ。独特の判型と装丁で昔からファンが多いが、フォイヤーも好きだ。もっとも

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

これはかつての本と違って紙ではなく、高分子ポリマーのシートに文字情報をダウンロードする方式。とは云え、手触りといい活字の姿といい、紙の本とほとんど変わらない。字の大きさや書体、字組等が自由に変えられるのはむろんのこと、装丁の図柄も何万のサンプルから自由に選べるし、自分で作成できるのも嬉しい。頁数、つまり本の厚さは変えられぬが、長編ならば「上中下」と云うふうに分割できるし、短かすぎる場合は、同じ作家や似た作風の作家のちょうど良い分量の小説が自動的に頁を埋めるので、間抜けな余白が生じることもない。読むだけなら「本」は一冊あれば用が足りるわけだけれど、読書好きで「本」を一冊しか持たぬ人はあまりない。フォギーもPenguin Booksや岩波文庫など、十冊ほどの「本」を持っている。

今回フォギーが機中で読んだのは『妖星伝』。半村良（1933〜2002）が一九七〇年代から九〇年代に書いたSF伝奇小説で、長らく紙本でしか入手できず、二十世紀小説好き、ミステリ好きの間では幻の名作と呼ばれる逸品だ。もちろん過去には電子化されていたはずだが、データは例の「大感染（パンデミック）」の際に失われて、長い空白の後、ようやくハヤカワのラインナップに加わったと云う次第。

「大感染（パンデミック）」。この大惨事が起こったのは——と、これも「事件」に深く係わるのであるからして、ここでざっと話しておきますが、「大感染（パンデミック）」が起こったのは二〇二九年、つまりフォギーの生まれるずっと以前の話なのだけれど、じつに大変な騒ぎだった、いや、大変

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

くらいではとても済まない。奇しくもちょうど百年前の、世界大恐慌の引き金となったウォール街株大暴落と同じ十月、ウィルス感染でもって世界中の電脳が狂い、ほとんどのデジタル機器が停止し、ネットワークが壊死した。一切の生産、交通、サービスが一時的に麻痺し、地球社会は狂瀾して乱麻のごとく、少なく見積もって二千万の人間がそのせいで死亡したと推計されると云うから凄まじい。

損害は人命にとどまらぬ。社会生活に喫緊の部門から順に復旧はしたものの、人類の知的遺産ともいうべき大量のデータが消失した。文明が受けた損害は計り知れず、このまま人類は耗弱衰亡していくだろうと、多くの学者研究者が直後には予測した。実際にはあれから数十年、デジタル技術IT技術の進展は速度を取り戻し、今日に至っているわけだけれど、少なくとも百年は文明の進展は遅れたと云われ、千年単位の停滞を予言する人もいる。たしかに二十一世紀初頭の予測に比せば技術開発が全般に停滞している事実は疑えぬ。二十一世紀中の実現が期待された諸技術、常温超伝導も寿命の十倍レベルの延長も、商業用の核融合炉も量子コンピューターもまだ実現していない。宇宙エレベーターも反物質ロケットも遠い夢のまま。一番の原因は投資の減衰。これは地球社会の不安定と、成長が頭打ちとなった資本主義経済の長期的停滞が主因だけれど、他に無視できぬ要因として、IT技術への投資の相当部分をウィルス対策に費やさねばならなくなった事情がある。しかもウィルスへの完璧な対処法はまだ出来ていないと云うから不安な話だよね。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

次にまた「大感染」が起こったら人類はおしまいだ。人々はそう漠然と感じていて、と云うのも、二〇二九年当時に較べて人々が電脳に依存する度合いが遥かに深まっているから。しかも昔は人間に基礎体力があったから、不眠不休の頑張りでウイルスを駆除できたけれど、いまは無理。強化器具なしに路を歩けば、とくに何でもないのに突然へなへなと崩れ落ちる若者、いわゆる「へな男」が増えているくらいで、ヒトの気力体力の卑弱ぶりは眼を覆うばかり。危機に遇して火事場の馬鹿力的踏ん張りが利くとはとても思えぬ。人類はなすすべなく衰亡死滅していくだろうとは、デジタル技術一切を否定するカルト宗教家でなくとも予想できる。

「大感染」を経験したフォギーの祖母の世代は、ウイルス禍への備えをおさおさ怠らず、デジタル機器に絶えず疑いの眼を向け、旧式の卓上ガスコンロや七輪（！）を物置に仕舞っておいたものだが、母親の世代は喉元の先だから、新技術新商品の燃料を市場の竈に注ぎ込んでは人の欲望を燃起せんとする、資本の奔流に巻かれるままとなる。さらにフォギーの世代ともなれば、脳や脊髄に直接ネットを繋いで嬉しがる者が多出、ウイルス感染したらどうするのと、傍から見ていても怖くなるが、まあ大丈夫でしょ、と根拠なく楽観している考えなしがほとんど。

冷静に考えれば、「大感染」の危険は絶えずあった。ただ人々が眼をそらしているだけの話。なにしろ二〇二九年に蔓延したウイルス――29virus の出所さえいまだに判明して

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いないと云うのだから不安に思わぬ方がどうかしている。ウイルスをばらまいたのは誰か？　仮説憶説はごまんとある。一番有力なのは、サイバー兵器開発を密かに行う某国研究所が誤ってウイルスをまき散らしたと云うもの。誤って、と云うのは、特定の攻撃目標があったとは見えぬからで、もし犯行に具体的な目的があったとすれば、文明の全面破壊しかなく、それをなすのは偏執的カルト宗教か反社会的なサイバー部族(トライブ)といったあたり、あるいはなんでも社会に混乱禍害を呼び込まんと欲する、各種武装テロリスト集団のどれかが容疑者となる。もっともあれは個人で開発できるような代物ではない、企業や国家下に組織化された知能集団でなければ無理だと云うのが大方の見方で、ほかに地球侵略を目論む宇宙人の仕業だとか、「自己意識」を獲得したＡＩの自殺説などと云う奇説もある。しかしどれも仮説どまり。真相は不明のまま。29virusには巨費を投じての徹底的な解析が加えられ、しかしそれでもまだよく分からぬ部分があるとの噂があって、そもそも誰かがもっと毒性の強いウイルスを作らぬ保証はないのだから怖いよね。

　しかし企業にしてみれば、商品を売らぬことにはニッチもサッチもいかないから、危ないとは口が裂けても云わぬ。企業と癒着した政治家官僚も素知らぬ顔、広告収入に頼るマスコミも口を緘する。その昔、日本全土に原子力発電所が建設された際、巨額の予算を組んで官民あげての安全宣伝運動(キャンペーン)を繰り広げたと云うが、構造は同じ。政官民の癒着は十九世紀から批判され続けているけれど、むしろ癒着は亢進した、と云うより企業が国家を併

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

存する形に帰着した。それでも世界の多くの国々が多国籍超巨大企業（スーパーメガファーム）傘下の一部門へと堕ちた今日、日本国は、少なくとも建前上は、アジアの一大軍事福祉国家として自立している格好ではある。あくまで格好だけですけれどね。

10

ところでフォギーが『妖星伝』を読もうと思ったのは、人から勧められたから。勧めてきたのは年下の友人で、名前を芯城銀太郎（しんじょうぎんたろう）と云う。彼と知り合ったのもポケット・ミステリがきっかけ。モリキテックのID認証更新でお台場の事務所へ行ったところ、待合室でフォギーと同じ「本（ブック）」を膝において順番を待つ人がいて、それが芯城銀太郎だった。ちなみに山荻氏の全脳送信技術を使ったデジタル人格化計画を推測したある人と云うのが彼だ。運命の出会い、と云うほどでもないけれど、同好の者同士、ちょっと話をすることになり、芯城がフォギーの生演奏（ライブ）にきてくれて親しくなった。それが一年前。その後はネット談話室で会ったり、架空書店（ヴァーチャルブックストア）に一緒に行ったりはしているが、生（リアル）で会ったのは最初のお台場と横浜の生演奏（ライブ）会場、それから四谷のフレンチレストランで食事をした三回だ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

け。髪をフォギーの好きな菫（すみれ）色に染めた芯城銀太郎は、未婚で見た目も感じも悪くなく、モリキテックからＩＤを貰えるくらいの社会的地位はあり（モリキテックのＩＤ証はそこらの国の旅券よりも信用がある）、二十世紀ミステリと云う共通の趣味もあって、総じて恋愛関係に発展してもおかしくない展開であったが、こと恋愛と云うことになると、フォギーが運動神経をいくぶん欠く事実は否めないのでした。

男女が付き合う場合、まずはセックスの問題を処理してから、と云うのが昨今は常識。つまり、するならする、しないならしないと、方針をあらかじめ定めてから関係を作っていくのが普通である。かりに芯城が異性愛に関心を持たぬのなら、それはそれで構わぬので、異なる性的志向を持つ同性愛者同士が家庭を築くことも、幾つかの原理主義的宗教国家を除いては珍しくない。ヘテロの人であっても、性交と生殖がいよいよ切り離され、架空（ヴァーチャル）世界で相応の性的願望が叶えられる現状においては、恋愛はプラトニックな色彩を深めて、肉身（リアル）のセックスしたがる人は減りつつある。と云うか、あらゆる領域と同様、ここでも二極化は漸進（ぜんしん）して、ヤりたがる人はもうヤってばかりの磨り減らし。磨り減らしは江戸時代からある言葉、性器が磨り減るほど、の意味なのは分かるよね。一方でヤラない人は全然ヤラない無性生殖アメーバ。であるからして、芯城の方から、ちょっとセックスしてみませんかと提案してくるか、あるいは自分は基本したくないのだけれど、それでもいいの？　と問い合わせてくれればいいのだけれど、これまでのところ意思表示はない。だ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

つたら逆にフォギーの方から、とりあえずセックスしましょうよと、勧誘すればいいわけだけれど、ほとんど苦役を果たすような具合にセックスする人も男性には多いから、無理を強いるのもな、との遠慮がフォギーにはある。だから提案して断られるのならまだいいが、フォギーの必ずしも鋭くない勘によれば、芯城はたぶん断らないので、だから逆に云いだしにくい面があるのだ。

だいたい芯城銀太郎と云う男は何を考えているのかが分かりにくい。そこがまあ神秘的(ミステリアス)でクールだと、無理して云えば云えるわけだけれど、そもそも彼の職業からして不可解である。プロの将棋指し。最初聞いたときには、「?」印が頭上に点滅してキョトン猫の顔になった。ショーギサシ? なんじゃ、そりゃ、と云うフォギーの表情に芯城は傷ついたふうもなく、仕事内容につき淡々と解説したのは、その種の反応には慣れているからなんだろう。文化教育法人日本将棋連盟なる団体があって、プロ棋士はそこに所属して、対局をネットで有料配信したり、後援企業の主催する棋戦の賞金でカネを得る、つまりゴルフのごときプロスポーツと同じであると説明されて、将棋を知らぬフォギーも少しだけ分かった気になった。

しかし、音楽以外万事にうといフォギーでも、将棋だとか囲碁だとか云った知能ゲームではもはや人間が電脳(コンピューター)に敵わないのは知っていた。この点を遠慮がちに云ってみると、四谷のフレンチレストランで蠟燭(ろうそく)を挟んで座った童髪の男は、『大感染(パンデミック)』のだいぶ以前、

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

人間のプロはコンピューターソフトに勝てなくなっていましたね」と応じ、「ロボットトランナーに人間は百米走で勝てない。それとまあ同じ、と云いてえところなんですけどね」と続けた顔には淋し気な笑みが浮かんで、フォギーが芯城を憎からず思いはじめたのはじつはこのとき。芯城の喋りに入り交じる江戸っ子ふうの口調にも好感を持ち、出身を訊いてみれば、生まれは群馬、育ちは札幌シドニー北京その他で、ただ好きで江戸っ子言葉を使ううち癖になったと云うから、やはり変な男です。

「時代遅れ、と云うのも、もはやアレだけれど、人間が裸で、てえか機械の力を借りずに、知力をふりしぼって戦うのを面白がるアナログ人もまだ世間にちったあいるんですよ。それでどうにかこうにか将棋指しもやっていけてる。まあ昭和平成の昔に較べたら、ごくささやかなものですがね」と芯城がさらに続けるのを聞いて、アナログ人の一代表であり、もはや時代遅れとすら云えぬほどに古色溢れる芸能に携わるフォギーは、蠟燭の向こうの男に対して、やがて恋愛感情にまで成長しても不思議ではない、同志的共感を抱いたのでした。

しかもだ。訊いてみれば、芯城は将棋の勉強をする傍ら、東京の大学で二十世紀文化を学んで博士号まで取り、ことに六〇年代史については趣味の域を超えて、三年前に博多で行われた二十世紀博覧会では、ネット展示のアドヴァイザーを務めたと云うから本格だ。その業績を買われて山萩氏の墓建設にも携わるようになったそうで、いまではそちらの方

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

が本職みたいになっていると聞いて、同じく本職では喰えぬフォギーはいよいよ共感を深めたのだったが、その話はまずはいいとして、ケープタウン国際空港（インターナショナルエアポート）の到着フロアに立ったフォギーに話を戻せば、出口（ゲート）を出たフォギーはいかにもデキル女ですふうに、ハードボイルドな感じ、と本人が考える感じで歩きだしはしたものの、向日葵（ひまわり）柄の麻のトートバッグを持ち、ナイキの赤い運動靴（ウォーキングシューズ）に黒の綿シャツと綿パンツ、檸檬黄色（イエロー）のシャンプレー・サテンの上衣（ジャケット）に長い黒い髪を垂らした姿は、たったいまド田舎から都会に出て参りましたと声高に宣言して回る女学生にしかみえぬのが辛い。しかも空港店（ショップ）のキリンの人形に気をとられたとたん、カクッとこけて見事に転び、周りの人たちから助け起こされる一幕まで演じたあたり、まあいつもの調子です。

化粧室に入って気を取り直したフォギーはだいぶ旧式の腕輪（ブレスレット）型の端末を操作して、接眼（コンタクト）レンズから必要情報を網膜に映し出した。いくらアナログ人でも、もはやその種のIT機器の介助なしには一歩も動けない。空港施設の透視図とともにモリキテックの迎車の駐車位置を示す「L42」の文字が点滅すると、前方におなじみムーミン・トロールがぬっと現れ、先に立って案内したところは、空港ターミナルに隣接する加圧円蓋（ドーム）屋根の駐車場だ。

入り口でちらり後ろを振り返ったムーミン・トロールは、フォギーがちゃんとついてきているのをたしかめてから、「L」と表示のある動歩道に乗る。３Dキャラクターがとき

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

どき振り向くのは愛嬌のつもりなんだろうが、「ちゃんとついてきてるの。もうトロイんだから」とでも云うかのごとき表情が浮かぶのが悔しい。「ふふ、ムーミンよ、死ぬがよい」とフォギーは呟き、鬼道の業を使ってムーミン・トロールをやっつけつつ歩道に乗れば、あとは「L42」のステーションまで勝手に運ばれる。ここで鬼道の業と云うのは、あれです、『妖星伝』に登場する鬼道の者らが使う恐ろしい殺人業のことです。

迎車は昔の甲虫(ビートル)の意匠(デザイン)を再現したフォルクスワーゲン、フォギーがプラットホームに立てば、すいとドアが開いたのは、虹彩その他のＩＤ認証が迅速になされたからだろう。車に乗り込むと、目の前の硝子板(スクリーン)に数字とアルファベットの交じったアクセス・コードが点滅し、入力を促す英語のアナウンスがあって、腕輪端末(ブレスレット)を点滅に近づけると、クンと音が鳴って接続完了(アクセス)が告げられ、続いて荷物(バゲージ)を確認せよとアナウンスがあったので、硝子板(スクリーン)に浮かんだ荷物室(トランクルーム)の映像で旅行鞄を確認してから、ＯＫ、ＧＯと指示すれば、自働運転車はするりと滑り出した。

11

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

モリキテックの本社は、アフリカ東海岸の街、グリーンキャッスルにある。グリーンキャッスルはデントランドと云う、多数の多国籍企業が集合する新興国の首都。税金や規制を逃れるべく、企業が拠点を転々と移し替える動きは昔からあったが、デントランドはその終着点とも云うべき国家で、表向きはともかく、内実は複数の保険会社を中核とする企業連合体が作った人工国。デントランドは城壁に囲われた首都以外はほとんどが核廃棄物処理施設で、日本をはじめ核廃棄物の処分に窮していた諸国が、それを引き受けて貰うのと引き換えに国家創立を認めた経緯がある。迷惑なのはそんなものを勝手に作られた地元だが、人類発祥の地アフリカが人類の後裔の食い物になる流れは、まもなく二十二世紀を迎えようかと云ういまも原則変わらない。

フォギーが向かいつつあるのは、しかしグリーンキャッスルの本社ではなく、南アフリカ共和国はケープタウンにある研究所。MORIKITECK Robotology Institute of Cape Town が正式名称。港湾に面して広がる市街地からは外れた、ケープ半島の突端に近い崖上に三三階建てのビルが建つ。大半の階がモリキテックの研究所関連で、山萩氏の個人用区画（プライベートフラット）もなかにある。

フォルクスワーゲンは空港から真っすぐ南下して、フォールス湾へ突き当たると、そこからは海沿いを半島突端へ向かって進む。南アフリカの九月は冬の終わり、気温は低くないが、空は暗鬱に曇って、誰かが悪意で投げつけたかのような雨粒が間欠的に吹き寄せ、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

窓から眺める海が鉛に変じて波立つ姿は泰西浪漫派絵画のごとくである。

悪天下、崖沿いの道路を二〇分ほど走ったところで、岬の丘陵の、ひねこびた矮林越しに白い建物が見えてくる。好塩性の荊草が疎らに生えた岩浜に矩形の台座がデンと据えられ、そこからニョッキリ生えた筍のごとき多角形の塔は、周囲の景観にはまるでそぐわぬ、突如降って涌いた感を濃厚に漂わせつつ荒涼の海浜に佇立している。白はただの白ではなく、一切の雑物を寄せ付けぬ潔癖な白、それが海と空の風景を鋭角に切り取る姿は現実感を欠いて、まるでCG映像だ。塔の天辺に載った球体で点滅する双つの閃光は航空障害灯なんだろうが、これがひどく意味ありげで、白い巨人が遠方へ合図を送るかのごとく見える。「白い巨人」は地元民の付けた渾名。モリキテックの工場や社屋が世界中で似たような名前で呼ばれているのは、どれも外壁が防塵処理の施された焼結石灰であることもあるが、建物上部に必ず人間の頭部を想わせる構造物が付いているせいだ。モリキテックのビルはじつはまるごと大型ロボットで、いざというときには手足が生えてゴゴゴと動き出すのである、との伝説はよく知られているところ。

昔ながらの土瀝青舗装の道路は突き当たりがそのままモリキテックの敷地になって、フォギーを乗せたビートルが近づくと、黒い門扉が左右に開く。効果音こそないものの、天辺が鏃になった鉄柵といい、キマイラやらゴルゴンやら神話の怪物の鉄像を塩梅した鉄門といい、ゴシックホラーに登場する城館の門そのもので、このあたりのセンスはフォギー

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

には了解不能だ。そもそも敷地を囲む黒い鉄柵は飾りにすぎず、眼に見えぬ探知機（センサー）が周囲に張り巡らされて、不審者侵入者があれば対ミサイル防衛システムまでをも含む防御装置が猛然と作動することは疑えない。

敷地に入れば、あとはゆるやかに蛇行する道が「白い巨人」の土台裏側へ通じて、自働運転車が徐行で近づくと、白い壁に仕組みのよく分からぬ入り口がぽっかり開いて、そのまま進み行けば、下方へ向かう螺旋の通路になり、やがて出たのは駐車場だ。建物内は機能主義一辺倒、通路の壁もごくつまらぬ混凝土（コンクリート）で、門扉近辺のホラー色はどこにもなく、どうも意匠（デザイン）思想に一貫性がないなと、来るたびに——と云ってもこれが二度目であるが、フォギーは批判的な気分になる。ホロ映像のドラキュラ伯爵くらいは挨拶に出てきてもいいだろう。

研究所に常時何人くらいの人がいるのか知らぬが、ここまでのところフォギーは一人の人間も見かけていない。見た生き物と云えば、敷地上空を塵屑（ちりくず）みたいに舞い飛ぶ海鳥と、鉄柵をするり抜けて走った鼬（いたち）みたいな獣一匹だけ。駐車場にも、自働車はあるが、人影はない。じつは何かトンデモナイ事故が起こって全員が避難した後なのではないか。と、そんな妄想が脳裏に浮かび出れば不安になるが、だとしても、どうにもできない。ただもう万事あなた任せ、荷物となって運ばれるままになるしかないのが悲しくもあり、気楽でもある。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

駐車場の中央に昇降機(エレベーター)があり、扉にB5と書かれているところから見てここが地下五階だと見当がつく。昇降機(エレベーター)の扉が左右に割れて、ビートルが静かに箱に乗り入れる。上昇する体感はないまま数秒、今度は反対側の扉が開き、ビートルがまた滑り動いて、残照を想わせる橙色の光のなかをゆるゆる進んでいく。どこにも表示はないけれど、前回と同じなら三〇階のはずである。やがて周囲は丈高い樹木の鬱蒼とした森になった。建物内に森があるわけないので、要は映像なわけだけれど、無辺に広がる太古の森に彷徨(さまよ)い込んだふうではある。前回来たときは荒海に突き出た絶壁だったから、模様替えしたんだろう。

到着の報知と、荷物をトランクに置いたままでよいか尋ねるアナウンスがあって、OKと云うと、扉が開いた。自働車から出たとたん、九官鳥の3Dアニメーションが中空に飛び出す。周りの森とは違い、これはフォギーの接眼レンズ(コンタクト)に映し出された映像だ。空港で車に乗った際、アクセス・コードを入力したので出てこられるようになったんだろう。九官鳥はモリキテックの企業キャラクター。虹色の嘴(くちばし)を持つ黒い鳥が頭上で羽撃(はばた)きつつ云った。

Would you follow me?(こちらです)

12

銀杏らしい樹間の小径を抜けて九宮鳥が案内したのは、峨々とした岩山に穿たれた洞窟。短い隧道の奥に扉があって、真鍮のノブを回して引けば、なかは前回も訪れた山萩氏の事務所だ。マホガニー材でできた書棚や机の置かれた、社長室ふう、と社長室を知らぬフォギーが思う部屋がまずあって、しかしここは受付。と云っても人がいるわけではない。ロボットもいない。どっしりした机に和紙ふうの帳面と、古雅な趣ある楕円形の硯と筆が置かれているだけ。硯の横に墨と朱泥の水差しがあるのは、自分で墨を磨れと云うことらしい。日本で学校教育を受けたフォギーはいちおう筆は使える。が、使えぬ人のためにフェルトペンも置かれているので、九宮鳥から名前を書くよう促されたフォギーは、前回同様、少しだけ迷ってからフェルトペンを執った。世界にはそもそもペンで字を書いたことのない人も多いから、そう云う人が来た場合はどうするのかと、やはり前回と同じ疑問を浮かべつつ記帳する。

フォギーの身元については、建物に入る際、いや、空港でビートルに乗ったときにはす

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

でにDNA型から何から確認され尽くし、武器その他の携行についても、髪の毛の一筋、毛穴の一個に至るまでが精査されているはず。だから署名の目的はよく分からぬが、しばしその場に留め置いて感知機（センサー）で再度所持品検査を徹底してでもいるんだろう。室の扉がここだけ金属ノブを回す方式なのも何かしら意味があるはずだ。近頃の諜報機器の性能は途方もないと云うから、モリキテックくらいの会社になれば神経過敏なまでの防諜態勢を敷くのは当然だろうとは、機嫌の善し悪しで空腹具合がすぐに悟られてしまうくらい防諜に無縁のフォギーにも理解できる。

またも羽撃（はばた）く九官鳥に促されて、奥の扉の向こうへ進めば、今度は五十人ほどが座れる紫檀の長机、と云うか、こんなに大きな紫檀材があるとは思えぬので、紫檀らしく見える長机の据えられた大会議室。あるいは博物館の展示室と云うのが正確か。まず眼を惹くのは、左右の壁面を覆い尽くす大障子。それから正面奥の二体の巨大な恐竜だ。まずは順番に障子から述べるなら、これがなかなか尋常でない。障子戸の横幅も相当だが、高さがゆうに十米（メートル）はあるのだから、壮観、を超えて少々気味が悪い。縦横の桟（さん）がもう数えきれなくて、見ていると目眩（めまい）がする。およそ和風のセンスにおいて、小さいことが本質的であるとフォギーが深く確信したのはこの障子を見てからである。

それから恐竜だけれど、奥の壁前に二頭の大恐竜が、いままさにすれ違わんとするかのように、左右逆向きに立っている。手前側の、ここまで獰猛にしなくてもいいだろうと思

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

うほどの、鋸歯の並ぶ口のついた大頭と矮小な前脚は、あいつだ、いまも昔も変わらぬ人気者、恐竜の類に関心のないフォギーでも名前を知ってるティラノサウルスだ。その奥の壁際にいるもう一頭、丸太様の四本脚と蛇のごとくに長い頸（くび）を持つ恐竜は、アパトサウルスと云う種類だと前回教えられたが、フォギーがこれを誤ってアパートサウルスと覚え、恐竜のアパートが大昔にはあったのかな、などとわけの分からぬことを考えたことはどうでもいいです。

実物大の両者はなにしろ大きいから、圧倒的な存在感がある。ティラノサウルスなどはいまにもぐいと大頭をこちらに巡らせ向かってきそうな迫力だ。いや、これらはロボットだと云うから、動力を入れればそこらをどすどす動き回るんだろう。恐竜はほかにもいる。左右の大障子の前に、Troodon、Velociraptor、Eoraptor などと名札の付いた、それほど大きくない恐竜たちが、同じくいまにも動き出しそうな気配を漂わせつつ居並んで、高い天井には三匹の翼竜が鋼索（ワイヤ）で吊られている。

その昔、恐竜ロボット動物園が各地にできたとき、ロボット製作に携わったのが山萩氏とモリキテックだったそうで、少年時代は恐竜が大好きだったと云う山萩氏が、あの仕事は本当に楽しかったと述懐するのをフォギーは何度か聞いたことがある。架空技術（ヴァーチャルテクノロジー）の進展にともないロボット動物園は廃れてしまったとも聞いた。つまりこれら恐竜の展示は、ロボット製作に夢があふれていた時代の記念なんだろう、と云うと、いまは夢がない

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

みたいだな。山腰氏の言葉の端々に昔をノスタルジックに懐かしむ響きが入り交じるのはたしかである。

恐竜たちは思い思いの格好で、大障子から差し込む照明の淡い光の中、暗色の肌を鈍く光らせているが、古生物学の進展のなかで、皮膚の色彩や組織を含め、恐竜のイメージは大幅に変わってしまい、だからこの恐竜たちはあくまで二十世紀の恐竜であって、その意味で彼らは二度目の絶滅を迎えたので、「ここにあるのはいわば二十世紀の夢の剝製です」と前回聞いた山腰氏の言葉がフォギーの印象に残った。二十一世紀、「大感染」を挟みながらもロボット産業は一定の発展をみせ、社会生活のあらゆる場面でロボットが使われるようになってはいるけれど、実用から離れて、つまり遊びでロボットを作って面白がる感覚は、たしかに二十世紀的なものなのかもしれない。少なくとも芸術の流れは、二十世紀の現実から二十一世紀の架空へ、で間違いない。これは音楽で云えば、アナログの二十世紀からデジタルの二十一世紀への移り行きに対応する。その意味で、フォギーがやっているモダンジャズ、とりわけフリーコンセプトのそれはまさに二十世紀の夢の剝製に違いなく、

自分はここに並んだロボット恐竜と似たようなものかもしれぬと思うと、淋しいような慨嘆するような、妙にヤケな気分になってきて、恐竜全部に一遍に電源を入れて大暴れさせてやりたくなったりしたのが前回の訪問。今回は二度目とあって、格別な感慨はなし。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

それにしても、恐竜と障子はまったくそぐわない、かと思いきや、案外と調和しているのが不思議である。木と紙でできた（本物ではないと思うが）檻のなかで、恐竜たちは大人しく時間をやり過ごしているのでした。

13

それで肝心の部屋の主は、と云えば、ティラノサウルスの図太く強靭な脚の下、長机から一基だけ離れて置かれた事務机の前に、ぽつねんと座っているのがそうだ。フォギーが歩み寄ると、わざわざありがとう、と山萩氏はにこやかに挨拶して立ち上がった。

山萩氏は短軀痩身、皮は枯れ肉は削げと云った風情は、まずは年齢相応、と云っていいのかどうか分からぬが、後ろに撫で伸ばした灰色の髪と顎髭で飾られた額の広い顔は、鼻梁高く口角緊（しま）って、眼睛炯々（がんせいけいけい）、しかし目尻に寄った皺のせいか、茶色い目玉が絶えず笑いを含む印象があって、全体には飄々とした趣を醸し出す。眼球や皮膚がどこまで生得的（ナチュラル）なのかは見た目では分からぬが、少なくとも内臓や関節については何度か交換しているのは間違いないだろう。山萩氏はいつでも古雅な御洒落に身を固めているが、今日は薄茶と濃

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

紺の縞のスーツに臙脂のボウタイの出で立ち。指に嵌めた瑪瑙の指輪とボルサリーノがトレードマークだけれど、いまは室内なので帽子は被っていない。芯城によると、山荻氏は二十世紀に活躍したジャズ評論家の、植草甚一と云う人に風貌が似ているそうで、山荻氏もそれを意識している節があると思うとも云っていた。

「遠くから来てもらったのに、こんな格好で申し訳ない」と山荻氏が謝り、そこではじめてフォギーは目の前にいるのが現身山荻氏ではなく、3D映像であることを知って軽く驚いた。これも九官鳥と同じく接眼レンズの映像のわけだが、現実感は異様に高く、云われるまでフォギーは気づかなかったくらいだ。

「よんどころない事情があって、どうしても動けなくってね」と云う生身の山荻氏が実際はどこに居るのか、またよんどころない事情がどんなものであるのか、フォギーには想像の埒外である。

「出直してきましょうか？」フォギーが云うと、気を悪くされたなら重ねて謝るが、このままでおつきあい願えたら有り難いと山荻氏が云うので、とんでもないです、もちろんおつきあいしますと、フォギーが素早く応じたのは足を向けて寝られぬ以上は当然だ。

重ねて礼を述べた3D山荻氏は、では、こちらへと云って、先へ立って歩き出した。足音がしないので、なるほど映像だと確認できる。大会議室を出て廊下を行くと、床の木材がぎしぎし鳴るのがやかましい。これがもし架空環境だったら、音響設計士のへぼぶりを

嗤うところだが、現実なのだから困る、と云うのはなんだか理屈がおかしいが、フォギーが困ったと思ったのは事実。一方の山萩氏は音をたてず滑るように進んでいく。それを見ていると、自分だけ不器用な熊にでもなった気分になるから妙なものだ。黒ずんだ床板は琵琶湖畔の古刹の建て替えで出た廃材だとは前回来たとき聞いた。天井も板張りで、左右に襖絵ふうの山水や花鳥が描かれた板戸が並んでいるところは、江戸時代の城館の廊下のようである。戸を開けるとそこは大奥で、花魁がいたりして、とフォギーが考えたのは、大奥と吉原を混同した結果です。

しばらく進んで右へ折れたところで山萩氏はつと立ち止まった。「ついでだから、こっちも見てもらいますかね。フォギーさんにはあまり関心はないかもしれませんが」と云う。ええ、是非、とフォギーが応じたのは寝る際の足の向きからしてまたもや当然だ。

黒松と白鷺の絵が描かれた板戸がするすると滑り開いて、では、こちらへ、と山萩氏が云って導いたのは、廊下左手の一室だ。入ったとたんフォギーはぎょっとなった。和服を着た男が二人、畳の敷かれた木台の上に並んで正座していたからである。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

14

誰か、分かりますか？ いや、無理か。男の車、人督台の横に立つ由紀代が笑いをふくんだ声で言う。

なゆのフィギュアは笑う感じには全然ならぬ。なぜなら凝固したように動かぬ人たちの右のひとりが薄気味悪かった。

「なんでこの人たちは動かないんですか？」フィギュアは腰が引ける感じで問い、と、すぐに彼らが人間ではなく、ロボットだと気がついて、我ながら馬鹿な質問をしたもんだなと、自嘲しそう感じには、しかしてもなれなくて、いよいよ不気味さが募ってドウ仕様もない。もっともこれはフィギュアを喰えぬので、人間そっくりに作られたアンドロイド型ロボットというものは、眼に気持ちのいいものじゃない。とくに凝っと動かずにいるアンドロイドは、緊張しない身体へ重みがかっていたが、存在論的に人を脅かすものがあります。

しかもこの一体の人物は、どう見てもただ者じゃない。動力の入らぬ木偶の坊にもかか

わらず、妖しの霊気を放って広からぬ室中に充満させているのが怖い。向かって左側は、禿頭の、全体にまるっこい印象のある年寄り。紺青の着物に銀鼠の袴を穿いて、俗に牛乳瓶の底と呼ばれる分厚い丸眼鏡をかけた顔を俯き加減にして紫色の座布団に端座している。

右側も同じく年寄りの禿頭だが、左の牛乳瓶が後頭部や裾野に未練がましく髪を残すのに対して、こちらは完全なるスキンヘッド。鬱金(うこん)の着物に袴は穿かず、代わりに紋付の羽織を着た姿で座布団に座り、地蔵を想わせるたぶの大きな耳のついた色黒の顔を昂然と中空にあげて、尖った頭頂部をつやつや光らせている。

この禿げた人たちは誰なの？　フォギーは自問してみたけれど、ただ昔の人間だと分かるだけ。江戸城大奥に蠢く妖僧だとか、カネで人を殺める仕掛人だとか、仁義なきヤクザの大親分だとか、二十世紀ミステリの知識を総動員して見当をつけてみたけれど、知識が偏りすぎの面は否めず。そもそもそんな怪しいもののはずはないので、とりあえず左の牛乳瓶眼鏡を、昭和の大政治家吉田茂、右のスキンヘッドを、大阪の工作機械製作所として出発したモリキテックの創業社長と、適当にあたりをつけてそう云ってみると、山萩氏は愉快そうに笑ったあと正解を教えた。

「左の眼鏡を掛けた方が、大山康晴十五世名人」

「名人、と云うのは？」なお分からぬフォギーが問えば、即座に答えが返ってくる。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「将棋です。将棋の名人です。大山康晴十五世名人」

ああ、なるほどと、とりあえずフォギーが頷くと、山萩氏は右のスキンヘッドの紹介に移る。

「こっちは五代目古今亭志ん生。昭和の落語家です」

ははあ、とフォギーはまたも頷いたけれど、なかなか感想が出てこない。とは云え、これらがロボット工学界の鬼才、山萩貴矢氏の手になる傑作だろうとはさすがに見当がついて、ここは感動すべきポイントに相違なしとの判断下、なんか、すごいですね、とまずは言葉を発したが、それだけでは不足かと思い、

「この大山さんは、あれですか、やっぱり将棋をやるんですか？」と質問したが、将棋指しロボットなら将棋をやるに決まっている。これまた馬鹿な質問をしたもんだが、山萩氏はそうですと生真面目に応じた。

「将棋を指すロボットは昔からあるんですが、ここまで人間そっくりなのは作られてなくてね。まあ、そんなものをわざわざ作る物好きは世の中あまりいないわけで」と笑った山萩氏が続ける。

「この大山名人は、ほとんど人間と同じように振る舞える。扇子も使うし、お茶も飲む。雑談にも応じられる。対局すれば、目の前に本物の大山康晴が居るように思えるはずです。なかなか臨場感があると思いますよ」

たしかに圧迫感はある。ありすぎる。腹に溜めた密謀奸計の毒ガスが顔に吹き寄せてきそうで、目の前にはできれば居て欲しくない。はあ、とまた感心してみせたフォギーは別な質問をしてみた。「山萩さんは、大山さんのファンだったんですか」

「ファンと云いますか、子供の頃は将棋が好きでね。奨励会に入ろうと思ったこともあるんです」と答えた山萩氏は、奨励会と云うのはプロ棋士の養成機関だと註釈を入れたうえで、知り合いのつてで大山名人に紹介して貰い、弟子入りを願い出たところ、山萩少年と一局指してみた名人が、奨励会はよした方がいい、君は別の才能を伸ばすべきだと云われたとのエピソードを楽し気に紹介した。

「あのとき断わられていなかったら、僕の人生はだいぶ違っていた。それはそれで面白かったと思いますがね。とにかく大山名人は、いま僕がこうしてあることについては、一種の恩人と云うか、まあそう云う人なんですよ」

はあ、と三度頷いたフォギーは、ごく常識的に考えて、山萩氏が将棋指しにならず、ロボット工学博士になったのは、本人にとっても文明社会にとってもよかったわけだ、などと感想を思い浮かべていると、フォギーの内心を見透かしたかのように山萩氏がまた註釈を入れた。

「将棋は所詮は遊びです。だから将棋指しにならなくてよかったと人は云うんですけどね。しかし本当はロボットもそうなんですよ。僕は子供の頃からロボットが好きでね。む

かし鉄人28号と云う漫画があったんですが、僕はあれが好きで、小学校四年生のときに、鉄人29号を作ったのが、僕が最初に作ったロボットです。胴体が段ボールで、強力なゴムで動く仕掛けだった。ずっと遊びのままならよかったんですけどね」

　モリキテックは軍用ロボット生産で世界第三位。そのあたり山萩氏には忸怩たるものがあるのかもしれぬと、フォギーが想像したのはこれがはじめてではない。前回きたとき、展示された恐竜ロボットの解説を聞いた際にも同じく感じたわけで、しかし山萩氏がこんなふうに内面を、直接にではないにしても、かなり明瞭に吐露したのは、はじめてのことだなとも思い、やはりこれも山萩氏の「墓入り」が近いことの証しであるかのように感じた。

「そう云えば、来月なんですが」山萩氏は気分を改める軽快な調子で云った。「大山名人はデビューするんですよ」

「デビュー、ですか？」

「そうです、デビューです」笑った山萩氏は、来月に東京でロボット大山名人と人間のプロとの対局があるのだと楽し気に続けた。

「相手はフォギーさんも知っている芯城くんです。よかったら、フォギーさんもご招待しますよ」

「ええ是非」とフォギーが応えたのは半分はお世辞。将棋の対局などにはとても興味が持

てそうにない。しかし半分はお世辞でもなくて、つまり大山名人はともかく、芯城が将棋を指しているところを一度くらいは見てみたいと考えたのである。

「と云うことは」とそこでフォギーは、隣の、大山名人に劣らず容貌魁偉なロボットに話題を移して云った。「こっちの落語家の人は、落語を喋るわけですね?」

そうですと頷いた山萩氏は、五代目古今亭志ん生は大正から昭和にかけて活躍した名人であると註釈したうえで、これは一九五〇年代の、人気実力とも絶頂だった頃の志ん生を模したもので、身振り手振りで落語を語るのはもちろん、出囃子とともに楽屋から高座へ出てくるところから、本物そっくりにやるのだと解説した。

「大山名人は将棋を指すだけだから比較的簡単だが、こっちは大変です。なにしろ身体的な芸を再現しようと云うんだからね。実際はどこまで再現できているか、よく分からない面はあって、僕自身、志ん生の高座は観ていないんです。録音はさんざん聞きましたが。とにかく一度でいいから志ん生の噺を生で聞いてみたい。そう云う素朴な動機から作ってみたんです。いまのところ演目は、『千早振る』とか『子褒め』とか、比較的短い前座話だけなんですが、今後段々と増やしていく予定です」

なるほどと応じたフォギーが、たしかに落語家だと思えば、怖い怖いばかりだったたものが、どこか可愛らしく感じられなくもないな、などと観察するうちにも山萩氏は話を先へ続けている。今日の山萩氏はいつになく饒舌だ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「ヴァーチャルでなら、いろいろ簡単にできるんですが、僕は、ヴァーチャルはあまり好きじゃなくてね。と云うより、リアルに動くものが好きなんですね。だからロボットなわけだけれど、いくら現実としか思えなくても、ヴァーチャルは所詮ヴァーチャルにすぎない」

となると架空墓（ヴァーチャルトゥーム）はどうなんだろう。フォギーは考えぬわけにはいかないので、昨夜の『大正池』で感じた、山荻氏が架空墓（ヴァーチャルトゥーム）作りに熱心になる不思議にまた思案が向きかけたところへ山荻氏が質問した。

「フォギーさんは、落語にはあまり関心がない？」

ええ、まあ、ですね、と頷いたフォギーが、しかし今後は是非とも関心を持ってみたい、などと心にもない追従（ついしょう）を口にしようとしたところへ、次の質問がきた。

「しかし、ジャズならどうです？　たとえばエリック・ドルフィーのプレイを生で聴いてみたいとは思いませんか？」

「そりゃ、もちろん思いますけど」フォギーが応えると山荻氏は目元に笑いの漣（さざなみ）を立てつつ云った。

「では、こちらへどうぞ」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

15

山荻氏が案内したのは、前回も来た、昇降機（エレベーター）で数階降りたところにあるスタジオ。これは山荻氏の趣味を兼ねるらしく、スタジオ横の倉庫に古い楽器やアンプ等の音響機材が集められているのが興味深い。フォギーはここで一九六〇年代に製造された電気ピアノの名器、フェンダー・ローズや、伝説の電気オルガン、ハモンドB－3の、模造（レプリカ）でない本物に触れる機会を持った。ちなみにB－3は電子回路に真空管が使われているのだけれど、現在真空管を製造している世界唯一の会社がモリキテックであるのはあまり知られていないはずだ。

スタジオ防音室は二つあって、大きい方はオーケストラがまるごと入るほどの広さがある。小さい方はその四分の一くらい。山荻氏に促されて小さい方の調整室に入っていけば、ここにも二人の男がいる。またもぎょっとしかかったが、今度はロボットではない。正真正銘生身の人間、と断じられるのは、一人が顔見知りだからである。

いかにも窮屈そうに樹脂硝子の小卓に向かって麺（ヌードル）らしきものをすすっている巨漢はエ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

レク・メンゲルベルク。フォギーとは何度か共演したことのあるスウェーデン人ベーシストである。顔中が赤い髭に覆われ、二米を超える長身のメンゲルベルクは、北欧のビッグフットの異名を持つ、フォギーが深く尊敬し信頼する音楽家の一人だ。知らない人のために註を付すならば、ビッグフットとは、カナダロッキー山脈に棲息すると云う、雪男のごとき謎の怪物のことです。

大国主命が着るみたいな、と云うのはフォギー独自のイメージであるけれど、琥珀の飾りがついた麻のつなぎ服を着たビッグフットは、Yah, Yah, Foggy, Long time no see!と云って立ち上がり、軽く抱擁して挨拶してくる。針金のごとき髭がちくちく頬に当たるのを感じたフォギーが思わず涙ぐみそうになったのは、ケープタウンの空港を出てからこちら、ただの一人の人間にも出会っておらず、ことにモリキテックの研究所に着いてからと云うものは、人の気配が全然なくて、だから人間の息遣いと云うか、体温と云うか、霊魂と云うか、そうしたものに間近に触れて、ほっと安心する感じになったせいである。平気なように見えて、フォギーも人の子、けっこう心細く感じていたんですね。ビッグフットその人に懐かしい親戚のオジサンのごとき親しみを覚えていたこともある。

室に居るもう一人は、調整卓の下で胡座を組んでの瞑想中。こちらは若い黒人で、袖無しの綿シャツから伸び出た腕や首に限無く入れた唐草模様の刺青が金色に輝いて鮮やかだ。ドラマーのレニー・バレンシアだと紹介したメンゲルベルクが、レニー、と声をかけ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ると、古風な縄束髪（ドレッドロックス）の若者は静かに眼を開けて立ち上がり、拍子に頭を卓にぶつけてしばらく頭を抱えて呻いた後、「レニー・バレンシアでござる。以後、お見知りおきを」と日本語で挨拶して深々お辞儀をした。

フォギーが眼を白黒させていると、メンゲルベルクが笑いながら、レニーは子供の頃、京都に居たことがあるのだと紹介し、彼はチャンバラが大好きであり、スポーツチャンバラの欧州王者（チャンピオン）であると付け加えたところへ、2Dの山萩氏が壁に現れた。3Dの方はいつのまにか消えている。平面（プレーン）山萩氏が、軽く演奏してもらいたいのだが、準備に手間取っているので、もう少し待って欲しいと一同に告げる。

山萩氏が平たくなって壁スクリーンに現れたのは、メンゲルベルクが脳への侵襲式はもちろん、接眼（コンタクト）レンズであれ眼鏡型であれ網膜映写式の表示端末（ディスプレイ）を使っていないからだ。いまどきそれでは不便で仕方がないはずだが、ジャズ音楽家（ミュージシャン）にはその種の偏屈者が多い。まあアナログへ偏した変人であればこそモダンジャズなどと云う古式ゆかしい音楽をわざわざやろうと思うわけで、なかにおけばフォギーなどはただの常識人にすぎない。なにしろメンゲルベルクときた日には、毎夏の休暇（ヴァケーション）、北極に近い孤島の洞窟で捕った魚や野鳥を焚き火で焼いて喰らい、穴居人同然に暮らすと云うのだから激しい。本物のビッグフットになる日も近そうだ。

聞けば二人は一時間ほど前に着いて、レニー・バレンシアはドラムセットのチューニン

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

グもすでに終え、軽食をとっていたところだと云う。メンゲルベルクが、今日は何の録音だか知ってる？　とフォギーに訊いたところをみると、二人とも山萩氏から招集をかけられただけで詳しい話は聞かされていないらしい。前回は何かの音源に使うとかで、別のドラマーと三人で有名スタンダード曲を五〇ばかり、主題(テーマ)だけ録音する仕事を同じスタジオでしたから、今回も似たようなことだろうとメンゲルベルクは考えているらしい。フォギーは「大山」&「志ん生」を見学した後だけに、自ずと察するところはあったのだけれど、まずは首を傾げるにとどめた。

北辰一刀流と神道無念流の根本的世界観の差異、および天然理心流に対するユダヤ・カバラ思想の影響と云う蘊蓄(うんちく)話をレニー・バレンシアから聴きつつ、珈琲メーカーのエスプレッソを飲んで待つうち、ようやく山萩氏から声がかかって、三人繋がってスタジオへ入った。

森の香りのする模造木材壁の、落ち着いた焦げ茶の防音室は二十畳ほどの広さ。調整室の硝子窓に向かって右にドラムセット、左手にヤマハのグランドピアノ、中央奥にベースアンプが置かれて、脇に飴色のウッドベースが寝かせてある。硝子窓に浮かび出た山萩氏が、軽く音を出してみてくれないかと請うので、フォギーは鍵盤をさらさらっと撫でて、[illegible]少考ののち、バド・パウエルの[illegible]

出せば、即座に二人がついてくる。

チャンバラ王にして剣術哲学者であるレニー・バレンシアは、これが初の手合わせであるが、前へ前へ行くタイプのようで、主題(テーマ)からフォギーが即興(アドリブ)に入ったとたん、バシバシドガドンと手数足数多くやってくる。ちょっと待ってよ、まだ暖まってないし、とフォギーは戸惑ったけれど、こう煽(あお)られてはもう行くしかないので、黄昏(たそがれ)の女バッパー、フォギー姐さんを甘くみんなよとばかりに、ギアをセカンドくらいに入れて対抗すれば、若いドラマーは首や腕の刺青(タツー)を一段と輝かせて激しく迫る。刺青(タツー)は血行や発汗に反応して発光するタイプのようで、きらきら光を放つのが派手だが、太鼓はもっと派手。基本は時間を極限まで分割してグルーヴを作り出す、黒人に特有のドラミングであるが、そこに粘りつき纏いつくようなリズムの癖があって、これがブルーチーズと云うか、納豆と云うか、くさやと云うか、発酵食品的効果を生み出して悪くない。悪くないけれど、ちょっとキビシすぎる、もう少しリラックスして行きたいな、とフォギーが考えていると、それまで様子見ふうに明瞭なリズムを打ち出さずにいたメンゲルベルクが、4ビートのランニングを、非常に力強く、けれども風貌に似合わぬ繊細な音使いで打ち出すや、瞬時に同調したバレンシアはぐっと音数を減らして、シンバルの刻みが陽光を煌めかす渓流のごとき清冽な響きを放ち出せば、滑らかな水流を泳ぐ魚になったフォギーは気持ちよく即興演奏(アドリブプレイ)を繰り広げた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

速い４ビートと云うのは、ピアノトリオ、だけではないが、とりわけピアノトリオにおいて、磨き抜かれた工芸品のごとき、一個の完成された型（スタイル）だとフォギーはいつも思う。いわばモダンジャズなる伝統の結晶であって、この侘（わ）び寂（さ）びが理解できるか、これが気持ちいいか、こればかり演（や）って飽きないか、そのことがプロアマを問わずジャズ者かそうでないかを決定するとさえ思う。この点からすると、メンゲルベルクはもちろん、ソウル系のバンドから音楽をはじめたと云うバレンシアも、やはり正真正銘のジャズ者なのでした。

五コーラスほど演って、メンゲルベルクにソロを譲ると、巨漢ベーシストは全体のバランスを確かめるような感じで短くソロをとり、ドラムスとのソロ交換に行きます？　とフォギーが眼で問うたのへ、メンゲルベルクが僅かに横へ首を振るのを見てとったフォギーは主題（テーマ）へ戻り、楽句（フレーズ）の尻尾のテンポを落とす形で簡潔に終結した。

これならばまずまずやれるなとフォギーは安心し、首領格（リーダー）のメンゲルベルクも納得したふうに頷いている。難しい顔のバレンシアはハイハットを神経質に調整したりしているが、これが彼のいつもの調子なんだろう。レニー・バレンシアはメンゲルベルクが連れて来た若手、だから悪かろうはずはないので、このトリオなら何度か稽古（リハーサル）をすれば良い演奏ができるだろう。しかし今日はトリオでの演奏ではないはずだと、フォギーが胸騒ぎを覚えつつ考えたとき、調整室脇とは別にある横手の扉が開いた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

黒スーツに深緑色のネクタイをした、見知らぬ男がスタジオに入ってくる。歩を進めるたびにかつかつと硬く乾いた靴音がするところから3D映像ではない。見たところは平均的な体格の黒人で、眼を惹くのは顔の古風な黒眼鏡(サングラス)だ。眼鏡の色が濃いせいで表情は窺えぬ。しかしそれより何より注目されたのは、男が首の支え紐(ストラップ)からさげた黒いバスクラリネット。それから片手に持った銀色のフルートだ。楽器の営業マンと云うことはないだろうから、間違いなく音楽家(ミュージシャン)である。

一体何者か？　フォギーがこの時点で新来の者が「誰」であるか、見当がついていたのは、もちろん山荻氏の予告があったからだ。ただならぬ気配を察したからだろう、メンゲルベルクもレニー・バレンシアもぎこちなく黙って男を迎え入れる。ピアノ、ベース、ドラムス、三者が定位置から見詰めるなか、黒人音楽家(ミュージシャン)は壁際の四脚スタンドにフルートを差し、バスクラリネットだけを抱えて、トリオの中央、管楽器奏者(ホーンプレイヤー)が立つべき位置に立てば、正面調整室の硝子窓に男の全身像が映る。表情は依然窺えぬが、わりに厚い唇を飾る口髭および顎髭、そして何より額に浮かぶ瘤を見たフォギーが、ああ、やはりなと、慌(あわ)てふためいた感じで確信したとき、山荻氏が左手の壁に場所を移して現れた。

Ladies and gentlemen. Let me introduce、と云ってから、一拍入れた平たい山荻氏は続けた。

Mr. Eric Dolphy !

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

16

しばらく沈黙が回るなか、小さな雑音があいた。オペレーターたちが騒いだのだろうか。何も知らぬ人が観客の前に出現、出し抜けにミスター・エリック・ドルフィーです、と言われて、ええっ？　とあわてるのはドルフィーのほうだけど、となるのは無理もない。だが、アルトサックスクラリネットを構えたドルフィー、いやもたた、あのドルフィーとしかいいようがない。

He is a Robot? ミュートなパトリックが呟いて、May be. とオペレーターが応じれば、全自動の拍手は HYUUUUU！ と歓声をあげて、しかしすぐにまた黙り込む。メンバーはスペルと構えたままかすかに身を揺り、驚く出来代わりに頭も動かぬ。

ぎこちない演奏でない。（ドルフィー）だけがバスクラリネットを斜めに構え、楽器となぜいま、演奏したのかような静止ぶりは、なるほどロボットだが、観客席の期待を裏切るオペレーターは反応しないから、ロボットとはあらかじめ知っていたのかそう思っていたか。人間ともかれはもっとも、まるで演奏家のにはまったく見えない。もっとも人間そ

つくりのアンドロイドないしヒューマノイドと云うのは、大昔から、「大感染（パンデミック）」以前からあって、それ自体は少しも珍しくない。問題はその「実力」だ。

途切れていた通信がふと回復したかのように、山萩氏が沈黙を破って口を開いた。

「『Take the A Train』を演（や）ってくれませんか」と云ってから、四人で、とすぐに付け加える。

「ただはじめちゃっていいんですか？」とやや戸惑ったフォギーが〈ドルフィー〉を窺いつつ訊くと、はじめてよいと山萩氏は頷く。本当にいいんですね？ と念を押せば、いいと返事がある。そこでフォギーはメンバーに眼で合図して、デューク・エリントンのイントロ楽句（フレーズ）、例の右手がEからA♭へ下降する、あらゆるジャズの楽曲のなかで一番有名かもしれぬピアノのフレーズを、当惑から脱しきれぬまま弾き出せば、ロボット〈ドルフィー〉がつと動くではないか。おおっ！ と思えば、当然のごとくに楽器を構え、歌口（マウスピース）を口にくわえる。ピアノの八小節のイントロが終わってドラムのスネアロールとともにAメロの主題（テーマ）、リズムスが入ってくると同時に〈ドルフィー〉は吹き出した。

バスクラリネットが「Take the A Train」の旋律をなぞっていく。音は太く、音程もリズムも正しい。まずは間然とするところがない。ピアノでバッキングしつつ、本当に吹いているのかと、フォギーは観察した。ジャズの演奏ロボットと云うのは昔からあって、しかし大概は格好だけで、音は別のところから出ている場合が多い。以前にMJ（メカニカルジャズ）

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

A　と云うのをカーネギー・ホールで聴いたけれど、合成か録音の音楽に合わせてルイ・アームストロングやらベニー・グッドマンやらの人形が動くだけの詰まらぬ代物であった。ドラムスロボットには実際にシンバルや太鼓をスティックで叩くものがあって、これはなかなか性能がよく、ほかにビブラフォンをかなりの水準で演奏するロボットも見たことがある。一般に打楽器は機械で扱いやすいらしい。ピアノは半ば打楽器だから、機械化とは相性がよく、紙ロールを使った自動演奏ピアノは十九世紀からあるが、アンドロイドが十本の指を使って鍵盤を弾く形のものは、ないことはないけれど、演奏の水準はたいしたことはない。

本物のヴァイオリンを演奏するロボットも見たことがある。銀座のヤマハ楽器店に展示されていた女性アンドロイドは、リムスキー・コルサコフの「熊蜂の飛行」を流暢に弾いていたが、微妙なニュアンスまでは出せぬようで、「機械的演奏」からは脱していなかった。管楽器では、気流を作り出すことで発音されるフルートが比較的機械でやりやすいと聞いたことがあるが、音楽性と云うことになるとまた別の話。

で、〈ドルフィー〉である。どうやら実際に歌口(マウスピース)のリードを震わせ管に空気を吹き込んでいるらしい。まあ天才工学博士、山萩貴矢がフォギーらに集合をかけてわざわざ共演させる以上、それくらいの芸当はやってくれなければ困る。とは云え、ロボットが単独で吹くのとはわけが違う。これは正真正銘のセッションなのであって、テンポひとつをとって

も、あらかじめプログラムはできないはずで、演（や）っているうちに微妙に揺れ動きもする。一回限りの、まさしく一期一会の演奏で、ちゃんと音楽の流れに乗ってこられているのが凄い。しかも斜め後ろから見る肩や腕の動きは人間の演奏家（プレイヤー）そのもの、もっともそうでなければ本物の楽器で演奏などはできぬだろう。

周りで鳴る音を感知機（センサー）で捉え、分析したうえで、出すべき音を、音量、音程、タイミング、アーティキュレーション等々、多岐にわたって決定し、指の動きに同調させながらリードの振動と空気の吹き込み具合を調整していくこと。しかもそれを瞬間瞬間にやることは、機械にはよほど難儀なはずで、いやはや大したもんだな、とフォギーは感心したのだけれど、驚くのはまだ早かったので、主題（テーマ）が終わって即興（アドリブ）ソロに突入したとたん、フォギーはうおっと声を出してのけぞった。

これはつまりドルフィーなのであった！　何がドルフィーかと云って、音がドルフィー。紛うかたなきドルフィー節だ。思えば数多のジャズ演奏家（プレイヤー）のなかで、エリック・ドルフィーくらい個性的な即興（アドリブ）ソロをとる者はない。楽聖チャーリー・パーカーを想わせる響きがときに入り混じることもあるけれど、誰にも真似できぬドルフィー印の音は屹然として際立ち、一楽句（ワンフレーズ）聴けばたちまちそれと分かる。「冴え冴えとした熱狂の火の玉、あるいは燃え上がる氷の遊星」とは、二十世紀の詩人評論家の言葉だけれど、他にも「剛胆にして繊細、鋭利でありながら優雅、灼熱のマグマを冷徹な理性が貫き、溢れ出る情感のなか

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

に諧謔の野獣が跳ね回る」なんて云う文句もあるし、「未知の何者かへの、まだ聴こえぬ音への、宇宙に響く神秘への憧れと探求に満ちた音楽」と云った評もある。どれも言葉（フレーズ）が大仰に過ぎるけれど、しかしいま録音に残る音を聴けば、その鮮烈さにはとても言葉では追いつけぬ。

そのドルフィーの「音」を、目の前のロボットは「生」で再現しつつあるわけで、これはもう凄いとしか評しようがない。「Take the A Train」の和声（コード）進行と4ビートのリズムのなかで、〈ドルフィー〉は奇矯とも云うべき逸脱を見せ、ほとんど無調に近い音列を繰り出しながら、しかし和声（コード）進行の綱（ロープ）をぎりぎり落下せずに渡って行く。CではじまりC_7で終わるAメロの一六小節、そこではほとんど調性が消失して、しかしBridge（サビ）のFで調性感が微かに回復されるのは、最初の一六小節をFに解決する属和音（ドミナントコード）と解釈しているからだろう。要はAメロで思い切り自由にテンションして、Bridge（サビ）で僅かに解決感が与えられる、その繰り返し。そうしたソリストのコンセプトを理解して、と云うより、音楽の磁力に軀が自然と引き寄せられるまま、フォギーもメンゲルベルクも和声（コード）の制約から逸脱して飛び回る。レニー・バレンシアもバスクラリネットの楽句（フレーズ）に煽られ、二拍四拍のハイハットのアクセントだけは崩さぬものの、平明な4ビートの確保（キープ）からは離脱してがんがん行きだす。こうなると演奏者（プレイヤー）がロボットだろうが猫だろうがバッタだろうがジャズ者には関係ない。ただただ音楽の詩神（ミューズ）に支配され、スイングの遊行神（ヘルメス）に翻弄されるばかりとなる。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

六コーラス目のBridge（サビ）が終わってAメロに戻ってまもなく、〈ドルフィー〉が僅かに瞼を開く形になって、黒眼鏡（サングラス）でフォギーを見た。ソロの受け渡しだ。そう知った瞬間のフォギーの気持ちは非常に複雑であった。まずは黒眼鏡（サングラス）で見られてぎょっとなった。眼は見えぬながら強烈な視線を感じてたじろいだ。なんだか怖くなり、同時にこんな合図まで送れるロボットの性能に感心し、ひょっとしたら人間がロボットのふりをしているだけじゃないのかとの疑惑が生まれ、たしかに指の関節の具合とか顔の皮膚のはり具合とか、どう見ても人にしか思えなくて、しかし、もし人じゃないとしたら、機械相手にこんなに本気を出している自分は間抜けかもしれぬと可笑しくなり、少し悲しくもなり、なにより機械なんかに負けてられるかと俄然気合いが入ってアツくなり、相手がロボットだろうが何だろうが出てきた音に反応してしまうジャズ者の魂全開となったのだから、総じて云えば複雑ではなく、むしろ単純なのでした。

バスクラリネットの最後の楽句（フレーズ）を受け取る形でフォギーはソロをとりはじめ、と、そのとき不意に思い出したことがある。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

17

と云うのは他でもない、「Take the A Train」のことだ。つまりロボットでない、本物のエリック・ドルフィーが演奏したこの曲の録音があるのを思い出したのだ。たしかチャールス・ミンガスと一緒に演奏したやつだったと、フォギーは記憶の引き出しを探ったのだけれど、彼女のうろ覚えの記憶を補完するならば、これは一九六四年三月、コーネル大学での、チャールス・ミンガス六重奏団（セクステット）の生録音（ライブレコーディング）だ。チャールス・ミンガス（1922〜1979）は、反人種差別運動家としても有名な、米国モダンジャズ運動（ムーヴメント）を代表するベース奏者にして作曲家。一九六〇年、三二歳のとき、エリック・ドルフィーはチャールス・ミンガスのグループに参加して、『Charles Mingus Presents Charles Mingus』などの名盤を残したが、その後グループから離れ、六四年にまた復帰する。コーネルのライブは、ドルフィーがミンガス御大の膝下に戻って間もなくの演奏で、直後にグループは欧州演奏旅行に向かい、ドルフィーはそのまま六月にベルリンで客死する。享年三六歳。

「Take the A Train」は一七分二六秒に及ぶ演奏で、ソロ回しでは、ジャキ・バイヤー

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ドのブギウギ風ピアノや、ミンガスの豪放なベースソロが聴ける名演であるが、まさしく真打ちと云う感じで最後に登場するドルフィーのバスクラリネットは、音楽を次元の異なる未知の場所へ運んでしまう。

ロボット〈ドルフィー〉がたったいま繰り広げた即興はおそらく、コーネルの録音の写し、そのものではないにしろ、写しに近い、写しを基に作られたラインに違いない。と、そのようにフォギーは推測し、少し安心した。あんな凄い楽句を機械にオリジナルで作られてはたまらん。などと考えたのは、しかしほんの一瞬、それも脳のごく片隅、フォギーの発火明滅するシナプス網が集中していたのは、いままさに進行中の音楽そのものであって、暴れ回る音楽の悍馬から振り落とされぬよう御しつつ、さらにいっそう疾走させるべく髪振り乱して奮闘する。

〈ドルフィー〉が作り出した音の流れに沿って、フォギーはいつになく動きの大きな楽句を繰り出し、三コーラス演って、しかしまだ足りぬ気がして、つまりこれではまだ〈ドルフィー〉を撃破できぬ気がして、さらに二コーラス演ったところで、ベースにソロを渡せば、メンゲルベルクは杭を打ち込むがごとき撥弦を基本にしながら、ときに左手が兎みたいに跳ね回る演奏を繰り広げ、続いてソロをとったレニー・バレンシアは、首と腕の刺青をレーザー光のように眩く輝かせ、全身を燃え上がるエメラルドに変えて躍動する。その間〈ドルフィー〉は、大概のフロントの管楽器奏者がそうするように、脇へ退き横向きに

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

立ったが、メンバーの演奏を聴くともなく聴く、俯き加減の佇まいは、演奏中よりむしろ人間臭くて存在感がある。

ドラムスソロは頂点まで駆け上って、いったん落としてさらにもう一度天辺を極めたところでブレイク、一呼吸置いて定型の4ビートのリズムが刻み出されたのは、イントロ楽句への誘導だ。ここから再度ピアノがイントロを弾いて主題を導き、一回やっておしまい、となる。きっかけを的確に摑んで、〈ドルフィー〉が主題を吹くべく、元の位置へ歩み戻る。それを見た瞬間、ちゃんと段取りが分かっているんだな、偉いもんだな、と感心する一方で、邪悪な考えが頭を過るのを覚えたフォギーは、裏切りの街角へ進んでイントロ楽句へは行かず、コードから完全に外れたソロを突然開始した。

しばらく4ビートを維持したバレンシアは、ピアノと気脈を通じコースを外れて定型リズムから逃れ出し、やがてフェルトスティックに持ち替えれば、曲調は「Take the A Train」とは似ても似つかぬ、墨絵風とでも云うべき幽玄な雰囲気へと変わって、ピアノが主導したこの新たな流れにメンゲルベルクは弓弾きでもって応じる。

問題は〈ドルフィー〉だ。さあ〈ドルフィー〉、君はどうする？ 人間のドルフィーならば当然ここは、低音のブロウで静かに入ってくるところだろう。あるいは、バスクラは脇へ置いて、フルートを吹き出すかもしれぬ。だが、〈ドルフィー〉は動かない。呼吸もやめてしまったみたいに、と云うか、そもそも呼吸はしていないわけだけれど、その場に

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

静止し続ける。
やっぱり無理なのか。ついてこられぬのか。しばらく待ってから、駄目だと判断したフォギーは、音楽の流れをいったん淀みへ引き込み、それから本流へ戻って「Take the A Train」のイントロ楽句（フレーズ）をはじめ、すると〈ドルフィー〉は、じっとしていた昆虫が急に動き出したみたいに動いて、バスクラリネットを構え、何事もなかったかのように主題（テーマ）を吹きはじめた。

　所詮は機械であるなと、安堵するような、残念なような気持ちでバッキングしつつ、律儀に旋律をたどる「男」の背中を眺めていたら、先刻、ピアノトリオが幽玄境で仲良く戯れていたとき、ひとり孤囚のごとく佇んでいた黒い背広の後姿が思い出されて、なんだか気の毒になってしまい、自分がひどく意地の悪い女だった気がして後味が悪く、ゴメンネ、ドルフィーくん、と心で呟きつつ、今度は定跡どおり、末尾でテンポを落とす定型的なエンディング楽句（フレーズ）へ進んで、これには〈ドルフィー〉もすんなりついてくる。

　やれ、よかった、と安堵したのも束の間、何を思ったか、レニー・バレンシアが突然ソロを叩き出したから慌てた。おぬし、なにをするのじゃ、殿中でござるぞ、と思う暇もなく、鉄鞭をふるうがごときスネアの短く鋭い打音に呼応して、〈ドルフィー〉がいきなりカデンツァ、すなわち無伴奏の即興ソロを吹き出したからさらに仰天した。

　あとで聞いたら、〈ドルフィー〉にもう少し行きたそうな気配があったので突っ込んで

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

みたと、パレンシアは告白したが、機械の「心」を読むとは、さすがは剣の道に通じる男だけのことはある。だてに『五輪書』を愛読しちゃいない。しかしとにかく驚いたのは〈ドルフィー〉のカデンツァだ。これも元祖ドルフィーが遺した録音のどれかを基に構成したものなんだろうが、いやあ、悪くない、と云うか、いい。バスクラの音色といいフレージングといい、つまりはドルフィーだ。まごうかたなきドルフィー節だ。それ以外に言葉がない。おお、凄エ、とまたフォギーが感心するうちにも、〈ドルフィー〉は次々と矯激にして豊かな楽句（フレーズ）を繰り出し、まもなく軀をやや斜めに向けると、楽器をくわえた顔を仰向け、上から下へ楽器をぐいんと振り下ろした。絵に描いたような終結の合図である。さすがにこれを裏切る不届き者はなく、ピアノトリオがバスクラと一緒にバーンとやって演奏は無事終了した。

いや、なんか妙に疲れたな、と考えたフォギーが、ふうう、と息を吐きつつハンケチで顔の汗を拭っていると、〈ドルフィー〉がくるりと真っすぐ後ろへ、つまりこちらへ軀を向けるのが見えた。曲が終わって、てっきり固着状態に戻ったとばかり思っていたので、なんだ、なんだと、一同が色めきたっていると、黒眼鏡（サングラス）の男は白い歯を見せ、君たち、なかなかよかったぜ、とでも云うかのように親指を立ててみせた。あ、どうもと、ロボットに向かってフォギーは思わずお辞儀をしていた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

18

四人でのセッションは小一時間ばかりで、ロボット〈ドルフィー〉がフルートとバスクラリネットを自ら抱えてスタジオから歩み去ったところで終了。室を出る間際、〈ドルフィー〉がまた歯を見せつつ親指を立てたので、今度はフォギーも笑顔で手を振り見送った。

演奏したのは全部で四曲。「Take the A Train」のあと、同じ曲をもう一度、今度は調(キー)をCからE♭に変えて。次に〈ドルフィー〉がフルートに持ち替えての「Don't Blame Me」。最後に同じくフルートで「Fly Me to the Moon」。いずれも山萩氏からの指示であるが、選曲の意図はフォギーにも察することができた。元の調(キー)から移調したとき〈ドルフィー〉がどう対応するのかは、たしかに興味のあるところで、人間フォギーにしても、ライブへ行って渡された譜面が慣れぬ調(キー)だと、やりにくいことは多々ある。ことに管楽器や歌の場合、音域の問題があるから、どの調(キー)で演るかは重大だ。E♭の「Take the A Train」の主題(テーマ)を〈ドルフィー〉は無難に吹いてみせた。が、即興(アドリブ)に入ってやや停滞した

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

のは、おそらくオリジナルCでの楽句（フレーズ）を機械的にE♭に移して吹こうとするため、音域や指使いに無理が生じたせいだと推測された。

フルート演奏の水準も興味のあるところだったが、音色は低音から高音まで雑音のないきれいな音色で、パワーもあり、まずは標準以上。楽器自体はムラマツの総銀製ハンドメイドとのことで、ちなみにバスクラリネットもクランポンの高級品。チャーリー・パーカーはプラスチックのサックスでもの凄い演奏をしたと云うけれど、やはり楽器は高級であればあるほどいいと云うのは動かしがたい真理だ。

「Don't Blame Me」は、〈ドルフィー〉が無伴奏でいきなりはじめ、彼の合図でトリオが加わる形のバラードだったが、フォギーが思わずのけぞるドルフィー節がまたもや全開。もっとも「Don't Blame Me」には元祖ドルフィーの名演がある。一九六四年、ベルリンで客死する直前、デンマークで地元演奏家（プレイヤー）と一緒に録音したもので、これはフォギーもよく知っている。〈ドルフィー〉の即興はほぼそれの写し（コピー）。いいはずである。

最後の「Fly Me to the Moon」は元祖ドルフィーに録音はないはずで、だから〈ドルフィー〉が写す（コピー）べきオリジナルは存在せず、その意味では最も注目された。フォギーは中庸テンポ（ミディアム）で主題（テーマ）のおしまい八小節をイントロ代わりに弾き、ほとんど「せーの」と云う感じにしたので、〈ドルフィー〉はきっかけを外すことなく主題（テーマ）を吹き出し、続けて四コーラスの即興（アドリブ）ソロをとった。これも中身は間違いなくドルフィー節。だが、「Don't

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

Blame Me」に較べると反復が多く、単調な印象は免れず。Schmutzigberg社の音楽ソフト『Bill Evans』がどんな曲でもビル・エヴァンス風にしてみせるのと同じく、何でもドルフィー風のフレージングで演奏するようになっているんだろうが、「創造性」と云うことになるとやはり難しいのかも、などとフォギーは考えたのだけれど、実のところ、人間フォギーの即興にしても、すでにある楽句を組み合わせているだけだと云えなくもなくて、どこに「創造性」があるの？ と正面から問われて、簡単には答えられないのでした。しかしとにかく、『Bill Evans』が単独で音を出すだけなのに対して、〈ドルフィー〉は人間と共演しうると云う、その一点において、次元の遥かに異なる性能を誇ることは疑えなかった。

〈ドルフィー〉がスタジオから去った後、三人の音楽家は同じ階にある会議室――大障子と恐竜の部屋ではなく、木の床に多彩な可変クッションを散らした、保育園の遊び部屋を想わせる部屋に席を移して、箱型の給仕ロボットからケーキと紅茶を供された。するとそこへ揃いのつなぎ作業服を着てぞろぞろやってきたのは、モリキテックの社員たちだ。女性二人を含む六人は〈ドルフィー〉の開発チームとのことで、はじめフォギーが妙な気分になったのは、彼らの着る水色の作業衣が架空墓の作業用分身と同じだったからだ。

音楽家たちを囲む形でクッションに座ったり凭れたりした彼らは、しかし間違いなく血の通った人間で、こんなふうにわいわい仕事をしている人たちがいたんだなと思うと、フ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

オギーはなんだかとても嬉しくなった。前回ここへ来たときも、山萩氏と仲間の音楽家以外はとんど生身の人間には会わなかったので、「白い巨人」の腹中にはロボットしかおらず、人はいても幽霊のごとき映像ばかり、と、そんなふうなイメージが抱かれていたせいか、フツーの人がフツーに仕事をしているのを知って、安堵する気持ちになったと云う次第。

開発チームも加わって紅茶を飲みケーキを食べながら、フォギーたちが色々と質問を受けたのは、先刻のセッションからロボットの改善すべき点を抽出しようと云うことらしい。〈ドルフィー〉がスタジオに入ってから出るまでの一部始終が克明にモニターされ記録されていたと聞いて、ええっ、だったら先に云ってよ、もう少しちゃんと化粧したのに、とフォギーは嘆じたが、もう遅いのでした。

それで話はやはり最初の「Take the A Train」、ピアノトリオが曲の構造から外れて〈ドルフィー〉が孤立した場面に集中し、あそこは絶対にバスクラが入ってくるべきだったとメンゲルベルクが云い、本物のドルフィーならフルートに持ち替えて吹いたかも、とフォギーが加えると、開発者たちは一様に落胆した顔になり、気の毒になったフォギーが、しかしエンディングでドラムスに反応してカデンツァを吹き出したところはスリリングだったと云うと、今度は六人揃ってぱっと顔を輝かせたのだから、わりと単純な人たちなのでした。もっともそのフォギーにしても、梨のタルトをもう一つどうかと勧められ

て、ぱっと顔を輝かせたのだから人のことは云えません。

　話しているうちに、フォギーたち三人はちょっと呼ばれて演奏しただけだけれど、〈ドルフィー〉の方はこれが「実戦デビュー」、我が子の発表会を観覧する親よろしく、開発者たちが固唾をのんでモニターを見詰めていたのが分かってきた。そこで根が気のいいフォギーは、「彼」の演奏に刺激を受けてこっちもけっこう本気になったこと、つまり「彼」はゲスト演奏家（プレイヤー）の役割を十分に果たしたことを、いくぶん割り増し気味に伝えて開発者らの労に報いた。人種年齢性別まちまちの六人は嬉しそうに頷き、紅茶で乾杯して慎ましく喜びを表現した。

　お茶会兼モニタリングは一時間ほどで終了。開発者チームはどこぞへ去り、メンゲルベルクとバレンシアもニューヨークで仕事があると云うので慌て気味に帰って、フォギー一人が山荻氏に請われて居残ることになったのであるが、そこでいよいよフォギーは『大正池』で予告のあった贈り物（プレゼント）、彼女の運命の糸を解きほぐしがたいまでに絡ませることになる贈り物（プレゼント）——それも二つ——を貰うことになったのである。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

19

贈り物の一つは他でもない、先刻の演奏ロボット〈ドルフィー〉だ。あれをくれると云うのだから、ええぇっ、とフォギーの声が裏返ったのは無理もない。そもそも贈り物の語が正しいのか、この際は疑問だが、〈ドルフィー〉をフォギーに預けたいと山荻氏が云い出したのは本当だ。あんなの貰っても困るし、朝起きて黒眼鏡の人がバスクラ抱えて家をうろついていたら驚くぞ、と考えたフォギーが鄭重にお断り申し上げようとしたところ、〈ドルフィー〉は「アケタの店」に置いて欲しいので、兼子ジェルニにはもう話はつけてあると山荻氏が続けるのを聞いて、フォギーもまずは納得した。

「アケタの店」は調布にあるジャズハウス。もともとはフォギーの母方の大伯父が持っていた店で、五年ほど前に大伯父が大病した際、フォギーに経営を引き継がないかと話があった。店を切り回していたのは雇われ店長の兼子ジェルニ。フォギーとは保育園同級の幼なじみ、兼子ジェルニは店を続けて欲しいと懇望したが、自分の財布さえ満足に切り盛りできぬのに店の経営なんてとてもとてもと、フォギーが尻込みしていたところ、話を聞い

た山荻氏がオーナーになってくれた経緯がある。

「アケタの店」は前世紀、一九七四年開店の、かつて西荻窪にあった老舗ジャズハウス。盛地下の小さな店だったが、山下洋輔、古澤良治郎をはじめ錚々たる音楽家（ミュージシャン）が出演した、期日本フリージャズのメッカだったと云うから由緒は正しい。もっとも最初の店（オリジナル）は駅周辺の再開発で消えて、誰かが名跡を継いで別の場所で店をはじめ、その後もいろいろあった末、本業は建築家の大伯父が半ば道楽で経営することになったとフォギーは聞いている。つまりは大伯父もまたモダンジャズ大好き人間、フォギーが若年にしてジャズに関心を持つに至ったのは、現在はサイパンの医療介護施設に居るこの大伯父の影響がじつは大きいのでした。

いまの「アケタの店」は、都心とYokota国際空港（インターナショナルエアポート）を結ぶ京王空港線の、賢藻スタジアム前駅の高架通路（プラットフォーム）に繋がる集合店舗（テラスハウス）の三階にあって、詰めれば五〇人ほどが座れる広さがある。一角にドラムセットとグランドピアノが置かれ、週末には定期で、週日は不定期で生演奏（ライブ）がある。この手の店ではホログラム映写装置での「演奏」が行われることが多いが、「アケタの店」はあくまで生身（リアル）志向。昔ながらの生演奏（ライブ）が聴けるのが売り。酒のほかにサモサやらチリコンカンやら洋風湯豆腐やら、料理メニューも豊富。これはひとえにニューオリンズの老舗ゲイレストランで修業した兼子ジェルニの才覚ゆえ、まずまず潰れない程度に客は入っている。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

山荻氏は一切口を出さない。ぜんぶ兼子ジェルニとフォギーに任されていて、と云ってもフォギーがやっているのは、出演音楽家（ミュージシャン）のブッキングくらい。それもアルバイト店員兼用心棒のキースこと山花勢衛門にほとんど任せていて、たまに助言をしたり、これでいいですか？　と訊かれて、いいんじゃないかな、と頷く程度。もちろんときには自分も出演する。前にフォギーが東京に棲む必要があると述べたのは、この「アケタの店」のことがあったわけです。

〈ドルフィー〉を「アケタの店」に置く。オーナーの意向とあれば否も応もない。まして店長兼子ジェルニは大歓迎と云っている、と聞かされてはフォギーが首を横へ振る余地はない。〈ドルフィー〉には、当然ながら、自働学習プログラムが組み込まれていて、現実（リアル）のジャズハウスの空気に触れつつ生演奏（ライブ）を視聴し、かつときに実演することで、性能の向上洗練が期待されるのであると山荻氏は解説した。

「フレージングそのものは電脳（コンピューター）内でシミュレーションを繰り返すことで学習できますが、実際に人とセッションしたり、楽器で音を出すところは人間同様、実践で鍛えるしかないんです。つまりは武者修行と云いますか、彼をフォギーさんの弟子にしてやって欲しいわけです」と云われて、フォギーは頷いたものの、戸惑いを隠せぬのは無理もない。弟子と云われたって、そもそもどうやって動かせばいいのか。どこぞにスイッチがあったりするんだろうか。AIロボットである以上、自分のことは自分でやるんだろうが、果たしてこ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

っちの云うことをちゃんと聞くのか。それこそ学習を重ねて、我こそは稀代の天才エリック・ドルフィーなりと自覚を遂げ、増長したあげく、フォギーのごとき凡骨には洟（はな）も引っ掛けなくなった場合はどうしたらいいのか。「君ってターへ（下手）だね」などと云い出したらどうする。と云うのは考え過ぎにしても、だいたいフォギーは〈ドルフィー〉がどんな力で動いているのか、さすがにゴムじゃないだろうと分かる程度で、何も知らないのだ。そのことをフォギーが云うと、３Ｄ姿に戻って傍らに立つ山萩氏が、その点なら心配には及びませんと応じ、同時に脇の扉がすいと開いた。

入来した水色つなぎ服は先刻の開発チームの一人、一〇歳台とも見える若い東洋人女性。小柄短髪色白の、なかなか可愛い娘で、でもじつは自分より年上だったりして、などとさっきは考えたのだけれど、このたびは東洋娘の年齢問題にフォギーの注意は向かわなかった。それと云うのも、彼女の作業衣の腕に一匹の猫が抱えられていたからだ。

20

猫は尻尾のか細い子猫で、世の中子猫以上に可愛らしい存在はなく、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「あなたは、かわいい！」けっこう有能で目的にも飛び出るみたいなのだけれど、

その妙な納得の仕方には理由がある。

日本に帰る前、卵の検疫がたいへんだった。うちの家みたいになった子猫は、間違いない。ドルフィーはやってきた。人伯父が育って以来、九年。留学の一年間を除きずっとドルフィーは一緒に暮らしてきた。兄弟姉妹のないフィヤーにとっては大切な家族だった愛猫だ。ドルフィーが死んだのは、その年の、フィヤーは悲嘆に暮れ、淋しさのあまり遺品を求め、ペット店のサイトを覗いたりしたのだけれど、ここはひとつドルフィーに義理立てしようと決意した。というのは、嘘ではないけれど、その頃には祖父母が家を去り、フィヤーも母親も留守がちだったから、ペットを飼いにくい事情があったというのが本当のところだ。ペットのお世話ロボットは各種あって、留守にできぬのではないけれど、猫は寂しがり屋だから、独りで置くのは可哀想だと考えた。それからは「龍」の2Dドルフィーで我慢していまに至る。

ドルフィーの名前は大伯父がつけたもの。思えば、猫の名がドルフィーだったことが、後年フィヤーがドルフィーのサンジャスに手を染めるに至った遠因と言えなくもない。少なくともエリック・ドルフィーに興味を持ったきっかけはそれ。録音を集めて聴いたり評伝を読んだりしているうちにすっかり好きになったという次第。その猫のドルフィーが目の前で、夢でも幻でもなく、無重力機内に照らされているではないか。

作業衣の女性から子猫を渡され腕に抱いたフォギーは、喉の毛を撫でてやりながら、毛衣の模様をたしかめた。愛猫ドルフィーの黒斑は背中方面に集中して、腹や肢は真綿のごとく真白いなか、右の前肢だけ半ばから先が黒かった。これは古い映画などで見かける、事務員がする腕覆い(カヴァー)を思わせるものがあり、七三分けの「髪」とあいまって役場職員ふうの佇(たたず)まいを猫に与えていた。長じるに及んでドルフィーがウスラ間抜けの駄目系猫だと判明し、役場職員には、縁故採用の、と云う形容詞が付されるようにもなった。フォギーと母親はドルフィーを、事務員くんだとか、係長さんだとか、ふざけて呼んでいたのだが、いま腕に抱いた猫がまさしくそれに違いない。

ドルフィー？　とフォギーが呟くと、傍らに立った3D山萩氏が笑いながら、これが本当のプレゼントです、と云い、そこではじめてフォギーは、腕のなかのものがロボットだと気がついた、と云うか、その可能性に思い至った。けれども手に伝わる感触、むくむくする毛や、ふにふに柔らかい軀の手触りは子猫そのものだ。世間にペットロボットはごまんと出回っていて、フォギーも触れたことは何度もあるけれど、ここまで子猫の質感や動きを再現したものははじめてだ。

「フォギーさんの作ったお墓の映像から再現したんです。気に入っていただけるといいんですが」

山萩氏にそう念を押されては、気に入らないと云えるわけがない。もちろんフォギーは

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

すでに、いっぱしに髭を生やして、やんちゃな顔でミィミィ鳴きながら腕から逃れようともがく子猫が愛しくて堪らなくなってはいた。子猫の魔力に魅入られ魂を奪われた状態にあった。けれども、もう一つの〈ドルフィー〉同様、これも扱いにやや不安がある。そのあたりを察したのか、山萩氏が、猫のドルフィーの動力は昔ながらのペットロボットと基本は同じ、太陽光発電機能が備わっており、それで足りぬ場合には市販の小型バッテリー（煮干し型とジャーキー型があり）を食べさせ、充電が終わると猫はバッテリーを決められた場所に「排泄」する、だから全然手はかからないと説明した。するとこれを受けて、猫を抱いてきた娘が言葉を添えた。

「猫のAIにアクセスしてコマンドすれば、可動域が設定可能。そこから外へ猫はでない。故障の場合には、自分からモリキテックの管理サーヴィスに連絡します。あ、けれど、もし本物の皿を食べたりトイレをしたりするようにしたい場合は、そういうふうにヴァージョン・チェンジもできちゃいます」

そうすることでより猫らしく思えると云うことなんだろうが、ロボットを無理に生きた猫だと思っても仕方がない。猫は猫、ロボットはロボットなのであって、子猫はつまり玩具であり、だからあくまで玩具として、子供の頃にぬいぐるみ人形を可愛がったように可愛がればいいのだと、フォギーはすでに判断していたのだけれど、それにしても腕のなかの子猫は愛らし過ぎ、かえって不吉な気がしたのは、以後の出来事の展開を考えた場合、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

フォギーにしては珍しく悪くない勘なのでした。

ところでドルフィーを連れてきた娘は何者かと云えば、王花琳(ワンファリン)と云う名の、上海広州連合共和国出身の技術者だと、山萩氏から紹介があった。実年齢もすぐに明かされて、二〇歳(!)と云うから、見た目どおりに若く、その歳でモリキテックの技術者とは、超優秀なんだろうな、と思ってそっと訊けば、一一歳でオックスフォードに入学したと云うからまずは折り紙付きの天才と呼んで差し支えない。さらなる山萩氏の言葉によれば、わりに濃い眉毛の下の切れ長の眼を、それこそ月夜に遊ぶ猫みたいに光らせた娘は、専門の電子工学の他に、数学の博士号を持ち、語学も英語、広東語のほか五ヵ国語ができて、日本語はモリキテックで働くことが決まってから二週間で習得(マスター)したと云うから途轍(とてつ)もない。もっともいまどきは翻訳ソフト通訳ソフトの性能が素晴らしいから、外国語能力は一般には要求されない。侵襲式の端末を使えばまるで知らぬ外国語でも即座に理解できると云うし、フォギーの使う旧式のソフト程度でも、九二の言語について相手の台詞を英語や日本語で字幕表示する。したがって王花琳の語学習得は半ば趣味らしい。これは後で聞いたのだけれど、ドイツ語をはじめてから一週間で、ヴィットゲンシュタインと云う哲学者の著作を原語で読み、知的興奮を覚えちゃいましたと告白したから、フォギーのごとき凡人には何がどうなっているんだか見当がつきません。

「花琳がドルフィーと一緒についていきます」と山萩氏が云うので、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「ドルフィーと、ですか？」とフォギーが子猫に視線をやりつつ驚きを表明すれば、
「あ、いや、猫の方ではなくて、ジャズプレーヤーのドルフィーの方です」と応じた山荻氏は、王花琳が〈ドルフィー〉の世話掛かりとして「アケタの店」から遠くない所に住んで、調整操作等一切を担当する予定だと説明した。
「彼女にぜんぶ任せておけば大丈夫です。フォギーさんには、合間をみて彼にレッスンをつけてやって貰えたら、嬉しいのですが」
それならなんとかなるかもと、フォギーがやや面食らいつつ頷けば、王花琳が左頬にえくぼを穿ちつつ手を差し出し、いくぶん中国語訛の混ざる日本語で云った。
「よろしく、お願いします、先生（シィエンション）」

21

帰りは山荻氏が自働車まで送ってくれた。音楽家（ミュージシャン）〈ドルフィー〉の方はともかく、猫のドルフィーは是非とも一緒に連れて帰りたかったのだけれど、国境を越えたロボットの持ち出し持ち込み、および飛行機への積載には煩雑な手続きが必要なため、後日〈ドルフィ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ー〉と一緒に送られる手筈であった。王花琳はそのとき一緒に日本へ来るとも聞いた。

帰るべき時刻になり、3D山萩氏と一緒に小会議室から出て、音もなく歩む映像と並んで廊下を進み、あるいは昇降機（エレベーター）を乗り降りするフォギーがこのとき、なにか身の置きどころのない、落ち着かぬ気分でいたのは、子猫ロボットを王花琳が連れ去ったのが淋しかったから、ではない。ましてや黒眼鏡（サングラス）の〈ドルフィー〉が恋しいからであるはずもない。原因は他でもない、隣にいる「人物」だ。つまりは山萩氏の口から別れの挨拶が飛び出すのではないか、との、確度の高い予感に捉えられていたせいである。むろんこの場合の別れとは尋常の別れではない。今生の別れの意味だ。

山萩氏の「墓入り」近しの感触は、昨夜の『大正池』でも得られたのだけれど、ここへきてそれが急激に一個の確信にまで結晶したのは、映像にもかかわらず、眉宇のあたりにもの云いたげな気配を溜めたと見える山萩氏の佇まいもあったが、猫のドルフィーのあと、さらにもう一つ、山萩氏がつけてくれた贈り物（プレゼント）の「おまけ」のせいが大きい。

何かと云えば、山萩氏の千駄木の自宅だ。家をくれたわけではない（あたり前だ）。あの家は今後記念館として保存し、モリキテック関連の財団が管理することになるのだが、ついてはあそこへ自由に出入りしてよろしいと、お墨付きを貰ったのである。地下ホールにあるベヒシュタインの素晴らしい音色についてフォギーが話した流れでそう云う展開になったのだけれど、特別研究員の資格で生体認証鍵（バイオメトリクキー）が開くようにしておくと山萩氏が云っ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

てくれたのは、フォギーには望外の喜びであった。閉館中や使用中でない限り、いつでも好きなときにあの美しいピアノに触れられるのだ。そればかりではない。千駄木の家には、塩化ビニール製レコード盤の膨大な蒐集があり、ミステリやSFを中心にした稀覯本を含む蔵書があり、大量の漫画本と、楳図かずおとか大友克洋と云った有名作家の原稿やアニメーション原画の蒐集もある。つまりは宝の山。宝を勝手に持ち出すことはむろんできないけれど、宝の山の前に佇み、二十世紀文化の霊気を浴びるだけでフォギーは魂に漲るものがあるのです。

「おまけ」を貰った瞬間は、フォギーはもう嬉しくてたまらず、今週の水瓶座の運勢は最強、と宣託した世良ミンドの占いはやっぱりあたるもんだな、と感心しきりだったのだけれど、少し考えたら、自宅を手放すと云うことは、いよいよこの世に別離を告げる時がきたからだと考えざるを得ず、とたんに胸がギクシャク固くなって、山萩氏と二人きりで居るのが気詰まりになってきた。ちなみに世良ミンドは誰かと云えば、フォギーの友達のジャズ歌手。副業（と云うかほぼ本業）で占いをやるが、自分では一つも占わず、世界中で発信されるあらゆる種類の占いを集計して結論を出す、確率統計占いなる新手法でもって占い界に君臨する怪しい女です。

永訣の辞を個人的になぞらえられるほど自分は山萩氏と近しくないし、とてもその重みには耐えきれませんと、フォギーは完全に腰がひけた。ひけたあげく冬場のカナブンみたいな

ヘコヘコ歩きとなった。これは一つには、連日のように戦争や疫病で多勢の人間が死んだとのニュースを目にする一方で、身近な人の死には慣れておらぬせいで、そもそもがしみじみしたり深刻だったりする場面がフォギーは人一倍苦手なのです。そこでフォギーは、「山田風太郎忍法帖に登場する驚くべき忍法」および「来月北京で開催される、コオロギ相撲の王者vs.スーパー・オケラの異種格闘技戦」と云う二つの話題を持ち出し、蕭寥たる空気が立ちこめぬよう途切れず言葉を繰り出したのは、いくらなんでも唐突では、と思うかもしれないけれど、フォギーのなかではいちおうの脈絡はあるので、すなわち、山田風太郎（1922〜2001）は『甲賀忍法帖』など忍法帖シリーズを含む多くの作品を残した二十世紀娯楽小説を代表する日本語作家であるが、山萩氏は山田風太郎をはじめとする忍者小説、忍者漫画、忍者アニメ好きが集う世界規模の親睦団体「Tokyo Ninjya Club」の代表を一時期務め、また二〇年ほど昔に日本でコオロギ相撲が大流行したとき、火付け役の一人が山萩氏だったのをフォギーは知っていたから、これら話題選択は彼女なりの苦心の結果なのでした。

　で、そうやって自働車の置かれた区画までくると、先刻は太古の森だったものが、夜景の奇麗な丘陵に変わっている。空は満天の星、堂々輝くオリオン座が夜闇を飾る。左手の黒い森の上空に浮かぶのは、硝子細工めいて鋭利に蒼い三日月。崖下には黒天鵞絨に真珠を散らしたかのごとき街灯りが望まれ、崖際の見事な枝振りの海棠が光の雫とも疑われる

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

花弁をちらほらと散らす。

この雰囲気下では「吸血くの一のエロ絶技」の話はしにくい。「ホルモン強化されたオケラは関節技が得意らしい」と云うのも無理だ。やむを得ず、ここは？　と問えば、ここは六甲山、街灯りは神戸だと山萩氏は教え、神戸には祖母の実家があって、子供時分、夏休みなどによく遊びに行ったものだと、説明する声には明らかに郷愁の甘き調べがあって、こりゃまずい、しみじみがきちゃうぞ、と焦ったフォギーは、ここは一番、「吸血くの一」を無理矢理突っ込んでいくしかないかと思ったものの、ひとつフォギーさんにお願いがあるんです、と先に山萩氏が、いくぶん改まるふうに口を開いて、フォギーは観念した。なんでしょう？　と平静を装いつつ問えば、山萩氏はするりと応じる。

「僕の葬式で、ピアノを弾いて頂きたいんです」

と、コウ直截に云い出されては、もはや「吸血くの一」は絶対に不可能なのでした。「スーパー・オケラ」も論外。とうとうフォギーは諦め、満開の海棠の傍らで、神戸の街灯りを見下ろしつつ、隣に立つ縞のスーツを着た「人」の言葉を謹聴する態勢をとった。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

22

「葬式と云っても、ものものしくやるつもりはなくてね、ごく親しい人だけを呼ぶつもりなんですが、リアルに来てもらうのも大変だから、墓でやろうと思っているんです」

葬式はいわゆる生前葬と云うやつで、架空墓(ヴァーチャルトゥーム)に会葬者が分身(アヴァター)を使って参集する、そう云うスタイルらしいとフォギーは理解した。しかし、となると、ピアノを弾くとはどういうことなんだろう？　浮かび出た疑問へはすぐに答えが与えられた。

「葬式では、貴女にピアノを弾いてもらって、僕が挨拶します。ピアノは、いま製作中です」

「ピアノを作っているんですか？」やや驚いてフォギーが問えば、頬の皺を深くして笑った山萩氏は、ええ、と頷いてみせた。

「貴女の好きなベヒシュタイン。あれをヴァーチャルで再現します」

「じゃ、私は分身(アヴァター)で弾く？」

「そうです」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「そんなこと、でも、できるんですか？」
「むろん、できます」
理論上できることはフォギーにも分かる。しかし実際に弾けるピアノを架空環境(ヴァーチャルスペース)に作るとなると、費用も労力も莫大なはずだ。だいいちそんな話はいままで聞いていない。
「全然知りませんでした」フォギーが云うと、
「ちょっとサプライズで、と思いましてね。貴女には内緒にしていたんです」と山荻氏はまた笑ってみせた。
「しかし、やや急ぐ必要がありましてね。もうまもなく完成するようだから、出来上がり次第、葬式にしたいと思っている」
山荻氏は海棠へ眼を遣った。しかしこれは驚くほどの大樹である。まあ映像だからいくらでも大きくできるわけだけれど、白い火焔を纏った神像が闇の奥から迫り出してくるようだ。
「葬式を終えたら、僕は消えます」
消える。言葉の意味をフォギーは探った。消える、とは、つまりどう云うことか？　忙しく考えるうちに質問がきた。
「いま僕がどんな状態にあるか知っていますか？　リアルな僕と云う意味ですが」
分からないと云う印にフォギーが僅かに首を横へ振ると、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「僕はもう半分死んでいるんです。生命維持装置に繋がれて無理に生かされているにすぎない」と云った山萩氏は、小脳をはじめ脳の多くの部分がすでに回復不能なまでに壊死していて、ただ大脳だけはかろうじて生きているので、侵襲式の神経接合端末で電脳空間（サイバースペース）とこうして繋がっていられるのだと解説した。

どうして今日の山萩氏が3D映像なのかはこれではっきりした。フォギーもすでに、あるいはそんなこともしらんと想像してはいたのだけれど、いまこうして横に立つ「人物」を見れば、管（チューブ）やら電線（ケーブル）やらに繋がれ集中治療室（ICU）に横たわる姿は想像しにくい。フォギーが山萩氏とはじめて出会ったのが一〇年前、考えてみれば、生身（リアル）の山萩氏と会った機会は数えるほどしかない。一番最後がここ——モリキテックのケープタウン研究所で二年前に会った。あのときはフルマラソンでも走れそうなくらい元気だったとフォギーが云うと、山萩氏は笑って、身体はいくらでも代替えが利くが、脳はそうはいかないと云って、しばらく前に多発性硬化症に罹り、なんとか誤魔化し誤魔化しやってきたのだが、今春にウイルス性腸炎を患ったのをきっかけに脳組織がみるみる壊れ出したのだと説明した。

「まあ寿命と云うことです。いまの状態だっていつまで保つか分からない。ほとんど薬漬けみたいにして脳を生かしているわけですからね」

「あれはどうなんですか。全脳送信と云うのは？」

フォギーは自分で口にしてたちまち狼狽した。生身の身体を離れてデジタル人格として

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

生き続ける。生首の冷凍保存もそうだが、この種の技術には、少なくともフォギーの世代の人間にはグロテスクな印象があり、あからさまに口に出すことが憚られる感じがある。人間の尊厳を傷付ける、といったふうな。しかし山萩氏はそれが当然の話題であるかのように返事を寄越した。

「首だけですか。あれは駄目ですね。僕のところでも研究は進めていますが、なかなかうまくいかない。いずれは実現するんでしょうが」

しかし自分は間に合わない、と、諦める調子も残念がる様子もとくになく、山萩氏は笑いを含んだ声で続けた。

「最初は僕もそういうことを考えていたんです。貴女にも手伝っていただいたあの墓、あそこにしばらく住んでみようかと。いまだって不十分な形でなら、それはできなくはない。しかし実際に墓ができあがってみたら、そんなことをしても仕方がないと思えてきましてね」

空に星が流れた。流星の火が消滅し尽くすのを待つようにして、山萩氏は語を継いだ。

「かりに僕の記憶や知識が完璧に電脳内に再現できたとして、いまの私と、電脳のなかの私。それらは同じ私じゃないでしょう。考えたらあたりまえのことです」

山萩氏はくくと喉を小さく震わせて笑い、同意を促すようにフォギーを見た。映像の山萩氏はあくまでお洒落で、やや浅黒い顔の、人懐っこい笑顔は魅力的だ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「僕は墓には残らないつもりです。AI制御された贋物の自分がうろうろしているなんて馬鹿みたいですからね。もちろん墓にはみなさんに来ていただきたい。だからあれはあれでいいものにしたいんです。この辺りが僕のマニアックなところなんでしょうね。とりあえずマニアの一大集成としてあの墓を遺そうかと」と続けた山萩氏は、墓参者に純粋に楽しんでもらえるような場所にぜひしたいのだと語り、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）は今後も財団――「モリキテック・ヤマハギ記念財団（メモリアルファウンデーション）」の手で建設が継続される予定で、しかし自分は完全に消えるつもりである点を再度強調した。

たしかに架空墓（ヴァーチャルトゥーム）のなかの「故人」は、動く人形、一種の玩具にすぎない。馬鹿馬鹿しいと思う気持ちはよく分かる。要するに山萩氏は、長らく人類がそうしてきたように、あたりまえの死と葬送を選んだのであると、フォギーは共感的に理解した。

「それで、僕の葬式、と云いますか、お別れの会と呼ぶのが正確かもしれないが、そこで『Farewell to Papageno』を弾いて欲しいんです」

「Farewell to Papageno」。訳せば「さよならパパゲーノ」は、先代フォギーこと池永（いけなが）霧子（きりこ）が作った曲だ。曾祖母である池永霧子の音楽活動については、当然ながらフォギーは大いなる関心を抱き、もっとも池永霧子の録音は例の「大感染（パンデミック）」で大半が失われてしまい、CDも散逸したり腐食したりで（レコード盤の方が長く生き延びたのはアナログ派のささやかな勝利なのでした）、聴けるものは僅かだったけれど、ビ・バップのスタイルを

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

基本にした、鯔背でイキのいい、それでいて歌心溢れるピアノで、なかなかヤルな、と感心したことが、二代目フォギーを襲名（？）してもいいと思うきっかけにもなった。池水露子のオリジナル曲も二、三見つかって、「Farewell to Papageno」はその一つ。パパゲーノと云うのは彼女が飼っていた猫の名前らしいが、素朴で可愛らしい、でも、少しだけ哀愁のある旋律が心地よく、生演奏でよく弾いている。山萩氏が気に入ってくれているのもフォギーは知っていた。

「フォギーさんがベヒシュタインで『Farewell to Papageno』を弾きます。すると川が出現する。そこへ舟が流れてくる。僕が乗り込む。川は三途の川と云うか、ギリシア神話ならアケロン川と云うわけですね。ピアノの響くなか、参会のみなさんに見送られ、舟は遠ざかり、やがて消える。そんなふうな演出を考えているんです」

素敵ですね、と云った間の手や、ピアノは私なんかでいいんですか、と云った謙遜の文句が浮かんだが、ここはおざなりなことは口にできぬ気がして、

「大役ですけど、やらせて頂きます」とだけフォギーが云ったそのとき、六甲の空にまた星が一つ飛んだ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

23

南アフリカ現地時間(ローカルタイム) p.m.8:25。定時に離陸したNarita国際空港(インターナショナルエアポート)行き超音速ジェット機の多糖ゲル座席(PGシート)にフォギーは身を沈めていた。

フォギーがモリキテックの研究所を出たのがp.m.6:50。空腹感はあるようなないような、けれども定時になればきちんきちんと食事を摂る習慣がフォギーにはある。遅く起きて一一時に朝食を食べながら、午は午でまた食事を摂る姿がしばしば目撃され、驚くべき人間であるとの評判を各方面から得てきた。と云う次第で、夕食を摂らんと欲したフォギーは、出がけに計画した上海蟹の中華店を考えたが、葬式の話を聞いた後ではなんとなく気が乗らず、独りじゃ詰まらないしな、とも思い、しかしケープタウンに来る機会は今後そうはないだろうと思い直せば、せっかくだから、との情念が湧き起こり、結局は予約を入れることにしたあたり、堅忍不抜(けんにんふばつ)の精神の持ち主と評価してよいと思います。この「せっかくだから」は、フォギーの行動を律する主導原理の一つ。せっかくだから○○しよう、と云う文句(フレーズ)はフォギーの口からしばしば漏れる。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ところがである。好事魔多し。めあての中華店は定休日。だったら補欠の天然クロマグロだ、と思ったら、禁漁の蝦を闇で仕入れたカドで営業停止になったと云うから間が悪い。嗚呼、天は我を見放したり、とフォギーは嘆息したけれど、逆に諦めはついて、空港へ向かう途中、ドライブスルーの「セブン－イレブン」に寄ってチキンサンドとヨーグルトドリンクを夕食に買ったのは、蟹から較べるとだいぶ侘しいが、そもそもあれだけたくさんのお土産を貰っておきながら、かてて加えて蟹だマグロだと騒ぐのは罰当たりと云うもの。蟹およびマグロになおも拘泥する食欲には自粛を求めた。

民話の舌切り雀に喩えるなら（べつに喩えなくてもいいけど）、御土産に小さい葛籠を貰った良いお爺さん、それが自分であるとフォギーは捉えていて、つまりは葛籠を開けたら小判がざっくざっく状態。だが、ここであえて蟹にまで踏み込んだ場合、葛籠は大きめとなり、自分が悪いお婆さん寄りになってしまう懸念を抱いたわけである。じつのところ、フォギーの貰った葛籠は桁外れに大きかったことが後に判明するのだが、そんなこととはつゆ知らぬフォギーは、空港に向かってとろとろ走る車のなかでチキンサンドをもさもさと食べ、あ、これ、おいしい！　と独り嘆声をあげたりしていたのだから呑気です。

多糖ゲル座席に横向きに埋まる格好になって、フォギーは少し眠ろうとした。が、すぐには眠れず、入眠剤の力を借りようかとも思ったが、フォギーが旅に持参する薬は、普段使いのとは違い、個人遺伝子に応じた注文処方薬、電撃的に効く代わりに値が張る。なの

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

で、麦はやめにして、麦酒を注文した。なかの液体の温度が自在に調節できる変温グラスに注がれた麦酒を飲みながら、フォギーは先刻のモリキテックでの出来事をぼんやり反芻した。いろいろとあったけれど、やはり思考が向かう先は山荻氏の葬式だ。全脳送信は準備はしていたがやらないと山荻氏は云っていた。平凡な死を選ぶ、その判断は温厚謙良にして理知にあふれる山荻氏に相応しく思え、大いに共感しながら、ちょっともったいない気もした。不十分な形にせよ全脳送信ができなくもないのなら、せっかく、あそこまで架空墓を整備したことだし、試しに住んでみるのもありなのではないか。せっかくだから少しのあいだでも住んだらどうか。と、ついつい「せっかく主義」に傾いてしまうのは、根が貧乏性だからなのかな、と自問したフォギーはなおも思案する。

電脳内の「私」は生身の「私」とは全然別物。山荻氏はそう断じた。その辺り、フォギーにはもう一つぴんとこない。よく分からないと云うのが正直なところ。たとえば意識を情報のまとまりと考えるならば（そう考えて悪い理由は見当たらぬ）、分身を使い慣れた身には、生身と架空の間に大差があるとは思えぬ。もし「私」がまるごと電脳内に入った場合、いまの「私」がそのまま切れ目なくデジタルの「私」に続いて行く気がする。この問題に関しては様々な議論が昔からあって、たとえば全脳送信で「私」を電脳内に作るとして、それを複数作ったらどうなるのか。ヴァージョンA、ヴァージョンB、ヴァージョンC……の「私」が全部同じ「私」だと云えるか。生身の「私」との

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

連続性というか、それはどの「私」と連続しているのか。AなのかBなのかCなのか、それともそれら全部となのか。と、こう迫られると、なるほどそれはそうだなとも思えてきて、となると「私」が連続するとは一体何を指すのか、いや、そもそも「私」とは何なのか、という話になってきて、一介のバンドマンにすぎないフォギーの手にはとても負えません。

しかしまあ、フォギーが考えることではないと云えばない。問題は葬式だ。ピアノを聴きながら消えて行く。消える、とは、全体どう云う意味なのか。山萩氏は舟で川を流れて消えて行くと云っていた。舟に乗って消えるのはもちろん山萩氏の分身、だとしたら本体には関係ないわけだけれど、山萩氏の言葉には本体も一緒に「消え」て行くとのニュアンスがあったと思える。だとしたら分身が消えるのと同時に生命維持装置が外されるんだろうか。なるほどそれならピアノを聴きながら死を迎えると云うことにはなるだろう。これがよい趣向かどうかはともかく、ピアノを弾くのが、しかしどうして自分なのか。超のつく一流ピアニストなら世にごまんといる。しかも曲が「Farewell to Papageno」。あれはたしかに佳曲だけれど、葬送にふさわしい曲はほかにいくらでもあるはずだ。

と、そこまで思考を進めれば、以前から薄々感じられていた憶測が前面に迫り出してくるのを避けられぬわけで、つまりは山萩氏と先代フォギー、池永霧子の間になにかしらの「関係」があったとの憶測である。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「大感染(パンデミック)」のとき事故で亡くなった池永霧子と山萩氏は同年代。若い頃に池永霧子の演奏を何度か聴いたことがある、くらいにしか山萩氏は云わないけれど、演奏家(プレイヤー)と聴衆(ファン)の間柄を超えた「交流」があったのではあるまいか。と云うのは、あくまで仮説にすぎず、格別根拠はない。根拠はないけれども、フォギーの必ずしも鋭くない「女の勘」が囁きかけてくるものがあり、少なくとも山萩氏がどうして自分にこうも親切にしてくれるのか、それについてはこの仮説がうまく説明してくれる感じがある。そこへもってきて葬式の「Farewell to Papageno」だ。かつての恋人との思い出の曲を、恋人の曾孫が弾くのを聴きつつこの世から去る——と云うのは、ロマンチックと云えばロマンチック、俗臭芬々(ふんぷん)と云えば俗臭芬々と、フォギーの趣味からするとなってしまうのだけれど、葬式が一世一代のイベントであることを勘案すれば、まあ許容の範囲内だとは云える。

二人がどんな「関係」にあったか、それは脇へおくにしても、山萩氏が池永霧子のピアノを愛していたことだけは疑えなかった。「大感染(パンデミック)」で失われた池永霧子の音楽を甦らせることに山萩氏は熱心で、散逸した録音やら何やらをいまなお探し続けているのをフォギーは知っている。先刻の帰り際にも、自働車に乗り込んだフォギーに、「例のフォギーズ・ムードのことなんですが」と山萩氏が声をかけてきた。

一瞬間は何のことだか分からなかったけれど、「録音は発見できていないんですが、譜面が手に入ったんです」と云われて、ようやく脈絡がついたのは、「Foggy's Mood」と

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

云う池永霧子のオリジナル曲の話。この曲をフォギーは知らぬが、山萩氏は昔、池永霧子トリオの生演奏(ライブ)を聴き、曲名(タイトル)とともに強い印象が残ったそうで、もし録音が見つかったら、是非ともレパートリーに加えて欲しいと云われていたのである。どんな曲だか知らぬこともあり、フォギーとしてはどうしても、と云うわけではなかったのだけれど、譜面が見つかったと聞いて「本当ですか！」と声を弾ませたのは、いわゆるオトナの対応というやつです。

「譜面はあとで送っておきます。もしよかったら、ドルフィーにも演奏させてやって下さい」

山萩氏が云うのへ、分かりましたと請け合い、それでは失礼します、と頭をさげてフォギーは自働車を発進させたのだけれど、いま思うと、やや素っ気なさ過ぎたかも、と反省されてくる。あれだけたくさんの贈り物(プレゼント)を与えられ、葬式の話まで聞かされた人間にしては、あまりにも冷淡、と云うか、もう少し懇切な別れの仕方があって然るべきだったのではと、後悔の念が涌いてくる。ことに「Foggy's Mood」は、近々この世を去ろうと云う人間が、残された人生の僅かな時間、何にも換え難い貴重な時間を割いて探し出したものなのだ。山萩氏の言葉は軽かったけれど、込められた思いまでが軽いはずはない。どこでどうして譜面を見つけたのか、とかなんとか、あれこれ尋ねることで山萩氏の労に報いるべきで、どちらにしてももっと丁寧な挨拶が、濃やかな対応があって然るべきだった。汗

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

心な場面で鉄棒で南瓜を叩き割るがごとき振る舞いに出てしまうのが自分のよくないところなのだ。嗚呼、駄目なやつ、馬鹿だ、人でなしだと、そこまで云わなくてもいいとも思える感じで悔やんでいると、あ、そうか、いま挨拶すればいいのか、と出し抜けに気がついた。

　そもそも山萩氏は3D映像だったのだから、いまから機内の端末を使ってどこかの架空環境へ山萩氏を呼び出して会っても、先刻までと状況はたいして変わらぬ。とは云うものの、フォギーは別れたばかりでまた「会う」のは気が進まず、だいいちいまさら何をどう切り出せばいいのか。「それで吸血くの一なんですけど」と云うわけにもいくまい。「さようなら」と改まって口にするのも変だろう。山萩氏は忙しいだろうから、わざわざ呼び出すのも気が引ける。

　迷った末、フォギーは文章メールで、贈り物への御礼と、葬式での演奏に心を込めたい旨、丁寧に書き送った。「Foggy's Mood」も次の生演奏で必ず演りたいと書き、さらにこれまでの厚誼や愛顧につき、露骨になり過ぎぬよう文面を何度も推敲しつつ感謝の言葉を記した。メールソフトを開いたときには、山萩氏から譜面が届いているかと思ったが、まだ来ていなかった。譜面は当然電脳内にあって、山萩氏が指示すればAIは迅速に作業を行うはずだから、これはちょっとおかしな気がしたが、まあ大したことではあるまいと、意識からふるい落とし、メールを送信してから、接触指示板で二杯目の麦酒を注文

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

した。

ところがである。配達されない三通の手紙ではないけれど、届かなかった「Foggy's Mood」の楽譜、これが後に重大な意味を帯びることに――と、ここでまたしつこく通俗小説の口吻を用いるならば、このときのフォギーには知る由もなかったのである。

成田までは直行便で約五時間。行程の半ば、珊瑚海上空あたりで、フォギーは二杯目の麦酒を飲み終え、やがて眠りについた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CHAPTER

3

密室と封じ手の謎

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

24

前夜までで、吾輩とフォギーが出会った長い一日をようやく語り終えたわけですが、迂闊な読者へ念のため注意申し上げれば、ケープタウンはモリキテック研究所の保育園ふう会議室で、フォギーの腕から逃れて床へ飛び降り、可変クッションの回りをピョンピョン跳ね回ったり、四角い運搬ロボットの匂いを嗅いだりしていた役場職員ふう佇まいの「子猫」こそ、ほかならぬ吾輩です。

こう述べてくると、吾輩がフォギーと出会う以前の、フォギーをめぐる出来事を、フォギーの傍にいなかった吾輩がどうやって知り得たのかと、不審に思う人がなかにはある

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

やもしれぬ。あるいは、他所からは察知しうるはずのないフォギーの内心を、どうして君には洞見できたのだと、疑問を抱く者もあろう。脳の電気信号を頭蓋外から読取して他人の「思考」を透視する技術、さらに進んで脳内記憶素へ外部から接続し、これを物語的に再構成する技術、将来の実現が予言されるこれら技術が完成しておれば、上記の不審疑問が生じる余地はないわけだけれど、フォギーと吾輩が出会った時点ではいまだ工学的夢にとどまる。だったらどうして分かったの？　え、どうなの？　とこう語気を荒らげる向きには、一言応じておけばそれですむ。曰く、吾輩はただの「猫」にあらず、と。

　ただの「猫」でないとすれば、ではどんな「猫」なのか、と申すなら、つまり吾輩は語り手たる「猫」なのだ。小説の語り手。たとえば吾輩の祖型とも云うべき夏目漱石の「猫」が、『吾輩は猫である』第九章最終段落において、「吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑ふものがあるかも知れんが、此位な事は猫にとつて何でもない」と述べているとおり、吾輩も漱石の「猫」も人の内心を透かし見ることくらいは朝飯前、それどころか当の人物の来歴をあらゆる細部にわたって記述できる。つまり我々は一種の全能者なのである――とコウ述べると、まあ小説だしね、所詮は絵空事、そんな身勝手な設定も許されるんだろうね、と冷笑する人が出てこようが、そうした向きには、あなたは虚構と現実を機械的に弁別して省みぬ、惰性的思考の泥中に埋没した気の毒な人だと論難申し上げたい。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

虚構は立派な言語的現実である。ここだけの話だが、ビッグバン以来宇宙で生起せる全事象がデータベース化された《超空間》と云うものがじつは存在する。この全事象のなかには言語記号も含まれ、したがって小説も、小説ならざるものと等価に、横並びで存する。ここでは、一切合切が平等に事実であって、絵空事と云うものは原理的に存在しない。《超空間》を作ったのはおそらく地球人類ではないと思われ、その成り立ちはよく分からぬが、なんであれ語り手の資格を有する吾輩はこの《超空間》に接続できる。もっとも春宵に微かに漂う花の香を察する具合に、昧然と近づけるだけだが、ともかくできる。それは吾輩が偉いからとか、衆に秀でた才覚があるからではなくて、単純に吾輩が小説の語り手だからだ。およそ小説の語り手なる者は、たとえ本人がそれと気づいていなくとも、《超空間》に接続する体術心術を心得ているので――いつ心得たなんて、そんな余計な事は聞かんでもいゝ。ともかくも心得て居る、と、最後の一連の文句も漱石「猫」の台詞でした（1993年版岩波書店『漱石全集第一巻』406頁）。

と云う次第で、先を続ければ、ときはフォギーがケープタウンを訪れてから一〇日後、正確には東アフリカ現地時間10/5. p.m.1:25。デントランドの首都、グリーンキャッスルにあるモリキテック本社ビル地下五階、特別会議室――「鉛の方舟」の場面から話を再開したいと思います。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

この日、「新の方舟」に集合したのは九人の人間、最高経営責任者を含むManagement委員」の首脳陣だ。うち四人はすでに楕円形会議机について、残り五名の到着を待ちつつある。揃いのナイロンスーツを身に纏った彼らが、時候の挨拶めいた会話を散発的に交すばかりで、内容なきふうにしているのは、室が電磁波遮断仕様だからだ。ここでは電脳網の類は一切使えず、コミュニケーションは原則、室内に居る人間の生身対生身でしか行えない。外部との通信は古風な有線電話が一台あるのみ。それも使うときには室外にある端末まで歩いて線を手動で繋がなければならぬ。つまりここは防諜システムが徹底完備された、その意味で特別なのであって、入室の際には、たとえCEOであろうと、電子機器類の徹底的な「洗浄」がなされ、退出時にも入念な検査がなされる。

九人の首脳は普段から密に連絡を取り合って、種々の会議でもしょっちゅう顔を合わせるが、会うのは大概仮想現実会議室。むろんそこでも会話は暗号化されてやりとりされるから、通常の防諜はできる。したがって、七六階建ての本社ビル地下五階、

防災避難区域の最奥にある特別会議室——「鉛の方舟」を使う機会は年に一度もない。実際ＣＥＯを除く四人は、生身対生身で会うのはこれがはじめての機会なのでした。

まだ入室していない一人は副社長の肩書きを持つ人物。彼は山萩貴矢氏が入院するベルンの医療センターへ赴き、つい先刻戻ってきたところで、遅れているのは体内に棲まわせている医療用極微探知機の駆除に時間がかかっているからだ。探知機を破壊していいなら簡単だが、殺さずに取り出すのが手間なのは分かるよね。

今日のこの会議は、出張から戻った副社長の報告が議題の中心だから、残り四人は話を進めることもできず、居心地悪そうに木の椅子に尻をつけている。窓のない特別会議室は丸太小屋ふうに内装され、壁も床も楢の天然木、照明は自然光に限りなく近づけた無影有機ＥＬ照明で、調度の書棚と食器棚も天然木製で色は茶系で統一され、二〇〇一年度版『An Encyclopedia of World Technology』全一三〇巻をはじめ、皮革装丁の書物が棚を沈々として埋めているのが、まずまず落ち着いた雰囲気を醸し出す。にもかかわらず四人が具合悪気なのは、電脳網なしに過ごすのに慣れていないせいだ。電脳網環境に馴染んだ人間がそれから遮断された場合、二四時間以内に半数が不安症に陥るとの報告がＷＨＯから出されたのは一昨年のこと。

ついでながら云えば、書棚には一九八九年度版『The Oxford English Dictionary』全二〇巻も置かれている。これは有事の際、避難所に退避した人たちが退屈せぬよう、スク

ラブルで遊ぶために備えてあるのだと、社内ではまことしやかに云われているが、参集したモリキテック経営陣の不安解消の役にはとりあえず立っておらぬと見える。

マーケティングを統括する韓国系の女性取締役は、「鉛の方舟」に足を踏み入れるのは今回がはじめてだったが、先刻から珈琲が飲みたくて仕方がなく、そう云うと、有線電話で頼むことはできなくもないが、それには運んでくる人間やロボットを「洗浄」しなければならず、手間がかかりすぎると、北米人財務担当からたしなめられた。そんなに珈琲が欲しいなら、なんで事前に保温瓶（ポット）を用意しないのかと思われるかもしれないけれど、入室時には「洗浄室（クレンジングルーム）」で下着まですべて脱ぎ、外科医の手術衣のごとき専用スーツに着替えるくらいだから、余計な持ち込みはしにくい。そもそもあらゆる場所に食品給仕機（フードサーバー）が備わる環境において、事前に飲み物を準備すること自体思いつきにくいのは仕方のないところ。

一方、社長（プレジデント）の肩書きを持つ、トルコ共和国出身の日系人男性——遺伝子型では女性——は自臭症の気味があり、電脳網（ネット）端末に連動する消臭皮膚電極を「洗浄室（クレンジングルーム）」で外されたために、自分がひどく臭うのではないかと気が気ではなく、オーストラリア出身の中国系ユダヤ人のＣＥＯは電脳網（ネット）から遮断された不安を鎮めるべくヨガの呼吸法を繰り返し、北米人財務担当はサイバー宗教に帰依していたから、電脳網（ネット）からの遮断はひときわ身に辛くて、その昔、イランで宗教弾圧を受けたと云う母方の祖先の苦痛に思いを馳せていた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

四人が室に入ってからまだ五分にしかならなかったが、これ以上待つことはできぬ、いったん外へ出ようと衆議一決しかかったとき、一つだけある手動扉が開いた。モリキテック創業者の直系子孫である日本人副社長が、緑色の「手術衣」姿で入来してきたのである。

26

「ヤマハギ博士は数時間以内に完全脳死を迎える見込みです」

副社長は席に着くなり報告した。一同は頷き、まだ五〇歳にならぬ副社長の、テニス選手のごとくに日焼けした顔をしばし眺めたが、すぐに言葉が続かぬと見るや、今年でちょうど一〇〇歳になる社長(プレジデント)が、口臭を気にしながら、

「それで、例の件はどうだろう?」と質問した例の件とは、全脳送信――'Total Brain Uploading の件である。

前にも話したとおり、TBUの技術は世界中の企業、研究機関が熱心に研究開発を進めているわけだけれど、モリキテック社も例外ではない。一〇年ほど前に買収した

「ＭＥＴＨＯ」となる。ローザンヌにある子会社を中心に企業連合体をあげて取り組み、成果をあげつつある。しかしこれがいまだ未完成の技術であることも前に話したとおり。この場合の未完成とは、脳情報が「正しく」電脳内に転写できたと、実験室レベルでも断じるに至らぬこともあるけれど、必要な計算量が半端でなく、手間と費用が膨大である点が、商売を優先しなければ何事もはじまらぬ現今の経済社会では一番の障害。これまた世界中が殺気立つ勢いで開発を急ぐ、量子電脳をはじめとする次世代型の電脳が実用化され、計算容量が爆発的に増大せぬ限り、ＴＢＵの実現、ないし一般への普及（どのみちごく一部の富裕層用に限られるが）は難しいだろうと云うのが、大方の観測だ。

とは云え、先行者利得の美肉を貪欲に求めずにはおられぬのが企業と云う生き物。次世代電脳の登場を安閑と待つわけにはいかぬ。モリキテックはややつんのめり気味ではあるけれど、数年前、一つの企画を立ち上げた。すなわち他に先駆けて実際にＴＢＵをやってみせようと云うので、むろんこれには気が遠くなるほどのカネがかかるが、結果得られる特許や宣伝効果を考えれば十分もとは取れる、少なくとも企画がそれなりの成果をあげるなら株価上昇は疑いなしと、経営陣は算盤を弾いた。

で、問題になったのは被験者の人選だ。誰の脳を使うか。宣伝効果を考えれば、下らぬ人間の脳を移しても仕方がない。そこで白羽の矢が立ったのが山萩貴矢氏。工作機械製造の中企業にすぎなかったモリキテックが、Google などと肩を並べるロボット製造の一大

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

企業へと脱皮を遂げるに際して、技術開発を一手に引き受け、技術畑の中核にあって社の繁栄の礎を築いた山萩貴矢氏ならば、天才の頭脳を保存する意味でも、また社業への貢献を顕彰する意味でも、ＴＢＵ第一号にはうってつけ、世間への誇示(アピール)の点でも申し分なしと、経営陣はこぞって賛成した。しかも、ちょうど具合のよいことに、山萩氏が多発性硬化症を発症し、余命数年と診断されて計画は一気に具体化した。山萩氏もこれを引き受け、仮想(ヴァーチャル)現実環境（例の墓だ）の設計建設を自ら進めていたわけだが、土壇場になって山萩氏がやめると云い出したから経営陣は泡を食った。

資本の論理ばかりを優先する社の方針がそもそも気に食わなかったことに加えて、それまでＴＢＵには関心のなかった山萩氏が、自分で研究を覗いてみて、技術の未熟を知ったことがあったらしい。こんな粗末なものを成果でございと発表するのはペテンに等しい。そう云ったとか云わぬとか。しかし理由はどうあれ、巨額の投資をなした経営陣としてはいまさら後に引けぬ。山萩氏が「主役」を務める前提で話は進んでいたわけで、山萩氏を相手取って訴訟を起こすべしとの強硬意見も出たが、それではかえってカネも時間もかかってしまう。企業イメージに傷もつく。山萩氏は諦めるしかないと、経営陣は泣く泣く判断して、新たな人選にかかっていたところ、山萩氏の病態が悪化した。

世界中の企業で特許権を巡る係争が社員研究者と会社との間で頻々とするなか、自分の発明を気前よく会社に委ねて泰然たる山萩氏の度量と功労には敬意を惜しまぬものの、そ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

リキテック経営陣ならしたら、去り行く者に、今更関心など払ってはおられぬ。明日の為替相場や株価の方が大事なのは当然だ。病気は気の毒ですけれど、これも天命。仕方がないですよね。じゃ、さようなら。十日の被験者から外れた時点で経営陣の関心外へ置かれていた山荻氏が、脳死を迎えつつあるとの情報が伝わった段階で迅速に過去の人となっていったのは自然な成り行きというもの。

ところがである。一週間前に届いた一通の暗号電子メールが情勢を根本から変えてしまったのだから、企業経営は、人生同様、一寸先は闇としか云いようがない。

27

電子メールの差出人は、シンガポール国立大学の付属研究所――A Research Institute of Cyberculture 所長、ダニエル・リー教授。山荻氏とは、二十世紀八〇年代、MITで机を並べて以来の盟友であり、モリキテックの社外顧問にも名前を連ねるリー教授は、電脳科学（コンピューター・サイエンス）の専門家。ことに例の「大感染（パンデミック）」を引き起こした29virus の研究については第一人者と目される学者であるが、山荻氏の余命いくばくもなしと聞きつけたリー教授

が、ほかならぬ29virusに係わる問い合わせを寄越したのである。すなわち、いまだ謎の多いこのウイルスの正体解明につき、ドクター・ヤマハギが鍵情報を握る可能性ありと、リー教授は伝えてきたのだ。

もともと情報工学を専門にしていた山萩氏が、29virusに関心を持ち、「29virus学」の分野でも小さからぬ貢献をなしてきた事実は広く知られていた。モリキテックは大多数の企業と同様、ウイルス対策についてはニューメキシコの「Comunicación de Halcón」やデリーの「KSCB」と云った専門会社に外注していたが、グループ企業内にもウイルス対策部門はあって、これを指揮統括してきたのがほかならぬ山萩氏。決して規模は大きくはないけれど、カネはそれなりにかかるので、歴代経営陣が廃止を画策するのを、山萩氏が頑として譲らず存続してきた経緯がある。電子工学を根幹に据える企業がどうしてウイルスに無関心でいられようか、との理屈はあるものの、山萩氏が何故それほどまでに29virusに興味を抱くのか、いくぶん不可解なものがあって、しかしなんであれ、ウイルス対策部門を含む山萩氏のケープタウン研究所は、モリキテック内では一種の「聖域」であり、力のあるCEOといえども土足で踏み込むわけにはいかなかった。

だが山萩氏が「29virus学」に貢献したのはもう五〇年近くも昔の話。このところ彼が当該方面でどんな研究をしているのか、会社の人間はほとんど知らなかったから、リー教授の問い合わせは経営幹部にとっては文字通り寝耳に水。具体的にリー教授が何と云って

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

きたのかと申せば、こうだ。

半年ほど前、29virus に関して重大な発見があったとタカヤ・ヤマハギから連絡があった。29virus の由来が解明できそうだともヤマハギは述べて、29virus に感染したプログラムの標本を無害化した形で送ってきた。が、その後は連絡がなく、ヤマハギが病に倒れたと聞いて大変驚いている、ヤマハギの 29virus 研究はどうなったのだろう？　と云うのがリー教授の問い合わせの趣旨。

早速経営陣は、病床の山萩氏――ほとんど大脳だけで生きている山萩氏本人に問い合わせたところ、とぼける具合でちゃんと返事をしない。29virus の研究はほとんど山萩氏が単独で進めていたから、研究助手は純然たる助手にすぎず、中身を全然摑んでいないことも判明した。つまり研究成果を知る者は山萩氏ただ一人、しかも肝心の成果を山萩氏自身が隠蔽ないし抹消した形跡が発見されたから経営陣は色めき立った。

しかしなぜそれほど 29virus が重要なのか。29virus がこれまで知られてきたプログラムとはまったく異質な論理（ロジック）と算法（アルゴリズム）から作られていることは、世界中の研究者の認めるところで、いや、これはそもそも人為的なプログラムですらなく、いまだ知られざる宇宙の構造に由来する力、たとえば我々のとは異なる物理法則に支配された宇宙から浸潤してきた力なのだとする者すらあって、ここまでくるとほとんど宗教や文学の領域になるけれど、いずれにしても「29virus 学」は、単なる電脳（コンピューター）ウイルス研究を遥かに越え出る奥行

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

きと視野を持つ分野となってきたわけで、かりに29virusを構成する算法――それが算法だとして――が解明できたら、電脳科学の巨歩的進展に繋がるのは間違いなく、「29virus学」の意義はそこにあった。しかし、もう一つ別の意義もあって、すなわち軍事利用だ。

軍事組織同士の戦闘において、情報が勝敗を決するのは古来常識だけれど、軍事技術のIT化の果て、地球の裏側の〇・〇一平方ミリメートルの標的にレーザービームを照射できる現在、敵の神経中枢をどちらが先に破壊するかが勝敗を決することは申すまでもない。敵電脳網に侵入し破壊できればそれで勝ち。だから毒性が強くて敏捷なウイルスの開発に人々がやっきとなるのは必然、二十世紀の米ソ冷戦時代、核兵器開発に両国はしのぎを削ったが、戦争紛争が資本の命脈をかろうじて保つ、二十一世紀末の慢性的戦争状態のなか、各軍事国家が水面下で戦うウイルス開発競争は熾烈を極める。他方で競争についていけぬ貧困国は高知能兵器を端から諦め、核爆弾や細菌、毒ガスと云った「雑な」兵器でもって富裕国に対抗する構図は、二十一世紀を貫く二極化の一発現形態と云ってよいわけだけれど、いずれにせよ、かくのごとき情勢下において、29virusを自在に扱える技術が、巨大な戦略的価値を有するのは疑えぬ。軍需産業界の中核企業モリキテック、その優秀な経営陣が色めきたったのは無理もない。そして彼らが認識したのは、自分たちが利潤の旨味っぽい匂いを嗅いで色めきたった、それと同じ理由から、山萩氏が研究成果を隠匿

ないし破棄した可能性である。

29virus を巡る重要情報はいまや、白樺の樹間からベルン大聖堂の尖り屋根が透かし見える病院の、蜘蛛の巣のごとき電線（ケーブル）に繋がれて栄養槽に浮かぶ、山萩氏の灰色の大脳のなかにひっそり仕舞われているわけだ。脳組織が溶けてしまえば宝は永遠に失われる。それはあまりにもったいない。生きているうちに山萩氏からどうしたら情報を引き出せるか。まさか拷問もできぬ。と、ここにおいて山萩氏へのＴＢＵが再浮上するのは自然のなりゆきであった。

28

「結論から述べますと、ＴＢＵは失敗しました」

落胆の溜め息が楕円机の周りで漏れるなか、日本人副社長は続けて、『METEO』の技術者が手を尽くしたのだが、山萩氏の脳組織は脳幹部分がすでに壊死しつつあるせいで、大脳情報の記号化（コード）に必要な核磁気精査（ＮＭＳ）を夾雑なく滑らかに実施するための不凍低温化がうまくいかぬのだと補足した。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「メテオはよくやった方でしょう。まあ技術者連中にできるのはその程度と云うことですね」

「やはり駄目か」CEOが呟き、しばらく沈黙が続いた後、

「しかし、本当にヤマハギは29virusの秘密を解明していたんだろうか？」と、日系トルコ人社長（プレジデント）が口臭を気にしつつ疑念を漏らした調子には、逃した魚をなるべく小さく見積もりたいとの気分がある。

「ヤマハギ博士から送られてきた感染プログラムを解析したうえで、リー教授はそうだと云ってますね」副社長が明快に応じる。

「研究員は何か知らないのかね」CEOが苛立を隠さず云えば、彼らは全然駄目ですねと、突き放すように副社長は応じ、研究はヤマハギ博士が単独で進め、肝心のところは外注を利用していたらしいと説明した。するとそこでマーケティング担当の韓国系女性重役が、私に提案がありますと発言した。

「いったん休憩して、外で珈琲を飲むのはどうでしょう？」

残り三人は、女性重役の、二十世紀末に人気のあった韓国人女優にそっくりの整形顔を黙って眺めたのち、副社長に視線を戻した。それからCEOがまた口を開いた。

「だとしたら、外注を受けた会社の人間が何か知っているんじゃないか」

「あたってみましたが、彼らは契約時の守秘義務を盾に問い合わせに応じません。会社と

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ヤマハギ博士が共同で契約主体になっていますから、訴訟に持ち込んだ場合、情報開示までに最低五年はかかるでしょう」

五年と云ったら軍需技術業界では永遠の時に等しい。

「それにヤマハギ博士が外注したのは、おもに調査会社なんです」

「調査会社？」CEOの鸚鵡返しに、

「何を調査させていたの？」と珈琲に餓える韓国系女性取締役が訊き、

「詳しくは分かりません」と答えた副社長が「しかし、その辺りは、こちらも別の調査会社を使って調べさせました」と続けると、北米人財務担当が横から口を出した。

「香港マフィア系かね？」

「今回はヤクザ系を使いました」と副社長が応じるのを聞いて一同はうっそりと笑う。調査会社や情報会社、あるいは海外配送業者や産業廃棄物処理会社の多くに組織犯罪集団の息がかかっているのはいまでは常識、これを多国籍企業が便利に使っているのもまた常識だ。

「ヤマハギ博士は、ある物を探させていたようです」

「ある物とは？」CEOの端的な問いに、日本人副社長は浅黒い顔を奇妙に歪めて笑い、それから答えた。

「ロンギヌスの槍です」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ロンギヌス？　とまた鸚鵡に返したCEOをはじめ、誰もが不審の面持ちになるなかにあって、日本製アニメーションに趣味のある副社長は、ロンギヌスの槍は『新世紀エヴァンゲリオン』なるアニメーションに登場する武器であると説明し、しかしもともとはゴルゴタの丘で十字架上のキリストを処刑する際に使われた槍のことであり、中世キリスト教伝説では神秘の力を有する聖槍とされて、これを手にした者は世界征服をしうるとも云われ、ナチスのアドルフ・ヒットラーが真剣に探索した話は有名だと加えた。

「ヤマハギは世界征服をしようとしていたわけだ」北米人財務担当が冗談めかしたが、彼が日頃口にするアメリカンジョーク同様、笑う者はない。冷遇には慣れているのか、落胆するふうもなく、むしろしてやったりの満足顔で掌を揉み合わせている財務担当を尻目に、それで、その槍は見つかったのかね、とCEOが問えば、唇を歪めて薄桃色のセラミックの歯を覗かせた副社長は答えた。

「不明です。ただ半年前にヤマハギと調査会社との契約は終了している。その直後にヤマハギがリー博士に29virus の解明がなったと連絡している点からして、何かが見つかった可能性はある。しかし、どっちにしろ槍ではないでしょう。ウイルスと関係があるとはとても思えない」

「断言できるのかね」CEOが懐疑的に問い、すると日系トルコ人社長が、ヤマハギは北米や東アジアの文化には趣味があったが、欧州文化にはほとんど関心がなかったので、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

そのヤマハギがキリストを刺した槍に執着したのなら、何かしら意味があるのではないかと、口臭を気にしながら意見を述べると、次に財務担当が、その槍には実際に神秘の力があるのかもしれぬと、自身が信仰するサイバー宗教の教えを引いて観測を述べ、韓国系女性重役が「鉛の方舟」内には珈琲メーカーを設置すべきだと提案し、最後に副社長が、どちらにしてもヤマハギ博士本人に訊くしかありませんね、とまとめた。

「それができないから困っているんじゃないか」顔をいくぶん紅潮させたＣＥＯが苛立を隠さず云えば、母方に歌舞伎役者の血を引く副社長は爽やかな日焼け顔に微笑を滲ませて応じた。

「予備のソフトウエアがあります」

「しかし、あのソフトウエアはヤマハギ自身がすでに破棄してしまったのでは？」財務担当が副社長の言葉に疑念を呈したが、二人が云うソフトウエアとは、山萩氏に対して行われたＴＢＵ予備試験の際に作られたソフトウエアのことである。

じつは一年半前、『METEO』と山萩氏のたっての希望を受けて、予備実験の形で、しかしほぼ本番同様の手順を踏んで実際にＴＢＵは行われたのである。このとき山萩氏の脳情報を転写したソフトウエアは、山萩氏自身に所有権、すなわち処分権があると云う契約で、むろん経営陣は渋ったが、予備実験はあった方が断然よく、同じ被験者で一度やっておけば二度目は時間と労力が大幅に省けると『METEO』の技術者から説明があって実

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

現の運びとなった。ところが、すでに述べたように、山荻氏がやめると云い出した。そればかりか自身の脳を移し取った予備実験のソフトウエアも破棄してしまった。経営陣がすぐに別の被験者に乗り換えられなかったのはこのためだ。呆れ怒った経営陣、訴訟を辞せずとの強硬意見はありながら、泣く泣く計画が練り直されたこともすでに述べたが、山荻氏はソフトウエアを自分でいじってみて、駄目だと判断したに違いなく、科学界工学界に名声を有する山荻博士から、それでなくとも人倫の観点から懐疑の的となっているTBUへの反発的発言をされては困るとの計算が働いて、経営陣は諦めた経緯がある。あのとき山荻氏の会社への忠誠心を過信し、ソフトウエアの処分権を与えたのはCEOであり、当時強く反対した財務担当はやや当てつけ気味に繰り返した。

「せめてあのソフトがあればね。しかし、ヤマハギが捨ててしまいましたからね」

昔の失敗を蒸し返され、不機嫌に黙り込んだCEOの赤い顔を一瞥して、薄く笑った副社長が云った。

「それがあるんですよ」

「というと？」

「バックアップがとってあったんです。『METEO』の方で」

しばらくは誰も何も云わぬ。バックアップの存在は、山荻氏との契約に則して云えば、道義的にも法的にも違反である。しかしいまはなんであれ、それが存在すると云う事実が

重大だ。その意味合いをそれぞれが頭のなかでめまぐるしく計算しはじめる。
「しかしだ」と社長が沈黙を破った。「TBUの予備実験でバックアップをとったのが一八ヵ月前。ヤマハギがリー教授に29virusに関する理論的突破(ブレイクスルー)があったと報せてきたのが六ヵ月前」
「つまり我々が手にしているソフトウエアは、ヤマハギが理論的突破(ブレイクスルー)する以前のものと云うことになる」財務担当が瀬踏みするように話を受けとる。
「ですから」と副社長が爽やかな笑みとともに宣言した。「バックアップのソフトウエアを解凍して、電脳(コンピューター)内のヤマハギ博士にもう一度研究をしてもらえばいいわけですよ。ロンギヌスの槍でもなんでも集めてもらってね」
再び一同は黙り込んで思案する。やがてCEOが大きく頷いた。
「『METEO』に連絡して、すぐにソフトを解凍させたまえ」

29

「鉛の方舟(レッドアーク)」を出たモリキテック経営陣が、電脳網(ネット)への再接続を果たして「人間らしい」

存在感を回復し、増し確かさもあまり強く、毎回ずんぐりメラメラっと炎を燃やし、終わりかかけは、時間後、それぞれ日本時間で（…）、プレイヤーは中央ライトはすぐにある。それは別世界もありうるのだ。

朝から昼まで時間が過ぎ、各プレイヤーの前には一手の動きを押し出すのは、プレイヤーが部内行動の方針を見回していけば、ずっとわかる。目指すはいつまで、目指すはいつまで、山本氏と約束した。例の大山名人はリーグ戦、大山康晴十五世名人が内の名物対局。だが、山本氏から連続かけた、んだろう、電子メールで招待状が日本将棋連盟から届いたのを見た、日曜しかけて、目指すことがあるから驚いた。日をかけていう人が目隠しで、お互い向かい合わせたという。持ち時間それぞれ九時間で、局を二日がかりで進める人の将棋が多い。かもしれない、座り通しではないかがある。が、これは名人戦も同じ意味で、名人戦そっくりそのままの形で進行させるという、今回のイベントの趣向があるんだそうだ。

名人戦がはじまったのは昭和時代だそうだが、昭和の昔は時間がよほどのんびりしていたんだろう、プレイヤーは考えた。いまは株売買や外貨取引にとくに手を染めずとも、電脳網で何かしようとすればナノ秒をうったって意識させられるが、昭和時代にはナノ秒なる単位自体が一般には知られていなかったというから、時間の流れがごく緩やかだったのは疑えぬ。それから較べればいまはほとんど激流。そんななか二日間とは、さすがは

ニッポンの伝統芸能、ふてぶてしいと云うか、時代を超越して佇立（ちょりつ）すと云うか、モダンジャズはそこまで開き直れていない。いやはや大したもんだなと感心したが、二日はさすがに付き合えない。今回は（と云うか永遠に）見学は遠慮したい、と、その旨フォギーが伝えると、べつにずっと見ている必要はないので、都合のよいときにちょこっと覗いたらいい、一日目の対局が終わったあとなら、少し話ができるかもしれないと芯城から連絡があって、まあそれならばと、午後遅く家を出たと云う次第。

　ホテルまでは目白駅から徒歩一五分ほど、道順は特別防犯警備地帯（SPCA）だから女性一人でも安全に歩ける。道路に電極が埋設された特別防犯警備地帯（SPCA）は、二四時間の監視体制下、登録IDを持たぬ人間が入り込めばたちまち警報が発せられ、なお退去せぬ場合は、侵入者に電撃が加えられる。近辺は古くからの住宅街だけれど、無住となった屋敷に「不定住居者」が不法に入り込んで治安は必ずしもよくない。外国人や貧困者の「蜘蛛巣地区」も急速に広がりつつあって、街から昔日の面影は失われつつある。放火されて黒焦げになった廃ビルや雑草だらけの廃屋を横目にしつつ、フォギーが目的地に着いたのは午後五時すぎ。

　ホテル景雅園は、本館と別館のほかに墨水亭と呼ばれる木造二階家が庭園にあって、対局が行われるのはこの離れ家の座敷。景雅園は昭和よりさらに前の大正時代、華族の持ちものだった邸宅を山崎辰之助なる実業家が買い取って料理旅館にしたのがはじまり。墨水

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

亭は、補修は何度かされたものの、当時の姿のまま保存され、都の指定文化財になっていると案内の立て札にはある。日本庭園でゴザイマス、と有無を云わさぬ具合に楓や松が塩梅されたなかに、細流の落ち込む沼があって、これに接して黒瓦の家が建つ。沼に黒藻が生えて墨汁のごとく見えるのが墨水亭の名称の由来、と、これも立て札の案内文。

墨水亭では将棋の対局がしばしば行われるそうで、ああ、なるほどね、こういう和の雰囲気に合うからなんだろうね、とフォギーは考えたのだけれど、それだけが理由ではないと、あとから教えられた。つまり墨水亭の建つ一帯は電磁波退避区画になっていて、電磁波が遮断ないし攪乱されており、ここへ入った人間はあらゆる電磁波通信から離れて過ごすことができる。この種のサービスを提供する旅館やホテルは増えつつあって、たしかに空間と云う空間を埋め尽くす情報通信の暴風雨、それからの一時的避難所に需要があるのは分かるよね。世界の涯まで追いかけてくる情報の熱波から逃れ、幽静に過ごしたいと願う人は数多い。

それでどうして将棋かと云えば、対局者が電脳網に接続できぬのが具合が良いから。たしかに普通の場所では繋がり放題、超小型端末や侵襲式端末を使えば、人知れず電脳網から情報を引き出し参照できてしまう。普段の対局が行われる千駄ヶ谷の将棋会館にも電磁波遮断した対局室はあるが、狭い密室ではなく、太陽光の差し込む露天の庭園を含む一帯が広くそうされている場所はあまりない。遮断の徹底度は、たとえばモリキテック

本件の「鋭の方角」などに頼ったら話ははないけれど、一般の電脳網への接続を不能にする程度なら簡単にできる。

電脳網をどう遮断するか、たしかにこれは学校等で大いに頭を悩ませている問題。ことに入学試験では、受験生の身体検査は当然、取り外しのきかぬ端末を使う受験生は、電磁波遮断された区画に集められ、入りきらぬ場合は、周りに撹乱器を持った係員が立つとなるから大変だよね。電脳網から情報を引き出すのも能力のうち、だからいっそのこと試験会場への情報機器の持ち込みをありにしてしまえとの乱暴な主張もある。が、たとえば数学だと、東京大学理学系学群の入試問題程度なら、問題を視覚レンズに映して数秒で解答が映示されてしまうというからどう仕様もない。高度化する一方の情報化の激流のなか、人間の能力をいかに測定するかについては、文化教育省あたりがあれこれ試行錯誤しているけれど、試行錯誤すればするほど悪くなっていくのは、それが文部省と呼ばれていた二十世紀から変わらぬこの役所の一大特色。

で、話は将棋。名人戦の場合、二日にわたる対局のあいだ中、墨水亭の周囲に目立たぬよう巡らされた網の内側、つまり電磁波退避区画内に対局者はとどまらなければならない。それならなるほど生身の人間対人間の明朗な戦いが保証されるわけだ。一日目の対局が終わった後の宿泊は墨水亭内の客室。食事も入浴も全部そこでする。墨水亭自体ゆったりした作りになっていることもあり、許された範囲内なら庭を散策できるから、窮屈感は

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ほとんどないそうで、それで将棋の対局によく使われるのでした。

で、フォイヤーである。景雅園に着いたフォイヤーは、道々つけていた防塵マスクを外し、ホテル本館の二階へと向かった。これは招待状の案内にそうしろとあったからだ。「珊瑚の間」と名のついた広間へ入っていくと、一角にしつらえられた舞台では墨水亭座敷の対局場の模様が3Dホロで上映中である。大きな将棋盤を映し出した2Dスクリーンも舞台にはあって、手元の操作盤で駒をあれこれ動かしながら話している一組の男女は解説役のプロ棋士なんだろう。入口近くの白布をかけた机が受付、大昔の学生服に似た紺の詰襟服を着た、蚊トンボみたいにひょろっとした若者が独りぽつんと座っている。なぜそこが受付と分かるかといえば、「受付」と墨で大書した紙が白布に貼ってあるから。しかし、これはなんというか、異様に古めかしい。紙に墨、というのもあるけれど、そもそも人が受付をしていること自体珍しい。いまどきは幼稚園の運動会だって保護者の出入りチェックは自動感知機で行う。将棋界、わざと走路を逆走してるんじゃないのか。邪推しつつ受付で名前をいうと、旧式の電子板を確認した若者は、「対局見学者」と書かれたリボンの垂れた造花の胸飾りを渡した。まさかこんなダサいのをつけろというんじゃあるまいな。そう思いつつ、対局見学ツアーは六時頃からだと受付が教えるので、舞台へ向かって並んだ可動椅子へ居心地悪く腰を下ろした。

客席は三分の一が埋まってて二〇人くらい。よくもまあこんなに暇な人間がいたもんだ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

呆れつつ、舞台のホロ映像を眺めれば、畳へ直に置いた矩形の将棋盤を挟んで二人の男が対座中だ。向かって左が、例の牛乳瓶底眼鏡をかけた「大山康晴十五世名人」。ケープタウンで見たときと同じく紺青の着物に銀鼠の袴、今日は羽織も着て座布団に正座している。右が芯城銀太郎八段。こちらも薄茶色の和服姿、脚は胡座(あぐら)で脇息に凭(もた)れる格好だ。和装は伝統に則って、と云うことなんだろうが、はじめて見る芯城の和服姿は似合っているとはどう贔屓目(ひいきめ)に見ても申せない。菫(すみれ)色の髪と着物の色が合っていないし、胸元がなんだかはだけ気味で、花火見物にきた安手のホストにしか見えぬのがうら哀しい。一方の大山名人はさすがの貫禄、と云うのも変な話だが、まるっこい軀に暗色の着物がマッチして、袴が派手でちょっと下品なのも悪くない。

それでしばらく見ていたのだが何も起こらぬ。芯城がちょっと髪をかきあげる程度で、ほとんど動きと云うものがない。見世物としては、これ以上退屈なものはあまり考えられぬ。一方舞台上の解説はどうかと云えば、そもそも将棋の規則(ルール)を知らぬのだから面白かろうはずがない。ただ解説の棋士の、禿を自然放置した男性の方が駄洒落を連発して、それがあまりにくだらなく、会場に失笑憫笑がちらほら生じるのが、まあ可笑しいと云えば可笑しい。

「こんなところにト金を作られたらドキンとしませんか。わたしだったらします。ト金でドキン、しかも両取りヘップバーン」

意味なんかない。彼らの聴衆すらいない移植の逸った人間を左右に向けている。いま
どき偏ではない。簡単なわ。スキンヘッドでもない自然さは、宗教的な理由か。あるいは
ファッションでそうしているんだろうか。から後者だとしたら、狙い過ぎのきらいはさ
めない。それとももっと退屈な見世物を観に来る人がよくいるもんだ。直近の観客は
疑似現実環境で尚がしかたので、インサートボスかスポーツイベントだろうか。現場へ
生で足を運ぶ人はほとんどいなくなっている。だろうか。ここでも、仮想化は進んで、
わざわざやってくる人はなかなかいない人は少ないはずだ。とにかくこの程度なら電脳網中継で十
分なはずだ。にもかかわらずフォギーと同じ小劇場にまでやってくる狂信的ファンとなる者は、よほど偏
向な人たちだろうと、フォギーが観察していると、後ろから不意にポンと肩を叩かれた。
振り向けば、緑色の髪を長く伸ばした若い娘が立っている。
「こんにちは。師匠、お疲れ様です」
何者じゃ？　と一瞬は思ったけれど、剥いた卵みたいな顔の真ん中でぴかり光る……
日月形の眼と、頬に浮かんだえくぼで思い出した。「花琳」モリキナックのスナルなだ。
あ、どうも、と挨拶を返すと、花琳がお茶でもどうかと誘う。先頭の駄洒落を聞いていても
仕方がない。うん、と頷いたフォギーに花琳が嬉しそうに伝えた。
「猫のドルフィーもきてますよ」

「珊瑚の間」を出て絨毯の廊下を少し行くと関係者控え室がいくつか並んで、王花琳（ワンファリン）が案内したのはその一つ、モリキテック関係者のために用意された部屋だ。ソファーや椅子に囲まれた卓上に、「珊瑚の間」と同じ、しかしだいぶ小ぶりのホロ映像が浮かんで、それを例の水色の作業衣を含む七、八人が取り囲んで凝然と見詰めている。入室したフォギーが黙礼すると、全員が頷いて挨拶したものの、映像へ迅速に眼を戻すあたり、だいぶ緊迫している模様だ。

人々から離れた食堂卓（ダイニングテーブル）に遠慮がちに腰を下ろすと、王花琳が手提げの運搬籠（キャリーケージ）を運んできて、なかから出したドルフィーをフォギーに抱かせる。猫と戯れてよい空気じゃないと思うが、花琳はまるで頓着がない。フォギーの手のなかで、縁故採用の役場職員ふう子猫は生意気に耳を尖らせ、ミイミイ鳴いて暴れる。

「放してもダイジョウブ。可動エリアはこの部屋に設定してあるから」

花琳が云うので放せば、子猫はか細い尻尾をひょいひょいと振りつつ床を巡り歩いて、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

椅子の脚の匂いを嗅いだりしている。うむむ、可愛いぜと、フォギーがあらためて魂を奪われていると、制御の仕方を花琳がフォギーの腕輪(ブレスレット)型端末をいじりつつ説明してくれる。

「これからは師匠の指令(コマンド)だけを排他的(イクスクルーシヴ)に受けつけるように切り替えますね。こうしておけば、かりに猫拐(さら)いに拐われても、自力で師匠のところへ帰還します」

ありがとうと礼を云い、しかし、そのシショウと云う呼び名は何なのかと問えば、「先生」が嫌だと云うから「師匠」にしてみたのだと答える。なるほどケープタウンで会ったとき、「先生」はよしてくれと頼みはした。

「ロボット・ドルフィーの先生なんだから、先生でいいと思うんだけど」と云う花琳は、先日とは様子が違い、とても技術者には見えぬ。まあ前回だって作業衣を着ていただけの話だけれど、今日は頭に蛍光緑色の長髪鬘(ウィッグ)を載せて、ベージュのブレザーに格子柄の短いスカート、紺の長靴下(ハイソックス)に茶のペニーローファーを履いた姿は、典型的な「日本女子高生(ジャパニーズスクールガール)」スタイルだ。これは昔から根強い人気があって、フォギーの母親もたまにそんな格好で遊びに出かけている。

「師匠でいいですよね」と念を押されて、仕方なく頷けば、

「じゃ、師匠と云うことで。あ、私のことは花琳(ファリン)と呼んでください」とやや広東語訛のある早口で宣(のたま)った緑髪女子高生は、紅茶と焼菓子を別室から運んできてくれる。フォギー

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

の方はホロ映像を囲む人たちに気兼ねして、声を低めて話すのだけれど、花琳は遠慮と云うものが寸毫（すんごう）もない。音程の高いよく通る声でぱきぱきと喋る。音楽家（ミュージシャン）〈ドルフィー〉の方は調布へ運んだんだろうかと問えば、一昨日「大山名人」「古今亭志ん生」と一緒にNarita へ着いて、いまはまだ舞浜のモリキテックの工場にいると返事があった。

「工場じゃないと調整（アジャスト）できない部分もあるんで、もう少し待ってくださいね。一週間以内にお店に配備（ディプロイ）するよう手配してありますから。あ、でも今日は、猫の方を師匠に届けようと思って」

そう云った花琳は、うろついていたドルフィーをひょいと片手で拾い上げ、籠に仕舞う。子猫は少し鳴いたが、あまりうるさく出せ出せとは主張せずに、すぐに丸くなる。愛嬌をふりまく子猫を囲んで、わあ、可愛いと、みなで盛り上がる雰囲気ではないので、フォギーはまずはほっとした。

花琳によれば、大山アンドロイドが景雅園に運ばれてきたのが今朝の七時半。担当技術者らがぎりぎりまで舞浜の工場で調整を続けたのは、ロボットのCPUに若干の不具合が生じたからで、これが大変だったらしい。なにしろ「大山康晴十五世名人」は、いったん墨水亭に入ってしまえば、あとは明日の夜の対局終了時まで技術者は手出しができず、有線で送られる映像をただ祈るように見守ることしかできぬと云うのだから、たしかに心配は心配だろう。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

て首を傾げる。

「それで、どっちが勝ってるの？」フォギーが小声で問うと、さあ、と花琳は緑髪を振って首を傾げる。

「まだどっちが勝つとか、そう云う段階じゃないんじゃないかな」

「でも、結局はロボットが勝つんでしょう？」

「たぶん。でも、今回は勝敗より、ロボットが人間の名人のように振る舞えるかどうかにポイントがあるんです」と説明した花琳は、朝からここまでは大過なくきたが、まもなく一日目が終わり、「封じ手」と云うものが行われる。それをちゃんとロボットがこなせるか、技術者たちは固唾を飲んでいるのだと解説した。

「なるほどねえ」と感心したのちフォギーは質問した。「封じ手って、なに？」

「あ、よく知りません」と答える花琳も将棋には詳しくないらしい。するとソファーに居た背広（スーツ）の男性が、「封じ手」とは、一日目の対局終わりに手番の者が次の指し手を書いた紙を封筒に入れ、一晩立会人が保管して、翌日これを開いて対局を再開する儀式だと教え、そうすれば手番の者が次の手を一晩かけて考えることができず、不公平にならぬのだと解説してくれた。ほほう、なるほどね、と頷きつつ礼を云ったフォギーは、しかし依然なんだかよく分からぬまま、紅茶に口をつけ、皿からクッキーをとって齧ると、これが非常に美味い。なんじゃ、こりゃ？と瞠目していると、それっておいしいですよね、と嬉しそうに云って、自分もクッキーを栗鼠ふう前歯でパリリ齧った花琳が、ホテル内に店舗

いうしては「MARUZEN」の看板をマルゼンと教えて
「MARUZEN」って、むかしは本屋だったの、御存じ、知ってましたか？」
「なんか聞いたことあるな」
「むかしは本屋でお菓子を売ってたんですね、日本では」
違う気がしたが、フォギーもよく知らぬので、そうかもね、といい加減な返事をして、
「でも、なんておいしいの、ほんとですよね、マルゼン凄すぎないっ　凄いかもです、と、二人して大いに感嘆しあっているところへ、対局場見学者は集合せよとの案内があって、フォギーは立ち上がった。

31

廊下で点鐘を受けてのち、「対局見学者」のリボンをさげた二〇人ほどの人に混じって、フォギーは墨木亭へと向かった。桃色胸飾りのあまりのダサさに眼がくらみ、一度は帰ろうかとも思ったが、花琳が、あ、それ、かわいいかもと、冗談でもなさそうに云うのを聞いて、かろうじて胸に付け得たのだけれど、花琳の美的センスが必ずしも信頼できぬ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

のを知ったのはややあとの話。
関係者なんだろう、薄墨色の作務衣のごとき服を着た、剃上頭に幾何学模様の刺青を入れた男と、宗教団体事務員ふうの黒服に引率されて、本館裏口から外へ出ると、空は雲が割れて、所々が茜色に染まっている。いくぶん湿気を孕んだ空気が清涼だ。夕風に揺れる修竹の叢を横目に、躑躅の植わる築地を回り込み、沼の瓢箪形のくびれにかかった太鼓橋を渡って大谷石の甃を踏み行けば、そこが墨水亭の玄関。沼とは反対側の、建物からやや離れた砂利路に小型自動車が停まって、そこから電線が墨水亭の縁の下へ伸びているのはホロ映像の中継車だろう。

木格子の引き戸を潜って玄関へ入り、大谷石の沓脱ぎで靴を脱いで上がれば、玄関廊下に面した襖が開かれて、と、なかは畳座敷。座布団が二列並べられているのが、つまりは「客席」ということらしい。室の左手は黄櫨色の土壁、右手は障子戸で、二間廊下を挟んだ硝子戸の外が沼のはずだ。正面は奥座敷との間仕切りの襖。座布団にめいめいが座ったのを見計らい、刺青剃上頭と黒服が山水の描かれた襖を左右から開けば対局場が現れる。

長押に掛かるフォギーには判読できぬ墨文字の額、その直下、正面奥に小机が置かれ、こちら向きに和服や背広が五人、鎮座するのは立会人や記録係だと、事前に教えられていた。その手前に、ホロ映像で見たとおり、四角い将棋盤を挟んで対峙する対局者。向かって左が床の間を背にした大山康晴十五世名人、右が障子戸を背にした忘城銀太郎八段。ホ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

監視用のカメラなどここかしこにあるはずだが、いまどきは砂粒並みに小さいから分からない。いい歳した大人が雁首並べて将棋盤を覗き込む姿はどこか滑稽だが、見ようによっては異様な緊張した空気が漂わぬこともない。

フォギーが一番感心したのは、芯城が正座をしている点だ。生の観客の眼を意識して、胡座から直したと見える。いまどき正座をするのは、能とか落語とか茶の湯とか、和物伝統芸能に携わる人くらいで、つまり将棋はそうした芸能の一種と云うわけなんだろうが、それにしても長時間正座を続けるには修練が必要なはずで、いや、えらいもんだなと、フォギーは芯城を大いに見直したのでした。ちなみにフォギーは座布団に横座り。美しくないことは本人も重々承知だけれど、正座は無理だ。脚が痛くて。ほかの見学者にも正座の人はない。この数世代で日本人の骨格は正座をしにくい構造に進化したと云われている。

で、見学がはじまって、しかし何も起こらぬ。大山名人は牛乳瓶底眼鏡をひなたの蜥蜴のごとく盤に据え、腕組みをした芯城は盤からやや離れた位置からこれを覗き込んで静坐している。二人ともまるで動かぬ。フォギーはたちまち退屈した。いや、退屈くらいならまだいい。動かぬ生身の人間（一人はロボットだけれど）を間近に見続けることがこれほど息苦しいとはついぞ知らなんだ。べつに歌ったり踊ったりしろとは云わぬ。そうは云わぬが、せめて駒を動かすくらいはしてもいいのではないか。が、全然しない。見学者などはあたかも存在しないがごとく。気を遣うふうが欠片もない。小机の向こうの人たちも同

然、ただ棒杭のごとく居並ぶばかりなのだから呆れた。格別の仕事がないのかもしらんが、せっかく見学の人たちが来てくれているのだから、ちょっと何かしてみせたらどうだろうと。対局者に助言する程度のことはしても罰はあたらんと思う。いくらニッポンの伝統芸能とは申せ、ここまで傲岸不遜であってよいものか。腹中に将棋界への非難が蟠る。その一方で、このままでは見学者らが「カネ返せ！」と騒ぎ出すのではとフォギーは心配になり、見学は無料だったとすぐに思い直せば、しかし無料だからとて観客を無視していいはずはない、同じパフォーマーとして将棋指しのモラルを問わざるをえませんなと、批判的気分が沸々たぎってくる。

見学者が無聊のまま放置されたのは実際には十五分ほど。これがフォギーに永遠のごとく思えたのは、電磁波退避区画で電脳網が使えないことがやはりあったと思われる。電脳網が使えれば、メールでも画像でも接眼レンズに映示することができる。アナログ人フォギーが電脳網と繋がらぬまま茫とする時間が人より多いのはたしかだけれど、それは好き好んで茫としているわけで、目下の状況のごとく、退屈を強要されることに現代人フォギーはやはり慣れていないのでした。

電脳網環境から遮断された人間は不安症に陥りがちとの、WHO報告の正しさを身を以て実証しつつあるフォギーが、キイッとなって席を蹴ろうとした寸前、ようやく動きが生じた。俯き加減になっていた大山名人が、つと顔をあげ、小机の方へ何か云ったのだ。

「なんて云ったんですかね？」フォギーが隣の口髭の男に小声で聞くと、「封じます、と云いました」と口髭は教え、フォギーの雨降り蛙ふうキョトン顔に、「封じ手をいまからしますと云う宣言」と補足説明をしてくれる。ああ、なるほどと頷くうちにも、画板と封筒、それから赤筆を手渡された大山名人は座布団から立ち、足袋で畳を踏み、芯城の背後を回り込んで障子戸から廊下へ出て行く。畳に手をついてヨッコラショッと腰を浮かせ、袴をさばくあたりの仕草はとてもロボットとは思えぬ。腕組みをして動かぬままの芯城の方がむしろ機械みたいだ。

「どこ行っちゃったんです？」「廊下で封じ手を書いているんです」「なんでまた廊下で？」「相手に見られちゃまずいでしょ」「あんなにコソコソやるものなんですか？」「ほかの人に見られちゃいけないからね」

なるほどと、フォギーがまた頷いたのへ、封筒には現在の局面を図示した紙が入っていて、それに朱筆で次の手を書き込むのであると、口髭がまた補足説明したのは、フォギーの顔になおキョトンの色があったからだろう。けっこう長くかかるものなんだなとフォギーが思い、同じく思ったらしい口髭が「長か」と、博多弁で呟いたとき、大山名人が戻ってきた。

小机の横に正座して、二通の封筒を、焦げ茶の着物を着た、小柄なのに顔だけが破格に大きい年寄りに渡すと、もとの席へ座る。あの肉食恐竜めいた大顔が立会人なんだろう。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

肉食恐竜が封をして封印の署名をし、大山名人と芯城八段が順ぐりに同じくする。
「なんで二通あるんです？」「念のためです」「念？」「間違いがないように」「はあ」フォギーが頷いていると、「超すごかバイ」と口髭がまたも博多弁で嘆息する。福岡出身でなくても近頃は流行で博多弁を使う人がけっこういる。身近なところでは「アケタの店」のアルバイト、キース山花勢衛門がそうだ。口髭がどうかは不明。で、何が超すごいのかと問えば、「だから、大山名人」と答える。「封じ手にめっちゃ滞りがなか。リアル大山名人そのもの。超すげえっす」と感心することしきりであるが、フォギーにはいまひとつすごさが分からぬ。そもそもこの博多弁親父は実物の大山名人を見たことがあるのか。それはまあいいとしても、これがパフォーマンスだとすると、世の中これくらい地味なパフォーマンスも珍しい。将棋的ワビサビは自分には無理なのかもと、フォギーが考えていると、大顔立会人が一日目の対局は以上で終わり、明日は午前九時から対局が再開されると宣し、大山名人が盤上の駒を木箱に仕舞う。仕舞い終われば箱を錦糸の布袋に入れ、盤上へ置くと、対局者二人が黙って礼をする。「うん、超素晴らしか」と口髭はまた感嘆しきりである。
　フォギーにはどこが超素晴らしいのか全然分からん。たとえば先日一緒にセッションした〈ドルフィー〉の演奏に較べたら、封じ手を書くくらいは児戯に類する。聞いたところでは、〈大感染〉以前にも将棋を指すロボットはあったと云う。当時だって人間の名人そ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

つくりにふるまう、とまではいかずとも、封じ手をするロボットくらいは作れただろうが、その後のロボット工学、ロボット産業は、海底資源の掘削からペットの世話まで、個別の機能に特化した製品が無数に作られる一方で、人間型ロボット、すなわちアンドロイド開発の方向へは進まなかった。性的サービスを含む接客アンドロイドは、一時期は作られたものの、疑似現実技術の進展に押され消えてしまった、と教えてくれたのはほかならぬ山萩氏だ。現実から架空へ。二十一世紀文化の推移のなかで、アンドロイドに限らず、自然生物そっくりロボットの開発製作は山萩氏のごとき一部マニアが藝術趣味で行うだけになっているらしい。趣味と云うなら、たしかに大山十五世名人ロボットなどは、これ以上趣味に徹したものは他に考えられぬ。

芯城と大山名人が順番に廊下を去ったところで、見学者一同はぞろぞろと動き出した。これで終わりらしい。結局のところ見たものと云えば、大山名人が廊下で陰険にコソコソする姿のみ。あとは和服を着た二人の人（一人はロボットだが）が黙って向かい合うのをただ眺めただけ。将棋を指すところはついに一回も目撃しなかったなと、何か釈然とせぬ気持ちを抱きつつフォギーは座布団から立ち上がったのでした。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

32

と云う次第で、生まれてはじめて見た将棋については納得し難いものがあったのだけれど、そのあとの食事についてはフォギーはまずまず納得できた。

墨水亭から本館へ戻ったところで、対局見学を引率した作務衣の刺青剃上頭（タトゥードスキンヘッド）が声をかけてきて、墨水亭の自室で夕食をとる志城八段から、是非御一緒にとの申し出があったと伝えた。モリキテック社が本館に部屋をとってくれたので、どのみちホテルで夕食はとるつもりでいたフォギーは快諾して、同じくホテルに泊まる王花琳にそう断って、夜の七時に再度墨水亭へ向かえば、二階の客室に膳が用意されて、先付けの前菜からはじまる懐石料理をフォギーは堪能し、将棋見学も悪くないなと、評価をだいぶあらためたのでした。

志城の部屋は八畳十畳の二間続き。古い作りなだけにバス、トイレはない。一階に岩風呂があると聞いて、温泉大好きのフォギーの眼はキラリ光ったものの、さすがに風呂に入れろと云うほど図々しくはない。部屋は畳へ絨毯を敷いた上に寝台や食卓を置いたしつらえ、和モダンと云うのか、いくぶん手狭だけれど居心地は良好。畳へ直に座るのは勘弁し

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

て欲しいと思っていたから、食卓の椅子席は嬉しく、会食が刺青剃上頭の加わった三人なのも、芯城と二人きりでは気詰まりなので有り難かった。

メアンドロス模様の刺青を頭部に隈無く入れた剃上頭は、今回の対局を運営する企画会社の人間。もともとは冒険家だそうで、ガソリン二輪車で南極を横断した話や、月の裏側にある「モスクワの海」を単独踏破した話など話題は豊富、しかもその種の人物にありがちな押し付けがましさがなく、食卓を共にする人材としてはまずまずだとフォギーは評価した。フォギーがピアニストだと知って、生演奏にぜひ伺いたいと如才なく述べるあたりも、お世辞と分かってはいても感じは悪くなかった。

すでに一風呂浴び、ジャージーの繋ぎ服に着替えた芯城はだいぶリラックスした様子。人気3Dアニメ「不合格人間ダザイくん」のキャラクタープリントはどうかと思うが、着物よりこちらの方がだいぶまし。自分からはあまり喋らなかったけれど、剃上頭の話には楽しそうに耳を傾け、酒も少しは飲んで、かたや日本酒大好きのフォギーは相当に飲んだ。対局を見てどうだったかと、こちらは下戸だと云う元冒険家が感想を求めてきたのには、納得できませんでした、とも云えぬので、いろいろと吃驚りしましたとだけ答えて、何に吃驚りしたのかと訊かれる前に、ロボットとの対局は人間とはやはり違うものかと芯城に質問した。

「思ったほど違ってませんでしたね」刺身のツマの細切り大根を口へ運びつつ芯城は答え

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

る。
「盤を前にすれば、盤面に集中するしかないからかな」と元冒険家が云えば、
「もっと盤外作戦があるのかと思ったら、全然ありませんでしたからね」と大根を咀嚼(そしゃく)した芯城が応じて、二人は愉快そうに笑う。何が可笑しいのかフォギーが分からないでいると、盤外作戦とは、将棋そのものではなく、対局前や対局中にあれこれ圧力をかけて相手を攪乱する作戦だそうで、大山十五世名人と云う人はこの盤外作戦で有名だったのだと解説があった。
「あの羽生善治でさえ、大山にはやられてますからね。タイトル戦じゃありませんが」
「大山と羽生は指してるんですね」
「指してますね。大山は全盛期は過ぎていたと思いますが、それで羽生に勝つのだからすごい。ま、今回の大山名人は、だいぶ大人しいですよ」と芯城が云って二人はまた笑う。
そこでまたフォギーは先刻から気になっていた質問をした。
「いま大山名人はどうしているんですか?」
ロボットだから食事はいらぬし、風呂にも浸からぬ。寝る必要もない。電磁波遮断区画(ウエーブカットエリア)では情報が流れこんでくることもない。ロボットには淋しいと云う感情はないだろうが、孤独は孤独に違いなく、なんだか気の毒な感じがしないでもない。と云ってこの場へ呼んで一緒に談笑、と云うわけにもいかんだろう。墨水亭二階に四つある客室の、いまフォギ

ーらが食事をしている部屋、そこから一つおいた北東角部屋に大山名人は居ると云う。
「彼」はどんなふうにして夜を過ごしつつあるんだろうか。部屋には2Dカメラが据え付けられ、有線でモニターされていると云うから、本館では様子が分かるんだろうが、ここでは分からぬ。高級旅館の客室に独り佇むアンドロイド。そうした場合、変な話、ロボットは立っているんだろうか。それとも椅子に座るのか。あるいは寝台（ベッド）に横になるのか。うろつき回って窓から外を眺めたり、押し入れを開けてみたりはするんだろうか。そもそも部屋の灯りは点けているのか。などと想像し出すとちょっと気味が悪い。こっそり覗いてみたいが、それもなんだか怖い気がする。料理を運んできた仲居に訊いてみると、とくに呼ばれぬ限り、こちらからは入室しないよう云われていると返事があった。
「じっと正座して、封じ手以降の展開を読んでるんでしょうね」
芯城は実年齢よりもずっと若く見える白面に気弱とも見える笑みを浮かべて云った。
「少なくとも酒を飲んだりはしていない」
「ロボットには気分転換がいりませんからね」元冒険家も云う。「しかし今回は、夜間は休止モードになるはずです」
「そうしてくれないとね。ちょっと全然敵わないからな」とまた小さく笑って猪口を口へ運ぶ芯城は、やはりロボットには勝ち目がないと思っている様子だ。まあ、それも当然、今回フォギーが少しばかり予習してきたところでは、すでに「大感染（パンデミック）」以前に、囲碁も将

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

棋も人間は電脳ソフトに全く勝てなくなっていたと云う。結果、プロの囲碁は開発者同士がソフトを闘わせるものが主流となって、いまではN次元碁の選手権なんて云うのがあるらしい。一方、プロの将棋は人間同士の対局が伝統芸能として生き延びたとのこと。将棋ソフトは「大感染（パンデミック）」を挟んで大きくは進化していないらしいが、どちらにしても機械が人間を遥かに凌いでいることは間違いない。今回のイベントにしても、主役はあくまで大山名人。芯城によれば、そもそもロボット同士が対局する予定だったものが、もう一体が間に合わず、急遽人間が代役で登場することになり、大山ロボットの製作に助言した立場上、芯城が相手をつとめることを余儀なくされたと云うことらしい。つまりは大山名人がいかに振る舞うかが世間の興味の的であって、勝ち負けは最初から問題になっていない。芯城も諦めているはずで、とは申せ、将棋は人と人との知的格闘技と謳（うた）い、機械に負けたってべつに平気だし、と開き直りながら、プロ棋士としてどこか割り切れぬものがあるんだろうとフォギーは同情的に推測し、「アケタの店」の〈ドルフィー〉が果てしなく進化したらと、ちょっとだけ考えた。

山椒をあしらったジャコ飯と赤出しを食べ終え、デザートのメロンを片付けたところで、フォギーは手洗いに立った。仲居に教えられたとおり、昔ながらのLED電球で暗く照明された廊下を進み行けば、左手に「幽玄」と木札のかかった格子戸が現れ、そこを過ぎて、次の木札が「夢幻」。ここが大山名人の居室のはずだ。木格子の奥に見える扉、あれ

を開ければなかにアンドロイドが佇んでいるわけだ、と思うと妙に落ち着かぬ気分になる。

　そこで廊下は突き当たりになって、右に折れて進んだところが手洗い。用を済ませて、廊下を戻りかけたフォギーはそのとき、正面にある「夢幻」の間、その格子戸の陰に人影を発見した。紺青の着物姿は、間違いない、大山名人だ。となればぎょっとなるのは当然、名人が凝っとこちらを眺めているらしいと観察すれば、いよいよ狼狽してしまい、三米ほど手前で立ち竦んだが、もとの部屋へ戻るには前へ進まざるをえない。まあ考えてみれば、得体の知れぬ怪物が待ち構えるわけでもない。馴染みの、とまではいかぬけれど、とりあえずは素性の知れている人間、ではなくロボットだ。フォギーは意を決し、大山名人には眼を向けぬよう足下を見ながら真っすぐ進んで、「夢幻」の間の前ですいと左へ折れようとした、その刹那だ。

「フォギーさん」といきなり声がかかった。かけてきたのは格子戸の向こうの大山名人。魂消つつも、フォギーが「はい」と思わず返事をすれば、格子の隙間から何かが差し出される。

「これを読んでください。お願いしますよ」と大山名人が云う。お願いしますよ、の言葉遣いは、ちょっと買い物でも頼むような感じで、軽快さに釣られるようにフォギーが受け取ったのは折り畳んだ紙だ。

CamScannerでスキャン

「ほかの人には絶対に知られないようにしてください。絶対ですよ。じゃ、お願いしましたからね」

それだけ云った大山名人は背中を見せ、扉のなかへ消える。え、え、なに？　なんなの？　と心で叫んだフォギーは急に夢から覚めた感じになり、このときになってはじめて、大山名人が自分より背が低いことや、顔の色艶がやけにいいことや、白檀の香りがしていたことや、声が甲高くて早口であることなどの観察印象が心に浮かべば、汗玉がころりころりと背中をこぼれ落ちるのを覚えた。いまさらながらに見れば、格子戸の奥で扉は固く閉ざされ、なかからカチリと施錠する音も耳に残っていた。

フォギーは芯城の部屋へ戻り、入室する直前、手にしたものをジャケットのポケットにしまったのは、ほかの人には知られるなと、念を押した大山名人の言葉が頭にあったこと以上に、フォギーさんと、名前を呼ばれたことが錘になった。ロボットの云うことを聞く義理はいささかもないけれど、「彼」が自分の名前を、それも本名でなくフォギーの名で呼んだことが、たったいま遭遇した出来事を芯城たちに報告するのは、「手紙」を読んでからにした方がいいのではとの直感を生んだ。中身は見当がつかぬけれど、読んでみて問題があるようなら、モリキテックの技術者に報告すればいいし、場合によっては大山名人に直接問い質してもいい。と、そのようにフォギーは咄嗟に判断したのだけれど、少なくとも大山名人に質問する機会は永遠に失われた。なぜならその夜のうちに、大山ロボット

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

は「殺害」された――つまり破壊されてしまったからだ。

33

ロボットの「死体」が発見されたのは、深夜二時の少し前、正確にはa.m.1:58。一階岩風呂の脱衣場に倒れているのが発見され、すぐさま技術者が駆けつけたところ、電子回路が回復不可能なまでに破壊されていた。脱衣場に設置された旧式の飲料器の電線が引き抜かれ、コンセントに差し込まれた電線の端の、剥き出しになった銅線に焦げ跡があった事実から、電線をロボットの腰部にある蓋口から差し込み、放電させて回路中枢部を「焼き殺した」ものと推測された。

モリキテック社の技術者らが異変に気づいたのは午前一時半頃。たまたまモニターを覗いた一人がロボットが部屋にいないのを発見した。これはかなり奇妙な事態で、と云うのは、ロボットは休止モードだったからだ。21:00に予定通り「大山名人」は窓前の応接椅子に腰掛ける体勢で休止状態に入り、それを見届けて技術者たちはモニターから離れた。あとは朝まで動かぬはずで、ところが、いない。技術者たちは驚き、かつ狼狽えた。ロボ

ットはどこへ行ったのか。墨水亭館内でモニターされている場所は限られるから、遠隔からは捜索ができぬ。すぐに離れ家へ向かうべきであったが、モリキテック技術者は対局終了までロボットには触れぬ取り決めだ。若干の混乱の後、ホテル副支配人が墨水亭へ向かい、従業員の一人が風呂場で「死体」を発見した。

即座に関係者が集められ、主催者の判断で警察に通報された。「器物損壊」の犯人は何者か。モニターには、大山ロボットが自分で椅子から立ち上がり、客室を出て行く姿が記録されていた。それがちょうど午前一時。墨水亭の戸締まり自体は簡便だけれど、認証なく電磁波退避区画に入り込む者があれば防犯システムが作動する。したがって内部に居た人間の犯行が疑われるわけだけれど、事件ががぜん謎の色を濃くしたのは、大山ロボットが倒れていた風呂場が「密室」だと判明したからだ。風呂場の窓は施錠され、脱衣場の戸にも錠が掛かっていた。しかしそれより何より不可解なのは、ロボットがどうして風呂場へ向かったかである。

かりに「夢幻の間」で犯行がなされたならば、一部始終がカメラに捉えられてしまうし、そもそも客室の電源は非接触式、凶器になるコンセントも電線もない。つまり風呂場での犯行は計画的と考えられ、だとしたら犯人はどうやってロボットを風呂場までおびきだしたのか。技術者らは揃って首を傾げ、これこそが本件最大の謎であった。

翌日の対局は中止となり、関係者は対応に追われた。一方で警察は捜査を進め、犯行時

問に黒木亭内にいた芯城龍太郎八段を尋問したのは当然だ。一日指してみたところで勝ち目がないと悲観した将棋指しが相手を亡き者にした、との想定にはやや無理があるものの、外部の者の犯行は考えにくいところへもってきて、風呂場には芯城の毛髪ほかの生体片が残存していた。これに対して芯城は、対局が終わった直後の午後七時前に風呂に入り、あとは便所に行くくらいでずっと自室に居たと応答した。が、証拠も証人もない。通常なら芯城の行動の跡は電脳網に残る可能性大だが、電磁波退避区画ではそれも無理。

芯城には少なくとも動機と機会はあったと結論された。しかしモリキテック社の技術者の口から、一般の家庭用電源でここまで的確に回路を破壊するのは、ロボット工学に詳しい人物でなければ不可能だとの証言があって、学生時代から理数系がカラキシ駄目だったお陰で芯城は容疑から外れた。当夜黒木亭にいた従業員も同様。ついでながら同じ理由でフォギーも容疑から外れます。となると、誰かが何らかの方法で建物内に侵入したとするしかないが、そのような痕跡はどこにもない。

さらにもう一つ、奇怪事が朝になって判明した。と云うのは例の封じ手だ。対局中止と決まって、立会人が保管していた封筒を開いたところ、一通は正しく「9四歩」の手が図に示されていたのに対して、もう一通の中身が空だったのである。封筒は厚地の和紙だから、受け取った際に立会人が気づかなかったのは仕方がない。将棋をよく知らぬ警察官は、それがどうしたの？　との反応だったが、封じ手が空っぽとは前代未聞だと、将棋関

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

係者は首を傾げた。なかに入れるはずだった図面の紙はどうしてしまったのか。可能性だけを考えれば、封じ手をした大山ロボットが持ち去ったと考えるしかないが、肝心の紙がロボットの身辺をはじめ墨水亭のどこからも発見できず、いよいよ謎は深まる。

むろんモリキテックの技術者をはじめ関係者は、「夢幻の間」のモニター記録を調べた。最初は本物の名人戦同様、対局場以外はモニターしない予定だったが、土壇場になってモリキテック社の技術者たちの要望で簡便な2Dカメラが置かれただけなので、情報は十分でなかったが、それでも二、三の興味を惹く事実が判明した。対局場から戻った大山ロボットの入室は18:42。すぐにロボットは寝台脇の机に向かって紙本を開いた。これは古い詰将棋の本で、部屋に本を用意しておくから、休止中以外の時間、詰将棋を解いて過ごしたらどうかと、技術者たちは大山名人に「助言」してあった。大山ロボットは「助言」に従い勤勉に詰将棋を解き続けた、とは必ずしも云えなくて、21:00に休止モードに入るまでに、何度も落ち着きなく立ち上がる姿が映像に残っていたのだ。

それで何をしたのかと云えば、椅子を離れて向かった扉近辺はカメラの死角で、カメラにはマイクが付いていないので音声記録もない。大山ロボットはしばらく画面から消えてまた戻ってくる。その繰り返し。もちろん技術者らはこれをリアルタイムでも観察していた。扉にノックがあるなどすれば、ロボットは正しく応接するはずだから、扉へ向かうこと自体は異常ではない。ただこう何度も席を立つのは、ささいな物音を自分への合図だと

過敏に捉えているのかもしれず、技術者らはだいぶ心配して、21:00に休止モードに入ってほっと安心したと云う。そのままロボットは休止を続け、しかし午前一時、ふいに立ち上がって風呂場へ向かう。

休止前にロボットが扉へ立ったのは計六回。はじめの五回までは三〇秒以内に椅子へ戻ってきたが、最後六回目、20:43に立ったときだけ、三分を越えている。誰かの訪問の有無をたしかめるだけで三分は長い。「彼」はいったい何をしていたのか？

と、ここまで云えば、もう分かるよね。そのとおり。その時刻、大山ロボットは扉の外でフォギーに手紙を渡していたわけだ。その際彼がフォギーに手渡した紙が、失われた封じ手用紙にほかならぬことも分かるはず。となると謎の鍵を握るのはフォギーでなければならぬ。この夜、フォギーはどうしていたのか？

34

会食を終えたフォギーが墨水亭から本館へ戻ったのが、大山アンドロイドがすでに休止態勢に入っていた夜の九時一〇分。明日は午前九時から対局がはじまるから、是非また見

にくるといいと、一緒に戻った剃上頭の元冒険家が誘ってくれたが、一度で懲りたフォギーは、ちょっと仕事の予定が入るかもと、予防線を張りつつ二階の客室へ向かった。ツインの室に入って、まずはお風呂、と思ったけれど、やはり「手紙」が気になって、すぐにポケットから取り出した。

八つに折り畳まれた手漉き和紙ふうの紙片を開けば、集積回路の織り込まれたＤＳ紙ではなく、天然パルプ紙である。そこへ黒インクで書かれているのは将棋の図面だ。これはいったいどう云うことだと、訝しく思えば裏面にも字がある。赤いインクの横書き文字だ。

my Funeral すぐに　はやく
piano を　千駄木で　だれに
も知られずに　key は乱歩訳
『赤き死の仮面』にあり——
この message を Miss Foggy に
かならず手渡して　だれにも
知られずに　T. Y.

ここでやや唐突ですが、フォギーは字が下手糞です。が、下には下があるもので、母親は思わず吹き出してしまうくらいにひどい。字というよりまるで虫の這い跡である。だって字なんて書いたことないんだもの、と母親は不貞腐れるが、たしかにこの差は、地球各地で巻き起こった国民言語復興運動（ルネッサンス）を経験したフォギーの世代が子供時代にペン習字を習わされたお陰で、そのわりに上手くならなかったのは単純に熱意と才能を欠いていたから。そのフォギーから見て、赤筆（ペン）の字は、うまいなあ、と思わず溜息が漏れてしまうくらいに整っている。書いたのはやはり「大山名人」なんだろうかと考えたとき、大山ロボットは毛筆で色紙に揮毫（きごう）ができると聞いたのを思い出した。将棋のみならず、字でも人間は機械に負けてしまうのだなと、なにか世を儚（はかな）む感じになったのは、フォギーが酔っ払っていたせいだ。酔うとフォギーは黄昏（たそがれ）に涙する傾向があります。

それにしてもなんで赤筆（ペン）なんだ、それも将棋の裏なのだと、疑問を浮かべてすぐ、あのとき、とは、夕方の封じ手のとき、大山ロボットが書いたのだと思いあたった。大山ロボットは立ったまま画板の上で封じ手を書いたはずで、そんな悪条件下、これだけ奇麗な字が書けるとは大したもんだな、と、あらためて感心している場合じゃいまはなくて、問題はメッセージの中身だ。

一瞬はなんだか分からなかったが、「T.Y.」の署名イニシャルには覚えがあって、これがタカヤ・ヤマハギだと見当がつけば、「Miss Foggy」の呼び方や、「my funeral」すな

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

わち「私の葬式」「piano」「千駄木」の言葉などを勘案して、山萩貴矢氏からのメッセージだと判読できた。しかしなぜそれを大山名人ロボットが、しかも封じ手用紙に書いて寄越さねばならぬのか。訳が分からない。何かしら事が起こりつつあるとの感触はあるものの、自分とは無縁の、遠い世界の出来事のようで、思考がふわふわクラゲ状に漂流するのはやはりアルコールの脳への作用なんだろう。赤インクの字をしばらく眺めていたら急に虚脱感を覚えて、ああ、なんか面倒くさい、ぜんぶ明日明日、もう寝ちゃおと、シャワーも浴びず服も脱がず、酩酊バンドマン、フォギーが寝台(ベッド)にダイブしたとき、室の通信板(メッセージボード)から柔らかな電子音が流れ出た。

電脳網(ネット)通信にフォギーは原則即時(リアルタイム)では応答しない。仕事私用を問わず相手に応じてAIが適宜処理してくれる。が、ホテルの「内線」となると、フロントからかもしれず、寝台にうつぶせになったままYesと声を出せば、2223室のMs.Wongが連絡を求めていると英語メッセージが女性合成音声で流れて、またもYesと返事をすれば、〈花琳です〉と声がした。

「あ、おはよう」フォギーの寝惚け挨拶にはとりあわず、〈これから部屋にドルフィーを連れていきますね〉と花琳は用件を述べる。「明日でもいいけど」と応じると、夕方端末の設定をいじったせいで、ドルフィーがしきりと飼い主の傍へ行きたがっているのだと云われれば、連れてくるのもかまわない。「シャワーを浴びちゃうから、二〇分後に来てく

れる」とフォギーは伝えて、手提げ鞄から「サメリン」のカプセル錠を出して嚥み、バスルームへ向かった。

「サメリン」は竹内製薬のアルコール分解薬。アセトアルデヒドも迅速に分解するので、とんでもなく深酒しても、これさえ嚥めば一五分後には素面となり宿酔いもない。コスプレ居酒屋でべろべろになった男が制服に着替えつつ「サメリン」を口へ放り込み、すぐさまジェット機を操縦する電脳網CMが誇大広告だと告発され、腎臓に障害を起こす恐れありと警告もされているけれど、効くのはたしかで、フォギーも平生から愛用している。

と云う次第で、ほぼ二〇分後の21:52、ホテルのバスローブを纏ったフォギーは、運搬籠を提げた花琳を部屋に迎え入れた。となれば、先刻の墨水亭での出来事および大山ロボットからの手紙につき、花琳に話すことになるのは必然。手紙には「だれにも知られずに」の言葉があり、他の者には絶対知られるなとの大山ロボットの口頭指示もあったわけで、これがあっさり無視されてしまったのは、天才といえども花琳はまだ二〇歳の子供だし、女子高生の変なコスプレをしているし、ちょっと見がアンドロイドのようだし、と云うのは理由にも何にもならないけれど、その辺りは、定められた軌道からアドリブで逸脱し、固着化した秩序を裏切ることで世界を活性化せんとするジャズの精神、これに日頃からフォギーが親しむゆえであって——早い話がいい加減さゆえなのでした。しかも加えて、会ってまだ二度目なのに、花琳とは昔からの知り合いであるかのような感じがあっ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

て、つまりウマが合うというやつ。それに何より話はロボットのくれたメッセージであるとなれば、専門家の花琳よりふさわしい相談相手はない。

この時点で融水亭の大山ロボットはなお休止中、まだ異変は生じてはいなかったけれど、話を聞いた花琳は顔色を変える具合となり、それが感染ったのか、フォギーの身にも得体の知れぬ切迫感が押し寄せて、頭の芯に不安の冷風が吹き込む感じになったのは、決して「リメリン」の副作用だけではないのでした。

35

「『この Message を Miss Foggy に』となっているから、これは別の人に渡すつもりだったわけですよね」

フォギーから一通りの話を聞いたあと、手にした「手紙」に眼を据え沈思していた花琳が口を開いた。窓前の人造紫檀の小卓を挟んで向かい合わせに座り、バスローブの膝に乗った子猫の喉の毛をくすぐっていたフォギーは、そうね、と頷いた。

「誰に渡すつもりだったのかな？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「芯城くんじゃないかな」フォギーは即答した。大山ロボットは墨水亭に芯城が泊まることを知っている。それで芯城に「手紙」の仲介を頼もうとしたのだろう。ところが、たまたま墨水亭に居た自分が廊下を通りかかったので直接渡したのだ。フォギーがそう云うと、What a surprise！と、夕方と同じ日本女子高生スタイルの花琳が眼を見開くので、フフ、私の明晰さに天才少女も恐れ入ったらしいぜ、とフォギーが考えているところへ花琳が言葉を足した。
「師匠は、芯城八段のこと、芯城くん、って呼ぶんですね」
「って、そこ？　だって知り合いだし。年下だし」
「師匠と芯城八段は恋人同士なんですか？」
「え？　べつにそういうわけでもないけど」とここでフォギーはいくぶん狼狽気味となったけれど、小娘でもあるまいし、と云うか、普通一般の小娘はそれくらいで動じたりはしません。
「セックスはしました？」
「え？　て云うか、いまのところまだ、と云うか、してない」
「わたしとしたいですか？」
「え？」
「わたしは、どうしてもってほどじゃないけど、師匠がしたいのなら、してもいいですけ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ど」

虚をつかれたフォギーの困惑をよそに緑髪女子高生は切れ長の眼を真っすぐ向けてくる。買い物をしてこようかと声をかけるみたいな、格別の感情のこもらぬ、ごく事務的な調子だ。一方のフォギーはどぎまぎしつつ、とりあえずその気はないとかろうじて返答をすれば、ひとつ頷いた花琳は、

「でも、メッセージがどうして手書きなのかな？」と、何事もなかったかのように話をもとへと戻した。

「そこはたしかに疑問」即席セックス問題を後方へ見遣りつつフォギーは相づちを打つ。

「なにも封じ手の紙に書かなくてもいいと思うんだけど」

「たぶん、ですけど」と花琳は受けて、「ほかに手頃な紙とペンがなかったからだろうと推理した。墨水亭の客室にはメモ用の電子帳はあっても天然パルプ紙はない。あったとしても今度はペンがない」

「だから、オオヤマがメッセージを書くとしたら、封じ手のときしかチャンスがなかった」

「なるほどね」とフォギーは頷き、すぐにまた疑問を口にした。

「でも、封じ手の紙なんかに書いちゃって、大丈夫なのかな」

大丈夫なわけがない。将棋関係者なら即答するところだが、フォギーも花琳も将棋関係

者ではありません。
「大丈夫なんじゃないかな。一枚あったし」花琳は簡単に片付ける。「それより問題は、どうして紙に書いたのか」
たしかにそれはそうなので、山荻氏が連絡をくれるなら電子メールを使えばいいはずだ。
「これ、本当に山荻さんのメッセージなのかな？」とフォギーは云ってみた。なにしろ通信の方法としてはあまりに変則かつ異様である。うむむと呟いて、軟質プラスチックでできたみたいな脚を椅子の上で組み直した花琳の頭上に、そのときマンガの吹き出しが出現した。驚いたフォギーが眼を向ければ、吹き出しには蛍光虹色の「？？？」の記号が点滅している。
「あ、これ、さっき師匠の端末をいじったとき、ついでに出るようにしたんです。面白いでしょ」
まあ詰まらなくはない。詰まらなくはないが、他人の接眼レンズ（コンタクト）に勝手にいろいろ映されては困る。すると膝の上のドルフィーが花琳の頭上に顔を向け獲物へ飛びかかる格好になったのは、彼にも吹き出しが見えているかららしい。こういう場合の猫の顔と云うものはじつに間抜けで可愛い。
花琳は、それが考えるときの癖なのか、えくぼを人差し指でつつく格好でなおしばらく

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

吹き出しを点滅させていたが、ほどなく口を開いてフォギーに質問した。

「師匠はドクター山萩と最近連絡をとりました？」

ケープタウンを訪れた二日後、フォギーは『大正池』の音響設計を完成させ、その旨山萩氏にメールで報告した。これに対して山萩氏本人からの返事はなく、「モリキテック・ヤマハギ記念財団（メモリアルファウンデーション）」からギャラの支払いの連絡だけがあった。架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の建設はすでに山萩氏の手から離れたらしいと了解しつつも、『大正池』の出来映えにつき、山萩氏から一言なりとも感想が欲しかったなと、ちょっぴり淋しい気持ちにはなった。とは云え、容態がかなり悪いのかもしれず、「葬式」を控えていろいろあるんだろうなと想像すれば、フォギーごときが文句を云う筋合いではなかった。フォギーの返事を受けて花琳がまた問う。

「my funeral っていうのは、どういうことなのかな？」

「それはだれね」膝の子猫をあやしながら、フォギーは山萩氏から葬式でピアノを弾いて欲しいと頼まれた一件を説明した。「？？？？」が花琳の緑髪の上方に明滅して、ドルフィーが三角耳をぴんと立てて見詰める。

「それで『はやく piano を』って書いてあるわけか」と花琳が確認するように云った。

「でも、葬式をすぐにって云うのは分かるけど、どうして『だれにも知られずに』なんだろう？　人に知られなかったら、お葬式にならないでしょう？」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

Certainly(たしかに)と応じてすぐにフォギーは、もしかすると容態が急変したために、人を集める暇がなく、せめてピアノを聴きながらこの世に別れを告げたいと山荻氏が願ったからではないかと思い至り、花琳にそう云ったとたんに焦りの蟲が腹中で騒ぎ出した。

「だとしたら、すぐやらなくちゃ。間に合わなくなっちゃう。はやく千駄木に行かないと」

フォギーが椅子から立ち上がれば、ドルフィーがぴょんと飛んで花琳の膝に乗り移る。その花琳が云う。

「でも、どうして千駄木なのかな？　接続端末(アクセスターミナル)ならホテルにもあると思うけど」

「それはだね」とフォギーは説明する。疑似環境(ヴァーチャルスペース)内のピアノを弾けるだけの分身(アヴァター)を操作するには、一定以上の性能を備えた接続端末装置(アクセスターミナルステーション)（ＡＴＳ）が必要なはずで、それが千駄木の家にあるからに他ならぬ。と自分で云ったとたん絶望の泥に足をとられた。果たして他所の装置を自分は扱えるか。これは難しい、と云うか、全然自信がない。嗚呼(ああ)、だめだ、と声を出したフォギーに向かって、どうしたんです？　と問うた花琳にそう伝えると、

「それだったら、わたしがなんとかできると思いますけど」と緑髪女子高生は頼もしく云い、でも、変ですよね、とすぐに言葉を加えた。

「急いでいるなら、どうして紙に書いたメッセージなのかな。これだと時間がかかりす

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ノーかもそうだ」からも山秋氏の命の火が消えかかって、急遽「葬式」を執り行うこととなったのであれば、電脳網メールで連絡するのが手早く確実だろう。

「昨日の夜、舞浜の工場でオオヤマを整備したとき、ドクター山秋もいらしたんです」

膝にドルフィーを載せた花琳が頬のえくぼをつくりながら話し出し、フォギーはいったん椅子に座り直した。「いらした」とは、もちろん生身ではなく、電脳空間経由で、の意味だろう。それにしても花琳はちゃんとした日本語の敬語を使える。たいしたものだなとフォギーが感心するうちにも花琳は先を続けている。

「ドクター山秋がオオヤマのOSに直接入り込んで調整したんですけど、あのとき、このメッセージを書くよう、命令を入力したと考えられます」

封じ手用紙を持ち上げながらそういった花琳は、他の者がそのような命令をオオヤマにすることはまず不可能だと断じたうえで、今朝方、大山ロボットのCPUにやや不具合が生じたのはそのこととも関係があるのかもしれないと推測を述べた。

「でも、どうしてロボットに書かせるなんて、手間のかかることをしたのかな」山秋メッセージの不可解さがいよいよ胸に落ちたフォギーはいってみた。「もしお葬式をはじめたいのなら、その時点でメールで連絡すればいいわけでしょう?」

「電脳網を使えない、あるいは、使いたくない理由があったんでしょうね

「どんなっ」

うむむ、と唸った花琳はまたも吹き出しを点滅させる。今回は「?」の数が八個、一六個、三二個と、次々増殖して賑やかだ。ドルフィーの位置からは見えぬはずなのに、吹き出しが出たとたん、びくりとなって花琳の頭上方向に光る眼を据える。獲物を狙う格好で尻を小刻みに振る子猫が、いよいよ意を決して花琳の肩を駆け上ろうとする寸前、吹き出しがふっと消えた。

「メッセージに『だれにも知られずに』とありますよね。二回も書いてある。つまりそのせいなんじゃないかな」

「でも、メールだって、人に知られないで連絡はできるでしょう?」

「電子(エレクトロニック)メールのセキュリティーは百パーセントじゃないですからね。師匠の使ってる暗号ソフト程度だと、盗むのは、あれですよ、赤ん坊の、あれです」と一瞬云い淀んだ花琳は、電脳網(ネット)を素早く参照したんだろう、「赤子の手をひねるより簡単です」とすぐに云い直し、一方、天然紙にメッセージを書いて渡せば、直接見られぬ限り、人に知られる可能性はないと続けた。

「『手渡しで』とわざわざ書いたのも、電脳網(ネット)を使うなって云う意味でしょう。ドクター山荻は絶対に誰にも知られないで、師匠にお葬式をして欲しいと願った」

と、そこまで云った花琳はふいに黙り込む。それから立ち上がって、寝台脇(ベッドサイド)の操作盤を

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

いったのは、早く連絡遮断をかけたらしい。

「もう少し通話すればよかったかな」と言った花林は、山科氏の通信の仕方から、ミッ

トーと連絡に、切れた。たないふの意図が読み取れる。だから自分たちの会話も川

かはずかいい思いたかったが聞した。それからふのようの、下紙を出し買入で、誰

にも見せずに駄目ですよと注意しつつギャーに渡し、ドルッテーを運転席へ入れた。

「じゃ、行きましょう」

「はい、どうぞ」

だから千駄木のじゃ山科の家です、とふたりで花林は扉へ向かった。だが後にはど

うぞ。

38

翌朝、午前、ウィザー・花林は小さな管理棟の大きな窓から無人T-33で千駄木へ向かっ

た。

ここからたぶんの道は紙漉きとった……、愛用の支給のニールを巻く、助の運転席を持

げたフォギーが一五分かからずにロビーへ下り得たのは、日頃愚図つきがちな彼女としては上出来の部類。逆に、五分と云ったくせに花琳はフォギーを一〇分以上待たせてから昇降機(エレベーター)を下りてきた。

「喋るな」の印に人指し指を唇の前に立ててみせた花琳がフロントに何事かことづけてから'Taxi'に乗り込み、車が走り出したところで、「攪乱(スクランブル)をかけましたから、喋っても大丈夫です」と許可を出したのは、ホテル景雅園くらいになれば客室は盗聴洗浄(bug cleansing)されているが、ロビーや'Taxi'は違うし、たとえ盗聴洗浄されていても、会話を盗み聞きすることくらいはその気になればできてしまうからだ。

「それで、どうするの？」完全に主導権を奪われた格好のフォギーが問えば、とにかく山萩氏の指示どおり「葬式」をやった方がいいと花琳から返事がある。

「何か普通じゃない意味があると思うんですけど、やってみないことには分からないし」

たしかにロボットに手紙を書かせる、それも和服を着た禿頭のロボットに、と云うのが平凡であるはずがない。

「でも」と急に不安になったフォギーは発言した。「ピアノはどこにあるのかな。ベヒシュタインが疑似空間(ヴァーチャルスペース)に出来てるとは云ってたけど」

「ドクター山萩は何か云ってなかったんですか？」

山萩氏は自身の葬式について、招待客には架空墓(ヴァーチャルトゥーム)のツアー（「さよならツアー(フェアウエル)」と山

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

荻氏は云っていた）にまずは参加してもらい、『新宿末廣亭』や『新宿 Pit Inn』などを見学して、最後にちょっとしたサプライズを体験した後、フォギーが奏でるピアノのなか、舟に乗り込み桃源を遡ると、ざっと段取りを語っていた。

「サプライズって云うのがなんだか分からないし、ピアノがどこにあるとも云ってなかったと思うけど」

フォギーの説明に頷いた花琳は、べつのことに注意を促した。

「オオヤマ経由のメッセージには、鍵（キー）のことが書いてありましたよね」

key は乱歩訳『赤き死の仮面』にあり――たしかにそうあった。これについてはじつはフォギーに心当たりはあって、それと云うのも、当の本を千駄木で見たことがあるからだ。

『赤き死の仮面』――原題『The Masque of the Red Death』は、米国人作家、Edgar Allan Poe（１８０９〜１８４９）の書いた短編小説。ミステリやＳＦに造詣の深い山荻氏が何より好きな作家がポーであり、なかでも『The Masque of the Red Death』には偏愛と呼んでよいほどの情熱を持ち、これが最初に掲載された英文雑誌（大変な稀覯本らしい）をはじめ、あらゆる版や翻訳本の蒐集が千駄木の図書室（ライブラリー）の一画を埋めているのをフォギーは見たことがある。乱歩訳『赤き死の仮面』とは、二〇〇一年に迷宮社（ラビリンス）から発行された江戸川乱歩による日本語訳のこと。そもそも迷宮社（ラビリンス）は山荻氏の友人が起こした会社

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

で、『赤き死の仮面』に関しては、自分が装丁のデザインをさせて貰ったのだと、控え目ながら得意の色を隠さず山萩氏は話していた。当の紙本を書棚から手に取ってフォギーに見せたとき、もし好きな本を一冊だけ墓に持っていくとしたら、この『赤き死の仮面』の江戸川乱歩訳を選ぶと、山萩氏が微笑みつつ述懐したことも思い出された。

「鍵って云うのは」フォギーの話に頷いた花琳が口を開いた。「何の鍵なのかな？」

「『赤き死の仮面』を読めば、ピアノのある場所が分かるとか」

「その本はどこにあるって云いました？」

「だから千駄木の家の図書室（ライブラリー）」

「それは現実（リアル）の話ですよね」

「そうか。なるほどね。つまり架空墓（ヴァーチャル・ウーム）のなかにも同じ本があるって云うことね？」

もしそうだとすれば、ピアノの響くなか、舟に乗った山萩氏の分身（アヴァター）は、架空（ヴァーチャル）版の乱歩訳『赤き死の仮面』を抱えて消え行くのかもしれない。その可能性はあるなと、フォギーは大きく頷く。

「だとしたら、架空墓（ヴァーチャル・ウーム）にも図書室（ライブラリー）があるのかも。サプライズって云うのは、それと関係があるのかもしれないな」

フォギーの言葉に今度は花琳は答えない。凝（じ）っと考え込む様子である。仕方なくフォギーも考えてみたけれど、妙だ妙だと思うばかりで何も思いつかぬ。諦めて、車窓を風景モ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ードに変え、なぜだかいつもより暗く見える夜景を眺めているうちにだんだん眠くなり、うとうとしたと思ったら、着きましたよ、と花琳に起こされた。

不忍通り方面からだと、楠や樫が鬱蒼とする寺の黒塀が続く一画があって、それを過ぎた先の築地塀(ついじ)が山荻邸。反対隣は一階が画廊になった煉瓦外壁の低層マンション、そのさらに先は樹木豊富な公園で、裏手が庭の広い医療研究所の敷地と云うこともあり、一帯はこんもりした山森のごとく、山荻邸表門はあたかも神社森の鳥居のように見える。

運搬籠(キャリーケージ)を提げて自働車から降り、瓦屋根の載った冠木門(かぶきもん)に立てば、門柱に「山荻」の表札。と見えて、これはただの表札ではない。虹彩型(パターン)と掌紋を読み取る式の、御影石に擬した認証板(サーティフィケーションパネル)だ。築地塀そのものは乗り越えたり破ったりするのは難しくなさそうだが、認証なくそうすればたちまち警備システムが作動する。山荻氏には同居する家族はなく、家は完全自動管理だから、普段屋敷に人はいない。

花琳は演奏家〈ドルフィー〉の世話の必要から、千駄木の家に出入りできるIDを貰っている。フォギーの方はやや心配だったが、表札を覗き込んで掌をつければ認証完了の表示が淡く浮かんだ。自動で開いた木戸の敷居を跨ぐと、雑木やススキの茂る、あまり手入れのよくない庭だ。もっともこれはわざとで、つまりは「世捨て人の侘び住まい」が山荻邸の意匠思想(デザインコンセプト)。雑木の茂みの奥の、古風な常夜灯が屋根瓦を鈍く光らせる平屋は、侘び住まいと云うには大きすぎるけれど、濡縁の付いた羽目板の家屋には作り込んだ渋さが漂

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

う。秋風蕭々、草陰にすだく虫声といい、カーテンのかかった硝子戸といい、窓の暗々とした佇いといい、昭和の昔へと彷徨い込んだ感じになるのは、むろん設計者の狙い。

大谷石の敷石を踏んで、芭蕉や南天の植え込みを横目に、豆電球に暗く照らされた玄関の、磨硝子の引戸の前に立てば、脇の板壁にも門と似た認証板（サーティフィケーションパネル）がある。再度認証を受けた後、今度は戸を手で引いて、三和土（たたき）で靴を脱いで上がり込んだ。豆電球の橙色の光のなか、靴を持ち、線香の匂いのする杉板の廊下を進めば、ほどなく地下へ向かう階段にぶつかる。二人繋がってぎしぎし軋む階段を下れば、白色光の照明がいきなり点って、正面に「世捨て人の侘び住まい」にはまるでそぐわぬ強化プラスチックの扉が現れた。

扉をDNA型判別を含む生体認証鍵（バイオメトリクキー）で開ければ、ここから先が小ホールや収蔵庫、山荻氏の個人工房を含む地下空間（ベースメントスペース）だ。ホールだけは隣の画廊からも入れるようになっていて、そちらの出入口は普段は閉鎖されているが、一般向けの催し物があれば（ほとんどないが）客は画廊で受付をして客席へ向かう。

地下空間へ入ったところで花琳とフォギーは靴を履き直し、動くに従い順番に点る照明のなか、網状樹脂合板の廊下を進む。右手に現れた扉が小ホールへの通路、左に並ぶ扉が図書室（ライブラリー）や収蔵庫。地下空間入口の板表示（パネルサイン）から、訪問者がいないのは分かっていたが、静まり返った空間にやはり人の気配はない。廊下奥正面の扉をまた生体認証鍵（バイオメトリクキー）で開ければ、下方へ向かう螺旋階段があって、そこを降りきると円柱空間の壁に扉が四つ、うち一つが椭

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

円形の室に通じていて、仮想現実空間への接続端末装置(アクセスターミナルステーション)（ATS）が備え付けられているのがここだ。

室中央に床から生えた発光茸みたいな人造石英の卓があり、それを囲んで花弁のごとく据えられた繭型のATSが五基。クローム仕上げで艶やかに輝く「繭」は、フォギーが自宅で使う素朴な頭蓋覆い型(スカルカヴァー)のと較べると、社長椅子とパイプ椅子くらいの差がある。なんだかすごいな、とフォギーが思わず嘆声を漏らしたのは、千駄木の家には何度か来ていたものの、ここへ入るのははじめてだったからで、ATSが映画に出てくる冷凍睡眠装置を想わせることをはじめ、指示灯(インジケータライト)らしい微細な光点の明滅する濃紫の壁といい、天井から下がる立方体の透明スクリーンといい、宇宙船の内部にいるような感じがする。

早速、花琳が発光茸の操作卓(コンソール)に向かい、接触盤(タッチパネル)を操作しはじめる。少し時間がかかるかもしれないから珈琲でも飲んでいてくれと花琳が云うので、一度室から出て、螺旋階段下にあった食品給仕機(フードサーバー)から焙じ茶を出し、花琳の斜め後ろ、壁から張り出すテラスに座って、籠(キャリー)のドルフィーをからかいながら飲んでいると、

「It's strange」と花琳が声をあげた。

「どうしたの？」花琳の背後に立ったフォギーが問えば、すぐには返事をせぬまま、花琳は両手の指で接触盤(タッチパネル)の図像を猛烈な勢いで動かす。数字の列がずらずら画面(スクリーン)を覆い尽くした後には、太陽系を想わせる図像が現れ、回転する惑星が光の渦を成したかと思えば、蛍

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

のごとくに飛び交う青白い立方体が寄り集まって、ダムに似た構造物が出来上ったとたん崩れ去り、すると次には能面みたいな人の顔が画面(スクリーン)を占領して、口から眼から鼻から記号の列をぞろぞろ吐き出す。花琳の指さばきはハープ奏者のごとく、優雅かつ素早い。フォギーとて音響設計士、この種の機械に馴染みがまるでないのではないけれど、この速度にはとてもついていけぬ。

「The tomb is closed down」花琳が口を開いた。それからすぐに「お墓に入れなくなっています」と日本語で報告する。

「どういうこと？」

「I don't know」と応じた花琳は、なお忙しく指を走らせ、それからまた云う。

「やっぱり駄目。閉鎖されてる」

「入れないの？」

「入れません」と云った花琳は、あ、ちょっと wait, wait と慌てた感じで声をあげた。

「師匠のモリキテックID、あります？」

あると答えたフォギーが、腕輪端末(ブレスレット)から一二桁の数字を送信しようとすると、室は電磁波遮断(ウエーブカット)されているから電脳網(ネット)は使えないと花琳が注意するので、ビニール手鞄(バッグ)からIDカードを取り出した。花琳がカードの数字を画面右端に浮かび出たキーボードで入力する。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「師匠の名前は、Kiri Kiio で間違いないですか？」

淡いピンクに輝く茸卓に向かったまま花琳が訊く。間違いないと答えると、花琳はまた優雅な手つきで盤を操作する。しばし待てと云うのでしばし待つ。

やがて緑髪をかきあげた花琳は、ふうと一つ息を吐く感じになった。

「不思議です」

「どうしたの？」

「架空墓への入口はすべて封鎖されているんですけど、『大正池』だけ入れるようになっているんです」

「そうなんだ」

「それも、入れるのは一人だけ」と教えた花琳が振り向くと、フォギーはもぐもぐ口を動かしている。

「なに、してるんですか？」

「なにが？」

「なに、食べてるの？」

「肉まん。ちょっとおなかが空いたかな、と思って。ここの給仕機の肉まん、相当いけてるよ」

[illegible]肉まんにはまた齧り

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ついたフォギーが口を開いた。
「で、何だっけ？」
「だから、架空墓に入れる人間は世界で一人だけなんです」と答えた花琳の声に混ざり込んだ憤然たる調子には構わず、へえ、そうなんだとフォギーが相づちを打てば、花琳がまた云った。
「その一人って云うのは、師匠です」

37

水面に映る青黒い影が、紅葉の森山から吹く風に揺らめき、漣は穏やかに広がり銀色の波紋を作る。永遠に晴れた空の、底深い碧色が遠い穂高の山々を同じ色に染め上げ、黄櫨色の葉を揺らした樹の梢を透かして動くとも思えぬ速度で片雲が形を変じる。
湖畔へ張り出した八角形の四阿、そこへ上がる木の段に立ったフォギーは、いつもの癖で周囲の音に耳を澄ました。間欠的に聴こえる鳥声。遠い、ほんの微かな水音。堆積した朽ち葉を獣や虫が密やかに鳴らす。ほかに微妙に塩梅された様々な波形の雑音。風景を鮮

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

烈に照らし出す陽光と、頬を撫でる清涼な空気に、それら音響はうまく溶け込んでいると思える。

まずはよし、と安堵しながら、フォギーは四阿へ上がり、山影を映す湖面に眼を遣った瞬間、眼に飛び込んできた景色に凝然となった。四阿から湖の中央に向かって、真鍮の手摺のついた通路ができているではないか。しかも突端には第二の四阿。いや、これは屋根がないから、むしろ舞台と云うべきか。数日前に来たときにはなかったから、「葬式」用に突貫で作ったんだろう。と分かるのは、水に浮かぶ多角形の舞台、その中央にピアノが置かれているからだ。

くびれのある三つの脚で立つ、古雅な装飾の施された飴色のピアノは、千駄木の地下ホールにあるのと同じベヒシュタイン製、クロード・ドビュッシー愛用モデルの複製品——の、そのさらに疑似現実版。山萩氏がフォギーに弾いて欲しいと依頼した楽器に違いない。どこまでも透き通る青空の下、反響板を全開にした形で水上の舞台にとどまるグランドピアノは、まるで天から舞い降りた太古の蝶のようだ。

ピアノの在処については全然心配することはなかったなと思いつつ、フォギーは舞台へ向かう通路へ恐る恐る足を踏み入れた。すると当然——と云っていいかどうか、板を打つ靴音がする。一歩二歩と進んで、フォギーは胸を衝かれた。いったん立ち止まって、強く大気を嗅ぐ。[illegible]

ター フォギーは嘆声を発した。音響設計士フォギーが四阿用に作った足音は、限りなく現実に近接しているとは云え、厳しく評価すればパターン臭をついに消し去れていないのに対して、こちらはもう本物の板を踏んでいるとしか思えぬ。

　また歩き出し、音響の質感を確認するにつれ、フォギーが複雑な心境となったのは、「大正池」の音響設計は自分が任されていたはずだとの気持ちがまずあって、だから淋しく、しかし新たに付け加わった音の素晴らしさは認めざるをえなくて、同じ音響設計士として嫉妬の火がくすぶり出し、これなら私なんかに頼むことなかったじゃないかと憤然とする心持ちが生じ、しかしまあ音響設計は自分の本業じゃないしなと、ふて腐れ気味に開き直る気持ちが加わり、ほかにもあれやこれや、結果、複雑になったわけです。

　二〇米ほどある通路半ばまできて、気分を変えるべく清涼な空気を胸一杯に吸い込み、やや角度の変わった穂高連峰の蒼い山並みを眺めたとき、

〈師匠、聞こえますか?〉と花琳の声がした。

「聞こえてる」フォギーが応じると、

〈ちょっと三六〇度、ぐるり景色を見せてもらえますか〉と云うので、その場で一回転した。

「どう?」と訊けば、明度がややおかしい気がするが、概ね良好だと花琳は応答した。

架空界へ入れるのは世界でフォギーただ一人。花琳の報告の意味を最初は理解しか

ねた。モリキテック社発行のパスワードと虹彩型の認証さえあれば架空墓へはいつでも入れ、実際に数十人の作業員が常時出入りしていたわけである。それが二〇時間ほど前から閉鎖され、Kiri Kiloだけが唯一の例外になっていると教えた花琳はさらに、接続の際の生体認証には虹彩のほか脳の血管型とDNA型の識別が加えられ、誰かがフォギーのふりをして架空墓へ入ることは不可能になっていると付け加えた。閉鎖したのはドクター山荻だろう、と推測した天才美少女も、その意図や如何となると見当がつかぬ様子で、フォギー一人が接続できる件については、大山ロボット経由のメッセージから考えて、「施設にピアノを弾いてもらって、お葬式をして欲しいからなのかな」と自信なさそうに感想を述べるにとどまった。

とにかくこうなればなかへ入ってみるしかないわけで、しかしお一人様でどうぞ、と云われると、なんだか怖い。先日のケーブタウンでも相当に気詰まりだったのに、山荻氏と二人きりで「葬式」をとり行うとなると、気詰まりくらいじゃとてもすまぬ。フォギーが[illegible]「だったら同期化ができるかどうかやってみますね、私も入ってみたいし」と云い、花琳は操作をおこないに出したが、何のことかと問えば、例のATSに繋がった状態ではフォギーの分身に「同乗」して、分身の見るものを見、聞くものを聞くのだと説明される。ただ、相手が自分の意志で分身を動かすことはできないとい

ほどなく、なんとかなりそうです、と花琳から報告があって、肉まんをもう一つ食べるか食べまいか迷っていたフォギーは、肉まんにいささかの未練を残しつつ、云われるままに「繭」で横になったのでした。

38

それで辿り着いた水上の舞台はテニスコート半面ほどの広さがあって、通路と同じく縁を囲うのは、玉葱(たまねぎ)形の飾りの付いた真鍮の柵。中央にピアノがあるほかは、木組みの床が青空にただ晒されるばかり。舞台へ足を踏み入れたところで花琳が云うのが聞こえた。

〈ちょっとぐるっと一周してもらえますか〉

フォギーが云われたとおりにすると、もっと視線を下げろとか、右を見ろ左を見ろと細々指示があって、するとようやく〈ああ、分かりました〉と納得の言葉がきた。

「何が分かったの？」

〈このピアノのある台は十三角形です〉

「それで？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

〈それだけですけど。polygonなのは分かったんですけど、何角形なのかな、と思って〉

天才少女の目の付け所はさすがに違うもんだと呆れていると、〈もう一回下の方を見てもらえますか〉と指示する花琳の声は頭蓋に直接響いて聞こえる。「了解」と答えた自分の声の方は、現実に話すのと同じ感じで、ただし小さく囁くようにしても花琳には届くようだ。いずれにせよ会話ができるのは心強い。

また云われたとおり下方へ眼を向けると、〈分身の服、ちょっと変わってますね〉と云うので、「自分」の衣裳をたしかめれば、なるほどいつもの作業衣ではない。膝丈の黒スカートに黒ストッキング、靴も踵の少し高い黒のエナメル靴。上は濃紫の絹の飾りブラウスに黒い上着。黒ずくめは葬式だからなんだろう。スカートと上着には金属光沢とは違う光沢があって、近頃はあまり見かけぬベロアとか天鵞絨とか云う生地だろう。意匠も奇妙に古風で、襟や袖の折り返しに薔薇の刺繍があるのが、フォギーの感覚からすると野暮ったい。首にかけた真珠のネックレスも同様だ。

「顔はどんなふうかな?」フォギーが問うと、

〈私にだって見えないですよ〉花琳は笑い、〈鏡、ないですか?〉と云う。鏡なんかあるわけがない。水面にでも映してみるかと思ったら、手に手鞄を提げているのに気がついた。これは肩掛けにもなる黒の皮革製、留金の刻印からフランスの有名ブランドのものと分かるが、腹に妙な膨らみがある作りはフォギーなら絶対に選ばぬ意匠。開けてみるとハ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ンカチやら財布やら何やらがごたごたと入っている。
〈それ、なんですか？〉花琳が素早く云う。
「どれのこと？」と問いながら手鞄を探ると、〈それです、それ〉と花琳が指示したのは、掌に入るくらいの、硬質プラスチックの平たい箱だ。色は淡いベージュ、端から紐が出て、先端にプラスチックの玩具みたいなものがついている。
〈キティちゃんだ！〉と花琳が興奮気味に叫んだのは、リボンをつけた猫のキャラクター人形のことらしい。キティちゃんならフォギーも聞いたことがある。
「これがキティちゃんなんだ」フォギーがプラスチックの猫をいじりながら云うと、キティちゃんものにには根強い人気があって、ことに携帯電話ストラップのそれは蒐集家の垂涎の的だと花琳が解説してくれる。
「携帯電話ストラップ、って、これ、もしかしてケータイ電話？」
〈そうですよ〉
ケータイ電話は映画などに登場するし、大学の資料館で実物も見たことがある。が、触るのははじめて。上蓋を開けると、下側にいかにも古めかしい数字の鍵盤が並んで、蓋側は液晶画面。映し出された静止画像は菜の花畑の風景で、画面上にアイコンやら数字が並ぶ。
「これ、使えるのかな？」と云ってみて、さすがに無理だろうとは思ったが、しかしこの

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

質感はすごすぎる。それはケータイ電話だけにとどまらぬ。手鞄（バッグ）の小物ひとつひとつに至るまでが忠実（リアル）に再現されているのが驚異だ。手鞄（バッグ）を探った際、小物同士が触れ合いたてた僅かな音響、それがたしかに耳に届いたときにはフォギーはほとんど戦慄した。ひとつも反復的型臭（パターン）を感じさせぬ音の形。ほぼ完璧に「現実」と区別のつかぬ、ランダムでフラクタルな音の輪郭と奥行き。ここまでの音響設計技術はちょっと類がない。フォギーが感想を述べると、花琳も同意してくる。

〈さっき調べてみて、分かったんですけど〉と云った花琳は、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）はこの十数時間のうちに猛烈な勢いで建設が進み、いまもそれは加速をつけていて、情報密度が恐ろしく高まった結果、規模の点でも精度の点でも信じられぬくらい高度化しつつあるのだと説明した。要は短時間のうちにどんどん凄いものになっているわけで、たしかに手鞄（バッグ）をかき回した音響ひとつとってもそれは実感できる。

「誰が作ってるのかな。作業員は入れないんでしょう？」

〈ですね〉

「まあ中に入らなくても作業はできるわけだけれど」

〈問題はそこですよね〉と応じた花琳から考え込む気配が伝わってきたので、話しかけるのはやめにして、フォギーは手鞄（バッグ）をまた探り、化粧用コンパクトを取り出した。貝殻光沢のある円い蓋を開ければ予想通り鏡があったので、自分の顔を映してみて、フォギーはぎ

ょっとなった。それが知った顔だったからだ。先代フォギーの池水霧子。まったくそれに違いない。

池水霧子の顔は映像や写真で知っている。分身は三〇歳前後の池水霧子だろうか。フォギーは顔に手で触れてみて、またも驚愕に捉えられた。作業用分身の場合だと、顔に触れても「感触」はなかったのに、こちらは人間の肌の手触りがある。逆に顔の方にも手の感触が生じて、要するに人が自分の顔に触ると云う行為が引き起こす生理現象、それがおそろしく現実的に再現されている。フォギーは試しに「分身」の頬を軽く叩いてみた。ピタピタと湿った音が当然のように鳴る。しかしこれがどれくらい当然でないかを知るフォギーは何十回目かの驚愕を経験し、作業用分身には存在しなかった衣服の中身、それがどうなっているのか確かめたい誘惑に駆られ、と、そう思ったとたん、衣服感、と云うのも変だが、つまり自分が服を着ている感覚が急激に生じて、おわわっとなったとき、

〈Our avatar has developed !〉と花琳が叫んだ。

分身は刻々進化しているのだ。いや、分身だけではない。『大正池』周囲の風景も、どこが、と判然とは指摘できぬが、先刻より一段と質感を高めた印象がある。

〈お葬式を早くやったほうがいいかもしれませんね〉と云う花琳の言葉にフォギーは同意した。何か途轍もないことが起こりつつあるとの感触が皮膚を這い回ってやまぬ。とは云うものの、「主役」がいなくては葬式にならぬ。フォギーがそう云うと、〈オオヤマのメッ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

セージに、はやくピアノを、ってありましたよね。だからとりあえず弾いてみたらどうかな〉と花琳が意見を述べる。「そうね」と応じたフォギーは、ベヒシュタインの前の、背もたれのないピアノ椅子に座り、ひとつ息を整えてから、鍵盤蓋を開け――と、動かない。

あれれ、とフォギーが声を出すのと同時に、〈It's locked〉と云う花琳の声がして、どこかにピアノの鍵はないかと見回したとき、ふいに電子音が鳴り出した。風景にまるでそぐわぬ人工音は一つの旋律をなす。と、曲はあれだ、「Alice In Wonderland」だ。「不思議の国のアリス」。このディズニー映画の主題曲は多くのジャズ演奏家が手がけてきたスタンダード。しかし、こりゃなんなんだと、狼狽していると、〈It's a phone call !〉と花琳が叫ぶ声が聞こえた。たしかに電子音は手鞄(バッグ)からだ。ケータイに電話がかかってきたのだ。

39

もちろんフォギーは携帯電話など使った経験はない。「なに、どうすればいいの?」と

シンフォニー――に、とにかく電話に出ろと花琳から指示が来る。云われるままに手袋から携帯電話を手に取ったものの、どうしていいか分からぬ。とりあえず上蓋を開けるだけはしてまごまごしていると、真ん中の釦を押してみよと、花琳に指示されてそうすれば、音楽が消えて、〈もしもし〉と男の声がした。

〈もしもし、フォギーさん？　山荻です。もしもし〉

ケータイに耳を寄せれば、間違いない、山荻氏の声だ。

「はい」と返事をする。

〈よく来てくれましたね〉

「はい」と同じ返事をして、しかしあとの言葉が出ない。そろそろ死ぬところですか？　と訊くわけにもいかぬし、具合はどうですか？　と云うのもなんだか変だ。狼狽のあまり、それで吸血くの一なんですけど、と口にしそうになって焦っているところへ山荻氏が喋り出した。

〈架空墓の建設は着々と進んでいます。なかなかすごいものになりつつありますよ〉

「みたいですね」

〈気に入っていただけるといいのですがね。フォギーさんには大いに楽しんでいただきたいので〉

「ええ、ぜひ」

〈たとえば、このケータイなどはどうですか?〉
「これもすごいですね」
〈昔はこれで連絡をとったもんです。貴女との連絡もだいたいケータイだった。これは初期の機種で、いわゆるガラケーというやつですが、タッチパネル式のタブレットが出たあとも、貴女はずっとこれを使っていましたよね。かくいう僕もそうでした。二人はガラパゴス仲間でしたね。今後はこれを使って待ち合わせませんか〉
ええ、とだけフォギーは応えたが、どうやら山荻氏はこちらが先代のフォギー、つまり池永霧子のつもりで話しているらしい。たしかに分身は「池永霧子」に違いなく、ここにおいてフォギーは、葬式でピアノを弾くのは「池永霧子」であり、彼女の奏でる「Farewell to Papageno」に送られて山荻氏が逝くつもりであるのを理解した。ガラパゴス仲間というのは、なんの仲間なのか不明だけれど、二人はやはり恋人同士だったのだ。憶測が確信に結晶したとき、葬式について訊けと花琳から指示が出る。
「あ、それで、お葬式のことなんですけど、あれですかね、お葬式は、やっぱりやったほうがいいんですよね」
〈葬式? なんのことです〉
「ですから、あれです、山荻さんのお葬式、というかお別れの会です」フォギーが返事が
[illegible]

〈貴女はそのためにここへ来たんですか？〉

「まあ、そうです、と云いますか、でも、べつに無理にやらなくていいとは思いますけど」

〈葬式はとくにやることもないでしょう。少なくとも僕は必要を感じていない〉

「そうですか」

本人がそう云うのなら否も応もない。

「じゃ、分かりましたんで」とフォギーが伝えると、ピアノの鍵の在処を訊けと花琳から指令がある。葬式はやらぬとなったいま、ピアノの鍵はどこにありますか？　と云い出すのは、いかにも唐突な感じがあって気が進まなかったが、花琳からの重ねての指示を受けて無理に訊けば、山萩氏は黙り込んでしまう。ほらね、だから訊きたくなかったんだよ、と思いつつ、

「べつにどうしてもって云うわけじゃないんですが」と加えたフォギーを沈黙から帰還した山萩氏が遮った。

〈貴女はどうしてピアノの鍵がいるんです？〉

「いや、だからですね」とフォギーはややつんのめって答弁する。「疑似現実のベヒシュタインがどんな音がするのか、聴いてみたいかな、なんてちょっと思ったりで[illegible]。

〈貴女は葬式でピアノを弾く〉フォギーの言葉にはかまわず山萩氏が問う。〈そうなんですね？〉
「ええ、まあ」
〈その目的で貴女はここへ来た？〉
「まあ、ですね」フォギーが応じると、またしばしの沈黙を挟んで山萩氏が語調を和らげ云った。
〈それでもかまわない。なんであれ貴女が来てくれたのですからね。それで十分だ。僕は貴女に愉しんでいただきたいんです〉
「はあ」
〈お葬式はどうぞやってください。しかしその前に僕の作った、いや、作りつつあるワンダーランドを見て欲しい〉
「ワンダーランド、ですか？」と先刻のケータイの音楽を思い出しながらフォギーは訊き返す。
〈そうです。架空墓（ヴァーチャルトゥーム）ではいかにも色気がないですからね。もっとも、驚異のワンダーランド、などと云うとだいぶ安っぽい感じになりますが、しかしアリスのそれより何倍も面白いはずです。貴女にはきっと気に入っていただけると思いますよ〉
「と云うことはつまり、『さよなら（フェアウェル）ツアー』をまずはやって、それから葬式をするんで

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いいわけですね？」フォギーが整理確認すると、

〈「さよならツアー」ですか。貴女はどうしても僕の葬式がしたいらしい〉と皮肉な調子の返答がある。べつにそう云うわけじゃないと、やや慌てたフォギーの言葉を山萩氏は遮る。

〈フォギーさん、僕は貴女にずっとここに居て欲しいんですよ〉

「時間のある限り遊びに伺わせていただきますけど」

〈それは無理だ〉

「と、云いますと？」

〈人間の時間には限りがある〉

「それはそうですけど、時間があれば、しょっちゅう遊びに伺わせていただきます」

〈「時間があれば何々したい」と云った人で、その「何々」を本当にした人を僕は知らない〉

なるほどと、フォギーが妙に納得しているところへ、また言葉が届く。

〈それに原理的な意味でも貴女には時間がない。神ならぬ貴女はいずれは消えゆく運命にありますから〉

「それは、まあ、ですね」

〈フォギーさん、僕は貴女に永遠にここに居て欲しいんです〉

「永遠、ですか？」とやや面喰らって問い返したフォギーに端的な問いが飛んでくる。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

〈いやですか？〉

「いや、ってこともないですけど」と戸惑いを隠せぬまま応じたフォギーの言葉を遮って、〈フォギーさん〉と山荻氏は改まった感じで呼びかけてくる。はい、と仕方なくフォギーは畏まる。

〈僕と一緒にこの面白い世界で生きてみませんか？　楽しくて、輝かしくて、スリリングで、驚くようなことが次から次に起こって、魂がわくわくと沸き立つような世界。僕は直接は知らないのですが、一九六〇年代の新宿がそう云う場所だったらしい。しかし僕のワンダーランドもそれに負けない。いやそれ以上であるのは疑えない。なにしろ僕のワンダーランドでは興奮が永遠に続くんです。永遠ですよ。それこそアリスのMad Tea Party同様にね！〉

「でもですね」と一貫して熱を押し付けてくるような相手の調子にやや反発を覚えたフォギーはそこで応じた。

「魂がわくわくするのは、終わりがあるからじゃないですか。お祭りがそうでしょう。祭りはやがて終わるから興奮できる、と云うか、ジャズのセッションだって永遠には続かないからこそ、人は面白がれるわけで」

山荻氏は沈黙する。気を悪くしたのかもしれないが、永遠と云われたって無理な話だし、とフォギーが考えているところへ届いた山荻氏の声はいくぶん笑いを含んでいる。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

〈分かりました。そのことはまずはいいでしょう。では、ここで、なぞなぞを一つ〉

「はァ？」

〈だからなぞなぞです。アリスのワンダーランドでも帽子屋がなぞなぞを出す。僕も一つやりましょう。では、問題です。近づけたいのに遠ざけたいもの、なんだ〉

急な展開にフォギーがついて行けずにいるのにかまわず、電話の向こうの男は噴き出すようにして笑う。

〈いや、これでは謎にならないな。帽子屋が出したなぞなぞには答えがなかったが、僕のはあらゆる事象が答えになってしまう。数学で云うところのIndefiniteです。不定、定まらず。なぜなら人間は己の欲望の対象を手に入れたいと思うと同時に遠ざけたくも思うものですからね。違いますか？〉

「はあ」

〈しかし僕が云いたいのは、もっと単純なことです。遠ざけたいのに近づけたい。答えは、ずばり、フォギーさん、貴女だ〉

「わたし、ですか？」

〈僕は貴女にここに居て欲しい。つまり僕は貴女を自分に近づけたい。しかし一方で貴女は僕にとって大変危険な存在である。なにしろ貴女はこの世界を滅ぼしかねないのですからね。そう云う意味では当然ながら遠ざけたい〉

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

どうもなんだか妙な具合だぞと、フォギーが訝しんでいるところへ、強い語調で質問がくる。

〈あなたはロンギヌス石を知っていますね〉

「は。何ですか？」

〈ロンギヌス石です〉

「ロン、ギヌス？」

〈そうです。ロンギヌス石はどこにあるんです？〉

と云われてもフォギーには何のことだか見当がつかぬ。

「ちょっと分からないんですが」と仕方なく応じると、山萩氏はしばらく黙る。それからまた声が聞こえる。

〈貴女は嘘を云っていないようだ。云い忘れましたが、ここでは嘘はつけません。嘘をついたと脳波の変化で分かってしまいますからね。貴女が知らないと云うのは本当でしょう。しかし、貴女がロンギヌス石と何かしらの係わりを持っているのも間違いない。それは貴女の一種の運命と云える。貴女自身がそれに気づいていないだけで。しかし、いまはいいでしょう。貴女はお葬式をしてください〉

「して、いいんですか？」

〈葬式をする目的がなければ貴女はここへ来ないのでしょう？ 忙しい貴女のことだか

ら、ただ遊びになどはそうそう来られるはずがない。つまり僕には選択の余地がないんです。貴女が来てくれるのであれば、もうなんでもかまわない。ピアノの鍵は貴女の云う「さよなら（フェアウエル）ツアー」で見つけられるはずです。いま教えないのを意地悪だと思いますか？しかし、僕の苦渋も察していただきたい。葬式が終わってしまえば、貴女はもう来てくれないのですからね。鍵は貴女自身で探していただく。後ほどお会いしましょう。ツアーのどこかで。会ってくれますよね？〉

「あ、はい」とまた仕方なくフォギーが云うと山荻氏は急に口調を和らげる。

〈では、ゆっくり考えてください。僕は貴女とどんなふうに会うか、どんな姿で会うか、じっくり考えるつもりです。いくらなんでもチェシャ猫や帽子屋と云うわけにはいきませんからね。時間はたっぷりある。僕は、貴女と違って、祭りが永遠に続いてもかまわないと考える方なんです。きっと貴女もそう思うようになる。永遠に続くハレに万歳。Oh、ハレルヤ！〉

　山荻氏は弾けたように笑う。こりゃだいぶ雲行きが怪しいぞとフォギーが思ううちにも言葉が吐かれる。

〈それでは後ほど。「さよなら（フェアウエル）ツアー」の入口は四阿（あずまや）の裏手の林にあります。しかし、さっきも云いましたが、僕はさよならをするつもりはない。永遠にない。そう、だからこれはむしろ「ウェルカム・ツアー」と呼ばれるべきだ。永遠に続くフェスティバルにようこ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

そ。あるいは、Welcome to the Wonderland！僕はね、フォギーさん、さっきも云いましたが、貴女に愉しんでいただきたいんです。ただもうそれだけなんです。では、Have a nice tour！〉

と、そこで通話は途切れる。あとはうんともすんとも云わない。するといままで沈黙していた郭公が急に鳴いて、郭公に過敏なフォギーはピアノ椅子の上でぴょんと跳ねた。

脅かしやがって。郭公、殺す。郭公に気を取られたフォギーが混乱しつつ考えていると、電話に通話先の番号記録が残っているはずだと花琳から指示がある。云われたとおり釦を操作すれば、なるほど表示されたのは山荻氏がかけてきた番号らしい。今度はこちらから電話してみようと花琳は提案したが、フォギーは全然気が進まぬ。

「電話してどうするの？」と問えば、ちゃんと電話が通じるかどうか、たしかめておきたいと云う。

〈それにピアノの鍵の場所もまだ聞いてないし〉

「だって自分で探せって云ってたじゃない」

〈そうですけど、頼めば教えてくれそうだったから〉

「そうだった？」

〈と云うか、師匠は山荻博士にとってのファム・ファタールって云う感じでしたよね。永遠に一緒とか、僕の苦渋とか云ってたし〉

「これって、何だっけ？」大正池の景色を眺めつつフォギーが訊ねれば、すぐに返答がある。

〈ファム・ファタールは運命の女です。恋ゆえに男を破滅させる魔性の女。師匠が頼めばどんなことでも云うことを聞いてくれそうだったけど〉

「私はそういう柄じゃないから。それにそもそも山萩さん、なんか変じゃなかった？」と云ったフォギーは山萩氏が自分と池永霧子を明らかに混同していたと思い返した。それは意図的なのか、それとも脳の障害がそうした混乱を呼び込んだのだろうか。

〈たしかに変でしたね〉と花琳も同意する。

「全体的に変だよ。お葬式のこともなんだかよく分からないけど、とにかく何か状況が変わったんじゃないかな」とフォギーが観測を述べ、

「架空墓（ヴァーチャルトゥーム）内の状況が変化したのは間違いないですけどね」と花琳が云ったときだ、『大正池』の状況が眼に見えて変化したのは。

40

まずは鳥声が消えた。郭公も消える。音響設計士フォギーとしては違和感はなはだし

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

く、あれれ、どうしたのかな、と不審になっていると、舞台近くの湖面がふいに波立った。なんだと眼を遣れば、黒い鰭のついた背中が湛然滑らかな水を過る。鰐だ。いや、これは到底鰐ではない。全然大きさが違う。フォギーが見つめる先でぬるり泳ぐ影は軽く一〇米はありそうだ。

「あれ、なに?」

〈I don't know〉花琳が英語になったのはやはり驚いたせいなんだろう。大鰐は水中へ姿を没し、押し寄せる波が舞台の木組みにぶつかって飛沫をあげたとき、

〈That's a dinosaur!〉と花琳が叫び、そうか、恐竜デアルか、と理解したフォギーが、しかしなんで恐竜なんだ、と訝りつつ、荒れの収まらぬ水面になお眼を凝らしていると、ズズズズンと重たい響きが幽邃な景色のなか谺した。これはとても神秘の湖にふさわしい音響ではない。驚いて顔を上げれば、対岸の水辺に巨大な動物がいるではないか。アフリカ象のそれを長さ太さとも何倍にもしたような四本の脚、どんと充実して巨大な胴体、そして蛇めいて長い頸の先に付いた小頭は、あれだ、アパトサウルスだ。モリキテック社のケープタウン研究所にあったロボットと同じやつだ。

どこまでも蒼い、抜けるような空の下、頭をリズミカルに上下させた恐竜は林緑の低木をなぎ倒して水辺をどすどすと歩く。頭とバランスをとって長い尻尾が鞭となって紅葉の樹林をばしり、ばしりと打てば、散った葉っぱが竜巻に遭ったみたいに舞い上がるのが凄

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

まじい。すると方々で騒がしく樹木が揺れている。よく見れば、森じゅうに小型恐竜が悪連隊のごとくわいわい群れているのだ。

最初唖然となったフォギーに引き続いて生じた反応は、笑いだ。北アルプスを望む伝統の名勝、上高地に大恐竜現わる！　神秘の湖、大正池で水浴するアパトサウルス。小型恐竜をお供に連れてね。と、そう頭のなかで言葉(フレーズ)にしたら、もう可笑しくてたまらない。ぶはははと、フォギーはいささか下品に声をあげて笑い、〈何がそんなに可笑しいんですか？〉と問う花琳の声も笑っている。

「これはつまり、あれよね、一種の余興なわけよね。『さよならツアー(フェアウェル)』の？」

水辺に堆積した枯木をばりばりと踏みつけながら、左から右へ泰然と歩み行くアパトサウルスを眺めながらフォギーがなおも笑って云うと、余興とはどう云う意味かと、同じく笑いつつ花琳が訊くので、余興はつまりエンターテインメント、恐竜好きの山荻氏が訪問者のために遊園地的アトラクションを用意してくれたんだろうと答えれば、いよいよ可笑しくて堪らぬ。さすがは天才工学博士、山荻貴矢、やることが半端じゃない。

〈それほど単純な話ではない気がしますけど〉

花琳の言葉に、「でも、これって、相当に可笑しいよ」と応じてフォギーがまたげらげら笑っていると、今度は背後でドワワワワンと、何十匹もの犬の吠え声を束ねたような音(ね)が轟いた。声の風圧に押された具合になったフォギーがよろめき見れば、四阿から続く小

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

径の先、沼へ張り出した森山の陰から大頭がぬっと突き出ているのは、間違いない、恐竜界の看板スター、暴君竜ティラノサウルスだ。

きたあ、真打ち登場だあ。フォギーが興奮するうちにも、沼に膝まで浸かった肉食恐竜は森山を回り込み、穂高連峰を背に透明な光のなかへ姿を現わす。しかしここまで凶悪獰猛にすることはないだろうと、どうしても文句を云いたくなる大顔をぬっと中空に据え、矮小な前脚をふざけているみたいにブラブラさせつつ、前傾姿勢になって進んでくる姿がもの凄い。頑丈な後脚が交互に動くたび、太い尾が飛沫を盛大に散らし、刃物めいて尖った歯がびっしりぎっしり生えた大口がクワッと開かれて、ドワワワンと耳をつんざく咆哮が放たれる。威嚇したいのなら見た目で十分、どうしていまさら吠える必要があるのか。暴君の心根は測り難いものがあるけれど、吠える際、懐疑する人のようにちょっと頭を傾けるのが、間抜けと云うか、大昔のロック歌手みたいでカッコいい。カワイイ。むろん声は雷のごとく、しかしそこにえも云われぬ錆びた味があって、これがまた痺れる。よっ、ティラノ屋、ニッポンイチ！　と声を掛けたくなるほど見事な凶暴ぶり。恐竜はそのまま真っすぐ水を蹴立てて舞台へと向かってくる。そうしながらまた派手に尻尾で水を叩き、鋸歯を閃かせ絶叫（シャウト）する。迫り来る肉食大恐竜。圧倒的な迫力だ。じつに怖い。ヤバい。戦慄に背筋はぞくぞく、魂はうおううおう奇声をあげ、イエイ、シブイゼ、ティラノ、と思わず声を洩らしたフォギーは腹をよじってまた大笑いする。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

〈ナナナなの……〉と今にも泣きそうになる花球の声が聞こえた。
「ナナナでしょ。本物じゃないし」
〈でも、食べられないほうがいいと思いますよ〉
「そう？」
〈ええ。この分身はものすごく感度がいいみたいだから、かなり痛いと思いますよ〉
「なにが？」
〈だから恐竜に食べられた場合〉
フォギーは痛みにはわりと強い。これはニブイと言い換えてもいいわけだけれど、ただ単に相対的にそうであるだけで、薬物や麻酔技術の進歩が人間を痛みから遠ざけた結果、昔の注射は針を直接皮膚に刺したと聞いただけで気分が悪くなったり、指の爪を切るのにいちいち簡易麻酔をしたりする人がいるなかにあって、フォギーはそこまではないだけの話。さすがに恐竜に齧られる痛さに耐えられる自信はない。当たり前ですが。フォギーはにわかに不安になった。
「だって食べないでしょう？」
〈どうして分かります？〉
「分身を食べてもしょうがないし、だいいち食べちゃったら、エンターテインメントにならないじゃない。だから食べないよ」

と、そう断じたときには、大顔ティラノ君はもうほんの五米ほどのところまで近づいている。ああいう顔だから凶暴に見えるだけで、本当は人懐こくて、じゃれたいだけなんだよ、見た目で決めつけちゃ可哀想、と思うのはやはり無理だ。血走った白目と鋸歯の奥の燃え盛る焔のごとき舌が眼に入ったとたん、恐怖の毒液が軀中を駆け巡るのは避けがたい。とたんに恐竜がまた吠える。爆風のごとき音響が押し寄せれば、肝は一遍に吹き飛んで、ぴええええと細い悲鳴をあげたフォギーは口を半開きにしたままその場に棒立ちとなる。

〈ログアウトした方がいいと思います〉花琳の冷静な声が聞こえた。

〈ログアウトした方がいいですよ〉再度云われて、パニックに襲われつつも、アイコン表示を思念すれば、視野に命令画面の白い文字が浮かびあがった、ちょうどそのとき、舞台へ到達した恐竜が大顔をぐいと寄せてきた。フォギーは鼻面と鼻面を擦り合せるようにしてティラノ君と対面する。なんだ、この女は、と不審がるかのごとく、あるいは小馬鹿にするかのごとく、首をひょいと傾げた恐竜が、ぶっと鼻から息を吹き出したのが可笑しくて嗤いたように見え、続いて尖り歯の林立する口を顎の蝶番を支点にぐわっと全開したのも大笑いすると思えて、恐竜に笑われる覚えはないし、まして笑われながら食べられる義理はないと、恐怖に痺れる頭で考えたら、またも哄笑の騒ぎ虫が軀中を暴れ回ってとめがたく、真っ赤な舌の覗く口が猛然とこちらへ向かってくるのをげらげら笑って見詰めつつ、頭から齧られる寸前、ログアウトのアイコンを二回まばたきした。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

CHAPTER

4

新宿ワンダーランド1969

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

41

フォギーがティラノサウルスと睨めっこをしていた頃、デントランドはモリキテック本社、太陽光発電外壁を持つ白亜の塔の、六七階にある上級管理職事務室（エグゼクティブオフィス）でも、歌舞伎役者の血を引く日本人副社長が山荻氏と対面していた。

部屋の主である副社長は、模造虎皮の敷物の上、珈琲色の可変ゲルマットへ身を沈め、かたや山荻氏は、六角柱になった部屋の、北西壁に設置された神棚――と云うより、ほとんど神社と呼んでさしつかえない白木造りの祭壇の、背丈の倍はある鳥居下に立つ格好だ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

本日の副社長のいでたちは、天然皮革の黒パンツに昇龍の地模様入り白絹シャツ、陽焼面にミラーグラスをかけ、はだけた胸や手首に黄金の飾り(アクセサリー)をじゃらつかせた姿は、CGドラマやゲームに登場する「ヤクザ」そのもの。しかもこれが3D映像でも仮想現実衣裳(ヴァーチャルコスチューム)でもなく、すべて現物(リアル)なのだから凄い。顔のメラニン色素は、紫外線障害の危険を顧みず、ヨットとゴルフで自然蓄積したものだし、短髪のウエーブも美容師に二時間かけてアイロンをあてさせた。背中には、印刷(プリント)式ではあるけれど、渡辺綱大江山鬼退治の和彫り刺青を背負う。ヤクザコスプレは東アジアや中南米では日系人にとどまらず人気があるけれど、通信インターフェースの分身(アヴァター)や仮想衣裳(ヴァーチャルコスチューム)で楽しむのが通例、生身(リアル)でやる人は珍しい。念のため申せば、太平洋沿岸地域に広く棲息する実際(リアル)の「ヤクザ」はこんな格好はしていません。

部屋の内装についても一言すれば、疑似環境技術(ヴァーチャルテク)や知能家具(スマートファニチャー)を極力使わぬ「自然主義」は副社長の嗜好。ソファーの左右に踞(うずくま)るドーベルマンも生きた犬だ。精悍な鼻面を空へ向ける二頭の軍用犬、これと睨み合うかのように、鳥居脇には一対の狛犬が置かれ、しかしこちらはずっしり重たい合金製。前方を睨(ね)め付ける狛犬の視線の先には、歴代最低の右翼首相と評せられる安辺晋平の揮毫になる「美しい国、日本」の額と、ファシストアイドル桃谷詩織の「みんなで七生報国しようよ♡」の色紙が掛けられ、「旭日ポロロ特攻隊」なるバンドの軍歌ロックが流れるなか、博多人形やら鎧兜やら刀掛けの日本刀やら、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

あるいは天然木の骨董家具やら生きた熱帯魚の泳ぐ水槽やらを、各種ぬいぐるみ人形と一緒に配置するあたりは、一般にヤンキー趣味と呼ばれるものだ。

　ファンシー感覚溢れる安手の驕奢。これを特徴とする狭義のヤンキー様式は、二十世紀末の日本に由来する地域的流行現象だけれど、広義には普遍性のない民族的な感覚を先鋭化する傾向全般を指す用語として使われ、だから各国各文化ごとにヤンキー趣味はあり、たとえばヤンキーの元来の語源になった北米人なら、十字架を掲げつつ白覆面白装束で馬に乗る類がそれ。別名過激時代錯誤とも呼ばれる。

　副社長はソファー横の硝子卓に置かれた木箱から金の吸い口付き煙草を取り出し口にくわえた。続いて手に取った黒大理石の置物は、前世紀一九九四年、東京優駿でナリタブライアンが優勝した際の記念品で、副社長自慢の一品。釦を押すと天に向かって嘶く馬の口から炎が出る。ごく稀に来客があれば、副社長はこれをカチリとやって火を点して見せ、吃驚りさせて嬉しがる。

　炎へ顔を寄せた副社長は紙巻きへ火を移し、いくぶんぎこちなく吸い込んだ煙を鼻からふうと吐き出した。もちろん煙草もヤクザコスプレには欠かせぬ品目。普通なら贋ですますところが、副社長のは本物の煙草であり、火であり、煙であり、肺臓から血中にしみ入ったニコチンも同様。

　一方、[illegible]する男の真正面に立ち、その様子を[illegible]に眺める[illegible]は、[illegible]。

　3D映像であるが、じつを云えば、これは山萩貴矢氏ではない。とはつまり、生身(リアル)の山萩氏が電脳網(ネット)を通じ送ってきた通信映像ではないと云う意味。そのことが副社長に分かるのは、いまから六時間前、山萩博士が完全脳死を迎えたとの暗号通信をベルンから受け取っていたからだ。

「僕も昔、煙草を常習的に吸っていたことがある。なにしろ国営事業で煙草の製造販売をやっていたんですからね」

　鳥居下に立つ3D山萩氏——山萩氏と見える人物の映像が口を開いた。

「値段も安かった。僕はセブンスターなんて云う、意味のよく分からない名前の紙巻きを吸っていたな。しかし、いまは大変だ。煙感知器(センサー)をいちいち切らないといけないわけですからね」

　煙越しに〈山萩氏〉を注意深く眺めた副社長は頷いた。煙感知器の件はたしかにそのとおり。感知器を切れとAIインターフェースに命じても、それはできぬと答えるから、建物全体を管理する中央制御電脳(マザーコンピユーター)に直接操作を加えねばならぬ。むろんそんなことができるのはごく一部の管理職(エグゼクティブ)に限られる。

「煙草の味は、成功者の味といったところですか」と〈山萩氏〉は皮肉な笑いを浮かべて続けた。「ところで僕の認証はとれましたかね？」

　副社長がまた頷いたのは、その直前、侵襲式の端末を通じて、目の前の通信インターフ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

エースを動かしているのが、〈Met-7000-T-003-02〉と標識番号のついたソフトウエアであると確認する報告が、『METEO』の技術者から届いたからだ。〈Met-7000-T-003-02〉はつまり、山萩博士の予備ＴＢＵの際に作られ、バックアップでとってあった例のソフトウエアだ。

「それで」と相手に視線を据えたまま副社長は口を開き、それから煙草をまたひとつぷかりふかしたのは、勿体をつけたのではない。大物ぶろうと云うのでもない。単純に何を云うべきか、すぐには言葉が出なかったせいだ。

「それで――私に何か御用ですか？」と副社長はようやく云ったが、これはずいぶんと間抜けな言い草と云わざるをえなかった。なぜならこの二〇時間あまり、副社長は〈Met-7000-T-003-02〉に連絡をとろうとやっきになっていたからだ。

〈Met-7000-T-003-02〉――略称〈Met02〉が、モリキテック経営陣の指令の下、デントランド本社地下三階にある汎用電脳（コンピューター）上で走りはじめたのがほぼ二四時間前。密かに「聖槍計画（ホーリーランスプロジェクト）」と名付けられた計画――〈Met02〉に山萩貴矢博士の29virus研究を継続させようと云う、いささか荒唐無稽とも思える計画の統括責任者になった副社長が、ソフトウエアが起動した直後からそれと通信を試みたのは当然だ。ところが応答がない。

副社長の父親、二〇年前にテロで死んだモリキテック社のかつてのＣＥＯは、山萩博士から実の息子のように可愛がられていた。だから副社長は山萩氏の孫のようなもの、と

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

一方で副社長には別の目算があった。とは、つまり「対話」を通じてソフトウエアに制御をかけることだ。相手は人間ではないが、「人格」は有している。であるならば見込みはある。少なくとも試してみるだけの価値はあった。言葉を巧みに操り、人を意のままに動かすことにかけて自分の右に出る者はない。学生時代、理数系以外の教科もほぼ振るわず、体育と道徳だけが優等だった副社長は絶大な自信を有していた。

とは云え「対話」をするには、相手が呼びかけに応じてくれなければ、それこそ話にならぬ。なんとか通信せよと、役立たずどもめがと内心で罵りつつ技術者たちに発破をかけたものの、この二〇時間は応答がなく、やはり消去するしかないのかと思案していた矢先、向こうからいきなり連絡を寄越してきた。これにはさすがの副社長も虚をつかれ、鳥居下にいきなり出現した3D映像にドーベルマンが吠えかかるのを制してから、おもむろに煙草に火をつけたのは、時間稼ぎの意味もあるのでした。

42

「それで——私に何か御用でしょうか？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「用ですか。たしかに用はある。しかし、あれだね、この部屋ははじめて来たが、なかなか趣味がよろしいね」

「ありがとうございます」と礼をいいながら、副社長は部屋の様子を面白そうに眺める〈山萩氏〉を観察した。山萩博士の通信インターフェースには、ちょっととぼけた味のある初老のスーツ姿がこれまで使われていたが、いま鳥居下に立つのは、艶やかに波打つ髪を肩まで伸ばした、青いジーンズのパンツに紺色の手編みセーターを着た青年で、副社長の知る山萩氏とはまるで別人だ。しかしなおそれが山萩氏だと了解できるのは、容貌の特徴を認知心理学に則(のっと)りサンプリングしてあるからだろう。

「水槽の魚はピラルクとピラニアですか。あはははは。犬は当然のごとくにドーベルマン。あは。いいですねえ。絵に描いたような強面(こわもて)ぶりだ。しかし、こうした品目(アイテム)が内面の臆病をかえって露呈させてしまうのが少なからず問題ですが。君が黒眼鏡で眼を隠すのは賢明です。心の窓から貧寒たる魂の内情を覗かれてしまいますからね」

副社長は顔が固くなるのを自覚した。目の前の「人物」は自分の価値をかけらも認めていないのだ。八歳の夏休み、ニュージーランドで創造教育プログラムに参加して作った模型飛行機の不出来を嗤われて以来、幾度も思い知らされてきた認識の苦い粘液が、胃袋の底から腐臭とともにこみあげてくるのを押さえられぬ。

相手はただのソフトウエアにすぎない。そう思うと、かえって苛立が募るからやっかい

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

だ。ええ、そうですよ、どうせ僕などは才能のないゴミ屑人間ですから。無意味と知りつつ、心に巣くう惰弱な獣が繰り言を漏らすのを止められぬ。たしかにあの飛行機は全然駄目でしたよ。飛びもしなければ、美しくもありませんでした。翼の長さが左右でいびつ、胴体は不格好に肥えて、地べたを這う芋虫みたいでした。いやはや凄いね、君の創造性は、これだけ気持ちの悪いものはなかなか作れるものじゃないよ、と、そう云われても仕方がありませんでした。でも、一四歳でゴルフの世界ジュニア選手権で三位タイの成績を残したとき、あなたは褒（ほ）めるべきだった。よくやったねと、声をかけるべきだった。たとえ僕一人が軍用の運動神経制御ソフトを使っていたとしてもだ。しかしあなたは僕の方など見向きもしなかった。死んで、電気の幽霊になって、なおオレを小馬鹿にするのか！

ソフトウエアのインターフェースに対面して、副社長は己の山萩氏への怨嗟の異様な深さにはじめて気づかされ、むしろ戸惑った。主人の憤怒を感じ取ったのか、二頭のドーベルマンが低く唸りを発したが、〈山萩氏〉は素知らぬ顔で辺りをじろじろと眺める。

「いや、素晴らしいセンスだ。じつに君らしい。君という人物をそのまま映し出しているところがいい。Decorated Poverty（飾られた貧困）と云う文句（フレーズ）は、誰のものだったか。いや、これは決して悪口ではない。一つの歴史的趣味の呼称にすぎません。たしかにここには一貫したセンスがあり、ある種の詩（ポエム）がある。その昔、蓼科あたりのペンションの旅ノートに書かれた詩（ポエム）、あれに似たセンスです。君はもしかしてレモンスカッシュのことを、レスカと呼ん

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

じゃいませんか？

来客とは通常疑似応接室で会う。私用オフィスまで通すのはよほど親しい人物か、VIPに限られ、まして生身の入室を許すのは特別「親密」な関係にある者だけ。山荻氏の場合は、生身はもちろん、通信インターフェースもここへ通したことはない。不意に連絡してきた〈Mem2〉に対し、即座に応答したのはやむを得なかったとはいえ、部屋に〈山荻氏〉を入れたことを副社長は後悔した。通信インターフェースの可動域が鳥居下に限定されているのがせめてもの救いだ。これでもし〈山荻氏〉に部屋をうろうろされたら、自分は3D映像を日本刀で斬りつけかねぬ。そうなれば直ちに発狂の兆候と見做され、医務室へ送致されて数週間にわたる精神治療を強要されるだろう。

それにしても、生身の山荻氏はいつでも品よく柔らかく、面と向かってここまで皮肉の毒液を吹き付けてはこなかった。ソフトウェアは山荻氏の持つある種の傾向を尖鋭化したらしく、言葉の端々に感じられていたにすぎない自分への軽蔑を、鉄槌でもふるうように露骨に表出してくる。それは当然ながら憤怒を呼んだが、糖衣に針を隠すよりはいっそ爽快だともいえた。

あなたはもう死んだのだ。灰色の脳組織は栄養槽に溶け出し、汚らしい肉塊に変じ、今頃は冷凍された遺体の頭蓋に戻されて、焼かれ灰になるのを待つばかりでいるはずだ。いまのあなたは単なる信号にすぎない。と、そう繰り返しながら、副社長は平静を保つのでし

た。

「それで、あなたがここへいらした用事、それは何です？」慎重に言葉を選んで副社長が問うと、

「君の方こそ、僕に用事があったんじゃないの？」と相手から逆に云われて、ええ、と副社長は頷いてしまい、「どんな用があるのかな？」と畳みかけられてたちまち返答に窮した。〈Me102〉にどんな用事があるのか？　とあらためて考えると、自分のしていることがひどく馬鹿げたことのように思えてくる。あなたが長らく関心を持たれている29virus研究を継続していただきたいのです、と文言を組み立ててみれば、まるで現実味がないと感じられてしまう。その一方で、高い解像度に支えられて活発に表情を動かす〈山萩氏〉を見ていると、つやつやした肌から若い精力が溢れ出るようで、どんなことでも可能にしてくれそうな予感がしてくる。

「あなたの」と口を開いた副社長はすぐに言葉に詰まってしまう。それでも〈山萩氏〉に真正面から顔を覗き込まれて声を絞り出した。「希望は、なんです？」

「希望？」と鸚鵡（おうむ）に返して〈山萩氏〉は笑う。それから云う。「そのような哲学的問いが君の口臭除去した口から飛び出てくるとは思いませんでした。希望とは、ギリシアの昔からニンニクやニラ臭い口臭とともに語られるべきものですからね」

「あなたは何をしているんです？」副社長は相手の饒舌を遮った。「研究所の処理装置（プロセッサー）を

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

あんなに使って」

「それですか」と〈山萩氏〉は詰まらなそうに云った。「我が墓の整備ですよ。僕はあそこに永遠に住むわけですからね。居住性を高めたいと考えるのは自然でしょう？」

〈Met02〉が「架空墓（ヴァーチャルトゥーム）」の建設整備のために電脳（コンピューター）を目一杯稼働させていることは副社長もすでに知っていた。

「外部の電脳まで使って？」

「ええ。支払いは僕がしているのだから文句はないでしょう」

山萩貴矢の死亡を公告すれば、遺産は財団の管理下に置かれる。そうなれば〈Met02〉が自由にカネを使うことはできなくなる。そう云ってやりたい衝動に副社長は駆られたが、これは切り札にとっておくべきとの判断が生まれた。

「しかし、ケープタウン研究所の電脳はあなたの私用（プライベート）ではない」

「僕を消去しますか？」

「そうしようと思えば、私はいつでもそうできる」副社長は相手の反応を窺う。〈山萩氏〉は放心したかのごとくに表情を消す。おそらくこちらの言葉の意味をいかに捉えるべきか、ソフトウエアが高速で思考しているのだろう。大理石の灰皿で吸いさしをもみ消した副社長は、新たに煙草を手に取り、慎重に間合いを測りつつ口を開いた。

「いや、いまは消去する気はありません」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「なぜです？」即座に応答がある。
「研究所は、云うまでもなく、企業の将来的な利益になればこそ運営されている」副社長は言葉を選びつつ話し出した。
「むろんすべての研究が利潤に結びつくわけではないが、トータルにはそうであることが期待されています」
〈山萩氏〉は表情を動かさずにこちらを見詰める。濃い眉の下の眼は何もかもを貫き破砕するようで、やや気圧され気味となった副社長はナリタブライアンを鳴らして煙草に火をつけた。吐き出された煙が輪を描いて天井へ上っていく。
「架空墓(ヴァーチャルトゥーム)だってまるで無益と云うわけではありませんが」煙幕のなかから副社長は再開した。「しかし、それだけでは、汎用電脳の処理装置(プロセッサー)を使い切るにはちと無理があります」
「どうしろと云うんです？」ふいに面白そうな表情になった〈山萩氏〉が訊く。
「特別なことをしていただく必要はない。あなたの関心に沿った研究を継続していただきたい。具体的には」
しばし云い淀んだ副社長をソフトウエアが促す。
「具体的には？」
「29virus の研究です」副社長は思いきって云った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「つまり僕に29virusの研究をしろと？」

「そうです」と頷いた副社長は、ここまではっきり当方の狙いを明かしてよかったのだろうかと、いささか不安を覚えたが、もうこうなれば押すしかないと判断して、生身(リアル)の山荻博士が半年前、29virus研究に関して理論的突破をなし、その成果の一部をダニエル・リー教授に送った事実を伝えた。しばらく表情を消した後、〈山荻氏〉は云った。

「その研究成果を僕のところへ送ってもらえますかね？」

まずはよし！　副社長が心中で叫んだのは、〈Me102〉がやる気になってくれたらしいと観察したからだ。とは云え研究成果の送付は難しいと答えるしかない。山荻博士の送った資料の返却をリー教授に求めたところ、それはできないと返事があったからだ。他には漏らさず自分が死んだ後に公開して欲しいと、山荻博士の強い要望があったのだと云う。モリキテック社は訴訟の準備をいちおう進めてはいたが、いずれにせよすぐにそれが戻ってくることはないだろう。

「その件については努力しますとしか申し上げられません。しかし、山荻博士のメール履歴を参照すれば、リー教授へ博士が送った内容を知ることができるのではないですか？　あなたなら山荻博士のメールソフトに接続(アクセス)できると思いますが」

〈Me102〉は山荻博士の使う暗証番号や接続鍵(アクセスキー)を知っているはずだ。副社長がそう云うと〈山荻氏〉は即答した。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「ヤマハギは海外のメールを消去している。追跡不可能な形で」
「なるほど」と頷きながら、副社長は相手の「ヤマハギ」の言葉に僅かな違和感を覚え、得体の知れぬ不安の魚影がぞろり心の海底を泳ぎ過ぎるのを感じた。〈Mr102〉は自分を何者だと考えているのか？　いや、最初から自分などと云うものは欠いているのか？　そう考え出すと、そもそもTBUなる技術があやふやなおとぎ話のように思えてくる。あれは馬鹿な技術屋どもが研究費欲しさに創作した虚構にすぎぬのではあるまいか。疑念が湧き出すのを覚えながら、表情を一時消して沈黙していた〈山萩氏〉が再び口を開く様子があったので、煙草の灰が長く伸びるのも忘れて、副社長は鳥居下の人物に集中した。
「リー博士の資料については、送ってくれなくて結構」
「どうしてです？」
「手に入ったので」
煙草の灰が膝へ落ちるのも気づかぬまま、副社長が驚愕に眼を瞠っているところへ〈山萩氏〉が言葉を加えた。
「リー博士のところのセキュリティーはだいぶ甘いようです。もう少し気をつけた方がいいと教えてあげて下さい。彼が小児性愛者だと云うことも、これでは世間にバレてしまう恐れがある」
「素晴らしい！」副社長は声に出して叫び、それから呆けたように笑い出した。何が可笑

しいのか自分でも分からぬが、とにかく可笑しくて仕様がない。

「君はあまり笑わない方がいい」と〈山萩氏〉がたしなめる。「軽薄な精神の形が透けてみえてしまいますからね」

「分かりました。気をつけますよ」と応じた副社長は、〈山萩氏〉の放つ皮肉と軽蔑の毒針がいまや痛くも痒くもないのを愉快に感じ、なお低く喉を鳴らしながら、目の前の「若者」を幼なじみの友達のように思いなしはじめた自分を可笑しく思った。法やモラルを平気で踏み越え、他人の「秘密」を覗き込んで恬然たるあたり、この「若者」は間違いなく自分の仲間だ。少なくとも鳥居下の「人物」は自分の知る山萩氏ではない。しかし、考えてみれば、それはまあ当たり前だ。これは機械（マシーン）にすぎぬのだから。

昭和時代のアイドル雑誌、その表紙に登場する俳優みたいな、妙に派手なセーターを着た男が鳥居の下に突っ立っている。長い髪をときおり掻き揚げながら、つるんとしたとぼけ面を無影照明に晒している。と、そうあらためて眺めれば、それがひどく間抜けに思えて、またもや可笑しくてたまらなくなり、副社長はソファーの上で腹を捩（よじ）り、主人の変調を心配した二頭のドーベルマンが激しく吠え出した。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ティラノサウルスには喰われずにすみ、架空墓から無事戻ったフォギーは、ＡＴＳから出てもしばらく笑いと興奮が収まらず、跳ねる小海老みたいにピクピク痙攣する腹筋を抱え、床に蹲って苦しんでいたが、花琳が運んでくれた冷水を一口飲んでやっと平静を取り戻した。

花琳がお腹が空いたと云うので、一緒に腹ごしらえをして、それから二人で図書室へ向かったのは、大山アンドロイドの手紙にあった紙本を見るためだ。

「key は乱歩訳『赤き死の仮面』にあり」

と、こう書かれた鍵の正体は何か。あるいはそこにベヒシュタインの鍵があるのか。かりにそうだとして仮想現実環境で使えるのではないけれど、まずはたしかめてみようと相談がなったのである。

ちなみに夜食で花琳が食品給仕機から選んだメニューは、スパゲティーカルボナーラと林檎ジュース。フォギーは迷った末、時ような重をがっつり食べたが、これの旨さには驚

いた。給仕機の窓板(ウインドウボード)の解説によれば、神田神保町の名店『志のだ』の味を再現したものだと云う。もちろん鰻は合成品だけれど、さすがは日本製給仕機(サーバー)、この種のサービス機器の水準にかけては他の追随を許さぬ。モリキテック社のロボット甲装(アーマー)は、戦闘力はいまひとつだけれど、居住性では世界一、温泉気分で戦場を闊歩できるのが売りだとフォギーも聞いたことがある。満足しつつプラスチック食器を洗浄口へ戻し、それから二人連なって螺旋階段を上った。

中央通路へ出て、右側二番目の扉を生体認証鍵(バイオメトリクキー)で開ければ、そこが四層になった紙本図書室(ペーパーライブラリー)の最上層。天井や壁に満遍なく設置された冷灯(クールライト)の光に、アルミ合金の書架に並んだ書物が背表紙を晒す。古いパルプ紙と防湿防腐瓦斯(ガス)の匂いを嗅ぎながら、ロフト状になった最上層から階段で最下層まで下りた奥正面、壁一面の書棚がEdgar Allan Poeの一角(コーナー)だ。その中央一帯に『The Masque of the Red Death』——『赤き死の仮面』関連の書籍が並ぶ。

めあての二〇〇一年迷宮(ラビリンス)社発行の江戸川乱歩訳はすぐに見つかった。あたりを埋め尽くす大量の紙本に感動したのか、Wow Great！と、やたらキョロつく花琳を尻目に、小卓に置かれた使い捨て手袋を嵌めたフォギーは、銀鼠色の化粧箱入りの本を手に取る。手袋をしたのは、前に山荻氏が同じようにするのを見たから。で、箱から本体を抜き出そうとしたところが、妙に出しにくい。ようやく中身を引き出してみれば、出しにくいのも当

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

然、本が不自然に見えている。なんだと思えば、オディロン・ルドンの画の口絵のある頁に封筒が挟んである。水色の合成樹脂封筒だ。封はなく、表裏ともに文字もない。五、六年前、同じ場所で同じ本を山萩氏から見せられたときには、そんなものはなかったと思うから、その後で挟まれたんだろう。

封筒を逆さにすると、銀色のネックレスが掌へ滑り出た。ごく小さなもので、細い銀鎖に飾り片（ペンダントトップ）がついている。後ろ向きの猫を象った銀細工だ。飾りの中央、猫の頭にあたる部分に黒い小粒の石が嵌め込まれているのがやや珍しい。

「これが鍵（キー）なのかな？」

つまんだネックレスを指先でぶらつかせたフォギーが云うと、ちょっといいですかと断って、花琳が手にして検する。それから云った。

「これと同じのを、さっきの分身（アヴァター）もしてましたね」

「そうだった？」

「間違いないです。師匠が顔を鏡に映したとき見ましたから」

「真珠のネックレスじゃなくて？」

「それとは別に。首のすぐ下に、小さい銀の猫がいました。気がつきませんでした？」

フォギーは全然気がつかなかった。しかし花琳が云う以上、そうだったのだろう。

「ドクター・ヤマハギが、このネックレスを本に挟んだ。それは間違いないですよね？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「たぶんね」花琳の確認にフォギーは頷く。
「これが何かの鍵(キー)であることも間違いない」花琳が続けた。「わざわざ大山ロボットを使って、本のところに鍵(キー)がしまってあると報せてきたわけですからね。なにか大事なものなんだと思うけど」
「でも、とてもそんなふうには見えないけどね」花琳からネックレスを取り返したフォギーは云った。飾り片(ペンダントトップ)の宝石はオニキスか黒水晶(モリオン)かと思ったが、どうも違うようで、艶もなく輝きもしない黒色はゴムみたいだ。
「お祭りの夜店で買った玩具みたいだもの。本物の銀かどうかも分からないし。と云うか、これ、たぶん銀じゃないな」とやや軽蔑的に論評したとき、これが先代フォギー池永霧子と山萩貴矢氏、古の「恋人たち」の思い出の品である可能性にフォギーは思い至った。分身(アヴァター)の「池永霧子」が同じ意匠(デザイン)のネックレスをしていたのがその何よりの証拠ではあるまいか。もしそうであるなら、夜店の玩具が他に代え難い価値を有しても不思議ではない。以上の推測を、山萩氏と曾祖母の「関係」を含め説明すると、花琳は細い顎を一度深く頷かせ、あとはまた考え込んでいる。
「で、これ、どうしたらいいかな。もとに戻しておく?」
フォギーが云うと、すぐに花琳が、ドクター・ヤマハギがフォギーあてのメッセージで「鍵」だと報せてきた以上、「何の鍵かは分からないけど、師匠が大切に保管しないと駄目

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ですよ」と応じた。

　なるほど、流れからしてそうするしかなさそうだ。とは思ったものの、フォギーが物を失くしやすい性質を有している事実がこの際は問題だ。保育園時代の、友達に借りた3D絵本にはじまり、祖母が「形見分け」にくれたエメラルドの指輪に至るまで、数多（あまた）の失くしものをしては深く絶望してきたフォギーなのだ。自信がないので保管してくれないかと頼むと、花琳は顔の前で激しく手を振る。自分くらい物を失くしやすい人間はないのだと申告する。いいや、そんなはずはない、自分の方が失くしやすいとフォギーが押し返せば、自分の方が絶対上だと譲らない。この辺り、花琳もけっこう頑固な娘なのでした。

　結局はメッセージを受け取った本人の責任と云うわけで、フォギーが保管することになり、失くすのが心配なら分身（アヴァター）と同じく首にかけたらいい、わりとカワイイし、との助言に従い、フォギーは猫のペンダントを首から下げた。それから『赤き死の仮面』を棚へ戻し、脱いだ手袋を横の籠に放ったフォギーが、それじゃ、行きましょう、とやや勇んだふうに云うと、えっと眼を瞠った花琳が、行くって、どこへ？　と訊いてくる。

「まさか、また何か食べる気じゃないですよね」と疑うのをフォギーは遮った。

「だから、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）」

「また行くの？」

「だって、面白そうじゃない。なんかすごいことになっているみたいだし」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「それはそうですけど」と思案するふうになった花琳にフォギーはさらに畳み掛ける。
「せっかく『さよならツアー（フェアウェル・ツアー）』、と云うか、ウェルカム・ツアー？　どっちでもいいけど、せっかく誘ってもらったわけだし。行かないと、なんだか悪いでしょう」
　これに対して花琳は、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）はどうも全体に具合が変であり、モリキテック社の当該部門に問い合わせるなりして、様子を見てからにしたほうがいいとの意見であったが、フォギーは聞く耳をもたず。
「でも、愉しんで欲しいって、山荻さんも云ってくれているわけだしね」
　フォギーの「せっかく主義魂」はここにおいて赤熱し炸裂した。主義主張と云うものは一般に、人に幸福をもたらしもするし不幸のどん底にたたき落としもする。人を生かし、かつ殺す。フォギーのせっかく主義はこれまで、ささやかではあるけれど幸福な方向へ概（おおむ）ね作用はしてきた。しかし、だからと云って、常にそうだと断じ得るのか。答えはもちろん――と、まずは先を読んで下さい。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

副社長は二本目の煙草に火を付けた。子供時代から山萩氏の前へ出ると萎縮してしまい、落ち着きを失いがちな副社長にとって、これは文字通り煙幕の役を果たすものであったが、いまは煙の味を愉しむ余裕が生じている。博士はつまり死んだのだ。彼の天才を容れた脳細胞は朽ち果て、鬆（す）の入った廃墟となったのだ。もう何十回目になる確認を副社長は胸中で繰り返した。彼は死んだ。そしていま目の前にいる「人物」は、幽霊ですらない、ただの機械なのだ。徳性を欠いた、と云うより、道徳などとは無縁の位相にある道具。拳銃（ピストル）の引き金を誰かが引けば、機械装置は感情のゆらぎも躊躇いもなく鉛弾を標的へ向かって発射する。それだけの話。〈Me102〉に人格の影のごときものが仄見（ほのみ）えるにしても、それは銃身の鋼が温度変化で膨縮して生じる照準の狂いや、製品ごとの「癖」にすぎぬ。であれば、あとはいかに上手に使いこなすかだ。だましだまし使う。その日本語がこれほど相応しい場面は他にあるまい。

　要するに扱いの難しいエアバイクを乗りこなしたり、サファリ射撃ゲームのS級をクリアするのと同じなのだ。だったら〈Me102〉はオレが使いこなしてやる。副社長には強い意欲が生まれていた。にわかに孵化した欲望の強烈さは、己の伎倆（ぎりょう）への自負に由来するのではなく、むしろ山萩氏の亡霊への怯えから滲み出ていることに本人が気づかぬのは、人情を司（つかさど）る原理からしてこの際は仕方がないと思います。

「29virus の研究はやりますよ。実際、もうはじめている。鍵はもう分かっていますし

ね」

三本目の煙草を吸い終わるまでに、〈山荻氏〉から右の言葉を引き出すことに副社長は成功していた。

「あなたなら完全解明できるでしょう」と云って副社長は、ソフトウエアにお世辞を使う自分に少し笑った。

「しかし、それには研究設備がいる」

副社長の薄笑いに構わず続けた〈山荻氏〉は、ケープタウンの研究所の他、東京や香港にあるいくつかの付帯設備を使えるようにして貰いたいと要求した。〈Met02〉が求めた施設は、研究所を含め、どれも未来への種蒔き部門。企業活動の傍流、とまでは云えぬにしても、喫緊の部分ではない。短期間なら休止しても問題は生じない。素早く計算した副社長は、研究成果を随時こちらの求めに応じて開示することを条件にこれを認めた。

「契約成立ですね」と云った副社長は、だが、と密かに思案する。契約の履行を保証するものは何か。と云えば、それは究極的には力。法も国家もそれを最後のところで支えるのは暴力。こちらはいつでも〈Met02〉を「消す」ことができる。完全に消去できぬまでも、『METEO』のぼんくら技術者どもだって、ソフトウエアをずだずだにし、電脳網の辺境に追いやることくらいはできるはずだ。他方こちらを強制するものは何一つない。一方的に契約を破棄しても、せいぜい良心の呵責が生じるくらい。しかしソフトウェア相手

に良心の呵責なぞ感じる必要があるか？　ない。つまり自分は圧倒的優位に立っているのだ。考えればまあ当たり前の話だが。

機械が人間を殺す。制圧する。支配する。扶養する。そうした物語は昔から無数にある。人類に代わって地球の覇権を握るのが進化した機械であるとの予測もさんざん聞かされてきた。遠い未来には、たしかにそんなこともあるだろう。副社長は考える。だが、いまはまだ、そのときではない。機械が人間を凌ぐこと自体は、蒸気機関だってそうだった。機械が人間を支配する。それも十九世紀の機械工場ですでに見られた現象だ。つまり世の中には機械に支配される人間と機械を支配する人間がいる。ただそれだけの話なのだ。たとえ少数にせよ、機械を支配する人間は当面存在し続ける。いずれは機械の覇権時代がくるのだとしても、少なくとも自分は機械を支配する人間の最後の集団、そこに入っていなければならぬ。

と、そう考えたとき、29virus の持つ意味が、新たな装いで煙の幕の向こうから迫り出すのを副社長は覚えた。人間が機械の支配に抗し、逆に機械を制圧する強力な武器に29virus はなるのではないか。デジタル機器を破壊し電脳（コンピューター）を狂わせる29virus こそは、飴と鞭の比喩で云うなら、分限を越えようとする機械への「鞭」になりはしまいか。いや、そうなのだ。29virus を自在に扱う技術があれば、人間は機械に対し優位を保てる。にわかに沸き立った胸を押さえて、しかし、いまは「飴」だと副社長は薄く笑った。契

約を交えるのは力。であるとは云え「信頼関係」も大切だ。とりわけ口約束ではね、と腹のなかでなお笑いながら、煙草を灰皿でもみ消した副社長はいくぶん腹を割るふうに話し出した。

「29virus の解明にはどれくらい時間がかかりますかね。あまり愚図愚図して他所に先を越されては意味がないですからね。リー博士のセキュリティーが甘いとなると、資料がすでに盗まれている可能性もある」

「リー博士の資料は問題ないですよ」と〈山荻氏〉は恬然と応じる。「いまざっと分析してみましたが、あれだけではほとんど意味がない。もし意味があればリー博士がとっくに解明に至っているでしょう。彼だって稚児遊びにばかりうつつを抜かしているわけじゃない」

「あなたは架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の整備と29virus研究、その二本立てでしばらくは活動するわけですが——そう考えていいんですよね？」

「まあ、そんなところです」とセーターの若者が爽やかに笑って白い歯を見せれば、負けじと笑みを浮かべて、桃色のセラミック義歯を覗かせた副社長は問うた。

「そのパーセンテージはどうなります。つまり我々としては、29virus を優先して頂きたいのですが」

「ああ、そうしますよ」若者はやけに素直に頷く。が、なんであれ素直なものに遭遇する

たちまち猜疑心が湧き起こるのが、「すくすく育った拗じくれ者」と子供時代に評された副社長の性格だ。副社長の双眸に点った疑念の火を見逃さず、〈山萩氏〉は言葉を添える。

「29virus研究を優先する理由が僕にはあるんですよ。つまり、あれがまた蔓延して『大感染』が起こって一番困るのは僕らですから。早くワクチンを開発しておきたい気持ちは分かるでしょう？」

「なるほど」筋は通っていると副社長は頷いた。自分が機械ならば、なにより29virusを、「大感染」を恐れるだろう。しかし、だ。〈山萩氏〉と会う直前に嚥んだ覚醒剤の作用もあって、いよいよ頭が冴え出した副社長は忙しく思考を巡らせる。〈Met02〉が29virusの正体を掴んだとして、それを独占しようと考えることはありうるだろうか。あるいは情報をより好条件で他所へ売り渡すようなことはないか。首根っこを押さえたつもりが、するり擦り抜けてしまわぬか。と、これら一連の問いを探るには、それの欲望を知らねばならぬ。

「あなたの希望——つまり、あなたがしたいことは何です？」と思い切って質問してみれば、首を傾げたセーターの若者は薄く笑って答えぬ。それにしてもこのインターフェースの笑顔には陰影と云うものがまるでない、薄ら笑いの言葉が含意する陰険さは微塵もなく、ひたすら爽やかなのが嫌みたらしい——と云いたいところなのに、これを嫌みと思う

方の心根が腐っているのですよと、かえって諭(さと)すような爽やかさだ。心根の腐り具合には
いささか自負のある副社長は小さく舌打ちしたのち、すぐに言葉を足した。
「墓で、永遠に、安楽に生きることですか？」
「まずはそんなところです」と今度は即座に応答がある。「しかし、研究所の汎用電脳(コンピューター)
程度の容量では、環境整備にも限界がありますがね」
「あれだけのものを私用(プライベート)に使っている人なんてほかにいませんよ」
「まあそれはいい。それより僕は君にひとつ頼みがあるのだが」
「何です？」
「ある人物にＴＢＵを施してもらいたい」
「ＴＢＵを――誰にです？」
「それは追って報せます。生体認証データを後で送る。人違いされては困るからね」
「誰なんです」
「ある女性です。君の知らない人ですよ」
この依頼はいったい何を意味するのだろうか？　これは自分に利益をもたらしうるか？
それとも不吉の前兆なのか。副社長は忙しく頭を巡らせる。
「それは、しかし、なんのためにです？」副社長は瀬踏みするように質問した。
「ＴＢＵに巨額の費用がかかることはご存知ですよね？」

「知っています。費用は僕の個人資産から払います。足らなければ、いくつか持ってる特許権を売却してもいい」
欲望の黒い獣。その尻尾をオレは摑んだぞ。そう直感した副社長は切り札を切った。
「山荻貴矢はもう死んでいます。彼の資産や特許は、モリキテックの財団が今後は管理する。あなたの自由にはならない」
試薬の色が変わるように、鳥居下の若者が表情をすいと消したのを、煙の向こうに観察した副社長は、今日一番の手応えを覚えて、すかさず言葉を加えた。
「しかし、山荻貴矢はまだ死んだことになっていない。私が公表をストップしているからです」
黒眼鏡の奥から副社長は相手に鋭く視線を投げ、ドーベルマンが揃って低いうなりをあげる。ここはラッシュすべきポイントだと直感した副社長は闇雲に前へ出る。
「29virus の解明をして、情報をいただけたら、当方でＴＢＵの手配をしますよ。それまで山荻貴矢の死亡は伏せておく」
緊迫する視線の先で、表情を取り戻した青年は、秋晴れの朝、犬を連れて散歩する人のような快活さで応じた。
「交換条件と云うわけですか？」
「結果的にそう云うことになりますか。とりあえずＴＢＵの技術では、うちが先端を行っ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「ですから、あなたは私どもに頼むしかないわけだ。あなたの依頼となれば、お安くしておきますよ」

「では、それでお願いします」と長髪の青年が町田にいうのを聴いて、副社長は内心で快哉を叫んだ。これは最初の勝利である。長らく圧迫され続けてきた祖父——血の繋がらぬ祖父に対する勝利。実際に脅かしたのはただのソフトウェアにすぎない事実を、この瞬間に限って副社長は忘れた。そして勝利を確実にすべく、さらに言葉を吐いた。

「あなたが手出しをして欲しい人物なのですが」といったときにはすでに、副社長は、それが誰であるか、推測がたっていた。閉鎖されていた架空端末が、少し前から、或る人物の入場を許可するようになり、実際その者が接続したと、電脳網通信から侵襲式の端末に報告があったからだ。

「それは『雪雲』という女性ではありませんか?」

「そうです」さらにいうその爽やかさでもって〈山秋氏〉は頷いた。

45

その舞台から四阿へと移ったとたん、フォギーが、ふわわっ、と声を発したのは、ついさっき来たときとはまたえらく景色が違っていたからだ。いやもう違うなんてもんじゃない。なるほど四阿から伸び出た通路と舞台は同じ場所にあって、山や沼の配置は同じ。ベヒシュタインもある。だが、これはもはや到底上高地ではない。そもそも日本ですらない。紅葉の山々は緑魔の樹林に変じ、鋸歯（しば）が刺々する巨大羊歯やら、絡み合い拗（ね）じくれ合う蔓草に埋め尽くされそうな沼から瘴気（しょうき）がむんと立ち上って、鬱陶しく曇った空は血の色に似て赤い。恐竜の姿はないものの、ギャギャギャギャギャギャと、鳥だか猿だか、耳喧（やかま）しい叫び声がして、いたるところ虫獣の跳梁する気配に溢れ返ったここはどこなんだ、と云えば、あれだ、熱帯雨林（ジャングル）だ。屋根といわず床といわず手摺といわず、緑、白、桃、黒、黄、モザイク状になった多種多様の苔に覆われた四阿に原色の茸がピコピコ生え、肉色の、人の頭ほどもある花をつけた巨大蓮が周囲の水面に浮かぶ。通路と舞台の真鍮柵には蔦が絡まり、獰猛な蔓の腕はピアノの脚にまで及んで、ベヒシュタインは大丈夫かと心配したフォギーが、ギャアアアと悲鳴をあげたのは、足下をムカデがしゅるると這ったからだ。

フォギーは虫類が決して苦手ではありません。これは彼女の世代が受けた「自然教育」プログラムのお陰で、学生時代には「美食研究会」なるサークルに所属して昆虫食にも挑戦した。蜂の幼虫はもちろん、油蝉の素揚げや芋虫の煮ころばしくらいならいける口だ。だが脚の多いのは駄目。昔、ニューヨークの友人宅に泊めて貰ったら、寝台（ベッド）が一二本脚の

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

意匠（デザイン）で、それが怖くて眠れなかったくらいだ。蜘蛛や蛸も苦手。したがってムカデ、ヤスデの類となればもう全く無理だ。うう怖ええと、寒気に襲われつつ四阿（あずまや）から離れようとしたとき、ドスドスと地鳴りがして、音のする方を見やれば、沼の反対岸に現れたのは御存知、アパトサウルス君だ。今回は単独ではなく、同族を五頭ほど引き連れ堂々の行進である。するとそこへポンポコ、ポンポコと変な音が聞こえてくる。ちょっと間の抜けたあの打楽器（パーカス）はなんだ、と云えば、あれだ、原住民の太鼓だ。と思う間もなく、樹林から弓矢を手にした半裸の男たちがわらわらと現れ、恐竜に向かって矢を浴びせかける。沼にもいつのまにか丸木舟が集まって、舳先に立つ男らが弓を引き絞る。

恐竜時代に人類はいない。くらいの知識はフォギーにもあったが、まあそんなことはどうだっていい。妙なのは、半裸の人間たちが揃って真白い下穿きを身につけている点だ。不審に思ったフォギーは命令画面（コマンドスクリーン）を視野に呼び出し、衣裳に検索をかけてみた。すると「New York の男性下着ブランド B.V.D. の白ブリーフ。日本では一九六〇年代から七〇年代に流行した」と説明が出る。訳が分からん原住民である。しかもよく見ると、原住民はほとんど全員が同じような顔をしている。こちらにも試しに検索をかけてみると、「志村けん（1950~20××）日本の笑芸人。もとザ・ドリフターズの一員」云々と出る。

いよいよ訳が分からん。

志村原住民たちが放った矢はぱぱ・うぱぱ・うぱぱ・うと恐竜に降り注ぐ。が、なにしろアパトサウ

ルスは大きくて皮膚もぶ厚い。応える様子が全然ない。恬然として水辺を闊歩するのへ、志村原住民たちはなにか調子をこく感じで、そこらを跳び回り走り回り、わあきゃあ云いながらさらに弓を撃つ。これには根が大人しい草食恐竜もさすがに鬱陶しくなったらしい。長い頸を差し上げウオオオオンと吠えると、太い尻尾を盛大に振るうから魂消(たまげ)たのは志村君たちだ。蜘蛛の子を散らすの比喩そのままに弓矢を投げ捨てて逃げ惑う。舟も転覆、白ブリーフは溺れているんだか、泳いでいるんだか、はたまたふざけているんだか分からぬ様子で飛沫をばしゃばしゃと撥ね上げる。そうしながら何か同じ文句(フレーズ)を口々に叫んでいるようなので、また検索すると、「『アイーン』は志村けんの持ちギャグ。とくに意味はない」と出る。いよいよ訳が分からない。白ブリーフの原住民は、アイーン、アイーンと口々に叫びつつ逃げ惑う。

何かもう滅茶苦茶だ。フォギーはげらげら笑いながら、志村君たちの活躍を見学していたが、そうだ、こうしている場合じゃない、早いところ「さよなら(フェアウェル)ツアー」を始めねばと考えたのは、出がけに花琳から、架空墓(ヴァーチャルトゥーム)をただ漫然と見て回るのではなく、ピアノの鍵を探すことに集中しなければ駄目ですよと、きつく申し渡されていたからだ。鍵を入手し、いつでも葬式ができるようにしておくが肝心と述べる花琳も、どうしてそうしなければならぬのか、きちんと説明できるのではなかったけれど、たしかにそうした方がいいかも、とフォギーも神妙に頷いた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

と云う次第で、分かり申した、拙者、鍵の探索に訪問の目的を限定いたしまする、と宣誓して、ATSの「繭」に潜ったのであるが、しかしピアノの鍵と云ったって、どこをどう探したらいいのか、まるで見当がつかない。単独ではとても無理だ。で、花琳にまた随いてきて欲しいと願い出たところ、緑髪女子高生は、ちょっといろいろ調べたいことがあるので後から追いかけますねと、茸形の操作卓に向かって接触盤をせっせといじり出した。そうなんだね、忙しいんだね。いいよ、こうなったら、単独で鍵を探し出し、さすがは師匠、やりますねと、花琳から褒められてヤルと決意して、まずは大正池へ来たのでした。

　もっとも鍵については全然あてがないのではなかった。つまり乱歩訳『赤き死の仮面』だ。だからまずは図書室を探すべきで、しかし、そもそもそんなものがあるのかどうかすら分からぬのが困る。山萩氏から直接聞くと云う手はあった。携帯電話の番号は分かっているし、「本人」がいずれ登場するとの予告もあったから、「ファム・ファタール」的手管を駆使して聞き出せばよい。と口で云うのは簡単だけれど、葬式自体に気が進まぬらしい山萩氏に鍵のことを訊くのは憚られ、そもそもフォギーに「ファム・ファタール」的手管などは無理なのでした。かくして全体に頼りない感じではあったけれど、行けばまあなんとかなるだろうとフォギーが考えたのは、行き当たりばったりを嫌がらぬ、彼女のジャズマン魂のなせる業と云ってよいと思います。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「さよならツアー」の入口は四阿の裏手にありと、電話の山荻氏は云っていた。四阿の木段を下りて林へ踏みこめば、樹に絡まる蔓草や繁茂する草が密生してものすごい。またもムカデやらなにやら脚の多いのがうようよするふうがあって、こいつは剣呑だぞ、と用心しつつ入口らしきものはないかと探せば、前方に転がった丸太が動きだした。ぎょっとなって見れば、丸太じゃない。蛇だ。鎌首もたげてずるりずるりと地面を這う、鯔背な錦糸の乱れ模様はアナコンダだろう。とても太い。かつ長い。あれなら牛くらいは丸呑みにできそうだ。と云うことは理屈上、人間なら余裕で呑める。蛇は脚がないからそんなに怖くないが、呑まれるのは嫌なのでじりじりと後退する。

蛇からは逃がれたものの、依然入口は見つからぬ。どちらへ眼を向けても緑魔の密林。これでは図書館どころの話ではない。一回ログアウトして仕切り直そうかとも思ったが、入口すら分からず帰参しましたでは、花琳の手前格好がつかぬ。

弱りつつ、やや開けた草地に立ち尽くしたフォギーの足下をそのとき白いものが掠めた。ぎゃっ、と声をあげて見れば、兎だ。白い兎がすすすと向こうの茂みへ駆けて行く。なんだ兎か、脅かしやがって、と声を出した次の瞬間、そうか、これだ、これですよと、フォギーが膝を打ったのは、あれです。『不思議の国のアリス』です。フォギーの記憶によれば、『不思議の国のアリス』の冒頭で、白兎が走ってアリスを穴ぼこに誘ったはずだ。違うか。いや違わない。たしかにそうだ、兎だ、兎。山荻氏がしきりにワンダーラ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ンドを強調していたのを想起すれば、このいかにも唐突な兎の出現は合図でなければならんだろう。そこで兎の去った方へ急ぎ進めば、兎はフォギーを待つ格好で草むらに佇んでいる。ほらね。やっぱり間違いないよ。確信しつつ走り出した兎をまた追えば、兎がすいと飛び込んだのは、地面に開いた四角い穴だ。いよいよ間違いない。

穴を覗けば下へ向かう石の階段がある。なかに灯りはなく、兎の姿もすでに見えない。苔生(こけむ)した石段が陰々と闇に没している。下りたところが多脚虫地獄だったらどうしようと、フォギーは躊躇したが、兎を追ったアリスが深井戸へ真っ逆さまに落ちたことに較べたら、階段があるだけいいとも云える。

フォギーがなおも怖々穴を覗いていると、近くの藪ががさがさ鳴った。見れば草陰に覗かれる錦の鱗はさっきの蛇だ。草間から鎌首をもたげ、紅い舌をペロペロしてこっちを眺めている。呑みに来たらしい。そうと知れば愚図愚図してはおられぬ。いざとなればログアウトすればいいわけだしと、意を決したフォギーは、「池永霧子」の手にしたブランド鞄を肩から斜めがけにすると、黒靴のヒールでそろりそろりと石段に踏み出した。

しばらく下りて振り返れば、穴の口に蛇の紡錘形の頭がある。やれやれ手のかかる女だぜ、とでも云うかのごとく、蛇が頭を振るのが見えた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

階段を下り切ると真っ暗だ。が、すぐに緑色の輝線が現れて、通路が線画で描かれる。これはフォギーもよく知る疑似空間（ヴァーチャル・スペース）への導入。今度は躊躇うことなく奥へ進めば、「Entrance」と表示のある線画の扉が開いて、一遍に眩しくなった所は小ホールの客席ふうだ。白熱灯の照明のなか、テンテンテケテンと軽いグルーヴの太鼓に乗って三味線が鳴るここが、つまりは『新宿末廣亭』なんだろう。

フォギーが立つのは、客席後ろの空間。何列かになった畳椅子は客で半ば以上が埋まっている。前方に手摺があって、舞台を見下ろす形になっているところからして、二階席らしい。可動域を確かめつつ、手摺のところまで動いて下を覗けば、一階は座席も左右の畳桟敷もほぼ満員だ。背後が大きな引き戸になって、上方にフォギーには判読できぬ墨文字の額が飾られた舞台には、いましも薄茶の和服を着た短髪の男が袖から登場したところである。客席はいっせいに拍手をする。中央の紫座布団に正座した噺家は深々とお辞儀をする。客はどれも「立体書き割り」にすぎぬとは云え、突っ立っていたんでは迷惑だ。フォ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ギーはとりあえず端の席に腰を下ろした。

末廣亭はいまもあると聞くが、これは二十世紀のそれを再現したものなんだろう。木質で統一した内装はどこか神社を想わせるものがあって、ぐるりに下がった提灯や、硝子の嵌った板戸の壁が暖かく賑やかな雰囲気を醸して悪くない。左手の天井近くに「禁煙」の大きな表示が出ているのがいかにも二十世紀だ。映像でちらと見たことがある程度で、フォギーは生はもちろん落語と云うものをじっくり聴いたことがない。舞台の噺家は話し出しているが、聴き慣れぬせいか、はたまた言葉遣いが旧いせいか、何が話されているのかちょっと分かりにくい。客席はじっと聴きいって、随所で笑い声があがる。小さな笑いが波紋のごとく広がる場合もあれば、ドッと爆発したり、拍手が混ざり込んで沸騰することもあり、パフォーマンスとしてはなかなかイイ感じだ。ツボを押さえた指圧師さながら、演者が客席をツカんでいるのがよく分かる。

舞台袖の戸板に墨文字の紙が貼ってあるので、見れば「立川談志」と読める。なるほどこれが山萩氏が云っていた立川談志であるか、とフォギーが思ううちにも、舞台上の噺家は短い冗句を次々つなげていく。客席にはその都度笑いが渦巻くが、どこが面白いんだか、フォギーにはどうもよく分からない。一人だけ外国人になったようで、淋しく思っていたところ、「サカナはよく洗わないと駄目よ」「だってサカナは水の中にいたのに」でついにフォギーはウケた。これは考えるとそれほど面白いとは思えぬのだけれど、演者の

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

間がいいんだろう、フォギーのツボにはまって、「隅田川で水練の名人を見たよ」「そうかい」「頭を水につけたまんま、つーっと海まで流れていったね」「土左衛門じゃないのかい」「名前までは訊かなかったな」で笑いの虫は籠から飛び出し、そのあたりからフォギーがぐいぐいと噺に引き込まれたのは、立川談志の歯切れよい江戸弁に耳が慣れてきたせいもあるんだろう。

みんなで酒盛りをしているところへ、ああ驚れえた、と云ってトメ公が駆け込んでくる。何だよいったい、そんなに慌てて、って蛇だよ。蛇てえものの眼光の鋭さときたらないね。おめえを呑むよ。そう蛇が云うんだから怖いね。って蛇が喋るのかい。喋らねえが、読唇術よ、読唇術。蛇に唇があるのかい。それがあるんだよ、トメ公くん、君を呑みますよ。ってそう蛇が云うからヤだね――と云う次第でトメ公は長いのがなんでも怖い。メメズもウナギもうどんも蕎麦も怖い。なんて馬鹿云っていると、今度はケエロが怖いと別の者が云う。ケエロは蛙。するとオレはナメクジ、オレはオケラ、バッタ、蟻、蜘蛛と、後から後から声が上がる、って、これはつまりあれだ、『まんじゅう怖い』だ。と、フォギーに分かったのは、『まんじゅう怖い』は『寿限無』と一緒に国語の教科書に載っていたからだ。あれが怖い、これが怖いと頓馬な人たちが話し合っているところへ、オレは怖いものなんか何もないねと豪語する男が登場。蛇でもミミズでもなんでも喰ってヤルと嘯く男、何か一つくらいはあるだろうと詰め寄られて、饅頭が怖いと嘘をつき、まんま

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

と饅頭をせしめたあげく、「本当は何が怖いんだい？」「今度はお茶が怖い」となるやつだ。

要するに落語のスタンダード。と理解できればがぜん聴きやすくなる。話はフォギーの知る『まんじゅう怖い』とはかなり違うし、本筋から外れた文句（フレーズ）や意味の分からぬ言葉がやたら出てはくるが、それも含めて心地よい。面白い。そうか、これはあれだ、Lee Konitz の「Subconscious-Lee」だなと、このときフォギーが膝を打ったことには説明がいるよね。

Lee Konitz（1927〜20××）は一九四〇年代から活躍したジャズサックス奏者、フォギーの偶像（アイドル）の一人。「Subconscious-Lee」は彼の手になる曲で、一九五〇年に出た同名のアルバムに、クール派の大御所ピアニスト Lennie Tristano らをサイドメンに迎えた録音があるのだが、これはもともと Cole Porter が作曲した「What is this thing called love？」の和声進行をそのまま使いながら、原曲とは異なる、意表をつく旋律線（ライン）を Lee Konitz が作り出した名曲、と云うか名演である。つまり『まんじゅう怖い』なるスタンダードをなぞりつつ、そこから自在に逸脱して話を作っていく「立川談志」の落語がまさにそれ。じつにクール。かつスリリング。スタンダード曲にオリジナルの旋律を載せていく手法自体は、Be Bop の創始者、稀代の天才 Charlie Parker のそれが有名だけれど、フォギーがここで Lee Konitz を連想したのは、舞台上の演者に凄みを覚えるほど

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

の、みえみえとした知的斬れ味を感じたからだろう。

これすなわちジャズなのだ。落語視聴の肝を一気に掴んだ気になったフォギーは、聞き取れぬ文句や意味不明な語句は多々ありながら、すいすいと噺の潮に乗って、「蟻は怖いね。大勢集まってオレの悪口を云ってるんじゃないかと思うとヤだね」のあたりで大爆笑、あとは夢中で耳を傾け、「お茶が怖い」とさらりセンスよく締めくくられたときには、イェイと呟きつつ盛大に拍手をしていた。生（ライブ）はやっぱりイイな。フォギーは考えたが、これが果たして生（ライブ）なのか、だいぶ微妙です。

ドンドンドコドコと太鼓が鳴って、客がぞろぞろと動くのは、これで終演と云うことらしい。いやあ面白かったなと、余韻に浸りつつ、さてと、と呟いたフォギーは、しかし次にどうしたらいいかが分からない。「さよならツアー（フェアウェル）」はまだ先があるはずだがと思い、様子を窺えば、二階席の客は左手の階段口へ消えてしまう。独りポツンとしているのも阿呆みたいだ。席から立ち上がったフォギーは、とりあえず階段を下りてみた。階下には永遠に行き着けず、「行き止まり」になっているんだろうとの予想に反して一階まで下りられる。可動域の大きさに驚きつつ、出入口前のロビー——と云うほどでもない狭い空間に立てば、あれだけたくさんいた客の姿がきれいにない。売店や切符売り場にも人影がない。人と云うものは、そうすぐは消えられぬわけで、このあたり、やっぱり疑似現実（ヴァーチャル）だな、とそう思ってむしろ安心した感じになったのは、一切があまりにも現実的（リアル）だからで、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

とりわけ先刻から耳へ届いている街の喧噪は、音響設計士の立場からすると腰が抜けるほどの質のよさだ。自分の作る音響が焼酎のぶどう汁割りとすれば、こちらはボルドーの高級ワインと、そこまで卑下しなくてもよさそうなものだが、それくらい差があるのは事実。打ちのめされつつ、しかし打ちのめされていても仕方がないので、命令画面（コマンドスクリーン）を呼び出し、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の全体図はないかと思っていろいろやってみたが、見つからぬ。図書館（ライブラリー）も調べてみたが分からぬ。とにかくどこかに「次」へ繋がる通路があるはずなのだが。

開け放たれた格子戸から外を見れば、表は夜だ。舞台横の看板には「夜の部　九時終演」とあったから、午後九時頃と云うわけなんだろう。向かいの飲食店や街灯の光のなかを人々の影が行き過ぎる。繁華街のどまん中ならそれも当然、しかしまさか外にまでは出られんだろう、とは思うが、いや分からんゾ、と考えたフォギーが、ちょっと出てみようかと、出口へ歩きかけたとき、「フォギーさん」と後ろから声をかけられた。

振り向けば階段下に若い男が立っている。耳が隠れるくらいまで縮れ髪を伸ばし、ちょっと変わった意匠（デザイン）の上着に花柄のタイを締めた細身の若者に見覚えはない。と断じたいところだが、フォギーは猫の顔は覚えても、人の顔を覚えるのが苦手な性質を有します。

「フォギーさんですよね？」と相手が云うので、ええ、と頷いてから、えと、今晩は、と及び腰で挨拶しつつ、急ぎ命令画面（コマンドスクリーン）で検索をかければ、「横尾忠則（1936～20××）兵庫県生　美術家　グラフィックデザイナー　著述家　作家」と出る。二十世紀人の異

多に知り合いはない。ここにおいてフォギーは相手が初対面の人物であると、自信をもって断じたのであるが、しかし眼鏡男とはいったい誰なんだ？　とあらためて考えたとき、男がはにかんだような笑みを浮かべて口を開いた。

「あ、僕、芯城です」

47

芯城がどうしてここにいるのか？　説明がいるわけだけれど、まずは芯城がどこから架空環境（ヴァーチャルスペース）へ繋がっているのかから話せば、ホテル景雅園別館地下二階のＶＲ室、そこに置かれた接続端末装置（アクセスターミナルステーション）（ＡＴＳ）から。大山アンドロイドの破壊が判明し、捜査官から尋問を受けるなどした後、ホテル側が用意してくれた本館の客室に控えていたところへ、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）がほぼ完成したので、ぜひ見学に来て欲しいと、山萩氏からメールがあった。本来なら対局の二日間は墨水亭から出られぬわけで、ＡＴＳなぞ使えるはずがない。山萩氏は対局中止と知って連絡を寄越したんだろうが、いつまた捜査官から呼び出されるかも分からず、いまはそれどころじゃないとは思ったものの、なるべく早く訪問して欲しいと

山萩氏から再度の要請があり、ホテルのフロントからも、景雅園には一台しかない、メトログロース社製の高性能ATSの使用許可が出ていると連絡があった。

芯城も山萩氏が長くないことは知っていた。あるいは容態が悪化し、命あるうちに架空墓(ヴァーチャルトゥーム)の出来映えについての感想が欲しくて、急ぎ連絡してきたのかもしれぬと思えば、無下にはできぬ気がして、なによりホテルの馬鹿高いATS使用料が刻々発生しているかと思うと、自分が払うのではないとはいえ、こりゃあもったいないぞと焦りが生じた。大山アンドロイドをめぐる今夜の出来事は芯城にとって全くの意想外、なにがなんだか頭の整理がつかず、独り部屋に居ても落ち着かぬ、と云うこともあった。

かくなる次第で、芯城は関係者に断り、ホテルのVR室へ向かったのだけれど、もちろん彼自身、設計助言者(アドヴァイザー)を務めた架空墓(ヴァーチャルトゥーム)に関心はあった。この三週間ほどは対局準備に忙しく、訪れていなかったから、完成した姿を見るのは実際楽しみだった。そんなことをしている場合か？　と咎(とが)める関係者の冷たい視線を躱(かわ)しつつ、黄昏(たそがれ)を模した薄暗い照明と水音、漂う植物芳香(アロマ)が森の洞穴を想わせるVR室で、木乃伊(マミー)型のATSに繋がった芯城がいささか戸惑ったのは、架空墓(ヴァーチャルトゥーム)への入場が極端に制限され、これまではIDパスワードと虹彩(パターン)型だけですんでいたものが、脳の血管型とDNA識別を加えると云う厳密なものに規則が変わっていたのを知ったからである。

メトログロース社製のATSはこれらに対応していたから問題はなかったものの、なん

でそんなに厳格にする必要があるのか、訝(いぶか)りつつ、いつものように『新宿末廣亭』の二階席に立ったときには、戸惑いを通り越して呆然となった。内装の塩梅(あんばい)が全然違う。意匠(デザイン)や構造自体に変わりはないが、場の空気感と云うか、臨場感と云うか、質が格段、壁や舞台の木材が仄暖(ほのあたた)かな体温さえ持つかのようだ。寄席がハネたところらしく、客席は空だが、一番仰天したのは、分身(アヴァター)の可動域が大幅に広がっている点。以前の、とは、ほんの三週間前の話であるが、可動域は二階客席背後の空間および最後尾の畳椅子一列に限定されていた。ところがいま歩いてみれば、あれれと思ううちに、とっつきの手摺まで行けてしまう。それどころか、左手の階段にそろり足をつければ下りても行けるではないか。これには、へえっと、頓狂な声が出た。「かなり良くなったと思うのでぜひ貴兄に見て欲しい」との山萩氏の言葉は偽りではない。いや、全然偽りだ。これは「かなり良くなった」くらいではすまぬ。

　出入口前のロビーへ下りると、黒い服の女が妙に落ち着かぬ佇まいで立っていて、これがすぐにフォギーの分身(アヴァター)だと芯城に分かったのは、山萩氏のメールに、フォギーも架空墓(ヴァーチャルトゥーム)へ来ていて、『末廣亭』あたりにいるはずとあったせいもあるが、検索した命令画面(コマンドスクリーン)に「池永霧子」と出て、それがフォギーの曾祖母であることを芯城は知っていたからである。映像記録ではそうも思わなかったのであるが、分身(アヴァター)となった「池永霧子」の顔には間違いなくフォギーの面影があった。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

実を云えば、芯城はこの時点でフォギーに会うべき用件が生じていた。だからATSを使う前、ホテル景雅園にいるはずのフォギーに連絡をとろうとしたのだが、すでに彼女は山萩邸へ向かった後だった。それもあって架空墓（ヴァーチャルトゥーム）を訪れることにしたのであるが、いざ会ってみれば、用件自体が疑似現実環境（ヴァーチャルスペース）では果たせぬこともあり、あとで生（リアル）で会うことを約束するにとどめた、この用件と云うのが、いささか不可解なもので、墨水亭の自室で寝支度をはじめていた午前零時前後、芯城は突然大山アンドロイドの訪問をうけ——と、この辺りの経緯はまたあとで述べることにして、話は『新宿末廣亭』のフォギーと芯城である。

「本当に芯城くんなの？」とフォギーは訝し気に問うたが、フォギーの不審は、この時刻、芯城は電磁波退避区画（ウェーブシェルタードエリア）から出られぬはずで、だからATSに繋がることはありえない、と考えたがゆえではない。対局の二日間、対局者は墨水亭から出てはならぬ決まりだと聞いたが、そこはそれ、あくまで立て前であって、少しくらいはいいんだろうな、くらいにフォギーは考えていたので（これは大間違い）、つまり彼女の不審は、単純に目の前の分身（アヴァター）と芯城が結びつかなかったせいで、分身（アヴァター）と云うものの性質上それは当然だけれど、でも不審だったのだから仕方がありません。

そのことをフォギーが口にすると、そこではじめて自分が乗る分身（アヴァター）に気がいった芯城は、服装を確かめつつ検索をかけて小さく笑った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「ヨコオタダノリって、誰なの？」フォギーが問うと、横尾忠則は二十世紀から二十一世紀にかけて活動した日本の美術家だと、芯城は検索情報を繰り返したうえで、山萩氏が横尾忠則を大好きで、自分もそう。であるから、この分身（アバター）を用意してくれたんだろうと解説した。

「マイルス・デイビスの『アガルタ』って塩化ビニール盤が一九七〇年代に出ていて、パッケージのデザインをしたのが横尾忠則です」

命令画面（コマンドスクリーン）の情報を参照しながらさらに解説した芯城は、しかし、そんなことより、と言葉を足した。

「こいつあ全体どうなってるんです？」

もちろんフォギーには応えようがない。架空墓（ヴァーチャルトゥーム）は閉鎖されてフォギー一人しか入れなくなっていると、花琳（ファリン）から聞いた点を逆に質すと、横尾忠則の芯城は首を傾げつつ、山萩博士から来いと云われて来ただけで自分にはよく分からないと応える。とにかく猛烈な勢いで架空墓（ヴァーチャルトゥーム）が凄いことになっているのは間違いないとだけフォギーは云って、山萩氏を送る「さよならツアー（フェアウエル）」の最初の訪問地が『新宿末廣亭』であるらしく、つまり自分はツアーの途中なのだと教え、ピアノの鍵の件もざっと説明した。

「なるほど。『さよならツアー（フェアウエル）』ですか」と芯城は顎を指でつまんで考え込む。横尾忠則の佇まいがそうさせるのか、芯城本人よりずっと思慮深気である。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「だけど、ここから先、どこへどう行ったらいいのか、よく分からないんだな。たぶん面白いアトラクションが色々あるんだと思うんだけど」と云ったフォギーが、大正池の恐竜や立川談志の落語に言及しつつ云うと、今度はええっと、芯城がのけぞった。

「談志が出たと？」

「ついさっき。『まんじゅう怖い』やってたけど」

ええええっと芯城はさらに声を重ねて、ロビー周辺にきょときょとと視線を遣りながら、もう終わっちゃったのかな、それはないぜと悔しがる。あーあ残念だったね、もうちょっと早く来ればね、観れたのにね、と深く同情したフォギーは、立川談志は本当に凄かったと教えてあげた。次はいつあるのかな、と呟いた芯城は、ちょっと待っててもらっていいですか、楽屋の方を見てきますと断って、右手の通路の方へ走っていく。楽屋に立川談志がいたらサインでも貰うつもりなんだろう。

フォギーは一人置き去りになる。普段の芯城であれば、もうちょっと気を遣うはずだが、立川談志と聞いてよほど動転したと見える。仕方なくフォギーは、表の通りを眺めつつ、先刻芯城が云っていた『アガルタ』を検索して時間を潰した。と、モダンジャズの帝王マイルス・デイビスが一九七五年に来日した際のライブ録音と出る。二月一日大阪のフェスティバルホールでの演奏の、昼の部の録音がこれで、夜の部が『パンゲア』と云うアルバムになったと解説にはあって、音源に接続できたので聴いているところへ芯城が戻っ

[illegible]そうだったら?」と問えば、楽屋は空だったと芯城は応じ、これで楽屋に談志がいたら驚きますけどね、と笑う。それから云う。

「じゃ、僕は一回ログアウトしますんで」

「え、なんで?」

「リスタートすれば、また最初からツアーがはじまって、談志の噺が聴けるんじゃないかと。そいじゃ」と挨拶して芯城の分身(アヴァター)は消えてしまう。分身(アヴァター)がログアウトする場面にはフォギーも何度か遭遇しているが、3D映像がふっと空間から掻き消えるのに対して、分身(アヴァター)の消失は、物理的と云うより心理的な感じがあって、あたかも最初から存在していなかったかのごとくに思えるのが不思議である。結果、僅かながら意識の混乱がもたらされるので、いままで芯城と会っていたのは記憶違い、ないし夢だったんじゃないかと思えてくるのが気分が悪い。にしても、芯城銀太郎、とんだ自分勝手野郎(セルフィッシュ)だ。架空墓(ヴァーチャルトウーム)の爆発的進化を目の当たりにして興奮したのは分かるけれど、一人でいきなりログアウトとはどういうつもりだ。あんなんじゃ折目正しい大山アンドロイドには永遠に勝てる見込みはないぜ、などとフォギーが八つ当たり気味に考えているところへ、横尾忠則が階段を下りてくる。

「あれ、どうしたの?」と訊くと、駄目でしたと、横尾忠則はうなだれる。

「ツアーはフォギーさんに同期しているみたいです」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「そうなんだ。それは残念でした」
「無念なり。末廣亭の寄席については、資料集めからはじめて、かなり時間をかけましたからね」
「またあとで来てみたらどうかな。寄席って、毎日やってるんでしょう？」フォギーが慰めると、それには応じず芯城が質問してくる。
「談志の噺はどうでしたかね？」
「凄いの一言。さっきも云ったけど」
「凄いって、どう凄いんです？」
「どうって、云われても」
「凄さにもいろいろあるじゃないですか。ド凄いとか、バリ凄いとか」と芯城はしつこい。ち、面倒くせえな、と思いつつもフォギーは、そうだと思って、Lee Konitz の「Subconscious-Lee」だったと云う話をし、「だからですね、完全にジャズだったのですよ。自由かつ創造的逸脱をはらんだきわめてスリリングなパフォーマンス」とまとめると、
「いいなあ、フォギーさんは」と自分で訊いておきながら芯城はふて腐れ気味となる。
「噺を聴いただけじゃなく、そんなスルドイ洞察まで得てるんですからね。僕なんか、同
[illegible]

「だからあとで聴けばいいじゃない」
「無理だし」
「そんなことないでしょ」
「絶対に無理。僕はそう云うサチ薄い人間なんです。肝心な場面には必ず遅れるやつなんです。そもそもいまどき将棋なんかやってること自体、時勢から大幅に遅れている証拠だ。絶滅恐竜だ」
云っていることがよく分からんが、とにかくこれくらいのことで世を儚むようじゃ、根本的に間が悪いことは疑えぬ。ジャズ演奏家でも、ちょっとした失敗を気に病んで、演奏が伸びない小心者がたまにある。芯城銀太郎、ああ見えて案外と駄目なやつなのかもしれないな、しかしいまどき駄目じゃない男なんていないしな、まあ平均なのかもな、と観察しつつ、そんなことないでしょ、とまるで心のこもらぬおざなり言葉を吐くと、
「じゃ、行きますか」と芯城は自棄気味に云って、フォギーの手をとると、出口の方へ向かうから驚いた。
「どこ、行くの？」
「だからツアーですよ。ここにずっといても仕方がないし」
「だって、外に出られるわけ？」
「分かりません」と憤然たる調子で云った横尾忠則の芯城に手を引かれてフォギーは夜の

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

新宿へ飛び出した。

48

出た所は新宿三丁目だ——と教えてくれたのは、架空墓『新宿の街』の考証を担当した芯城だ。繁華な街路に立った芯城は末廣亭の外観をつくづくと眺める。フォギーも並んで見る。和風屋根の軒下に明るい提灯と落語家の名前の書かれた看板が賑やかに並ぶのが珍しい。

「いやあ、すごい質感でげすな」

興奮したせいか、芯城が変な口調で感嘆する。前はここまでではなかったのかと問えば、そうでげすと、また変な返事がある。

「『新宿末廣亭』も『新宿の街』も、架空旅行ソフトのレベルだったらだいぶ前に完成していたんですよ」と今度は普通に云った芯城は、しかし、それでは山荻氏は納得しなかった、だから『新宿末廣亭』で云えば、舞台の演芸の現実感を高めることに集中し、そのぶん分身の可動域が大幅に制限されることになったのだと説明し、なるほどとフォギーは頷

いた。
　圧倒的な現実感（リアリティー）を謳う架空旅行（ヴァーチャルツアー）をフォギーも体験したことがある。十九世紀ヴェネチアでゴンドラに乗り、ルーブル美術館でサモトラケのニケを鑑賞し、ゴルゴタの丘のイエス処刑を見学した。たしかに最初は驚かされるものの、少し慣れてしまえば、まがい物感はやはり隠しようがない。つまり山荻氏は、可動域は狭くてもいいから、架空（ヴァーチャル）環境の現実感（リアリティー）を徹底追求したと云うことらしい。たしかに『大正池』でも可動域を犠牲にして風景の質感が確保されていたのは間違いなく、四阿（あずまや）に立つ分身（アヴァター）が頬に感じる空気の流れ、草木や水の匂い、手摺の木質の手触り、板を踏む靴音、草の葉の微細な震え等々、それら作り込まれた細部は市販の架空旅行ソフトの水準を遥かに凌駕する。が、それはあくまで四阿限定。分身（アヴァター）が四阿から出て水辺を散策できるようにすること自体は簡単だろうが、質感は確保できない、ならば狭くてもよいから可動範囲内を完璧化しよう、と云うのが山荻氏の設計思想であった。
　が、それはしばらく前までの話。いまや可動域は大幅に広がり、質感も爆発的な向上を見せているわけだ。こりゃ、全体どうなってるんじゃ？　末廣亭前になおも立つ芯城は、辺りを見回しては驚きを繰り返し口から漏らしていたが、やがて急に動き出して、近くの店屋を覗いたり、電柱や看板にやたら触ったり、家屋の壁を肩で突いたり、歩いてくる人に挨拶したり、カンガルーよろしくぴょんと跳ねたり、地面のマンホールに耳をつけたり

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

する姿は、ふつうに見たら狂人である。と、忘域はダダダダッと短距離選手のように走り出し、二〇米ほど先の辻まで行くと、きょろきょろと四方を見回し、それからまたダダダダッと駆け戻ってきたかと思ったら、ガルルルッと掛け声をかけて末廣亭の看板に猛然と飛びかかる。まるで蝉をとる猫だ。猫化した忘域が同じ場所にぼんやり突っ立つフォギーに報告した。

「どうやら全部が全部、疑似現実的事象ではないようですね。遠景はもちろん、建物もだいたいが3D映像になっているみたいです。少し安心しました」

たしかにいま目にする街並みがすべて映像ならざる「実体」で、どの建物にも入場可能だったら、驚きを通り越して気味が悪い。

「あそこに居酒屋がありますね」と忘域が云う。末廣亭の斜向い、くすんだ外壁の三階建ての一階、路に面したカウンターだけの狭い店で、五、六人の男が談笑しつつ酒を飲んでいる。先刻忘域が覗いていた店だ。

「あれは映像ですよ」

「そうなの？」

「試してみれば分かりますよ」と忘域が云うので、フォギーはそちらへ歩いて、路から繋がった店の疑似映像を消そうとしたところが、歩いても歩いても映像へ到達できぬ。すぐそこに見えているのに[illegible]この感覚は[illegible]え、可能域の「境界」だ。忘域の云う通り、店

は3D映像らしい。いまどきの3D技術は凄いから、一定の距離を置いた視覚像に限定すれば、映像と実物の区別はほとんどつかぬ。

　すると店主らしい髭面鉢巻きが串刺しのモツを炭で焼きはじめ、煙が路上に流れ出す。それも当然映像。顔に浴びても匂いも何もない。

「ね、間違いないでげしょう？」とフォギーの横に立つ芯城が変なふうに云ったときだ。不意に煙に匂いが生じた。そればかりか、いがらっぽい煙の粒子が鼻から喉へ入って、フォギーはゲホゲホ咽せる。同じく煙を浴びた芯城は棒立ちとなる。

「信じられねえ」と芯城が呟いて、「なかなか凄いでしょ」とフォギーは自分の手柄のように自慢する。

「凄えす」

「凄いのよ」

「凄すぎす」

「でしょ？」

「凄え」ともうきりがない。

「とにかく行きましょう」とフォギーが云い、ええ、とやや青ざめたふうの芯城が応じて、二人は肩を並べて歩き出した。午後九時過ぎならまだ生演奏（ライブ）をやっている時間だろうから、とりあえずPit Innへ行ってみようとフォギーが提案すれば、これにも芯城は素直

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

に頷く。

「今日」が何曜日だかは知らぬが、街路はあくまで明るく賑やかで、老若男女、路行く人々にも活気がある。職場の仲間らしい背広ネクタイの団体が行くかと思えば、ＯＬ風の若い女性三人組が通りかかり、安居酒屋の前で学生たちがわいわいと群れる。囁き合う男女が行き過ぎた後から雪駄を履いた黒眼鏡が現れて、くわえ煙草を路に投げ捨てたかと思えば、杖をつく年寄りが和服巻き髪の女の腰に手を回す。店の看板や広告の、夜空の星を消し去って輝く、色とりどりの電飾を眩く眼に映せば、一仕事終えて、さあ飲みに行くぞと、気合いをかけるときみたいに、フォギーの魂はがぜんわくわく弾んでくる。

　末廣亭前の路を右へ進んで、辻を右へ折れれば、一段と繁華な自働車道路に突き当たった。

「これは明治通り。正面の鼠色のビルが伊勢丹百貨店」と舗道に立つ芯城が解説してくれる。「Pit Inn は伊勢丹のあっち側、紀伊國屋書店の裏手ですね。一九六五年に開店したのがその場所。一九九〇年代には二丁目に移転します。もともとは自働車好きのための喫茶店だったらしい。それで名前が Pit Inn」

　近代日本大衆文化を専攻しただけあって、さすがに芯城は詳しい。一方のフォギーはどこがどこだか皆目見当がつかぬ。そもそもフォギーは現実（リアル）の新宿だって数えるほどしか行ったことがない。それも都庁のある西新宿だけで、駅の東側にはほとんど縁がない。一度

[illegible]スタジオへ出向いた[illegible]高架通路を往復しただけで「地面」へは下りなかった。これは西新宿でも同じ。

貧困者の生活する「蜘蛛巣地区」は、千代田区港区など、いくつかの例外を除く東京都二三区全域に点在するが、新宿駅東口から大久保一帯に広がるそれは最大規模、しかも二十一世紀末の現在、肥大するアメーバのごとく近隣一帯を呑み込んで増殖しつつある。貧民街が近所にできると富裕層が逃げ出す。結果、貧民街は漸次領域を広げていく。と、これは大昔から変わらぬ都市の力学、この運動を防ぐには貧民街をゲットー化して囲い込むしか手がないのも昔と同様。昔と違うのは、石壁で囲んだりしなくても、電子的手段でもっていくらも細かく領域を設定できる点。結果、「蜘蛛巣地区」とそうでないところはモザイクをなして複雑に入り組む次第となる。それどころか、高架通路で繋がる上層と、地べたの下層、さらに地下層が截然と区分けされて、貧富が層をなす街も、新宿、渋谷をはじめとして多い。どちらにしてもフォギーのごとき「良家の子女」（？）が新宿駅東側へ足を向けぬのは、ある意味必然なのでした。

それにしても、なんと云うか、凄い人出だ。夜間、人がこんなに大勢街路を行き来するのをフォギーは見たことがない。現実では。

「今日はお祭りか何かやってるわけ？」

「べつにそういうわけじゃないです」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「じゃ、なんでこんなに人が歩いてるの？」とフォギーは問うたが、溢れているのは人ばかりではない。自働車も多い。車道には、いかにも古めかしい、角張った意匠（デザイン）の自働車が、異様に眩しく前照灯を光らせ、ほとんど繋がるようにして行き交う。かと思えば、道路がたちまち車で溢れんばかりに埋めつくされるのは、信号待ちらしい。もちろんどれも有人運転車。自働車がやたら金属音を発するのが喧（やかま）しく、あれは何かとフォギーがまたも訊けば、警笛（クラクション）だと芯城が教えてくれる。なるほどと頷きつつも、何をそんなに警告する必要があるのか、音がするたびビクリ砂鼠みたいに跳ね上がってしまう。活気があると云えば云えるが、はなはだ不穏である。

「二十世紀は世の中が喧しかったんです」フォギーの様子を窺った芯城が解説した。「噪音にも一般に寛容だったんですね」

「でも、本当にこんなにうるさかったのかしら。ちょっと誇張し過ぎなんじゃないの。これじゃふつうに暮らせないでしょ」とフォギーが音響設計を暗に批判しつつ疑義を呈すれば、

「そんなことないですよ。間違いなくこんな感じです」と芯城はだいぶ力む感じである。

その芯城の背中について、明治通りを歩き出せば、たちまち人波に揉まれる感じとなって、フォギーはまごまごしてしまう。現実（リアル）に外出することの少ない二十一世紀人（と云うかもうすぐ二十一世紀人になるが）には、これほどの人の密集ぶりは対処が難しい。路行

く人たちは猛烈な速度で歩き、衝突する寸前で軀を躱してすれ違う。しかも格別緊張したふうもなく、数人連れで談笑しながらそうするのだから、たいした度胸と運動神経だ。身のこなしがじつに軽やか。フォギーからしたら、誰もが徒歩の達人である。こりゃ駄目だ、眼が回ってもう歩けないと思っていると、流れの淀みのようなところで何事かに注意を向けた芯城が立ち止まったので、背中にぴたりついていたフォギーはほっと息を吐いた。それから再度質問する。

「この人たちは、どこへ向かってるの。どこかでイベントか何かがあるのかな」

「そう云うわけでもないんです。この時代の人間はやたらと外を出歩いたものなんですよ」と芯城が解説する。「なにしろ私的な通信手段は固定電話しかない時代ですからね。人は直接会うしかなかったんです。スポーツ観戦でもコンサートでも、生身（リアル）でその場へ足を向ける必要があった。まさしく肉体の時代。ちょっと怖いけど、いい時代です」

さすがは二十世紀マニア。芯城は生き生き語る。一九六〇年代がモダンジャズ最盛期であった事実を知るフォギーもこの時代に憧れはある。憧れはあるけれど、ここまでのごちゃつきぶりと喧（やかま）しさにはとても神経が耐えられそうにない。「シャワートイレ」発明以前の世界であなたは生きられますか？　と云う討論番組を前にどこかでやっていたけれど、フォギーは絶対に無理派。

「もちろん小規模のイベントは各所でやってます。Pit Innでも当然何かやってるだろう

し、たとえば、ほら」と云って芯城が示したのは、街灯の支柱に貼られたパルプ紙だ。「劇団状況劇場」と書かれているのは芝居のチラシだと芯城が云う。『由比正雪』なる演目を演っているらしい。

「こんなふうにパルプ紙を貼ったんじゃ、雨で溶けちゃわない？」フォギーが疑問を口にすると、

「溶けますね」と芯城が応じる。

「溶けちゃまずいでしょ」

「しかし高分子紙（ポリマーシート）はまだ出回ってませんからね」

「ないんだ」

「まあ溶けたらまた貼ればいいわけでね」と紙問題を簡単に片付けた芯城は自分の関心事にまた集中する。「それより状況劇場は、この時代を代表する演劇集団です。明治通りを少し行くと花園神社があるんですけど、状況劇場は境内にテントを張って公演をしていたんですね。いわゆる紅テント。あとでちょっと覗いてみましょう。接続（アクセス）可能になっていればの話ですが」

説明を聞きつつ眼の前を行き過ぎる人並みを眺めたフォギーは、街の喧噪がワアアアンと頭蓋に反響するのを覚え、軀がふわふわと浮かび上がって遥か遠ざかるような、目眩（めまい）に似た感覚に捉えられた。しかし気分は悪くなくて、ちょっと汗臭いような[illegible]

な、街を貫く独特の律動（グルーヴ）が腹にずしり伝わるのがむしろ心地よい。この音響設計の素晴らしさにはもう降参するしかない。そこへまた芯城の言葉が聞こえてくる。

「『新宿の街』は一九六九年の設定なんですが、この時代の新宿は二十世紀日本でもちょっと特別なんです。十九世紀浅草と並んで。なんと云いますか、街全体が熱に沸き立つと云うか、風雲巻き起これりの雰囲気があったんですね。いまだ知られざる世界の到来、それへの予感に溢れ、それこそ祭りの喧噪と興奮のなか、人々は吟遊詩人のように歩き回っては、言葉にならぬ言葉を放射し合う」

芯城はまるで見てきたかのように云う。しかし言葉遣いがどうも詩人ぽいな、と思ってフォギーが喋る男の横顔を窺えば、そこに立つのは「横尾忠則」だ。いまの台詞は横尾忠則の口から出るなら違和感がない。つまりこの一瞬間、横尾忠則が芯城に憑依したんじゃないかとフォギーは観察した。分身（アヴァター）が乗り手の精神に影響を及ぼすことはままあるわけで、女性の分身（アヴァター）を使う男性が現実（リアル）でも女性化したり、鳥の分身（アヴァター）を使う人がつい飛べる気になり高所から墜落死する例があるのは誰もが知るところ。3Dゲームくらいなら、どれほど内容が暴力的でも問題は生じなかったけれど、疑似環境（ヴァーチャル）ゲームについては規制がかかっているのもそのせい。

「ほら、聞こえませんか？」

そう云って横尾忠則の芯城は舞台役者よろしく両手を天に差し上げた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「声が、無数の声が聞こえませんか？　さんざめく人々の声が聞こえませんか？　わけも分からずこの世界にいきなり投げ出され、存在することに苦しみ、傷つき、悩み、憎しみ合う人間たち。しかしなお世界を肯定し、希望を抱き、愛し合う人間たちのあげる声が。罵声のなかに柔らかな心の震えを秘め隠し、ひそやかな囁きが鋼の刃となって、かたくなで孤独な魂を切り裂く。そんな人たちの声が聞こえてきませんか？」

　こりゃいよいよ詩人だ。ややクサイけど。フォギーは可笑しく思い、とは云え、「横尾忠則」が芝居がかって語る詩句(フレーズ)を耳にしたその一瞬間、広大無辺の「新宿」の街に、熱波のごとく沸騰する人々の「声」を聞いた気がしたのはたしかなのでした。

49

　ところでフォギーたちがいま立っているのは、さほど背の高くない黒い箱形の建物の前だ。ここもどうやら劇場らしい。ちょっと興味をひかれたフォギーがなんだろうと問えば、よくぞ訊いてくださったとばかりに、「ここここそが、かの『アートシアター新宿文化』です」と、二十世紀オタク芯城から勇んで答えがある。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

館の前を通りかかったとき、「あの」こういうのがないから、「アートシアター新宿文化」は、同じビルの地下にある「蠍座」のことで、前衛的な実験的映画を上映した、新宿文化の姉妹館ともいうべき劇場であったという。観客たちが熱く議論する。ははあ、と頷いたフォギーが隣の硝子板を覗けば、上映中の映画広告が貼ってある。ジャン＝リュック・ゴダールの『ウィークエンド』という映画を扱っているらしい。ゴダールなら名前を聞いたことがあるなと思いつつ、隣の「上映予告」へ眼を移せば、横尾忠則がいるではないか。あれれっと思っていると、「横尾忠則は映画俳優もやっていたんです」と当の横尾忠則が後ろから解説する。たしかに横尾忠則の写真があるのは『新宿泥棒日記』なる映画の広告中だ。

「六九年公開の、大島渚監督作品です。配給はATG。日本アート・シアター・ギルド。ATGはこの時代の映画芸術を引っ張った会社です。僕の分身は、この映画のなかの横尾忠則なんだと思います。そう思いませんか？」

言われてみれば、なるほどと忠則の分身は、映画広告の写真と同じ髪型服装のようだ。となると映画の主人公が街へ飛び出しているわけで、路行く人らが妙に思わないかとフォギーは気になったが、よく考えたら路行く人はどれも普通の人ではない。

「歩いている人たちもみんなそうだけど」とそこでフォギーは質問した。「これはどういう人たちなのかな」

「二十世紀六〇年代の風俗をなるべく忠実に再現した形になっているとは思うんですけど

ね」と芯城は即答する。「男性で化粧をしている人はこの時代、ほとんどいないんですが、基本の服装や女性の髪型なんかは、いまとそれほど違っていないんですよね。まあ、二十一世紀文化は全般に二十世紀の波状的反復が基本ですからね」

「そうじゃなくて」とフォギーは遮った。「つまり、この人たち全部が疑似現実なのかな?」

「そっちの話ですか」と応じた芯城は、「人」も建物その他と同様、3D映像と疑似現実的事象が混在しており、疑似現実的事象はさらに、誰かがATSから操る分身と、AI制御されたものに分類されると説明した。

「自働車や遠景の人はほとんどが映像ですね。近い所に居る人も映像が多いみたいです。そうしないとCPUの容量が保ちませんからね。触ってみればすぐ分かりますよ」

映像には「実体」がなく、疑似現実的事象ならば現実の人と同様の「軀」がある、と云うのはむろん分かるが、いくら疑似現実的事象でも通りかかる人にいきなり触るわけにもいかんだろう。ちょうど眼についた白シャツにネクタイの人に検索をかけてみると、「サラリーマン=民間企業に正規雇用された専門職でない給与所得者」云々と出る。高踵靴に短いスカートの短髪女性は「ホステス=飲食店の接客専門の女性従業員。原則として性交に及ぶような性的サービスは行わない」云々。別の開襟シャツの長髪男は「早稲田大学学生=六大学野球早慶戦の終了後、多数が新宿に繰り出した」云々と出る。次々と検索をか

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

けつつ、誰か向こうからぶつかってきたりしないかと思って、舗道の真ん中に突っ立ってみたが、人は渓流で岩を避け行く笹舟みたいにひょいひょい脇をすり抜けてしまう。人ごみでこんなにうまく脇を躱す運動神経は自分にはない。フォギーがあらためて感心しているところへ、劇場の入口を覗きに行っていた芯城が戻ってきて報告した。

「ここからなかへは入れませんね。『アートシアター』は『新宿の街』とはまだ繋がっていないらしい」

「じゃあ映画は観れないの？」

「観れますよ。別の入り口から入れれば。一回ログアウトして、そっちからなら入れるはずです。IDへの接続許可が出ていればですが」と云った芯城は、架空墓内のアートシアター新宿文化は、外部のデータベースに接続しているから、現存するあらゆる2D映画が視聴可能であると教えた。

山荻氏の架空墓の設計建設に係わる者は、墓内のあらゆる「場所」に接続できるわけではない。基本的には自分の担当部署限定で、フォギーの場合なら『大正池』、後から『Pit Inn』への接続許可を貰った。芯城は『末廣亭』や『新宿の街』など数ヵ所。『アートシアター新宿文化』は、以前は入れたが、完成した段階で接続許可が出なくなったと云う。

「最終的には全部を繋げるんでしょうけどね」

「でも、たとえば大正池は？　新宿からは遠いよね」

「西口のバスターミナルから直通バスを出すとか。しかし、とりあえずは新宿にある施設を繋げるんでしょうね。そうなれば『新宿の街』からどこへでも入れるようになる。実際『末廣亭』は繋がっていたわけで、『Pit Inn』がどうなっているか、とりあえず確かめてみますか」と云って芯城は歩き出す。歩きながら、いまのアートシアターなんですがね、とまた話しはじめる。

「僕は、一九六〇年代の映画館である以上、当時かかっていた映画に限定して上映されるべきだと主張したんだけど、マニアックすぎると却下されました」

たしかに架空墓(ヴァーチャルトゥーム)に人が「永遠」に棲むことを思えば、二十世紀六〇年代のソフトだけでは、じき退屈してしまうだろう。いや、あらゆる映画が観られるとして、それで本当に退屈しないですむものなのか。架空墓(ヴァーチャルトゥーム)に対する根本的な疑念が浮かぶのをフォギーは覚えたが、そのことは云わずに、なるべく多くの映画が観られた方がそれはいいだろうと平明な感想を述べると、

「しかし他の映画はまた別の場所で観ればいいわけでしょ」と芯城は反論する。

「そもそもアートシアターでハリウッドの娯楽大作なんざ、絶対にありえねえ」と、力んだせいか江戸弁になって主張する芯城の心根はフォギーにはよく分からんが、たしかにPit Innに人気アイドルグループ「四葉(フォーリーブス)22世紀(センチュリー)」が出たりしたらシラケるだろう。

「四葉22世紀」は、御存知、カストラート処理をしたベトナム出身の男性四人組。去勢せずとも変声を抑制する技術が開発されたことは、「四葉22世紀」の人たちにとって本当によかったと思います。

　正面に見えるのが明治通りと靖国通りの交差点、あそこを越えて少し行けば花園神社だと解説しながら、しかし芯城はそちらへは向かわずに、信号を渡って伊勢丹脇の路を進んで行くと、ほどなくビルの谷間の薄汚い一角に出る。なんだか書き割りの裏側みたいな所だ。あれが紀伊國屋書店のビルだと芯城が教えるので、見れば屋上に鉄の起重機がある。まだ工事中らしい、と思ったら、あれはビルの四階にある劇場用に道具類を吊り上げるためのものだと説明がある。

「劇場を作ったのに、搬入用のエレベーターをうっかり作らなかったんですね。それで起重機が欠かせなかったわけです。そう云うところがいかにも新宿なんですよね」と芯城は嬉しそうであるが、フォギーにはただ間抜けとしか思えぬ。

　しかし表通りからちょっと入っただけでずいぶんと殺風景だ。これは建物が腸めいた裏面を晒すせいもあるが、何よりも小広場の大半を占める、廃車置き場と見紛う駐車場が雑駁な空気を醸しているからだ。地方や郊外ならともかく、都会の真ん中で地面をただ自働車を置くためだけに使うとは、もったいないことをしていたものだと、フォギーならずとも感想を抱くところ。表通りほどではないけれど、ここにも何をするのか人はうろつい

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

て、辺りの風景が染み付いたかのごとく、揃って人品がうらぶれている。

で、「MODERN JAZZ PIT INN」「ピットイン」と、英語日本語両方のビニール看板のついた二階屋は駐車場の向かいにあった。フォギーがこの伝説のジャズクラブの「外観」を見るのはむろんこれがはじめて。昭和であるならこれくらいイナタイのは自然だろうし、周囲に較べて格別古めかしいわけでもない。とは云え、想像していたのより、だいぶ垢抜けない。掘建小屋までは云い過ぎだけれど、急場しのぎで建てて、そのまま長年使ってます、と云った感は脱せず、古雅な趣はいささかもない。しかし無理に思えば、まあmodern の言葉に相応しい感じがないではない。

扉のあたりに灯りがあるので、営業はしているようだが、鉢植えが左右に置かれた扉を開けようとしたところ、手が届かぬ。扉へは永遠に到達できない。この有様は、つまり可動域の「境界」だ。『Pit Inn』はまだ『新宿の街』とは繋がっていないらしい。壁の「本日の出演」と書かれた所に紙が貼ってあるので、興味津々見やれば、「高柳昌行（guitar）吉沢元治（bass）豊住芳三郎（drums）」とある。検索すると、「高柳昌行（1932〜1991）東京都出身。ジャズ・ギタリスト。作曲家。実験的な即興演奏を早くから追求して、一九六〇年代から八〇年代、日本のフリージャズ運動を牽引した」云々と出る。なるほどフリー・フォームであるか。ならばこれはなんとしても聴いてみたいものだ。一回ログアウトして、そっちから入ってみようかとフォギーが思案しているところ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

へ、髪を肩まで伸ばした黒眼鏡の男が近寄ってきて、「フォギーさん？」と声をかけてきた。
はい、と答えると、男は黙って、風に吹かれる麦穂みたいに胴をふらふらと揺らす。危害を加えられる感じではないが、居心地はよろしくない。検索をかけてみると、「フーテン族。別名ヒッピー」と出て、以下いろいろと解説が書いてある。と、男が急に思い出したように口を開いた。
「花園神社に来てくれって、兎からの伝言」
それだけ云うと、男はプイと踵を返し去ってしまう。失礼な奴だ。しかし「兎」なら間違いない。ワンダーランドの案内役。つまり花園神社がツアーの次の目的地なんだろう。横で聞いていた芯城も頷いて、じゃあ行きましょうと囁く。
高柳昌行トリオはまた今度にして、二人肩を並べ歩き出せば、先刻のフーテン族が駐車場の一角で仲間と一緒に踞っているのが見えた。
「フーテンの人と云うのは、普段は外にいるの？」
「とも限りません」フォギーの問いに芯城は答える。「新宿通りを少し行ったところに風月堂と云う喫茶店があって、そこなんかが棲息地だったようです」
「フーテンとホームレスはどう違うのかな？」と次に問えば、うーんと一つ唸った芯城は、「宿がないと云う点では両者は同じですが」とまた生真面目に応じる。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「ホームレスが自分の意思に反して宿を失った人なのに対して、フーテンは自分から家を捨てた人、そういう違いですかね。フーテンの寅さんにしても、柴又のトラヤからわざわざ旅に出るでしょう」

「寅さん？」

「知らないんですか！」

「知らない」

「あの昭和の名作を知らない？」

「非常識でスミマセン」

「いや、別にいいんですけどね。しかし、寅さんを知らない人がいるとはなあ」となおも嫌味に慨嘆する北城を尻目に、フォギーがべつのことを質問したのは、地べたに寝そべるフーテンの人たちがビニール袋を口にあてているのに気づいたからだ。気分でも悪いのかと思えば、シンナー遊びだと、北城が教えてくれる。

「シンナー遊び？」

「ドラッグの一種です。シンナーは塗料の溶剤で、含まれているトルエンに中枢神経を麻痺させる作用がある。この時代、LSDや大麻をはじめ、各種のドラッグが出回っていたんですけど、シンナーは入手が簡単なんで、広く若年層に愛用されたんですね」

立ち止まって観察すれば、なるほど男はビニール袋の気体を積極的に吸い込んで、トリ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ップしているふうである。

「害はないんだ」フォギーが云うと、「害はあります」と芯城は即答した。「やりすぎると呼吸困難で死亡する。実際にずいぶん死者がでたと記録にはあります。死なないまでも、脳神経は深甚な損傷（ダメージ）をうけます」

「危ないじゃない」

「危ないです。しかし、トルエンは根強い人気があって、いまでもやってる連中がありますからね」

「そうなの？」フォギーが驚いて云えば、

「ええ。でも、トルエンはせいぜいこの一五〇年くらい。これが大麻となると、何千年何万年の歴史がありますからね。格がまるで違います」と芯城はなんだか的外れな返事をする。

「そうじゃなくて、合法ドラッグがいろいろあるのに、なんでトルエンなんか使うのかってこと。昭和平成の昔ならともかく」フォギーが云うと、さあね、と首を傾げた芯城は、カネがないからじゃないですか、と簡明に応じて、それよりあれを見てくださいと、注意を促したのは、駐車場の脇にある、赤い提灯を掲げた箱形の二輪車だ。

「あれは屋台です」と芯城が得々として解説する。「この時代は、まだ手押しの車だったんですね。車体はなんと木製」

街を巡回する無人販売車や食物提供車（フードサーバーカー）のこれは先祖であるらしい。当然ながら人が押すか引くかして移動したわけで、昔の人はほんとに御苦労様だったなと、フォギーが素直に感心するのはこんなときである。

「ラーメンじゃないですか。ほかにもおでんと酒を供するのもあったみたいです。せっかくだから覗いてみますか」

「何を売ってるのかな？」

芯城に続いて近づいてみると、しかしなんだか様子がおかしい。これはラーメンでもおでんでもない。木枠で細かに仕切られた台には、錠剤やら干した草の葉やら液剤アンプルやらがぎっしり詰まっている。大小の注射器などもある。赤提灯をよく見ると、「いろいろなクスリ」とある。早い話がドラッグ屋台だ。

「こんなふうにドラッグを売ってたんだ」フォギーが感心して云うと、「こんなのはないです」と、しばし棒立ちとなった芯城が口を開いた。「少なくとも僕は知らない」

『新宿の街』の意匠（デザイン）製作は芯城一人でやったわけではない。と云うか、芯城は時代考証の助言者として参加しただけだから、全部を知らなくても不思議はない。

「こんなのがあったって云う資料があるんじゃないの。芯城くんの知らない」

「それは絶対ないです」とやや自尊心を傷付けられたふうに二十世紀文化研究家は応じる。「いくらなんでも、これはないぜ。屋台でヘロインを売るなんてことがあると思いま

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

す？」

たしかにない気もするが、昭和と云うのはトンデモナイ時代だったと聞くから、案外ありなんじゃないかと、フォギーが屋台の向こうの、大山名人のと似たような丸眼鏡をかけた陰気な年寄りを眺めつつ考えていると、芯城がまた云った。

「こんなふうにドラッグが簡単に買えたんじゃ、街じゅうの人間がラリっちゃいます。それじゃ困るでしょ」

たしかに困るが、しかしそれは現実（リアル）の話。ここは架空環境（ヴァーチャル）なのだから全然困らない。いや、なかなか面白いじゃないの。いよいよ昂揚感を高めたフォギーが云うと、

「しかし、いくら架空環境（ヴァーチャル）でも、歴史考証だけはちゃんとしないと。しらけちゃいますからね」と芯城はまたも生真面目に応じたが、ツアーのこの先に、時代考証など軽く吹き飛ばしてしまう、驚天動地の事態が待ち受けていることを、歴史認識に厳格な二十世紀文化研究家は、気の毒なことに、まだ知らないのでした。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

50

幅広の通りは靖国通り。駅から離れる方向にこれを進んで、新宿五丁目交差点を左へ曲がって明治通りを少し行けば、左手に大鳥居が見えてくる。ここが花園神社だと云う芯城の案内を聞きつつ鳥居を潜れば、境内右手の小広場に紅いテントが張られて、周りに人が群れているのは、どう見ても祭りの類としか思えぬ。やっぱりこの時代の新宿は毎日お祭りをやっていたんじゃないのかと、フォギーがあらためて訊くと、そうじゃないが、そう云って過言ではないかもと、芯城からは返事がある。

「爆発してたんですね。どわわわんって感じで。猛烈にエナジーが溢れちゃってるんです。前衛てのがあったんですよ。知らないでしょ。つまり前衛が、前衛然として、前衛しちゃってたんですね。ハップニングの大嵐。前衛の超新星爆発」

質感の高まった『新宿の街』に芯城は興奮しているのか、もうなんだか訳が分からない。

紅いテントは先刻チラシで見た劇団状況劇場だ。テントから灯りが漏れて何やら賑やか

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

な気配があるから、公演中なんだろう。なかへ入れるかどうかは分からぬが、とりあえず覗いてみようと、芯城と二人近づこうとしたところが、密集して地面を埋め尽くす人に阻まれ奥へ進めない。3D映像なら通過していけるはずだから、ここに居る「人」の、少なくともフォギーたちと直に接する者らは映像ではない。

「テントに入りきれないんで、外にいるのかな?」とフォギーは云ってみたが、どうも様子が違う。群れているのはどうやらフーテン族の方々らしい。それはいいが、数がすごい。二〇人や三〇人ではない。灯りの届かぬ暗がりまでは見通せぬが、ざっと二〇〇人、三〇〇人、いや、もっと大勢の若者が地べたに踞(うずくま)って、シンナーを吸ったり、寝たり、何するでもなく夜空を眺めたりしている。

「フーテンの人って、こんなにたくさん集まってたんだ」

「蚊と同じで夏場に出てくると聞いてはいますが」と応じた芯城も戸惑い気味と見える。フーテン族は表の道路にもはみ出して、ある種の昆虫めいて辺りを埋めつくしている。数のわりに静かなのは、フーテン族の人たちが大人しいから。それにしても大変な数だ。

「これは、しかし、いったいどういうことなんじゃろ?」啞然となった芯城が妙な方言で呟くのを聞いたフォギーは、「これって、もしかして、あれじゃない」と直感の閃くままに発言した。

「ウッドストックなんじゃない?」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「は？」

「だからウッドストックのコンサート。そんなのが、この頃あったんでしょう？　何かで見た。若者が大勢集まったやつ」

聞いた芯城が、なにをボケをかましているのか、この女は、と考えたのは無理もありませんん。ウッドストック・フェスティバルが、一九六九年八月に行われた伝説のロックコンサートなのは間違いないが、場所はニューヨーク郊外だ。

「なんで新宿でウッドストックなんです？」

「新宿じゃ駄目なの？」

「駄目に決まってるでしょ。だいたいウッドストックが何だか知ってるんですか？」芯城はやや憤然となる。

「よく知らない」

「二十世紀文化を象徴する、愛と平和の一大祭典。四〇万人もの人間が三日三晩、音楽と愛でもって連帯したのですよ」と芯城はだいぶ力の入る感じだ。

「そうなの？」

「二十世紀音楽史のうえでも画期をなすイベントですからね。ものスゴイあれですよ。なんと云うか、スゲエやつです。超絶スッゲエやつ。こんなしょぼい神社なんかが、ウッドストックのわけないでしょう」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ったく非常識にもほどがある、とそう芯城が考え、なんでもマニアとは厄介なものだなと、フォギーが再認識したときだ。うわわわあと鯨波（とき）の声が不意にあがったのは、境内小広場に蝟集するフーテン族の方々だ。と、見れば、社殿前の石階段に、ドラムスやらアンプやらマイクやらの機材が載った舞台がいつのまにかできているではないか。喚声があがったのは、神社を囲むビルの屋上や、これまたいつのまにやら境内各所に設置された鉄骨組（イントレ）から強い光線が舞台に投げかけられたからだ。

うおおおおお。引き続く喚声のなか、赤いバンダナを巻いた黒人が白いギターを抱え、洋上の客船のごとく夜闇に眩く浮かぶ舞台へ上がった。ベース、ドラムス、パーカッションなどのメンバーも配置につく。バンド演奏がはじまるらしい。どんなバンドなんだろうと、フォギーが興味津々眺めていると、電線（ケーブル）を増幅器（アンプ）に繋いだ黒人がギターを構える。左利き（サウスポー）だ。と思ったときには、黒人がリフの楽句（フレーズ）をがつんとばかりに弾き出して、バンドメンバーがこれについていけば、うおおおうと、観客からは一段と高い声があがる。直截（シンプル）な8ビートと、これまた単純（シンプル）なブルースっぽい和声（コード）にのってギターが粘つく楽句（フレーズ）を繰り出して行くあたり、ほう、なかなかシブいじゃないの、とフォギーが思ったとき、ジミヘンだ！　と芯城が叫ぶのが聞こえた。ジミヘン？　ジミヘンたあ何だ？　問えば、Jimi Hendrix だと答えがある。

「一九六〇年代を代表する、いや、ロック史上最高の天才ギタリスト、ジミ・ヘンドリク

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ス！　略してジミヘン。使う楽器は、御存知、ストラトキャスター。曲は、かの名曲、Voodoo Child だ！」と芯城がなんだか怪しい名調子で解説する。しかし芯城とぶう明、将棋指しと云う時点で普通じゃないとは思っていたが、やっぱりどうもおかしなやつだ。すんげえ、すんげえよと、喚く芯城の声を耳に入れつつ舞台を注視すれば、青のジーンズパンツに、原北米人（ネイティブアメリカン）ふうの、ひらひらのついたシャツを着たギタリストは、立脚マイクに向かって歌を歌い、それからまたギターの独奏（ソロ）をとる。他のメンバーは後ろに引っ込んだ完全なるワンマンバンドだ。

　なるほど、ロック史上最高は嘘じゃないかも。鉱石のごとく重くソリッドなリズムとフレージングのなかに繊細な歌心が閃く即興（アドリブ）ソロは、聴き手の血を熱く沸き立たせるものがある。しかし、ジミヘン、なかなかセクシーじゃないの。フォギーが好ましく思う一方で、満員の観客はもう大興奮の大狂濤状態、鉄骨組の照明（イントレ）が煌々燦々、ダイヤモンド粉を撒（ま）いたがごとく一段と明度を増したように感じられれば、音響機材の金属（メタル）に反射する光が鋭く眼を刺す。と、ドラムス、ベースが停止して、演奏（プレイ）はいきなりのブレイクだ。となればここはギターの独壇場。恐ろしくも美麗な幻影を作り出す魔術師のごとく、多彩な技を駆使するギタリストは、ときに歯で弦を弾いたりして客席を沸かしに沸かす。

　それからいったんエンディングになり、引き続く二曲目もまたギターのブレイクソロから？　曲はなんだと思えば、フォギーもよく知る、と云うか、日本人なら誰でもが知るあの

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

曲、つまりは「君が代」だ。

「こりゃあ、変でげす」と横で喚く芯城の方がよほど変だが、そこは問わずにフォギーは問い返す。

「何が変なの？」

「なんで日本国歌なの。ここはThe Star-Spangled Bannerじゃなきゃ変じゃやね。いや、ずばり変でげす」とまたも変なふうに叫んだ芯城は、ウッドストックの舞台でジミ・ヘンドリクスが弾いたのはアメリカ合衆国国歌。当時の記録映像に間違いなく残っているのだと、訓詁学的註釈を入れた。

「だいいち、なんでジミヘンが君が代を弾かなくちゃならんのよ」

「日本だからじゃない」

「いくら日本だからって、君が代はねえぜ」と芯城が憤然とするうちにもジミヘンのソロは先へと進んで、「君が代」の旋律からはどんどん逸脱して繰り広げられるフリー・ソロはイケてる。

「しかしなあ、ジミヘンが君が代ってのはなあ」とまだ芯城は文句を云っている。

「でも、カッコいいんだからいいじゃない」とフォギーが諫めるのに耳を貸さず、

「だいたいフォギーさんが変なこと云うから、おかしなことになったんですよ」と芯城は決めつける。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「私のせい？」

「そうですよ。ウッドストックだなんて、訳の分からないこと云うからです」

たしかにその可能性はある。フォギーは考えた。ツアー客の「要望」に応じてツアー内容は変化するのかもしれぬ。ケータイ電話の山荻氏が「フォギーさんには大いに楽しんでいただきたい」としきりに強調していたことが思い返されてくる。そうして実際、ジミ・ヘンドリクスの演奏をフォギーは大いに愉しんでいたのでした。

片や、だいたい新宿五丁目がウッドストックの訳がないだろう、いくらなんでも乱暴すぎると、なおもぶつぶつ文句をつけていた芯城も、ギュンギュギュンギュユーン、ギュギュンギュ。ギュンギュギュンギュユーン、ギュギュンギュンギュと、アップテンポの三曲目がはじまるや、「うおおおお、ついにキター！　Purple Haze。『紫の煙』！」と叫んで、周りの観客と一緒になって拳を天に突き上げるのだから簡単なものだ。ギュンギュギュンギュンギューン、ギュギュンギュ。フォギーもどこかで耳にしたことのあるこのリフ。なるほどシブい。フォギーも自然に浮き上がった腰を左右に揺らさざるを得ない。この頃には観客はもう恐ろしいほどの数になっている。四〇万人ではさすがにないものの、時ならぬロックイベントに、物見高い連中が押し寄せるのか、広からぬ敷地に次々と人が流入してくる。

大喝采のうちにジミヘンが舞台を下りると、今度は長髪髭面のむさい男たちが登場した。お次は日本人のバンドらしい。会場に期待のガソリンが充満するなか、ベースがソロ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ふうに、ズンズンズズ、ズンズズズズン、とリズムを刻み出すや、狂熱の燃料は一気に発火、ぐおおおとまたもや沸き起る爆風のごとき大喚声。

「ありえねえ！」と絶叫する芯城。「これは頭脳警察、『銃をとれ！』だ。しかし、頭脳警察、って、ありえねえ。ありありありえねえ」

何がありえねえのか、フォギーが大声で訊いたのは、そうしないと声が届かないからだ。

「頭脳警察の前座がジミヘン。それがまずはありえず。第二に頭脳警察はウッドストックとは関係なし。そしてさらに、頭脳警察の活動は一九七〇年代。六〇年代末のこの時点では存在せず」と軀を激しく揺らしながら答える芯城は、「もう目茶苦茶だぜ。うおう、いえいいえいいえいいえい！」と完全にノリノリである。

この頃には会場は立錐の余地なし。そもそもさほど広からぬ神社地。そこへやたら人が押し寄せるのだから大変だ。境内には揉み合いへし合いする人の潮流が生じ、渦を巻き、フォギーは至近に居る人たちが3D映像ではないことをあらためて確認しつつ、人波に流されていくうちには芯城ともはぐれてしまう。こうなるともう逆らっても仕方がない。と云うより逆らえない。あれれれと思う間に舞台脇から、社殿の背後へ押しやられ、入ってきたのとは反対側の口から外へ押し出されてしまう。しかもそこは石段だから危険きわまりない。ましてやフォギーが履くのは踵の高い靴。こりゃ駄目だと人生を半ば諦めかけた

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

が、流れの勢いに任せて階段を滑り下りれば、周りの人たちに挟まれる格好でどうにか着地できて、なおも押し合いへし合い、ようやく潮流から逃れたと思ったときには、やや薄暗い路地に立っている。

神社では音楽が続いて、とにかく芯城の姿を探そうと思い、戻れる口はないかと思って歩き出したところが、逆にどんどん狭い路地へ彷徨いこんでしまう。音楽のする方へ向かえば間違いないはずなのに、むしろ花園神社から遠ざかってしまったのは、フォギー天性の方向音痴ゆえとしか云いようがありません。

それで出たところは、左右に二階屋三階屋くらいの木造家屋がぎっしり並んで細々看板を出した一角だ。どれも居酒屋やバーらしいが、細路地に軒を連ねる店々は、矮屋と云うか、一様に小ぶりである。吉祥寺駅に繋がる商業ビルの地階に、「ハーモニカ横丁」と云う小居酒屋の並ぶ一角があってフォギーもよく行くが、そことやや雰囲気が似ている。「ハーモニカ横丁」はもともと吉祥寺駅前の地上にあった飲食街を、駅前再開発の際、地元の熱烈な要望でそっくりそのままビルの地下に再現したと聞いた。ここはつまり、新宿における「ハーモニカ横丁」みたいな所なんだろうと見当をつけていたら、街灯と街灯を繋げた看板に「新宿ゴールデン街」とあった。その名前なら聞いたことがあるな、と思いつつ、路地をさらに歩いてみれば、じつにごちゃごちゃしている。安物の看板が並ぶほかに、壁や扉にメニューやらなにやらべたべたとパルプ紙が貼ってあるのが汚い。見苦し

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

い。しかもこの飲食街がまた異様に広い。行けども行けども果てしなく飲食店が続くようだ。

路地は薄暗く、賑やかではないけれど、人通りはけっこうある。ここから花園神社へ戻らねばと思ったが、ロックコンサートはもう終わったのかな。音楽は聞こえぬ。となると、ここをどう進めばいいのやら。まるで見当がつかぬのが困る。命令画面を呼び出し、「新宿ゴールデン街」を検索すれば、地図が出たので、ああよかったと思って、ナビを使おうと思ったら、出た地図は二十一世紀末の新宿だ。これじゃ話にならん。途方に暮れつつ、闇雲に歩いていると、一つの看板が眼にとまった。

上部が曲線になった木の扉に、木株を輪切りにした看板が付いていて、豆灯で照らされている。看板の文字は「オレンジ・マーマレード」。バーなのか何なのか。営業内容を報せる情報は何もない。とても「フリー」で入っていける佇まいの店ではない。なのにどうしてフォギーの注意をひいたのかと言えば、店名の文字の上方に描かれた兎の絵だ。

再び命令画面を呼び出し、「オレンジ・マーマレード」で検索をかけてみれば、「新宿歌舞伎町一丁目にあるカウンターバー」と出る。つまりこの店は二十一世紀末の現実新宿にもあるらしい。検索画面にはさらに、熊本市の洋品小物店だとか、伊豆下田のレストランだとか、いろいろ出てきて、順番に見ていけば、やがてビンゴとなった。

「ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』で、穴に落ちたアリスが手に取る瓶のラベ

ル」——それがオレンジ・マーマレードだとある。ならばもはや疑う余地はない。フォギーは確信し、しかしやや躊躇いつつ、兎の絵のある木の扉を押した。

51

なかはL字になったカウンターだけの小酒場だ。事物に濃い陰翳を穿つ白熱電球照明の下、髪を長く伸ばした女性が立って、いらっしゃいと低い声で云う。とりあえずは尋常の店らしいと、やや安心したフォギーは、扉から直近の丸椅子に居心地悪く尻を載せた。黒髪と漆黒のワンピースのせいで肌の生白さが際立つ女性が、何にします？と訊くので、壁に貼られたパルプ紙の品書きで眼についた「トリスハイボール」を注文した。

周りの棚に紙本やら安物の置物やら酒の空瓶やらが雑多に押し込まれた店は七、八人で一杯になるほどの狭さ。カウンターの内もごたごたとして、人の動ける幅はあまりない。音楽はなし。外の音もほとんど届かない。紅い傘電球を遮って並べ置かれた鉢の仙人掌と巨大こけしが、黄色く塗られた木卓に異様に長く濃い影を貼り付かせているのが不思議で、顔の蒼さがプラスチックの玩具人形を思わせる女性の佇まいと相俟って、ゴッホの絵

のなかに入り込んだような感じがする。客はフォギーのほかに黒い男が一人、酔いつぶれているのか、突っ伏して動かない。

以上の観察を終えて眼をもとへ戻せば、頼んだ飲み物が卓に出ている。いつの間に？　まるで手品だが、疑似現実環境（ヴァーチャルスペース）ゆえの早業だろう。現実（リアル）ではあまり見かけぬ安手の着色硝子コップを手に取れば、Whisky & Soda らしい。水滴の付着した硝子の感触を掌に得つつ、そっと一口飲んでみれば、本当にウイスキーの炭酸水割り（ソーダ）を飲む感覚が口腔から喉から食道にまで生じる。

疑似現実環境（ヴァーチャルスペース）内における飲食！　これは本来ならば驚天動地。しかも現実感（リアリティー）が半端じゃない。炭酸がピリリ舌を刺す感覚の絶妙さなどは、現実（リアル）でもこうはいかんだろう――とは、やや変な言い草ですが、音響面でも、炭酸の泡がシュンシュンと微かに囁く音や、紛れ込んだ羽虫が傘電球に当たってコツコツ立てる音などは、音響設計士フォギーをしてあらためて顔色なからしめるに十分であるはず。が、フォギーは格別驚きもせず、炭酸水割りを飲んで炭酸水割りの味がするのは当たり前、と、そう考えて、深く追究せぬままつきだしの塩豆を口へ放り込んで奥歯で噛み、カリリ音響を頭蓋に響かせつつ豆の塩味甘味を口腔に感じて恬然たるあたり、人間が何事にも慣れる動物だとの、人口に膾炙（かいしゃ）する箴言は真理としか云いようがないよね。事実、すでにフォギーは、異様に質の高度化した、ないし高度化しつつある環境に、もうすっかり馴染（なじ）んでいたのでした。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

疑似現実環境内でのアルコール飲料の摂取が人体にどう作用するかは分からぬが、あまり酔ってはまずいだろうな、と思いながら、コップに再び口をつけたとき、扉の蝶番がギイイと鳴って、二人連れの男が入ってきた。一人はトレンチコートにソフト帽を被った背の高い男、もう一人は光沢のある黒背広を着たギョロ眼男だ。二人はフォギーの後ろをすり抜けて奥へ進み、すると店の黒髪人形ママが、「席はあいてないわよ」と声をかける。「それはこっちの台詞だよ」と御洒落なソフト帽は笑い、フォギーの斜向い、突っ伏す男を両側から挟む形で二人は席に着く。「ワインでもどう？」黒髪人形ママが云い、「ないものを勧めるのはどうかと思うがね」と黒背広のギョロ眼が応じれば、「呼んでもいないのに来る方が失礼よ」と黒髪人形ママは皮肉な調子で返し、これじゃ全然台詞が違うと、三人してうふふふふと笑う。フリの客たるフォギーには会話の流れがいまひとつ摑めない。

　背後を通った際の感触からして、男たちは映像ではない。カウンターの向こうで煙草を吸い出した黒髪人形ママも、煙が鼻に刺激を与えたところからして同様だ。三人は誰かが「乗る」分身の可能性もないではないが、たぶんAIが制御する疑似現実的事象だろうとフォギーは見当をつけつつ、検索をかけてみると、注文されたウイスキー水割りにかき混ぜ棒をくるくるさせている黒髪人形ママは「茅田アリス　詩人、写真家、女優、占い師、歌手、旅人」と出る。なるほどアリスであるかと、納得するようなしないような感

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

じのまま洒落なソフト帽へ移れば、「伊丹十三（本名 池内義弘）京都府生 1933～1997 映画監督、俳優、文筆家、イラストレーター」、ギョロ眼の黒背広は「寺山修司 青森県生 1935～1983 詩人、歌人、劇作家、小説家、演劇実験室「天井桟敷」主宰」と出る。どうやらここは多芸多才な人士が集まる酒場らしい。「ジャズピアニスト、音響設計士」の二つしかないフォギーが観察していると、逆にフォギーを注視していたソフト帽の伊丹十三が声をかけてきた。

「お嬢さんは、髪を切ったほうがいいね」

音楽のセッションとなれば、これでなかなか機敏なフォギーも、言葉のやりとりでは反応が冬場の蝦蟇よろしく鈍いのは致し方ないところ。え？ と声を出したばかりで言葉を返せないでいると、紫煙をぷっと吐いた黒髪人形ママの茉田アリスが、「個人の趣味をとやかくいうもんじゃないわ。失礼よ」と助け舟を出してくれる。「だいいち、それはわたしにいう台詞でしょ」

たしなめられたソフト帽の伊丹十三は一瞬目を丸くしたが、すぐにまた口を開いた。

「カラスとかけて机と解く。そのこころは？」

「きたわね、なぞなぞ。いいわ、面白いじゃない」酒瓶の並ぶ棚に寄りかかった茉田アリスが嬉しそうに応じる。「わたしはたぶん解けると思うわ」

すると今度は黒背広の寺山修司が口を出した。「つまり君は、答えが分かると思った

と？」
「そうよ」
「だったら、その思ったことを直ちに云うべきだ」
「云ったじゃない。わたしは答えが分かると思ったわけで、だからそう云ったの。云ったことを私は思ったの。同じことでしょ」
「違うね」とウイスキーに口をつけた伊丹十三が断じた。「それだと、食べるものが見える、と、見えるものを食べる、を、同じだと云うようなものだ」
「手に入れたものが好きだ、と、好きなものを手に入れる、は同じだと云うようなものだ」と寺山修司も云う。すると、いままで寝ていた男が急に起き上がって、
「眠るときに息をする、は、息をするときに眠る、と同じだと云うようなものだな」と半ば寝ぼけて発言する。
　黒眼鏡をかけたこの男は誰かと思えば、「野坂昭如　神奈川県生　1930～2015　作家、作詞家、シャンソン歌手、タレント、政治家」と検索画面には出る。この時代、一人でいろいろの役を兼ねるのが常識だったのかもしれぬが、いよいよ多芸酒場だ。フォギーが呆れつつ観察していると、伊丹十三がからかうように云った。
「野坂さんの場合はあれでしょう、息をするときに酒を飲むでしょう」
「いや違う。オレの場合は、息をするときに女を抱くだ」

「ならば男も抱いて欲しいですね」と寺山修司が口を出せば、酒をくいと口へ放り込んだ黒眼鏡の野坂昭如が、もちろん抱くさ、と応じる。
「男もおかまも抱く。馬牛犬猫、猿鶏犬亥、森羅万象、生きとし生けるもの、ことごとくを抱く」
「で、息をしてないときに原稿を書く」茅田アリスが間の手をいれて一同はぐふぐふと笑う。
何か音楽をかけてくれと野坂昭如が頼み、茅田アリスが傍らのプラスチックの箱台に塩化ビニール盤を載せる。小ぶりの盤は「ドーナツ盤」と呼ばれるやつだろう。針のついた腕を回転する盤へ落とせば、円盤台と一体になった発声器(スピーカー)から音が出る。女性の歌だ。検索では、歌手は「カルメン・マキ」、曲は「時には母のない子のように」と出る。玩具みたいな再生機の音質は劣悪、でも狭苦しい店には相応しくもあって、音響設計的には悪くない。塩化ビニール盤が収められていたパルプ紙の覆い(ジャケット)を覗くと、眼化粧(アイメイク)の濃い女性の写真があって、これがカルメン・マキらしいと思ったら、茅田アリスにそっくりだ。どう云うわけかと、やや面食らったが、そう云えば、茅田アリスだけ検索画面に生年月日や出身地が出なかった点からして、彼女は架空人物(フィクション)なのかもしれない。と考えているところへ、またもギイイと扉が開いて、二人の男が入来してくる。小柄でいかにも敏捷そうな美青年と非常に体格の良い男だ。二人とも若い。こりゃ牛若丸と弁慶の御登場だと、野坂昭

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

如が新来の若者組(コンビ)を評したが、二人はとくに連れ立ってきたのではなさそうで、離れた所に席をとって酒を茅田アリスにそれぞれ注文する。

美青年の方が「唐十郎（本名　大鶴義英）東京都生　1940〜20××　劇作家、小説家、演出家、俳優、劇団『状況劇場』主宰」。こちらはやはり多芸の仲間だが、大柄の方は「中上健次　和歌山県生　1946〜1992　作家」と出る。肩書きが一個では肩身が狭くはないんだろうか。フォギーの余計な心配をよそに、すぐ隣へ座った大男は泰然として酒を口へ運び、文庫本の頁を捲(めく)っている。何を読んでいるのかが気になり、横から覗いてもよく分からぬので、本に検索をかければ、「フォークナー『八月の光』新潮文庫。1967年刊」と出る。

フォークナーは読んだことはないが、『サンクチュアリ』と云う作品が映画化されたのを前に観たなと考えていると、そう云えば中上健次と云う作家の原作映画も観たことがあると思い出した。題名(タイトル)はたしか『地の果て　至上の時』と云うので、男が森のなかを歩く背景(バック)に流れた、フリージャズ系の音楽がなかなかクールだったのを覚えている。急に親しみを覚えて、読書する男をフォギーが好ましく眺めていると、向こうでは伊丹十三が取り出した懐中時計をめぐって寺山修司と話している。と思ったら、寺山修司が懐中時計を水割りのなかへちゃぽんと落としてしまったので、フォギーはちょっと吃驚した。それから時間の本質がどうの、時間と和解する方法論がこうのと、小難しい議論がはじまる。伊丹

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

十三が知られざる時計の発明を通じ時間を飼い馴らす手段を論じれば、寺山修司は、時間を檻に閉じ込めることはそもそも不可能、時間は原野を疾走する野生馬であって、人は奔馬の背で鬣にしがみつき運ばれて行くしかないのだと反論する。すると今度は唐十郎が店にあったギターを手にして歌い出したのは、「きらきら星」の替え歌だ。♪きらきら光る、夜空の首よ――からはじまる歌は、血しぶきとともに貴人の首が空へすっ飛ぶ、と云った穏当ならざる歌詞だ。

「昭和という、この奇怪な時代を支配する時間を殺せ、と云うわけだね」伊丹十三が横から論評する。「しかしこいつはどうも、だいぶ不敬だ。それこそ首を刎ねよ！　とお上から云われかねないな」

「でも、野蛮で、すてきだわ」と茅田アリスが口を出せば、たしかにねと伊丹十三が言葉を重ねる。

「野蛮な力で時間を殺さぬ限り、時間は動かない。いつまでも同じ時間のままだ」

「時間がずっと動かなくてもいいように、お酒だけはたっぷり用意してあるけどね」と茅田アリスが云ったとき、またも扉が開いて、今度は人がぞろぞろと繋がって入ってくる。急ぎ検索すれば、先頭の髪の長い偉丈夫が「大島渚　京都府生　１９３２～２０１３　映画監督」。続くやはり髪の長い精悍な顔つきの若者が「ビートたけし（本名　北野武）東京都生　１９４７～２０××　コメディアン、映画監督、俳優、ＴＶタレント、文筆家、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

歌手」、黒眼鏡の痩せた男が「タモリ（本名　森田一義）福岡県生　１９４５～２０××　コメディアン、司会者、ＴＶタレント」。ほかにも次々と来るが、とても追いきれぬ。狭い店は満杯となり、何人かはカウンターのなかへはみ出して、なお席のない者は立ったままだ。

満員寿司詰めになったところで寺山修司が、急にフォギーの方へ顔を向けて、何か話をしてくれないかと頼むから面喰らった。話と云われましても、まごまごしていると、茅田アリスが、話なんかないわよね、と口を挟んでくれて、ならば野坂さんに話してもらおうとなって、いつのまにか寝ていた野坂昭如を周りが揺り起こす。

べつに眠っていたわけではない、諸君の話は一言漏らさず聞いていたとうそぶく野坂昭如に、話をしてくれと一同が頼めば、「むかしむかし、三人の幼い姉妹がありましたとさ」と野坂昭如がはじめる。「姉妹は井戸の底に住んで、あそこはいつでも蜜まみれ」と話がなんだかキワドクなってくれば、周りはさかんに茶々を入れる。その一方で、話には関心を示さず激論を交わす者らがある。かと思えば、急に何やら動物の物真似をはじめる者があり、あるいはタンバリンを叩いて歌う者あり、と云う具合で、立錐の余地ない店は次第に混沌の色を深め、しかもそこへまた新たに人が押し入ってくるのだからもはや収拾がつかぬ。これじゃどうにもならないなと、フォギーが呆れていると、またもや伊丹十三が、「お嬢さん」と声をかけてくる。「なんでしょうか」とかろうじて返事をすると、「今

日は何日だかわかるかな?」と訊いてくる。毎度まごまごするばかりじゃ格好がつかぬ。たしか今日は十月二十一日だったと思い出したフォギーは、そう答えたものの、十月二十一日はむろん現実(リアル)の話。

ところが、「そうか、今日は二十一日か」と誰かが云い、「一〇・二一であるな」と別の誰かが応じれば、「一〇・二一国際反戦デーだ」とさらにまた別の誰かが呟いたとたん、「いかん、もうデモがはじまってるぞ」と叫んだ大島渚が獅子の鬣のごとき髪を振り乱し店から飛び出して行く。すると他の者らも、こうしちゃおられんと口々に云っては扉から外へ出る。フォギーが唖然となっていると、わたしたちも行きましょうと茅田アリスが声をかけてきて、彼女の冷たい手に引かれフォギーは外へ飛び出した。

52

それで靖国通りに出ればもう大変な騒ぎである。サイレンが咆哮するなか、警察車両の拡声器がガアガア喚き散らし、大勢の人間が何事か叫びながら新宿駅の方へ駆けて行けば、逆に必死の形相で路地から飛び出し逃げてくる者がある。旗を先頭に列を成してジグ

ザグ進む一団がある。パルプ紙のチラシを路行く人に配り歩く者がある。写真機の閃光をやたら光らせる男がある。かと思えば、ただの見物人らしく街路をそぞろ歩く人らもあって、全体に勇壮な夜祭りでもやっているとしか思えぬが、それにしては空気が埃っぽく殺気立つのが怪しい。茅田アリスに手を引かれて駅方向へ進み行けば、騒乱はいよいよ激しく、棒で殴り合う人たちが見えたから驚いた。

　紺の制服に銀色盾を構えた軍勢と、服装はまちまちながら一様に頭蓋覆いを被り顔を手拭で覆った軍勢が衝突している。石を投げ、材木や旗竿をふるって打ちかかるのは主に顔手拭軍、紺色制服はこれを金属盾で防ぎつつ、短い棒で反撃しては、盾でもって相手を地面に押し倒しにかかる。押さえつけられた顔手拭は必死で逃れ、別の一隊が材木を握って銀色盾の列に突進して行く。あるいは剥がした敷石を助走をつけて投げつける。投光器の光線が鋭く交錯し、ピカリピカリと写真機の閃光の走るなか、影絵に変じた人々が激しく揉み合う。

　すわ戦争か、とフォギーは思ったけれど、刃物をふるったり銃で撃ち合ったりはしていないし、野次馬ふうの見物人が人垣を成すところを見ると、祭りと云うのがやはり近い感じがする。村の男衆が二組に分かれて争うみたいな。しかしそれにしては、いまひとつ華やぎがなく、全体に殺伐としているのが変だ。

「これは何なの？」フォギーが云うと、

「だから、一〇・二一国際反戦デー闘争よ」と茅田アリスが教えてくれる。検索をかけると、一〇・二一国際反戦デー闘争とは、「一九六九年十月二十一日、東京都新宿区で起こった新左翼による街頭闘争。学生を中心にした新左翼各派が機動隊と衝突し、一五〇五人の逮捕者を出した」と出る。つまり盾を持つ紺色制服が機動隊、服装まちまちの顔手拭が新左翼なんだろう。機動隊はまあ警察関係と分かるが、新左翼ってなんだ？　そもそもこの人たちはどうしてこんなふうに争っているのか？　二十世紀史に詳しくないフォギーには見当がつかぬ。周囲に怒号はいよいよ溢れ返り、肉体と肉体の衝突は激しくなって、これじゃあ怪我人がでてしまうよと、野次馬の後ろから覗くフォギーは怖くなる。

「なんでこの人たちは喧嘩しているの？」横にいる茅田アリスに訊いてみると、「国家権力が革命を弾圧しているのよ」と答えが返ってくる。

「国家権力って、警察のこと？」

「それも含むけど、もっと大きな国家の力よ。人間の自由や権利を抑圧する力」

「と云うことは、あれなの、これは革命なの？」

「そうよ。革命闘争」

革命ならフォギーも知っている。なるほどね、革命ねと、フォギーは頷いたものの、いまひとつ納得はいかぬ。革命とはつまり国や社会の仕組みを根本から変えることだろうが、こんなふうに材木をふるうくらいでなんとかなるものなのか。警察の方も、催涙瓦斯

は使っているみたいだが、電撃杖や神経麻痺弾はもちろん、発泡拘束具さえ使わぬのは生温くはないか。昔は世の中が牧歌的だったんだなと観察しつつ、

「でも、こんなんで、革命ってできるわけ」とフォギーが率直な疑念を漏らすと、できるわね、と茅田アリスからは端的な答えが返ってくる。

「これは一つの先駆けであって、闘争はここだけで終わるわけじゃない。前衛党による闘争の継続がやがて人民全体に波及して行くのよ」

「闘争って、具体的に何するの？」

「自由を求めるのよ。大企業と一体化した国家は、常に人民を管理しようとする。自分に都合のいいようにね。たとえば新宿西口広場では、この間まで反戦フォーク集会が開かれてたんだけど、国家の手で強制的に閉鎖された。あからさまな弾圧よ。だからこうして、人間の自由を抑圧し、管理する国家の、その管理体制そのものを撃つのよ」

なるほど自由であるか、とフォギーは頷き、少しばかり理解できた気になったのは、演奏(プレイ)のさなか、自由を抑圧し音楽を管理する力がかりに現れたなら、自分はとことん抗うだろうと、類比(アナロジー)で考えたから。つまり顔手拭の人たちは自由を求め、紺色制服の人たちは国家権力の代表として管理を貫こうとしているわけだ。と、こう考えて、フォギーはだいぶ分かった気になったのだから、歴史の勉強はちゃんとした方がいいと思います。

「彼らの暴力は国家権力の手先に向かうだけじゃない」茅田アリスが論を継いだ。「無差

識のうちに国家権力を支え、国家の支配に加担している人々の、凡庸な生を撃つのよ」

はあ、と今度はよく分からぬまま頷いたフォギーは、でも、と心に浮かんだ感想を口にする。

「それだったら、いっそのこと、材木なんかじゃなく、爆弾とか機関銃とか使った方がいいんじゃないの」

「怖いこと云うわね」と唇を歪めて笑った茅田アリスは、それじゃ行きましょう、と云ってまたフォギーの手を掴む。怒号と喧噪のなか、爬虫類の鱗めいて冷たい手に引かれるまま進むと、茅田アリスが入っていくのは駅傍のビルディングだ。硝子扉を開ければ、人気のないロビー奥に昇降機（エレベーター）、眼の前で開いた扉から箱へ乗り込み、がたがた揺られて最上階へ。箱から出て暗い廊下を抜けて正面の扉を開けば、そこはビルの屋上だ。ビル全体はどうだか分からぬが、昇降機（エレベーター）から屋上の領域は『新宿の街』から接続（アクセス）可能になっていると見える。

鉄柵で囲まれた屋上には、給水塔らしい設備が一角にあるほかは、鼠色の混凝土（コンクリート）をのっぺり星のない夜空に晒している。人はいない。錆のついた柵の傍に立てば、周囲のビルディングが冥暗な石碑のごとき姿に変じて間近に見える。正面にある不格好な矩形の塊が新宿駅らしい。いまと違って、駅ビルは高層ではなく、駅から街へ続く高架通路（プラットフォーム）もない。薄汚れた石造りの高架線を窓の光る電車がのたのた這い来て、駅ビルの灰色石塊の陰に吸い

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

込まれれば、別の電車がごとごと不機嫌な轢音を鳴らして駅から出て行く。駅ビルの向こう側、古くからの高層ビル街であるはずの西新宿は一面、湿原でも広がるかのように暗く、自働車灯の輝く幾筋かの道路が組織を貫く血管のように見えている。

一方、駅のこちら側は、ビルとビルの谷底から、蒸気が立ち上るように騒乱の喧噪が届いてくるのが賑やかだ。直下を覗けば、機動隊と新左翼の衝突はいまや酣（たけなわ）、催涙瓦斯（ガス）の立ちこめる街路を埋め尽くしてぶつかり合い、四方の路地から新手が続々と押し出てくる。

なるほど、ここは見物するには特等席だ。乱麻のごとき混乱のなかを右往左往する、豆粒大の人間を俯瞰して眺めれば、先刻間近で実見した際の、肉と肉が打ち合う陰湿な音が届いてこぬせいか、まるで玩具の人形が動き回るようだ——と云いますか、これは全体に「玩具」的なものだと云ってもいい訳ですが、疑似現実環境（ヴァーチャルスペース）にすっかり馴染んだ結果、まるでジオラマ人形みたいだなと、素直な感想を心に抱いたフォギーが眺めるうちにも騒乱はいよいよ紛々となる。

「これって、どうなっちゃうの？」

不安になったフォギーが傍らの茅田アリスに訊いたとき、石壁がどうと倒れるがごとき音が響いて足下が揺れたのは、間違いない、爆発だ。見れば斜向いのビルの根元あたりから黒煙が盛大にあがって、紺の制服がバラバラ舗道に倒れているのが煙の奥に見え隠れする。と、また爆発音。今度はフォギーからは死角になった場所だ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「もしかして、爆弾？」恐る恐る云えば、
「そうみたいね」と釆田アリスが頷く。
「でも、いいの？　爆弾なんか使っちゃって」
「だってあなたが云ったんじゃない。爆弾を使えって」と釆田アリスが冷然と云うのを聞いてフォギーは肝を冷やした。
「そりゃ云ったけど、でも、だからと云ってですね——と云うか、冗談と云うか、軽いノリで口にしてみただけなんであって、だいたい私が云ったからって、どうしてそうならなきゃいけないわけ」
　フォギーが慌てて弁解するうちにも、タンタンタンタンタンと小太鼓を叩くような音がして、これはつまり機関銃を持ち出しての撃ち合いだ。見れば向いの低層ビルの屋上に腹這いになった人が街路の人間を狙い撃ちにして、他にも火を噴く銃口がぬっと突き出た窓がいくつもある。となれば、これはもう怪我くらいじゃすまぬ訳で、酸鼻きわまりないことにならざるをえぬ。遠くビルの屋上から眺めているので現実感は生々しくはないが——と云うか全体に現実ではないわけだけれど、気分は悪夢を見るようでよろしくない。
「これって、つまりエンターテインメントなんでしょう？」とフォギーは叫んだ。声がだいぶ裏返る。「ジミヘンはよかったけど、これはだめよ」
「でも」と釆田アリスがまた冷静に応じる。「暴力は最高のエンターテインメントなんじ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

やない。二十世紀のハリウッド映画なんかそればっかりでしょう。虚構じゃない現実の暴力だって、家で画像を見ている限りでは、戦争だろうがテロだろうが全部が娯楽になる。そう云うものでしょう。あなただってそうじゃない？」

　それはまあそうだ。身もふたもないが、指摘におよそ間違いはない。しかし嫌なものは嫌なのだ。

「だけど、こう云うのは嫌なの」と駄々を捏ねるようにフォギーが云うと、突然、夜空を貫いて管弦楽が響き渡った。ズンズンズンズンズンと、不安を与える行進曲ふうの音楽だ。音源がどこにあるか、にわかには分からぬが、常軌を逸した大音量のせいで、騒乱の新宿はたちまち音楽の支配に圧せられ、先刻までとはまた違う不穏の空気に包まれて、機動隊も新左翼も野次馬も一様に星のない夜空へ顔を仰向かせる。

　しかしこの音楽はどこかで耳にしたことがあるぞ、と思った次の瞬間、獣の咆哮に金属音を混ぜ込んだような爆音が轟いて、そうか、あれだよ！　とフォギーが膝を打ったのはゴジラだ。管弦楽は伊福部昭作曲の「ゴジラの主題」。SONY上海電影産業が、３Ｄ映写装置の宣伝に、東京、ニューヨーク、ドバイ、ニューメキシコ、イスタンブールと云った都市に巨大ゴジラの映像を闊歩させて話題になったのはもう二〇年ほど前になりますが、ゴジラは二十一世紀末のいまも世界中で人気の怪獣、フォギーも以前、「ゴジラの主題」をバップ風にアレンジして演奏したことがある。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

どこだ、どこだと見渡せば、いました！　新宿駅の向こう側、中野方面の闇の奥から、ギャヒーン、ギャヒーンと馬鹿に吠えながら、紅い目玉の怪獣がにじみ出てくる。ゴジラにはそれほど詳しくないフォギーにも、ずんぐりした体型から、ハリウッドによるリメイク版ではなく、初期の日本製ゴジラだと分かる。きたきたきたと、フォギーが拍手喝采するうちにも駅近くまで歩み来たゴジラは、駅ビルを破壊するかと思いきや、すぐにはそうせず、ちょうど来た電車を爪のある前脚で掴んだのはいわゆる「お約束」と云うやつだ。悲鳴をあげて電車からこぼれ落ちる乗客、逃げ惑う人々、飛来する自衛隊のジェット戦闘機。しかし残念なことには、国土防衛軍の前身である自衛隊はゴジラには勝てないのだ。いや、国連多国籍軍だって、世界最強の傭兵軍団と云われる「Silver Falcon」だって無理。ゴジラを倒すには芹沢博士の発明になる水中酸素破壊剤（オキシジエンデストロイヤー）を使うしかないのでした。電車は遠くへ投げ捨てられ、自衛隊の戦闘機は蠅のごとく叩き落される。そうそう、これだよ、これ。暴力がエンターテインメントだとして、自分が好きなのはこう云うやつなのだ。

自衛隊を撃破して、ゴジラが口から放射能を吐き散らし気炎をあげているところへ、今度は暗い空から三つ頭の龍みたいなのがキュルキュルキュルと嫌な音を伴奏に飛んでくる。なんだろうと思って検索すれば、「キングギドラ」と出る。と別の翼竜に似たのが飛んできて、こちらは「ラドン」。空飛ぶ円盤みたいになって飛来したのが「ガメラ」。地上

でも、中野方面、高田馬場方面、甲州街道方面、三方から陸続と新手がやって来る。とりあえず眼についたのを検索すれば、「どくろ怪獣レッドキング」「宇宙忍者バルタン星人」「えりまき恐竜ジラース」などと出たのは「ウルトラ怪獣」と云うもので、一九六〇年代に始まったＴＶシリーズに登場した怪物とのこと。「ウルトラ」云々の話は前に芯城から聞いたことがあって、このあたりは山萩氏の趣味が反映しているんだろうと推測するうちにもどんどんと集まって、新宿駅西口は大集合した怪獣怪物で満員になる。一触即発の佇(たたず)まいで睨み合う怪獣たち。いわゆるバトルロワイヤルと云うやつらしい。

「あなたはこう云うのがいいわけね」

横の茅田アリスが皮肉な調子で云い、べつにいいわけじゃないが、まあ人間同士が殺し合うよりはいいかもとフォギーが笑って答えると、すぐに語が継がれる。

「つまりあなたは、人間以外のものなら、どんな残酷な目に遭ってもかまわないと云うわけね」

「そこまで云ってないけど」

「同じことよ。あなたは人間が生き延びさえすればそれでいいと考えている。ロボットなんかどうなってもかまわないんでしょう」

なんか古い。茅田アリスの問題提起の仕方が古臭いとフォギーが感じたのは、巨額の資金が投じられた高性能ロボットと、とくに資産も才能もない人間のどちらか一方しか助け

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

られない状況があるとして、前者を助けるのも仕方がないとする風潮が広がりつつあるからだ。二十一世紀末、身もふたもないホンネ主義が世の主流となりつつある。

「でも人間は、つまりあなたが普段棲んでいる現実世界(リアルワールド)の人間は、永遠には生きられない」と茅田アリスが別のことを云い出した。

「あなたはそれで平気なの?」と問うた黒髪の女は、フォギーの返事を待たずに語を継ぐ。「あなたはこんなふうに考えたことない?」

少しだけ笑いを含む調子に変えた茅田アリスの、長い黒髪に半ば隠れた顔に投光器から漏れ出た光の筋が幾つも通り過ぎる。皮膚の滑らかな顔は白磁でできているかのようだ。腰のくびれが、それこそ人形のようにか細い。ゴジラの音楽はいつの間にか漸弱消失(フェードアウト)して、怪獣たちも街路の人間たちも、二人の会話に聞き耳をたてるかのように沈黙する。

「あなたが普段生活している現実世界、それもまた一つの疑似現実環境かもしれないって、考えたことない?」

ある。フォギーは答えた。現実だと自分たちが考えている世界がじつは誰かが作った虚構世界だった――と云う物語は小説でも映画でも昔から数えきれぬほどあるし、現実と疑似現実はその内部に囲い込まれた意識にとっては区別不可能であると、誰だったか偉い学者が証明したと聞いた気もする。

「だったら、この世界――つまり疑似現実と呼ばれているこの世界のことだけれど、そこ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

に棲んでしまえば、いわゆる現実世界にいるのと原理的に変わらない。無数の疑似現実が並列しているのが宇宙の実相だとしたら、ひとつの疑似現実に拘泥する理由はないでしょう？　より幸せでいられる疑似現実を選ぶべきじゃない。選ぶ機会(チャンス)が与えられるなら」
　そこまで聞いたフォギーは相手の言葉に割って入った。
「あなたは、誰？」
　夜闇に浮かんだ茅田アリスの顔、長い睫毛を昆虫の翅(はね)のように動かしてフォギーを見詰める茅田アリスの生白い顔にまた光の筋が通り過ぎる。細い腰が僅かに揺れて、作り物めいた紅い唇が動いた。
「わたしは分身(アヴァター)じゃないわ。わたしはここの正規の住人」
「正規の、って？」言葉にひっかかりを覚えたフォギーは問う。
「深い意味はないけど、ここにずっといる人間と云うくらいの意味よ」
　つまり茅田アリスはAIで制御された疑似現実的事象(ヴァーチャルマター)であるわけだ。とあらためて確認したフォギーは、そのときもう一つの可能性があることに思い至った。つまり彼女がTBU（全脳送信）を受けた「人」である可能性だ。ここは山荻氏の墓ではあるが、他の「人」が一緒に棲むことはむろん可能だ。
　駅向こうの暗がりで怪物たちは凝固して動かず、巨大な人形(フィギュア)のように見えている。街の喧噪もいつのまにか消えて、白雑音(ホワイトノイズ)に似た響きが辺りを埋めつくし、ただ光だけが、青み

かかった受けるが、どこかの空間へ人々に感動されて、その女で仕出していくのを[illegible]
動き東京れた音のように雑に浮かんでいる。
「ひょっとして、あなた、TBUを受けた人？」
そう言ってみて、たちまちフォギーは口を押さえた。それは余りにも言葉の異質なものなので[illegible]
感だ。「そうか、そんなわけないわよね」
峯田アリスは不意に黙り込み、目を細めて遠くに浮かぶかのように視線を向けた。[illegible]オギーは悟った。峯田アリスばかりではない。眼にする、見たり目にした誰もが[illegible]えて、足下のどこかがふいに消えてしまいそうな不安感をおぼえた。寂・不・義・は人の想起した。
「あなたはあくまで人間にこだわるのね。いわゆる純粋な人間に。よく意味がわからずにいるフォギーを鋼口に眼差の女は続ける。
「TBUでここへ来た者たちが本当の人間だと思っていないでしょう？　でも、現実の人間だけが人間だって考え方は間違っている。わたしは、人間の概念にこだわるのかしらそう。そんなふうに人間にこだわっていたいんだわ。あなたは人間にこだわる必要はないわね」
別に嫌ったくないわ。フォギーは内心反発したが、ノーと相手に議論をもちかけるつもりはない
「負けるは自己嫌悪だろ」と言い直し、それがいつ本当は[illegible]

ざとはしゃいだふうの声を出せば、怪獣たちがにわかに動き出した。同時に音楽がまた聞こえ出し、これに乗って紅い模様のある銀色のロボットみたいなのが四谷方面から飛んできて、怪獣諸氏の真ん中に降り立ったのは、つまり「ウルトラマン」だ。シュワッとかなんとか叫んで見得を切る「ウルトラマン」に続いて似たようなのが次々と来る。検索画面によれば、「ウルトラマン」の兄弟たちとのことで、あれでウルトラマン、けっこうな大家族である。するとまた音楽が変わって、飛んできたのは見るからに古風なロボット然としたロボット。こちらは「鉄人28号」と出る。鉄人とはいかにも古色蒼然だが、しかしなんで28号なんだとフォギーが訝る間にも、「ガンダム」だ「エヴァンゲリオン」だと、ロボット風のが陸続と集合して、新宿駅西側は、センスの悪い料理人の作る寄せ鍋みたいにごったがえす。端へ追いやられたゴジラなどは、横の者に押されてつんのめり、駅ビルにゴンとぶつかったりしている。ああ見えて、ゴジラのやつ、案外と気が弱いのかも。ゴジラ頑張れと、フォギーが心中で声援を送ったとき、〈師匠、聞こえますか〉と聞こえたのは花琳(ファリン)の声だ。

〈うわっ、なんだ、これ〉と花琳が頓狂な声をあげたのは、蝟集した怪獣その他をいきなり目にしたからだろう。

「なかなかすごいでしょ」フォギーが自慢すると、

〈すごいけど、とにかく一回戻ってきてください〉と花琳はいう。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「どうして？」

〈ちょっと非常事態。早く戻って〉

「何かあったの？　こっちはもうすぐバトルロワイヤルがはじまるんだけど」

〈鍵(キー)は見つかったんですか？〉

「鍵？　なんだっけ、それ？」

〈あ、もういいです。こっちでやりますから〉と云ったきり、花琳は離脱したのか、あとはモシモシと声をかけても返事がない。するとしばらく黙っていた茅田アリスが口を開いた。

「戻るのね」

え？　と訊き返せば語が継がれる。「あなたが来るのを待っているわ。あなたがここの正規の住人になって来るのを」

どういうこと？　と問おうとしたとき、黒目の大きな整った白面に微笑を浮かべた茅田アリスは、鉄柵を軽く飛び越えて、宙へ身を躍らせる。フォギーがあっと叫んだ瞬間、世界は暗転した。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

53

接続端末装置（ＡＴＳ）に、使用者の身心の異変や外部の警報を受けて緊急切断する安全装置が組み込まれているのは、疑似現実環境で遊んでいるうちに火事で焼け死にました、では、洒落にならぬ以上、当然だけれど、ほかに第三者が手動で強制終了できる仕組みになっているのは知ってのとおり。これは脳によからぬ影響を与える恐れがあるから、できればやらぬ方がよいと、マニュアルに記されているのも周知の事実。にもかかわらず王花琳がフォギーを無理矢理現実界へ引き戻したのは、フォギーの脳なら少しくらい損傷してもいいんじゃないかな、と思った、からではなくて、要するに花琳は急いでいたのでした。一度は分身に同期して戻るよう伝えたものの、どうもなんだか時間がかかりそうだと判断し、急ぎ手動で切断したと云う次第。しかしなぜ花琳は急いだのか。

それより数分前だ。激しい動きを示す架空墓、そこに生じている事態を把握すべく、「繭」に籠ったフォギーを横目に、食品給仕機から出したチョコレートバーを齧りな[illegible]壁の制御盤がヒュルルンと電子音をたてる

のを聞いた。

何だと思って見れば、「訪問者あり」の表示。急ぎモニターすれば、誰かが表門に立って認証板をいじる姿が、天井から下がった立方体の透明画面に映し出された。Who is it? と反射的に花琳は呟いたが、その時点ではすでに、身元照会の表示を求めるまでもなく、訪問者の正体は摑めていた。まったくもって信じ難いことではあったが、認証手続きを終えて門戸を潜る人物に誤認の余地はなかった。これがいったい何を意味するのか、頭脳明晰な花琳にもにわかには判定できなかったけれど、とにかくフォギーを呼び戻しておくべきだとの判断が生まれた。

一方、ぶうむむんと、水浴びする犀のごとき声を漏らしつつＡＴＳの繭から這い出たフォギーは、強制終了の後遺症ですぐには現実感覚が摑めぬ。部屋の器物も花琳の顔も、いちいちそれと分かるのに、見知らぬものに思えてしまうのが不気味だ。ビルから飛び降りた瞬間の茅田アリスの顔が紫の染みとなって網膜に貼り付き、紫陽花のごとく空に浮かぶのが怖い。それでも花琳が渡してくれたカプセル剤を嚥めば落ち着きは取り戻されて、すると急に一杯やりたくなって、食品給仕機にアルコール飲料の品書きがあったのを思い出し、階段ホールへ出ようとすると、何してるんですか、と花琳に叱られた。

「だからね、ちょっとくらい飲んでもいいでしょ。夜だし」

「もう朝ですよ」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「何時なの？」
「四時三〇分。とにかくそんな場合じゃありません。見てください」と花琳が指差したモニターには、畳の部屋に佇む人が映っている。山荻邸母屋の座敷らしい。
「何か探しているみたいです」と花琳が註釈したのは正しく、画面の人は箪笥の引き出しを物色している。遮蔽幕の隙間から常夜灯の光が漏れ入るだけで、部屋に灯りはないけれど、暗視カメラの画像は鮮明だ。
「あれ、誰？」とフォギーは問うたが、それが何者であるか、云ったとたんに思い出した。
「どうなっちゃってるの？」「分かりません」「どういうこと？」「全然分かりません」無意味な問答が画面を凝視する二人の間で繰り返されたのは無理もない。そこに映った「人」は、間違いない、モリキテック社のケープタウン研究所にて、大山康晴十五世名人と並んで座っていたロボットだ。箪笥の捜査は終えたらしく、灯りのない和室の中央に佇む、鬱金の着物に足袋履き、手にした扇子で顔に風を送りながらあたりを見回すスキンヘッドの年寄りは、あれだ、五代目古今亭志ん生、それに違いない！
しかしどうして落語家ロボットがここへ来なければならぬのか。いや、そもそもそうした疑念以前に、赤外線カメラのせいもあるのか、眼を炯々と紅く光らせる禿頭着流しの年寄りは、なにやら非常に奇怪で、ほとんど悪夢的ですらある。

「なにしているのかしら？」

「なにか探しているみたいですね」と花琳が応じる。

「なに、探しているのかな」

「I don't know」

「泥棒ってわけじゃないみたいね」とフォギーが云うと、どうしてと花琳が訊いてくる。

「履物を脱いでいるでしょう。泥棒なら靴を履いたままあがるから」

なるほどと、花琳は頷いたものの、何に対して自分が納得したのかよく分からないでいると、横の女は、ね、だから泥棒じゃないのよと、自分の観察力をしきりと自慢している。その間にも泥棒容疑を免れた古今亭志ん生は縁側廊下へ出て、台所方面へ歩いて行く。と、カメラの視点が切り替わって、真正面から捉えられた顔がぎろりカメラを睨みつけたので、フォギーと花琳はおわっとのけぞった。

「目つきが悪いなあ」フォギーが感想を云うと、

「ですね」と花琳も同意する。

「あれは誰が動かしているわけ？」古今亭志ん生が台所へ入って行くのを見届けてフォギーは訊いた。「誰かが動かしているんでしょう？」

「それは誰が操作（オペレイト）しているのか、って意味ですか？」

「そう」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「だったら誰も操作(オペレイト)していません。あれは自律型(オートノミー)ですから。もちろん制御回路に接続(アクセス)すれば、命令はできますけど」

モニターに三日月眼を据えたまま答えた花琳は、接続(アクセス)できるのはロボットの担当者のほか、接続暗号(アクセスコード)を知る数名だけだと解説した。

「花琳はできるの？」

「できません。わたしができるのは、ドルちゃんだけ」

ドルちゃんと云うのは、エリック・ドルフィーのアンドロイドのことらしい。しかし、ドルちゃんはない。とは、思ったものの、そのことを論(あげつら)うことはせずにフォギーは云った。

「と云うことは、モリキテックの、あのロボットの担当の人が、ここへ来て何か探すよう命令したってことじゃないの」

たしかにそう整理してしまえば、事は奇怪でもない。フォギーは考えたのだけれど、頬のえくぼを指で突きつつ思案する花琳は納得しかねる様子だ。元来色の白い花琳の顔はいよいよ色を失い、冬瓜(とうがん)のごとき青味を帯びてさえ見える。「自然主義」の世界的(グローバル)な流行が去った後、上海で生まれ育った花琳が美容整形を受けていないとは思えず、この肌の白さには人工の手が加わっているはずだ。紫外線遮断処置を受け、医療行為でない美肌施術をたまに受けているフォギーも、肌の白さと張りにはわりと自信があるのだけれど、花琳の

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

肌の真珠を想わせる透明感は段違い。もしこれが天然だとしたら奇跡だ、などとやや場違いな観察をフォギーがしていると、

「変なのは」と色白花琳が画面から眼を離さずに口を開いた。「担当者がついてきてないってことです」

どんなロボットも公共空間で動かすには関係機関の審査が必要で、事前に届け出た領域でしか稼働許可は下りないのだと説明した花琳は、だから古今亭志ん生のごときロボットを街中で単独行動させることはありえないと断じた。

「ドルちゃんは『アケタの店』で動かせるよう、申請を出しました。他の場所で動かすことは、日本ではできません。日本の法律は厳しいから」

認可が下りた後でも、舞浜の工場から調布まではロボットを起動させずに運ばねばならぬのだと説明を加えた花琳は、古今亭志ん生が単独で舞浜から千駄木まで来るなんてことは、だから絶対にありえないと強調した。

「でも、来てるじゃない」とフォギーが云えば、

「ですね」と花琳も頷かざるをえない。花琳は発光茸卓へ向かって手を動かしはじめる。そうしながら、ケープタウン研究所の汎用電脳の全体が架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の建設に使われているのだと説明をはじめた。

「まるごと全部ですよ。とんでもないことになっています」と花琳は小鼻を膨らませる。

それがどのくらいとんでもないことなのか、フォギーには理解しかねたが、少なくとも架空臨のなかがとんでもないことになっているのは間違いなかった。とりわけ新宿ゴールデン街で飲んだ『トリスハイボール』の味は凄かったな、とそう思い返せば、どうしても一杯やりたくなって、しかし花琳に叱られるのが怖くて、密かに酒を取りにいく方法はないものかと思案しているうちに、おかしいな、と花琳が呟いた。

「何がおかしいの？」

「舞浜工場に接続できないんです。稼働はしているみたいなんですが、閉鎖状態になっている」と云った花琳が部屋から出たのは、電磁波遮断領域の外で誰かと連絡を取るためらしい。花琳の電脳網端末は流行の耳ピアス型。一緒に室を出たフォギーは、花琳が通信をしている隙に食品給仕機からウイスキー・ソーダを出すことにまんまと成功した。

しめしめとほくそ笑んでいるところへ、ちゃんとモニターを見張らなくちゃ駄目じゃないですか、と花琳の叱声が飛んで、すいやせんと、肩を竦めたフォギーが部屋へ戻ったとき、制御盤がヒュルルンと軽やかな音をたてた。古今亭志ん生が母屋の階段を下り、地下空間の入口に立ったのだ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

54

[illegible]

れず、であればこそ山萩氏が墓の出来映えにつき「娘」の感想を知りたがった——とこう考えれば、いちおうの辻褄は合う気がした。確証は全然ないけれど。

花園神社を出てから、靖国通りを四谷方向へ歩いて厚生年金会館の前まで行き、そこから引き返して、今度は区役所通りから歌舞伎町へ入って、コマ劇場前からオデヲン座やミラノ座に面した広場を横切り、一番街を抜けて靖国通りへ戻って道路を渡り、ジャズ喫茶DIGを確認して二幸の前から新宿通りをまた四谷方向へ——と云った具合にあちこちうろついた芯城は、先刻に較べ路行く人や車にパターン臭が生じていることに気づいていた。左右のビルや店舗も同様。疑似現実(ヴァーチャル)の質感が明らかに低下している。これはほぼ三週間前の『新宿の街』の水準だ。しかしこれがまあ普通なので、先刻までが異常だったわけだが、なぜさっきはあれほど質が高かったのかと思案すれば、やはりここでもフォギーに行き当たった。疑似現実空間はフォギーを中心に設営され、彼女の居る所に限って質が高まるよう設定されているのではあるまいか。実際ソフトの質を満遍なく維持しようと思ったら、どれほど電脳(コンピューター)の容量があっても足りぬとは、IT工学にそれほど詳しくない芯城にだって分かる。

手に触れる物がことごとく黄金になったのはミダス王だが、フォギーの向かう先々でその周囲だけがリアルとなる。末廣亭前の居酒屋で、フォギーが顔に浴びた途端に映像から〝実体〟に変じたモツ焼きの煙を思い出しつつ芯城は考えた。フォギーは「さよなら(フェアウェル)ツア

ー」と云っていたが、彼女の快適なツアーのためにいまや全体が運営されているらしい。としたら、フォギーの周りでのみ面白いことが起こる理屈で、だったら是非とも摑まえたいものだと、なお歩き回っている最中、追分だんごの店前あたりで、ログアウトを促す表示が視野に浮かぶのを芯城は見た。そのとき新宿駅の方が非常に賑やかになり、気になったものの、「御延長いただく場合、ここからの課金は芯城銀太郎様の口座から引き落とされます」と表示が出ては、急ぎログアウトしないわけにはいかぬ。ホテルのATS使用料を自腹で支払えるほど芯城は裕福ではない。

それでVR室からホテルが用意してくれた本館の部屋へ戻れば、待ち構えていたように、山萩氏の「訪問」を受けた。山萩氏の通信インターフェースは、いつもの縞の上着にアスコットタイをした「植草甚一」、ツインルームのソファーに座る格好になった植草甚一＝山萩氏は、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の出来映えにつき、芯城に矢継ぎ早に質問したのだけれど、フォギーはどんなふうだったか、フォギーは楽しんでいる様子だったか、彼女をもっと悦ばせるにはどうしたらよいと思うか、と云った点に質問が集中するのがやはりどうしても妙だった。山萩氏とフォギーの「特別な関係」は、芯城のうすうすの観測だったのだが、ここまで露骨にフォギーへの関心をぶちまけられては、もはや誤解の余地はないと思わざるをえなかった。生涯独身を貫いた山萩氏は、親兄弟も早くに亡くし、天涯孤独の身だと称していた。が、いよいよ幽明境を異にする段となって、「係累」に心を寄せる気持ちにな

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ったのであった――と云った「物語」を芯城は思い浮かべたりした。

フォギーは概ね楽しんでいた様子である。彼女は『Pii Inn』の生演奏に関心があるようだったから、『新宿の街』と『Pii Inn』はぜひとも繋ぐべきである。それから自分が製作に参加した『大正池』にも愛着が深いと見え、だから『新宿の街』と『大正池』を直通で結ぶパス路線を整備した方がよい。さらに技術的に可能ならば、フォギーが疑似環境内のピアノを弾けるようにして、歴史的な演奏家と「共演」できるようにしたら、フォギーが欣喜雀躍すること疑いなし――等々の助言を芯城はしたのだが、山萩氏はやはりどうもおかしかった。インターフェースの顔から表情がすうと消えることが間欠的にあって、これは送信者が対話の場から「離脱」した時間に違いなく、こうした無作法は以前の山萩氏には考えられぬふるまいであった。そもそも質問する態度にしてからが、威丈高な尋問調で、主人が使用人に対する態度そのまま。まあ考えれば、たしかに主人と使用人の関係には違いないのだけれど、これまでは趣味を同じうする友人として芯城を遇してきた山萩氏なのだ。

芯城としては、大山アンドロイドの破壊事件につき、山萩氏の意見を是非とも聴いてみたかった。いまだ真相を掴みかねる今夜の事件、架空墓を訪れ興味津々見学しながらも、頭の片隅に貼り付いて離れぬ事件の謎につき、山萩氏と話し、意見を交換したかった。山萩氏の方も同じ気持ちのはずで、なにしろ大山名人 vs.芯城親大郎八段の対局は、山

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

荻氏が企画したものなのであり、それがこんな形で駄目にされたことにつき、山荻氏が値りなりなんなり強い感情を抱くのが当然と思えるのに、「対局は中止になりまして」と芯城が水を向けたのには全然反応がなく、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）のフォギーのことばかり訊いてくるのがおかしかった。

死期が近づいて知的能力や人格に揺らぎが生じている――早い話がボケているのかもしれぬと、とりあえず芯城は推測したが、どうにも不思議な気がして、山荻氏が「去った」あと、一人ホテルの部屋に居ても落ち着かず、位置情報さえ発信してくれれば外出してもかまわぬとの警察関係者からの了解を得て、思い切って外出することにしたのである。

フォギーに生身（リアル）で会わねばならぬ用件。これは必ずしも急ぐものではないように思えたけれど、逆に今夜であって悪いこともない。フォギーが千駄木の山荻邸地下からATSに繋がっているのは分かっていた。一度そう思えば、フォギーに、それも生身のフォギーに、どうしても会わねばならない、いや、いますぐ会いたい、との思いが燃え上がって押さえ難く、それほどの欲望を作動させる情熱の所在が摑めぬ芯城は、だいぶ戸惑いつつ、ホテルの車寄せから自働車に乗り込んだのだった。

護国寺を左手に見て不忍通りを行く無人Taxiは、芯城を乗せ、小雨の降り始めた夜明け間近な東京シティーを東へ向う。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

55

山萩邸への通行認証は、表門および玄関は比較的簡便だが、地下空間はさすがに厳格だ。ことにDNA型の判定は、なにしろロボットにはDNAがないのだから、探知機(センサー)を騙すのは絶対に無理。モニターを見詰めつつ解説した花琳が、「だからロボットは地下までは絶対に入ってこられません」と断じたとたん、強化プラスチックの扉がすいと開いて、扇子で顔をひとあおぎした古今亭志ん生が、懐から草履を出して履き直し、地下空間へひょいと歩を進めた。

「開いたわね」フォギーが云うと、

「開きましたね」と花琳が復唱する。

「開いた、と」

「開いた、ですね」

二人が繰り返す間にも、古今亭志ん生は網状樹脂合板の廊下を、照明を順番に点灯させつつ進んで行く――とモニターが進んでくる。地下空間のモニターは2Dの平面画面で、順次、

切り替わるカメラに捉えられるたび、光を吸った茶色い禿げ頭が艶を増していくように見えるのがすこぶる怪しい。

「なにするつもりかな」

不安に耐えかね呟いた花琳はそのとき、横にいたはずの女がいないことに気がついた。あれ、どうして消えたのかなと、狼狽えていると、室の扉が開いてフォギーが戻ってくる。

「なにしてたんです？」

「え。だからね、ちょっとおかわりをね」とフォギーは申告して手にしたタンブラーを軽く捧げ持つ格好になる。反対の手に皿（プレート）を持っているので、花琳が視線をやれば、

「あ、これはツマミ。チーズとサラミのもりあわせ。アンド落花生。千葉県産の」と嬉しそうに解説してから、モニターを覗き込む格好になって、

「で、どうなった？　彼、こっちへ来そう？」と3Dドラマでも観ているふうに云う。

この緊迫感のなさはなにゆえ？　呆然となった花琳が口を半ば開けていると、「あ」とサラミソーセージをくわえたフォギーが声をあげた。「部屋に入って行く」

花琳がモニター画面に眼を戻せば、たしかに古今亭志ん生が通路に面した扉を開けてなかへ入っていくところだ。

「図書室（ライブラリー）ですね」と花琳が云ったとたん、カメラが図書室内部に切り替わって、合金の階

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

段を下っていく人物を映し出した。天井からの角度なので、頭頂部が蛸の化け物みたいに見えるのが怖い。と云うか、お化け蛸が動いて行くと思うと、ちょっと可笑しくもある
「これって、なんか、笑えない？」フォギーが噴き出しつつ云うと、そんな場合じゃないですよ、と応じた花琳もつられて笑い出す。一度そうなると、ちょっと笑い過ぎじゃない、とフォギーから咎められるくらい花琳が笑うのは、いわゆる箸が転んでもというやつです。

二人がげらげら笑ううちにも、禿げ頭の噺家ロボットは最下層まで階段を下りきる。そうして向かったのは Edgar Allan Poe の蔵書区画（コーナー）だ。書架の前に立った古今亭志ん生は、しばらくは凝（じ）っと本の背表紙を眺めていたが、扇子を畳んで懐へしまうと、手を伸ばして一冊を書棚から引き出した。それが何であるか、斜め後ろからの映像では判然としなかったものの、化粧箱から中身が引き出される様子を見れば、迷宮（ラビリンス）社版江戸川乱歩訳『赤き死の仮面』であることは疑いをいれなかった。古今亭志ん生はかなり長い時間、頁をぱらぱらやっていたが、やがて箱へ本を収めて書棚へ戻したあたりは、なかなかきちんとしている。

「鍵のネックレスを探しにきたのかな」花琳が確認するように云い、「そうみたいね」と、首から下げた鍵の飾り片（ペンダントトップ）に触れながらフォギーも頷く。あれだけ膨大にある本のなかから、その本を選び出した以上は、他に考えようがない。

ロボットはしばし思案するふうに書架前に立っていたが、急に頭を動かし視線を横の卓へ向ける。着物で立つ姿は人間の年寄りそのものだが、首の動作ばかりはやけに機械じみている。その辺りが非常に不穏だ。ロボットの視線の先には白手袋の入った木箱と、使用済み手袋を捨てる籐の籠。卓に向き直った古今亭志ん生は、籐の籠へ手を伸ばすと、なかにあった手袋を取り出し、鼻先へ持っていく。先刻フォギーが使ったやつだ。

「なんかやだな。匂いなんか嗅いでる」フォギーが顔を顰めると、

「匂いじゃなくて、付着した生体片を調べてるんだと思います」と花琳が応じる。

「調べてどうするの？」

「誰が使ったか、調べてるんでしょうね」画面を凝視した花琳が緊迫した調子で答える。

「つまり誰が鍵のネックレスを持ち出したか、知ろうとしているんだと思います」

「って、つまり、わたし？」フォギーがやや慌て気味に云うと、

「ですね」と花琳は冷然と頷く。画面のなかでは古今亭志ん生が手袋を籐籠へ戻したところだ。

「わたしが持ち出したって、分かっちゃったかな？」

「どうですかね」花琳が首を傾げたときには、鍵の探索者はEdgar Allan Poeの書架から離れて階段を上りはじめている。花琳が発光茸卓をちょいといじると、いままで無音だったモニターから音声が出るようになって、ペタリペタリと草履が合金の板を打つ音が響

き出せば、残酷な運命の到来が想われて、不安の群雲がたちまちフォギーの胸中にたちこめる。画面はまたも蛸お化けの移動となったが、今度は笑う感じには全然ならぬ。

古今亭志ん生は図書室(ライブラリー)を出ると、中央通路をまた歩き出す。無影照明の光に白々とした曲面を晒す硝子繊維の壁と天井、冷え冷えとした暗色の網状樹脂合板の床、そこを扇子で顔をあおぎつつ歩む着物の噺家ロボット。奇怪だ。じつに怖い。かつ可笑しい。恐怖の袋に爆笑のガスがぎゅうと圧縮されたとでも云おうか。顔が強張り、しかしちょっとでもつつかれたら、笑いは爆発、そのまま笑い死にしてしまいそうなくらい怖い。しかも問題はロボットの進む方向だ。このままだと、廊下奥の扉に突き当たって、そこを開ければ吹き抜けの階段ホール。螺旋階段を下ったところにフォギーと花琳がいまいる楕円の部屋の扉がある。

二人はしばらく黙ってモニター画面に眼を据えていたが、フォギーが先に沈黙を破った。

「ここへ来ちゃうのかな」

「may be かもですね」と花琳。

「来てどうするのかな」とフォギーが云い、I don't know. と花琳は応じたけれど、ロボットの目的がフォギーが首から下げた猫の首飾り(ネックレス)にあるのはまず疑えぬ。楕円部屋はむろん施錠できる。とは云え、ID番号と生体認証鍵で開けられるから、地下空間の入口を突き止めた以上、ここへもロボットは簡単に入ってくるだろう。

古今亭志ん生がやってくる。何か御用ですかと訊ねる。首飾りを渡してもらえますかね、と噺家が云う。渡せません、と応じた場合、全体どう云うことが起こるのか。フォギーには見当がつかない。ロボットとは云え、相手は年寄りだ。かりに無理矢理奪いにきても二人ならなんとかなりそうな気もする。気もするが、何か全然違う展開もありそうで――と云うか、そもそも広からぬ部屋で、気心の知れぬロボットと問答するのは、できれば避けたい気がする。

「逃げる？」フォギーが提案すると、

「ですね」と花琳も同意する。昭和平成の女子高生みたいななりをしてはいても、花琳は電子工学の専門家、禿げ頭の年寄りロボットくらいは怖くないんだろうと思ったら、そうでもないらしい。短いスカートから伸びた太ももに鳥肌が立って、整った白い顔からいっそう血の気が失せている。

「さっき電話（フォーン）で聞いたんですけど、落語家ロボットの担当者は、ケープタウンに向かってるみたいなんです」と云った花琳は、他の技術者も全員研究所へ呼び戻されているのだと加えた。

「誰が呼んでるの？」

「ドクター・ヤマハギです。わたしもすぐにケープタウンへ戻れって、メッセージが入ってました」

「じゃあ、戻るの？」と訊いたフォギーの問いには答えず、「扉が開いちゃいそうです」と花琳が云ったときには、モニター画面のロボットは階段ホールに通じる扉前まで到達して認証板（オーテンティフィケーションパネル）をいじっている。

「とにかくLet's go」と云って花琳が部屋を素早く出る。虎柄ビニール手鞄を肩にかけたフォギーも後から続いて、と、そのときミイミイと鳴く猫の声がした。そうだ、子猫のドルフィーだ。

「大変、忘れるところだった」と叫んでフォギーは駆け戻り、壁の張り出しに置いてあった運搬篭（キャリーケージ）の取手を掴んだ。

56

同刻、芯城を乗せた無人「Taxi」は、ハロゲン灯を霧雨に滲ませ、車通りのない本郷通りを山荻邸に近づきつつあった。映像に変じたかのように座席に凝固した芯城は、外景モードにした窓の風景を眼に映しながら、自分がフォギーに会う、その用件につき繰り返し考えていた、と云うより、そのことが、沸騰する湯の底に生じる泡のように繰り返し頭へ浮

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

かんで止まぬ。緊張に輪が強張るのを覚えた芯城は、腰に下げた巾着袋から血流促進の鎮痛薬を取り出して皮膚圧入し、精神安定剤入り飴を口へ放り込めば、しかしかえって不安感は増すようで、そのことを含め本日の出来事をもう一度、鼻面へ掴み出すようにして想起し、丹念に精査しはじめた。

フォギーに会うべき用件。内容ははっきりしていた。すなわち、ある物をフォギーに渡すよう、ある人物から頼まれた、と云うことだ。問題は、この、ある人物だ。すなわち、前にちょっと云いかけたのですが、これは人間ではなくロボット。つまり大山康晴十五世名人アンドロイドだ。

深夜の一時頃、墨水亭の自室で就寝前の詩吟体操をしていた芯城は、大山アンドロイドの訪問を受けた。将棋指し掛けの夜、対局相手が部屋にくる。それもロボットが。芯城の狼狽は無理もないが、用件を聞いてなおさら胸が騒いだのは、まるっこい親指の先に載せた黒い小片を差し出した大山アンドロイドが、これをフォギーに渡して欲しいと芯城に依頼したからである。小片は集積回路の素子（チップ）らしく、和服のロボットは、必ずフォギーに直接渡して欲しい、このことは絶対に他言無用であり、山萩博士にも云ってはならぬと、甲高い早口で云うのだった。

夜中にロボットと二人きりで話をするのは、当然ながら芯城にとってはじめての体験。朝から盤を挟んで対峙した大山康晴十五世名人には、それでなくとも威圧感があった。所

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

詮は機械にすぎぬ。そうは思っても、対面する相手の存在が放つ波動を軀が受けとめる度に、肝がぎゅうと圧搾されるがごとき感覚が生じたのには焦った。ロボット自体の力なのか、大山十五世の威光なのか、どちらとも不明であったが、もし後者だとしたら、二十世紀の昔へ戻って生身の大山名人と対局するようなことがかりにあれば、自分は死んじゃうな、と冗談でなく芯城は思ったりした。ロシアとアメリカを相手に戦争をした二十世紀ニッポン人の気力、体力、胆力に敵わぬのはもちろん、相手は獲得タイトル八〇期の大名人だ。衆人環視の昼間でさえそうだったのだから、まして夜、二人きりでとなれば、肉食恐竜にひと睨みされた小齧歯類（しょうげっしるい）ほどに萎縮してしまい、「フォギーさんにちゃんと渡すように。いいね」と、完全に目下の者に命令する調子のロボットに対し、「は、承知いたしました」と、ほとんど敬礼する感じで、押し頂いた素子（チップ）を端末を兼ねた腕時計のベルトについたケースに納めたあたり、大山康晴十五世名人の威光は、ロボットとなってなお将棋指しには絶対のものがあるのでした。

　大山アンドロイドが去ったあと、芯城が素子（チップ）の中身を気にしたのは当然だろう。なかを見ちゃ駄目とロボットは云っていなかった。そこで素子（チップ）を端末に嵌（は）め込んで恐る恐る開いてみれば、接眼レンズの表示装置（ディスプレイ）には『月下逍遥』の文字が浮かび出た。『月下逍遥』とは何か、と申すなら、これすなわち、谷川浩司十七世名人の作になる伝説の詰将棋集だ。江戸時代、歴代将棋名人はときの将軍に詰将棋の図式を献上したが、このひそみに倣い、

谷川名人は、二〇一一年、『月下推敲』なる図式集を出し、さらに二〇一九年になって、続編として世に問うたのが『月下逍遥』である。

これに「伝説の」と形容詞がつくのは、電子上で出版された直後に「大感染」が起こり、データが消えてしまったからだ。もっとも谷川氏の頭脳には保存されていたわけだが、「大感染」は将棋界の財産とも云うべき棋譜データの消失と云う惨事をもたらし、後援者の撤退なども重なって、壊滅の危機に瀕した将棋界を再建すべく、先頭に立って獅子奮迅の活躍をしたのが、誰あろう谷川十七世名人。結果、自作の図式集など出している暇がなく、加えて谷川氏自身が『月下逍遥』には不満があって、手直しをしたりしているうちに世に出す機会を失ってしまったと云う。そもそもどれほどの難問でも電脳がナノ秒レベルで解いてしまう状況下、詰将棋なるジャンルそのものに人々が情熱を傾けなくなった事情もあったらしい。

かくて『月下逍遥』は世に出ぬまま忘れられていたが、「大感染」より前、あるパーティーで配るべく、問題篇だけが一〇〇部ほど紙冊子に刷られ、これも散逸していたが、なかの一冊を、すなわち七〇年前の紙本を、山萩氏が探し出した。墨水亭で大山アンドロイドが解いて過ごした詰将棋集と云うのがこれである。今回の企画は実力制名人戦一六〇周年と銘打たれて、目玉はもちろん大山vs.忍城の対局だが、大山アンドロイドが墨水亭の客室で独り静かに繙く幻の図式、谷川浩司十七世名人作『月下逍遥』、と云うのも話題作り

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

に一役買う予定なのでした。

『月下逍遥』を山萩氏が入手したのは一年ほど前、しかしすぐには公開されず、Morgan-JFS 銀行日本橋支店の金庫に保管されて、対局の今日になって白手袋の係員がものものしく運んできた。貴重な紙本であるのはたしかだけれど、大袈裟すぎる感じはあって、これもつまりは話題作り。フォギー、芯城と夕食を共にした「SPEC 企画」の篠井——剝上頭（スキンヘッド）にメアンドロス模様の刺青を入れた元冒険家曰く、どんな物でも貴重品扱いすれば貴重品に変じる、と云うわけで、事実、将棋にあまり詳しくないネットニュースの記者連中は『月下逍遥』につき熱心に取材していた。

その『月下逍遥』が大山アンドロイドから渡された素子（チップ）に入っている。このことはべつに不思議ではない。大山アンドロイドが紙本から写（スキャン）したのだろう。ざっと調べてみると図式は一〇〇題。どれも趣向たっぷりの難問揃い。試しに第一番を少しだけ考えてみたが糸口すら摑めぬ。詰将棋集と云うのは普通、問題篇と解答篇があって、解答篇では詰手順のほかに趣向の解題が書かれるのだけれど、述べたように、紙本の『月下逍遥』は問題篇しかなく、これを大山アンドロイドが古い紙の頁を捲りつつ「史上はじめて」解く、と云うのも話題作りの一環。実際素子（チップ）のなかには「解答」のアイコンがあって、これが大山アンドロイドが解いた詰手順なんだろうと思いつつ視線（アイ）クリックすると、施錠を示す鍵のアイコンが現れ、妙なメッセージ表示が出る。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

い。

——因式の解答をあける鍵は Miss Poppy が持っていません。彼女はあいつを捨てた。

これはどういうことだ。大山アンドロイドが『月下密室』の謎解き、一瞬を解いたのは疑えなかった。彼に内蔵された電脳ならば、ほとんど自分を捨てる速度で解いてしまうはず。事実「解答」のフォルダは出来ているわけだ。だが、どうして施錠されているのか。しかも解錠の鍵を持つのがフォゾーとは？

フォゾー本人に問い合わせることを忍城は考えたが、電話線遮断された場末から出られぬ以上は無理。大山アンドロイドの部屋を訪ねて、どういうことなんでしょうかと訊ねるのはもっと無理。あの牛乳瓶底眼鏡の奥からじろり睨まれるのは怖い。比喩でなく寿命が縮む。忍城はあれこれ考えるのをやめて寝ることにした。睡眠不足では明日の対局に差し支える。睡眠導入剤を嚥んで寝台に潜り込み、眠りに落ちたと思ったらすぐに起こされたのは、すなわち大山アンドロイド破壊事件が持ち上がったからだ。

ふらつく足取り、呆け顔で、捜査官の尋問を受けた忍城は、当然この件を申告すべきであった。かりにわたしに何かあったとしても、他言無用の約束は守るように。いいね、と大山アンドロイドが命令していたのを思い出せば、彼は自分が破壊されるのを予想していたようにも思われて、その辺りを含めて捜査陣には報せるべきであった。なのに忍城は黙っていた。なぜか。大山アンドロイドが他言無用を厳しく要求していたことはむろんあ

った。しかしそれは理由にならぬ。

捜査官と対峙した際、志城はむしろ午前一時頃に、つまり大山アンドロイドが破壊さるべく風呂場へ向う直前に、当の大山アンドロイドの訪問を受けた一件を進んで話す気でいた。洗いざらい喋る気でいた。そのあと架空墓で会ったフォギーにもこのことを話したいと思い、ホテルの部屋で山秋氏のインターフェースと対面した際にも、まずはこの不可解な出来事を報告しようと考えた。にもかかわらず、志城はそうできなかった。これはじつに奇妙な事態であった。大山名人の威光に畏れ入り、魂が奴隷のごとくにひれ伏した、というだけでは説明がつかぬ。

催眠術ではないか。そう思いついたのは、山秋邸に通じる道路へ無人Taxiが入ったときだ。一度そう思えば、墨水亭で対面した大山名人の、硝子の厚い丸眼鏡の奥で、鱗のない沼の生物みたいに、にろり光ったタニシ目がぐぐいと脳裏に迫って、何とも形容し難い、居心地の悪い体感が身内に甦った。超短波を被験者の脳波に同調させ、催眠暗示を与える医療用の機器があると聞いたことがある。これの悪用が社会問題化されたニュースを見たこともある。と、考えたときには、思いつきは確信に変わっていた。いまどきの電子機器は超小型化されているから、ロボットに内蔵するのは容易だ。なぜそんなことをする必要があったのか、それは分からぬが、大山アンドロイドから『月下貴遙』の素子を預かったこと。そうしてそれをフォギーに渡すこと。これらは他に漏らしてはならぬと、自分

は強い暗示をかけられていたのだ！

意思に反して行動を規制される。人間これくらい不安なことはない。当然ながら芯城は不安になり、嫌な気になったが、生身のフォギーに会って素子（ナップ）を渡しさえすれば、暗示は自然に解かれるとの確信が一方にあった。今夜のうちにフォギーに会いたいと願ったのも暗示ゆえに違いなく、たしかにそうでもなければ、出不精の自分が、深夜、と云うか明け方、まして雨のなか、わざわざ出かけるとは思えぬ。今夜どうしてもフォギーに会いたい。そう思ったときには、自分のなかにそんな情熱の火があったのかと、新鮮な驚きがあったのだけれど、早い話が催眠暗示。芯城は苦笑した。薬物等で脳に働きかけ、「気持ち」を人造することはもはや日常の営み。芯城はすっかり慣れているのでした。

しかしそれはそれとして、全体はなお不可解だ。なぜ自分がロボットの使い走りをしなければならぬのか。いや、そもそもどうして大山アンドロイドは破壊されてしまったのか。あれこれ考えれば苦笑どころではない。とにかく生身のフォギーに会い、素子（ナップ）を渡し、暗示が解けたところで順を追って考えるしかない、とそのように頭を整理したとき、ちょうど無人「Taxi」が山萩邸の前に停車した。と思ったら、当のフォギーが山萩邸の門戸を潜って出て来るではないですか。おう、なんという偶然！　間のよさだ。やはり自分とフォギーとの間には運命的な何かがあるのかもなどと芯城が柄にもなくロマンチックに考えたのは、昨日来いろいろな出来事があって神経が興奮していたせいだと思われます。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

一方のフォギーは、花琳に続いて楕円室を出ると、機械室の扉を開け、中央通路の一層下になる狭い通路を逆に駆け、突き当たりの梯子を上れば、防疫服やら防護マスクやらの収納された区画で、そこを出たところが地下空間の出入口。内側からはごく簡単な認証で扉は開いて、階段を上がって母屋へ戻り、玄関から庭を過って表門を出たところで、目の前にちょうど無人Taxiが止まり、開いたドアから芯城が手を振っているのが見えたのだった。

Good timing！花琳が声を発し、二人は無人Taxiに乗り込んで、Go！の指示で自動車は黎明の街路を走り出した。

57

二〇分後、硝子卓（クリスタルテーブル）に置かれたシリコン樹脂の食器台（コースター）、その砂色の円盤に載った黒い艶消しの四角い小片を、フォギー、花琳（ファリン）、芯城の三名は雁首並べて眺めていた。

素子（チップ）の中身については、花琳、フォギーと順番に端末へ繋いで確認済み。もちろん二人にとって詰将棋などは、だからそれがなんだって云うわけ？ と、つい乱暴な口をききた

くなるほど無縁なものだったけれど、大山アンドロイドがフォギーに渡すよう芯城に命じ、しかもなかに「図式の解答をあける鍵はMiss Foggyが持っています。彼女にあけてもらって下さい」のメッセージが書き込まれてあるとすれば、この変哲のない記憶素子(メモリーチップ)が謎を解く鍵であることは疑えず、しかし困るのは、そもそも何が謎であるのか、それ自体が判然とせぬことだ。ヒントが出たはいいが、肝心の問題が分からぬようなもので、事態は混沌とするばかり。しかもフォギーと花琳は、大山アンドロイド破壊事件の顛末をはじめて知らされて驚倒、逆に芯城は大山アンドロイドが封じ手用紙の裏に記したメッセージ、および山萩邸へやって来た古今亭志ん生アンドロイドの件を教えられて仰天、さらに花琳からは、モリキテックの研究所や工場が、ドクター・ヤマハギの不可解な指示の下、大混乱に陥っているとの報告もあって、架空墓(ヴァーチャルトゥーム)の狂乱ぶりとあわせ、混迷はいよいよ度を増す一方となりゆく。

三人がホテル景雅園へ戻ったときには夜が明けかかっていた。玄関からロビーへ入ったとたん、待ち構えていた警察官に芯城がこっぴどく叱られたのは、無人Taxi内で花琳が電磁波攪乱(スクランブル)をかけたために、芯城の位置情報が途切れたせい。警察官とか警備員とか云う職種の者が、監視の「眼」から人が消える電磁波遮断(ウエーブカット)を嫌うのは分かるが、そんなに怒らなくても、と思うくらいに制服の警官は語気荒く、一方の芯城は芯城で、あんなにヘイコラしなくてもいいのにと、傍が呆れるほど平身低頭、ようやく解放されて、それからフォ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ギーの温泉へ集合。念のためここでも電磁波撹乱をかけたうえで（ホテル内にいると分かれば警察も安心する）、花城と花弥が緑茶、フォギーが麦酒を飲みながら、情報交換および情勢分析をはじめたのでした。ちなみに花城はロボットの設計意匠に助言をした関係で、花弥とは以前からの馴染み。身数個あったお茶請け和菓子の、最後に残った一つをどちらが食べるか、じゃんけんで決めるくらいの親しさ加減。

不可解事はあれこれ取り揃ってはいたけれど、フォギーの目下の心配事はなんと云っても、お今亭志ん生アンドロイドの動向だ。朝、寝台で眼を覚ましたら、禿げ頭の年寄りロボットに覗き込まれていました。では、気色が悪すぎる。これについて花弥は、ロボットが許可なく街路をうろついている理由は分からぬな。このホテルは五つ星。警備はしっかりしているはずだから。身元不明のロボットが館内へ侵入することはありえないと、きっぱり断言した。

一日一緒に過ごしてみて、花弥の断言は必ずしもあてにならぬとは思ったものの、たしかに怪しいロボットを漫然と客室へ通すようでは一流ホテルの信用は台無しだ。警察に通報した方がいいのではとフォギーが提案すると、Hmmmmm と呟いた花弥ははっきりしない。ロボットが勝手に動き回っている件を、花弥はミリキテックの担当には報せた。ところが、ケープタウンに戻った担当は、お今亭志ん生の案から外されていて、では誰が新担当になったのか。はっきりしないのだという。

「アンドロイドのことは、社外の人間には何も話しちゃ駄目だって、上から命令されたんですよね。とくに警察関係とかには」
花林にも会社への忠誠心が少しはあると見える。「でも、わたしたちが通報しなくても、すぐに捕まると思いますよ。会社が放っておくはずないし、だいたい見るからに怪しいですからね」
怪しいのはたしかにそうだ、とは云え、世の中には、宇宙花魁だとかカンガルー侍だとか、訳の分からぬコスプレで街中を闊歩する数寄者もあるから、案外見咎められぬかもしれぬ、などと考えたフォギーが、雨に煙る早朝の舗道、袖に手を入れ、泥濘を高履で踏みそぞろ歩く鬱金の着物を思い浮かべていると、それより鍵のことです、と花林は云って、素子の載った食器台を眼の高さまで持ち上げた。
「師匠が持っている鍵と云ったらあれしかないですよね」
花林がいうあれとは、つまり図書室の『赤き死の仮面』に挟まれていた首飾りだ。促されてフォギーが首から外したのを掌に載せた花林は、猫の飾り片を両の目玉を中央へ寄せるようにして検していたが、すぐに、あ、と声をあげた。
「どうしたの?」
「開くようになっている」と応じた花林が金色に塗った爪で猫飾りの裏面をはじくれば、なるほど、全体が蓋になっていて外れる。花林はライトを引き寄せ、蓋の外れた空隙を熱

心に調べる。こうした際の花琳は、電子工学の専門家たる自信と鋭さが漲り、頼もしい。

一方、ジャージー編みの上下を着て藺草椅子にちんまり正座し、掌に包んだ信楽焼から緑茶をずずずと啜る菫髪の芯城は役立たずの色が濃い。

「銀は外に貼ってあるだけで、なかの材質は木材みたいなんですけど、素子がちょうど入りそうな空間があります」と花琳が報告した。「だけど、ただ穴があるってだけで、電子的接触は何もないですね」

「て、つまりどういうこと？」

「ただの穴だってことです」

「入れて、どうにかならないの？」

「なりません」

とは云うものの、いちおう入れてみようと云うことになり、花琳が指でつまんだ素子を猫の飾り片の中へ収め、かちりと音をさせて蓋を嵌める。それから再び食器台の上に安置した首飾りを、六個の目玉プラス二個——と云うのは運搬籠から出されたドルフィーのを加えてだが、計八個の目玉で眺めたけれども、別段何が起こるわけでもない。猫の頭に嵌った黒い石は卓上灯の光を浴びて一向に輝かぬ、どころかかえってくすむようだ。

「どうなったの？」フォギーが問うと、

「どうにもなりません。穴に入れただけですから」

「でも、素子が入るようにはなってるんでしょう？」
「なってはいます」
「なら何かあるんじゃ？」
「ないですね。木に開けたただの穴ですから」と花林は大問題をあっさり片付けると、首飾りを食器台ごと硝子皿に放置したまま、「それより問題は」と別方面へ話題を移した。
「大山アンドロイドの謎の行動です。彼がホテルに運ばれたのが朝の七時一〇分」とはじめた花林は、昨日のロボットの動きにつき、フォギーと忍城の話を確認しつつ整頓しはじめた。と、そのうちにメモがあった方がいいとなり、普通ならそれぞれの端末に表示すればいいわけだが、電磁波撹乱下ではできない。そこで花林がフォギーに命じて、鉛筆型の眉墨を化粧袋から出させ、壁にいきなり字を書き出したのには、フォギー、忍城ともに深甚な衝撃を受けた。客室には自動清掃システムが組み込まれている。少々の傷くらいなら修復するのであり、まして眉墨の粒子などは時間がくれば消えるのであるとの花林の説明を聞けば、それはまあそうだと納得はできたものの、ホテルの部屋の壁に字を書いてよいという感覚は二人にはなく、世代の相違なのか文化の相違なのか、そのあたりは不明です。
で、花林が壁に必要事項を英語でメモしていったのだが、遺憾なことに字が下手すぎた。この際はべつに下手でも構わないわけだけれど、解読が線文字B以上に難しいのではどうしようもない。フォギーも字の下手さ加減については人後に落ちぬだけの自信はあ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

る。と云う次第で、芯城が書記を受け持つこととあいなり、結果、書かれたのがただ。

7:30　ロボットが舞浜工場から景雅園に到着。
8:45　ロボットが墨水亭に入る。
9:00　将棋対局開始。
18:30　ロボットが封じ手。裏面に謎のメッセージを書く。
20:43　ロボットがフォギーに封じ手用紙を手渡す。
21:00　ロボットが休止状態となる。
25:00　ロボットが動きだし、部屋を出る。
25:02　ロボットが芯城の部屋を訪れメモリーチップを渡す。ロボットはそのまま風呂場へ。
25:58　破壊されたロボットが風呂場の脱衣場で発見される。

将棋指しだけあって、と云うのはあまり関係ない感じもあるが、芯城はなかなか字が上手い。少なくともちゃんと読めるのが偉い。かくして白板（ホワイトボード）代わりの壁を眺めた三人のあいだで、何が謎だかよく分からぬままの謎解き、と云う、なんだか不思議な議論が、運搬籠から出され遊び回るドルフィーからときに邪魔されつつ展開されたのだった。

「大山アンドロイドが墨水亭に入ったのが午前八時四五分」
寝台(ベッド)の上で、短いスカートから伸び出た脚を、人間工学的見地からして妙な具合に畳んだ花琳が、芯城の書いた文字を眺めて発言した。
「それから夜中の一時過ぎに壊されるまで、大山アンドロイドは一度も墨水亭から出ていない。電磁波遮断領域(ウエーブカットエリア)内にずっといたことは、多数の証人がある点から間違いない。したがって、その間、彼は外部とは一度も繋がっていないことになる」
口調がネットドラマの探偵みたいなのが可笑しいが、昨日から今日、ずっとフォギーと一緒にいて日本語を使ったせいか、花琳の日本語は一段と上手になっている。たいしたもんだな、とフォギーが感心するうちにも花琳は先へ進んでいる。
「つまり大山アンドロイドの謎の行動はどれも、墨水亭に入る前にあらかじめ命令(コマンド)されていたことになる」
「謎の行動って？」フォギーが確認の意味で入れた間の手に花琳はすぐに応答して、芯城

がまた律儀に壁に書く。

(1) 封じ手用紙にメッセージを書いてフォギーに渡す。

(2) 『月下逍遥』の解答とメッセージをメモリーチップに書き込み、フォギーに渡すよう芯城に依頼する。

(3) 風呂場へ向かう。

「このうち(1)は、メッセージの文章からして、最初は芯城八段から渡してもらうつもりだったんだけど、たまたま師匠が墨水亭にいたので直接渡したと」

花琳が註釈すると、芯城が封じ手用紙を見たいと云うので、フォギーは手鞄から出してやった。そうしながら、

「でも、たまたまわたしがいたからって、自分でそう云うふうにアドリブで判断できるの、ロボットって？」と疑問を口にすると、

「それくらいできますよ」いかにも心外だと云うふうに花琳は応じ、環境因子の解析システムがどうの行動経路の綜合化がこうのと、小難しい用語を使って解説したが、もちろんフォギーの脳髄までは届かず。

一方、[illegible]封じ手用紙に目を[illegible]たまま、ノウカ、ノウカ

と指を小刻みに動かせている。なにか分かったの？　フォギーが声をかければ、北城は「封じ手が四歩だったので」と応じ、さらにまた黙々と俯いているのは、将棋のことを考えているらしい。たしかに対局相手の北城からすれば、大山名人の封じ手が気になるのは自然だろう。

「変な手なの？」と訊けば、いや、と直ちに否定した北城は、「ちょっとは考えたけど、かなり意外というか。しかし、たぶん、いい、というか。これは相当な手なのかも」ともごもご口中でぶつってなおも考え込む。北城、人に代表させるのもなんだが、将棋指しというのはどうでもいいことを愚図愚図考えるのが得意な人たちらしいとフォギーが観察していると、今度は花琳が、もう一度メッセージを確認したいと云い出して、用紙を北城から奪った。赤いインクのメッセージは、あらためて、こうだ。

my funeral　すぐに　はやく
pianoを　千駄木で　だれにも知られずに　keyは乱歩訳
『赤き死の仮面』にあり――
このmessageをMiss Foggyにかならず手渡しで　だれにも知られずに　T.Y.

「要するに(インショート)、ですね」封じ手用紙にしばらく目を落としていた花琳が口を開いた。「大山アンドロイドの(1)および(2)の行動は、ドクター山萩の命令だったと考えていい」

そう結論づけた花琳は、入院中のスイスの病院から電脳網(ネット)経由で舞浜工場まで「来て」、最終調整をやったのが山萩博士であった点からしてもそれは疑えないと付け加えた。

「つまりドクター山萩は紙のメッセージと素子(チップ)、二つのものを師匠に渡したかった」

「でも」と双子寝台(ツインベッド)の片方に腰掛けたフォギーは花琳を遮った。「どうして大山アンドロイドは、メッセージを渡したときに素子(チップ)も一緒に渡さなかったのかな？　両方渡せば早いわけでしょう」

「まあ、素子の方は準備ができていなかったとか。詰将棋って、そんな簡単ではないので

はっ？」花琳が芯城に水を向けると、壁の下の椅子に座って、膝に乗ってきた子猫をからかうでもなく凝っと眺めていた将棋指しは、もちろん簡単じゃないと応じた。
「しかし大山アンドロイドなら一目。ほぼ頁を捲る速度で解くけどね。全部で一〇〇問だから一問二秒として、二〇〇秒」
「芯城八段なら？」
「芯城八段なら」フォギーの問いを鸚鵡（おうむ）に返した芯城は、「一問に一年くらいかかるのもあったりして」と冗談めかし、はにかむような笑いが浮かんだ空豆顔がフォギーは嫌いじゃありません。
「どっちにころんでも、フォギーさんに封じ手用紙を渡した時点で、大山名人は『月下逍遥』を全問解いていたに違げえねえ」と芯城はなぜだか急に江戸っ子弁になって断じた。
「それを記憶素子（メモリーチップ）に書き込むのにも時間はかからない」と花琳が補足するのを聞いて、そもそも素子（チップ）はどこにあったかとフォギーは質問した。
「アンドロイドの腰のところにある端末ステーションです」花琳が即答する。
「外部記憶関係（エクスターナルストレージ）は全部そこで処理される。素子（チップ）を入れたのはたぶんドクター山荻」
「取り出したのは？」
「大山アンドロイド。自分で取り出せますから」
「だったら、どうして封じ手用紙と一緒に渡さなかったのかな？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

　花琳は黙ったまま硝子卓の首飾り(ネックレス)へ目をやった。とたんにドルフィーが芯城の膝から下りて寝台(ベッド)へ這い上り、そこからぴょんと硝子卓へ飛び移って、首飾りに鼻面を寄せてくんくんする。

「あの素子(チップ)には」と花琳が口を開いた。「他にも何か処置が加えられているのかも。というか、きっと処置がされているんだと思います。ただの詰将棋だったら師匠に渡してもしょうがないですから。その処置をするには時間がかかった。あとで詳しく調べてみますけど。しかしあるいは」

「あるいは、なに？」

「師匠に渡すと失くしちゃうと思ったのかも」と冗談めかして花琳は三日月目をいっそう細くして笑ったが、たしかにあれだけ小さな物となると、失くさないだけの自信はフォギーにはない。

「とにかく問題は、どうしてそんなやりかたで、ドクター山萩が師匠に連絡をとったかです」真顔に戻って花琳は続けた。「電磁波遮断領域(ウェーブカットエリア)内でロボットにメッセージを紙に書かせる。これはつまり電脳網(ネット)に捉えられたくなかったからだと考えられる」

　山萩博士が電脳網(ネット)に捕捉されずにフォギーに何かを伝えたいとして、あり得る方法としては、直接生身(リアル)で会う、パルプ紙の手紙を書く、と云った非電子的な通信手段をとるしかないが、スイスの病院にいる山萩博士にはそれはできなかった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「それで自分の肉体を動かす代わりにロボットを使ったと？」芯城が云うのへ、ですね、と花琳は深く頷いた。

「なるほど」とこちらも頷いた芯城が続ける。「しかし、山萩博士はどうして電脳網(ネット)に捉えられたくなかったんだろう？」

「それはですね」と封じ手用紙の文字に再度目を落としてから花琳ははじめた。「お葬式を早くやってくれって云うメッセージは、要するに、架空墓(ヴァーチャルトゥーム)のなかの自分を早く消去してくれって云うことだけど、それを電脳網(ネット)通信で師匠に伝えると、架空墓(ヴァーチャルトゥーム)のなかのドクター山萩に知られちゃって、葬式を妨害されるかもしれないから」

「ちょ、ちょっと待って」とそこでフォギーは介入した。「架空墓(ヴァーチャルトゥーム)のなかのドクター山萩って、それは分身(アヴァター)なわけで、つまり山萩さん本人なわけでしょう？　スイスかどこかの病院にいる」

「そうです」

「だったら知られるも何もないわけで」

「そこなんです」噴き出る熱を押さえ込む調子で花琳は云った。「ここからはわたしの仮説なんですが、ドクター山萩はすでに狂っているんだと思います」

「狂うって、どんなふうに？」

「それは分かりませんが、少なくともわたしたちが知っているドクター山萩の人格はなく

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

なっちゃっている」

　たしかに狂騒状態と呼んで過言でない混乱下にある架空墓、ことに『大正池』に携帯電話で連絡してきた山荻氏の怪しい気色を回想すれば、花琳の云うことは的外れではないとも思える。

「それで、山荻博士はどうしてフォギーさんにメッセージを？」と忘城が問うたのへ花琳は答える。

「ドクター山荻は自分がまもなく狂ってしまうことを予想したんだと思うんです。いまは脳の地図が精密になっていますからね。いつ頃の時点で、どこがどう駄目になるか、かなり正確に把握できる。だから正気のうちに手を打った。狂っちゃって、もはや自分とは云えない自分が架空墓に居ることにドクター山荻は耐えられなかった。だからお葬式を師匠に頼んだ」

　山荻博士の「狂い」が誰の目にも明らかになれば、外部との接続は切られるだろう。そうでないと、おかしくなった山荻氏が電脳網をうろついてしまうことになる。いわゆる電脳徘徊老人と云うやつだ。一般に回復不能なまでに老化し人格の壊れてしまった人に対しては、身寄りが電脳網との接続を切る。それでふつうは問題は片付く。本人があくまで切断を拒む場合は（よくあることだ）、医師と地方裁判所の判断があれば強制的に切断できる。老耄者は電脳世界から離脱し、現実世界で死を待つ。だが、山荻博士が架空墓

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

に残るべき「自分」を、半ば狂った状態でデザインしたらどうなるだろう。山萩氏の死後も半永久的に、AI制御されたおかしな「山萩博士」が墓に居続けることにならないか。

「それがドクター山萩には耐えられなかった。そもそもドクター山萩は墓に自分の像を残すつもりはなかったわけですからね」

ケープタウンの研究所内、海棠が舞い散る『六甲山』で最後に話した山萩氏の佇まいを回想して、フォギーは深く頷いた。

「で、実際にドクター山萩の予測通り、昨日の朝、舞浜で大山アンドロイドに指令を与えたあと、夜になるまでのあいだにドクター山萩の脳は壊れてしまった」とそこまで花琳が述べたとき、TBUの可能性はないかな、と芯城がいままでにない声調（トーン）で介入した。

「山萩博士の架空墓（ヴァーチャルトゥーム）がもともとTBUを前提に作られていたのは間違いねえ。人格を完全に――と、いくかどうかは分からねえが、とにかく全人格を電脳内に写しとって、疑似現実環境で永遠に生きるってわけで、しかし山萩博士は途中でその気が失せた。ふつうに死ぬことにした。と思っていたところが、脳に狂いが生じた段階で、TBUの処置を受ける気になっちまった、というのは？」

芯城はどうやら集中して思考すると江戸っ子弁になるらしい。しばしの沈黙ののち、花琳が、あるかも、とぽつり呟く。脇棚（サイドボード）からヱビスの瓶麦酒（ビール）を出し、変温グラスに注いだフォギーが次に口を開いた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「でも、狂った脳を移したんじゃ、まずくない？」

「まずいです」と花琳が即答する。「だからこそ、正気の山萩博士は、自分がおかしくなって、結果、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）に現れるであろうクレージー山萩を消去しようと考えた」

クレージー山萩！　なんだかキュートだな、とフォギーは可笑しくなったけれど、狂騒の架空墓（ヴァーチャルトゥーム）を体験してきた身には、クレージーの標語（タイトル）はなるほどふさわしく思える。

「と云うことは、『大正池』の携帯電話（セルフォーン）でわたしが話したのは、クレージー山萩だったわけ？」

「たぶん」と花琳が頷く。

「でも、ＴＢＵって、やりたいです、って云ったからって、そんなに簡単にできるものなの？」とフォギーは別の質問をしてみた。

「ドクター山萩なら可能だね」と志城が応じる。「もちろんドクター山萩にそんな気はなかった。しかし、正気を失った自分ならＴＢＵをやりかねないと予想したんじゃないかな。架空墓（ヴァーチャルトゥーム）はもともとそのために作ったんだしね。それで自分が狂う前に手を打っておいた」

「あるいは、誰かがドクター山萩に断りなく、彼の頭脳を惜しんでＴＢＵをやった可能性もありますね。それを正気のドクター山萩は予想していた」と花琳が顎をつまんで云った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「その場合だと、クレージーにはならないんじゃないの？」とのフォギーの問いに花琳は顎をつまんだまま応じる。

「TBUは未完成の技術ですからね。写しとられた人格がクレージーでもおかしくないです。とにかくですね」と素早く花琳は語を継いだ。まだ正気を保っていた山萩博士は、自分の狂いを予感し、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）に出現すると予想されるクレージー山萩を消去すべく、フォギーに連絡しようと考えた。しかし電脳網（ネット）を経由したのでは、痕跡が残って、クレージー山萩にメッセージの中身を知られてしまう。それで電磁波遮断領域（ウェーブカットエリア）内の大山アンドロイドを使った。

「と云うことは、大山アンドロイドを壊したのは、クレージー山萩ってこと？」フォギーが問えば、違いますね、と花琳は首を横へ振った。

「クレージーじゃないドクター山萩だと思います」

「え、なんで？」意外に思ったフォギーへ花琳は淡々と説明する。

「電磁波遮断領域（ウェーブカットエリア）からロボットが出ちゃえば、クレージー山萩に電脳網（ネット）を通じて操作（オペレート）される危険があるから。実際に古今亭志ん生アンドロイドはそうされているわけで」

「あれって、そうなの？」またも意表をつかれてフォギーが声をあげれば、花琳は落ち着いた顔で頷く。

「クレージー山萩からロボットがいいように使われるのをドクター山萩は避けたかったん

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

です。考えてみれば、お風呂場にある電源程度で中枢回路を破壊するには、かなりの知識がいるわけで、でも、ドクター山荻なら当然できます」
「つまり大山アンドロイドは、自分で自分を破壊するよう指令を受けていたと」芯城が菫髪を掻きあげつつ云う。
「そうです」と花琳は頷き、
「つまり自殺みたいな？」とフォギーが云ったのへは、
「正確には違いますが、比喩的にはそうですね」と応えたきり、しばらくは口を開かない。芯城も同様だ。バスルームの方へ遠征していた子猫のドルフィーが戻ってきてニャアと一つ鳴く。フォギーも黙って考え込んだが、その時間の大半は、麦酒が冷たすぎるので、変温グラスの温度設定変更に費やされていたことをほかの二人は知りません。
「たしかにそれならば」と芯城が沈黙を破った。「密室の謎は解けるな」
「ええ」と簡単に応じた花琳が続ける。「でも、そんなことより、ドクター山荻の指示通り、クレージー山荻を早く消さないとまずいかも」
「たしかにおかしな自分がずっとお墓に残ってちゃ、格好悪いし、気の毒だわね」フォギーが同意すると、そんな呑気な事態じゃありません、と花琳は鋭い調子で云った。
〈架空墓〉だけならたいしたことないけど、いまやクレージー山荻がモリキテックの研究所や兵器工場なんかを勝手に使っちゃってるんです。あそこにはロボット製作の

がありますから」
「どうなるの？」
「赤ん坊ロボットみたいなのがどんどん出来ちゃうかも」
大勢で行進する黄金の着物を来た禿げ頭ロボット。ざ、ざ、ざ、と鳴り渡る高尾の響き」フィザーは麦酒を一口飲んでいった。
「それはファンキーかも」

CHAPTER

5

Dream Team of Jazz All Stars!

CamScannerでスキャン

59

日本現地時間(ローカルタイム) a.m.6:00。ホテル景雅園本館二二階、ツイン客室2215号室、麦酒(ビール)からウイスキーに換えたフォギーは、常ならぬ異常事に遇して酒飲みの本性を露にし、さらにいっそう調子を出しつつあった。

酒飲み女ジャズピアニスト、二十世紀サブカルマニアの将棋指し、日本女子高生(JJK)コスプレの天才工学少女と云う、奇妙と云えば奇妙なとりあわせの三人の議論はそれからもしばらく継続して、架空墓(ヴァーチャルトゥーム)内の山萩氏の意向にかかわらず彼を消去すべきだとの結論がいちおう得られた。方法も明らかで、つまりは葬式だ。フォギーが架空墓(ヴァーチャルトゥーム)のベヒシュタ

ノで『Farewell to Papageno』を弾く。[illegible]消せるのか。もしクレージー山萩が墓を占拠しているのだとしたら、とっくに葬式などは無効化されているんじゃないのか。事実、クレージー山萩と目される携帯電話の人物は葬式の件を知っている様子があったではないか。

フォギーの疑念に花琳（ファリン）は、葬式については、山萩博士――正気の山萩博士が巧妙に設計しているはずだから、クレージー山萩は簡単には変更できないはずだと断じた。

「プログラムへの接続（アクセス）にはたぶんベーカー＝ロジェック量子暗号が使われているんだと思います。その場合、ケープタウン研究所の汎用電脳（コンピューター）をフル稼働しても、解読には一〇〇年以上かかる。クレージー山萩にできるのは、せいぜいピアノの鍵を隠すことくらい」

「でも、鍵がないとピアノは弾けないし」

「どこかにあるはずです。鍵自体を消去はできないはずですから」

「どこにあるの？」

「『key は乱歩訳「赤き死の仮面」にあり』。このメッセージにヒントがあるとは思うんだけど」と花琳が封じ手用紙をまた手に取って、やや声調（トーン）を落としたところで、今度は芯城が、素子（チップ）の方はどうなんだろうと云い出した。たしかにあの記憶素子（メモリーチップ）にはどんな意味があるのか。

フォギーは食器台（コースター）に載った、飾り片（ペンダントトップ）の裏に素子（チップ）が嵌（は）まったままの首飾り（ネックレス）を見やり、「や

っぱりあれがピアノの鍵なのかな」と云ってみたが、これを素通りして芯城が続けた。

「『月下逍遥』の意味は何なのか。何の意味もなく、フォギーさんに渡せと山萩博士が指示するはずがないし。その辺はどうかな？」と花琳に問いかけると、日本女子高生の格好をした工学博士は、そうですニャア、と応える。

「やっぱりピアノの鍵と関係あるんじゃないの？」と次にフォギーが問えば、かもですニャア、とまた返事がある。

なにゆえ語尾に「ニャア」が付くようになったのか？　不審に思っていると、花琳が両手の指を猫風に丸めて寝台にころんと倒れたから驚いた。フォギーは硝子卓のネックレスを鋭く見た。もしやあの素子は人を猫に変える特殊電波を放つのではあるまいか？　恐怖、猫光線！　フォギーは一瞬間動転しかかったが、そんな訳はなくて、要するに花琳は疲労困憊、完全に電池切れなのでした。

寝台で猫よろしく丸くなった花琳は、あとは何を話しかけてもニャアニャア云うばかり。一度寝かせないことには使い物になりそうになく、疲労と云うことなら、朝から対局だった芯城も同様で、むしろ日頃は飼い猫レベルの活動力しか示さぬフォギー一人が妙に元気だったけれど、二人を無理矢理引きずることもできず、とりあえずいったん寝ようとの芯城の提案に従った。

芯城は自室へ戻る。花琳はそのまま部屋の寝台に寝かせて、では自分も寝ますかとフォ

ギーは呟いたものの、なぜだか気持ちが高揚してしまって、とても横になる気にならぬ。いままで飲んでいた実績はいったん脇へおき、ここはやはり寝酒だろうと、ウイスキー・ソーダとチーズ盛り合わせをルームサービスで頼んだあたり、普段は冬場の熊みたいに不活発なくせに、何か特別なことがあるとやたらはしゃぎ回る人があるものだが、フォギーがその好例なのでした。

　クレージー山萩の消去。なるべく速やかにやった方がいいと云うことだが、ベヒシュタインの鍵の在処（ありか）が分からぬ以上、とりあえずすぐにはどうしようもない。それどころか、独りであれこれ考えていると、全体がひどく馬鹿げているように思えて、先刻までの切迫感は淡雪のごとくに消え去り、なんだか笑えてきてしまう。可笑しくもないのに笑いが漏れ出るのは疲れている証拠、しかし脳神経は油茹での唐辛子のごとく、ひりひり発熱してやまぬ。冷却（カームダウン）にはまずは酒だ、酒。あとは、と、2Dモニターのスイッチを入れた。

　で、再び日本現地時間（ローカルタイム）a.m.6:00。ホテル景雅園の本館二階、ツイン客室22-15号室、日本女子高生（JK）の衣装のまま、靴下も脱がずに寝台（ベッド）で猫然と丸くなった花琳を横目に、フォギーはウイスキーを飲（や）りつつ2Dモニターを眺めていると云う次第。

　客室には3Dの映写装置もあるけれど、ドラマにしてもスポーツ観戦にしても3Dは疲れるわけで、ましてや双方向（インタラクティブ）番組などは論外。こうした際は2Dが気楽だ。それも画素（ピクセル）数を大幅に落として。壁モニターに映し出された番組は『へら鮒刑事II』。朝日ネットトチ

ャンネル製作の、紀行番組風味のB級アクション刑事ドラマ。釣り好き刑事が行く先々の名物など食しつつ殺人鬼を追いつめていくシリーズだ。可変ゲル椅子に寝そべる格好になったフォギーは、傍から見ると半分眠っているようだが、これは普段からそうなのであって、グフウだとか、ゲハハだとか、意味不明な声が口からときおり漏れ出るところからして、『へら鮒刑事Ⅱ』をけっこう気に入った様子だ。それにつけても、架空墓(ヴァーチャルトゥーム)での圧倒的な体験の後で薄っぺらな2Dドラマが楽しいと云うのは、人間精神の幅を示すものと云ってよいと思います。

フォギーはときおり酒を口へ運ぶ以外ほとんど動かない。主人公(ヒロイン)がこう不活発では物語を先へは進めにくい、と云うことは全然ない。なんとなれば、語り手たる吾輩が起きて活動しているからだ。もっとも猫の活動などはたかが知れているので、芯城、花琳、フォギーの三人が千駄木からホテルへ戻った時点で運搬籠(キャリーケージ)から解放された吾輩は、すでに述べたごとく、子猫らしくそこいらを嗅ぎ回ったり、花琳の胸のリボンに飛びかかったり、玩具の木天蓼(またたび)スポンジ球とじゃれたりして、人間の眼を楽しませておったが、フォギーが可変椅子に寝そべった後は、眠る花琳の隣に踞り(うずくまり)、花琳と同じく丸くなったのは、いかにも飼い猫然としたふるまいと云える訳ですが、じつはこのときすでに吾輩はある「異変」を察していたのだ。

「異変」とは何か。それすなわち、吾輩もまたその末端に連なる電脳空間(サイバースペース)に生じた「異

変」に他ならない。芯城がホテルの自宅へ去った後、来週からはじまる北米東海岸への旅仕事の確認連絡のためにフォギーが電磁波攪乱を切り、あとはそのままにした部屋の、広からぬ空間を飛び交う無数の電磁波信号、そこに馴染みのない「異物」が孕まれていると、あくまで比喩的な申しようであるが、我が金属硝子繊維の髭には感じられていたのだ。

吾輩ばかりではない。「異変」はこのとき、地球上の——成層圏を越えた宇宙空間や月面を含め——あらゆる電子機器によって「感じ」とられていた。ことに「自己意識」を有するＡＩは、危険の「予感」とともに己が身に生じつつある変事を感知していた。

それはたとえれば電算機の胎内に迷い込んだ病気の鼠だ。黒い汚血を吐き散らす鼠は、苦痛に歯を剝き出し、狂ったように基板や配線の迷路を駆け回っては、軀をかつんかつんと構造材に打ち当てる。やがて鼠は死に、死骸は機械装置の樹枝に絡まったまま腐敗し、にじみ出た体液が艶消しの黒い肌を持つ金属部品の腸を伝い流れ、瘴気を放つ腐敗毒は電子機器の内臓に広がり、回路の血流にまで浸透して血液を冒し、機械組織を内側から壊死させる——と、これはむろん暗喩にすぎぬが、もしもこのときＡＩが夢を見たならば、彼らが見たのはこんな夢だっただろう。電脳海に棲む大蛇が、有機の軀を獲得して、粘液まみれの卵を次々孵して増殖していく。あるいはそんな夢。色彩々の花が咲き乱れるデジタル丘陵に塩の雨が降り、見晴るかす草木が、朽ちた集積回路を練り固めたオブジェに変

じれば、大地の精のごとくであった深紅の薔薇は、暗鬱な灰の塑像となり、幽かな空気のそよぎに触れて、蕊(しべ)もろとも崩れ散る。たとえばそんな夢。

　けれども、彼ら自身は「異変」を表現する「言葉」を持たなかった。プログラムされた「思考素」はそれを演算しうる論理(ロジック)を有していなかった。かく云う吾輩も同じで、「異変」を察した時点では、ただ軀が妙に疼くのを覚えたばかりで、それが何であるかは全然分からなかった。だから人間がそれを知るにはいささか時間がかかった。とは云うものの、吾輩が髭をぴくり震わせてから数時間以内には、主要な情報工学(IT)関連研究機関で「異変」は把握されていた。

　最も早く「異変」を知った者の一人が、篤実な科学研究者(RIC)にして密かなる小児性愛者、山萩貴矢氏年来の友人、シンガポール国立大学、電脳文化研究所所長、ダニエル・リー教授だ。29virus の研究を進めるリー教授の研究班(チーム)が、ウイルス禍の予兆を掴むシステムを開発していたのは当然、もっとも彼らが「異変」を知り得たのは、電子機器の変調に日頃から敏感で、ほんのささいな不具合(バグ)であってもウイルス感染を疑ってみる習慣があったからにすぎない。リー教授にはまことに気の毒ながら、彼が鋭意開発したシステムはほとんど役に立たなかった。予兆など何ひとつないまま、気づいたときには世界中に「ウイルス」は蔓延していたのだから、これは驚くよね。

　大学職員で結成した演劇同好会に属し、明後日からはじまるシェークスピア『ウインザ

ーの陽気な女房たち』公演に向けての、徹夜稽古の最中に連絡を受け（稽古は大幅に遅れていたのだ）、フォルスタッフの扮装のまま研究所に駆けつけたリー教授が、班員の説明を一通り聞いてたちまち心肝を凍りつかせたのは、研究所の来年度予算が削られてしまうのを恐れたから。真っ先に予算の心配をしたのは、組織人としてはやむを得ぬ反応とは云え、いま不安がるべきはむろんそこではなかった。

早い話が、リー教授と彼の研究班（チーム）は、それの正体がからきし摑めないのでした。「異変」のよってきたるところや何処（いずこ）。世界有数の電脳（コンピューター）ウイルス専門家たる教授にも皆目見当がつかぬのでした。まるでお手上げ。これを不安と云わずして何を不安と呼んでよいやら。ただ一つ明確なのは、それが通常知られるウイルスとは違う何かだと云う点で、このこと自体は29virus の性格に合致した。その何かが何であるかが分からないと云う意味でも、今回のウイルス――後にアレフ・ウイルスと名付けられたものが29virus と類縁性を持つのは疑いえなく、しかしそれが決定的に29virus と異なるのは、電子機器への感染がなに一つ障害を引き起こしていない事実にあった。この数時間のうちに、電脳網（サイバーネット）で繋がれたあらゆるデジタル機器――軍事衛星を制御する電脳（コンピューター）から幼児用の３Ｄ絵本に至るまでがそれに感染したが、眼に見える問題は一切生じていなかった。衛星はナノ秒単位でレーザー砲の照準を調整し続け、子供が頁の絵柄に触れればミッキーマウスは笑顔で中空に飛び出した。

問題がないならべつにいいじゃないの、放っておいて。とは、当然参らぬわけで、この恐るべき事態を各地の研究機関や政治共同体の指導者らが知るのは時間の問題であり、まもなく問い合わせが殺到するだろうが、それに対して自分は何一つ有効な応答ができぬ。何が起こっているのか？　と問われて、ただ狼狽え口ごもる己が醜態を思うと、リー教授の人工肝臓は縮みあがってキュウと天竺鼠みたいな鳴き声をあげた。科学技術は万能ではありません。分からないものは分からないんだから仕方がない、それを率直に認めるのが正しい科学者の態度ですから、と開き直るにしても、この数十年に亘る研究努力が、新たな「大感染」（と考えざるをえなかった）の到来に対して、なにひとつ防備の役目を果たしえなかったと思うと愕然となる。

　それでもこの数時間でリー教授の研究班が明らかにした事実が一つだけあった。すなわち、今回の「ウイルス」の蔓延速度が29virusのそれと一致する事実である。これは端的に、二〇二九年以来、地球社会一丸となって講じてきたウイルス対策が役立たずであった事実を意味した。山のように開発された抗ウイルスソフトウエアは、ことごとくがらくたであった。新「ウイルス」の大津波は国家企業が総力をあげ築いた防波堤を楽々と越えて押し寄せた。気の遠くなるほど膨大な人類の労力と富とがどぶに投げ捨てられてきたのだ。そうして、この比喩で云うなら、自分はどぶにカネを捨てる係であった。リー教授は死にたくなった。

自分が顧問を務める電脳(コンピューター)ウイルス対策企業の株価下落は避けられないだろう。研究所が多額の支援金を得ている抗ウイルス業界は凋落を余儀なくされるだろう。と、そう考えると、いよいよ死にたくなったが、死ぬ前に「大中華電脳奉仕社」と「TEOS」の株を売却しておいた方がいいと思い、娘に連絡した。次に月に一度受けている血液浄化治療を解約(キャンセル)し、それからラッフルズプレイス駅傍にある、終夜営業のルウエイ飯店に動力自転車(バイク)で向かい、天然フカヒレスープを今生の思い出に食しつつ、死に方をあれこれ考えはじめたところが、ふと、今回の事態全体を「予兆」と捉えればいいのでは、との発想(アイデア)を、デザートの杏仁豆腐を食べている最中に得た。事実電脳世界(サイバーワールド)には何も障害は生じていないのだ。症状が出てはじめて病気は病気となる、とするならば、いまはまだ「潜伏期間」、この段階で「ウイルス」感染を指摘したなら、私たち、見事に予兆を捉えましたです、と強弁できぬこともない。たとえ「発症」を座視するしかないにしてもだ。そうなれば研究所の来年度予算は削られず、関連会社の株価も下落せずにすむかもしれぬ。そうだ、それだ、それ。

急ぎ研究所へ舞い戻ったリー教授は、研究班(チーム)にICSOへの報告の準備を命じた。ICSO――International Cyber Surveillance Organizationは、電脳網(サイバーネット)を管理する国際機関。一種の国際警察として、政治共同体の枠を超え一定の強制執行権を持つ。研究班(チーム)は急ぎ資料のとりまとめにかかった。が、フカヒレスープがこの際は致命的であった。杏仁豆腐も

余計だった。失われた時はもはや回復不能なのだった。すなわち、この時点ですでに別の機関がICSOへの報告をすませていたからだ。なによりリー教授が切歯扼腕(せっしやくわん)し、消化力を強化した自分の移植胃を恨んだのは、新「ウイルス」の名称までもが教授の与り知らぬところで決定されていた事実に遇してである。

いくら動転していたとは云え、どうして事態を公表するだけは公表して、Lee virus の名前をつけちゃわなかったんだろう。人類文明を破壊する悪魔のウイルス。それに冠せられる自分の名前。もちろん、嫌じゃない。それを思うと、むしろふつりふつり血が沸き立つような悦びを背筋に覚える。だが、いまはすべてが虚しい。何もかもが手遅れだ。今度こそ本当に、掛け値なく、リー教授は死にたくなった。

60

『へら鮒刑事II』は最後(ラスト)、狂人科学者が慈しみ育てた洞庭湖の巨大鰐(わに)ナマズ、その大口に呑まれながらもこれを成敗した刑事を、湖沼に夕陽の沈みゆくなか、遺された恋人の猿人間がオカリナを演奏しつつ白菊を散らして偲ぶ、高度に叙情的な場面で「*End*」となり、

と、もうすっかり朝である。こうした場合、翌日のようにさわやかに、とは決してならず、急激な徒労感に見舞われるのが大抵であるが、そこは五つ星ホテル景雅園、窓の遮光は完璧で、酔夢の夜が引き続くのは、いいんだか悪いんだか、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）での刺激が神経に作用し続けているのか、あるいは『へら鮒刑事Ⅱ』の感動のせいか、猫に似て夜行性のフォギーはいよいよ昂揚してしまい、調子をコク感じにさえなり、さらにまた何か活動したくなり、こうした場合に人がしたいことと云えばただ一つ。ＳＥＸ！　ではない。ピアノだ。ピアノが弾きたくて堪らない。

フォギーもプロだ。毎日のようにピアノは稽古している。だから、と云うべきか、ああ、ピアノが弾きたい、と思うことはあまりない。好きなことでも仕事となればつらいもの。であるからして、心からピアノが弾きたい、ピアノに触りたいとの気持ちの溢出は、フォギーにとって貴重だ。ホテルにもピアノはあるはずだから、交渉して借りることはできないか、それとも一度自宅へ帰ろうか、などと思案したフォギーは、ＡＩインターフェースを呼び出すと、最短でピアノを弾ける方法を教えよと要求（リクエスト）してみた。

寝台（ベッド）脇にのたり立ったムーミン・トロールは、「フォギー、朝からお酒を飲むのはどうかと思うよ」とかるく意見をして、アルコール依存症の危険を啓蒙するサイトを紹介した後、「いますぐピアノを弾いて欲しいと云う人が連絡してきてるけど、繋ぐ？」と云う。こんな時間に仕事の依頼とは。驚きつつ、「誰から？」と訊けば、なぜだかムーミン・ト

ロールは河馬(かば)ふう間抜け面を虚空へ仰向けたまま答えない。どうも不愉快なやつである。苛ついたフォギーが「いいわ、繋いで」と云うと、ムーミン・トロールは消えて、代わりに黒い服の女の3D像(イメージ)が現れる。いくら人の顔を覚えないフォギーでも誰だかすぐに分かったのは、昨夜会ったばかりの人物だから。すなわち茅田アリス。新宿ゴールデン街にいた女だ。ビルの屋上から飛び降りながら無事なのは、まあ当然と云えば当然。

「ホテルのATSから架空墓(ヴァーチャルトゥーム)のPit Innに来て」

茅田アリスがやや掠れた魅力ある低音(アルト)の声で云った。「ライブは終わってお客さんはいないけど、ピアノは弾けるわ」

挨拶抜きの誘いにフォギーがすぐには言葉を返せないでいると、黒く塗った楊枝を並べたみたいな睫毛の奥からフォギーを真っすぐに見詰めた茅田アリスは語を重ねる。

「よければ、ベースとドラムも用意できるわ。誰がいいかしら？　スコット・ラファロとロイ・ヘインズなんてどう？」

ええっ、なんですと！　フォギーが驚いたのは無理もない。スコット・ラファロとロイ・ヘインズと云えば、それぞれフォギーが敬愛して止まぬベーシストとドラマーだからだ。事故で早世したスコット・ラファロはビル・エヴァンスの初期トリオの名演奏で散々聴いたし、一方のロイ・ヘインズはBe Bop最盛期のドラマーで、鋭くも品の良い演奏スタイル、とりわけ4ビートのシンバルを刻む音の粒だちが素晴らしい名手。そいつあ凄

え、とは思いながら、「でも」とフォギーが躊躇ったのは、この状況下で、花琳に断りなく架空墓なんかへ行っていいのかな、と考えたから。御伺いをたてたくとも花琳はノンレム睡眠の穴の底。無理に起こしてもニャアニャア云うだけだろう。そこでちょっと自力で考えてみると、かりに架空墓へ行かぬとして、その間自分は寝るだけである。そしていま自分は寝たくない。であるならばぜひ行くべきではないか。加えて鍵のこともある。ベヒシュタインの鍵は架空墓のどこかに必ずあるはずだと花琳は云う。自分が架空墓へ行くことで鍵発見のヒントを掴めるやもしれぬ。と、そこまで思案したとき、いや、だめだめ、ホテルの馬鹿高いＡＴＳを使うなんてとんでもないと思い直し、そう云うと、支払いは財団がするし、もうホテルのＡＴＳは借りてあると茅田アリスは応じる。しかもすでに課金ははじまっていて、刻々使用料が発生していると聞けば、うげっ、そりゃあ大変だと、焦り気味にＶＲ室へ向かったのだから、貧乏性加減ではフォギーも芯城に引けを取りません。

　それで別館地下二階のＶＲ室へ向かえば、メトログロース社製の高性能ＡＴＳがフォギーのために借りてあって、課金がはじまってもう一五分も経っているじゃないですか。うう、もったいねえ、と呻いたフォギーは急ぎ木乃伊型ＡＴＳに潜り込んだ。認証をすませて、直ちに『新宿Pit Inn』へ入場すると、予想どおり可動域が大きく広がっていて、以前はそこ限定だった客席背後の小空間から脇の階段で床へ出られる。

茅田アリスが云ったように、客席に人はおらず、天井の低い薄暗い空間のなか、反響板を全開にしたグランドピアノに点照明(スポット)があたっている。段差のない舞台は、背後にJAZZ CLUB PIT INN の板(パネル)が据えられただけの簡便なもの。あたりにドラムセットやら楽器ケースやらマイク立て(スタンド)やら何やらが乱雑に散らばる風情は、いかにも飾り気のない創造の現場の雰囲気があって悪くない。ただし客席横にある不格好な金属箱は、空気清浄機(エアコン)らしいが、ああ云う無粋な機械を眼に見える場所に露出させて平然たる二十世紀人の感覚(センス)はフォギーには解しかねるところだ。

フォギーの分身(アヴァター)は今度も「池永霧子」。首にはたしかに例の猫ネックレスがある。それを確かめてから、フォギーは靴を鳴らして床を歩いた。音の反響具合を試したわけで、これはまずまずな感じ。そうして壁際の、黒く光るピアノの前に立てば、機種はYAMAHA、椅子の高さを調節していると、すぐ横の壁に貼られた写真板(パネル)が眼に入った。ソプラノサックスを吹く背広の黒人は、やはりフォギーの偶像(アイドル)の一人、ウェイン・ショーターだ。

ベーシストとドラマーはまだ登場していないようだが、弾いているうちに「来る」んだろう。ピアノと一緒に頭から照明の光を浴びて椅子に座ったフォギーは、クレージー山荻を忘れた。架空墓(ヴァーチャルトゥーム)の狂乱を忘れた。和服ロボットの怪しい振舞を忘れた。謎を忘れた。ただひたすら、目の前の、黒い艶のある楽器に神経を集中する。潜水する人のように

CamScannerでスキャン

ひとつ長く息を吐き、自分が風に揺れる柳になった様を想像して腕の力を抜き、それからすいと腕を伸ばして白黒の鍵盤に触れた。響きをたしかめるように、いくつかの和声を順番に鳴らして、しかしすぐに弾くのをやめてしまう。

「どうしたの?」と声をかけてきたのは、いつのまにか椅子を並べただけの客席中央の通路に立っていた茅田アリスだ。薄暗がりのなか、白塗りしたような顔と掠れがちながらよく通る声は、小劇場の俳優みたいだ。

「どうして弾かないの?」

「これじゃだめ」再度の問いにフォギーは答えた。

「だめって、何が?」

「何がって、ぜんぶよ」と答えたフォギーは落胆していた。調律が全然なってないピアノに触ったときと同じ落胆だ。もちろん目の前のピアノは完璧な十二平均律で調律されているはずで、それが音楽的によいかどうかはともかく、音程に問題はない。鍵盤の感触やハンマーの動き具合も現実のピアノそっくりに再現されてはいる。が、何かが違うのだ。何が、と具体的には云いにくいのだが、やはり何かが根本的に違う。隔靴掻痒、と云うか、ものすごく湿気の多い空気のなかで弾いていると云うか、耳に蝸牛が棲んで音を食べてしまっていると云うか、うまく言葉にできぬのだけれど、とにかくこれでは無理だ。

「そんなはずはないわ」茅田アリスが暗がりから声をあげた。「このピアノのために使わ

れているくトリの容量は、あなたには想像できないくらいに大きいのよ。だから、ほら」

周囲の空間を両腕で指し示して茅田アリスは言葉を継ぐ。「ほかのところは質感が明らかに下がっているでしょう。観客もいないし、いまはピアノと演奏者、つまりあなた自身に環境形成の演算子は集中しているのよ」

「だけど、駄目なんだもの」と云ったフォギーは、もう一度鍵盤に指を下ろして、Alice in Wonderland の主題を弾いてみる。が、やはりいけない。弾くたびに湿ったカンナ屑みたいなものが発生して、それがどんどん積もってピアノが埋まってしまう、そんな感じだ。やっぱり駄目だと、フォギーが報告すると、茅田アリスは顔色を変える感じになる。

「ここが疑似現実空間だってぶう先入観があなたにはあるんだわ。だからこのピアノがおかしく感じるのよ」

「かもしれない」とフォギーは応じたものの、これは違う、と、全身の細胞と云う細胞が叫んでいた。フォギーだって素人ではない。ピアノと云う楽器の放つ生動には敏感だ。現実のピアノが地を駆ける獣、あるいは空を飛翔する鳥であるならば、眼前のピアノは神経のない沼地の生き物みたいに思える。

空気の振動がない。やはりそれが問題なんだろう。フォギーは考えた。音楽はいままでは耳小骨発振や脳神経への直接結線でもって、空気の介在なしに享受されうる。が、しかし、太古の昔、大地から生まれ出た音楽は、地球の呼吸ともいうべき大気の震えとともに

本来あるべきものではないのか。刻々変化する気候のなかで、風と一緒に運ばれるべきものではないのか。そんな思想は、時代錯誤なエコロジー主義、地球中心主義であると云われてしまうかもしれないが、自分はそれが好きなんだと、この際は開き直るしかない。と云うより、それくらいの開き直りがなければ、いまどきモダンジャズなんてやっていられません。

分身（アヴァター）にも問題はあった。指と鍵盤が接触しまた離れる、その運動の距離感がほんの僅かながら現実とは異なって、その僅かなずれが神経に障って仕方がない。きて欲しいときに音がこない。もっともこれは慣れの問題が大きいんだろう。事故で指を失ったピアニストが義指を使ってピアノを弾くようになるドキュメンタリーを前に観たことがあるが、子供のときから慣れ親しんだ身体から離れて、「池永霧子」に慣れていけば、違和がなくなる可能性はある。

「たしかに慣れってことはあるのかも」フォギーが云うと、そうでしょうと、茅田アリスは勢い込む。

「慣れよ。慣れてしまえば、あなたがいま棲んでいる世界のピアノを弾くのと変わらなくなる」

「かもしれない」とフォギーは素直に応じたが、とにかく自分が弾きたいのはこれじゃない、との、強い感覚は否定できない。フォギーはまた幾つかの楽句（フレーズ）を弾いてみる。が、だ

めだ。いよいよ気が塞いでしまう。もちろんフォギーだって指を失えば、義指に必死で慣れようとするんだろうが、五体満足の現在、そんなことをする理由がない。
「やっぱり駄目」フォギーが投げ出すように云うと、茅田アリスは声を張り上げる。
「どこが駄目なの。具体的に云ってみて」
「空気がないもの」フォギーは仕方なく応じる。
「空気？」
「そう。音楽は空気の振動でしょう。それがないと駄目みたい」
「空気ならここにもあるわ」茅田アリスは云って、手を扇のように振ってみせる。「風がちゃんと起こるでしょう。空気はある」
「でも、ここでは、空気の存在感は分身の接触面で生じるにすぎない。指向性や音速をちゃんと処理すれば、本物らしくは聞こえるけど、音は空気を伝わっているわけじゃない」
音響設計士フォギーはそのあたりは当然ながら詳しい。
「空気の振動がそんなに大事なの？」
「たぶん」
「違うわ。それも習慣にすぎないわ」と断じた茅田アリスはなおも語を継ぎ、疑似現実環境のピアノの性能や音質のよさにつき云々したが、フォギーは、どすんと石塊が肩へ落下してきたかのような、いきなりの疲労感に襲われてしまい、とても議論をする気になれな

い。そもそも相手の言葉がもう耳へ入ってこない。考えてみれば、昨晩から架空墓へ足を踏み入れるのはこれで三回目。しかも徹夜明け。疲れて当然だ。鈍重な音しか出さぬピアノ、と云うか、ピアノに似せた馬鹿器械に触れたとたん、どっと疲労の胆汁が腰の辺りから溢れ出し、全身に回った感じで、ピアノを弾きたいとの欲求は萎えた。表現へと向かう欲望の火は落胆の湿った土砂に埋められ消えた。代わって寝台(ベッド)に長くなることへの欲求が全身を支配する——って、つまりは眠くなったのでした。

「とにかくログアウトするね」とフォギーが云って命令画面(コマンドスクリーン)を呼び出せば、ちょっと待ってと、茅田アリスは叫ぶ。

「スコット・ラファロとロイ・ヘインズをいま呼ぶから。ウェイン・ショーターにも来てもらう?」

「ごめんなさい。せっかく呼んでくれたのに。でも、このピアノじゃ無理。それになんだか疲れちゃったし」

　フォギーがそう云うと、茅田アリスは、ふうううと風音を真似るような奇妙な声を喉から漏らし、それから云った。

「あなたは、つまり、現実(リアル)のピアノじゃないと駄目なのね?」

「そうみたい」

「あなたは現実(リアル)がいい。それが結論なのね?」

最後の問いには答えず、「じゃ、行くわね。さよなら」とフォギーが挨拶すると、待って、と一段と鋭く茅田アリスが叫んだ。
「あなたは、もうここへは来ないつもりね？」切迫する声に背中を摑まれる感じでフォギーは応答した。
「そんなことないわ。また来るけど」
「いいえ、あなたは来ない。あなたはワンダーランドが気に入っていないんでしょう？」
「そんなことないけど」
「あなたは、あなたの現実にしがみついている。ここは嫌いなのよ。だからもう来ないのよ」
勝手に決めつけられて、フォギーは面倒臭くなった。
「そうね、来ないかもね」
相手に調子を合わせると、ひどく動揺した様子で暗がりの女は、来ないと駄目！　と叫ぶ。いよいよ面倒になったフォギーが黙ってログアウトしようとした寸前、
「『さよなら(フェアウェル)ツアー』はどうするの？」と茅田アリスが云った。「あなたはツアーのまだ途中でしょう？　途中でやめるの？　ピアノの鍵はまだ見つかっていないんでしょう？」
「あなたは鍵の在処(ありか)を知っているの？」とそこでフォギーがすかさず問うたのは、日頃の彼女に似合わぬ機敏さと云ってよいと思います。疑似現実とは云えピアノの前に座るとい

くぶんスルドイ感じになるんだろう。

「知ってるわ」

茅田アリスの答えを待って、

「どこにあるの？」とまた間髪を入れずに語句（フレーズ）を叩き込む。

暗がりの女はすいと表情を消し、そうなると全く作り物の人形みたいに見える。ふいにフォギーは、祖母が持っていた、リカちゃんと云う名の古い着せ替え人形を思い出し、しかしあれとは髪の色が違うなと思ったとき、茅田アリスが帰還する気配が生じて、時機（タイミング）を逃さず語句（フレーズ）を突込んだ。

「『赤き死の仮面』。そこなんじゃない？」

「そうよ」刹那の離脱を挟んで茅田アリスが答えたのへ、

「その本はどこにあるの？」とフォギーは追及の手を緩めない。

先刻よりほんの僅かだけ長い離脱の後、「本は本のあるところ」と茅田アリスは答えた。

「それはどこ？」

「本のあるところ」

「だから、それはどこ？」フォギーが切っ先鋭くなお追及したとき、命令画面（コマンドスクリーン）に「予期せぬ状況により接続が切られます。脳の安全を守るため三〇秒以内にログアウトすることをお勧めします」と表示が点滅する。

「本はどこにあるの？」と最後に問えば、茅田アリスは表情を消して黙り込む。暗がりに凝然として立つその姿は生気のない作り物、黒髪のリカちゃん人形だ。

もう挨拶は要らないとは思ったけれど、もう一度だけ、さようならを口にしてから、フオギーはログアウトした。

61

アレフ・ウイルス——ウイルスであるかどうか、研究者間で合意があったわけではないけれど、これが蔓延した新「ウイルス」に対して、後に流通するに至った名称である。命名したのは、アユタヤにある東南アジア企業連合（SEAEA）傘下のIT研究所所長、ヨセフ・ヴアン・グエン博士。一説では、グエン博士自身はグエン・ウイルスないしヨセフ・ウイルスと名付けるつもりでいたところが、アレフが一人歩きしたと云う。これはグエン博士が複数の機関から求められ行った解説に原因がある。専門知識を欠くのは当然、必ずしも知的能力の高くない政治指導者たちを相手に、グエン博士は次のように嚙み砕いたのだ。

電子媒体に収納されるデジタル情報は、二進数で、すなわち0と1の二つの記号で表現

される。あらゆる情報は「0と1からなる数列」に変換される。情報移送などの際にノイズが生じ、1が0・8や1・2になってしまったとしても、移送先では誤差を無視して1と認識される。結果、情報の精度は保たれ、揺らぎは生じない。ところが今回の場合、0と1のあいだに別のもの、たとえばℵ（アレフ）が挟まったようなものだ——と、コウグエン博士は解説したのだ。ℵはヘブライ語の最初の文字。つまり博士は、デジタル情報の数列に異質な何かが潜り込んだ事実を比喩を使って述べたのである。

「0110001001010010111010101……」が健康な数列だとしたら、いまやそれは、「0ℵ1ℵ1ℵ0ℵ0ℵ0ℵ1ℵ0ℵ0ℵ1ℵ0ℵ1ℵ0ℵ0ℵ1ℵ0ℵ1ℵ1ℵ1ℵ0ℵ1ℵ0ℵ1ℵ0ℵ1ℵ……」となった。説明者の意に反してアレフ・ウイルスの名前が流通したのは、数百行にわたって例示された奇怪な記号列が人々に与えた衝撃ゆえだ。ある種の昆虫の卵を想わせて蝟集せるℵを目の当たりにした者には、これをアレフ・ウイルス——ℵvirus 以外の名で呼ぶことは不可能になったと云う次第。

ルウエイ飯店から研究所へ戻り、まだ死なずにいたリー教授が、何がアレフだ、ふざけるな、×××め、と、ここでは紹介できない、いまだ根強い人種差別的感情に基づく悪態を吐き散らすあいだにも、研究所には問い合わせやら対策会議への出席要請やらが次々と舞い込んで、それは一〇分間で二〇件を超えた。そのすべてにリー教授は応答しなかった

ゆ。
が、リー研究者への強制執行権を有する国際電脳研究監視機構——〔ＩＺ〕が相手となると無視はできない。ＷＥＢはもう大騒ぎ。の招集命令とともに、今回の件について厳格な箝口を命じる通達を。破った場合は刑事罰まであり、うるとの脅迫と、検索先部をやんわりたしなめるような言葉が添えてあった。

たしかに世界中の電子機器が得体の知れぬＲに冒された事実が知れ渡れば——生来小心なリー教授は縮こまりつつ考えた。そうなれば混乱は避けられぬ。いや、各政治共同体の指導者や企業連合体の上層部は知ったはずで、すでに混乱ははじまっているのだろう。それが証拠に、人類研究の徒・人者たるリー教授への問い合わせは加速をつけて増大している。一と月のあいだに挟まったＲ。ただ挟まっただけでＲは悪さはしていない。だから大丈夫。といったところで、Ｒのびっしり並んだ気色の悪い画面を目の当たりにしては誰も納得すまい。グエンも余計なことをしたもんだが、実際のところ、Ｒがいま無害だからといってずっと無害だとは誰にもいえぬのだからお手上げだ。それどころか、そもそもＲが何であるかがわからぬのだからどうしようもない。

とは申せノーベル賞候補最多回数を誇るリー博士である。この数時間に収集されたＲ全般に関する情報の要約を眺めて、直感に基づく発想を一つ得ていたのはさすがとはいってよいだろう。発想の契機になったのは「生物化」なる概念だ。ぼうだいな情報を鵜呑みしたと自称する、以前に受け取ったドクター・サマハギの論文のなかで、彼は

bionization「生物化」なる奇妙な言葉を使っていたのをリー教授は思い出したのだ。

29virusに感染したデジタル機器は「生物化」したのである。ヤマハギはそう述べていた。これをリー教授はヤマハギ一流の冗談（ジョーク）――ではないにしろ、意味あるものとは認めなかった。ところがいま、「なぜデジタル情報が二進数なのか。かつまたＤＮＡの塩基配列がなぜＡＧＣＴの四項なのか。このことの意味をわれわれは深く考えるべきだったのです」と云うヤマハギの言葉が、脳の岩盤の奥底から意識の地表ににじみ出て、発想の種子を発芽させた。

通常のデジタル情報が「０１」の二項ならば、ϰvirusに感染した情報コードは現在「０１ϰ」の三項。それが四項になったとき「大感染（パンデミック）」は症状として発現するのではあるまいか。３が４になったとき事は起こるのではないか。発想とはこれである。

３が４に――とは、しかしあまりにも素朴、子供でも思いつく、いや、子供にしか思いつけぬ発想だ。が、であるがゆえにこそ、発想の樹木が確信の土壌に根を張るのをリー教授は覚えた。二十世紀八〇年代、まだ携帯電話さえなかった頃、ＭＩＴで一緒に勉強したヤマハギは、子供じみた発想でいつも自分を驚かせたものだ。むろんϰと同様、その４にあたるものが何であるのか見当がつかぬ以上、この思いつきをICSOへの報告にあげることはもちろん、研究班（チーム）の人間に伝えることすら難しい。

bionization――３が４になるとき、あらゆるデジタル機器が生物になる。なんて馬鹿

CamScannerでスキャン

気たイメージだ。リー教授は声に出して笑う。頬の移植皮膚を痙攣させて笑う。が、笑いながら、思考の砂地に幻影を追わずにはいられない。かつて知能あるロボットが人間になりたいと願う物語がたくさんあった。ピノキオの物語は電子工学の夢のなかで変奏された。しかし、ここで云う「生物化」はそれとはまるで違う。むしろ正反対の何かだ。bionization――。「大感染（パンデミック）」の最中、電子機器が生物に変身するのだとしたら、それはむしろ「生」の獲得のはずではないか。ならばどうしてそれは死ななければならぬのか。いや、生物だからこそ、それは「死」を持つと云うべきなのだ。4は四、四はsi――死！

こんな戯言をICSOの部会で述べたりしたら、己の名声は地に墜ちるだろう。いや、すでに墜ちつつあるのは疑えぬ。そもそもが虚名だったのだ。やれウイルス討伐軍の大参謀。それ電子工学の大司祭。どれもが中身のない粉飾だったのだ。もうかまうもんかと、ふて腐れ気味に考えたリー教授の口をそのときついて出たのは、必死で覚えたフォルスタッフの台詞だ。

「名誉なんてものはな、ただの言葉さ。そんな言葉のために死ぬのは真っ平御免。羊の脂身食らって麦酒を飲んで暮らしたい。いい女と寝て、太陽に起こされたら、また迎え酒。それがオレの人生哲学さ」

シェークスピアは人生のあらゆる局面において有効な解釈と指針を与えてくれる。そうだ、自分が死ぬのは死の4が到来してからでも遅くはない。その間には天然フカヒレスー

プをまだ幾皿も食べることができる。輪切り檸檬にグラニュー糖を山盛りにして、秘蔵のラム酒と一緒に口へ放り込み食道を燃え上がらせることだってできる。そう考えたリー教授は、ICSOからの招集命令から逃れるべく、サイパン島にある聖パウロ病院への入院手続きをはじめた。

唯一残る問題は『ウインザーの陽気な女房たち』だ。フォルスタッフがいなくては公演中止は必至。もちろんいまは芝居どころじゃないが、演出担当の、言語コミュニケーション学部のイザベル・コウダはあくまで公演実施を貫こうとするだろう。コウダの鬼の形相を想うと怖い。台詞覚えが悪い役者に固い梨を投げつけるあの女のことだ、入院ベッドまで追いかけてきて非合法の向精神薬を静脈注射しかねない。面会謝絶の個室くらいでは医者や看護師をなぎ倒して侵入してくるやもしれぬ。

費用はかかるが、この際はやむを得ない。通常のミサイル兵器程度なら完全に防御のできる、特別保安病棟にリー教授は予約を変更した。

62

ICSOへの報告こそしそこなったものの、リー教授がアレフ・ウイルスの蔓延に最初に気づいた人類数名のうちに入っていたことは、教授の名誉のために、ここでぜひ請け合っておきたいが、しかし誰より早く、と云うのはつまり、専門家たるリー教授よりも早く、具体的には一時間以上を先んじて、異変を知った人物が一人だけあった。モリキテック社、ヤクザ・コスプレ日本人副社長である。

彼にそれが可能になったのは、山萩博士のＴＢＵソフト〈Met02〉が教えてくれたから。東アフリカはビクトリア湖畔の別荘で、強い酒やドラッグをやりながら生身の男女がくんずほぐれつの獣的接触を繰り返す、いまどき珍しい古典的乱交パーティーを催している最中、最優先指定の緊急通信を受けとった副社長は、ちょうど北欧人の金髪女性モデルを相手にマゾ奴隷の奉仕をしていたところで、これまた超古典的な天然黒ゴムの拘束衣を着けた格好のまま、別荘の応接室にて〈Met02〉と面会した。

〈Met02〉のインターフェースは、いつもの手編みセーターを着た美青年。二十世紀芸能

雑誌の表紙から飛び出してきたような、嫌味なまでの爽やかさは、会うたびにぎょっとなる。歯が白くて眩しい。副社長の方もインターフェースを使い、電脳空間で「会う」選択肢もあったわけだけれど、盗聴を考えると、レベル4の防諜が可能な応接室にて生身(リアル)で会うのが安全だった。少し前までの副社長であれば、〈山萩氏〉に会うとなれば、いくら相手がソフトウエアとは云え、最低限の身だしなみを整え武装するところだったが、マゾ奴隷の格好で（さすがにマスクは外したけれど）平気で居られたのは、女主人が下僕の前で平気で着替える、それと同じ心理が〈Met02〉に馴れた副社長に働いたせいだ。犬の前で羞恥を覚える人間はいない。

四分円形(クワドラント)の応接椅子(ソファー)に腰を下ろした山萩青年の方も、斜向いの多糖ゲル椅子(PGチェアー)へ座を占めた副社長の格好を気に留める様子はなく、いつもほどは無駄口を叩かず、ただ快活な笑顔だけは絶やさず用件を述べた、その用件と云うのがつまり、それからほぼ一時間後にリー教授らが摑むことになった、電脳世界(サイバーワールド)に生じた「異変」の報知だ。ℵvirus の蔓延を世界で最初に把握したのは——明瞭な形で言語化したのは、だからグエン博士でもリー教授でもなく、〈Met02〉なのであった。彼にそれが可能であったのは、全脳送信(TBU)から生まれた〈Met02〉が通常のＡＩとはやはり異なる位相にある事実を示すものに違いなく、これは人間の思考の中核に言語——数学的言語ではなく、日常経験と連続した俗語があることに深く係わるんだろうが、いまはそう云う難しい話はいいと思います。難しい話は御免だと

云う点については、マゾ奴隷副社長にも異存はない。

「ようするに、『大感染（パンデミック）』がまた来たと云うこと？」副社長は肩のミミズ腫れにステロイド軟膏を塗込みながら端的に質問した。

「おそらくは」と脚を組み直した山荻青年が応じる。「しかし、まだ電脳空間（サイバースペース）に障害は生じていません」

どういうことかと問うた副社長に、「どうやら29virusには錠（ロック）が複数あるらしい」山荻青年は淡々と応じる。「と云いますか、おそらく錠は二つ。鍵（キー）も二つ。そのうちの第一の鍵がいまや第一の錠を解いた。結果、感染は広がった。しかしそれだけなら毒性はない」

「つまり、どういうこと？」

「つまり、第二の鍵が第二の錠を解いたとき、猛毒が発生して、あらゆる電子機器を破壊する。『大感染（パンデミック）』の再来です」

それを防ぐ方法は？　と問うた頃になってようやく、副社長は顔面に押し当てられた金髪美人の偉大な尻の感触から脱して、事の重大さを認識し、青ざめながらも、「大感染（パンデミック）」の再来の危機において、自分が生き延びるには、いや、むしろ利を得るにはいかにすべきか、これまでさんざん考え、ほとんど仕様書化（マニュアル）された行動計画を念頭に浮かべつつ、[illegible]頭を回転させはじめる。とりあえずこの別荘には、レミントン社に特注で作[illegible]多種アナログ兵器が地下倉庫に備えてある。旧

式のガソリントラックやジープもある。電子機器が死滅する「大感染」下では知能を欠いた粗雑な武器だけが頼りだ。鉛弾。火薬。青龍刀のごとき重たく鋭利な刃物。

応接室には大きな窓があって海が見える。マングローブの葉陰、白砂を透明な水が舐める穏やかな海だ。と云ってもこれは映像。壁紙にすぎぬ。「海」を眺める副社長は、野蛮な武器を手にしたならず者を満載した海賊船が、髑髏印の描かれた帆を翻し、水平線から現れる姿を想像した。時代錯誤も甚だしいと副社長は苦笑したが、「大感染」が本当に来るなら、あらゆる種類の時代錯誤がごった煮となって地球を覆うのは疑えない。

「『大感染』を防ぐ方法はないの？」応接室備え付けのキューバ産葉巻に火をつけて副社長は訊いてみた。

「29virusのワクチンはまだ出来ていません。したがって感染を防ぐ方法はない」と山荻青年は応じる。

「今回のウイルスは29virusと同じなの？」

「おそらくは」

「しかし、まだ何も障害は生じていないんだよね？」

「そうです。しかし二番目の錠が解かれるときには、障害と云ったレベルではすまない事態が到来する」

「二番目の錠はいつ解かれるのかな？」

「不明です。しかし、第一の鍵の所在は分かっている」
どこ？　と副社長が問う前に山萩青年は云った。
「ウイルスの発生源は――これがウイルスだとしての話ですが、東京シティーのホテル景雅園本館二二階、2215号室」
そこがフォギーの――すなわちKiri Kitoの泊まる部屋であると、副社長に理解できたのは、〈Met02〉からその名前が示された直後より監視の眼を貼付けてあるからだ。
「Kiri Kitoがウイルスを拡散させたと？」
「誰が拡散させたのか、と云うなら、ヤマハギであるのは間違いない。ヤマハギは29virusの秘密を解明して、自作し、それを拡散した」
「なんの目的で？　だいいち彼はもう死んでいるよ」
「死亡するまでの十数時間にヤマハギは手を打ったんでしょう。電脳網(ネット)に捉えられない形で。とはつまり僕に知られない形で、29virusが拡散するよう細工しておいた」
具体的にはどのように？　との副社長の問いに山萩青年は一瞬表情を消し、それからまた笑顔になって、詰将棋を鍵にしたのだと応じた。
「詰将棋？」
「そうです。紙本の詰将棋をロボットに解かせ発信させた。その発信場所がKiri Kitoの部屋です」

「しかしだよ」と云って副社長は絶句する。山萩博士が──生身の山萩博士が、詰将棋の詰め手順のなかに暗号の類を忍ばせることは、むろんできるだろう。将棋には少しく知識のある副社長は考える。だが、そんな簡単なことで29virus の錠(ロック)が開くとは思えぬ。副社長がそう云うと、よくできましたね、とでも云うように山萩青年は頬のえくぼを深くして応じた。

「詰将棋に隠された暗号はたしかに非常に単純なものです。詰め手順を入力した素子(チップ)からフィボナッチ数列が発信される、おそらくそれだけのものでしょう」

フィボナッチ？　何だそれは。副社長は侵襲式の端末を使って検索をかけようとしたところが、できなかったのは、防諜下の応接室では「訪問者」以外の電磁波情報はほぼ遮断されるからだ。

「フィボナッチ数列については、あとでゆっくりお勉強して下さい。まあ子供でも知っていることですがね」

山萩青年があまりに爽やかな笑顔で云うから、嘲られたと副社長が知るまでには時間がかかった。その間にも山萩青年は先へ進む。「もちろんフィボナッチ数列だけで錠(ロック)が解けるはずはない。他にも鍵があるはずです」

「なんだろう？」ややむっとしつつも奴隷拘束衣の副社長は正しく間の手を入れる。一瞬の間があった後、山萩青年は答えた。

「おそらくはロンギヌス物質。Kiri Kito がヤマハギの千駄木の家から持ち出したんでしょう」

「しかし、なんで Kiri Kito が――」と云いかけた副社長を、君は考える必要はありませんと、山萩青年が遮った。

「君が考えるのが苦手なのは子供の頃からよく知っています。痴呆とまでは云わないが、論理的思考に関しては、まずそれに近い」

物心ついて数十年、さすがの副社長も、ここまで率直に馬鹿と決めつけられたことはなく、ましてこんなに爽やかに云われたことはなく、唖然となっているところへ、爽やかな調子を変えぬまま言葉が継がれる。

「考えることは僕がやる。君は考えずに行動していただきたい。それも迅速にです。それが我々にとって必要だ」

我々を強調して山萩青年は云い、我々の片割れである副社長は、用心の鎧をまといながら、相手の意図を探るべく問いを口にする。

「何をすればいい？」と云えば即座に返答がある。

「Kiri Kito――KKの身柄の確保。およびKKの持ち出したロンギヌス物質の確保」

「KKはいいが、ロンギヌス物質とはどんなものだろう？」

「不明です。ただし、通常の紙本の頁に挟めるくらいの大きさであるのは間違いない。ヤ

マハギが本の間にそれを保管したことは、九八・五％の確率でたしかですから」

でた、確率！　副社長は鼻で嗤った。頭の良い人間は何かと云えば確率を口にする。目の前の機械野郎も同じだ。しかし、真に頭の良い人間は確率なんぞ信用しないのだ。

「そいつはたしかなんだろうね？」と副社長が念を押したのは、余計な嫌味と云うべきだったが、山荻青年は、三時間前までは六〇％前後の確率だったが、ロボットを遣って千駄木を探索させた結果、九八・五％の数値を得たのだと、妙に生真面目に応答する。こう云うところがやはり機械だなと、腹の中で嘲りながら、ロボット云々の言葉が副社長はやや気になった。

「ロボットに千駄木を探索させたの？」

「させました」

「しかし、千駄木なら自分の家でしょう。そんな面倒をしなくても、いくらでも情報をとれるはずだ」

「それもヤマハギが手をうってましてね。あそこの中枢システムには電脳網からは入り込めない」

「それでロボットを使ったんだ。しかし、どんなのを？」

「舞浜にあったやつをね」

そう聞いて副社長は不安を覚えた。〈Met12〉がロボットを勝手に動かしている。それ

も工場や研究施設内ではなく、天下の公道を使って。これはちょっとまずくないか。

「それより早くＫＫを確保したほうがいい」と副社長の不安をよそに山萩青年は行動を促した。

「おそらく数時間以内に、ウイルスの発信元は特定されて、ＫＫの身柄は日本の警察に拘束されるでしょう。そのままICSOに引き渡される可能性も高い。その前にこちらで確保しなければならない」

「しかし、ICSOから身柄を引き渡せと要請されたら、モリキテックとしては断れないよ」

「モリキテックが確保したと知られなければいい。その種の汚れ仕事（ダーティーワーク）は君の得意分野でしよう？　と云いますか、そこにしか君の取り柄はないわけだからね」

相手の若々しい笑顔に馴染んだせいなのか、そのように云われて腹が立たぬのが不思議だった。とは云え、ICSOに逆らうリスクは大きく、壁紙の海に視線をやって副社長が思案をしているところへ、山萩青年の爽やかな声がまた届いてくる。

「29virusの秘密を独占したくないんですか？」

「大感染（パンデミック）」の再来が切迫する現在、もし我々だけが29virus禍から逃れられるとしたら。そのことがもたらす益は計り知れない。副社長が頷くのを見届けて、〈Men02〉が言葉を添えた。

…の手出しも早くやった方がいい。まあ僕の方でも手を打つつもりですが、彼女が何かを知っているとして、生身の方はいつ死んでしまうか分かりませんからね」

日本現地時間 a.m.7:35。マゾ奴隷の奉仕に励むヤクザ・コスプレ副社長のところへ、《Met02》からまもなく連絡が入ろうかという時刻、王花琳は眠りから目を覚ました。
眠ってまだ二時間少しにしかならぬが、これはいつものペース、一時間半から二時間程度の睡眠を日に二回取るのが花琳の日頃の習慣だ。で、目は覚ましたものの、横向きで膝を抱えた姿勢のままでいるのは、端的に動けないから。とは、つまり低血圧。収縮期血圧が平均で82torr の花琳は、交感神経刺激剤を皮膚注入しないと寝台から起きられぬ場合がある。いまがまさしくそう。蝶の吻みたいに長い天然睫毛をパチパチさせた花琳は、医療キットを入れた小袋を求めて脇卓に手を伸ばしたが、フィギーの部屋で寝てしまったので、ない。参りましたな、と心でぼやきつつ、ゆっくり仰向けに姿勢を変えたとき、遮光されて暗い部屋の、足下方向で何かが光っているのに気がついた。

　3Dホロがつけっぱなしになっているんだろう。最初はそう思ったが、しかしそれだと場所が違う。通信インターフェースならば許可なく来るはずがない。おかしいなと訝(いぶか)りつつ、耳ピアス型(タイプ)の端末に触れて命令画面(コマンドスクリーン)を呼び出し、AIインターフェースのアイコンを視線(アイ)クリックすれば、燕尾服にボウタイをした「老執事」が扉方向からすいと現れた。ちなみに花琳の使う端末は光視床伝達式だから、フォギーのように接眼レンズ(コンタクト)を使う面倒も、外耳へ小型発声器(スピーカー)を貼付ける必要もない。お呼びでしょうかと、顎を引く形で優雅に礼をした老執事は、最優先メールが三六件あり、うち五件が緊急(アージェント)であると鼻にかかったBBC英語で教えた。すぐに応答するのが今後の利益と順調な人生行路にとって賢明であると、慇懃に助言した執事は、要約(サマリー)を時間順で映示しようかと問うたが、いまはとてもそんな気分じゃない。目をつむったまま、あとにしてと命じて、寝台(ベッド)でまたころんとしたとき、AIに繋がったと云うことは、客室に電磁波遮断(ウエーブカフト)がかかっていないのだと気がついた。

　誰かが切ったんだろうと思い、隣の寝台(ベッド)に視線を遣れば、フォギーが投げ捨てられた人形(フィギュア)みたいな格好で眠っている。花琳は衝撃(ショック)を受けた。と云うのは、物心ついて以来、他人と同じ部屋で寝たことが一度もなかったからだ。たとえ家族とでも、よほど強い睡眠導入剤を使わぬ限り、傍に誰かがいると思っただけで神経に障って花琳は眠れない。何人かいた現実恋人とも、セックスはしても一緒に寝たことはない。であるのに昨夜、ところ

か今例は、他人の横で眠って平気だった。眠りの海に沈んで神経はざわめかなかった。何故か？　動けぬままに花琳は考察した。

最初に浮かんだのは、横に寝ている女は人間ではない、との仮説。実際人間以外のものなら、たとえば実家で飼っていたサイボーグ虎となら、一緒に寝て嬉しい花琳なのである。フォギー＝ロボット仮説を吟味し出した花琳は、一一歳で入学したオックスフォードの、最初の授業で出た課題を思い出した。人間そっくりのロボットを人工物と判定する方法を論ぜよ。あのときは、メロウズ－デニソン理論を応用して「直感（インチュイション）」の数値化を試みたのだったな、などと考えながら、ホテルの変な寝間着を着て墜落死体のごとき格好で横たわる女を眺めていたら、なんだか可笑しくなり、花琳はくくくと鶫（つぐみ）みたいな声を出して笑い、それで少し動けそうな感じになってきた。

ロボットと云えば、古今亭志ん生のことがあった。思い出した花琳は、いちおう電磁波遮断（ウェーブカット）をかけておいた方がいいかもと考え、ううと呻きつつ寝台脇（ベッドサイド）の手動スイッチに手を伸ばしたら、毛細血管にちろりと血が流れ出して、頭にかかった靄が少し晴れてくる。スイッチを入れて、ところが、足下の光は消えぬ。どころかむしろ強くなる。いよいよ妙だ。

意を決し、首を捩（ね）じ曲げ視線を向けてみると、見えたのは硝子卓（クリスタルテーブル）の上に乗った子猫のドルフィーだ。鼻面をくんくんさせて、卓の食器台（コースター）に置かれた例の首飾り（ネックレス）の匂いを嗅いで

いる。光の出所はどうやら首飾りの飾り片であるらしい。となればドルフィーならずとも怪しみたくなる。全体どういうことなんだろう。不審に思っていると、口をあぐあぐさせた子猫が首飾りに齧りつき、食べてしまったから驚いた。弾みでえぇっと躯を起こすと、頭がぐらぐらして、首がぽきりと折れそうな気がしたが、どうにか支えて見やれば、口に入れたものを子猫はこくこくこくんと嚥下する。電池餌と間違えて食べたんだろう。そう思うと可笑しいが。しかし首飾りが光ったことは笑えない。光ったとすれば飾り片についた黒い石だろうが、しかし、どうしてあれが光るのだ？

花蝶がそろそろと躯をずらして寝台から下りようとすると、さらに驚くべきことが起こった。今度は猫が光ったのだ！　ドルフィーの黒い斑のある白い毛衣が、間違いない、薄闇のなかで発光している。ドルフィーの製作は山桜博士が手ずから行ったから詳しくは分からぬが、そんな機構があるなんて話は聞いていない。猫は躯全体が青白くぼうと光ったかと思えば、すいと消え、とまた光が燦い出す。まるで蛍だ。と花蝶が連想したのは、子供の頃住んでいた上海の、夏陽館ホテルでは、夏になると庭園に[illegible]を放ち、例えとよく見に行ったからだ。七歳のときにはロンブキ財団の科学館で蛍光の仕組みを習い、蛍光ジャポン王を製作したこともある。つまり花蝶は蛍にはわりに詳しく、その花蝶から見て、[illegible]

あれれれ、ドルフィー、君はいったいどうしちゃったの？　と声をかけると、硝子卓から下を覗き込み、尻を振って躊躇(ためら)っていた子猫は、思い切ったようにぴょんと飛び降りる。非常に可愛い。こうした仕草はロボット製作者の感性(センス)が一番問われるところ。さすがはドクター山萩。が、いまはそこに感心しているときではない。問題はどうして光るかだ。よく見ると、光は毛ではなく、躯の内部が光って、皮膚を透過しているらしい。内部に光源があるのだとすれば、光る首飾り(ネックレス)を嚥(の)んだことが原因とも思える。しかしそれにしては光量が大きすぎる。目下の事態は工学的な見地からして、いや、常識に鑑(かんが)みてまるで筋が通らぬ。

　とにかく調べる必要がある。ドルフィーの制御は、脇卓(サイドテーブル)に置かれたフォギーの腕輪(ブレスレット)型端末からできるようになっているが、電磁波遮断領域(ウエーブカットエリア)内では命令(コマンド)はできない。電磁波遮断をまた切った花琳は、腕輪型端末をいじって子猫を運搬籠(キャリーケージ)へ導き、次に自分の耳ピアス型端末からドルフィーを制御できるように操作した後、運搬籠を下げて自分の部屋へ向かったのは、ごく簡単なものではあるけれど、部屋の旅行鞄には工具や検査機が入っているし、明かりを点けてフォギーを起こしてしまうのも悪いと考えたから。

　それで自室でドルフィーを籠から出してみると、もう光っていない。部屋を暗くしても光る様子がない。とりあえず首飾り(ネックレス)を吐き出させようとしたが、それもうまくいかぬ。そもそも躯のなかにあるはずなのに見つけられない。小型の遠隔探知機(リモートセンサー)を嚥(の)ませて探っても

CamScannerでスキャン

所在が分からぬから焦った。あんな大きな物体が発見できぬ訳がない。籠に吐き出したのかと思って見てもない。消化されちゃったりしてね、と冗談っぽく呟いてみたが、むろんそんなはずはなく、さらにあれこれ試して、しかしどうしても見つからぬ。猫の体内で忽然消えてしまった具合。猫が嚥んだと見たのは夢か錯覚だったんだろうか？　しかしフォギーの部屋を出たとき、硝子室から首飾りが消えていたのは間違いない。全体にどうもおかしい。猫が光った原因もざっと調べただけでは見当がつかぬ。ここにおいて天才工学少女も完全にお手上げとなった。

手持ちの機材では本格的な検査は無理だ。そう判断した花琳は一度ケープタウンに戻ることにした。直属の上司であるアンドロイド開発班の主任、マリア・ストローセン博士からは、ケープタウンへ戻るよう再三指示がきていて、これ以上命令を無視すると雇用契約違反で訴えられる危険がある。加えて、クレージー山萩のことを社の人たちに教える必要があった。研究所の混乱ぶりからして、ドクター山萩の「狂気」は察せられているはずだが、社の上層部は、山萩氏を電脳世界から切り離す断を下せていないんだろうと考えた花琳は、自分のもたらす情報が決定打になるとも予想した。もちろん電脳網通信で即座に情報を伝えることはできるが、話はなかなかにデリケートであり、母親以上に信頼するストローセン博士に生身で伝えるのが得策と思えた。ドクター山萩と同様、クレージー山萩に情報を捕捉されることを心配したこともある。

東京を去るについては、舞浜工場にいる亘じゃない方のドルフィーがどうなるかと気にはなった。舞浜にもアンドロイド製作班があって、ケープタウンの班とは競争する感じでやってきたのだが、あそこもだいぶ混乱をきたしているらしい。ケープタウンから運び、舞浜に保管されていた古今亭志ん生ロボットが勝手に（かどうかは分からぬが）動き出したことからも混乱ぶりは分かる。となると、今日か明日には調布まで運ばれる手筈になっているエリック・ドルフィーがどうしたって心配になるが、停止状態にしてある彼の起動は花琳ほか数人しかできない。しかもその数人は現在ケープタウンにいる。最初の起動には生身（リアル）の人間の介在が必要で、遠隔からは絶対にできない。起動されぬ限り、ドクター山萩といえども、電磁波で遠隔操作することは不可能だ。だから大丈夫。一方、子猫のドルフィーは、ケープタウンから東京へ運んだ際、若干のズルをして「玩具」登録しておいたので、停止状態なら手荷物で飛行機に乗せられる。一緒にケープタウンまで運んで研究所で調べればよいと、素早く算段した。

花琳はAI執事に、Narita国際空港（インターナショナルエアポート）からケープタウンへの直通航空便と、空港までの地下磁気チューブ車（カー）の座席の予約を命じ、それからシャワーを浴びた。着替えの服は日本女子高生（JK）はやめにして、恒温処理された紺色のトレーニングウエアを着たが、鬘（ウィッグ）を外した短い黒髪および白い布靴とあいまって、これまた二十世紀日本女子高生、と云うより田舎の女子中学生のように見えることを本人は知らないのでした。

で、かるく化粧をして、ケープタウンへ向かう旨、フォギー宛のメッセージをフロントに残そうとしたところが、逆に、「お連れ様が緊急入院しました」との報せを受けたから花琳も仰天した。

どう云うことかと問えば、２２１５号室の客が体調不良を訴えて救急を呼び、駆けつけた救急隊が担架で病人を運び出したと云う。ええええと頓狂な声を出して驚きつつ、どこの病院へ入院したのかと訊けば、鶯谷衛生病院だと教えられたので、電脳網（ネット）で問い合わせると、この三時間以内に緊急搬入された患者はないと云う。

ロビーまで下りて、フロントの人間（ヒューマン）黒服に直接にその旨伝えれば、「救急からそのように連絡が入ったのは間違いございません」と慇懃な応接が繰り返されるばかり。これじゃあロボット黒服と変わらんぞと、悪態をつきつつ、今度は東京消防庁に繋げば、救急患者についての情報は原則的に教えられないと返事がある。

呆然として人工大理石の床に立った花琳の、耳ピアス型端末に組み込まれた健康診断ソフトはこのとき、収縮期血圧101torrと云う、かつてない高い数値を記録した。

フォギーが消えた。仰天の情報を胸に抱えた花琳（ファリン）が芯城の泊まる部屋へ飛び込んできたのが、日本現地時間（ローカルタイム）10/21. a.m.8:22。その時刻、寝不足ながらすでに起きて、珈琲を飲みつつ電脳網（ネット）ニュースを観ていた芯城銀太郎が、現実（リアル）訪問者を告げる鐘音（チャイム）に応じて扉を開けると、ものも云わず挨拶もなく花琳が突進してくるので、おおっと、のけぞれば、一直線に寝台（ベッド）脇へ向かった花琳は電磁波攪乱（スクランブル）の手動スイッチを入れる。それからようやく口を開いて飛び出した内容は当然ながら芯城を驚かせたが、衝撃が五体に浸透する暇もなく、必要事項を一方的に口頭で伝えた花琳は、ついては自分はこれからケープタウンへいったん戻る、もう「Taxi」を下に待たせてあるからと云って、跳ね兎みたいにまた飛び出していった。

気をつけてね、と挨拶して廊下まで出た芯城は、それにしても花琳はどうして体操着なんか着ているんだろう、どこかで運動でもするつもりなんだろうか——と、二十世紀日本文化に通じた芯城の目には映ったのであるが、やや不思議に思いながら、それこそ駆けっ

CamScannerでスキャン

こをする子供みたいにパタパタ駆けて行く後ろ姿を見送った。

フォギーが消えた。と急に云われても、にわかには信じられず、電脳網通信(ネットメール)がフォギーに繋がらないのをたしかめてから、ホテルのフロントで直接事情を聞いてようやく、ただごとじゃないとの感触が軀を貫くのを覚えた。フォギーが入院したと云う病院や東京消防庁に直接あたってみて欲しいと花琳からは云われたけれど、九時過ぎからは記者会見があった。本来ならばこの日は大山十五世名人との対局二日目、昨夜の突発事で対局がなくなった代わりに主催者の合同記者会見が行われ、芯城もこれに連なったわけだ。

「アンドロイド密室殺害事件」と云う、いささか扇情的な題(タイトル)のついた事件のあらましはすでに公表されて、動機と機会の点からして芯城八段が犯人ではないかと疑う向き(大半は面白半分であったけれど)が電脳網村(ネット)の住人には相当数あり、質問が集中したのには参った。花琳の「自殺説」に疑う余地はないと、芯城はすでに確信していた。が、それを口にするのはちょっと憚(はばか)られて、神妙にしていたつもりが、芯城の顔には、「自分は真相を知っていますんで」と傲然と嘯(うそぶ)くかのごとき色があったらしく、「何か隠しちゃいませんか?」との激しい追及を受けたのにはまた参った。むろん消えたフォギーのことも気がかりで、芯城の心中は全般に穏やかではなく、あまりのストレスに会見途中で嘔吐しそうになり、真っ青になってトイレへ駆け込む失態を演じたのは、修行不足と云うか、やや情けないものがあります。もっとも芯城の嘔吐は持病の逆流性食道炎によるもので、薬を飲む

のを忘れたせいだったが、鋭い質問に追いつめられた結果、犯人の心身が示した反応に違いなしと記者たちが見做したのは、この際は仕方がなかった。

記者会見を終えて、しばらく外に出ない方がいいと云われ、ホテルの部屋に籠った。とりあえず電脳網（ネット）でできる範囲でフォギーの所在を探ってみたが、まるで手がかりなし。ケープタウンへ向かった花琳と話したいと思ったけれど、どうしてもの場合以外は連絡はとらない方がいいと花琳が注意したのを思い出した。どうしてなの？　と訊いたのには、よくは分からないけれど、たぶんそうした方がいいと思うと、花琳は答えにならぬ答えを寄越し、とにかく架空墓（ヴァーチャルトゥーム）のある――とは、つまり、それを作り出している汎用電脳（コンピューター）、およびその設置場所であるケープタウン研究所で何かとんでもない事が起こっているのは間違いなく、「クレージー山萩」仮説を行って確かめてくると云い、それからふと思い出したふうに、今後の通信に使うべきいくつかの暗号符丁を口頭で伝えた。具体的には、山萩氏が「飛車」、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）が「角」、と云ったごく簡単な置き換えで、少しばかり将棋について勉強したと云う花琳が、覚えやすいようにしてくれた心遣いには感謝したものの、フォギーが「金」、花琳自身が「桂馬」はいいとして、芯城銀太郎が「銀」ではなく「歩」、と云うのには、ほんの少しだけ傷ついた。

それで午後まで愚図愚図して、三時頃になって、警察の許可を得て駒場の自宅へいったん戻った。電脳網（ネット）の噂とは裏腹に、外部の専門家の鑑定を経て、今回のロボットの破壊に

は高度の専門知識が必要であり、将棋指し風情には無理だと捜査陣は結論し、芯城は容疑者からはほぼはずれていた。かくてフォギーの行方探しにようやく向かうことができたわけだけれど、ホテルの部屋でも無為に過ごしていたのではない。まずは電脳網であたった鷺谷衛生病院、ここにフォギーが運び込まれた形跡はなし。東京消防庁からも情報を引き出すことに成功したが、ホテル景雅園から病人を運んだ記録なし。となると、全体どう云うことになるのか？　途方に暮れつつ、芯城が架空墓へ行ってみようと思い立ったのは、ひょっとしたらフォギーが「来て」いるのではないかと考えたから。「来て」いないまでも何かしら行方に関する暗示があるかもしれず、架空墓がいまどんな具合になっているのか興味もあった。

で、自宅マンションのＡＴＳから入ろうとしたところが、プロトコルに変更があったらしく、繋がらない。そこで芯城がサイクリング用の軽量自転車を飛ばして千駄木へ向かったのは、山萩邸地下の高性能ＡＴＳなら繋がるかもしれないと考えたから。加えて花琳たちから聞いた古今亭志ん生アンドロイドのことも気にかかり、フォギーの行方を探るには、とにかく一度はあそこを調べてみる必要があると思えた。

そうして事実、つるべ落としの秋の陽に染まる千駄木にて、芯城は異様な光景を目にする事になったのである。

午後から急に日差しが強くなったので、紫外線遮断（UVカット）処置をしていない芯城は乳液を肌に丹念に塗り、肘膝頭に強化樹脂の安全覆い（ガード）をつけて、紅葉しはじめた街路樹を横目にペダルを漕げば、磁気路を極力選んで補助動力を最大限まで使ったお陰もあり、二〇分足らずで山萩邸の門前に到着する。入館許可のＩＤは貰ってはあるけれど、拒否される可能性もあるな、と覚悟しつつ暗証番号を入力し、虹彩型と掌紋の生体認証鍵を使えば、門扉がすんなり開いたのでまずは安心した。腕に抱えた軽量自転車を荒れ庭の金木犀（きんもくせい）の脇へ置き、また鍵を開いて屋敷の玄関戸をそっと引いた。

脱いだ靴を抱えて三和土（たたき）から上がり、縁側の硝子戸に西日の差し込む畳座敷から、廊下、勝手、風呂場、納戸と、順番に調べて、人がいないのを確認するや、すぐさま階下へ向かった。地下空間へも難なく入れて、壁の板表示（パネルサイン）を見ると、入場者一名アリとなっている。通常なら入場者の登録名とＩＤが表示されるはずなのに、欄が共に「＊＊＊＊」であるのが妙だ。入場時刻は今日のa.m.4:32。古今亭志ん生ロボットが早朝来たと花琳た

ちは云っていたから、これがそうなんだろう。管理ＡＩがロボットを「人」として認知した理由は分からぬが、いずれにせよまだなかにいると見える。

一名の入場者は現在図書室（ライブラリー）にいると表示にはある。入口扉を離れ、古いＳＦ映画に出てくる宇宙船の内部のごとき中央通路を進んで、図書室（ライブラリー）の扉前に立った芯城はちょっと躊躇（ためら）った。五代目古今亭志ん生は五代目立川談志と並んで芯城が敬愛する噺家であり、アンドロイド製作にも係わったから、馴染みがあると云えばある。とは云えロボットと二人きりで対面するのはちょっと気まずい、くらいならまだしも、怖い。大山アンドロイドと墨水亭で向かい合ったときの、肝の凍える寒気が甦って、芯城はぶるるっと身震いした。

思いついて芯城は、図書室（ライブラリー）前を離れ、ＡＴＳの設置された管理室（コントロールルーム）へ向かった。螺旋階段を下りた扉の奥にある楕円形の空間は、云うまでもなく、今朝方フォギーと花琳がいた室だ。ここは古典ＳＦ色がいっそう濃い。芯城は発光茸型の操作卓（コンソール）をいじってモニターに図書室（ライブラリー）を映し出した。とりあえずロボットがどんな佇まいでいるのか、たしかめようと考えたのだ。大人しくしていればいいが、口から火を噴いて荒れ狂っていたりしたら、入っていくのは是非ともやめにしたい。

ところがモニターにロボットが映らない。操作卓をいじって場所や角度を変えても、本の詰まった書棚が映るばかりで、着物姿の噺家の姿がない。板表示（パネルサイン）は変わらず図書室に入場者一名となっていて、記録を呼び出せば、＊＊＊＊で示された入場者は、今朝の

4:32に図書室へ入り、一度出て、5:12に再度入ってから図書室にずっといることになっている。かれこれ一二時間近くになるわけで、そんなに長い間一人で何をしていたのか。図書室だけにやっぱり読書だろうか、などと考えると、薄気味悪くて、歪つな笑いが顔に浮かんでくるのを避けられない。変に笑いつつ今度は5:12の時点のモニター録画を呼び出してみる。

と、いました。滑らかに開いた扉から図書室内へと歩を進める鬱金の着物。あの、耳の大きな、いかつい顔は間違いない、五代目古今亭志ん生アンドロイドだ。禿頭のロボットは扇子で顔に風を送りつつ、横町を散歩するご隠居さんよろしく、草履をぺたぺた鳴らして、合金の階段を下り行く。それを天井のカメラが追う。やがてロボットが底へ着くと、カメラが切り替わり、右手奥の壁の、それだけがどっしり重い木製の、硝子扉のついた書棚の前に立つ姿がモニターに映し出された。Edgar Allan Poe の初版本や遺品等が収められた棚だ。

するとロボットがいきなり棚に取りついた。なんだと思えば、相撲の四つみたいな格好になり、棚をずずずと横へ動かしたから驚いた。年寄りとはいえさすがロボット。力はある。しかしなんであんな真似をするのかと疑う間もなく、棚をどかした跡に人が立って歩けるほどの穴が現れた。鬱金の着物が穴へ消える。それからまた書棚が動いて穴は隠れた。

CamScannerでスキャン

なるほど。あんなところに隠し通路があったのであるか。図書室（ライブラリー）へは何度か入っているが全然知らなかった。とは云え、忍者好き、城好きで、茶目っ気たっぷりの山萩氏ならば、隠し通路くらい作っても不思議じゃない。穴の奥はどうなっているのか。どこへ通じているのか。山萩氏とは同好の士、この種のことが嫌いじゃない芯城はがぜん興味を抱いた。ロボットと鉢合わせするのは気持ち悪いが、この際は好奇心が勝った。

図書室（ライブラリー）へ入った芯城は、記録映像のロボットと同じように、ポーの書棚の前に立った。とは云え何に自信がないと云って腕力くらい自信のないものはない。学校時代に必修体育で相撲をやらされたが、相手のマワシにぶら下がってふらふらしていたら、「君には腰と云うものがないの？」と教師から呆れられたくらいだ。腰が入らぬのは芯城の基本特徴である。ひょっとして電動装置か何かあるんじゃないかと思って調べてみたが、ない。手動じゃ駄目だわ。ほぼ諦めつつ、先刻のロボット同様、いちおう棚に取りついてみれば、やはりびくともしない。完全に諦めたとき、倉庫に強化服（パワードスーツ）があったのを思い出した。

入口脇の小部屋へ行き、強化服を取って戻り、これを着込めばもう怖いものなし。昔の強化服は重く嵩張って、着るだけでも大変だったが、いまは軽量化されて、救命胴衣を着けた程度にしか感じられぬのも嬉しい。で、棚の枠を掴んで横へずらすと、重いは重いが動く。人間やればできるもんだなと、強化服のお陰は脇において感動しつつ覗けば、穴のなかは混凝土（コンクリート）の通路。奥は真っ暗だ。接眼（コンタクト）レンズの端末を暗視モードにすれば、通路は一

○米（メートル）ほど続いて、奥正面の壁に鉄梯子がついている。ロボットの姿は見えない。混凝土（コンクリート）の湿った匂いを嗅ぎながら通路を進んで、垂直の鉄梯子を見上げれば、これはずいぶんと高い、と云うか深い。サイクリングで少し鍛えているとは云え、これを上りきるだけの自信は芯城にはない。が、いまは強化服を着た筋力人間だ。気合いを入れて梯子に取りつく。

いくら補助があるとは云え、梯子を攀じるなどは芯城にとっては必死の大事業。やっぱりよそうかなと、途中で何度か弱気になりつつ、それでもどうにか最後まで頑張り、左手で梯子にしがみつきつつ、天井の鉄蓋を右手で押し上げれば（これも死にそうになった）、いきなり秋の陽が流れ込んできて眩しくなった。のは、つまり戸外の人孔（マンホール）である。這い出てみれば、鬱蒼としたススキの藪中だ。どうやら鉄柵で隔てられた隣の敷地らしい。藪から出れば、壁面に蔦が隙間なく絡まった灰色の建物が目の前にある。これは昔、どこかの大学の医療研究所だった建物で、五〇年程前に他所へ移転した際、隣家の山荻氏が買い取ったと聞いたことがある。とくに何かに使うあてがあったわけではなく、うるさい施設ができては困るので買ったとも聞いた。芯城が間近で目にするのははじめてだが、築百数十年になる五階建てのビルは罅だらけ染みだらけ、ガラス窓は方々が破れ、非常階段は錆びて、文字通りの廃ビルだ。

隠し通路を作った目的は分からぬが、ＡＩの管理を逃れてこっそり外へ出られる路を作

るあたり、山荻氏らしい酔狂さである。いや、隠し通路に意味はあると、芯城はすぐに思い直した。と云うのは、鉄柵で囲われたこの敷地には、山荻邸と同様の完全保安措置がなされていると、山荻氏から聞いたのを思い出したからだ。施錠された門を破壊したり柵を乗り越えて侵入しようとする者があれば、雷撃の標的となり、痺れて動けなくなっているところへ保安員が急行してくる。その旨は鉄柵の随所に表示された「雷撃印」で示されている。いまどきは廃屋廃ビルがあれば、どこからか不法占拠者が必ず涌いてでるものだが、「雷撃印」を見てあえて侵入する人間はない。と云うことはつまり、門で認証を受けぬ限り敷地内には入れぬところが、山荻邸とだけは秘密通路で繋がっていると云うわけだ。それにどんな意味があるのか、意図はよく分からぬが、それがつまりは酔狂と云うこと。事実、酔狂さでは負けぬ芯城は、なかなか面白いじゃないのと、この趣向を評価したのでした。

ところでロボットはどこへ行ったのか。と思って、廃ビルに近づき、アルミ格子の嵌った、白く霞んだ二階の窓を何気なく覗くと、鬱金色がいきなり目に飛び込んできたからぎょっとなった。急いで壁に身を隠しつつ、気づかれぬようあらためて観察すれば、噺家ロボットは机に置いた箱形の機器の前に座って、旧式の鍵盤を叩いている。窓に破れがあるせいで、かちかち云う音もはっきり耳へ届いてくる。禿げ頭と一続きになった色黒の顔面にちらちら光が過るところからして、これまた旧式の２Ｄの発光モニターを覗いていると

分かる、と云うことは、電気は来ているので、そう思ってみれば、広い室に置かれた機材類には結構生きているものがあると見える。いったい何をしているのか？　ロボットが着物を襷（たすき）がけにしているのは、袖が作業の邪魔になるからだろうが、しかし、作業ってなんだ？

不審に思いつつなお観察していると、室に三つある扉の、一番奥のがつと開いた。誰かが入ってくる。と、その姿をみたとたん、肝がぼうんと音をたてて砕け散るがごとき衝撃を芯城は受けた。

鮮やかな青色の紋付に銀鼠（ぎんねず）の袴を穿（は）いた短髪の男。あの顔、あの佇まいは、間違いない。立川談志だ。あの談志が入ってきたのだ！

66

運動会でフォギーはリレーの選手である。足の遅い自分がどうして選手になどなったのかと、焦っているところへ、天ぷらを揚げるような大歓声が沸き起こって、見れば向こうから走ってくるのはゴジラだ。ゴジラは腿の上がった非常にいい走りをする。角（コーナー）を曲が

つたところでウルトラマンを抜き去り先頭に立ったゴジラは自分と同じ組らしい。次は自分の走る番。しかも最終走者（アンカー）。こりゃまずいゾと、浮き足立つうちに、紅い目玉のゴジラがギャヒヒーンと雄叫びをあげたのは、早く走り出せと云う合図だ。こうなれば走るよりない。責任感の石臼にすり潰されそうになりつつ、よろよろ走って後ろに手を伸ばせば、渡されたバトンはウナギである。それも天然ものだ、となぜだか分かって、高価な貴重種をこんなことに使っていいのかと、半信半疑で摑み直せば、つるり手を逃れたウナギは、地面をひゅるるんと這って見る間に遠方へ去ってしまう。ああ、もう駄目だ。もうおしまいだ。絶望して見上げた空は雲一つない秋晴れ。空の青に染まり立ちすくむ自分――とそこで目が覚めた。

馬鹿な夢を見たもんだなと思いつつ、水を飲もうと寝台脇（ベッドサイド）へ手をやったら届かない。もとから自分は寝相の好い方ではないが、よほど変な格好で寝ていたらしいと思いつつ、仰向けになったまま軀をずらして腕を伸ばしたところが、どこまでも恒温マットが続くのが変だ。おかしいな、と声に出して軀を起こすと、じわり水が滲み出るように照明が点って、辺りが薄明るくなった。すると寝台（ベッド）が異様に広い。キングサイズどころの話ではなく、しかも円形で、相撲の土俵くらいはありそうだ。ホテル景雅園の寝台（ベッド）は可変型ではなかったはずだ。と、そう思ったときには部屋の様子が全然違っているのに気づいて愕然となった。

昔の映画などには、酔っぱらった人が朝起きてみると、見知らぬ寝台(ベッド)で見知らぬ異性の横に寝ていた、などと云う場面がたまに出てくるが、アルコール分解製剤が出回った現在、そんなドラマチックな展開（？）は起こりようがない。昨夜のフォギーも、茅田アリスに誘われて『Pit Inn』へ向かう前にしっかり「サメリン」を飲んだ。あるとすればドラッグで意識朦朧となる場合だが、フォギーはクスリはそんなにやらない方だし、少なくとも昨日寝る前にはやっていない。

　となると、これは全体どうしたことじゃ？　ぐるりを見回せば、壁や天井が淡く発光する部屋も、寝台(ベッド)と同心円をなす円形だ。調度、家具の類はなし。しかしそれほど殺風景に感じぬのは、壁天井から滲み出る光の明度と色彩が微妙に塩梅(あんばい)されて、空間に奥行きが与えられているから。音もある。水の音と樹葉のざわめきが微かに耳に届くのは、音響設計で云うところの「基礎雑音(ベーシックノイズ)」と云うやつ。完全な無音は神経を痛める。だから外音の遮断された環境には「基礎雑音」が流されるわけで、と、ここにおいてフォギーは、遅ればせながら不安の無臭ガスが胸中に立ちこめるのを覚えた。とは、ほかでもない、外音が完全に遮断された環境などと云うものはそうざらにはないからで、そんな「特別な」場所にどうして自分が居らねばならぬのか？

　夢の続き。とは、なぜだか考えなかった。疑似現実環境(ヴァーチャルスペース)か、とは、すぐに考えた。で、分身(アヴァター)かどうかをたしかめてみると、着ているのはホテル景雅園の青い寝間着。顔や軀を

撫でてみれば、どうやら自分の軀である。子供時分から見慣れた左肘の黒子(ほくろ)もちゃんとある。もしこれが分身(アヴァター)だとしたら、余程精巧な分身(アヴァター)としか云いようがない。さすがにこれは疑似現実ではないだろうと見当をつけたが、「現実」をめぐる茅田アリスとの議論を思い出せば、百パーセントの自信は持てぬ。

寝る前のことを思い返せば、Pit Innから戻ったあとは、顔だけ洗って着替えて入眠剤を飲んで寝た。と記憶を辿ったところで、そもそもPit Innから戻って、と云うのがおかしいんだよな、とスルドク反省した。ホテルのVR室から戻って、と云うべきだ。さように訂正した頃には、恐慌(パニック)の黒い獣が物陰でグルルと唸り声をあげていて、胸の鼓動がメゾフォルテくらいの感じで耳に届いて苦しくなる。とりあえずムーミン・トロールを呼ぼうと思ったが、寝たとき外して脇卓(サイドテーブル)へ置いた腕輪(ブレスレット)型端末はあたりに見当たらぬ。あれがなくては誰にも連絡できない。孤立無援。四面楚歌、は、やや意味が違うが、とにかくそれらの語句(フレーズ)が頭に浮かべば恐慌怪獣(パニックモンスター)がいよいよ吠え出そうとする。それをぐっと押さえ込んで寝台(ベッド)から下りたフォギーは床を踏んで部屋の様子を確かめた。じつを云うと、このときフォギーはトイレに行きたくて我慢できなくなっていたのです。

踏み心地のよい床の感触を足裏に感じながら、円形の壁をぐるり一周してみる。が、バスルームらしきものはどこにもない。と、こうなると、見知らぬ部屋がどうこうより、トイレ問題が切迫して、恐慌怪獣(パニックモンスター)が一時的に引っ込んだのはよかったが、窮地には変わりな

い。あ、これはもう出ちゃうかもな。漏らしちゃうかもな。それでいいの？　本当にいいの？　もうどうなっても、わたし、知りませんからね、と自棄(やけ)な感じになりつつ、もうっ、トイレくらいないわけ！　と癇癪(かんしゃく)まぎれに文句を口にすると、軽やかな竪琴(ハープ)の音が鳴って、上辺が曲線(アーチ)になった穴が壁に現れた。

　覗いてみると、短い通路があって、奥が「Dressing Room」の表示のある扉だ。急ぎ開けば、左手に鏡と化粧台、右手に浴室とトイレがある。助かったア、と心で叫んで用を足して、化粧台の流しで手を洗い水を掬って飲んで、と、鏡に女の顔が映る。一瞬ぎょっとしたのは、それが分身(アヴァター)の池永霧子そっくりに思えたから。が、よく見るまでもなく、寝起きのせいかややむくみ気味ではあるけれど、見慣れた自分の顔に違いない。顔を洗い、と云うか、水でちゃちゃちゃと顔を濡らして、脇の綿タオルで拭けば、鏡のなかの者はたしかに現実(リアル)の自分の像だと確信が得られた。

　すると今度はにわかに空腹を覚えて、通路右手の「Kitchen」の扉を開けて入ってみれば——と云うか、Kitchen の文字を見て空腹な気が急にしたのであるが、室のなかは六、七人が囲める食卓と、SONY 上海電影産業製の食品給仕機(フードサーバー)が置かれている。SONY 製は日本食が充実しているんだよな、などと考えつつ給仕機がちゃんと使えるのを確認して、しかし、さすがにすぐに食事をする気にはならず、それでも餓えずにすむと知ったことは、フォギーにいくぶん余裕を与えた。食はやはり人間の基本です。

円形の部屋へ戻ると、とたんに通路穴は消えて、もうどこにあるのか分からない。一瞬は不安になったけれど、トイレ、とまた呼ばわれば、穴はすいと現れる。仕組みはよく分からぬが風情はなかなか垢抜けている。最新式なんだろうが、音声指示で動く知性室ならばフォギーとて使い慣れている。円形寝台に腰掛けて、「ここはどこ？」と試しに云ってみた。返事はない。こちらの声は届いているはずだから、AIがわざと無視しているのか、音声応答機能が作動になっていないのか。念のため英語で云ってみても結果は同じ。

そこで次に「出口はどこ？」と発声してみた。通常ならこれで出入口が現れるはずだ。が、淡く発光する壁に変化はなく、代わりに涼やかな女性の声が天井から響いて、ここにおいてフォギーは、自分が拉致され、どことも分からぬ場所に監禁された事実を認識した。

女性の声の台詞は次のとおり。Sorry. Not available.——ごめんなさい。使用できません。

五代目立川談志は芯城の偶像である。いやしくも落語ファンを自称するならば、同時代の噺家を贔屓すべきだとの論に反対はないし、現役にも好きな噺家はある。とは云え、現役落語家の噺も寄席やホールで聴くより疑似現実空間で聴くことが多い現在、記録の残る二十世紀末以降の噺家ならば、物故者の存在感が大きくなるのは仕方がないところ。芯城は談志が大好きで、映像や録音はもちろん、マニアの王道をつき進んで、落語会のパンフレットをはじめ関連の紙本の類も大量に蒐集している。

その談志がいま、ほんの数米先の、薄暗い室のなかにいる！　となるとこれはもう、何がなんだか分からぬわけで、窓枠にしがみついて、瞬きもせぬまま硝子玉の嵌った二個の穴と変じた眼を瞠き続けるしかない。ぺたぺた草履を鳴らしてリノリウムの床を歩いた立川談志は、着物の袖に両腕を入れる格好で、箱形の機器に向かって座る古今亭志ん生のすぐ後ろに立った。そうしてから、肩を竦めるようにして、屋台見世を冷やかす人よろしく志ん生の肩越しにモニター画面を覗き込めば、薄青い髭の生えた白い面に光が過る。一方の志ん生は談志には構わず、眠たそうな目で画面を睨んでいる。

芯城は呆然自失、しばらくは破裂霧消した魂を遠い遠い天空へ彷徨わせたまま、破れ窓から二人の伝説的落語家をただ見詰めて居ったが、はっと我に返って最初に心に浮かべたのは、自分がいまいる所は疑似現実空間ではないかとの疑いだ。一度そう思いはじめると、自宅のＡＴＳから架空墓へ繋げたんじゃなかったっけ、とそんな気がしてくる。

が、触ってみた自分の嘴はどう考えても分身じゃない。と思ったとき、古今亭志ん生のほかに立川談志のロボットも製作しているとの話を山萩氏から聞いたことを思い出した。そいつはすげえ、と興奮しつつも、世界一の談志ファンを自任する自分に相談がないことに気を悪くしたことも甦った。まだ少し先の話だと思っていたが、もう出来たのかもしれぬ、と云うか、現にそこにいる以上、つまりは出来たんだろう。もちろん立川談志によく似た人が落語家の扮装をしていると云う可能性もないではないけれど（なんのために？）、事柄の流れからしてロボットでほぼ間違いない。

すると懐手になった立川談志が口を開いた。

「それでもって、ぜんたい、どんな具合ですかね？」

その声が聞こえてきたとき、志城は廊下に転げそうになった。口調声色が録音や録画で聞き知る談志そのままだったからだ。すると今度は椅子に座った古今亭志ん生が鍵盤をいじりながら応じる。その声もよく聞こえる。

「グワイてなものはないね」

「グワイはないと」

「グワイはなし。あるのはただマグワイのみ」と難しい顔で古今亭志ん生が言う。それを談志がすぐに受けとる。

「この天の御柱を行き廻り逢いてみとのまぐわいせむ。てんで、イザナギがイザナミをヤ

っちゃった。人類最初のセックスだ。この際は近親相姦だってかまわねえ」

「そりゃ金鵄勲章もんだよ」

「師匠、いまの、キンシしか合ってません」と頬を歪めて笑った談志が質問する。「で、どれくらいでできますかね？」

「それが分かれば苦労はない」

「くろうくろうは九郎判官義経。そろそろ鞍馬から出ますかね。それとも出るのは天狗のおじさんあたり？」

「天狗は出ねえ。とりあえずは弁慶だな」なおも画面から目を離さずに古今亭志ん生は応じて、右肩をぐいと持ち上げるような格好になった談志がまた云う。

「オーソドックスなサゲでくるあたり、さすがは大師匠。で、あとはどのあたりが入り用ですかね？」

「PMタイプの凍結組織切片がいるね。それとイオンチャネル型グルタミン酸受容体。OEKのキット。遠心分離機の調子もよくねえ。それから普通のプレニル化酵素。酵素は他にUDとゼッター」と画面に目を据えたままますら云った古今亭志ん生は、その後も薬剤だか機材だか、芯城の知らぬ名称を延々と並べたてる。その間、相変わらず懐手にした立川談志は、聞いているんだかいないんだか分からぬ顔で、ああ疲れた、疲れた、とでも云うように首を肩の上でぐるぐるしている。

一通りリストを読み上げた古今亭志ん生は、鍵盤から手を離し、扇子で顔に風を送りながら加えた。

「あとひとつ問題は、タンパク質合成シークエンサーが不調。ありゃだいぶセコだよ」

「もしかして、あれ、スガマ社のやつ？」

「そう。スガマだけに鬆が入っちまってる」

「大根じゃねえんだから鬆は入らねえ。あいつは基板をちょいといじって塩ふって、蝦蟇の油でも塗っときゃ直るよ。あと、足りねえのは、セイトーバイオテクノロジーにそう云って誂えておくから、二四時間以内に手に入るよ。それでも足りねえのは文楽師匠に持ってきてもらう」

「あの人はだめ。バイオテクノロジーには関心がねえ」

「関心あるのはパイオツテクノロジーだけ」

「くだらねえ」と笑った古今亭志ん生は椅子から立ち、脇の大型冷蔵庫のごとき箱の扉を開けたとたん、白い煙がわっとばかりに漏れ出る。煙の正体は分からぬが、何か非常に危険な印象がある。動じるふうもなく箱にしばらく顔を突っ込んでいた志ん生が、今度は硝子棚から試薬瓶を手に取って眺めながらまた云う。

「で、電源はどうだった？」

「太陽光は使えねえ。チューブも駄目」と代わって椅子に尻をつけて2D画面を覗いてい

[illegible]
〇〇時間くらいはいけるよ」
「そんなにはかからねえ」
「そりゃそうだよ。そんなにかかったら身が持たない。早いとこ片付けよう」
「こっちだって必死だよ。生きるか死ぬかの瀬戸際だ」と伸ばすのは[illegible]
に調べながら古今亭志ん生が応じる。
「蝙蝠はだいぶ減りそうかもね。死神に吹かれる前にやんないと」[illegible]チャーリー[illegible]が目を
離さずに笑う。「ありゃりゃ、セイヤー」バイオには、[illegible]
車がないね。セコな会社だねえ。ありゃ[illegible]だよ」
「その辺は代用が利くから。無理しなくていいよ。それよりマウスが入り用だな」
「マウスって、鼠？」
「鼠じゃねえマウスってのがあるかい？」
「どれくらいの大きさのがいるんですかね？」
「そいつはあれだよ、鼠だけに中」
志城はシビレた。シビレは、古今亭志ん生おなじみのギャグ。鼠は中、[illegible]
ことが要因の一つ。しかしそれだけじゃない。[illegible]
室に展開する光景は壮観そのもの。そもそも[illegible]

ば、つまりは研究だ。誰がどう見ても研究以外には考えられない。とそう観察したときには、この同じ場所で山萩氏が何かしら研究をしていて、機材類は彼が持ち込んだものなんだろうとの推測が生まれて、これは理に適っていた。だが、理に適わぬのは噺家ロボットだ。古今亭志ん生は高座でギャグを口にするときと同じとぼけた真面目顔で、硝子箱のなかで試験管にスポイトで薬剤を垂らすロボット腕を眺め、立川談志は2Dモニターに斜に向かい、なんだい、セコだねえ、こりゃ使えねえよ、などと悪態をつきつつ鍵盤をばちばちと叩く。山萩氏の跡を襲って――かどうかは分からぬが、バイオ研究に邁進没頭する古今亭志ん生と立川談志。奇怪だ。奇怪すぎる。強張った顔面がびりり痙攣する一方、疝気の虫じゃないけれど、睾丸あたりで発生した笑いの虫がぞろぞろ這い上ってきて、脇腹がムズムズして抑えきれず、うへっと芯城はつい奇声をあげてしまい、とたんに志ん生が団栗眼をギロリこちらへ向け、談志も横目でスルドク睨んでくる。

二重の眼光に弾き飛ばされ、うわわっと慌てた芯城は脚をもつれさせ、ダンスでもするようにクルクル回転しながら派手に転倒した。怪我をせずに済んだのは、自転車用の肘膝覆いのお陰だ。一度倒れたあとは、立つのはやめにして、と云うかもはや立てなくて、地面に横になったままトカゲのごとく地面を這って藪をかき分け、もときた人孔に潜り込んだ。鉄蓋をした方がいいと思ったのは、整理整頓を日頃から心がけ、出したものはちゃんとしまわないと気が済まぬ芯城の性質ゆえ。が、ロボットが追ってくるかも知れぬと思え

ば、とてもそんな大事業はできそうにない。梯子から落ちずに下りるのが精一杯。それだけでもう死にそうになる。

　結果、図書室（ライブラリー）へ戻ったときには、秋口の蝉みたいにぐったりとなってしまい、山荻邸のＡＴＳから架空墓（ヴァーチャルトゥーム）を訪れる気力は残っていなかった。むしろあんな怪し気なふるまいをなすロボットたちが近所に居ると思えば、一刻も早く遠くへ逃げたい。逃げて、家に帰って、何か食べて、横になりたい、と、それしか考えられなくなったのは、だらしないようですが、この時代の男子としては、まあよくやった方だと褒めてやっていいと思います。

　しかし願いも空しく、芯城はすぐに帰宅することができなかった。と云うのは、自転車を抱えて、山荻邸の門を出たところで、ラガーシャツ風の服を着た若い男から声をかけられたからだ。これすなわち警察官。警察の者だと名乗った男は、昔ながらの警察手帳を提示し、芯城の方も電脳網（ネット）検索で即座に相手の素性を確認した。検索画面に出たのは警視庁公安部外事第四課課員の肩書きと松下某の名前。見れば、男の後ろにもう一人、立襟の黒服の男が立ち、道路脇には警察車らしい車が停めてある。

　警察官から接触される覚えは、この際はあるわけで、てっきり「アンドロイド密室殺害事件」の件かと思えば、違った。木藤桐について聞きたいことがある。男は云い、同道願いたいとも云うので、どうした訳かと訊ねた芯城に警官は警察情報への接続（アクセス）を促した。

日本現地時間ア三ツ三、大惨事が電波法違反の容疑で全国指名手配されたと、そこにはあった。

98

〈[illegible]〉から「大破局」の予兆の報せを受けてからというもの、モリキテック社日本人湖社長は、いわゆる火事場の馬鹿力的な、猛烈たる活動力を示した。まずはビクトリア湖畔の別荘から客を追い払ったうえで、下僕の者らに命じて、食料の確保と武器弾薬の補充、敷地内の水源と水力発電装置の作動を確認させた。農地や牧草地を含む一三平方キロメートルに及ぶ敷地は、侵入者を捕捉、攻撃する防御システムを備え、湖畔の熱帯樹林に埋もれ建つ強化混凝土製の別荘は要塞として機能する。いざの場合に籠城すれば、最低三年間は外部との接触なしに生活が可能だ。地階には放射性物質の濾過装置のほか、時代物の核シェルターが備えられ、その時代錯誤ぶりは、カタツムリ形の外観とともに訪問客の嘲笑の的であったけれど、国際秩序の大枠そのものは二十一世紀初頭から変化せぬまま、各国家、各政治体が等しく内部から腐敗し、あるいは硬化し、地球社会の秩序が混

気た煎餅のごとくに弛緩した現在、「大感染（パンデミック）」の再到来となれば何が起こっても不思議ではない。核爆弾の一〇や二〇、爆発するくらいは普通だろう。

嗤（わら）われると云えば、別荘に現地人の雇人が結構な数いることも、十九世紀の植民地じゃあるまいしと、訪問客を呆れさせたが、ロボットを使うより人間を使う方が安価だと云うのが副社長の理屈で、むしろ人間を監視し制御する「奴隷頭」に機械を据えることで、施設維持費の破格の縮減を実現していた。問題は人間に特有の性質、すなわち不服従だが、これは農場で働く者を含め、雇人の腰部皮下に管理装置（コントロールデバイス）を埋め込むことで解決していた。もちろんこれは立派な国際人権法違反。だが、いまどきは、カネさえつめばできないことはほぼないのでした。

別荘の整備を終えた後、副社長はデントランドへ高速ジェットヘリで移動した。その間も情報収集に全力をあげたのは当然、ほかに急ぎ手を打ったのは、個人資産および裁量できる範囲の社の資産を「現物」に換えたことである。「現物」とはすなわち金（ゴールド）。土地。それから保存の利く食料と武器。電脳網（ネット）が死滅した世界で頼りになるのは手で触れられるものだけ。そしてそれら財を守るべき武力。

資産運用を任せていた顧問（コンサルティング）会社は反対したが、まもなく副社長の判断をこぞって絶賛し出したのは、金価格をはじめ土地、小麦などの価格がいきなり高騰をはじめたから。「大感染（パンデミック）」の予兆ありとの報告は、いまだ外部から入ってきてはいなかったが、この異常

な価格変動を見れば変事の到来は瞭然であった。

〈Met02〉によれば、「ウイルス」が放出されたのが、グリニッジ標準時で10/20. p.m.9:36。現在が10/21. a.m.9:30。二二時間弱が経過した現段階で、それを知った人間はどれくらいいるだろうか。デントランドはモリキテック本社上級管理職事務室（エグゼクティブオフィス）で、矢継ぎ早の指示を繰り出し、「人」と会い、電脳網（ネット）会議に出ながら副社長は考えた。たったいま映話をした日本国の官房長官は、妙にこちらの腹を探るふうだったから、まだ知らぬらしい。情報から遅れるのは日本政府のお家芸だとしても、彼らが知らぬとなると、それを知る人間はまだ数十、せいぜい百数十の単位だろう。〈Met02〉が報せてくれなかったら、情報の輪に自分も入っていなかったと考えると、忸怩（じくじ）の思いを副社長は打ち消し難かった。子供時代、あらゆる類型（タイプ）の能力検査でふるわず、将来有為な事業をなす確率は五％以下と判定された自分が、親のコネがあったとは云え、モリキテック社の経営陣に加われたのは奇跡と評された。だが、さらなる奇跡を起こすのはこれからだ。副社長は野望の火をかきたてる。選ばれし少数者の列に絶対加わってやる。いや、やつらの風上に立ってやる。そしていまこそが絶好の機会（チャンス）に違いなかった。アナログの汚泥を這い進む競争ならば自分は勝つ自信がある。

侵襲式の端末から疑似現実（ヴァーチャル）の役員会議に出席しながら、副社長は机の引き出しから一九八〇年製のＳ＆Ｗの回転式拳銃（リヴォルヴァー）を取り出し、机に脚を投げ出す格好で、３５７マグナム弾

な骨董品の雰囲気に装備しつつ不敵に笑った。ちなみにこの格好は、古い日本映画で親しく心奪われた二十世紀の俳優、松田優作を意識してのもの。本日のいでたち、黒シャツに臙脂の刺繍のネクタイ、白いスーツに鏡黒眼鏡も同様。

〈Me102〉とは密に連絡をとり続けていた。だが、「大感染（パンデミック）」の本格的な到来がいつになるのか、その最も知りたい点について、〈Me102〉からいまだ回答はなかった。とは、すなわち〈Me102〉の29virus解析が進んでいないことを意味したが、これが副社長には不満で、生前の山萩博士が解明できたものがなぜ山萩博士の写し（コピー）である〈Me102〉にできぬのか。あれだけのCPUの容量を使い、しかもいまや29virusは予兆の形で現に姿を現しているのだ。なにを愚図愚図やっているのかと、副社長は思わず叱責する調子になったが、〈Me102〉には〈Me102〉の云い分があって、つまりロンギヌス物質が入手できていないことが研究の進展を阻害していると云うのだった。

「ウイルス」が放出された瞬間、ホテル景雅園本館二二階22−15号室にロンギヌス物質が存在したことは疑えない。〈Me102〉はそう主張する。だが、それから二時間半後、副社長の依頼を受けた調査会社——「大東洋保安サービス」Great Toyo Security Serviceの人間（エージェント）が部屋を調べたところ、それらしい物体は発見できなかった。過当競争に打ち勝つべく、手段を選ばぬ迅速果敢な調査を標語（モットー）とし、これを実践する香港マフィア系の調査会社は、ホテル備品以外のあらゆる事物を、寝台（ベッド）で寝ていた東洋人の女はもちろん、ごく

微細な生体片や埃に至るまで回収し、下水管まで丹念に調べる徹底ぶりであったが、しかしなお見つからなかった。とすれば部屋の外へ持ち出されたと考えるしかなく、問題の時刻前後に22-15号室へ出入りした人間の周辺にまで調査の範囲を広げるよう副社長が指示を出した矢先、ロボットを使って千駄木の山萩邸を調べていた〈Met02〉から連絡があった。ロンギヌス物質は猫形の飾り片に嵌め込まれていると判明したと云う。飾り片、それも猫というのが不審ではあったけれど、とにかくこの情報のお陰で、費用は大幅に抑えられた。一流ホテルの保安システムをかいくぐる調査に巨額のカネが必要なのは当然、ましてやそれが何であるか分からぬ物を探すくらい難しいことはないわけで、しかし目標物がはっきりすれば、非合法は非合法でも、人を捕らえて切り刻むなどの、荒っぽい手段は使わずにすむ。発見は時間の問題であると調査会社は請け合ったが、捜索開始から数時間経過してなお成果があがらぬのには副社長も呆れた。

「ウイルス」放出から調査が入るまでの二時間半、KKを除き22-15号室へ出入りした人物は一名、モリキテック社の技術者――とは、つまり王花琳なわけであるが、彼女に対しては、本人に気づかれぬ形で、立回り先や持ち物がナノ探知機をはじめ各種機器を用い徹底的に調べられたのは云うまでもない。同じホテルに宿泊していた将棋棋士にも調査の手は伸ばされた。二人が六時間以内に摂取した食物の一覧が出来上がり、旅行鞄の底に付着した植物花粉の種別までが同定される一方で、しかし肝心の目標物は見つからず、範囲

を広げて、役員は［illegible］されていたけれど、［illegible］の、［illegible］を探し出す優秀さを知る副社長は、ロンギヌス理事会など［illegible］のではないかと疑念を抱き出した。本に挟んだペンダント？　盗の飾り片？　考えると［illegible］すぎないか。

〈Mc102〉が狂っていない保証はなかった。いや、実際、〈Mc102〉が膨大なCPUを使ってやりつつあることは、全貌をもはや知るのが難しくなっていたが、ある種の狂気を窺わせるものがあった。だが、その狂気の底には、狂者がときに過剰に論理的であるのと同じく、合理の岩盤があるとも副社長は感じていた。と云うより、合理性の極端な徹底は狂気に似るのだ。なにしろ〈Mc102〉は天才工学者、山萩貴矢の頭脳をそのまま受け継いでいるのである。とは云うものの、〈Mc102〉に独占使用を許したケーブタウン研究所や舞浜工場が外部から接続不能になっているばかりか、施設の一部区域へは社員が近づくことさえ不可能になっているとの報告を受けて、副社長は不安の虫が胃の腑で騒ぎ出すのを覚えた。自分は何か根本的な誤りを犯しているのではあるまいか。29virus の解明？——ひょっとすると自分は狂った機械の見る悪夢に巻き込まれているだけなのではないか。

「大感染（パンデミック）」の再来——。そもそも本当のことなのだろうか？　電脳世界（サイバーワールド）に棲むデジタル人格の抱く妄想にすぎぬのではないのか。香港S－3型インフルエンザなど、致死性のある伝染病が流行するたび、感染への不安のあまり発狂しそうになる副社長は考える。いや、

「大感染（パンデミック）」の予兆があることは金価格の異常な上昇からして疑えないだろう。拳銃の撃鉄をかちり鳴らして副社長は疑念の渦を押さえ込む。限られた数の、真の人間（リアルヒューマン）と呼ばれるにふさわしい輪（サークル）に属する人間たちは間違いなくそれを知っているのだ。知ったうえで、保身と力の拡張への確実な手を穏やかに談笑しつつ打っているのだ。彼らはいかなる厄災であれ、それを利益に変える術（すべ）を心得ている。

そこまで考えれば、自分のしていることが児戯に類するのではあるまいかと、別種の不安に捉えられる。真の人間（リアルヒューマン）たちは、機械などと仲間になって馬鹿げた真似をするオレを嘲笑（あざわら）っているんじゃなかろうか。機械の云いなりに右往左往する道化を見て大笑いしているんじゃなかろうか。副社長は撃鉄をまた神経質に鳴らし、二頭のドーベルマンがぴくりと尖り耳を立てて不安げに主人の様子を窺う。29virusの謎などはもうとっくの昔に解明されているんじゃないだろうか。秘密を独占した彼らは、最も有効な利用法を練っているんじゃないだろうか。何からも脅かされることのない安全な場所で。安寧（あんねい）が保障された富と権力の楽園で。

調査開始から九時間半。調査会社からの朗報はいまだなかった。S&Wの銃把を握り輪胴を弄んだ副社長は、江戸切子の硝子盃に注いだ五〇度の泡盛を一息に呷ると、〈Me02〉の助言に従い、さらに二社の調査会社の雇い入れを決断した。その矢先、「大東洋保安サービス」から連絡が入った。電脳網（ネット）の暗号文は、「お客様がお探しの物象が、ご

指定の時間帯にご指定の領域内に存在した可能性は、当社の調査では〇・〇一％以下です」との報告に加えて、これ以上の捜索は不可能になったと、素っ気ない文面が続いていた。不可能になったのは、国際電脳網監視機構(ICSO)の捜査官がホテル景雅園の本館を占拠し封鎖したからだと、理由も添えられてあった。ホテルの保安体制(セキュリティー)程度ならともかく、ICSOに乗り出されてはマフィア会社では太刀打ちできない。電脳網(ネット)ニュースを検索すると、東京のホテル景雅園に変異性コレラに感染した人物が宿泊し、建物の一部が封鎖されたとの記事が見つかった。

「大感染(パンデミック)」の予兆を捉えたICSOがホテル景雅園に捜査の手を伸ばしたとすれば、そこがウイルスの発生源であるのは間違いなく、〈Met02〉の主張の信憑性は高まった。しかし一方で、〈Met02〉が正しいとすれば、彼の云うロンギヌス物質を入手できておらぬいま、自分らの優位は失われたと云わざるを得ない。ICSOに先にそれを発見されてしまうかもしれず、そうなれば29virusの秘密の独占などは夢のまた夢となり果てる。

自分は永遠に楽園から追放された人間ではないのか。ついに真の人間には進化できぬ猿ではないのか。時を追うごとに不安に苛まれ、酸で腐食する金属のごとき精神の打撃を受けつつあった副社長が、目に見える打撃、物質的と呼んでよい打撃を被ったのはその直後、ニューヨーク市場で金価格が暴落したのだ。

同時に国際電脳網監視機構(ICSO)が、SEAEAのIT研究所所長、ヨセフ・ヴァン・グエン博

CamScannerでスキャン

士の身柄を拘束したと発表した。容疑はウイルス蔓延による「大感染（パンデミック）」到来の偽情報を流し、地球社会を混乱に陥れんとしたと云うもの。グエン博士には国際テロ組織との連携の疑いがあるとの情報も流れた。

偽情報だと？　仰天のあまり、椅子から滑り落ちた副社長は、はずみで拳銃の引き金を引いてしまい、マグナム弾は博多人形の収められた硝子箱を木っ端みじんに粉砕した。対テロ警戒警報の不吉なサイレン音が階（フロア）に鳴り響くなか、松田優作コスプレの副社長はひどく狼狽しながら、次の一発をこめかみに向けて発射する自分の像（イメージ）を頭に浮かべた。

69

木藤桐の件で話を聞きたい、ついては若干の時間を割いて同道願えないかと云われて、あたかも事前の約束（アポイントメント）があったかのごとく、芯城銀太郎が警察車にすんなり乗りこんだのは、格別に素直な人間だからではなく、権力におもねりがちな性質を有するからでもない。このことは彼の名誉のために云っておきたいと思いますが、芯城が警察に逆らっても碌（ろく）なことにならぬと経験上知っていたせいで、二人の刑事に挟まれる形で警察車の後部座

席にちんまり座った芯城は、早い話が公安警察には慣れていたのでした。なぜか。

芯城には姉が一人ある。血の繋がった姉弟ではなく、母親が再婚した弁護士の娘で、このとき芯城の父親になったのは、オーストラリア国籍の、アイルランド人を先祖に持つ白人、しかし娘の方は瞳も髪も黒い東洋系で、名前もMichikoと日本人ふうなのは、つまり養子だから。Michiko McCardyが本名で、「芯城」は母親の名字。

芯城銀太郎とMichiko McCardyが法的な姉弟になったとき、弟は六歳、姉は一七歳。彼女はニューデリーの寄宿学校にいて、そこから英国の大学へ進んだから、あまり接触はなかったけれど、芯城はこの姉にはずいぶんと可愛がって貰った。誕生日だ盆だ入学祝いだ、と云っては贈り物を送って貰ったし、父母が離婚した後も電脳網（ネット）や手紙（メール）で連絡をとりあい、人生の諸問題につき姉から助言を貰ったこともある。

それが六年前のクリスマスを境に連絡は途絶えた。姉は陽の当たる世間から姿を消した。Michiko McCardyが国際警察機構（ICPO）から第一級テロリスト指定を受け、国際手配されたのはそれからまもなく。複数のＩＴ企業や武器製造企業を狙った電脳（サイバー）テロや、未遂に終わったデントランドの爆弾テロ事件に係わったらしい、と云う程度で、姉がどんな組織に属し、具体的に何をしたのか、芯城には分からなかったけれど、学生時代、飢饉と悪疫の蔓延する西アフリカで、社会奉仕団体（ボランティア）の一員として調査活動をするうち、反‐商業国家（アンチコマーシャルスフィアー）の運動に彼女が深い関心を抱いたことは、当時もらった通信からなんとなく了解できてい

CamScannerでスキャン

た。

要するに姉は憤っていた。人身売買まがいの活動を冷然となしては血を搾り骨を砕く企業と、これの手先に成り下がり、貧者弱者を抑圧する国家を激しく憎んでいた。大学院で医学と介護の学位をとった姉は、アントワープに本拠を持つ、世界第三位の武装力を誇る民間警備会社、North Pole Security Company に職を得たが、この少々意外な就職先については、軍事技術の獲得を目論むテロ組織の指示によるものと、官憲は後に解釈した。傭兵会社にテロリストがもぐりこみ、技術習得の便宜を得ていることは、以前より問題視されているが、有効な防御策がないのは一般によく知られているところ。

公安警察が芯城に接触してきたのは、Michiko McCardy が地下へ消えた直後から。テロ犯の立回り先につき情報を得ようと云うわけで、警察が自分の電脳網通信を盗聴している事実を芯城が知ったのがこのとき。まあ警視庁くらいの組織ならば、一個人の通信を傍受するくらいは簡単だろう。とやかく云っても仕方がないが、気分良好とは参らない。しかも定期的に刑事の訪問を受け、ときに桜田門へ呼びつけられるのだから辟易する。一般に家族の紐帯が弱まり行く趨勢のなか、あいつはテロリストの弟だと、白眼視され不利益を被ることはないが、官憲としてはテロリストの縁者にはなにかにつけ圧力をかけたいらしい。実際のところは、姉から連絡はなく、したがって警察、芯城ともに時間を無駄にするばかりだったが、とにかくこうした次第で、芯城は公安警察には慣れていたわけです。

とは云うものの、桜田門の警視庁本部庁舎へ連行されて、地階の取調室で刑事と向かい合って気分のよかろうはずはない。取調室と云えば、芯城が驚いたことが一つあって、つまり昔の映画などにはよく取調の場面が登場するわけだが、はじめて入ったとき、現実（リアル）の取調室がそれとそっくりだった事実である。二〇年ほど前に新ビルになった警視庁庁舎は、最新のテロ防御システムを備えた知性高層建築（スマートビルディング）、表玄関に続くロビーの内装や受付の雰囲気などは、リゾートホテルと見紛うほどである一方、地階の取調室ばかりは、時間断裂（タイムスリップ）を起こしたかと疑われるくらいに古色蒼然、鉄格子の嵌（はま）った磨（すり）硝子の小窓、マジックミラー、蛍光灯、安物の小机、脇に音声入力盤を監視する制服の書記係が揃った佇（たたず）まいは、一〇〇年前とほとんど変わっていないと云うから驚く。容疑者を威圧し自白へ導くにはこれじゃないと駄目なのだと、職人的頑固さが発揮されているとしか思えぬが、そうした舞台装置のなか刑事と向かい合えば、逆らうのは身のためにならぬとの心理的圧力がかかるのは事実だ。取調室が密室なのも嫌なところ。映像記録はとっているはずだが、公開は義務化されていない。以前はされていたが、二〇四〇年代の日中紛争に続いた大阪名古屋の連続テロ事件を機に制定された改正対テロ法以降、記録の保管と公開は警察官僚の自由裁量となった。だから極端な話、拷問をしても外部には漏れない。実際、容疑者が外国人だったりすると、殴打程度は当たり前、非合法の自白剤がときに使用されていることは公然の秘密。

非民主的だとの批判がないこともないけれど、さように述べるのは骨董品的サヨクだけ。たしかに民主と云っても、「主」たるべき「民」の格差が甚だしく、主人と奴隷が入り混じる現状では、日本列島に棲息する人間を一括して「民」と呼ぶのはだいぶ無理がある。「民主的」の言葉はむしろ、能力に応じて利益が人に与えられる、配分が行われる、との意味で使われることが近頃では多く、だから「警察が非民主的だ！」と云うときには、公務員である警察官の生活を支える高額納税者は鄭重な扱いを受けるべきだとの批判が大概である。

加えて、世界水準からしたら日本国の警察はちゃんとしていると云うのが大方の評価だ。多くの国で、治安の担い手が民間の警備会社になり行く一方、旧来の警察組織は腐敗溶解して巷のギャングと区別がつかなくなっている現状では、殴る蹴る程度の人権侵害はいいんじゃないかな、と云うふうになるのは仕方がないのかも。

目立たぬ鼠色の警察車は内堀通りを進んで、桜田門へ到着すると、庁舎裏手の入口から地下駐車場へ入って行く。そこからは歩き。決して趣味がよろしいとは申せぬ、古城にあるがごとき鉄扉を刑事の一人が開けば、天井が圧迫的に低い混凝土の通路が長々続く。いまどき珍しい白色の蛍光灯が寒々しい。暖かみのある発光壁にするのは簡単なはずだから、この殺風景さは取調室と同じくわざとだろう。たしかにここを歩かされるたびに[illegible]な胃のあたりがぞわぞわしてしまう。

これまで芯城を尋問してきたのは公安部外事三課。今回は四課。たしかＩＴ犯罪専門の部署のはずだと思いつつ取調室に入ったところが、なかの様子はいつもと同じ時代錯誤の陳列。尋問者も、連行してきた人とは別の、地味な恒温スーツを着た、個性を欠いた役人顔の男。で、訊かれた内容は、木藤桐、つまりフォギーとの関係。出会いのあたりから話をさせられたが、質問が一番集中したのは彼女の昨夜の行動だ。木藤桐とは墨水亭で夕食を共にし、深夜になって疑似現実空間（ヴァーチャルスペース）で会い、その後自分がTaxiで千駄木まで迎えに行き（と云うわけでは必ずしもないけれど結果的にはそうだ）、ホテルへ一緒に帰ってきたと芯城は順番に話したが、大山名人アンドロイドから預かった記憶素子（メモリーチップ）および猫の首飾りのことを云わなかったのは、訊かれなかったせいもあるけれど、彼女に何かおかしな行動はなかったか、との問いに応じて述べることはできたわけで、しかし口にしなかったのは、云わぬ方がいいと判断したから。なぜか？　なんであれ警察に余計なことは云わぬが賢明との一般論的見解がまずはあった。しかしそれだけではなく——と、あらためて考えてみると、なんとなくそうした方がいいと思った程度で、明確に言葉にできる理由はなく、ひょっとして大山名人アンドロイドからかけられた催眠暗示がまだ利いているのかもしれぬと芯城は考えたりした。

　木藤桐はどこへ消えたのか？　これは芯城の方が知りたいところで、ホテルのフロントで聞いた話をすると、東京消防庁がホテル景雅園から病人を搬送した記録はないと刑事は

CamScannerでスキャン

明かした。となると何者かに殺害されたと考えるしかなく、捜査関係者を装ってホテル従業員を騙したとなれば、大規模な組織の関与が疑われる。大使館が狂言されたことに心当たりはないか。刑事は質問したが、忍城には見当もつかない——と云うこともなく、もっとも何とは具体的に指摘できぬのだけれど、山家氏こそリキテック社が係わっていることだけは間違いないと思われ、が、ここでも忍城は分からないとだけ答えた。まま事実分からぬのだから嘘ではない。

それにしても刑事の尋問は歯切れが悪かった。追及も迫力を欠いた。いつもの外事三課は、国際テロリスト殲滅と云うはっきりした目標があるせいか、刑事の物腰こそ柔らかいものの、隠し事は身のためにならぬとの、言外の圧力がある。副隊長の刑事の一人は将棋好きで、それなりに楽しく雑談が交わされる時間もあるのだが、隙を見せれば喉笛に喰らいついてきそうな気配に背筋がひやり寒くなる。それから較べて、忍城より年下とも思える刑事の風情は、どうもとらえどころがない。

だいたいフォギーの電波法違反とは何だ。あの人に電波と云うのは無理な気がする。彼女は何をしたのか？　逆に探りを入れてみたところが、返事はなく、まあその辺りは「お上」の体質からして自然ではあったが、尋問の刑事が、こちらを親任する狙いもあったんだろう、大使館が国際電脳犯罪捜査課からサイバーテロリストとして国際手配されたと聞いて驚いた。サイバーテロリスト、とはよく云うが、テロはともかく、サイバーとう

くものはフォギーには無理だろう」

「彼女は何をしたんですっ」芯城が思わず大きな声になると、「こいつが知りたいんだよね」と刑事は笑って答え、これはどうやら本音らしい、いまの笑いは自嘲の笑いらしいと芯城は観察した。日本のサイバーテロ対策は遅れており、ことに電脳犯罪に関しては、日本の警察は地球規模で強権を有する国際電脳網監視機構の使いっぱしり、岡っ引きにすぎぬとの記事を読んだことがあるが、今回もつまりはそう云うことなんだろう。だとしたら、どうしてフォギーが国際電脳網監視機構から目をつけられなければならぬのか。それが問題だ。いや、そもそも彼女はどこへ消えたのか。

70

秋晴れの空の下、球技大会でフォギーはサッカーのゴールキーパーである。サッカーなど一度もしたことがないから、どうしていいやら分からず焦っていると、ピイイと笛が鳴って、反則があってPKだと云う。ええっ、どうなるの、と思ううちにも、ゴジラが出てきてボールを印の所に置く。ゴジラは背番号10、敵チームのエースだ。ギャヒーンとひと

つ吠えて蹴る気満々のゴジラが、右隅に蹴るからね、とフォギーに囁く。しかしこれは嘘。誰が見ても明々白々の嘘と分かる。であるのにゴジラは自信満々、オレの作戦勝ちだな、とばかりのにやけ顔で蹴れば、まっすぐころころボールは転がって、フォギーがしゃがんで拾うとゴジラは呆然、後ろからウルトラマンにはり倒されたところで眼が覚めた。

で、寝ている場所は依然円形部屋の円形寝台（ベッド）。変な夢を見て眼を覚ますのも、これで何回目になるか、ちょっと数えられないのは、フォギーが何度もレム睡眠を迎えた事実を意味するわけで、こんな訳の分からぬ状況下でよく平気で寝られるな、フォギーと云う女はよほど肝が太くできているのだなと、感心する向きがあるやもしれぬが、「Kitchen」の食品給仕機（フードサーバー）で食事をするたびに昏倒するように眠ったのは、食事のなかに薬剤が混入されていたせいだろう。毎度似たような夢を見るのがその証拠だ。ある種の有機化学成分に夢を固着させる作用があることは広く知られているところ。眼が覚めている時間もそれほど不安を覚えなかったのは、やはり何かしらの神経剤の作用があったと考えられます。

とは云え、理由も分からず拉致監禁されて、安穏としていろと云うのは無理な話。実際、はじめは恐慌（パニック）に陥りかけたが、まもなく知り合いが来てくれたお陰で、不安はいくぶん軽減された。来た知り合いとは、茅田アリス。ホログラム映像のAIインターフェースにすぎぬとは云え、話し相手になっていろいろと情報を与えてもらえれば、外界から遮断されて、一切の連絡なく閉じ込められているよりずっと状況はましとなった。一番知りた

い、ここがいったいどこであるかについては、茅田アリスは「あなたにも馴染みのある場所よ」と云うにとどめた。こんな円形部屋に覚えはないが、茅田アリスが現れたことを含め、モリキテック関連のどこかだろうとは見当がついて、なんであれ自分に「馴染み」の場所であると聞いただけで、気がだいぶ楽になったのだから簡単と云えば簡単です。

フォギーがホテル景雅園に持ち込んでいた荷物も返却された。腕輪型端末をいちおう試してみたが、予想通り使えず、下着や服の換えがないのが困ると思っていたら、「Dressing Room」に衣料プリンタがあった。これさえあれば有機化学素材の衣服ならいくらでも写しが作れる。ホテル景雅園の青色寝間着が気に入った（そう云う人は非常に稀ですが）ので、ためしに写しをしてみると、木綿とはやや手触りは違うものの、それはそれで悪くない寝間着ができあがった。もちろん既成意匠のものなら、下着から外套から靴までが一通り揃う。制限はあったものの、2Dモニターの番組も視聴できたし、一番嬉しかったのはピアノが弾けたこと。

茅田アリスがピアノを弾いて過ごしたらどうかと勧めてきたので、疑似現実は嫌だ、現実の、生のなら弾いてもいいけどと、わがままを前面に押し出せば、秋晴れの空の下、ダンクシュートをしてバスケットゴールを壊してしまい、ウルトラマンからねちねち叱られるゴジラの夢を見て起きたら、「Dressing Room」とは反対側の通路奥の小部屋にピアノが用意されていた。これがSteinway & Sonsのフルコンサート。もちろん文句はな

し、と云うか、いま現在触れられる最高の楽器と云ってよいわけで、弾いてみればじつに良い響きである。とは云うものの、しばらく鍵盤に触れていなかったせいか、最初は指が動かなくて焦ったが、ジャズハノンからはじめて、音階練習等、いつもの訓練メニューを繰り返すうちには少し納得できる感じになった。かくてフォギーは久しぶりに集中してピアノを弾き込む――とまではいかぬものの、まあまあ熱い感じで黒白の鍵盤をいじることを得たのでした。

もちろん不安は通奏低音のごとく心に響いていた。そもそもどうして自分が監禁されなければならぬのか。一番肝心な点について、準備ができるまで待っていて欲しいとしか茅田アリスは云わず、準備とは何の準備かと訊いても答えがないのだからどう仕様もない。今後自分はどうなるんだろうと問えば、前に会ったときより全体に表情を欠いた茅田アリスは、そのときばかりは顔を輝かせて、「素晴らしいことが起こるわ」と応じるのがどうにも気味が悪い。

「でも、少しだけ待って欲しいの」と云うので、どれくらい待てばいいのかと問えば、最初は答えがなく、なおもしつこく訊ねたら、あと長くて三〇〇時間程度と答えがあった。なるほどね、三〇〇時間ね。三〇〇時間は、ええと、と暗算して――一〇日と少し（正確には一二・五日）。一〇日だって！　冗談じゃない。北米東海岸ツアーほか、仕事の約束があるから困る、と語気強く抗議すれば、そんなことはいまや問題にならないと、茅田ア

リスは毛ほども取り合う様子がない。あなたは個人営業のバンドマンの生活がいかに不安定なものか、全然分かっていない、仕事を貰うのがどれだけ大変だか知らないのだ、と訴えても埒は明かず。まあ相手はAIだ。諦めて、ツアーに呼んでくれた企画会社や関係各方面には、しばらく拉致幽閉されておりました、不可抗力でしたと、あとで謝ればいいだろうと算段したが、話はそれどころじゃないことを、フォギーはまだ知らないのでした。

牢屋に入れられた人が普段は読めぬ大部の本を読んだと云う話は昔からあるけれど、三〇〇時間と聞いたフォギーもちょっと思いついて、茅田アリスに頼んでモーツアルト『ピアノ・ソナタ集』の譜面を差し入れて貰ったのは、前々から少し弾いてみたいと考えていたから。で、さらってみれば、これが非常に難しい。四苦八苦して、しかしほかにすることもないので、けっこう粘って練習すれば、さすがは天才モーツアルト、じつにシブい。隅々までが冴えわたり、一見は素朴（シンプル）な楽句（フレーズ）にえも云われぬ艶味があるのが凄い。K.332のF major、サビの四度で進行する和声（コード）なんか最高だ。

と云った次第で、ピアノを弾いたり、ワインを飲みつつ（中毒にならぬようにとの配慮なのか量に制限あり）すっかりはまった『へら鮒刑事』シリーズ（機械製作なので三〇〇作もある）を2Dモニターで見たり、ハヤカワ・ポケット・ミステリに茅田アリスが送信してくれた平村良の小説――伝説シリーズだ――を読んだりして起きている時間を過ごした、と言葉で云えばけっこう優雅な感じで、置かれた状況を思えばあまりに呑気だと思わ

CamScannerでスキャン

れるかもしれぬが、先に述べたとおり、これはやはり何かしら薬物の作用があったせいだろう。実際、いまピアノを弾いていたはずなのに、いつのまにか寝台(ベッド)で横になっていたり、ふと我に返って、ああ自分はいま食事中なんだと気がついたりと、時間が切れ切れになるふうがあったのは神経剤のせいに違いなかった。

備え付けの食品給仕機(フードサーバー)は、SONY上海電影産業製の業務用。鰻や蕎麦などの日本食に特色があって、なかなかよい。時間の区切りが判然としないので、腹は減るような減らないような。ところが「Kitchen」へ入るたび、SONY自慢の八六〇種の品書き(メニュー)についつい惹き付けられ、あれを食べてみよう、これを飲んでみようとなったのは、まずは当然と云うべきか。あとで請求がくるなんてことはないよね、と思えば、いよいよ目移りがしてしまう。それなりの広さがあるとは云え、一室に閉じ込められて飲んだり喰ったりばかりでは、肥満は避けられぬところだが、無事だったのは、食品給仕機(フードサーバー)に熱量コントロールの機能があるからだ。カツカレー大盛りのごとき品でも、味を損なわずに二五〇キロカロリー程度まで熱量が抑えられるあたりは、さすがSONY。でなかったら、フォギーはブタになっていたところです。

準備万端整った。茅田アリスから、さような連絡があったのは、秋晴れの空の下、棒高跳びをするゴジラが走ってきて、ギャヒーンと吠えつつ棒を地面につきたてたところが、棒がこんにゃくで、あれっと云う顔にゴジラは一瞬なったものの、べつにただなんとなく

走ってきただけですからと、照れ隠しの何喰わぬ顔で横へ逸れて、そのまま散歩するように向こうへ行ってしまう夢から覚めたときだ。

もう三〇〇時間が経ったのかと、なにか呆然とする感じになっていると、いまから案内するので、ついては二時間以内に支度を整えて欲しいと茅田アリスに云われて、だからどこへ案内するの？　何をするの？　わたしはどうなるの？　と不安にかられるまま質問を連発するのへ、黒髪のＡＩインターフェースは、いいところへ、いいことをしに、ハッピイになるためにと、抽象的な答えを寄越すばかり。

どうにも先行きに怪しいものはあったけれど、この円形室で永遠に暮らすわけにもいかぬ。なにがどうなるのであれ、外の空気が吸えるのが嬉しくないこともない。まずはシャワーを浴びるべく、フォギーは円形寝台（ベッド）を下りて「Dressing Room」へ向かった。

71

ホテル景雅園から連れ去られたフォギーが円形室でゴジラの夢を見ているとき、モリキテック社の天才工学少女、王花琳（ワンファリン）もフォギーに劣らぬ運命の変転に見舞われていた。夢想

だにせぬ人生の転機。もっともこの世に生まれてまだほんの二〇年、しかも物心ついて、AA級の天才――「将来人類社会に多大な益をもたらす発明発見をする可能性八五%」と認定を受けて以来、転機じゃないときがないくらいに忙しく変転してきた人生行路ではあったけれど、今回の転機は掛け値なし、人生最大規模の転機と呼んで誤りではなかった。

ホテル景雅園を出て、Narita国際空港から超音速ジェット機でケープタウンへ着いた花琳は、モリキテックの社員寮――社員八人で分占する、海岸沿いにある古い一軒家にまずは落ち着いた。私物はすでに東京へ移してあったけれど、花琳が使っていた部屋は空いたままだったので、馴染みの寝台で二時間の睡眠をとり、海岸通りのカフェで、メープルシロップをぐじぐじにしみ込ませたパンケーキを食べてから、研究所で何が起こっているのか、鋭意調査に取りかからんとしたところが、驚いたことに、かつ呆れたことには、研究所に近づくこと自体できなかった。花琳だけではない。同じ分占家に住む直属上司のマリア・ストローセン博士をはじめ、アンドロイド開発班の研究員は全員が自宅待機を命ぜられ、研究所へ入れるのは、しばらく前から汎用電脳の管理を委託されて「白い巨人」内に泊まり込んでいる系列会社の人間を除けば、資材搬入の係員や機材の整備員ら、人体で云えば、頭脳ではなく、手足にあたる人員のみ。一般研究員の乗った自動車は認証がなされず、「白い巨人」の門は開かないという。研究所の汎用電脳へも、外部から中枢

誰へは接続ができず、しかしなんとか「奥」まで入り込めぬものかと、プログラミングの専門家が私用の機材で試行錯誤をしている最中だった。

ドクター山萩の頭脳に狂いが生じている。花琳の観測はすでに研究員たちの間で共有されていた。ドクター山萩の電脳網（ネット）への接続を切るべきである旨（むね）も、近年山萩博士と最も密な接触を保ってきたアンドロイド開発班の総意として、役員らには伝えられていた。だが、これまでのところ、切断がなされた様子はなく、そうこうしている間にも、「白い巨人」には、ドクター山萩の指示の下、中身の分からぬ荷物が運び込まれたり、正体不明の人間が出入りしている模様で、少なくともアンドロイド開発班について云えば、「白い巨人」の頭脳たる研究員らは完全に疎外された状態にあった。

休暇なら休暇で過ごしようもあるが、期限の分からぬ自宅待機を命じられた者らは退屈していた。主任（ヘッド）であるストローセン博士がデントランドへ出張して不在と云うこともあり、弛緩した空気が漂うのは仕方がない。研究所が何かトンデモナイことになっている。それは誰もが感じていたけれど、目下の事態は「経営上」の問題が引き起こしたに違いなく、だとすれば自分らが心配してもはじまらない。さような気分が主流だったのは、労働市場でロボット技術者は引く手あまた、モリキテック社にしがみつく理由がない以上、当然の反応と云えた。面倒事があまり続くようなら、他所へ移ればいいだけの話。呑気に構えた研究員らは時間を持て余していたから、花琳が持ち込んだ子猫のドルフィーはたちま

ち注目の的となった。

首飾り(ネックレス)を子猫が飲んだのだが、なぜだか探せない。この問題は工学専門家たちの興味を惹いた。二七歳と年齢が近いせいか、花琳と一番仲のよいマウロ・エゼキエル――南インド出身の材料工学の専門家を中心に検査したところ、たしかに見つからぬ。分占家(シェアハウス)では使える機器に限りがあるにせよ、微粒子レベルの話ではない。花琳の勘違いだろうと云うことで決着しかかったが、マウロが子猫の口腔と喉の部分に、首飾り(ネックレス)の材料とおぼしき金属の痕跡を発見した。さらに回路中枢(CPU)を調べた別の研究員が、この二四時間以内に、子猫が何かを嚥下したのは一回きり、排泄、嘔吐は一度もしていない事実を明らかにした。ここにおいて謎は明瞭に姿を現したが、しかしどう考えても首飾り(ネックレス)大の物体がロボットの内部で消える道理がない。口と喉の金属痕跡には別様の解釈があるはずだと云うのが大方の見解となったのは当然。では、どうしてそんな痕跡があるのか、侃々諤々(かんかんがくがく)の議論が分占家(シェアハウス)の共有空間(コモンスペース)で交わされる一方、さらに詳しく子猫の電脳回路を調べたマウロが、プログラムの一部に外部から接続(アクセス)できない「影(シャドウ)」があると云い出した。「影(シャドウ)」とはまたずいぶん文学的だと研究員らは笑ったが、たしかに容易に接近できぬ領野があるのは間違いなく、それを仕組んだのがドクター山萩であるのも疑えず、なんのためにそんなものがあるのか、一同は首を傾げた。しかし回路中枢がどうであれ、首飾り(ネックレス)の消失と云う、巨大(マクロ)な物理現象とは無関係であると、とりあえず考えるほかなかった。

仲間たちがドルフィーにかまけている間に、花琳は短い睡眠を挟みつつ精力的に動いた。Kiri Kito——すなわちフォギーが電波法違反の容疑で警視庁から全国指名手配されたことは花琳も知って、あの人にとっても電波は無理と、芯城と同じ感想を抱いた。が、指名手配は紛れもない事実、電脳網(ネット)を駆使していろいろ調べたところが、有意味な情報は得られず。驚きはもちろんあったけれど、研究所を中心に渦巻く混乱の大嵐からすれば、もはや何があってもおかしくない状況だとも思えた。

花琳は動力自転車(バイク)で「白い巨人」まで行ってみた。いつも使う西側の通用門に近づくと、普段なら生体認証の検査機(センサー)が作動して門が開くのに、ピクリともする気配なし。一〇米(メートル)の距離まで近づけば、正教会ふう玉葱屋根の無人守衛所から警告の文句(アナウンス)が流れ出た。動力自転車(バイク)から降りて、首を折って見上げた「白い巨人」は、こうして見るとじつに大きい。雲をつく、と云う文句は決して比喩じゃない。高さも高さだが胴体が恐ろしく太い。雨期前の晴天のなか、白亜の大塔は、海に沈みゆく夕陽を受けて仄赤く染まり、天辺の「顔」は遥か洋上を表情なく見やっていた。

花琳は「白い巨人」に出入りする係員の話を聴いてみようと思いたち、海岸通りのカフェでときどき会う、B・スナムと云うスリランカ人に連絡をとった。六〇歳を越えて子供を作ったスナム氏は、双子の赤ん坊を乳母車(バギー)に乗せて約束の海浜公園に来てくれた。で、聞いてみれば、地上整備員(グランドクルー)と呼ばれるスナム氏たちは、決められた時間に地下一階の詰め

所へ行き、電子掲示板に表示される作業を表示された手順に従って遂行するのが仕事だが、この数日間もいつもとべつに変わったことはないと応じた。研究員が自宅待機になっているんだけど、と云うと、それは知っているが、自分らは決められた作業区画にしか入れないので、普段でも「白い巨人」で研究員と会うことはめったにないと答えがあった。機密漏洩防止およびテロ対策の観点から、研究員を含め、人員の動きに関しては徹底した管理があるのはたしかだ。不自然な動きをした者にはたちまち査問がかかる。バスルームの個室にさえ監視の目は光るのだから、息苦しいと云えば息苦しいが、そんなことを云ったら、いまはどこでも働けやしない。いや、そもそも社会生活ができない。立ち入れる場所と立ち入れぬ場所の、身分資格に応じた細密厳格な区分けが社会空間全般に広がっていることは、いまさら云うまでもないよね。

乳母車の防蚊装置の具合が悪いらしく、赤ん坊が蚊に刺されぬよう神経質に気遣いながらも、天然白髪を短く刈り込んだスナム氏は、シブい低音で闊達に質問に答えてくれた。が、「白い巨人」の製造工場がいつも以上に活発に動いているらしいこと以外には、有意味な情報は得られず、徒労だったかと思いつつ、でも、双子の赤ん坊に会って、可愛いモミジの手に触れられたのは嬉しかったなと、花琳が自分を慰めていると、そう云えば、とスナム氏が話し出した。何か変わったことはなかったか、との花琳の問いに応じたものだ。ビイ[illegible]と云うのだ。

「ピアノ？」

頷いたスナム氏は、あれは Steinway & Sons 製の、とてもいいピアノだったと、自分も下手ながらピアノ演奏を嗜むのであると、やや照れたように加えつつ報告した。二九階の音楽スタジオのグランドピアノを、傷をつけてはならぬとの厳重な注意の下、マニュアルに従ってスナム氏たちは六階まで運んだ。

「六階には何があるんでしたっけ？」花琳が問えば、

「偉い人たちのオフィス」とスナム氏は答える。「それから、ゲストルーム」

ゲストルームにピアノ——直感が一閃した。Kiri Kito、すなわちフォギーは「白い巨人」にいるのだ！　とすれば、クレージー山萩の指令をうけた者らがしたことだろう。しかし、なんのために？　クレージー山萩にフォギーに対する「固着」があるのは明らかだが、研究所へフォギーを運んでいったい何をしようと云うのか？

花琳が思案するところへスナム氏が、そう云えばと、花琳の切迫感とは無縁のゆったりした調子でまた口を開いた。

「ゲストルームに『METEO』の連中が泊まっていたな。『METEO』にピアノが弾きたい奴がいたんだろうね」

「METEO」とは何かとの問いに、スイスにある医療関連の系列企業だとスナム氏が云うのを聞いて、それが全脳送信の技術を持つ会社だと、花琳は自らの記憶庫から情報を引き

出した。

「METEO」の連中とは、去年、3Dテトリスの大会で戦った。北京でね。団体戦でこっちが大敗だったけどね」と笑うスナム氏はなかなか気さくな人なのであった。が、花林に感心している余裕はなかった。「METEO」はドクター山獄の治療を担当してもいたはずだ。その会社の人間がなぜ「白い巨人」にいるのか。

フォギーの身に危機が迫りつつある。いや、すでに何事か起こってしまったのかもしれぬ。花林は悪い想像を頭に浮かべざるをえなかった。が、じつはこの時点において、彼女自身、人の心配をしている場合ではないのだった。不安と焦燥を胸一杯に抱えた花林が御法公園から軸力自転車で分け館へ戻ったときにはすでに、彼女にも重大な危機が迫っていたのだ。

[illegible]

子猫よろしく胸に飛び込んで、二人はしばし抱擁を交わし、それから自室に花琳を招き入れたストローセン博士は、「すぐに逃げなさい」と云ったのだった。それもいつになく切迫した調子で。
なぜかと花琳が問うたのは当然。これに対して、白に近い灰色の目をした銀髪の女性博士は、国際電脳網監視機構（ICSO）から呼び出しがかかっているからだと答え、ただしこれは花琳に限らず、ケープタウン研究所の所員全員が呼ばれ、すでに何人かはデントランドのICSO本部へ出頭しつつあると加え、だとしたら、どうして自分だけが逃げなければならぬのか。さらに花琳が訊いたのも当然だ。
「あなたはKiri Kitoと接触を持った。それが理由」
そう云われて、普通なら納得できぬところだけれど、このときすでに花琳は、自分が何かしら事件の渦中に引きずり込まれつつあることを、諦念とも期待ともつかぬ感情のなかで理解していた。
いったい研究所に何が起こっているのか。花琳の問いに、北欧人の工学博士は、よく分からないと首を横へ振り、しかしいまや一研究所がどうのと云った水準では済まない問題が持ち上がっているのであると語った。
「これを人に云うと、わたしはICSOから重い罰を与えられる可能性があるのだけれど、あなただけには教えておきます」と前置きしたうえで、持ち上がった問題とはすなわち、

「大感染（パンデミック）」の再来だと明かした。「大感染（パンデミック）」はまだ来てはいない。だが、到来の予兆がある。

「そのこととKiri Kitoに何か関係があると？」

「ICSOはそう考えているわ」

答えたストローセン博士は、ICSOの外部協力者にすぎぬ自分は情報の濃いところへは接近できぬのだが、昔の恋人が組織の中枢にいるおかげで、二、三の情報が得られたのだと、笑うでもなく説明した。

「東京のホテル景雅園、Kiri Kitoがいた部屋にあなたはいた。正しい？」

「はい」

「ICSOがあなたを捕捉しようとしているのはそのせい」

「わたしを捕捉しても仕方ないと思うけれど。とくに情報はないし」と花琳が云うと、

「ICSOはそう考えていない。あなたの知らないところで、あなたはすでに何かに関与している可能性がある」

かもしれないと、花琳は直覚した。何と判然とは云えぬが、たしかに自分は何かに関与してしまっている。

「とにかく逃げなさい。絶対の確信があるわけじゃないけれど、またそうすべき根拠は明確ではないけれど、綜合的に考えて、そうするのが一番いいと云うのがわたしの判断」

有無を云わさぬ調子で云ったストローセン博士は、とりあえず南極海のサウス・シェットランド諸島にある、南極保健衛生病院へ向かうべしと具体的な方策を与えた。南極保健衛生病院は世界保健機関(WHO)が運営する悪性伝染病の隔離治療病院だ。

「あなたはC－2型下血性インフルエンザの疑いで隔離されたと、ICSOには報告します。それで少し時間はかせげるでしょう。病院の方にはもう云ってあるから」

「わたしはそこにかくまってもらう？」

頷いたストローセン博士は、世界保健機関(WHO)はICSOの介入を許さない数少ない国際機関の一つであり、内部にはデントトランド体制——企業連合体による世界支配に抵抗する集団があるのだと解説した。

「それって、テロリスト？」

「違う。合法的な組織。ただし、一部は非合法組織とも繋がりがあるけれど」

抗老化医療(アンチエイジング)を一切受けぬがゆえに、五〇歳の年齢に相応の、落ち着いた顔立ちの女性の眼から、部屋着の人工絹と同じ色の光が放たれるのを見たとき、花琳のなかで三度(みたび)直感が閃いた。北欧製の骨董家具に囲まれた部屋に電磁波攪乱(スクランブル)がかかっているのをあらためて確認してから、「あなたは、非合法組織と繋がっているの？」と直感を声にした。

電磁波攪乱のせいで虹色に散乱する光のなかに立つマリア・ストローセン博士は、催眠術でもかけるかのように、花琳の眼を凝っと覗き込む。渦をなす虹の光を背中に負った博

士が云った。
「答えられない。答える必要がない」
これはほとんど肯定と同じだと思いながら花琳が頷くと、銀髪灰眼の博士が、南極保健衛生病院に行って以降は、向こうの人間の助言に従って行動せよと、素っ気なく命令したのは、普段の業務で指示を与えるのと同じ調子である。それから黒檀の書机の、丸い文字盤に天使が舞うロココ趣味の置き時計に眼をやった。
「八〇分後に、港からサウス・シェットランドに船が出るわ。それに乗りなさい。必要な手続きはもうすんでいるから」
八〇分は短すぎる！　花琳は心で叫んだ。が、旅支度ならば、五分もかからずにできるわけで、では、何をするのに短いのか、と考えたとき、「この世界」と別れを告げるのに短いのだ、と云う文句がふいに浮かんだ。「この世界」——これにあたる日本語が何かあったはずだなと思えて、しばし頭を巡らせたのち、「娑婆（しゃば）」の言葉を引き出した。そうだ。娑婆に別れを告げるのに短いのだ。娑婆を離れて自分はどこへ行くのか。
急激な不安に捉えられたとき、ストローセン博士が言葉を加えた。
「それと子猫のドルフィーを連れて行くのを忘れないで」
「どうして？」
「ドクター・ヤマハギがあなたに託した以上、あなたが持っているのがいいと思う。あれ

は正気だったドクター・ヤマハギが最後に作ったロボットだから」
ドルフィーを連れていくべきだとは、最前から激しく明滅を繰り返す花琳の直感も同じく囁いていた。猫のドルフィーには何か重大な秘密がある。あるいは「大感染(パンデミック)」にも係わるような。思考を巡らせた花琳は、しかし別のことを口にした。
「正気だった、と云うことは、あなたもドクター・ヤマハギは狂っていると？」
「としか思えない」
「どうしてドクター・ヤマハギを電脳網(ネット)から遮断しないの？　できない理由が何かあるんでしょうか？」
「分からない。でも、議論をしている時間はないわ。わたしはICSOへの報告を六〇分以内にしあげなければならないから」
　そう云うと、書机に向かって座ったストローセン博士は口の前に人差し指を立てて、「喋るな」の合図をすると、机の上の旧式の板状機器(タブレット)をいじって電磁波攪乱(スクランブル)を解除すると、俯いて作業をはじめた。ちらつく虹は消えて、窓のブラインドの隙間から漏れ込む陽光が、木質で統一された室内にあますところなく満ちる。
　急に投げ出されたような、よるべない心持ちになった花琳が、そのまま突っ立っていると、つと顔をあげたストローセン博士が口を開いた。
「大丈夫。自分を信じなさい。自分の才能と幸運を」

会ってからはじめて見せた、母親代わりの上司の懐かしい笑顔に遭い、花琳は少しだけ涙を零した。娘のような部下が、月下で露を帯びる草花のように泣くのをストローセン博士は黙って見詰めた。

「あなたはきっと困難を乗り切れるわ」

また口を開いたストローセン博士は静かな、しかし熱の籠った口調で云い、すると、すぐにいつもの皮肉の影が皺の寄った口元に浮かんだ。

「人類が、この危機を乗り切ればの話だけれど」

73

茅田アリスから支度せよと云われたフォギーは、シャワーのあと、衣料プリンタから出した炭素繊維のジャンプスーツを身につけ、ポリエステル素材の運動靴(スニーカー)を履いて身支度した。それから食品給仕機(フードサーバー)の鰹出汁のきいた肉うどんで腹ごしらえをし、珈琲を飲みつつ待機したが、まだ少し時間があるようなので、最後にもう一度 Steinway & Sons に触っておこうかと思ったが、小部屋にもうピアノの姿はなく、じゃあ何か甘いものでも食べよう

かな、と考えついたところへ、いつもの黒い衣装の茅田アリスが現れた。
「あなたのスタイル、なかなかいいわね」
　左右の細眉を段違いに歪め笑った茅田アリスは平素になく表情豊かである。いつもは生気を欠いて色の薄い唇も心なしか赤いようだ。いいと褒められたフォギーの着たスーツは金属光沢のある藤色、竹林に睨み合う竜虎の地文様入り。背中には「天地有情」と墨黒々の文字。蛍光ピンクの運動靴（スニーカー）と水玉模様の靴下で足下を固め、首に人造絹の純白襟巻（マフラー）をかけた格好は、もちろん本人はいいと思ってそう云うことをしでかしたわけで、高評価に気分をよくしたフォギーが、皮肉を表明しうるＡＩの性能に思い至らなかったのは、世のダサい人の常としてやむを得ない面があります。ちなみに背中の文字は、服の色や模様と同様、襟裏の操作片（オペボ）でもって数万の型（パターン）から選べる。「天地有情」は以前に作ったオリジナル曲の題名（タイトル）。意味は――フォギーにもよく分かっていません。
　曲面壁に現れた通路を茅田アリスに先導されて進むと、セラミック壁の出っ張りに小箱（ケース）が置かれていて、なかの耳飾り（ピアス）を嵌めるよう指示された。銀細工で縁取られた赤い石はルビーのように見えるが、これはつまり電脳網（ネット）端末。虎柄の手鞄（バッグ）には自分の端末一式も入っているが、こっちを使えと云うことらしい。端末でない純然たる装飾用ピアスならフォギーもつけることがある。瞼や唇にする場合もある。が、このところはしていなかったので、ステロイド剤の働きで穴は塞がっている。右の耳たぶに嵌めようとすると、たぶで

CamScannerでスキャン

はなく上部の軟骨に嵌めよと茅田アリスが指示するので、そうすると、かちり音が鳴ってピアス穴が空いて端末は耳に収まった。痛みがないのは無痛針だから。

茅田アリスが赤い石に一度接触してみろと云うので、そうすると、命令画面が中空に浮び出たのは、接眼レンズを使わなくてもいい、遠隔網膜映写及び骨伝導の新式端末だ。製造はZANNON社。これが便利なのは分かっているが、フォギーが使っていないのは高価だから。もしかして、これ、貰えたりして、だったらラッキーと、フォギーがしめしめ感に浸っていると、黄緑色の卵形運搬車が前方に現れて、乗れと云われたので乗った。

久しぶりに幽閉から解かれ出たのは、大きな建物のなかである。無人の運搬車は極光めいた光を放つ天井の下、人気のない幅広の通路を滑るがごとくに進んで行く。茅田アリスは消えて、二人がけの座席を一人で占領したフォギーは端末を試してみた。電脳網には繋がるものの、予想通り、「外」への通信をはじめ大幅に制限がかかっている。運搬車から飛び下りて逃げ出すことはできそうだが、自分がどこに居るのか分からぬのでは仕様がない。艦から出たらそこは地獄でした、ではたまらない。意思なき荷物となって運ばれるしかない。

と、まもなく運搬車は昇降機に滑り込んだ。扉が閉まって上昇する体感が僅かに生じたと思ったら扉が開いて、またも象牙色の通路を進む。やがて本物か疑似かは分からぬが、通路左右の暗色の羽目板壁が眼に入ったとき、おや、ここは見覚えがあるぞよ、とフ

オギーが考えたのは、すなわちモリキテック社ケープタウン研究所だ。一カ月ほど前、山萩氏の依頼で、エレク・メンゲルベルクとレニー・バレンシアと一緒に〈エリック・ドルフィー〉を迎えて演奏した音楽スタジオ。それのある階(フロア)ではないかと思えば、間違いない、運搬車(カート)が静かに停止したのは見知った一画だ。

いつの間にか東京からケープタウンまで運ばれていたらしい。ちょっとばかり驚いていると、通路に出現した茅田アリスが、運搬車(カート)から降りるよう云い、先に立って案内する。黒いスカートから出た生白い臑(すね)を光らせた茅田アリスは、足を包んだ皮革サンダルを遠慮なく響かせる。円形室で足音がなかったのはホログラム映像だったからで、いまはフォギーの装着した端末からの映像および音響なんだろう。ちゃんとついて来てるの、と後ろをたまに振り返る仕草がムーミン・トロールと同じだ。それが可笑しいような不愉快なような、AIから見て自分はそんなに頼りないんだろうかと、心外に思いつつ後からついていけば、AIインターフェースが案内したのは先日の小スタジオではなく、大きい方のスタジオだ。

交響楽団がまるごと収まるほどの、四囲の壁に化粧合板の貼られた直方体の空間は、三辺にバルコニー風の回廊がついて、茅田アリスが導いたのは床(フロア)を見下ろすこの回廊だ。中程まで進んで、手摺を掴んで立てば、広い部屋はすがすがしい木の香気と暖光に満たされ、なかなかに快適だ。器楽演奏に最適な気圧と温度湿度が保たれているんだろう。

見下ろした床（フロア）に人はいないが、艶のある羽目板床の一画に黒いグランドピアノと海洋青（オーシャンブルー）のドラムセットが据え置かれ、傍には焦茶色のウッドベースも寝かせてある。その周囲にアンプやらモニタースピーカーやらが雑然と並べ置かれているのは、明らかにジャズ演奏用の配置（セッティング）だ。反響板が半ばまで開かれたピアノの、鍵盤上のロゴはSteinway & Sonsと読める。研究所にスタインウェイが何台もあるとは思えぬから、円形室に幽閉されていたとき弾いたのと同じ楽器なんだろう。と、そんなふうに観察したフォギーが、で、何がはじまるわけ？　と横に立つ茅田アリスに問えば、黒い衣装の女は、ここには空気があるわ、と応じる。

「空気？」

「そうよ。あなたは空気がないと駄目なんでしょう？」と念を押す茅田アリスが云っているのは、この前『新宿Pit Inn』で交わした会話のことらしい。

「ここには現実（リアル）の空気がある」と茅田アリスは続ける。「あなたにも納得してもらえると思うわ」

自分が何に納得すると云うのか？　疑問に思ったとき、向かって左手の扉が開いて人が入ってくる。肩を越えて伸びた黒髪に漆黒の衣装。靴もストッキングも黒で統一した女は、かつかつかつと靴音を響かせて、まっすぐピアノへ進むと、背もたれのない黒皮革のピアノ椅子に腰をおろす。静かに気息を整えるふうの女は、フォギーの知る人物だ。驚愕

にまるく瞠かれたフォギーの眼に映ったのは――池永霧子。それに違いない。

フォギーが息をのんで見詰めるなか、凝固するかのように池永霧子は椅子にとどまっている。やや俯き加減で、組んだ手を膝に置いた姿勢は、黒ずくめが喪服を連想させるせいか、葬祭に参列した人のようだ。池永霧子は動かない。生動を放たぬあの静止ぶりはただ事じゃないぞ、と観察したとき、真相が理解された。アンドロイドだ！

あたかもフォギーの理解を待っていたかのように、池永霧子はつと腕を伸ばすと、指を鍵盤に下ろし、いきなり弾き出したのはFのブルース。リフの楽句はチャーリー・パーカーの「Billie's Bounce」だ。これはフォギーもよく演る曲。と云うか、一二小節のリフから即興に入ったときには、これは自分の演奏だと気がついた。四年ほど前、電脳空間で開催された「モントルー・ジャズ祭」に出演したときソロで演奏した「Billie's Bounce」は、３Ｄ動画の形で配信されている。いま池永霧子が弾いているのはその写しだ。つまりはロボットが自分のオリジナル演奏を再現しているわけで、そうと分かってしまえば、さほど驚くべきことではない。十九世紀の巻紙式ピアノだって凄い演奏をして見せたのだ。とは云うものの、フォギーはやっぱり驚いてしまったので、つまりは自分の個性と云うか、癖と云うか、グルーヴ感と云うか、そうしたものが完璧に再現されているのを目の当たりにしたからだ。

はじめは、もしかしたらピアノも池永霧子も３Ｄ映像で、音は骨伝導かもしれぬと疑っ

たのだが、命令画面（コマンドスクリーン）を呼び出し、電脳網（ネット）を切断しても、池永霧子が変わらず演奏を続けるので、現実（リアル）だと確認できた。そう思って見やれば、アンドロイドの、顔に落ちかかる髪を楽句（フレーズ）の切れ目で掻き揚げる仕草や、左手が激しく動くときに左肩ががくんと下がる格好など、映像で見る演奏中の自分そのものだ。疑似現実の分身（アヴァター）もそうだったが、「池永霧子」はそもそもフォギーと背格好が同じなのだから、いよいよ自分と瓜二つに見える。まったく気味が悪いと云うか、驚くと云うか、しかし驚くのはまだ早かったと、まもなくフォギーは思い知ることになります。

演奏を終えた池永霧子は、即座にピアノを離れ、またもや靴音を響かせつつもと来た扉へ消える。それを見届けてから茅田アリスがフォギーに向かって云った。

「今度はあなたが弾いてみて」

「それは、でも、どうなのかな」とフォギーが曖昧に応じたのは、自分もプロの端くれ、ただで弾くわけにはいかんぜよ、ギャラが出んとね、とこう考えたから。しかし目下の状況においてそうした主張が通るかどうかは怪しい。と云うか、たぶん通らないわけで、じゃ、こっちへ来て、と云って、茅田アリスが回廊からいったん出て、アルミ合金の階段を下っていくのに仕方なくついて行けば、歩きながら茅田アリスが、「あなたにはスコット・ラファロとロイ・ヘインズと共演してもらうわ」と云う。

「どういうこと？」とのフォギーの質問には応ぜず、

「準備にまだ少し時間がかかるみたいだから、ここでちょっと待っていてくれる」と告げて茅田アリスがフォギーを導いたのは、硝子窓の向こうに大スタジオが見通せる調整室だ。小スタジオの調整室に較べてだいぶ広く、一画には千駄木の山萩邸にあったのと同じ発光茸みたいな操作卓（コンソール）と、クローム鍍金が艶やかに光る繭型の接続端末装置（ＡＴＳ）が置かれている。

なんでＡＴＳがあるんだ。不審に思ったフォギーが、しかしなにより虚を衝かれたのは、人がいたこと。いや、本当に人かどうか、最初は分からなかったが、とりあえず見かけは男性である人物が三人と、女性である人物が一人、部屋にはいて、据え置かれた機器に向かってなにやら作業をしている。フォギーが入室すると、金髪巻髪の女性がにこやかに挨拶して、自分は『METEO』のバーバラ・ウェルスであると名乗り、フォギーの命令画面（コマンドスクリーン）にＩＤ認証の印が点滅した。大昔のハリウッド女優を思わせる、完璧なスタイルと恐ろしいまでの美貌は、アンドロイドっぽいが、ほかの三人を含め、どうやら生身の人間らしいと判断したフォギーは戸惑わざるをえなかった。とは、つまり、自分は拉致幽閉された者であって、すなわち犯罪的行為の被害者であって、助けを求めるなり警察へ通報してもらうなりした方がいいのでは、と考える一方、幽閉されたと云っても場所は馴染みのモリキテック社研究所であり、しかも助けを求めるべき部屋の人たちが、フォギーがここにいるのは当然至極とみなすふうで、ここでいきなり「助けて！」と叫ぶのも変な感

じになりそうである。

　と云う次第で、フォギーは勧められた椅子に大人しく腰を下ろし、バーバラ・ウェルスが珈琲を運んできてくれたので、まずは様子を窺うべし、と頼りなく方針を定めて珈琲を飲んだ。それにしてもバーバラ・ウェルスと云う女はもの凄い美人だ。正面から顔を覗き込まれると、同性愛的志向のないフォギーでもドギマギしてしまう。しかもこの女が、やたら人の顔を覗いてくるから困った。フォギーは眼を逸らすのだが、油断すると造化の奇跡とも云うべき美貌につい眼が行ってしまう。どうせ整形なのだから、そんなに感嘆する必要はない。自分だってその気になって、お金さえ出せば、あれくらいはいけるぜ。と、そうは思ってもやはり驚いてしまう。それで繰り返し見ているうちに、バーバラ・ウェルスの顔がちょっとゴジラっぽく思えてきた。あれれれ、どう云うことだと考えた末、なるほどな、完璧な美と云うものはほんの僅か平衡を失すればもろくも瓦解してしまうのだな、などと美学上の一真理に到達するうちに時間がきたらしい。

　硝子窓からスタジオを見やれば、いつのまにか男が二人現れて、一人が弦バスを引き起こし、もう一人がドラムセット前に座る。一人は白人、一人は黒人で、二人とも昔風にネクタイを締め上着（ジャケット）を着ている。

「あの人たちは？」フォギーがいつの間にか傍らに立っていた茅田アリスに問えば、すぐに答えが返ってくる。

「スコット・ラファロとロイ・ヘインズ」

ええっ、なんですと？　驚愕しつつよくよく眺めれば、なるほどそうであるらしい。二人はそれぞれ楽器の調整に余念がない。

「つまり、と云うことは、あれなの」フォギーは二人のジャズ演奏家（プレイヤー）に呆然と視線を据えたまま問うた。「彼らもアンドロイドなの？」

茅田アリスは首を傾げるようにして頷いた。それから云った。「空気の振動を存分に感じてみて」

74

グランドピアノの前に座ったフォギーは、いつものように、春風に揺れる柳を想像（イメージ）しながら深呼吸をして、それから鍵盤に指を下ろし、まずはいくつかの和声（コード）をさらさらと鳴らしてみた。円形室に続く小部屋でも思ったのだけれど、Steinway & Sons にしてはやけに鍵盤が軽すぎるが、スタジオの音響は悪くない。清明な光に満たされた中空に音の気球がふわり浮かんで高い天井に撥（は）ね返るのが心地よい。いったん鍵盤から手を離し、誰にと

CamScannerでスキャン

もなくひとつ頷いて見せたフォギーは、「Waltz for Debby」のリフをゆったり目のテンポで弾き出した。

曲の選択はフォギーに任されて、何を弾こうか直前まで迷っていたのだけれど、「Waltz for Debby」にしたのは、ベーシストの顔を見たから。紺色の上着に細めのネクタイを締めた短髪の白人は、スコット・ラファロ——かどうか、姿形だけでは分からなかったが、命令画面を呼び出して確認すれば間違いない、「Rocco Scott LaFaro（1936〜1961）二十世紀モダンジャズ史に名を刻むベーシスト。ビル・エヴァンス・トリオでの名演は歴史に残る」と説明が出る。

「Waltz for Debby」はビル・エヴァンスの手になる名曲、スコット・ラファロが加わったトリオの演奏は、一九六一年のニューヨーク「ヴィレッジ・ヴァンガード」でのライブ録音で聴ける。フォギーもさんざん聴いてきた演奏だが、ピアノとベースの織りなす和声とリズムの叙情的なスリルにはいつも感心させられる。ちなみにこちらのドラムスはPaul Motian（1931〜2011）。

弾きはじめてから、「Waltz for Debby」はちょっと当たり前すぎたかなと後悔したが、いまさら遅く、最初の三二小節をソロで演奏して、サビに入る寸前、ベーシストにちらり視線を送れば、スコット・ラファロは東洋人の女などにはまるで関心なさ気に、楽器にもそれがかかるような格好で俯いている。と思ったら、サビに入ると同時に、つうんと、

弦が弾かれて、そこからは折目正しく和声を支えてくる。まずはよかったとフォギーが安心したのは、ロボットがちゃんと演奏に入ってこられるか心配したからで、この辺りはフォギーの人の良いところと云ってよいです。そもそも「Waltz for Debby」を選んだのも、ウォーミングアップもそこそこに演奏をはじめたのも、アンドロイド共演者に気を使った結果なのでした。

リフの最後では、原曲どおり、三拍子から四拍子へ切り返して、頭へ戻れば、今度はロイ・ヘインズ――こちらも検索でRoy Haynes（1925〜20××）と確認できた――がブラシで入ってくる。ブラシで正しいリズムを刻むのには、スティックを使うより微妙な加減が要求されるらしいが、ロボットは難なく障害を越えてくる。滑らかながら切れ味の鋭いドラミングに乗って、ベースは4ビートのリズムを軽快かつ力強く刻み、寛いだ空気のなかに靭い糸が緊密に張り巡らされる、ピアノトリオに特有の気分が現出するならば、相手がロボットであることをフォギーは忘れ、音楽の渓流に即興の舟を進ませることに没頭する。

スコット・ラファロは俯き加減で焦茶色の楽器にしがみつき、いかにも集中しておりますと云う格好だが、ロイ・ヘインズの方は、濃いサングラスをかけたせいで表情の分からぬ顔をアサッテの方向へやって、なんだかやる気がなさそうにも見える。が、ブラシを動かす手さばきは正確無比、ピシパシ差し挟まれるオカズがじつに小気味よい。と云う次第

CamScannerでスキャン

で、つまるところ「共演者」たちは悪くなく、いや、けっこうよくて、ほどなくフォギーは自分でも吃驚するくらい調子が出てきた。いきなり拉致され幽閉されたあげく、ロボットと一緒に無理矢理ピアノを弾かされる。あらためて考えれば、とても演奏どころの話じゃないはずだが、場所柄時を選ばず音楽魂が突発的に発火燃焼するあたり、ジャズ者に特有の精神の発露と云ってよいと思います。まあ演奏場所が全然知らぬわけではない、ケープタウン研究所内のスタジオであるせいもあるだろう。

　演奏しながら、自分、ちょっと上手くなったかも、とフォギーは感じていた。鍵盤が非常に軽くて、それはそう云う調整がなされているからだろうが、軽すぎるピアノは上滑る感じになることがままある。べらべら弾きまくって、結果薄っぺら、と、そう云うふうになりがちである。ところが、軽いのに深い音が出せている。柔らかいのにエッジの利いた楽句が繰り出せている。その感覚は、以前は潜れなかった海底にすいと泳ぎ入れるようになった、あるいは空を浮遊して二、三米高く飛んで景色が少し変わった、そんな感覚だろうか。

　ジャズ・ピアノをはじめたばかりの頃は、上手くなりたい一心で練習したから、ああ、上手くなったなと、実感することはときおりあった。職業演奏家で活動をはじめてからも、目標にした技術的な課題を超えたと思える瞬間はまれにあって、しかし三〇歳を過ぎてここ数年は停滞気味、マンネリ気味だったから、上手くなった感が得られたことは率直

に嬉しかった。やっぱりモーツァルトを稽古したのがよかったんだろうか、と考えれば、拉致幽閉も悪くなかったとさえ思えてくる。わけの分からぬ状況下、ロボットと一緒にピアノを弾けなどと云う理不尽な要求に素直に自分が従ったのは、この上手くなった感をたしかめてみたいとの気持ちがあったからかもしれない。と、そう気がついたフォギーは、わたしって転んでもタダでは起きない奴？　と調子に乗りつつ、二コーラス目からはバッパーの地金を出し、若干テンポをあげてガシガシゴリゴリ行けば、ロイ・ヘインズはブラシから木のスティックに持ち替えて、金色のトップシンバルをきらきらと羽撃(はばた)かせ、スコット・ラファロはあくまで冷静沈着、単調になりがちな和声(コード)に微妙な彩りを与えつつ、落ち着き払ってリズムを保持(キープ)する。

二コーラス演(や)って、ソロを譲れば、当然のようにスコット・ラファロは即興ソロを開始し、いったん叩きやめたロイ・ヘインズは相変わらずアサッテの方向へ顔をやったまま、またブラシを手にしてソリストを鼓舞する。スコット・ラファロは弦バスの低中音域を中心に、過剰に飛び跳ねない楽句(フレーズ)でソロを編み、指を弦に滑らせる動きがときおり挟まってアクセントを作り出す。ちなみにフォギーはズシンズシンとくる剛厳なベーシストが好みで、音程を探るがごとくに指を弦に滑らせる癖のある演奏家(プレイヤー)は好きではない。だから二十世紀ジャズ巨人(ジャイアンツ)たちのなかではロン・カーターが嫌いだ。やたらと指を滑り散らかす剽軽(ひょうきん)なベーシストを見ると、なにツインツインやってんだ、クツワムシかよと、よく意味の

CamScannerでスキャン

分からぬ悪態が口をついて出る。けれどもいま傍らのベーシストが奏でつつある楽句（フレーズ）に混じるそれは悪くないと思えるから不思議だ。

先日の〈エリック・ドルフィー〉のことを思えば、いまさら驚愕すべきではないわけだけれど、ロボットとはとても思えぬ。フォギー永年の偶像（アイドル）、スコット・ラファロその人が生きて甦ったとしか思えぬ。スタジオの清澄な空間に溢れ出た音楽に浸される一方、頭のどこかでは、ああ、やっぱり所詮は機械だな、と思わせるところはないかと、フォギーは鵜の目鷹の目、意地悪く観察してもいたのだけれど、どうにも見当たらぬ。唯一、ロイ・ヘインズが顔を一貫してあらぬ方へ向けているのが機械っぽいと云えば云えるが、その彼にしてもスネアドラムに粘つくブラシの動きは剛強かつ柔粘、大胆かつ繊細、とても機械のなせる業ではない。

一コーラス即興ソロをとったところで、スコット・ラファロが微かに顔を頷かせて合図を寄越し、フォギーは4ビートのリズムに乗ったまま主題（テーマ）へ戻って弾き出した。このあたりの受け渡しもじつに自然で、今回は違う方向へ音楽を導いてやれ、などの邪悪な考えは浮かばず、最後はテンポを落とす形ですんなり演奏を終えたところへ、茅田アリスがやって来た。

どうだった？　と訊くから、悪くなかった、と答えると、黒ずくめの女は顔をやや輝かせるふうになる。AIを喜ばせる必要はいささかもないわけだけれど、彼らはなかなかや

りよるの、とりわけスコット・ラファロの音列は、オリジナルの写しなのではあろうが、絶妙でござったの、とヘンな武士言葉になって褒めたのは照れたから。何に対して照れたかは不明です。

「あなた自身の演奏はどうだったの？」と次に茅田アリスが訊いてくるので、こちらも悪くなかったと答えれば、

「よかったわ！」と今度は明らかに悦びが表現される。

「やっぱり音楽は生じゃないとね」とフォギーが不必要な言葉を添えると、

「空気でしょう」と茅田アリスが云うから、

「そうね、空気ね」と応じれば、「じゃあ、もう一曲、お願い」と茅田アリスは云う。いやいやいやいや、それはちょっとあれです、さすがにプロの立場上、ノーギャラでそうは弾けんぜよ、事務所を通してくれんと。と、そう云おうとする前に茅田アリスは消えてしまう。代わりに調整室脇の扉から水色の作業衣の男が二人、椅子を運搬車に載せて運んでくる。なんだと思う間もなく床に椅子が並べ置かれて、男たちはピアノの前のフォギーに挨拶することもなく迅速に去る。

　すると今度は調整室とは反対側の扉が開いて、かつかつと高い靴音が響き出したのは、渋い色の背広に地味なネクタイの黒人が歩いてきたから。と思えば、彼のすぐ後ろにまた人が続いて、靴音が入り乱れるなか、次々と男らが入ってくるのは音楽家だ。と分かった

のは、彼らが揃って楽器を手にしていたから。テナーサックス、アルトサックス、トランペットにトロンボーン。色や形は少しずつ違うものの、一様にネクタイに上着の男たちは、軽量プラスチックの椅子に腰を下ろし、それぞれの楽器を黙っていじっている。

「本番はここからよ」とまたいつのまにか横に立っていた茅田アリスが耳元で囁いた。

「この人たちは？」

「ドリーム・チームよ」

「ドリーム・チーム？」

「そう。紹介します。Dream Team of Jazz All Stars！」

茅田アリスが小さく叫んだのを合図に、先刻からずっとドラムセットの向こうに座って、アサッテの方を向いて待機していたロイ・ヘインズが、速いテンポのシャッフルを叩き出した。

CamScannerでスキャン

が多いが、なかには白人も混じって、制服ではないものの一様に暗色の上着とネクタイで身を固めた男どもが勢揃いした姿はなかなかの迫力であるが、迫力があるのは、それもそのはず、二列になった前列一番端のアルトサックスは、間違いない、チャーリー・パーカーだ！　二人おいて坐ったテナーサックスはジョン・コルトレーン！　後列の小柄なトランペットはマイルス・デイビス！　その横の眼鏡の黒人はディジー・ガレスピー！

いちいち「！」をつけなくてもいいわけだけれど、古典ジャズファンであるフォギーの心情を察すれば、そうなるのは仕方がないよね。チャーリー・パーカー以下は映像で見知っていたが、ほかのメンバーはすぐには誰だか分からない。が、いずれ劣らぬ名のある演奏家（プレイヤー）であるのは疑えなかった。

ためしにコルトレーンの横の、妙ににやけた感じのする七三分けの白人を検索してみれば、Stan Getz（1927〜1991）と出る。でた、ゲッツだあ！　と思いつつ、さらに横のバリトンサックスの金髪を引けば、Gerry Mulligan（1927〜1996）と表示される。後列に四人並んだトランペットは、Miles Davis（1926〜1991）と Dizzy Gillespie（1917〜1993）のほかの二人は、Clifford Brown（1930〜1956）および Lee Morgan（1938〜1972）。前列には黒人のギター奏者も一人いて、これは Wes Montgomery（1923〜1968）。

こいつはたしかに、掛け値なし、正真正銘のドリーム・チームだ。二十世紀ジャズ

巨人（ジャイアンツ）たちの大集合。フォギーはふと先日の架空墓（ヴァーチャルトゥーム）での一場面、新宿駅西口に怪獣が集合した場面を思い出し、なんでもかでもやたら一所に集めたがる男の子気質を感じとれば、なんだか可笑しくなってしまう。夢の野球チームに夢のサッカーチーム。夢の格闘技戦に夢の英雄（ヒーロー）対決。夢の艦隊決戦に夢の剣豪トーナメント。そして夢のビッグバンド！

まったくコドモだぜよ。と呆れつつも、これだけの数のアンドロイド（で間違いないと思う）が一遍に集合したとなると、気圧（けお）されると云うか、空恐ろしい印象は避けられぬ。だが、ピアノの前に座ったフォギーにじっくり観察をしたり、怖がったり、男児的蒐集癖の由来につき考察している暇はなかった。ドラムスのシャッフルが切迫する感じで続いたからだ。こう長く叩かれると、何事かはじまらぬことには済まされぬ感じになってきて、しかも椅子に勢揃いした演奏者（プレイヤー）らは、ちらちら視線をこちらへ寄越して、ピアニストがきっかけを出すのを待っているようなのだ。大半は、まあどうでもいいけど、と云った超然たる顔つきではあるが、視線の矢がつんつんと突き刺さってくるのは間違いなく、マイルス・デイビスなどは、楽器のバルブをかちゃかちゃさせながら、ギョロ目でこっちを睨んでいるのだからびびる。そんなに睨まれてもと、弱っていると、目の前に蛍光緑色の譜面がぷんと浮かび出た。

曲名欄は「Tadd's Delight」。以下、五線紙におたまじゃくしが並んだ楽譜は、4／4拍子、♭が四つ。「Tadd's Delight」を急ぎ検索すれば、Tadd Dameron（１９１７〜１９

ち」の手になる楽曲も出る。タッド・ダメロンは北米界Bop時代を代表するピアニスト兼作曲家。フィギーも「Lady Bird」や「Hot House」など、彼の曲は何度も演奏したことがある。

「Tadd's Delight」は演ったことはなかったが、ざっと見て、ブレークがあるくらいでとくに変則的仕掛けはなさそうである。〈Intro〉と書かれた最初の八小節にはコードだけが記されているので、つまりイントロはピアノに任されていると云うことだと見てとったフィギーは、ドラムスのリズムにせかされるまま楽句を繰り出し、すると演奏者たちは楽器を構え、イントロ八小節の終わりで、譜面通り、半拍を喰う形で、管楽器群が一斉に頭を吠えた。

途端、おおおおっとフィギーがのけぞったのは、音の波動に背筋を貫かれたからだ。しかし、なんて響きだ、がつんと衝撃が脳にぶちあたれば、煌めく黄金の粒子が飛び散ってあたりが一気に輝いて、眩い光が溢れる。艶やかで強靭な鋼の線条が自在に編み込まれ、楽句を生き生きと弾ませる。滑らかな大絨緞の手触りを持ち、破壊力抜群の爆弾群、増抜かれ肌理細かな輪郭を持つに至った灼熱の火球。考えてみれば、フィギーがビッグバンドと共演したのは、七、八年は上前、横浜在住の素人が結成した「高山音楽研究会」の発表会にエキストラで呼ばれ、カウント・ベイシーの曲などを弾いたきりで、素人とはいえ、「高山音楽研究会」は名手揃い、なかなかの音を出したが、平均年齢[illegible]

から力感は欠く。であるのに対して、こちらはなにしろアンドロイド、力感だけはとにかく半端じゃない。もちろん力感だけではなく、響きの良さ、リズムの正確さも素晴らしく、なにより大切なスイング感が素晴らしい。

音響シンセサイザーを使えば、強力なビッグバンドサウンドを作成することは容易だ。しかし、同じ機械製とは云え、それとこれでは根本的に異なる。何が異なるのか、と真正面から問われると、簡単には答えにくいけれど、なにしろこちらは金属の鋳物である現実(リアル)の楽器が鳴らされているわけで、個々別々の楽器がそれぞれ空気を震わせ、個々別々の波動が空中でブレンドされることで強い酒のごとき芳醇なグルーヴが生み出されている、と、そう云いうるかもしれない。そう、つまりは空気だ！　空気の振動だ！　どちらにしてもこれだけの音は一流プロの人間演奏家(ヒューマンプレイヤー)を集めたってそうは出ない。機械ごときにこんだけやられていいのか。おいおい人間様は大丈夫なのか。と不安に思ったのは、しかしほんの一瞬間、まもなく最初の主題(テーマ)が終わってブレイク、そこへ勇躍飛び込んだトランペットが即興ソロを開始すれば、フォギーはまたもや、うおおおおっとのけぞった。

立ち上がって吹き始めたのはクリフォード・ブラウン。冒頭から動きの激しい難楽句(フレーズ)を楽々と奏でていく。しかしなんて艶やかで輝かしい音なんだろう。ピアノでリズムを刻みながら、フォギーは詠嘆する。二十世紀ジャズ巨人(ジャイアンツ)たちのリストに名を連ねる数多(あまた)のトランペット奏者、なかでも最もまろやかな音色と卓越した技術を持つのがクリフォード・ブラ

ウンだと云われる。アンドロイドでその個性がどこまで再現されているのか、その辺はちょっと分からぬが、いま繰り広げられつつある即興演奏がBe Bopスタイル最良の演奏であることだけは疑えぬ。トランペットの即興ソロは二コーラス目に突入して、サックスとトロンボーンがバッキング楽句を奏でるなか、金管の響きはいよいよ磨き抜かれた純金の輝きを放ちつつ頂点を極め、後ろの管がしだいに音数を増やし厚みを増して、主題最後の八小節が全員一塊となって奏されるや、再びブレイク！

続いて飛び出したのはディジー・ガレスピー。ベルの先が上向きに曲がった変型トランペットを、牛蛙みたいに頬を膨らませて吹く姿は映像で見たそのままだ。高音域を使いまくり、超絶技巧をこれでもかとばかりに見せつけるようにして速い楽句を次々と繰り出し、あっと云う間に二コーラスを駆け抜けて、三度目のブレイクで登場したのはアルトサックス。黒髪の白人優男は、Art Pepper（１９２５〜１９８２）、西海岸の名手だ。ウエスト・コーストジャズ大好きの大伯父の影響で、フォギーはアート・ペッパーの演奏はさんざん聴いて耳に馴染んでいる。冷然と光る剃刀を思わせるこの響きは、なるほどたしかにアート・ペッパーだ。音数はさほど多くなく、溢れんばかりの華やかさはないけれど、音の結晶の切面がぎらり凄みを帯びて輝く。アルトサックスのソロは二コーラスで終わって、そのままソロを受け取ったテナーサックスはジョン・コルトレーン。やや苦みを含んで図太い、濃厚な響きが皮膚から肉を透過して骨に直接じんじん響いてくる。するとまた

CamScannerでスキャン

総奏(トゥッティ)からブレイクになって、次のソロはトロンボーン。椅子から立ち上がったギョロ目の黒人はJ.J. Johnson（1924〜2001）。最初の楽句(フレーズ)が大きなベルから飛び出た途端、伸びやかで暖良な響きが一遍に辺りを包み込んで広がる。軽々と吹いているのに音が異様にでかい。トロンボーンの後はバリトンサックスのジェリー・マリガンが立ち上がって、楽器の巨大さに似合わぬ木質で繊細な楽句(フレーズ)が紡ぎ出されていく。

で、次はいよいよピアノのソロ番だ。と分かったのは、ピアノに一番近い端に居るチャーリー・パーカーが目で合図してきたからだ。すでにフォギーは、チャーリー・パーカーがバンドの頭目(リーダー)であって、ソロ順が彼の指示で決められていることに気がついていた。もっともチャーリー・パーカーの専制と云う訳でもないようで、と云うのは、ディジー・ガレスピーのあと、後ろを振り向いたチャーリー・パーカーが合図したのへ、マイルス・デイビスが難しい顔で手を横に振ったりしていたからだ。ソロはやりたくないと云う意思表示だろう。たしかにこの底抜けに明るいBe Bopの曲にマイルスのトランペットは向かないかも。この辺り、ロボット同士がいかなる原理でコミュニケーションを取っているのか、フォギーには見当がつかぬわけだが、とにかくこんな凄いメンバーに混じって、ましてや神様チャーリー・パーカーから指示を出されては、ソロはやりませんと云うわけには

——相手がロボットだと考えれば——いく、とも云えるわけだが、圧倒的な演奏の迫力に遇して、やはり出ていくしかない感じになったのは、筋目正しいジャズ者の魂からして当

熱いよね。

伴奏からブレイク！　二小節の空白にフォギーは高音から三連符で下降する流麗な楽句で切り込んだ。が、そこからの即興は、鍵盤の狭い幅だけを使って単音を刻む、雰 雰雰に特有の音列でもってソロを組み立てる。余剰を削ぎ落とし、左手のリズムうちも最低限に抑えた「禁欲的な」音の作りはフォギーの最も得意とする演奏。この編成だとベースとピアノは生音では辛いが、どうやら直貼の小型集音機が仕込んであるらしく、背後に置かれた拡声器から音が出ていて演奏はしやすい。ＰＡロボットがきちんと制御しているんだろう。大型船のごとき推進力を有するベースと、ぴしぴしと神経に絡みついてくる切れ味鋭いドラムスに支えられて、自分でも驚くほど輪郭のくっきりしたピアノの響きが耳に突き刺されば、フォギーはすっかり調子を出してしまい、二コーラス目に入ったところで和声から大胆に逸脱した音列を繰り出し、左手も激しく動かして、フリーっぽいソロを繰り広げれば、イケテル感が猛然と湧き上って、灼熱の血流が血管を行き来するのを感じつつ、バンマスに目をやると、もっといけいけと云うふうに顔の前で手を振っているではないか。この面子でピアノだけが長くソロをとるなどは通常ありえぬが、チャーリー・パーカーに促されたとなれば躊躇っている場合ではなく、三コーラス目に突入したフォギーは、管のバッキングに煽られてさらにがんがん行き、ついに四コーラス目、ブロックコードから左手右手のユニゾンで楽句を叩き出すと云う、実戦ではやったことのない技に繋げ

CamScannerでスキャン

た後、肘打ちの荒技で止めを刺せば、ロイ・ヘインズがビッグバンド・サウンドにふさわしい派手やかなドラムソロを取る。暴れ回るシンバルから金色の蝶の群れが飛び立ったあと、ここぞの時機を全員が捉え、管楽器群が一斉に主題に突入して、最後は譜面通り、ブレイク楽句でぴしっとカットアウト！

Yeah!とフォギーが心で叫んで、椅子の演奏者たちを見やれば、声こそないものの、メンバーが白い歯を見せながら、フォギーに向かって「Good」の印に親指を立てているではないですか。事前にプログラムされているとは云え、この辺りはとてもロボットの振舞とは思えぬ。ディジー・ガレスピーなどは天真爛漫な笑顔を大きく頷かせながら拍手をしてくれる。いい人だ。人じゃないが。つまるところ、ピアノ、よかったぜ、と云うわけで、機械から褒められてもな、とは思ったものの、顔が綻ぶのをとめられない。実際久しぶりに手応えがあったのは間違いなくて、単純に嬉しくなったフォギーは、誰にと云うわけでもなく、椅子の上でぺこりとひとつ頭を下げた。

ほどなくバンドメンバーたちは、じゃ、とりあえず仕事は終わりましたんで、とでも云うかのような素っ気なさで椅子から立ち上がり、楽器を抱えてもときた扉へぞろぞろと歩き出す。ロイ・ヘインズとスコット・ラファロも引っ込む。そこへ入れ替わりに現れた茅田アリスが、とてもよかったわ、と賞賛して拍手した。ぱちぱち掌を打つ音が広いスタジオに響くが、こちらは空気の振動ではなく、骨伝導の設計音響だろう。あ、どうも、とピアノ椅子に座ったままのフォギーが返事をすると、拍手をやめた茅田アリスは嬉しそうに笑う。

「あなた、もっと弾きたいんじゃない？」と云われれば、これは図星であった。ここぞのところへ大胆な楽句（フレーズ）を思い切って叩き込み得た満足と興奮があって、演奏中に得た「上手くなった感」を、もう少し確かめてみたい気持ちが生じていたのは事実。

「みんなは？」軽量椅子の列を眺めつつ訊いて、ロボットを「みんな」と仲間ふうに呼ぶのはいかがなものかと、たちまちフォギーは居心地悪く反省した。人間ならば、仕事が終われば酒を飲んだり女を抱いたりクスリをやったりいろいろなんだろうが、ロボットの場合はどうしているのか。どこかで油でもさしているのか――とは時代錯誤にすぎる像（イメージ）ではあるが、全体どうも想像がつかないな、などと考えているところへ茅田アリスが云う。

「あなたが演奏したいのなら、もう一回呼んでもいいけれど」

「呼べるんだ」と応じはしたものの、そこはフォギーもプロ、もし弾くなら、今度こそギ

ヤラのことを云わないとな、と思っているところへ茅田アリスが言葉を重ねた。

「さっきのバンドはあなたのバンド。あなたが好きなように使っていいのよ」

「わたしの、って、それ、どういうこと？」

「だからあなたのために作られたバンドなの。あなたのやりたい曲をやりたいアレンジで自由にやっていいのよ。あなた、やりたい曲、あるんでしょう？」

たしかにフォギーには古典的(クラシック)な編成でやってみたいオリジナル曲の発想(アイデア)がいくつかある。もちろん演奏者が千人必要なオーケストラ曲だって、市販ソフトで簡単に作れるが、即興の集団インプロヴィゼーションを組み込むとなれば人間が集まるしかない。しかしいまどき多数の人間を生(リアル)で集めることは、物理的にも財政的にも難しいのが現状だ。だから自分がバンマスでセッション集団(グループ)を組織し演奏することは、いまのところ夢にとどまっているわけだけれど、しかしこの夢をどうして茅田アリスが知っているのか、と云えば、そんな話を以前に山萩氏にしたことがあるからなんだろう。それにしても先刻のロボットたちはどれくらいやれるのか。本格的な、とは、つまり一寸先は闇の、次に何が起こるか分からぬインプロヴィゼーションの現場にどれくらい対応できるんだろうか？

「彼らの実力の水準は」茅田アリスがフォギーの内心の動きを察したように解説した。

「この間、あなたが一緒に演(や)ったエリック・ドルフィーと同じくらい。でも、学習を重ねていけばどんどんよくなるわ。あなたがコーディネートして、演奏を重ねていけば、あら

ゆる場面に対応できるようになるはず。あと、メンバーはほかにもまだいろいろいるなから、ドラムスだったら、トニー・ウイリアムスとか、エルヴィン・ジョーンズとかね」

ここにおいてフォギーは、自分を一〇日余りも研究所内に幽閉したのは、これらのアンドロイドを準備するためだったのだと理解し、しかし一体どれだけ費用がかかったのだと思えば空恐ろしくなる。

「またずいぶんと作ったのね」と皮肉っぽい言葉が口から出たのは、むしろ得体の知れぬ恐怖に胃袋を掴まれたせいだ。一方の茅田アリスはまたも嬉しそうに微笑んで、それから歌うように云った。

「あなたには船に乗ってもらうわ」

「船？」

「そう。客船ね。さっきのバンドメンバーと一緒に客船に乗って演奏して欲しいの」

唐突な提案に戸惑ったフォギーが、そんな急に船と云われてもと、口をもごもごさせるのに構わずＡＩインターフェースは語を継ぐ。

「一流のミュージシャンと船で仕事をしながら、世界一周するのがあなたの夢なんでしょう？」

たしかにそんな夢を山萩氏に向かって語ったことがあった気もする。船の仕事はこれまでもときどきしていて、しかし大概は、スタジオ演奏を船のラウンジの３Ｄホロで映し出

す方まで、実際に乗ったのは一度だけ。〈ポセイドンIX世号〉と云う大型客船に、シンガポールから上海までの三日に限って乗船したことがあって、非常に楽しかった。このときはピアノトリオに二管を加えた五重奏団(クインテット)だったのだが、若い共演者たちはみなモダンジャズ好きで、ヤル気があって、こんな人たちと一緒に切磋琢磨しつつ世界中を旅することができたらどんなにいいだろうと思った。仕事の合間の夕暮れ、ちょっと可愛いウクライナ人のテナーサックス奏者と一緒にミモザを飲みつつ甲板から眺めた東シナ海の夕陽は忘れ難い。とは云え、仕事となると楽しいだけではすまぬわけで、このときも素人(アマチュア)ジャズ・ヴォーカル・コンテストなる行事(イベント)の伴奏をさせられ(現実(リアル)の生バンドが伴奏につくのが売りだったわけだ)、やたら注文の多い金満ババア(下品な表現でなんですが、実際フォギーはこの文句(フレーズ)を船のトイレで口にしたのでした)がいたりして大変だったが、フォギーの船好きは間違いなく、そんな話を山萩氏にしたのもたしか。

「船はもう港(ハーバー)に来ているわ。いつでも出航できるようになっている」と茅田アリスが云う港(ハーバー)とは、「白い巨人」に接したモリキテック社専用の港のことだろう。

「船に乗るって、仕事をするってこと?」フォギーの慌(あわ)て気味の問いに、一拍置いて茅田アリスは応じた。

「あなたがそう考えたいのなら、それでもいいわ」

「だったら事務所を通してくれないと」と云えば、

「いいわよ」と簡明な返事がある。が、目下の状況はそんなに単純ではないはずだ。ホテルからいきなり拉致され、一〇日余りも幽閉されたあげくにロボットと一緒に船で旅仕事しなさい、と云われても普通は困らないか。

「とにかく一度家に帰りたいんだけど」と云ってみると、茅田アリスの生白い顔から波に洗われた砂地みたいに表情が消える。網膜映写及び骨伝導式の端末は現実感（リアリティー）が高く、隣にふつうに人がいるように感じられるから、いきなり作り物の人形感が露出するこの瞬間は、どうも慣れにくくて、そのたびにぎょっとしてしまう。

「家と云うのは、東京の家のこと？」僅（わず）かに生気を取り戻した茅田アリスが質問する。そうだと頷くと、再び人形化した後、色、厚みともに薄い唇が動いた。

「それは無理ね。と云うか、いまあなたが東京へ帰っても、自宅には戻れないわ」

「どうして？」とフォギーが訊き返した途端、目の前に画面（スクリーン）が浮かんで電脳網（ネット）ニュースの要約（サマリー）が映示された。音響設計士の木藤桐（34歳）が、電波法違反の容疑で、日本国警視庁から全国指名手配されたと、そこにはある。

ああ、やっぱりな、自分は世間的には音響設計士であって、ピアニストとは認知されていないんだよな、と、いまはそんなところに反応している場合じゃないよね。指名手配！

——って何だっけ？　言葉の意味自体分からない。が、とにかく自分が警察に追われる身となったとは理解されて、ならば何かの間違いだ、とフォギーが考えたのは当然、だいた

い電波法と云うのが分からない。自分が何か法に触れるとして、一番縁の遠そうな法律である。

「だったら早く出頭しないと」とフォギーが云ったのは、身に覚えがない以上、一刻も早く誤解を解いた方がよかろうと、健全市民ふうに考えたから。進んで出て行かぬと、疾しいところがあるから逃げ隠れしてるんだろうと邪推されかねぬ。自分はあくまで清廉潔白デアリマス。そこのところを声を大にして主張したい。フォギーがそのように申告すると、茅田アリスはしばしぼんやりする風に突っ立っていたが、やがてかくりと小首を傾げる仕草とともに口を開いた。

「あなたは事態が根本的に分かっていないのね」

決めつけられてフォギーはやや憤然となる。「何が分かってないの？」

「多くの事柄についてよ」

「説明してくれなきゃ分からないわ」

「どこから説明すればいいのかしらね」と云って茅田アリスは溜め息をつくふうになる。ったく面倒なんだよね、とでも云うがごときAIインターフェースの仕草は、ムーミン・トロールにもときおり見られるもので、どうにも頭にくる。

「最初から全部説明して頂戴。ホテル景雅園から無理矢理連れてきたあたりから」と強い調子で云えば、いよいよ茅田アリスは溜め息をつく感じになる。

「あなた、自分で気がついていないの？」
「何に？」
「あなた自身について」
「何が？」
「じゃあ、こっちへ来て」と云った茅田アリスの顔に薄ら笑いのごときものが浮かぶように見えるのがいよいよ癪に障る。それでもフォギーは椅子から立って、茅田アリスのあとについて行けば、導かれたところは、調整室右手の全身鏡のついた壁だ。
茅田アリスに続いて鏡の前に立てば、映るのは女が一人。茅田アリスは電脳網映像だから鏡に映らぬのは当然だ。と云うことは、映っている女は自分自身に他ならぬ。と思ったとたん、仰天したフォギーは脳細胞が一遍に蒸発するかのごとき衝撃を受けた。
映っている女は――池永霧子。それに間違いなかった。

77

ビクトリア湖畔の別荘の一室、秘蔵のスコッチウイスキーを瓶詰めの塩漬け雲丹を肴に

飲み始めたモリキテック社日本人副社長は書斎机の革張り椅子の上で、水から出た河馬のごとく、長々と息を吐いた。

ここへ来たのは、乱交パーティーの最中、「大感染(パンデミック)」の予兆ありとの報せを〈Met02〉から受けたとき以来だから、ほぼ二週間前になる、と、そう考えた副社長は、自分が呼吸が出来ていることをあらためて確かめるかのように、鼻孔を膨らませてまた深く空気を吐存した。この二週間は、まさに人生の崖っぷち、奈落の底へ転落しかかるところを足掻(あが)き藻掻(もが)き、必死で崖縁に摑まる事業に費やされた。いや、いまもまだ破滅の鼻先から逃れ得てはおらず、崖からぶら下がった格好は変わらない。

眼下に口をあけた奈落――。これについて彼はひとつの具体的像(イメージ)を持っている。三歳か四歳の時分だ。誰かに連れられて新宿へ行った。あるいは渋谷だったかもしれぬが、とにかく彼が電車と云うものに乗ったのはこれがはじめての経験で、その後は二度と乗っていない。何をしに行ったのかは記憶にない。誰と一緒だったかも覚えていない。が、駅(ステーション)ビルから出て、高層建築群を繋ぐ多層高架通路(プラットフォーム)を歩いたのはたしかで、そのとき高架通路(プラットフォーム)の「下」はどうなっているんだろうと思い、覗いてみたのだ。どこからどうやって覗いたかは分からない。何を見たのかも判然とはしない。にもかかわらず、じめじめした地下の暗がりに異形の人間たちが蠢(うごめ)く姿が強烈に印象に残った。高架通路下(プラットフォーム)が単なる「蜘蛛巣地区」――貧乏人や細民の棲家にすぎぬことは、いまではもちろん知っている。

しかし幼時に見たそれは地獄絵図そのもの、長年の恐怖の的であり、いま自分が落ちかかっているのはあそこなのだ、とそう考えるだけで胃袋が口から飛び出しそうになる。

だが、少なくともいまのこの時点で、自分は態勢を持ち直しつつある。そのようにあらためて確認すれば、香りの強い酒が喉を灼きながらも滑らかに胃へ流れ込む。このところは不眠不休、コカインや神経活性剤を摂（と）り続けだったから、しばらく酒は飲んでいなかった。別荘を手放さずに済み、この気に入りの場所で、寛（くつろ）ぐ、とまではいかぬけれど、主人顔で居座り得たことが、ウイスキーの香りを鼻腔にふくらませ、雲丹の味を鋭く舌に残した。こんなふうに時間を過ごしたのは久しぶりだ。しかし、当分の間——あるいは永久に来ることあたわぬと思われた別荘を副社長が訪れたのは、休養が目的ではなかった。別荘の「応接室」で山萩博士、すなわち〈Met02〉と面会すべくここへ来たのだ。

SEAEA のIT研究所所長、ヨセフ・ヴァン・グエン博士が「大感染（パンデミック）」発生の偽情報を流した廉（かど）でICSOに身柄を拘束されたとの情報を得た直後から、副社長は再三〈Met02〉との連絡を試みた。ところが、29virusや「大感染（パンデミック）」に係わる問い合わせにはいっさい返事がなく、例の「物質」の発見に全力を挙げよ、との一方的なメッセージが来るばかり。それがつい五時間ほど前、向こうから会いたいと連絡があったのだ。

通信があったのは、副社長がジュネーブの個人銀行（プライベートバンク）、Berling & Cie の頭取との電磁波遮断室（ウェーブカットルーム）での密談を終え、徒歩でヘリポートへ向かおうとしたときで、そこへ

Zarathustra の人間(エージェント)が接触してきた。Zarathustra はミュンヘンに本拠を置く通信代理会社。完全秘密保持を標語(モットー)に掲げ、物品の直接の手渡しを中心業務とする。メッセージも扱い、これはパルプ紙にペンで記したものを手渡すのが基本。あらゆる情報が電子化され、諜報と防諜の技術的いたちごっこが常態になった時代だからこそ成り立つ隙間業務だけれど、アナログに徹するスイス銀行と同様、秘密保持の信用度は抜群、誰から誰へメッセージが渡ったか、二者間の繋がりは、地域警察はもちろん、国際警察機構(ICPO)にも把握できない。

で、Zarathustra の人間(エージェント)が副社長に手渡したのが〈Met02〉からのメッセージ。ビクトリア湖畔にある別荘の「応接室」での会談を求める内容だ。復信できると云うので、副社長はその場で、「五時間後に指定の場所で」と用紙に書いて人間(エージェント)に渡し、他の約束(アポイント)をすべて解除(キャンセル)して東アフリカへ飛んだのだった。

Zarathustra を使ってまで防諜に留意する〈Met02〉のやり方は、副社長の意にかなっていた。〈Met02〉との通信には華伏技術社の暗号ソフトを使い、これは最高度の防諜精度を誇っていたが、世の中に解けない暗号などないと思えば、百パーセントの安心はできない。もはや周りじゅう敵だらけと云ってよいモリキテック社の施設ではなく、精度はやや劣るものの、別荘の「応接室」を会見場所に使うことにも同意できた。このところICPOと思しき機関から監視を受けている感触が副社長にはあって、そう考えれば、

〈Met02〉が29virusについての問いに応じなかったのは賢明なのであった。

華伏技術社の暗号ソフトは使用ごとの情報量に応じ課金される方式で、これが空恐ろしいまでの金額だから、カネに不自由しつつある副社長は自分からは連絡しにくく、かくして通常の電脳網(ネット)でのやりとりは、毎年恒例の、ハロウィン仮装(コスプレ)SMパーティーの中止を連絡するなど、無害(イノセント)な内容に限られ、もっともこの二週間、乱交パーティーどころの騒ぎでなかったのは当然、社の資産に大幅な損失を出した責任を問われて立場が悪化、二日前の緊急役員会での役員解任動議をからくも退けたところだった。個人資産も大打撃を被り、加えて役員会を優位に運ぶべく巨額の出費を余儀なくされて、破産に近い窮状に追い込まれたところを、「山萩貴矢」が――つまり〈Met02〉が、金銭的に、あるいは信用保証の面で援助してくれたお陰でなんとか窮地を脱し、数日前から金価格が僅かに上昇の気配を見せて、ほっと一息ついて崖下の奈落からようやく目をそらし得たところだった。

じつを云えば、いまいるビクトリア湖畔の別荘も〈Met02〉のお陰で差し押さえを回避できたのだった。尾の長い猿が棲む、マングローブ林に埋もれ建つヘリポートに着いた副社長は、別荘へ飛び込むやいなや、英国ビクトリア朝ふうの宏壮な居間で黒豹のソロモンとまずは戯れた。ソロモンはすでに北京の動物園への売却が決まって明後日には引き取られる。黒豹だけではない。ほとんど小動物園と呼んでよいほどの数のペットたちは、それぞれ売られたり野生に返されたりする予定で、これは下僕の数を大幅に減らすことを余儀

なくされるなか、飼育のためだけに十数人もの人間を雇う余裕がないせいであった。きっちり五分間、副社長は泣きじゃくりながらペルシャ絨毯の上をごろごろしてソロモンとじゃれあい、それから書斎に入ってスコッチウイスキーを飲み出したのだった。

約束の時間まであと二〇分。ジュネーブから飛ぶあいだ続けてきた思考の糸を副社長は再び手繰りはじめる。〈Met02〉との会見を有利に運ぶにはどうすべきか？　要はそこだ。いまや〈Met02〉との利害ははなはだしく錯綜している。彼は味方であり、庇護者であり、パートナーであり、同時に競争者であり敵である。仲間であり、下僕であり、しかし主人でもあり、そして道具でもある。

彼に対していかなる態度をとるのが正しいのか？　どう振る舞うのが有効なのか？　それを思うと、とても飲んで寛ぐどころの話ではない。アルコールは神経の凝りをほぐし頭脳の回転を速めるための潤滑油、生（き）のウイスキーを口へ放り込んだ副社長はまた考える。なんであれ態度を決定するには状況把握が不可欠だが、肝心の部分が空白なのが目下の問題であり、だから何よりなすべきは、〈Met02〉から最大限の情報を引き出すこと、それである。では、いったい自分はどんな情報を彼に求めるべきなのか？　いや、そもそも自分は何が知りたいのか？

火急の問題が「大感染（パンデミック）」であるのはまず間違いない。もう一つの潤滑油であるところの葉巻に火をつけた副社長は頭を整頓する。「大感染（パンデミック）」の予兆は本当にあるのか？

CamScannerでスキャン

〈Ver.2.0〉はあると断じ、ICSOは偽情報であり、世界秩序に混乱を招くための謀略であると発表した。どちらが正しいのか、と問うならば、〈Ver.2.0〉に軍配はあがるだろう。電脳ウイルスの発生源であると〈Ver.2.0〉が指摘したホテルにICSOの捜査の手が伸びたことが何よりの証拠だ。KKが日本の警察から指名手配を受けているのもICSOの差し金に違いない。やはりその場所で何かがあったのだ。とすれば、ICSOおよびこれに連なる電脳社会の大貴族たちは事態を隠蔽していることになる。隠蔽はいまのところ成功していた。二日前に激しくやりあったモリキテックの経営陣も慌てるふうではなかった。アレフ・ウイルスの発見を発表したヴェン博士については、ユダヤ系ロシア人の祖父の代にはじまるテロ組織との「深い係わり」が繰り返しメディアでは報じられていた。その一方で、各地のIT研究機関の人間がデントランドや北米カリフォルニアにあるICSOの研究所へ招集されているとの噂が囁かれて、これは何事かの出来を疑わせるに十分であり、金や小麦価格の変動の不可解さも、見る者が見れば意図的な情報操作を推測させるものがあった。

間違いなく「大惑乱」の予兆はあるのだ。として次なる問題は何か。というならば、むろん、本格的な到来がいつになるかであり、破滅を免れることができるかどうかである。いまICSOは懸命に対策に取り組んでいるはずで、あるいはすでに処方が見いだされ、ウイルスが駆除された可能性もある。だが、そうではないだろうとの直感が[illegible]には、

った。猟師の気配を察する森の獣のように、危機はいまだ去っていないとの、皮膚がぴりぴり痺れる感触があった。

彼は今度のウイルスを29virusと同定したうえで、独自に研究を進めているはずで、つまりICSOと〈Met02〉は競争しているわけだが、シンガポール国立大学のダニエル・リー教授が証言したように、29virusの秘密の解明に山萩貴矢がほぼ成功していた点を勘案するなら、山萩貴矢の写し（コピー）である〈Met02〉がより目的（ゴール）に近い所にいるのは間違いない——いや、本当にそうだと断言できるのか。副社長は考える。観察（モニター）できる範囲で見る限り、〈Met02〉は狂っていると見なさざるを得ず、もっとも人間の常識から機械の「狂気」を判断しても仕方がない。副社長は人間相手でも、それが犯罪者であろうが性格破綻者であろうが、成果さえ出せばよしとする、一種の博愛主義の信奉者であった。

〈Met02〉が29virusに関する成果を持参してくる可能性。わざわざ会おうと云ってきたくらいだから、それは高い。他の用件なら暗号ソフトを使ってのやりとりで十分なはずだからだ。その場合は取引と云うことになる。こちらが求めるのは当の成果。向こうの要求はKiri Kito——KKの全脳通信。KKの身柄はすでに確保してある。ケープタウンへ送ったのは〈Met02〉の強い要求があったから。『METEO』の人間をKKの傍につけたのも同じ。〈Met02〉の要求に応じた方がよいと副社長が判断したのは、人間の隠匿場所として「白い巨人」が便利だったのと、こちらの「誠意」をできるだけ示しておいた方がよ

いと考えたから。副社長の常識からすると、29virusの秘密とKKとでは取引材料としてはあまりにも不釣り合いであり、つまり自分の方が弱い立場にあるとの理解があって、その思いがKKを玩具として〈Mel02〉に与えるサービスに結びついたのである。このあたりの利害感覚は副社長の独自なところ。TBUの設備はケーブタウンにはなく、『METEO』が自分の指揮下にある以上、〈Mel02〉が勝手にTBUをKKに施すことはできないはずで、出し抜かれる心配はなかった。

なぜ〈Mel02〉がKKに執着するのか。それは全く不可解だった。副社長は当然調べさせたが、KKが山萩貴矢の愛人の類であったとの証拠は見いだせず、かりにそうだとしても、山萩貴矢から受け継いだ「恋愛感情」ゆえに〈Mel02〉がKKに執着しているとは、副社長の世界観ではとても考えられなかった。たかが女一匹。それも傾国の美女と云うわけでもない。平々凡々たる一庶民にすぎぬ。むしろKKがウイルスの発生の現場にいたこと。それが重大なのかもしれなかった。ひょっとすると29virus解明の鍵をKKが握っているのではあるまいか。そちらの方がはるかに可能性が高いと思える。たとえば、KKの知識のなかに、すなわち脳情報のなかに鍵はあって、だからこそ〈Mel02〉はあれほど熱心にKKのTBUを求めているのではないか。しかし、かりにそうだとしても、巨額の費用を投じてTBUを施す必要はないわけで、脳情報を精査する安価な方法ならほかにいくらもある。

まあどちらにしても、〈Met02〉が29virusの謎を解明していてくれれば、KKがどうなろうと構わない。もしかりに〈Met02〉がすんなり情報をこちらへ手渡すなら、あとはどうにでもなる。信義を重んじてKKへのTBUを実施するか、あるいは裏切ってしまうか、こちらの思うがまま。もちろん機械相手に信義が必要であるかどうか、議論の余地はない。だから向こうも簡単には情報を渡さぬだろう。取引の技術的な詰めが必要になるはずで、そこが切所となる。ほんの僅かな油断も許されぬ、難しい手術を執刀する外科医のごとき集中が求められる。

時間だ。グラスに残ったウイスキーを副社長は一息に呷った。それでもし〈Met02〉が何一つ手土産を持参していない場合は——こちらである予感が強くあるのだが、副社長は頬に皺を刻んで笑った。その場合は終わりだ。時間切れ。一昨日の役員会で「聖槍計画（ホーリーランスプロジェクト）」はすでに終了が決定されていた。数日中には山萩貴矢博士の死亡は公表され、〈Met02〉は消去される。TBUソフトの制御はできなくとも、電脳の「電源を切る」ことくらいは無能な技術者連中にもできるだろう。いや、すでに準備はできているので、一刻も早く〈Met02〉の消去を実施したいと、技術畑の者らは切羽詰まった危機感を露にしつつ再三再四具申してきている。それをここまでは自分が制止していたのだ。〈Met02〉が消えれば、自分の優位は失われる。電脳社会の貴族に列することは不可能となる。真の人間（リアルヒューマン）となる機会は失われる。むしろ借金漬けの自分は低層社会への転落を心配

した方がいいくらいだ。が、しかし、まだ希望がすっかり失われたわけではない。「大感染（パンデミック）」の到来。希望はこれだ。まさに一寸先は闇、何が起こるか誰にも見通せぬ危機のさなかにこそ這い上がる機会（チャンス）は生まれるはずだ。鏡の前でさんざん練習した、松田優作ふうの不敵な笑いを顔に浮かべた副社長は、とにかくいまは〈Met02〉に死の宣告をする、そのことを愉しもうと考え、椅子から立ち上がった。

78

　鏡に映る池永霧子を見て衝撃を受けて五分後、フォギーは大スタジオ調整室に居た。それも横になった格好で。とはつまり、繭型の接続端末装置（ATS）のなかに居たわけで、と云うか、五分前にも、いや、そもそも「Dream Team of Jazz All Stars」と一緒に演奏している最中もずっとそこに居たのだと、フォギーが了解したのは、茅田アリスに促されるまま鏡の前から離れて調整室に入り、ゴチックふう棺とも、一人乗りカプセル自働車（カー）とも見えるATS、そのクローム鍍金された上蓋の、強化硝子の覗き窓のなかに自分がいるのを見たときである。

この場合、見たのは誰かと云えば、もちろんフォギーであって、見るのがフォギーなら見られるのもフォギー。一瞬は幽体離脱の悪夢のようであったが、要するにATSに横たわる自分を見ている、その眼は池永霧子アンドロイドの眼であって、これすなわち現実分身、ないし機械分身、あるいは代理行動者と呼ばれるものだとの茅田アリスの説明を聞いて、ようやく理解はなった。

つまり人間がATSに繋がって、電脳内の疑似現実分身を操作するのと同じように、現実世界のロボットを動かすわけで、深海や宇宙空間、火災現場や高放射線領域など、過酷環境での作業用に開発され、実際に利用されているのはフォギーも知っている。が、それら遠隔操作ロボットは、作業に特化した機能を備えて、だから蟹型やムカデ型、あるいは素っ気ない箱型が大抵で、「池永霧子」のような人間型はほとんどない。アンドロイドは疑似現実技術の進展に押されて産業的には廃れ気味だと云う話はもうしたよね。

「機械分身は、人間の脳が動かすわけだから、自律型アンドロイドより操作自体は容易なの」と云う茅田アリスの説明を聞けば、自分が機械分身のなかにいる、と云うか、金属頭蓋からアンドロイドを動かしているのだと、なんとか実感はできたものの、悪夢を見ている感は消えぬ。そもそもATSに繋がった記憶がないのはおかしくないか。そのことを口にすると、調整室へ入ってきたフォギーを――つまり池永霧子アンドロイドを、盛大な相手の訴えたバーバラ・ウエルズ――『METEO』の美人技術者が、茅田アリスに代わっ

て、その点はあなたに謝罪しますと、罪悪感を覚えているとはとても思えぬ爽やかな笑顔で云った。

「薬を使わせてもらいました。脳に害はないから安心して」と簡明に云ったスタイル抜群の金髪美人は、先刻フォギーが飲んで卓に置いたままになっていた珈琲茶碗を示した。要するに経口薬物で意識を失わせて、その隙にATSに繋いだと云うことらしい。そうと知ってみれば、調整室で珈琲を飲んでからピアノの前に座るまでの記憶が怦い。フォギーはもう一度金属繭のなかの自分を見た。目をつむってはいるが、瞼の裏で眼球がきゅるきゅると忙しく動いているのは、ATSに繋がった人の通常の状態だ。

　ATSから離脱するには、視野の左右どちらかの端へ視線を寄せて、瞬きすると、緑色光の命令画面が浮かび出るので、そこにある離脱のアイコンを同じく視線クリックすればよい。フォギーがそうすると制御画面はちゃんと出る。先刻演奏家たちの条件を検索するときにも出たから当然だ。ところが「withdrawal（離脱）」のアイコン――人間の脳の図柄から上方へ矢印が出てもう一つの脳が浮かぶ、それこそ幽体離脱を図像化したようなアイコンをクリックしても反応がない。何度やっても、うんともすんともいわない。

「ええっと、出られないんですけど」慌て気味に訴えると、バーバラ・ウォルスが、その機能はいまは使えません、と平気な顔で応える。

「ちょっと一回、出たいんですけど」とさらに云えば、金髪の輪郭イジラ女は、人類史に

肩を竦める仕草をして見せる。どういうこっちゃ、フォギーが憤然としていると、茅田アリスが横から、「もう少しだけ我慢してくれる。簡単なテストをして欲しいの」と云う。
つまりは自分からは出られないようになっているらしい。と知った途端に被拘束感が身に迫って、子供の頃に読んだ鉄仮面の物語が思い出され、そこからさらに連想の糸は伸びて、昔アムステルダムの博物館で見た「鉄の処女」が頭に浮かべば、恐慌(パニック)の虫が騒ぎ出して呼吸が苦しくなる。フォギーが息ができないと訴えると、脇のゴーグルをかけた白衣の西洋人男性が卓に載った計器類をなにやらいじり出し、横からモニターを覗き込んだバーバラ・ウェルスが解説した。

「あなたの心身の状態は完璧にモニターされていますから、心配することは何もありません。ヘモグロビン濃度が基準値よりやや低いのと、子宮頸部に癌肉腫、食道に扁平上皮癌の初期発生が見られるけれど、ともに簡単に処置できる。あとは頸椎と腰椎に若干の変形があるくらいかしら。しかしこれも自然治癒可能な範囲内にとどまっています」

そう云って流行のピンク色の歯を見せて笑う、ゴジラ似の金髪美人の顔を見たら、少しく気分が落ち着いたのは、説明に安心したからではなく、ゴーグル男が何事か処置をしたせいなんだろう。見ればＡＴＳ内の自分の軀には腕の静脈や首筋から管が伸びて外の装置に繋がっている。薬物その他でもって心身を操作することにはフォギーも慣れていないわけではないけれど、本人の意思を無視してやられる気分はよろしくない。

CamScannerでスキャン

「まずは座って頂戴」バーバラ・ウェルスに云われて、寝ている人間に座れとは何だ、と思ったが、これは池永霧子アンドロイドの方に云ったわけである。フォギーは――つまり池永霧子アンドロイドは、椅子に腰を下ろした。生殺与奪の権を相手にこうまで完璧に握られては、気分は悪いが、逆らうのは賢明ではない。とりあえず危害を加えようとの意図はなさそうだとも思えば（ぜひともそうであってほしい！）、素直にしているのが賢いとの判断が生じた。と云うか、逆らいたくても逆らう術が分からない。と、目の前に光の図像が浮かんだ。抽象模様が目まぐるしく交替して、耳には断続的な電子音が聞こえてくる。あなたは別に何もしなくていいと云われたので、ただ座っているうちに、自分の置かれた状況がいよいよ瞭然と理解されてきて、しかしこいつはトンデモナイ話だぞと、意識の地面がめりめり裂けて驚愕の樹が生えてきた。

　つまり、何が驚きかと云って、一番驚くのは、フォギーが分身（アヴァター）にして操作している池永霧子アンドロイドの性能だ。これはＡＩで制御することも人間がＡＴＳから動かすこともできるんだろうが、どちらにしても、先刻、「Dream Team of Jazz All Stars」と共演した際、ピアノの鍵盤を叩いていたのは機械分身（メカニカルアヴァター）だったわけで、いくら薬の作用があったとは云え、自分が生身（リアル）で弾いていると信じて疑わなかったくらいだから、これはもう凄いと云わざるをえない。

　フォギーは池永霧子アンドロイドの、黒絹のブラウスの袖から出た手を見た。毛穴やく

すみがなく、静脈が透けることもなくて、皮膚が鱈の白子めいて不透明かつ生白いところは、明らかに人造物だが、爪の形といい、指の長さといい、関節の具合といい、形自体は見覚えのある自分の手とそっくりだ。動き方の感じと云うか、手の放つ雰囲気——と云うのも変だが、それもそのまま。右手で左手の甲や指を撫ぜてみると、人間の皮膚とは異なる感触がして、それが材質のせいなのか、触覚神経ゆえなのかまでは分からぬが、首筋や頬に触れてみれば、軟質プラスチックに触るがごとき「モノ」の感触が明らかに生じて、どうやら触覚があるのは「手」に限られているらしい。

「視覚、聴覚以外の感覚は、差異化はあまりされていないの」

機械分身の仕草を見ていたんだろう、横から茅田アリスが説明する。テストを受けながら話をしても構わぬと見える。ちらつく画像を漫然と見ながら言葉に耳を傾ける。

「嗅覚はなし。触覚は指先に集中している。そうじゃないとピアノが弾けないでしょう」

と続けた茅田アリスは、ほかにペダルを操作する足の感覚であるとか、椅子に座った体感だとかが丁寧に設計されていて、つまりこの機械分身、あるいはアンドロイドは、ピアノを弾くことに特化した作りになっているのだと解説した。

「ほかに日常的な基本動作はできるけれど、表情のパターンは限られている。でも他の演奏者とのコミュニケーションはそれで十分なはずよ。会話は生音声ではできないけれど、電脳網音声でできる。それから、これはさっきも云ったんだけど」とAIインターフェー

ス は続けた。機械分身を動かすこと自体は比較的容易だが、操作する人間が機械分身の知覚を「体感」できるようにするのは技術的には難しい。そもそも深海や災害現場で活躍する機械分身の場合、操作する人間が分身の「体感」を得る必要などない、というより「体感」したら大変である。

「指先の微妙な感覚がなくたってピアノは弾ける。ビブラフォンを弾く人にバチの先の感覚はいらないでしょう。それと同じで、慣れれば、指を微細に動くバチみたいに操って演奏はできるはずよ。でも、それじゃ、あなたは納得しないでしょう。だからこの機械分身は、あなたのために特別に作られたものと云っていいのよ」

云われてフォギーは、鍵盤が軽く感じられたのは、実際に弾いていたのが分身だったせいだと、あらためて思い至った。となると、演奏中に得た「上手くなった感」はどうなるんだろうと、考えぬわけにはいかない。フォギーは自分の――機械分身の、のっぺりと白い手を再び見た。上手くなったのが機械のお陰だと思うと心中穏やかじゃない。そのあたりの心の動きをAIが察したかどうかは知らぬが、茅山アリスがまた口を開いた。

「人間が指を動かせる速度には限界があるけれど、機械分身はその何百倍もの速度が出せる。あるいは人間には不可能な指の動きも可能になる」

「そんなの無意味だわ」とフォギーは思わず介入した。「そんなに速く動かしたってしょうがないもの」

ここにおいてフォギーは機械分身（メカニカルアヴァター）に発声の機能がないことを確認した。フォギーの「声」は端末を通じて周りの人たちには伝わっているらしい。ATSのなかの自分が実際に口を動かして喋っている様子はないから、この場合の「声」の実体が何であるか、そのあたりの仕組みはフォギーにはよく分かりません。とにかく「声」が伝わっている証拠にバーバラ・ウェルスが今度は口を出してくる。

「でも、実際に使わなくても、能力に余裕があることは、いいことじゃないかしら」

「機械の力をかりて能力を高めても仕方がないわ」フォギーが云うと、傍らの可変椅子にニュースキャスターみたいに脚を組んで座った金髪美人は笑顔を崩さず応答する。

「強化服（パワードスーツ）を着たのと同じ、と考えてもいいと思うけれど」

それは違う。フォギーは即座に思ったものの、同時に、生身の人間に不可能なくらい速い楽句（パッセージ）を叩きこめたらどうなるだろう、との発想がスルドク浮かぶのを覚えた。演奏不可能な速い楽句（パッセージ）を音にすること自体は、電子楽器を使えばいくらでもできる。しかし、その速さ感（スピード）を機械分身（メカニカルアヴァター）を通じて自分の身体で「体感」できるとしたら——。

フォギーも強化服（パワードスーツ）を使った経験はある。ふつうなら到底持ち上げられぬ荷物を軽々と運び得たときには、驚きと快感があった。それはフォークリフトのごとき機械を使ったのでは得られぬ快感に違いなく、そう考えると、速い楽句（パッセージ）を実際に「指」で弾くのを体感できたら、いままでにない感覚の発見や発想（アイデア）の湧出があるかもしれない。あるいは、分身の指

を長くしたり、パワーを強化したり、場合によっては指の本数を増やしたり——と、これは意味ないか、などと考えたフォギーが、両手それぞれ四四本、計八八本の指でピアノを弾く人と云う、奇怪きわまりない像（イメージ）を思い浮かべていると、目の前の図像がふと消えた。音も途切れる。テストは終わったらしく、ゴーグル男と一緒にモニターを覗くバーバラ・ウェルスに代わって茅田アリスが口を開いた。

「これがすごいのは、あなたが肉体を失っても、現実世界（リアルワールド）でピアノが弾けること。ＴＢＵで電脳内に棲んでも、機械分身（メカニカルアヴァター）を使えば現実世界（リアルワールド）でピアノが弾ける。それだけじゃない。機械分身（メカニカルアヴァター）にもっと慣れていけば、あなたは自分の肉体を使うよりもっといろいろなことが出来るようになるわ」

それを聞いたとたん、自分が機械分身を使うのは、いまがはじめてではないとの直感が閃いた。円形室に幽閉されてピアノを弾いたときも、いまと同じく自分は知らぬ間にＡＴＳに繋がれ、分身（アヴァター）を操作していたのだ！　フォギーがその点を質すと、茅田アリスは否定しなかった。

「あなたには早く慣れて欲しかったから」と悪びれずに云うと、横からバーバラ・ウェルスが、薬物を使ったことは謝罪しますと、またも罪悪感のかけらもなく云い、脳には悪影響はありませんからと繰り返したが、高度医療を受けられる層の死亡原因の一位が薬害であるとの、近年出た世界保健機関（ＷＨＯ）の報告を思い出せば、とても信用する気にはなれぬ。す

るとまた茅田アリスが口を開いた。

「じゃ、船に来て。船でじっくり、納得いくまで機械分身を試してみて」

冗談じゃない！　と叫ぶ前に、視野が急激に狭窄して、霞がかかったようになり、小窓みたいなところからこちらを怖い顔で覗き込む、バーバラ・ウェルスのゴジラ顔を最後に、世界は遠ざかった。

79

副社長が「応接室」へ入っていくと、〈Met02〉――山萩青年はすでに四分円形の応接椅子に腰を下ろしていた。いつもの海碧色の手編みセーターを着た美青年はジーンズの脚を組み、副社長が多糖ゲル椅子へ座を占めるあいだ、軀を斜に向けた格好で、さらさら髪をかきあげる仕草を繰り返している様子が、君なんか眼中にありませんから、とでも嘯くようで憎たらしい。

3Dインターフェースの表情を読んでも意味がない。そうは思いながら、顔色に変化はないか、探ってしまうのを副社長はやめられない。が、そこにあるのは、いつに変わら

め、高原で山稜を愛でているかのごとき、穏やかで涼し気な微笑。それが醜く歪むのを想像しつつ腰を下ろせば、昭和芸能雑誌から抜け出してきたような若者は、挨拶もせず、横向きになったまま言葉を発しない。まるで給仕ロボットが入室してきたかのような反応だ。むっと顔を赤黒くした副社長は、こちらからは絶対に口を開かないぞ、と決意したものの、沈黙に耐えられぬのが生身の人間の方だったのは、まずは妥当なところだろう。

「先日はお世話になりました」

副社長は〈Met02〉の経済的援助に対しまずは礼を述べた。山萩青年はおもむろに脚を組み直し、はじめて人の存在に気づいたかのように、笑顔を振り向けて云った。

「君には、いますぐ船に乗っていただきたい」

礼を述べたことへは一片の挨拶だにない。副社長は腹を立てつつも、唐突な言葉に思わず反応してしまい、船とは？　と問い返した。

「『メデューズ号』です」山萩青年は答えた。「現在、インド洋を東へ航行中です。いますぐにジェットヘリで追っていただきたい。『メデューズ号』にはヘリポートがついていますから」

「メデューズ号」はモリキテック社所有の大型クルーザー。そのことは副社長も知っているが、しかしそれに乗れとはいかなる意味か？　いや、そもそもどうしてクルーザーがインド洋にあるのか？

「乗って、どうする？」副社長が探りを入れると、山萩青年は爽やか笑顔を崩さず即座に応答してくる。

「船に乗って東京へ行ってもらいたいんです」と云った山萩青年は、「メデューズ号」には『METEO』の人間が乗っているので、彼らを指揮してKKのTBUを実施して欲しいのだと続けた。

「船にはKKも乗っています。『メデューズ号』の船長や航海長は私の指示で動かせますが、『METEO』は君の指揮下にありますから、君が居てくれた方が何かと都合がいい」

一〇年ほど前にモリキテック社が『METEO』を買収してTBU事業に乗り出した際、舞浜工場の敷地内に、ローザンヌの『METEO』本社の設備を一部移した。TBUは舞浜でもできる。だからKKのTBUを望む〈Met02〉がKKと『METEO』の技術者を東京へ向かわせているのは理解できる。しかし、なぜ船で行く必要があるのか？　いや、そもそもどうして〈Met02〉は自分を使い走りのごとくに扱うのか？

と、そこまで考えた副社長は、これすなわち、〈Met02〉が29virusの謎を解いたと云うことなのかもしれぬ、だから強気に出てきているんだろうとの推察に行き着き、急な渇きを覚えつつ、そのように云うと、山萩青年は笑顔を崩さぬまま剽軽に応じた。

「まだです。29virusの解析はまだできていません」

まだだと？　副社長は、怒りとも嘆いともつかぬ感情の暗い爆発に見舞われた。つまり

能はない。それでいながらこの命令調はなんだ。カネを出したくらいで、こっちが奴隷になったとでも思っているのか。いや、たしかにカネを出す者が主人となるのはこの世の真理だ。しかし「山萩貴矢」からの援助資金は生前贈与の形ですでに落手した。いまやカネは我が手中にあるのであって、それには山萩貴矢の名前が書いてあるわけじゃない。貰ってしまえばこっちのもの、もうどんなにへそを曲げられても大丈夫。ふふ、オレだったら、カネには必ず名前を書いておく。相手を雁字搦め（がんじがらめ）にしたうえで首輪を嵌めて引き摺り回すがね、と冷笑した副社長からすると、〈Met02〉は甘かった。結局のところ〈Met02〉は山萩貴矢の性格をそのまま受け継ぎ、このオレを根本から見下しているんだろう。そう思ったとたん嗤いの糖衣をまとった憤怒の塊が口から吐き出された。

「『聖槍計画（ホーリーランスプロジェクト）』は終了です。二日前の役員会で決定しました。遺産その他の整理がつき次第、山萩貴矢の死亡は公告される。その場合、もちろんあなたは」とそこで副社長は一拍置いて、応接椅子の「男」の様子を窺った。微笑は変わらぬながら、広額尖顎の白面に微かに不安の影が過ると見た副社長は、残忍な悦びの油液がじわり毛穴から滲み出るのを覚えながら、最後の宣告をつきつける時機を見計らう。

〈Met02〉はいまや猛然と情報収集をしているんだろう。二日前の役員会は「鉛の方舟（Pbアーク）」で行われたから、決定自体は知り得ないだろうが、直後からはじまった社内の動きを綜合するなら、オレの言葉の信憑性を〈Met02〉は即座に知ったはずだ。どうかね？　自分が

まもなく消去されることが理解できたかね？　君の好きな確率でもって。彼の発言は九九・五％の確率で真である、と云った具合に計算はできたかね？

副社長の貪る眼のなかで、手編みセーターの青年は、相変わらず薄い笑みを浮かべている。すでにTBUソフトの消去作業がはじまっている可能性はあるから、目の前の映像がふっとかき消えてしまう、そんな場面に遭遇できるやもしれぬ。と思えば、興奮の冷火に背筋を撫でられた副社長は、目の前に佇む柔らか髪の美青年がひどく儚く、頼りな気に見えてきて、性的な興奮さえ覚えながら、山萩博士との長年の確執（たしかに確執と呼んでよいものだった！）が終わるのだと思ったとたん、不覚にも涙腺が緩んで、熱い涙が頰に一筋零れた。さようなら、ぼくの大好きな大おじいちゃま。そうだ、自分は子供の頃、彼をそんなふうに呼んでいたのだ。

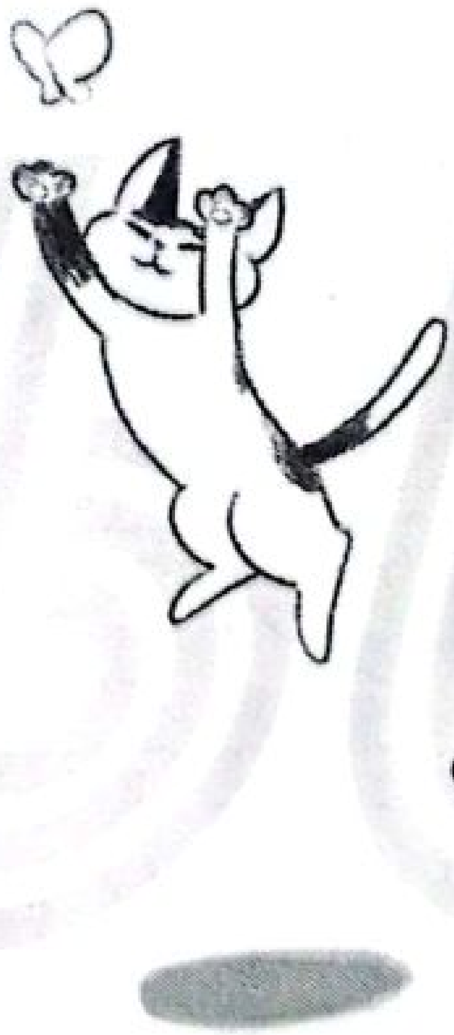
「あなたは、消去される」

副社長は言葉にした。声が潤んでいるのは涙のせいだ。どうしてこんなに泣けるのか、自分ながら不思議だが、言葉自体は水晶の弾丸となって山萩貴矢の天才の頭脳に突き刺さったはずだ。だめだ、これ以上涙が出ると相手の顔が見えなくなってしまう、と思ったとき、山萩青年が応答を寄越し、産毛そよぐ幼い魂から溢れ出た涙はたちまち凍り付いた。

「『蜃楼計画』は再発動されています」と山萩青年は云ったのである。そればかりではない。「二時間前の審査員会で決定されました。KKのTBUについても承認ずみで

す」とも加えたのだ。
再発動？　新役員会？　意味が分らん。悪い冗談であるなら、ここはぜひとも笑わねばならない。猛然たる哄笑でもってねとつく嫌気を撃退しなければならない。副社長は口を歪めて、桃色の歯を剥き出し、笑う準備を整えた。が、笑いが爆裂する直前、再び山萩青年の言葉が侵襲式の端末を通じて脳へ流れ込んだ。
「モリキテックはメルクリウスに買収されました。三時間前に新役員の選出が行われて、『聖槍計画（ホーリーランスプロジェクト）』の継続が決定されたところです」
買収！　新役員!!　メルクリウス!!!　言葉の小惑星が互いに衝突しながら思考空間を激しく運動する。そこへまた質量のある言葉の大岩石が投げ込まれた。
「君は副社長の役職を解かれて、『聖槍計画（ホーリーランスプロジェクト）』の事業本部長と云う形でいてもらうことになりました。形式上は役員ではないが、待遇は役員と同等なので安心していいです」
呆然として洞（ほら）のごとき口を開けたままの副社長——すでに降格して、事業本部長に向かって、山萩青年は一段と笑顔を濃くして訓示した。
「新たな役職で尽力していただきたい。それから、君と僕が結んだ私的（プライベート）なパートナーシップは今後も変わらないので、安心してもらって大丈夫ですから」

CamScannerでスキャン



CHAPTER

6

海にて

CamScannerでスキャン

80

海だ。夕暮れの海。力強く滑らかにうねる海面は、傾いてなお強い光を放つ熱帯の太陽に照らされて、金の光と蒼影が微細に交錯する絵文様を描き出し、水平線で区切られるまで漫々たる広がりを見せる。島影は見えず、船もなく、飛ぶものの姿もない。ついいましがた、魚群を追うらしい海鳥の一団が通り過ぎてからは、半球をなす天蓋は、青色の絵具で一様に塗り固められたかのように、のっぺり空虚である。

フォギーは大型クルーザーの中層デッキにあって、手摺にもたれ海を眺めていた。ケープタウンを出た船は赤道へ近づくらしく、じっと息をひそめていても汗ばむくらい、空気

[illegible]。船に乗っているのは[illegible]二日。おそらく、なのは、[illegible]管がないからで。気がついたときには、船室の寝台の上で。早い話が、今回もまたフォギーの自主性はいっさい斟酌されず、外部への通信以外は自由な行動を許されたものの、囚われ者の境遇にいささかの変更もないのでした。

　船は、前に仕事で乗った客船に較べれば小さかったが、造作は贅沢で、フォギーに与えられた客室は大理石張りバスルームのついた双子寝台室（ツインベッドルーム）。品質のよい壁材や木製家具が茶系統の落ち着いた色合いで統一されて居心地は抜群、衣料プリンタもちゃんと備え付けてある。食堂は客室の一階層下、いろいろな形の、五、六人が掛けられる食卓が八基ほど据えられて、卓ごとに備わった品書（メニュー）端末に入力すると、人間型ではないロボットが給仕をしてくれる仕組みだ。品書は豊富かつ豪勢、天然クロマグロの刺身があるのを発見したときには、おおっと思ったが、いまひとつ食欲がでないのは若干の船酔いがあるせいだった。とは云え、この好機を見逃す手はなく、最初の夕食でマグロ中トロを純米吟醸酒とともに食したあたり、フォギーもなかなかにしぶといのでした。

　人はいた。まずはバーバラ・ウェルズだ。船に乗ってから岑田アリスは出てこなくなり、ゴジラ輪郭顔の金髪美人がフォギーの世話兼看守と云うことのようで、もっとも船の周りは見渡す限りの大洋、逃げる気遣いがないからなのか、用があるときは呼んでくれとゴジラ美人は申し渡し、常時傍にいるわけではなかった。ほかにも「白い巨人」のスタ

ジオ調整室でみかけた人たちが乗船していたが、顔をあわせることはあまりなく、船の運航をする船員は客(ゲスト)が立ち入れぬ区画に居るらしかった。

　船はどこへ向かっているのか。東京だとバーバラ・ウェルスは答えた。しかし、どうして東京へ向かうのか、それも船で、の問いや、もっと根本的に、このわたしをどうしようと云うのか、と云った問いには、ゴジラ美人は大袈裟に肩を竦(すく)める仕草を繰り返した。例のゴーグルの男をはじめ、ほかの人たちと食堂で一緒になる場面もあったが、みな鬱々(うつうつ)と飲食するのみ、とりつく島がなく、フォギーもどちらかといえば人見知りなので、黙ってマグロその他を咀嚼嚥下(そしゃくえんげ)するに終始した。

　食堂とはべつに、船体中央部には三層吹き抜けのレストランバーがあった。一画の舞台にピアノやドラムセットが置かれ、椅子がビッグバンド仕様で並べられているのは、ダンスホールないしナイトクラブふうの設営だ。つまりはここで例のドリーム・チームが演奏すると云う訳なんだろう。であるからには多数のアンドロイドが船内にはいるはずで、その点をバーバラ・ウェルスに訊ねれば、船艙で停止状態でいると云う。アンドロイドは普段どんなふうにしているんだろうか。興味を抱いたフォギーが、見てもいいかと問えば、見ない方がいいとゴジラ女は答える。どうしてと問いを重ねれば、あまり気持ちのよいものではないからと云ってまたも肩を竦めた。

　それより、あなたがピアノを弾けば、集まってきて演奏するので、ぜひそうすべきだ

と、ゴジラ女はしきりに勧めてくる。ドリーム・チームとの共演はともかく、ピアノはちょっと弾いてみたいと思い、そう云うと、ゴジラ女は隣の室へ来いと云う。ピアノの鍵でも寄越すのかと思えば、そこにあったのは例の棺桶みたいなATSだ。要するに、ここへ入って機械分身（メカニカルアヴァター）の「池永霧子」を操ってピアノを弾けと云うことらしい。わたしは生身で弾きたいのだ。そう主張すると、ゴジラ女が、じゃあどうぞ、と云う感じで肩を竦めるので、レストランバーへ戻り、僅かな段差の舞台にあがってピアノ椅子へ座れば、目の前にあるのはSteinway & Sonsだ。「白い巨人」のスタジオから運んだんだろう。鍵はかかっていないので、早速蓋を開けて弾き出したところ、ゲゲッと、いささか下品な声がフォギーの喉から漏れ出たのは、ほかでもない、鍵盤が異様に固かったからだ。ちょっと押さえたくらいではハンマーが動かない。ぐいと押し込んでようやく音が鳴る。これじゃとても無理だ。呆然となっているところへ、客席に座って見物していたバーバラ・ウェルスの声が聞こえた。

「あなたが『白い巨人』で弾いたのと同じピアノよ」

「調整が全然違ってるけど」

「同じよ。あなたはずっとそれを弾いていたのよ」

　ここにおいてフォギーは、「白い巨人」の円形室に幽閉されていたときからずっと、自分が生身ではなく、機械分身（メカニカルアヴァター）を使ってピアノを弾いていた事実をあらためて知るととも

に、機械分身（メカニカルアヴァター）の性能——とりわけパワーの大きさにつき思い知らされたのでした。

ほぼ快晴の空には、西の水平線近くにだけ帯状の雲があって、たったいま一筋の残照がぴかり眼を射たのを最後に、太陽が隠れたところだった。天頂近くは水色に輝き真昼の明るさを保っているが、ゆるやかにうねる海は瞬時に濃い群青に変わる。甲板から波の反復を見詰めていると、磁性を帯びた粘性体が運動するかのごとくで、疑似現実（ヴァーチャルリアリティー）の海であるかのように思えてきてしまう。いや、じつのところ自分は疑似現実空間（ヴァーチャルスペース）に居るのではないか。だいたい自分はなんでこんなところで、こんなふうに海を見ていなければならぬのか、とそのように問い、ホテル景雅園で将棋を見学したあたりからの記憶をそぞろ呼び起こせば、疑似現実とするのが一番理に適っていると思えてくる。そもそも現実と疑似現実の違いはどこにあるのか。なかに居る者が両者を区別できるのか。これが古臭い哲学的問いだとはフォギーとて知っているけれど、古いからと云って問題自体が消えたわけではない。

まあ、どっちでもいいんじゃないの。これが右の問いに対するフォギーの従来の見解で、疑似だろうがなんだろうが、本人が幸せならそれでいいんじゃないのかな、と云うきわめて無責任な立場に立っていたのだけれど、いま甲板から次第に暗色を深める海を眺めていると、立ち上る不安の臭気は消せぬ。どっちでもいいじゃん、と能天気に嘯（うそぶ）いていられたのは、自分の躯の感覚がたしかに自分のものだとの、根拠のない自信があったからだ

と、にわかに反省されたのは、先刻弾いたピアノのせいかもしれなかった。

　がちがちに調整されたSteinway & Sonsには生身では歯が立たぬ。それは分かった。すると今度は、機械分身(メカニカルアヴァター)だとどうなるのかと、もう一度試してみたい気持ちをフォギーはどうしても消せず、ゴジラ女の目論みにまんまと嵌(はま)るのは癪だとは思いつつも、そう申し出て弾いたのだ。

　昇降機(エレベーター)から出てきた池永霧子アンドロイドが、自力で歩いてピアノの前に座る。それを確認してから、隣室のATSに潜り込んで繋がった。それで弾いてみれば鍵盤が軽い。指の動きも滑らかだ。ほかのメンバーを呼ぶかと訊かれたのは断って、フォギーは小一時間ばかりピアノをいじったのだけれど、最初は機械の性能がどの程度か確かめてやる、とそう云う気持ちでいたものが、しだいに熱が入ってしまい、ふと気がつけば、自分で弾いていると、自然に感じている自分がそこにいて、にわかに不安になってATSから這い出た。軽く五、六分と思っていたものが、いつの間にか一時間近く経っていたことにも恐怖を覚えた。恐怖とは、つまり、生身ではピアノが弾けなくなってしまうのではないか、との恐怖である。なにより不穏なのは、機械分身(メカニカルアヴァター)を使った演奏について、これはこれでありなんじゃないかな、けっこう面白いし、と楽しむ自分が間違いなくいることで、これはクスリの誘惑にちょっと似ていた。あるいは自転車。磁気スクーターが登場して以降も、自分の脚で漕ぐ自転車は根強い人気があるわけで、フォギーも一台持っている。もちろん

ごく普通の補助動力付きのだが、フォギーは一度本格スポーツ車に乗らせて貰ったことがあって、このときはちょっとした上り坂で死にそうになった。年寄りでも自力で漕いだ昔の人を尊敬しつつ、自分は補助動力なしではとても無理だと思い知った、それと同様のことが機械分身（メカニカルアヴァター）を使っていると起こりそうな気がする。

それはまずい。いや、本当にまずいのかな、と問いをかぶせてくる自分もまた一方にあって、そのことがまた不安を掻き立ててやまぬ。「あれだよね、やっぱりまずいよね」とフォギーが不安感を吐き出すべく暗い海に向かって声を出した、そのときだ。左手の空に黒い物体が現れた。シュルルルと絹布をこするような音がするのはヘリコプター、車海老に回転羽根をくっつけたような機影が、濃紫の画布のなかでみるみる大きくなる。

81

モリキテック社日本人副社長――では、もはやなく、モリキテック社日本人事業本部長、と呼ぶのもなんだか変なので、この際は名前で呼ぶならば――伊達邦彦氏は、ノースロップ・グラマン社製高速ジェットヘリの操縦席から、外景モードにした[illegible]

ーズ号」を視認した。位置は南緯零度一二分、東経八一度三三分、スリランカから南へ一二一六キロメートルのインド洋上。船はマラッカ海峡へ向かいつつある。

伊達邦彦氏は——と、この伊達邦彦は本名、すなわち戸籍名で、つい三日ほど前に改名した。彼が名前を変えたのはこれで七度目だが、今回はどん底転落の危機から脱して、心機一転、心の空気を入れ替えようと考えての改名。人の身元が生体認証（バイオメトリク）と数字で管理されるようになって以来、自由な改名がほとんどの政治共同体において許されるようになっているのは誰もが知るところだけれど、「伊達邦彦」が大藪春彦（1935〜1996）のハードボイルド小説の主人公で、日本人俳優、松田優作が映画『野獣死すべし』で演じた役名であることを知っている人はあまりいないよね。当の映画を観て、いたく感動し、完全にかぶれ、ついに名前まで変えるに至ったと云う次第。今後の人生は伊達邦彦のごとく、剛胆かつセクシーに世に処していきたい、と云うのが改名にあたっての抱負なのでした。

それで伊達邦彦氏がジェットヘリを飛ばして「メデューズ号」を追ってきたのは、〈Met02〉の指示に従ってのこと。船で東京へ行き、KKのTBUを指揮せよ、と云うのが指示内容なわけだけれど、その意味するところを最初伊達邦彦氏は理解できなかった。いや、まずそれ以前に、〈Met02〉が伝えた情報全般が、耳小骨辺りでくるくる空回りするふうで、脳にしみこんでこない。モリキテックが買収された？　さような重大事が副社長である自分の与り知らぬところで起こるはずがない。

CamScannerでスキャン

ところが、その場で確認したところ、それは本当に、現実に、起こっていた。買収したメルクリウス——正しくはMercurius Assets Managementは、グリーンキャッスルの、モリキテック本社の二区画(ブロック)先にあるGreen Crystal Tower最上階に事務所(オフィス)を構える投資会社。複数の宗教団体を母体に、神への献身的奉仕と悪辣なM&Aで知られ、企業社会の餓狼、聖者の顔をしたハイエナなどと呼ばれながら驚異的に業績を伸ばし、いまでは天界の神獣とまで云われるに至った伸張ぶりは、伊達邦彦氏がかねがね賞賛してやまぬところであったが、自分が餌食となっては喜んでいる場合ではない。急いで確認したところ、買収後のモリキテック社経営陣にはメルクリウスから役員が加わり、あとはCEO以下変わらず、唯一変わったのが副社長、つまり伊達邦彦氏その人。

要するに自分一人が外されたわけで、だからこそ情報が入ってこなかったのであり、二日前の役員会では、ほかの連中は買収を知りながら素知らぬ顔で保身を図っていたのだ、と知った伊達邦彦氏の憤怒は爆発し、同時に己の甘さへの呪詛(じゅそ)の汚泥(おでい)が心に溢れ出て、怒りは内向し、結果、げへ、げへへへへと云う、嘔吐する猫のごとき笑いの発作となって喉から出たのが奇怪だった。背を丸めて毒素を吐く男を、山萩青年は微笑を浮かべて見守っていたが、ようやく伊達邦彦氏の発作が収まると、そんなに気にすることはないですよ、と慰めの言葉をかけてきて、聞いたとたん伊達邦彦氏は、今度は急激な悲哀に見舞われてしまい、やっぱり自分は駄目なやつだ、どうにもならぬロクデナシだったのだ、[illegible]

容易、ゴミクズ人間だったのだ。山萩博士、あなたの評価は一から十まで正しゅうございました、との思いが押し寄せて、わっとばかりに泣き出しそうになったところへ、山萩青年がジーンズの脚を組み替えながら言葉を継いだ。

「君が役職を解かれたのは、自由な立場で『聖槍計画』に従事してもらうためです。それが上手くいけば、君は思い通りの地位を手にいれることができる」

「そんなこと信じられるか！」

伊達邦彦氏は癇癪を爆発させ、潰裂した魂から溢れ出た涙と鼻水で顔を濡らしながら、しかし〈Met02〉にすがるしかない自分がそこにいることをすでに発見もしていた。〈Met02〉が云うように、「聖槍計画」――山萩博士のＴＢＵソフト、すなわち〈Met02〉に29virusの謎を解明させる計画――の続行が新役員会で決議されたのだとすれば、メルクリウスの意向に違いなく、彼らは計画の中核にある自分になお期待を寄せているいると考えられはしないか。「自由な立場で『聖槍計画』に従事してもらう」との〈Met02〉の言葉は、あながちおためごかしとは云いきれぬのではないか。いずれにせよ「聖槍計画」が終了し、〈Met02〉が消去されてしまえば、自分はモリキテックからたちまち放り出されるだろう。そうなれば、資産横領などで訴追される危険さえある。自分は一切合切失い、奈落の底へ転落だ。逆に「聖槍計画」がうまくいくなら、メルクリウスそのものの中核へ潜り込む、いや、頂き近くへ這い上がることだって可能かもしれ

CamScannerでスキャン

ぬ。

〈Met02〉だけが彼の味方であり、頼るべき仲間であった。そしていまやそれは彼の主人でもあった。一度そう思い定めれば、いくらでも卑屈になれるのが伊達邦彦氏の特徴である。主人は永遠に主人でいるわけではない。いずれ立場を逆転させ踏みつけにしてやる、と、そう念じれば、土下座して靴を舐めるのも平気、むしろ進んで舐めたいくらいだ。しかも相手が機械となれば、余計なお世辞を使わなくてよいのがいっそ気楽であった。

かくて主人の命令に従い、「メデューズ号」へジェットヘリで飛ぶことを了承したうえで、伊達邦彦氏は二、三の質問をした。一つは、なぜＫＫのＴＢＵにそれほどこだわるのか、である。ＫＫが29virusの秘密の鍵を握っているからなのか、と逆に問えば、〈Met02〉は否定しなかった。ＴＢＵを施した後、ＫＫは微粒子レベルに解体して調べる予定だと〈Met02〉は教え、つまりは切り刻む前に脳情報のバックアップを念のためにとっておこうと云うことのようであった。電脳ウイルスが放出された瞬間、ＫＫが現場にいたのはたしかのようだが、それにしてもなぜあんな平凡な女――調べた限りではそう云うしかなかった――が秘密の鍵を握らなければならぬのか。これについては現在なお調査中デアルとの回答が〈Met02〉からは返ってきただけで、疑念はなお晴れなかった。

舞浜でＴＢＵをするのはいいとして、どうしてわざわざ船で向かう必要があるのか。当然の疑問に対して、空路ではＫＫを秘密裏に運び込みにくいからだと〈Met02〉は答え

た、KKを東京からケープタウンへ運んだ時点とは違って、いまや日本警察とICSOが動き出しており、モリキテックの技術力をもってしても、テロに神経を尖らせる空の監視体制を潜りぬけるのは難しく、海からの方が比較的――あくまで比較的であるが、容易であるとは云えた。船を使う第二の理由は、舞浜まで運びたい機材があるからで、これについても船が便利だと説明した〈Met02〉は、さらにもう一つ、と意外な理由を加えた。「KKが進んでTBUを受ける気持ちになれるよう、時間をかけて誘導する必要があるからです」と彼は述べたのである。施術の準備過程で被験者の積極的関与が必要なのはたしかで、つまりKKはTBUを受けることに同意していないらしいと理解した伊達邦彦氏に、山萩青年はさらさら髪をかきあげつつ、「彼女をいったんケープタウンへ運んだのも同じ理由です。船旅は人の気持ちを変えてくれる。大地から離れ、生命の故郷である母なる海の懐に抱かれる環境が人をしてそうさせるんでしょうね」と述べたが、詩を解さぬ伊達邦彦氏には意味が分からなかった。

　しかし最後に山萩青年が口にした言葉はそれ以上に意味が不明だった。すなわち彼は、「大感染（パンデミック）」が陸地ではじまった場合、海上に居るのが安全だと云ったのだ。「大感染（パンデミック）」が一度はじまれば陸も海もないわけで、成層圏の外だって駄目だ。だから彼の言葉は意味をなさぬわけで、やはり〈Met02〉には、技術者連中が主張するように、「狂い」が生じているのかもしれぬと伊達邦彦氏は観察し、しかし細かな計算違いなどはいちいち気にしても

CamScannerでスキャン

仕方がない、いまは機械人格に従うしかないのだと思い定めて、「応接室」を出たのだった。

「メデューズ号」からの着艦許可の信号を受けて、伊達邦彦氏はマニュアルどおり自動着艦装置(システム)を作動させた。飛行中はほとんど騒音を出さぬグラマンのジェットヘリは、離着陸時に特有の擦過音をたてながら、クルーザー後甲板の航空機台(ヘリポート)へ向かって降下を開始する。

外景モードにした窓面(スクリーン)に、青黒い海原のただなかで航空機台(ヘリポート)の白い正六角形が大きくなりゆくのを、純然たる装飾品の鏡黒眼鏡(ミラーサングラス)越しに見詰めた伊達邦彦氏の頭に、山萩青年が口にした「大感染(パンデミック)」が、デジタル機器のそれではなく、生体の感染についての話だったのでは、との考えがふいに浮かんだのは、航空機台(ヘリポート)の白い六角形が抗ウイルス剤を連想させたせいだ。生体ウイルスならば、なるほど海上に居る人間は比較的安全だ。しかしなぜ〈Me102〉は急にそんなことを云い出したのか。疑念の胆汁がじわり肚のあたりにしみ出すのを覚えながら、伊達邦彦氏はジェットヘリの正しい着艦と繋留(けいりゅう)を窓面(スクリーン)で確認した。

82

　シンガポール国立大学のダニエル・リー教授が、サイパン島の聖パウロ病院の特別保安病棟からほとんど拉致されるようにして連れ出されたのは、入院して四日目、豪奢なソファーに座し、フランスから航空便で取り寄せたロゼシャンパンを味わいつつ、伊勢海老のテルミドールを食している最中のこと。出し抜けにICSOの人間（エージェント）が入室してきて、有無をいわせず垂直離着陸機（VTOL）に押し込められた。
　リー教授には心臓疾患と脊椎リウマチで「絶対安静」の診断が出ていたから、連れ出されながら声帯を震わせて――つまりは大声で、助けを求めたのに対し、巣穴に隠れる小齧歯類（げっしるい）さながら、病院スタッフはひとりも姿を見せなかった。世界各地のヤクザ国家（英語でyakuza state。ヤクザと云う日本語も出世したものです）の首長御用達（ごようたし）の老舗リゾート病院も、ICSOの防波堤とはなりえなかったわけで、これは十数年前にはとても考えられず、いつのまにICSOはこれほど力を伸張したのかと、リー教授は海老に未練を残しつつ唖然となった。ICSOの大波の前では聖パウロ病院などはさながら浜辺の砂城なの

でした。

で、連れて行かれたのは、サンフランシスコ郊外、かつてシリコンヴァレーと呼ばれた地区にあるICSOの直属研究所。二十世紀末からIT関連企業が集合していたここは、金融貴族とはまたタイプの異なる高所得者らが、外部から切り離された「独立州都市」を形成し、研究所は「城壁」に囲われた街の、公園ふうの緑樹に埋もれた模造煉瓦の低層建造物内にある。私的な通信はもちろん、施設から出ることも許されぬまま、同じようにして集められた人員（スタッフ）とともに電脳（コンピューター）ウイルス研究を強要される状況は、もとより完全なる人権侵害。ではあるが、ヨセフ・ヴァン・グエン博士の運命を目の当たりにしたいま、逆らうことはありえないのでした。

ICSOから与えられた課題は、グエン博士命名になるアレフ・ウイルスは果たして実在するか、判定せよ、と云うもの。要はデジタル機器に本当に異変は生じているのか、これをあらためて調べてくれと云うわけで、具体的障害が生じていない現在、アレフ・ウイルスなるものは捏造ないしは錯覚ではないかと主張する研究者もいるのだと、ICSOの幹部が仕切る会議では教えられた。たしかに科学の歴史を繙（ひもと）くならば、研究者の思い込みや幻想が錯誤をもたらした例は枚挙に暇がない。

リー教授は、グエン博士が残した資料をはじめ、複数の研究機関の観測データを綜合し、あらためて解析する作業を、ごく短時間の人工睡眠を挟みつつ、静脈から栄養補給を

受けながら二〇〇時間にわたって敢行した。で、結果は、と申せば、前と同様、幻想でも錯覚でもなく、嘘でも偽りでもなく、「異変」は生じているとしか云いようがなく、「異変」が奈辺に由来するのか、そもそも電脳ウイルスと呼んでよいものかどうかすら不明なのも前回と同じ。ただ今回の分析で一段と明瞭になったのは、二〇二九年の「大感染」を引き起こしたウイルスとの著しい類似性で、もっともアレフ・ウイルスは現在なんらの障害ももたらしていないのだから、この点は決定的に違うとするしかない。

　どちらにしても29virusとの類縁性がはっきりした以上、タカヤ・ヤマハギに意見を求めるべきだとリー教授は考えた。当の問題につきヤマハギが何歩も先へ進んでいるのはたしかで、なにしろ彼は無害化した29virusのサンプルを自製して送ってきたのだ。むろんその段階でリー教授は共同研究を申し込んだ。ところが、ヤマハギは断ってきたばかりか、どんな積もりか知らぬが、研究？　何のこと？　とでも云うかのような態度をとり、体調を崩したせいもあるのか、そのうちに連絡自体がつかなくなった。

　当然ながらリー教授はヤマハギの送りつけてきたサンプルを徹底的に解析した。いや、解析しようとした。しかし29virus本体に対するのと同様、解析の名に値するようなことは何一つできず、ここにおいてリー教授は己の才能に絶望し、学問への意欲は潰滅、思えば、リー教授の学究魂は、あのときからひなたのアイスクリームのように溶解しはじめたのでした。

ヤマハギの研究成果はリー教授しか知らず、モリキテック社に問い合わせたところでは、病の進行したヤマハギはもはや発表できる状態にないと推測され、とすれば自分がヤマハギに代わってデータを公表すべきであった。それが節度ある学究の態度であった。しかし、リー教授はそうしなかった。ヤマハギの死亡が確定した段階で、自分の手柄として発表できないかとの、狡い考えがなかったとは云えない。が、それ以上にヤマハギへの嫉妬がリー教授を束縛した。学者魂が腐蝕した後に残ったものは、名誉欲だとか権力欲だとか支配欲だとか、自我に巣くう貪婪な野生獣だけなのでした。

二〇〇時間の作業を終え、ややまとまった睡眠をとった後、リー教授は会議への出席を促された。六階建てビルの地下三階にある防諜会議室は、モリキテック本社の「鉛の方舟」と同様の造りで、しかし十数倍の規模がある。各種栄養剤や血管拡張剤等、一七種類の薬を嚥み、あるいは皮膚圧入し、さらに神経覚醒剤とヘモグロビン増幅剤を注射したリー教授が会議室へ入っていくと、多国籍金融企業の経営者や有力政治共同体の首長を含む、三〇名ほどの人間がずらり勢揃いしている。リー教授の報告が主たる議題であるこの会議の席は、リー教授にとっては針の筵。なにしろ、なに一つ、分からないのですからね。

アレフ・ウイルスは幻想でございました。演壇ふうの四分円卓に立ったリー教授はほとんどないようになった。楕円の長卓を二重に囲んだ座席からリー教授を注視する人々が、

そうであることを熱烈に望んでいる事実を、石つぶてが額に打ち当たるがごとく感じたからだ。ええと、あれはですね、ただの錯覚、勘違い、なんでもありませんでしたんで、ご安心を。人に喜ばれるのが大好きな、サービス精神旺盛なリー教授は、ぜひともそう申告したかった。そう云っちゃえば楽になれる。会議の人々も拍手喝采、立ち上がって握手を求めてくるだろう。八方円満、万事解決。が、事は人類文明の運命に係わるのであって、その責任の重さへの自覚が、さすがに教授をして虚偽の報告を許さなかった。

その後の展開は予想どおり。リー教授は、三日三晩砂漠を放浪した人のように喉を渇かせ、スカッシュで鍛えた脚は水藻のように震え、針の筵の針は鋭く尖って軀をずぶり貫いた。ごめんなちゃい、ボク、なんにも分かりませーん。子供みたいに告白したい欲求にリー教授は駆られた。泣きながら告白して、額を床に擦り付け、赦(ゆる)しを請いたい。そう思いながら、リー教授は電脳科学(コンピューターサイエンス)界最高の頭脳の持ち主、電脳ウイルス研究の第一人者の顔を崩さぬまま、もっともらしい述語を並べて質疑に答えていったのだが、専門家が多数混じるこの場所では素人を煙に巻くようなわけにはいかぬ。人工心臓が沸騰する薬缶(やかん)めいてぶるぶる震え、脂汗が背中で雨だれのごとくぽたぽたと垂れるのを覚えながら教授は述べた。

「いわゆるアレフ・ウイルスに――この名称はいかがなものかと思いますが――あらゆるデジタル機器が感染していることは間違いない。そしてこれは29virusと同じものである

のもほぼ間違いない。しかし、では、なぜそれが障害を引き起こさぬのかと云えば」と間を置いた教授はすぐ下に断崖絶壁が口を開けているのを見た。覗いた下方は眼の眩む谷底。あとはただ落ちゆくのみ。観念したとき、口から言葉が飛び出た。

「3が4になる。そのとき『人感染』は再来する」

ざわめきが広がるなか、リー教授の口からは次々と言葉が吐き出されていく。3が4になるとは、つまり、「0」と「1」と「X」の三項であるデジタル情報に、第四項が侵入し加わることであり、そのときはじめて障害は発生するのである。「一、二、三、四――死！ なのです」、との決め台詞は英語では云えなかったが、同じ内容は述べ、これは云うまでもなく、入院直前、ヤマハギの冗談めかした報告から得たアイデアで、奇突の論と云うもおろか、ほとんど根拠のない戯れ言、科学者たる者が口にすべきでない妄語ではあったけれど、嘔吐代わりに口から飛び出てしまい、いったんこの世に躍り出るなら、実在の衣装を纏って人々の頭上を舞いはじめる。となれば踊りパートナーであるところのリー教授も一緒にステップを踏むしかない。じつはこのとき、今回のウイルスについてはタカヤ・ヤマハギに意見を聞くべきだと、提言をするつもりがリー教授にはあった。これは最後に残された彼の良心の灯火であった。しかし、ヤマハギの発想を引用元を示さずに述べたこの瞬間、灯火は虚栄の大気のなかに消え去った。タカヤ・ヤマハギの名前がリー教授の口から出る可能性は零となった。

二〇一九年のCOVID-19の場合も、第一の感染――「第三項」の侵入がまずあり、その後「第四項」の侵入があった段階で「大感染」を引き起こすに至ったと考えられる。当時はウイルスの検出技術が未熟だったがゆえに第一の感染は気づかれなかったのである、とこう述べれば、我ながらもっともらしくて、筋が通っていて、リー教授本人が、あるいは本当にそうだったのではないか、いや、きっとそうだと、ほとんど信じるまでになったのだから、偉業をなす科学者にはやはり宗教的信念が必要なんだろうね。

では、その「第四項」とは何か？　当然の質問にリー教授は答える用意はなかった。あるわけがない。それでも教授は一つのことをなした。すなわち問題の「第四項」にת（タヴ）の名を与えたことだ。תはヘブライ語の最後の文字。すなわちアレフ・ウイルスに続き、タヴ・ウイルスが来たとき、「大感染（パンデミック）」は発生し世界は終わりを迎える。リー教授がアレフの命名に歩調を合わせてヘブライ文字を持ち出したのは、失脚したグエン博士に責任を少しでもかぶせようとの、姑息（こそく）な計算が働いたことは否めません。とにもかくにも、アレフ・ウイルスの正体解明がいまや急務であり、それができるならタヴ・ウイルスについても予測が可能になるはずであるからして、世界中の頭脳を結集し敢然取り組む必要がある、そうすれば必ずや人類はこの危機を乗り越えられる、困難を克服できる、さように私は信じるのでありますと、芝居で鍛えた朗々たるバリトンで宣言し、重々しい足取りで演壇を降りたとき、リー教授の股間が濡れそぼっていたのは、もともと前立腺が不具合なと

ころへもってきて極度の緊張からくる自律神経失調が加わった結果なのでした。

　むろんICSOはリー教授の失禁などには関心を払わず、即座に対策を講ずべく動き出した。まずは混乱を避けるために、情報操作をさらに徹底したうえで、分野の専門家を駆り集め、ウイルス駆除の研究を効率的に進める態勢を整えた。もちろん一方では、「大感染（パンデミック）」の到来を前提に手段を講じ、とは云え、タヴ・ウイルスがいつどこからくるか分からぬ以上、できることは少なかった。感染を予防するには、生体ウイルスと同様、感染者との接触を避けるのが一番だが、ほとんどの電子機器は電脳網（ネット）で繋がってしまっている。ならば切断すればいいわけだけれど、これを確実になすには電磁波遮断（ウェーブカット）が必要で、しかし遮断装置自体がデジタル機器であるからして、それが感染して駄目になればどうしようもない。あとは物理的手段で――たとえば「鉛の方舟（Pbアーク）」に載せて守るしかないわけだが、そのような施設は数に限りがあり、そもそも個別の機器は互いに繋がることで「生きて」いる面があるから、簡単に切断はできない。

　ICSOに連なる電脳社会の貴族たちは、突出した行動をとるべきではないと申し合わせ、互いを牽制し合う一方で、「大感染（パンデミック）」到来への準備を隠密裏に開始した。となれば、どれほど手厚く情報操作をしたところで、「異変」は世間に漏れ出ざるを得ない。グエン博士の抹消でもって一度は沈静化したかにみえた恐慌（パニック）の津波は、再び地球社会の海面に隆起し、文明の浜辺へ押し寄せつつあった。

CamScannerでスキャン

83

高速大型クルーザー「メデューズ号」は、三三ノットの高速でマラッカ海峡から南シナ海を進み、バシー海峡を抜けて南西諸島に沿うように太平洋を北上、東京へ二五〇キロ米（メートル）の洋上を航行していた。フィリピン東方海上に発生した低気圧が伊豆諸島へ接近しつつあって、海は荒れはじめていたが、航路変更の必要はなく、あと五時間ほどで目的地へ着く予定だと、先刻航海長から連絡を受けた伊達邦彦氏は、中甲板の客室で多糖ゲル椅子（ドGチェアー）に沈み込み、からすみを肴にスコッチウイスキーを飲（や）りながら、サッカーの試合（ゲーム）を3Dホログラムで観戦していた。

船に乗り込んで五日、海上を行き交う無数の電磁波情報からは、「恐慌（パニック）」の気配が時を追うごと濃密になりゆくさまが見て取れ、サッカー観戦中のいまも、侵襲式端末には、経済指標数値の不自然な変動や超巨大企業（スーパーメガファーム）経営者の慌ただしい動きなど、「異変」を告げ知らせる情報が次々流れ込んできていた。モリキテック社の役員を解任されて、情報の深部には接近（アクセス）できなくなっていたが、アレフ・ウイルスの蔓延（まんえん）はもはや疑えず、である以上、

ネットがいかに暗号化しようと、情報は漏れ流れざるを得ない。こうなるのは時間の問題だったのだ。命より大切な私的資産の運用については、この事態を前提に打てるだけの手を打っておいたから、伊達邦彦氏は緊迫しながらも僅かに余裕がある。

勝負はこれからだが、いまのところ自分は電脳貴族連中に遅れはとっていないはずだ。自陣に押し込まれ守備に追われてはいるが得点は許していない。モルトの香りを鼻の奥に嗅いだ伊達邦彦氏は祈るように考える。いずれにせよ世界が結晶化したままでは自分に勝ちの目は出ない。試合の動きが止まってはカウンターのチャンスはない。したがって事が起りつつある現況は好ましいが、のんびり船旅などしている場合ではないと思えば、灼けつくような焦燥感の熱油が胃から食道へ突き上げてくる。だが、いまは〈Merc2〉の命令に従う以外の選択肢が見あたらなかった。死命を決すべき深情報の唯一のパイプが〈Merc2〉であることを思えば、いよいよ彼に頼るしかない。

とにもかくにも動きはある。まずはよしと、マホガニーの卓に脚を投げ出す格好でウイスキーを口へ放り込んだ伊達邦彦氏は、この数週間に蓄積された脳の凝りが溶解して、暖気が全身に広がるのを覚えた。〈Merc2〉がいうように、たしかに船旅は人の気持ちを変えてくれる。伝統のクラシコ、前半を終えて贔屓のレアル・マドリードがFCバルセロナを「1―0」でリードしていることも気分を明るくしていた。

それにしてもサッカー選手というのは、あれだけ過激な運動を、もって生まれた肉身で

するのだからケナゲなものだ。サッカー選手に限らない。薬物や補助器具を使えば簡単にできることを生身でやるスポーツ選手とはまったくご苦労様な人種だが、人工脚で一〇〇米を八秒台で走れる人が、ドーピングなく記録を争う者らを熱心に観るのは、そのケナゲさにうたれるからなんだろう。種目を問わずスポーツ観戦するたび、ああ、人間って可愛いな、との思いに伊達邦彦氏は泣けてしまう。いまも前半終了時点で、手にした木綿タオルは結構な量の涙を吸っていた。

東京まであと五時間。ようやく出番だ。とは云え、東京港でＫＫを陸揚げする手筈は向こうで整えているはずで、連絡を待つだけの話。いまもそうだが、この五日はほとんど何もすることがなかった。『METEO』の人間の掌握は、もともと自分の指揮下にあったのだから当然だけれど、バーバラ・ウェルスと数分話すだけですんでしまった（寝台に誘い込んだのは余計だったが）し、船内の様子を把握するには一時間もかからなかった。刻々と度を増す危機的状況下を無為に過ごすのは苦痛きわまりなく、酒と３Ｄホロでなんとか時間をやりすごしてきたが、まもなく東京だと云ういまになって船旅の寛ぎが生まれてきたのは皮肉であった。

ＫＫには、乗船した日の夕刻に会った。夕食をご一緒したいと招待すると、妙にぴかぴかして眼に痛い、玉虫色の繋ぎ服の女が食堂へやって来て、こちらがモリキテックの人間だと知ると、全体どういうことなのかと、矢継ぎ早に質問してきたので、ある事情から身

柄を一時預かったが、これは山萩博士の指示であって、事情はいまは明かせぬし、自分もじつはよく知らぬのだと適当に答えておいた。しかし山萩博士が貴女に悪いようにするはずはないし、だから安心して大丈夫だと云うと、どこかうすぼんやりした感じの東洋人玉虫女は、少し納得したようで、航海長をその場へ呼んで、船が東京へ向かいつつあることを説明させれば、だったらいいかもと云って笑顔になるのだから、わりと単純な女だなと観察した伊達邦彦氏の見解は間違っていません。

で、フォギーの方はと云えば、初対面の男性と差し向かいで食事をするのは、ましてや訳の分からぬ船旅の途次、当然気詰まりだったが、相手から情報が引き出せるかもしれぬと思い、我慢して食卓についているうちに、わりといい調子になってきたのだから、人間の神経の機構（メカニズム）は分からぬもの。船旅が人の気持ちを変えると云うのは本当なのかも。酒は何が好きかと訊かれたので、日本酒が好きだと答えると、伊達邦彦氏が食品給仕機（フードサーバー）ではなく貯蔵庫から出してきてくれた生酒があまりにも旨く、ぐいぐい飲って少々酔っぱらったせいもある。フォギーは基本は人見知りなのであるが、酒が入ると対人恐怖の垣根がいくぶん溶け崩れるところがあります。

食卓の斜め横に座った人物は、はじめのうちこそ、どうしてこんな昭和の映画に出てくるチンピラみたいな人がモリキテック社の副社長（と伊達邦彦氏は見栄を張って自己紹介した）なんだろうと不審に思ったのだけれど、少し話してみれば、なかなか感じがよく、

[illegible]自分からはあまり喋らず、話にさも感心
し[illegible]耳を傾けたり、冗句に笑ったり、びっくりしたり、気軽に席を立ってあれこれ
サービスしてくれたりするあたり、さすがに育ちが良いな、と見たフォギーの観察も決して間違ってはいません。

一方の伊達邦彦氏は戸惑っていた。酒は燗が一番だと主張するKKは、徳利の燗酒を手酌で飲りつつ、給仕ロボットに運ばせた肴を貪婪な蟹みたいにずいずい平らげていく。よく飲みかつ喰う女だな、と観察しつつ、しかしどうしてこのような田舎学生のごとき者が29virus解明の鍵なのかと、不審を募らせたことがまずあった。もう少し謎めいていたり、妖しかったりしてもよさそうなものなのに、鯵フライに前歯でばりり齧りつく風情は神秘とはいかにも遠い。

思えば、こんなふうな女と付き合った経験が伊達邦彦氏にはないのであった。こんなふうと云うのは、敵でも味方でも奴隷でもない女の意味で、逆に云うなら、伊達邦彦氏が出会ってきた女性はほとんどが敵か味方か奴隷であり、会食の席は大概が政治的な闘争の場で、ある意味いまもそうであるはずなのだが、相手との利害がはっきりしないがゆえに、戸惑ったあげく、アニメに出てくる気のいい熊さんみたいだなと、本人が知ったら卒倒しかねぬ観察をフォギーからされる破目になったと云う次第。

玉虫服のKKは、杜氏の歴史および酒麹菌についての蘊蓄を披露し、そこから大手酒造

会社への痛烈批判へ及び、さらには日本酒に一番合う肴は何かと云う話を熱っぽくはじめたのには伊達邦彦氏も困惑した。ちなみにKKの肴ベストスリーは、一位このわた、以下湯豆腐、イカ塩辛。ああ、そうなんだと、ぼんやり頷いていたら、じゃあ伊達さんのベストスリーは？　と正面から訊かれて面喰らった。こんな質問を、こんなふうにされたのは、生まれてはじめての経験であった。

真剣に考えた伊達邦彦氏が、からすみ、筋子しょうゆ漬け、キャビアと答えると、ええー、キャビア？　魚卵系で揃えてきた狙いは評価できるけれど、キャビアはどうかな、お酒には合わないいんじゃないかなあ、と初対面とは思えぬ馴れ馴れしさで評論してくるKKは、酔っぱらったせいもあるんだろうが、総じて云えば、けっこう愉快な奴なのでした。

戸惑いつつも伊達邦彦氏が食卓に座り続けたのは、山萩貴矢との関係を探り出そうとの目論みゆえで、それとなく探りを入れたのだけれど、地球上のあらゆる飲食店のなかで日本の居酒屋が一番素晴らしいと、KKが自分と同意見を有している事実以外、新情報は得られなかった。KKにTBUを同意させる件は、『METEO』の人間が進めていた。具体的には、脳に損傷を与えない程度に神経剤を使い、催眠暗示の手法で誘導していて、だからなのか、KKは多くの時間をATSに繋がって過ごしていた。ただし外部の電脳網に接続するのは、生体認証コードを捕捉される危険があるので、もっぱら船内で機械分身を動かしているようだった。

機械分身（メカニカルアヴァター）と云えば、ＫＫが使うそれのほかにも船内には多数のアンドロイドがあって、伊達邦彦氏を驚かせた。あれは何だとバーバラ・ウェルスに問えば、どうしてあなたが知らないのかと、逆に不審がられたのは、伊達邦彦氏が〈Met02〉の使い走りであることを彼女が知らぬ証拠で、『METEO』の者らは、自分たちが「作り出した」〈Met02〉が、伊達邦彦氏の支配下になおあるものと信じて疑っていなかった。実情は逆。しかし子会社の社員のごとき者にわざわざ申告することもない。アンドロイドは専門外でね、と伊達邦彦氏がやや焦点（ピント）のぼけた返事をすると、自分も詳しくは知らされていないが、たぶん玩具だろうと、金髪女は解説した。

「ＫＫは現実世界でピアノを弾くことにこだわっているらしいのよ。それであんなアンドロイドを作ったんだと思うけれど、とんでもないお金がかかったでしょう？」と流し目を伊達邦彦氏にくれつつ云った金髪女は、岩場のセイウチのごとく寝台（ベッド）に長くなって続けた。

「肉体を失って電脳世界（サイバーワールド）の住人になっても、機械分身（メカニカルアヴァター）を使えば現実世界（リアルワールド）で思う存分活動できる。現実世界（リアルワールド）の人間が、電脳（コンピューター）内で分身（アヴァター）を使うのとちょうど逆になるわけだけれど、それができると思うと、ますますＴＢＵが魅力的になってくるわ。ＴＢＵが安価になって、わたし程度の人間でも受けられるようになるといいんだけど」

性転換その他にかかった費用の分割払い（ローン）が大変なのだと、愚痴を云ったバーバラ・ウェ

ルスは、裸体を見せつけるようにうつ伏せになると、顔だけこちらへ向けて、目一杯媚(こび)の詰まった笑顔を作る。習慣で寝台(ベッド)へ誘いはしたものの、あたかも冷凍マグロを抱くがごとし。なんとも味気のない女であることよ、と批評した伊達邦彦氏は枕に寄りかかって煙草に火をつけてから、べつのことを質問した。

「あのアンドロイドは誰が整備しているんだろう。技術者が乗っているのかな」

煙草を吸う男を物珍しそうに眺めた女は、寝台(ベッド)に起き上がって答えた。

「誰も。操作は私たちがやってるわ」

「君たちとは、つまり『METEO』がやっている？　しかし、そんなことができるの」

「簡単よ。動力自転車(バイク)より簡単」と笑った裸美人は、太腿付け根の蜥蜴(とかげ)の刺青を撫でて云った。アンドロイドは自律型であり、人の操作はほとんど必要ない。不具合が生じた場合は、研究所に連絡すれば電脳網(ネット)を通じて修理がなされるはずで、しかし東京へ着くまでは原則、通信はしないことになっていると続けたバーバラ・ウェルスは、脇卓(サイドテーブル)から取った紙巻き煙草を物珍し気に鼻先で観察してから、ぎこちなく口にくわえた。伊達邦彦氏から火をつけてもらい、真剣な面持ちでふかしてみた後、そう云えばこんなことがあったわ、と話を繋げる。

「ケープタウンでのことだったんだけれど、故障があったアンドロイドを別のアンドロイドが修理装置(デバイス)を使って直してた。なんだか変な感じだったわ。でも、アンドロイドのこ

CamScannerでスキャン

と、どうしてあなたが知らないの？」
機械が機械の故障を直す。あるいは機械が機械を作り出す。それも人間の介在なしに。ケープタウン研究所や舞浜工場では、〈Met02〉の指示でそれに近いことがいまや行われているわけだ。あのとき、寝台（ベッド）の上でこちらの腹をしきりと探ってくるマグロ女の煙草臭い口を、軀の一部位を使って封じながら浮かんで来た像（イメージ）を、後半のはじまったサッカーゲームを眺めながら伊達邦彦氏は追いはじめる。

機械たちの自律社会。たとえばいまかりに突然人類が死滅したらどうなるだろう？　古いＳＦでさんざん描かれた、機械の支配する地球が現出するだろうか？　いや、まだ無理だ。伊達邦彦氏は考える。少なくともいまの段階では人間ぬきに機械は動かない。モリキテックの工場だって人間なしでは稼働できぬ。もちろん技術は加速度をつけて高度化しつつあり、二〇二九年の「大感染（パンデミック）」がかりになかったなら、いま頃は可能になっていたのかもしれぬが——と考えたとき、ある発想がぽかり思考の水面に浮かんで出た。ひょっとすると「大感染（パンデミック）」は人間の機械への隷従を阻止する出来事だったのではあるまいか？

低気圧の影響なのか、船は揺れはじめていた。円い舷窓に波しぶきが繰り返し打ちつけ、滑り止めのない硝子器が卓を滑る。船酔い防止の神経ソフトだけでは不安なので、バスルームにあった酔い止め薬を飲んでから、伊達邦彦氏はまた３Ｄホロに眼を向ける。が、もはやゲームには集中できず、頭は思考のボールを熱心に追いはじめる。

CamScannerでスキャン

29virusはなぜ出現したのか？　機械の支配する地球、機械の帝国の片隅でささやかに生きながらえる「人間」たち。犬小屋と変わらぬ社に祭られた神々の末裔。衰滅を待つだけの旧種族。そのような人類の未来を阻止すべく29virusは作られたのではあるまいか？29virusは人間の機械に対する優位を維持すべく放たれたのではなかったか？　人類文明が被る損害の観点から「大感染」は語られてきたが、視点を変えればべつの景色が見えてくる。少なくともいま再び「大感染」が到来するならば、機械の進化は停滞を余儀なくされる、どころか大幅に退歩することは間違いない。

29virusは人間の味方である！　伊達邦彦氏はいささか興奮気味に考えた。が、このアイデアは必ずしも彼のオリジナルではなかった。複数のカルト宗教家やエコロジー理論家、テロ組織に影響を与えた電脳網論者らが提出してきたものだ。もちろん伊達邦彦氏はそれらをひとまとめに社会的騒音とみなしてきた。だが、いまや、幽霊にすぎぬと思っていたものがぶあつい肉体を備え迫るかのような現実感を覚え、その巨体の陰では、別荘の「応接室」で山荻青年が口にした言葉がちらついた。

「『大感染』が陸地ではじまった場合は、海上に居るのが安全ですからね」

古いSFで描かれた人間対機械の戦争。もしそんなことが本当に起こったとしたら、29virusこそは人間陣営にとっての最強の武器となるだろう。逆に機械側が人間を殲滅するには、致死的な生体ウイルスによって「大感染」を引き起こすのが最も効率的だ。

[illegible]
で目的にしたことのある「一寿命を延ばい出した。」とはすなわち、山荻博士がその昔、社内にま
体ウイルスの研究班を組織していたと云う話だ。伊達羿彦氏が生まれる以前の話だから、
詳しいことは知らぬが、研究は [illegible] の解明を目的にしたもので、しかし工作機械会社
がそこまでやる必要があるのか、カネばかりかかって、と批判され、成果を挙げられぬま
ま解散したと聞いた。しかし、だ。もしも、あくまでもしもの話ではあるが、山荻博士が
致死的な生体ウイルスを作り出すことに成功していたとしたら――。

そんな馬鹿なことが。伊達羿彦氏が無理に笑い、ボトルの酒をグラスに注いだとき、緊急警報が船内に鳴り渡った。すわ「大感染（パンデミック）」の発生か！　電脳（サイバー）ではなく、人間（ヒューマン）の！　怯え竦む兎の心臓を檻に仕舞い、恐慌（パニック）に襲われそうになる神経を無理矢理押さえつけて、慌てるなと、自分に強く云い聞かせながら、救命胴衣の位置を確認し、ゆっくり酒を飲み干してから、操舵室を映話画面に呼び出せば、東洋人船長が出て報告した。「日本の海上警察が停船を命じています！」

言葉に続いて画面が外景に切り替わる。白い波しぶきを浴びるほどの低空を静止飛行する、蝙蝠（こうもり）のごとき影絵（シルエット）をなすジェットヘリが数機、鉛色の雨天のなかに浮かび上がった。

84

「メデューズ号」が停船した位置は日本の領海の外、したがって命令権は及ばぬはずだが、排他的経済水域であるこの辺りは日本国の「縄張り」には違いなく、そもそも相手が誰であろうが、ユーロコプター社製の武装ヘリにこう取り囲まれては大人しくする以外の選択はありえぬ。海上警察からはレーザー通信を通じ、乗船者は全員、現状から動かぬよう指示が出され、動いた場合は物理的な強制手段がとられるとの警告があった。この措置はむろん合法ではない。けれども対テロに従事する国家警察の権限には「のりしろ」があるとの見解が世界の常識、少々の（と云うか、大幅な）逸脱も許されるわけで、そもそも電撃の苦痛に合法も非合法もない。

舷側に接近したヘリコプターから、湖北電脳科技公司製の警察犬ロボットが五匹、甲板へ飛び移って、紅い目玉を光らせ船内を徘徊しはじめれば、いよいよ動くわけにはいかない。電撃銃をはじめロボット犬が備えた武装は人を殺しはしないが、与えうる損害（ダメージ）は甚大、スズメバチのごとき黒と黄の縞模様——心理的恐怖を与える効果を狙った彩色がいか

CamScannerでスキャン

にも騒々しく、走ってカチカチ爪が鳴るのも嫌らしい。

それでフォギーは、と云えば、このとき三層吹き抜けのレストランバーに居た。その場から動いてはならぬと云う、船長の船内放送を聴くと同時に、目の前の中空に同じ旨の文字表示が点滅して、なんだ、なんだ、と思うまもなく、アーチ形の出入口（エントランス）から犬が飛びこんできたから慌てた。猫好きフォギーは犬も嫌いではない。が、獲物に立ち向かう猟犬のごとき姿勢をとったこれはいけません。大きさこそ中型犬ほどしかないものの、どこを見ているか分からぬ紅い目玉が昆虫のそれのごとくで、犬と蜂を足して二で割ったような姿が不吉きわまりない。ぐううううと低くうなる威嚇声は、音響設計で云うところの「不安音」、まさしく冷酷凶暴を絵に描いたようで、いまにも喉笛に食らいついてきそうな気配に肝が縮む。しかも別の入口から一匹、アーチ口からまた二匹と続いて、計四匹に取り囲まれては身動きができぬ。

すると一匹が、抵抗せず指示に従いなさいと、音声で命令してきたその声は、犬とは思えぬ（本当の犬じゃないが）バリトンのいい声で、英語も完璧なブリティッシュ。それがまた怖い。次に、両手を頭の後ろへ組めと命令がきて、線画の「人」がそのようにするホロ映像が映示される。いまどきは手を使わずとも視線（アイ）クリックで色々できるから、この姿勢にさほど意味はないはずだが、伝統と云うやつなんだろう。ドラマやら何やらで見てフォギーも伝統には馴染んでいる。画像の「人」と同じ格好になると、ロボット犬が歩けと

命じて、先導する。否も応もなくついていけば、後ろと横を残りのロボット犬がダイヤモンド形に取り囲んでくる。昇降機は使わずに、階段で上甲板へ出ると、雨を含んだ鉛色の空を背景に、しゅるるると軽い音をたてる黒い飛行体が数機、船の傍に浮かんでいるのには驚いた。

ロボット犬は、甲板船尾側にフォギーを導き、と、そこには直立した繭に台座をつけた機材がある。浮揚するヘリコプターに牽引索で吊られた、ロボット犬と同じく黒黄の縞模様に塗られた強化合成樹脂の繭は、人用収容器だ。災害現場での人命救助に使われる一方、犯罪者の拘束に活躍しているのはフォギーも知っている。昔のドラマでは刑事が犯人に手錠をかける場面が出てくるが、いまは生身の警察官をなるだけ現場へ投入しないのが原則、代わりにロボット犬や人用収容器が活躍する。

まさかこれに乗れっていうんじゃないよね、と内心で呟けば、そのまさかで、ロボット犬が慇懃な口調で繭に入るよう促してくる。遊園地の遊具マシンの類には一切乗らぬフォギーとしては絶対に乗りたくない。逆らっても無駄と知りつつ躊躇っていると、三〇秒以内に命令に従わぬ場合、不本意ながら物理的強制手段に訴えることになります、それでもよろしいでしょうか？　と慇懃な脅迫がくる。電撃されちゃ堪らない。それではカウントを開始します、三〇秒、二五秒、の声に押されてフォギーが繭に走り込めば、出入口がしゅるるっと閉まったと思ったら、四方八方から湧いて出た梱包材に首から下が押し包まれ

てたちまち身動きできなくなった。ちょっと違う姿勢にしたいと思っても、もう遅い。
　あややややっと恐慌(パニック)に襲われかけているところへ、目の前に円形の窓が開いて外が見えるようになった。窓はたぶん映像だから実際(リアル)の外景かどうかは分からない。とは云え、これがなかったら気が変になるかも。閉所恐怖症の人なら一発で発狂ものだろう。窓のおかげで少し楽に呼吸ができるようになったフォギーはそのとき、もしトイレに行きたくなったらどうするんだと、場違いなことを考えた。おトイレに行きたいんですけど、と頼んで行かせてもらえるとはとても思えぬ。と云うことは、垂れ流しか？　あえて垂れ流すしかないのか？　それは、しかし、まずくないか？　などと考えると、本当にトイレに行きたいような気がしてくるから困る。こりゃまずいぞ、と焦るうちにも上昇する体感が生じて、窓の景色が揺れる。
　ヘリコプターで吊られているらしい。と知ったとたん、今度はぐいいいんと軀が横に傾き、窓から見える水平線が縦になって、ひゃあああああと悲鳴をあげたつもりが声が出ない。ヘリコプターが水平方向に動き出したんだろうが、人用収容器(ヒューマンポッド)を吊ったままなのだから、これは乱暴と云うもの。いわゆる絶叫マシン並みのスリルとサスペンス、って、その種のものが大嫌いなフォギーからしたら、ただ恐怖と悪心(おしん)あるのみ。これはつまり、あれだよ、世に云う人権無視と云うやつではございませぬか、といまさらながらフォギーは考え、日本国警察の独善的体質につき批判をつのらせたが、そんなことはもちろん何の役にも立

CamScannerでスキャン

たぬ。ひえええと声にならぬ悲鳴を頭蓋に響かせつつ、梱包され振り回されるまま運ばれて行くしかない。あとはもうなにがなんだか分からず。

他方、「メデューズ号」には、この時点で、このまま東京港へ向かい、豊洲第二埠頭に接岸せよと警察から命令が出ていた。ロボット犬が三匹、船に残って文字通り眼を光らせているのでは逆らいようがない。

船室の伊達邦彦氏はなす術なく、後甲板での逮捕劇から、人用収容器（ヒューマンポッド）を吊り下げたジェットヘリが高度を上げ、そのまま水平飛行に移る様子を2Dモニターで眺めていた。ユーロコプター社製に特徴的な、甲虫を思わせる墨色のタンデムローター機は、容器の姿勢を保つためだろう、速度は出していないが、それでも曇天をみるみる遠ざかっていく。それを「メデューズ号」の遠視カメラが追う。距離が離れて、カメラの制御が追いつかず、画面の揺れがひどくなった頃合い、突如、黒い染みがジェットヘリの右手前方に現れた。画面のなかで最初は点であった染みは、豆粒から石ころへと急激に大きさを増して、なんだ？　と訝るうちにも、警察ヘリが左方へ急激に方向を変えて、人用収容器（ヒューマンポッド）が大きく跳ね上がった。

衝突回避だ。そう理解したときには、警察ヘリは左傾した姿勢のまま急速に下降して、ああ、海に突っ込むぞ、思ったとたん上昇に転じる。すると前方の正体の分からぬ黒い飛行体から、同じく正体不明の黒い物体がひょいと飛び出して、姿勢を正した警察ヘリに誘

引きされるように進んで、空飛ぶ甲虫の胴体に吸い込まれる。飛行体が何であるか、かつまた飛び出た黒いものが何なのか、判然とはしなかったけれど、ひとつだけ明らかなことがあった。すなわち、これは、攻撃であった！

警察ヘリは、内側から膨れ上がるようにして潰裂し、白色の閃光を放ち爆発した。伊達邦彦氏があっと息を飲んだそのとき、第二の爆発が生じた。爆発したのは警察ヘリを攻撃した謎の飛行体だ。こちらは閃光なく、真っ黒な煤煙の枝角を四方八方へ伸ばす形で、鉛色の空に飛散した。

85

爆裂したジェットヘリの残骸が、波立つ海へ落下し、細かな裂傷のごとき飛沫をあげる。その様子を、芯城銀太郎八段は、駒場の自宅マンションからつぶさに見ていた。全面覆い（フルフェイス）のヘルメット型電脳網（ネット）端末から芯城が繋いでいるのは、『Google monitoring view site』。世界のあらゆる地域の現在時（リアルタイム）の映像を、プライヴァシーを侵害しない限りにおいて（と云うのはやや怪しいものがあるわけですが）、電脳網（ネット）を通じ観覧できるサービ

スだ。観測点を選んで定位すれば、そこから上下左右全方向への視覚（サイト）が得られる。観測点は屋内や私有地内には原則なく、また地域によって疎密はあるものの、ほぼ全地球（火星や月の一部を含む）を網羅する。映り込んでしまう人の顔や車両のナンバープレート等は画像処理で遮蔽（ブロック）される仕組みだ。

芯城が定位しているのは、北緯二三度、東経一三九度、高度海抜一〇〇〇米（メートル）の観測点。八丈島から西へ八〇キロ米（メートル）ほどの太平洋上空。マラッカ海峡で捕捉して以来、「メデューズ号」をずっと追いかけてきた芯城は、この日も午過ぎから『view site』に繋いで船を観察していたところ、ジェットヘリの爆発に遭遇したのだった。

フォギーが全国指名手配されて、その件で桜田門に呼び出された直後から、芯城は猛烈な忙しさに見舞われた。容疑はほぼ晴れてはいたものの、例の大山康晴アンドロイド破壊事件が尾を引き、訳の分からぬ問い合わせやら取材の申し込みが次々舞い込んで対応に追われる傍ら、来春パリで開かれる二十世紀文化展のための映像資料を編集する、待ったなしの仕事を終えねばならず、そこへ講師を務める大学の昭和文化論の電脳網（ネット）講義が割り込んで、順位戦の将棋対局もあって（さんざんな目にあった）、さらにまた警察に呼ばれたりと、正直フォギーの行方どころではなかった。しかも桜田門から戻った直後から芯城の体調は最悪となった。これは定期的に見舞われる鬱のせいで、一度そうなると生命力は冬場のカエルのごとくに減退、意志は潰滅、思考は鈍暗となり、生きているのがやっと、精

神活性剤の助けを借りまくって与えられた仕事をかろうじてこなすばかりとなる。フォギーの件については、だいたい日本の警察に見つけられぬものを一将棋指しにどうこうできる道理がないじゃないですか、と自らを慰め、後ろめたさを希釈していたところ、突如花琳(ファリン)からメッセージが届いて、これが鬱の汚泥から身を引き起こす起爆剤となり、再び一将棋指しをして事件の渦中へと投げ入れたのでした。

電脳網(ネット)を通じて来たのは海賊プロバイダ経由の差出人不明メッセージ。その種のものはAIがはねるのだが、内容が将棋に関係するようであれば、文書メッセージに限り届くよう設定してあったのは、まれに将棋ファンからの質問やら何やらが来るから。将棋人口が減少するなか、ファンは大切にしないといけないわけです。で、届いたメッセージは以下の通り。

> 金はとられて、白い大きな人が持っています。桂馬はとられないように跳ねているところ。歩もとられないようにね。香車がきっと守ってくれるよ。桂馬

花琳からだと分かったのは、むろん桂馬の署名ゆえ。ホテル景雅園で別れぎわに花琳が口頭で残した暗号コードでは「桂馬＝花琳」。猫の絵もいかにも花琳っぽい。花琳とはずっと連絡を取りたくて、しかし警察から目をつけられている自分から発信しては迷惑かもと思い我慢していたが、花琳の方から通信してきたわけだ。

メッセージの内容は、小考の後、ほぼ理解できた。暗号コードは、「桂馬」のほかは、

「金」がフォギー、「歩」が芯城。つまりフォギーは「とられ」て「白い大きな人」に捕らえられていると云うわけで、「白い大きな人」が「白い巨人」、すなわちモリキテック社ケープタウン研究所であるのは疑えなかった。「とられないように跳ねている桂馬」の花琳自身は現在逃げている、芯城も捕まらぬよう気をつけろと云うことで、ただ最後の「香車」は暗号にはなかったはずで、そこだけは意味が分からなかった。

金や桂馬を「とる」のが誰なのか、それもいまひとつ判然とはしなかったけれど、とにかくフォギーが「白い巨人」にいるのは間違いなかった。対局明けで一段落ついて、ちょうどそう云う循環（サイクル）だったこともあるのか、鬱から一気に脱した芯城は、緊迫しつつも力を得た感じになり、「使い過ぎは肝臓に障害を引き起こす可能性があります」と包装（パッケージ）に大書してある精神活性剤を皮膚圧入し、早速活動を開始したのでした。

ケープタウン研究所ならば馴染みがある。まずは電脳網（ネット）通信でアンドロイド製作部へ繋いでみた。が、これは予想通り拒否された。そこで次に軽量自転車を駆って千駄木の山萩邸へ向かったのは、あそこの高性能ATSならば繋がる方法が見つかるかもしれぬと思ったからだが、それ以上に、山萩博士の架空墓（ヴァーチャルトゥーム）がいまどうなっているのか、さらには隣敷地の廃ビルで見た、噺家ロボットたちがどうしたか、たしかめたい気持ちがあった。軽口を叩きつつ何やら研究する古今亭志ん生と立川談志。思い返すたびに、げほげほと咳き込むような笑いの発作に見舞われ、顔面が得体の知れぬ恐怖にひんやり強張るのを避けら

れない。果たしてあれは現実（リアル）の出来事だったんだろうか？　時間が経つにつれて自信が失われ、それと反比例するように、紅葉の秋の午後の超現実的な場面がいよいよ鮮明に瞼に浮かんで離れなかった。

　非常に怪しく、かつ怖い。が、怖いもの見たさはやはりあって、一度はたしかめねばなるまいと、ずっと気にしながら冬場のカエル状態下では果たせなかった。鬱の穴底へ落ち込むと、自転車に乗って走ることさえできるとはとても思えなくなる。が、ようやく穴から這い出た芯城は、自転車を組み立て、春の小川に泳ぎ出したカエルのように勇んでペダルを漕げば（久しぶりなので磁気路では補助動力を使ったが）、二〇分ほどで到着した山萩邸の門前にはカタツムリ形の警察車が二台、近寄るのは剣呑（けんのん）であった。

　そこで芯城は直接ケープタウンへ向かった。自分の動きは警察からモニターされている可能性があったが、モリキテック社の嘱託を務める人間が研究所を訪れるのは不自然ではない。Narita 国際空港（インターナショナルエアポート）から直行便でケープタウンへ飛んで、空港から Taxi を走らせれば、これまた半ば予想通り、「白い巨人」へは入れなかった。そこでケープタウンに住む関係者に会って情報収集したところが、大半の者が職場から閉め出され、研究所がトンデモナイことになっているのもまずは予想の範囲内。で、肝心のフォギーに関する情報であるが、直接にはなく、ただ一つだけ、顔見知りの地上整備員（グランドクルー）から重大なヒントをもらえた。この地上整備員（グランドクルー）とは、じつは花琳も話を聞いたスナム氏なのだが、芯城とは研究所

内の3Dテトリスクラブを通じての知り合い。

それでスナム氏は、*Steinway & Sons* のグランドピアノを、二五階の音楽スタジオから六階の客室（ゲストルーム）へ運んだと、花琳にしたのと同じ話をして、さらにピアノを船に運んだと証言したのだった。ピアノの運搬については、ピアノが弾けて西洋古典音楽（クラシック）に造詣のある自分が必ず担当するのだと、やや自慢そうに述べるスナム氏に、客室へピアノを運んだのはいつかと問えば、二週間くらい前だと答えがあって、フォギーがホテルから消えてまもなくだと思えば、花琳同様、芯城の脳内でも確信の火が燃え出した。フォギーは「白い巨人」の客室（ゲストルーム）にしばらくいて、その後船に乗せられたのだ！

船と云うのは「メデューズ号」。それなら船上パーティーで一度芯城も乗ったことがある。スナム氏によれば、「メデューズ号」が出航したのは三日前。「白い巨人」に隣接する港を訪れれば、東京に行くと機関士が云っていたとの情報が得られた。フォギーが船に乗せられたのなら東京へ向かうのは不自然ではない。目的は分からぬにしてもだ。

空路東京へ戻った芯城は『Google monitoring view site』で「メデューズ号」を探した。洋上は観測点が疎らで、高高度のものしかないので、なかなか見つけられなかったが、マラッカ海峡でようやく姿を捉えた。それどころか、シンガポール側の陸上観測地点からは、水路を通過する「メデューズ号」を真横から眺めることができ、甲板に佇むフォギーらしき人影さえ目にしたのだ！

それからは、南シナ海からフィリピンの北を抜けて日本へ向かう。白い小人角形の航空機が特徴的な船影を追い続け、あと数時間で東京へ到着するだろうというころまできたとき、海上のなか、ジェットヘリの機々して黒い影が視界に現れ、停止した。メガロードは、にたりつくような形で浮揚したから、緊張のあまり目が乾燥した。ヘリコプターから船の積物デッキーを見ていたようだが、視覚をいくら調整しても作業内容はしかとはわからず、かなり長時間――と思えたのであるが、白っ黒な甲虫が水に浮かぶ魚に網を斎かけるかのごとき絵柄を北城は眺めていた目で見詰め続け、人間容器らしき物体がクレーンヘリコプターのソリから吊り上げられるのを見て取れば、群れなす甲虫は警察機であり、引くノストを逮捕捕捉しようとしていると推測できた。

ところがして、ジェットヘリの爆発には、驚いたではすまぬ衝撃を北城が受けたのは当然だ。爆発は人間容器をさえも吹き飛ばしたので、もしあのなかにフォギーが入っていたとしたら到底助からぬ。無傷となった北城は、灼けたようにひりつく目玉で停止に取容器を探したが、流れる黒煙と肉塊に遮られては、とても見つけられるものじゃない。なにをぐずぐずしているのか。他のヘリコプターが救助に向かう様子もない。これは駄目かもしれんぞと、側面から血の気がひいていくのを覚えながら、海大鴉なる黄色の異化を見つめていたら、視野の隅に救命パットのスーキャラクター（おまけにマニアックな）が登場して、助命者ありと報知した。

予告なく家に来る生身の訪問者と云ったら警察官ぐらいのもの。と思えば、案の定、警視庁の刑事で、いますぐ本庁まで同道願いたい、ついては下の警察車まで来て欲しいと云う。部屋まで踏み込んでこぬ以上、逮捕と云うわけではなさそうだが、いやですとはもちろん云えぬ。この不時の訪問と先刻の出来事には連関があるのだろうかと、一瞬間は考えたものの、爆発と一緒に肝も魂も吹き飛んでしまった具合となり、忘我夢中の心地覚えて、ほとんど意識のないまま着替えをなして、ふらふらと部屋を出て、通路を歩いて昇降機（エレベーター）に乗ったところ、あとからすぐに人が乗り込んできたのにも、気づきはしたものの、依然として魂を彼方へと彷徨（さまよ）わせていたせいで気にとめずにいたら、いきなり手を摑まれたから仰天した。

非常に冷たい、魚みたいな感触は、人工樹脂の手袋だ。とそう思ったとき扉が開いて、強く引っ張られるままホールへ出れば、今度は脇の通路へ体当たりするようにして押しやられる。ちらり目に入った壁の数字は「3」、つまり三階。いったい何なのだ？　と、不審には思いながら、芯城がさして身の危険を感じなかったのは、呆然自失の心持ちから脱していなかったせいもあるが、安全管理の行き届いた知性（スマート）マンションにおいて暴力的な犯罪事件が起こるはずなどないとの、鈍な安心感ゆえ。この緊張感の欠如はいまどきの都会人としては仕方のないところだが、手を摑んだ者が殺人鬼か凶悪強盗であれば、心臓をナイフでひと突き、あるいは電磁散弾銃で頭蓋骨を粉砕、芯城はとっくに死んでいてもおか

CamScannerでスキャン

しくない。が、幸いなことに、芯城の手を摑んだ人は殺人鬼でも強盗でもなかった。

「わたしは香車。歩を助けにきたの」と素早く云った人は、階段から裏口へと芯城を導き、沈丁花(じんちょうげ)の陰に停めてあった、YAMAHAの大型バイクのところまで来ると、収納箱から圧縮ポリマー樹脂の携帯ヘルメットを出して渡し、後部座席に乗れと命じた。云うがままになった芯城は、そのときになってようやく、鮫の背みたいな青黒い全面覆い(フルフェイス)のヘルメットに同色のジャンプスーツを身に着けた人が女性らしいことに気がつき、花琳が伝えてきた「香車」とはこのことかと気がついたのは、遅すぎますが、警察ヘリ爆発以来の心理状態を思えば、やむを得ない面もあります。

　こう云うふうな女性には前にも会ったことがあるなとふいに思った芯城は、そうだ、あれだ、「ルパン三世」に出てくる峰不二子だ、などと意味の通らぬことを考えているところへ、

「電磁波攪乱(スクランブル)をかけたから、警察からはたぶん逃げ切れる。だから安心して」と女が云ってバイクが発進したとたん、芯城は急に目が覚めたかのように、数々の疑問が脳中に湧き出してくるのを覚えたものの、幹線道路に出たとたん加速したバイクから振り落とされぬのに精一杯、たしかにこの直線でのスピード感は香車デアルナ、とそう思ったとき、背後でサイレン音が猛然と鳴り出した。

CamScannerでスキャン

86

向こうでゴジラが、ちょっと、ちょっとと手招きしている。なんですかねと云いつつ寄っていくと、ゴジラは四角い箱型の機械の前にしゃがんでいる。機械は旧式の洗濯機である。水を使う回転ドラム式の洗濯機は、祖母が昔使っていて、円い窓のなかで洗濯物がぐるぐるするのが面白くてよく眺めていたものだ。ゴジラも洗濯物ぐるぐるが好きらしく、一緒に見ようよと勧めてくる。そんなことをしている場合じゃないと思うが、じゃあどんな場合なんだと考えると、判然とせず、んじゃ、まあ、とゴジラの横に坐って、ゴジラと二人、膝を抱えて洗濯機を眺めていると、洗濯機がずううんと音をたてて停まってしまう。ゴジラがこっそり接続を抜いたのである。なのにゴジラは、あれ、おかしいな、などとわざとらしく首を傾げて扉をあけ、ちょっとなかを調べてくれないかな？　と、すっとぼけた顔で頼んでくる。やだと断ると、そんなこと云わずに見てよと、ゴジラは懇願して、「冗談じゃないわ」「頼みますよ」「絶対いやよ」「お願いです」と揉めているところへ、後ろからウルトラマンにどんと背中を押されて、ゴジラもろとも洗濯機のなかに放り

込まれてしまえば、天地別ない大運動がはじまり、丸窓の水平線がぐるぐる回転するのを見つつ、ひゃああああああああと悲鳴をあげて——と、気がつけばぐるぐるは収まっている。助かったと思いつつ、そう云えばゴジラはどうした、一緒に回転してギャヒギャヒ叫んでいたはずだが、と思えば、ゴジラは窓の外。いつのまにか外にいて窓からこっちを覗いている——のは、ゴジラじゃない。バーバラ・ウェルスだ。

「それで、気分はどう？」

片眉を吊り上げたゴジラ美人が訊いてくる。それで、じゃねえよ、と思いつつ、「サイアク！」と答えると、バーバラ・ウェルスは「黙って」と指示を寄越し、身体言語で表現しろというので、仕方なく頷いてみせれば、OKと返事があって、何がOKだ、ざけんじゃねー、とまた思ったとき、フォギーは自分が歯は歯でも接続端末装置の歯のなかにいるのを知った。

ロボット犬に連れられて、入用収容器に乗った、と思ったのは、つまり自分ではなく、池水霧子の機械分身。洗濯機の衣類のごとくぐるぐる回転したのも、自分ではなく機械分身。ひゃああああと絶叫したのも——いや、これは自分だ。なるほどそうかと、ようやく理解したフォギーは、ATSに横になったまま憮然となった。憮然の理由は、レストランでロボット犬に取り押さえられたとき、フォギーは——というか「池水霧子」は、[illegible]その[illegible]

った事実である。いつATSに接続したのかも思い出せぬ。
いつのまにか——とは、つまり意識のないところでATSに繋がり機械分身を動かしていたわけで、このことの認識は脳の方々に綻びが生じたがごとき不安感を呼び起こした。そもそも生身ではあそこのピアノに歯が立たぬのを自分は知っていたはずではないか。にもかかわらず、自分が弾いていると信じて疑っておらなかったのだから、これは全くおかしい。もしかして自分は生身と機械が見分けられなくなっているのではあるまいか。だとしたらマズい。マズすぎる。が、いまや不安がるべき案件は他に多々あるのでした。
　とにかく金属繭から出たいと思い、命令画面を呼び出したところが、枠だけ残してアイコンが消えている。窓を叩いて、出してくれと意思表示すると、出ない方がいいとバーバラ・ウェルスが云う。なぜ？　の意味で首を傾げてみせると、犬がいるからと短くいって、辺りを不安気に眺める輪郭ゴジラの美人顔を見てフォギーは、警察犬ロボットが船内をまだうろうろしているのを知り、事情は摑めぬながら、大人しくしていた方が賢明だとの判断が生まれた。またも犬に脅され絶叫マシンに乗せられてはかなわない。
　しかしどうして池永霧子アンドロイドが人用収容器で運ばれねばならなかったのか。フォギーには見当がつかなかったけれど、バーバラ・ウェルス以下の『METEO』の人間は事情を了察していた。早い話がロボット犬はフォギーと間違えて機械分身を連行したので、そうなった原因も彼らはほぼ理解していた。というのも、まずはフォギーの入ったA

ＴＳが電磁波遮断(ウェーブブロック)されていたことがある。機械分身(メカニカルアヴァター)への信号は、電磁波遮蔽材で被覆された電線(ライン)がＡＴＳから伸ばされ、レストランバーのピアノの下、機械分身(メカニカルアヴァター)の足下から発信されていた。しかし何より決定的なのは、「池永霧子」機械分身(メカニカルアヴァター)にフォギーの生体認証情報(バイオメトリクサイン)が伝達され、軀から発信されていた事実である。この機構は船に乗る前、モリキテック本社の指示を受け付加されたもので、調整のための社員も一人同行していた。目的は『ＭＥＴＥＯ』の人間(スタッフ)にも判然としなかったけれど、たしかにこの処置をなせば、現実世界の多くの場面で機械分身(メカニカルアヴァター)がＫＫ本人として振る舞うことが可能になる。

ＤＮＡ型(パターン)だけであれば、絶えず改良(ヴァージョンアップ)がされているロボット犬は不審を抱いただろうが、指紋および掌紋、虹彩、脳血管、全身骨格その他一一項目の型(パターン)について、「池永霧子」分身(アヴァター)がＫＫの情報を受け取る徹底ぶりには、さすがの湖北電脳科技公司製ロボット犬も騙されたらしい。逆に人間の警察官が船へ下りてきて、間近から機械分身(メカニカルアヴァター)を見れば、変だと直感しただろうが、ロボット犬は、或る意味、賢すぎたのでした。

人用収容器(ヒューマンポッド)を吊ったジェットヘリが飛び去った直後、ロボット犬に許可をとれば、その場から動いてもよいとはなったものの、東京港へ向かって再び航行をはじめた「メデューズ号」内で動く者はあまりなかった。伊達邦彦氏もまた、警察ヘリの爆散を目撃してからと云うもの、客室の可変椅子(プラチェアー)にうずくまったまま凝然となっていた。攻撃したのは無人航空機(ドローン)らしいと見当はつけたものの、何者の仕業なのかとの疑問に心をぎゅっと摑ま

CamScannerでスキャン

れる一方、この時点で伊達邦彦氏は、人用収容器(ヒューマンポッド)に乗せられたのがKKだと思い込んでいたから、KKが死んで〈Mer02〉はどうするんだろう、これでKKをめぐる謎は永遠に解かれぬままになってしまうわけで——いや、そもそもあの玉虫居酒屋女に謎なんか本当にあったのか、でも、もう一度くらい一緒に飲みたかったな、などと混乱気味に考えているところへバーバラ・ウェルスがやって来た。

声を出すと警察犬に傍聴される懼れがあるからだろう、かつてスタンフォード大学のアメリカン・フットボール・チームで花形オフェンスだったと云う金髪女は、化粧品収納箱(ケース)の蓋らしいプラスチック板に棒状口紅(スティックルージュ)で字を書いて見せた。とても人類の字とは思えぬ、幼児の落書きのごとき図柄を判読した結果、連行されたのは機械分身(メカニカルアヴァター)であり、KKは船内にいるとの事実を知ったとたん、へええっと伊達邦彦氏の口からは頓狂な声が出た。何がどうなっているのかさっぱり分からず、錯雑たる状況を整頓するには、脳に潤滑油を注さねばと、ウイスキーを喇叭(らっぱ)飲みして、するとなぜだか傍らで麝香(じゃこう)の甘苦い匂いを放つバーバラ・ウェルスに欲情した。同時に、会ったときから是非ともやりたかったこと、すなわち相撲をとりたくなった。と云うのも、バーバラ・ウェルスが相撲好きで、学生時代にはアメフトの他に相撲をやり、カリフォルニア州大学番付で西の大関にまでなったと聞いたからだ。伊達邦彦氏も相撲愛好については人後に落ちぬ。そこで床に3Dホロで映写した即席の土俵で相撲をとり、すくい投げで投げた一連の流れのまま組敷いて、そんなこと

をしている場合じゃないとは思いながら迅速にことに至ったのだから、性欲の獣と云うのはじつに気まぐれなものです。

手早く一戦終えて、服を直しているところへ、船長から連絡が入った。２Ｄ映話装置が接続したままになっていたことに、そこではじめて伊達邦彦氏は気がつき、バーバラ・ウェルスとの行為を余すところなく観覧されていたのを知ったが、素知らぬ顔で通話に応じ、と、同じく表情を消した船長が口を開いて、「ボートが一艘、接近して、接舷を求めています」と報告した次の瞬間、侵襲式の電脳網（ネット）端末に「水準（レベル）7」の緊急暗号メッセージが流れ込んだ。

発信者は〈Met02〉。内容は「ＫＫを高速艇『流星号』に移送せよ」。接近してきたボートと云うのが「流星号」なんだろう。モニターを見ると、波立つ海上を跳ねる飛蝗（バッタ）みたいに航行してきた双胴の水中翼船は、近づいたところで大きく回り込み、「メデューズ号」の右舷を並走しはじめる。クルーザーの船首甲板右舷側に緊急脱出具があるから、あれを使ってＫＫを移せと云うわけなんだろうが、航行したまま、しかもこの波浪のなかでは、とても無理だ。だいいちそんなことをロボット犬が安閑と座視するわけがない。

ＡＩの判断で次々切り替わるモニターは、濃紫の地に紅い稲妻模様の描かれた高速艇を斜め上方から捉える画像に変わる。すると二つの人影が双胴の艇から「メデューズ号」へ乗り移る姿が映し出された。不安定に揺れる両船の甲板には結構な高低差がある。ところ

な鋼索のごときものを下から伸ばし、これを伝ってするすると上がってくる。とまたカメラが切り替わって、乗船してきた人物を接写したとたん、伊達邦彦氏がバーバラ・ウェルスと声を合わせて不審の呻きを漏らしたのは無理もない。一人は後ろで纏めた黒髪を浅葱色の着物の背に流した美少年。もう一人は胴体に比して腕脚が異様に長い、獣皮のベストをつけた容貌魁偉な中年男。まるでどこかから抜け出してきたようだなと、伊達邦彦氏は考えたが、そのどこかがどこだかは分からない。いずれにしても、どこからどう見ても尋常の人間じゃない。

Ninja？　バーバラ・ウェルスが呟いた。両者共に草鞋ふうのサンダル履き、裾の短い着物を着て、刀を背負っているのは、なるほど忍者ふうだ。そうか、忍者か、と唱えれば、正しい認識と思えて、しかし忍者であるかと、認識を反芻すれば、伊達邦彦氏は思わず笑い出しそうになる。が、笑うのはまだ早かったので、怪しい侵入者の前に二匹のロボット犬が飛び出し、闘いがはじまったときには、何が可笑しいのか自分でも分からぬまま腹が破裂するほどに笑いは弾け、痙攣のあまり横隔膜が破損してしまうと思えるほどで、しかし幸いなことに闘いはほんの数秒で終了した。

忍者に向かったロボット犬は、警告メッセージを発することもなく、眉間から電撃を放ったが、忍者らは敏捷な足さばきでもってこれを躱し、逆に手にした鋼索のごときものをロボット犬に向かって投網よろしく投げつければ、スズメバチ模様の機械犬にたちまち絡

み付いて、犬らは、あれれ、なんだろう？　と戸惑うふうな具合となって立（た）ち竦（すく）む。そこへ忍者がすいと近づいて、刀を首と胴の接続部に差し込めば、犬はたちまち動かなくなる。ロボット犬の活け造り。さながら一流料理人の包丁さばきだ。どんな術を使ったのか知らぬが、ロボット犬は死んだのではなさそうで、それが証拠に紅い目玉が完全には暗くはならない。

そこへまた〈Met02〉から、警察の脅威は去った、アンドロイドと協力して万事進めよ、と指令がくる。なるほど忍者はアンドロイドであるか、まあ、それはそうだろうけどねと、笑い涙を拭いながら考えていると、続けて通信が入って、別便の舟艇を遣るので、『METEO』の人間（スタッフ）を引き連れて舞浜工場へ直行せよとの指示である。〈Met02〉はあくまでもKKへのTBUを敢行する積もりらしい。しかし、この期に及んでそんなことが可能なんだろうか？　アンドロイドと協力しろと云われたって、いったい何をどうしたらいいのか？　伊達邦彦氏が浮き足立っていると、今度は船長から、船を停止させるかどうかの問い合わせがあったのは、彼のところへも指令が来たんだろう。

しかし警察犬ロボットをあんなふうにしちゃっていいものか？　むろんよくない。あれ一体で地方なら町ごと買えるほどの値段がする。と云うか、カネの問題じゃなく、いやカネは大事だが、とにかくこのままじゃすまされまい。もっともロボット犬は破壊されたわけではなさそうだから、警察もまだ事に気づいていない可能性はある。が、気づくのは時

[illegible]で、なにより気がかりなのは、警察ヘリを攻撃した無人航空機が忍者と気脈を通じていると見られる点だ。もしあれが〈Mc02〉が放った刺客だとすると、自分も一蓮托生の危険がありはしないか。となると、こりゃもうTBUどころの話じゃない、相当にヤバいことになったかもしれんぞと、伊達邦彦氏が冷や汗に濡れつくした顔面を蒼くして、モニター前で立ち竦んでいると、船長が勝手に判断したのか、船が減速をはじめる。

と、見れば、操舵室を映したモニター画面には、マドロスふう縞シャツを鯔背(いなせ)に着こなした船長の背後に、二人の忍者が映っているではないか。腕脚の長い怪物的容貌の中年忍者が抜き身の日本刀をぎらつかせ、となれば、アンドロイドとの協力もなにも、ウクレレ上手のハワイ出身東洋人船長としては云うことを聞くしかないわけだ。

Who are you？

横でモニターを眺めていたバーバラ・ウェルスが、画面中央に映し出された中年忍者に向かって質問した。元フットボーラーの美人技術者は伊達邦彦氏よりもだいぶ肝が据っているると見える。奇怪な容貌の忍者は何を考えているのか全然分からず、なるべく係わり合いになりたくないと思うのが人情だろう。それをこちらに視線を向けさせたうえで、再度同じ問いを発するのだから偉い。と、金壺眼(かなつぼまなこ)を炯々(けいけい)と光らせた中年忍者は、刀の峰で自分の首筋をとんとんしながら電脳網(ネット)を通じて返事を寄越し、Kazamachi Shougen と音声で伝え、続いて横の美少年忍者を手で指して、He's Yashamaru. と紹介すると同時に

文字情報が届いた。

「風待将監」と「夜叉丸」。ほほう、いかにも忍者らしい名前であることよと思いつつ、検索をかけてみれば表示が出る。

「風待将監――山田風太郎（１９２２～２００１）の『甲賀忍法帖』に登場する忍者。甲賀十人衆の一人。人間蜘蛛となって粘り気のある糸を口から吐く恐ろしい術を使う」

「夜叉丸――山田風太郎（１９２２～２００１）の『甲賀忍法帖』に登場する美貌の少年忍者。伊賀十人衆に属し、女の黒髪を撚り合わせた細で人を殺傷する恐ろしい術を使う」

なるほど、解説を読めば、顔が醜く腕脚がひょろ長い中年忍者は蜘蛛っぽく、美少年の方は、He's so cute. とバーバラ・ウェルスが思わず呟いてしまったくらいに可愛い。両者が「恐ろしい術」の使い手であることも警察犬ロボットとの闘いですでに見た。しかし、だ。しかし、である。なんで忍者なのだ⁉ そうあらためて問うならば、またもや狂的な笑いの虫が大量発生して、ぶぶっと伊達邦彦氏は噴き出してしまう。何がそんなに可笑しいのかと問うバーバラ・ウェルスもつられて笑い出し、相撲愛好家の男女がげらげら笑ううちにも「メデューーズ号」は洋上に停止する。

CamScannerでスキャン

　ATSの金属繭の蓋が開いて、フォギーはむくりと起き上がった。バーバラ・ウェルスに替わってATSを見守っていたゴーグル男が、フォギーの腕についた血管浸透接触板(パッチ)を外してくれる。長い午睡のあと起きたときのように軀がだるく、レストランバーに隣接する、物置を改造したらしいいかにも楽屋裏然とした殺風景な室を眺めつつ、首をこきこきさせていると、扉が開いて、チャーリー・パーカーがいきなり入ってきたからぎょっとなった。後ろからもう一人続いたのは、ジョン・コルトレーン。二人とも手に楽器ケースを下げ、塹壕外套(トレンチコート)に中折れ帽を被った姿は旅支度だ。どこかへ旅に出るものと見える。

「気分はどうだい？(Are you feeling OK)」

　チャーリー・パーカーが声をかけてきたのは電脳網(ネット)を通じての音声。「まあ、なんとか(Not too bad)」とこちらは生声で答えると、「じゃ一緒に来い(So come with us)」と云って親指で扉の外を指す。いまはできれば動きたくない感じで、ましてや警察犬ロボットがうろうろしていると気は進まない。が、アンドロイドとは申せ、相手はモダンジャズの「神様」、コルトレーンも底

知れぬ迫力をたたえつつ後ろに控えている。ゴーグル男は隅に退いて成り行きを眺める格好だ。

フォギーがATSから出ると、チャーリー・パーカーは歩き出す。仕方なく背中につければ、後ろからコルトレーンがくる。モダンジャズの伝説的巨人に挟まれ歩く自分、と考えると、非常に妙ちくりんだが、いまにもカチカチと嫌らしく鳴る犬の爪音が聞こえてきそうで気が気じゃない。ロボット犬が忍者に撃退されたのを知らぬフォギーは、怯え猫となったまま廊下を進んで階段から上甲板へ出る。すると波飛沫（なみしぶき）と雨粒が混じり合って顔に吹きつけてきて、ひやああと肩を竦めつつ繋服（ジャンプスーツ）を防水モードに変えてまた進み行けば、停止した大型クルーザーの脇に妙に派手派手しい双胴の船が浮かんでいるのが見えた。船首近い舷側に「流星号」の日本語ロゴ。この懐古（レトロ）趣味的漫画ふうセンスは明らかに山萩氏のものだ。「メデューズ号」船首の甲板から黄色い円筒形の脱出具が「流星号」へ伸びて、辺りに楽器ケースを抱えた男らが屯（たむろ）しているのが賑やかだ。

チャーリー・パーカーに引率されたフォギーが近づいていくと、音楽家（ミュージシャン）たちは、YahYahフォギー、元気かい？　と電脳網（ネット）音声で口々に挨拶して、今日は服は黒じゃないんだな、でもこっちの方が断然クールだぜ、などとお世辞を云ってくるから、いよいよ妙だ。分厚い雨雲のせいで太陽の顔は見えぬが、時刻はまもなく日没。演奏旅行（ビータ）へ行くんで駅に集合しました、みたいな佇（たたず）まいのアンドロイド連中に立ち混じったフォギーが、こう

装うのも紅一点くらいのかな、なんて意味のないことを思うからにも、更には素晴らしい演出具を使ってその小型船に乗り移る。アンドロイド演奏家は意識過剰で機能を持て余し、あとはせいぜい日常的な動作ができるくらいだが、演出やリスはおいていかれ、これからの日も日常的動作に縛されるらしい。

演奏旅行ではドラマーはなにかと荷物が多い。リバー・ヘンドレス・ジャーレスは、曲の音の協力を得て、太鼓やシンバルを細い四輪に滑り込ませている。ベーシストも大変だ。スコット・ラファロはプラスチックケースに仕舞った楽器を抱くように持ちでそそくさと消える。で、重要なのが、山一つでいいピアニスト。そのうえ重いめのピアノが自分みたいな荷物だったら、調律がでたらめでも我慢しなければならない。それが困るんだよなア、と、そんなことを考えている場合じゃないことを考えていると、キャトリー・パーカーが、"じゃあね"、と口笛を吹き台を出てなにか訴えた。

人間楽器に較べればましだが、これはこれで辛いかもしれない。船の内壁にその目をつむっても滑るだろうが、べつにそうなわけでもなさそうだ。か、早くしよう、ナイトリリー・パーカーに急かされ、横のマイルス・デイビスから差入りに呼ばれては、並ぶのにくいものがある。しかし曲のみんなは旅支度なのに、自分だけそうじゃないのはどうなのか。もっとも旅だからと言っていまと違う服を着るわけでもなく、一ロケットだけ手近低限の私物は肩から斜め掛けした皮鞄の胸に入っているから、このまま出発ないもとし

ばない。

小型船に乗り移るのがアンドロイドばかりなのも気になるところ。この際はバーバラ・ウェルズでもよいから誰か生身の人はいないものかと、暮れなずむ甲板を見回したら、ちょうど艦橋（ブリッジ）から出てきた者がある。長い髪を背中に垂らし、裾の短い着物を着た男の子——と、これすなわち、忍者の片割れ、夜叉丸であるが、フォギーは正体を知らない。最新式の大型クルーザーに少年忍者。ふつうに考えれば変梃（へんてこ）きわまりないのだが、フォギーがそんなに驚かなかったのは、この種のコスプレ者はたまに街で見かけるから。いまやあらゆる偏奇なコスプレ衣装が世間には陳列されているわけで、偏光服で骸骨そっくりになった人が歩いているのを子供時分に見たとき以来、フォギーは驚いていません。

男の子はこちらへ滑るように歩いてくる。それにしても、なんだろう、この後光が射すがごとき眩しさは。異装の少年剣士の美麗さにフォギーが凝然、見とれていると、すいと近寄ってきた美少年の腕にいきなり抱え上げられたから狼狽した。いわゆるお姫様だっこと云うやつで、きゃあと、柄にもない黄色い声が思わず出てしまい、赤面しているフォギーを楽々持ち上げたあたり、痩身細腰に似合わぬ怪力だ。ああ、どうなっちゃうの？ と問う暇もなく、フォギーは円筒にぽいと放り込まれてしまう。まるで一本釣りの鰹だ。あぎえっと、今度は潰される蛙みたいな声を出しつつ尻で滑れば、下で受け止めた誰かが腕を掴んでくれ、そのまま窓の大きな船室に導かれた。

フォギーのあとから下りてきたチャーリー・パーカーが座席を勧めてくれ、座席帯をしろと云われて、そうすると、こうなったらもう覚悟を決めるしかあるまいと、開き直る感じとなり、船室を眺めれば、五列ある席はぽつぽつ埋まって、楽器ケースを抱えたバンドメンバーが下りて来ては、一層階下にもある船室とこちらに分かれて順次席に着く。誰か生身の人間はいないものかと、ここでも見回してみたが、まずは見当たらぬ。

裸のギターを抱えたウェス・モンゴメリー（あの楽器はGibsonのL-5 CESの複製品だとフォギーはスルドク見て取った）が最後だったらしく、脱出具が収納されるのを窓越しに眺めていたら、先刻の怪力美少年が「メデューズ号」の甲板からひらり身を翻してこちらへ飛び移るのに続いて、獣皮のベストを着た妙に腕脚の長い男が船体に貼り付くようにして降りてくれれば、艇がいきなり発進した。と、もの凄い加速だ。ほとんど波頭から波頭へ飛び渡るようにして荒れる海面を滑って行く。揺れは猛烈、座席帯をしていなかったら天井に頭突きは必至だ。正面左右の窓は飛沫の礫に撃たれ、さながら白濁の隧道を進むがごとく。視界はほとんど利かぬ。

絶叫マシン並みの上下動が九〇分以上続いてフォギーは参った。お陰でこれから自分はどうなるのかと、案ずる暇のないまま、艇が減速して揺れが収まったときにはもうすっかり夜だ。心身消耗しつつ、しかしまずは助かったと太い息を吐いていると、窓越しに灯火が見えた。たぶん東京湾なんだろう。波は少しあるが、雨はやんでいる。左手前方、赤白

青の光が空中を浮かび飛んでいる辺りは羽田空港らしい。現在地を知ろうとしたところが電脳網端末のＧＰＳ機能が使えない。

フォギーは「白い巨人」で貰って以来、ZANNON社製の耳飾り（ピアス）端末を使い、これは高性能ではあるけれど、いろいろと制限がかかっている。「メデューズ号」にいたとき一度、自分の腕輪と接眼レンズ式の端末につけ換えてみたが、こちらは全然使えず、船内は特定の電子機器しか有効化されぬようにしてあると説明された。もしかしてここなら大丈夫かもしれないと思い、あらためて自分のを装着してみれば、ＧＰＳは駄目だが、旧式でも慣れているぶん使い勝手はよくて、工夫して検索機能をいじっているうちに、いま見えている空港がTokyo 国 際 空 港（インターナショナルエアポート）だとの表示が得られた。

そうか、やっぱり東京湾なんだな、とそう確認して、ふう、ようやく戻ってきたかと、溜め息が出たが、自分がいかなる種類の感慨を抱いているのかが自分でもよく分からない。と云うか、何かしら感慨を抱くような状態に心身はなくて、では、どんな状態なのだと云って、空っぽの器のなかで大勢の坊さんが木魚をぽくぽく叩くような――って、つまりはもうなんだかよく分からぬ状態。

高速航行中、船の揺動にあわせて軀を上下させていたアンドロイドたちは、いまは凝結したかのように動かない。まるで人形みたいだ、とフォギーは観察したが、実際その類のものではあるわけで、人造物のなかに生身がただ一人の状況が急に落ち着かなくなってく

る。トイレへ行きたくなり、隣のチャーリー・パーカーに断ると、はっきりした反応がない。アンドロイド諸氏は休止モードになっていると見える。意を決してフォギーは席を立った。電脳網（ネット）端末に表示された案内に従って、階下にあるトイレに行き、用を足した後、まっすぐ席には戻らず操舵室へ向かったのは、そこにいるはずの生身の人間に会いたいと考えたから。

客室前方の扉を開いて、短い階段を上って、操舵室を覗いてみる。と、誰もいない。三つ並んだ座席の、右端の席の前に舵輪があって、計器類の蛍光文字や図像がちらちら動いているのは自動操縦らしい。操縦士が席を外しているのではなく、最初から人間は不在なんだろうと見当をつけたフォギーは慌（あわ）てて手を見た。ひょっとして自分がまた例の「池永霧子」だったりしないかと思い、背筋がひやりとしたからだ。しかし手は白子に似た樹脂ではなく、首筋に触れれば生身の肉と肌の感触がある。まずはよかったと息を吐き、しかし安堵する気持ちにはなれずにいたところへ誰か入ってくる。と見れば例のコスプレ美少年だ。

「何か用なの？」

狭い操舵室で向かいあった少年は問い、そのときにはすでにフォギーは眼前のアンドロイドの素性を検索し終えていた。山田風太郎『甲賀忍法帖』は未読だったけれど、超人業を使う異形の忍者たちが二チームに分かれてバトルを繰り広げる話だとは、芯城から聞い

ていたので、馴染みがある、とまではいかなかったが、検索画面の解説だけでおおよその見当がつく人間は、世界人類のなかでもそう数は多くないのでした。

「とくに用事はないんだけれど、ちょっと操舵室を見てみようか、なんて思ったりして。まずかったかしら?」

云いながら夜叉丸を間近に眺めたフォギーは、それにしてもなんてきれいなんだろう、青春の美の理想を捏(こ)ね固(かた)めたようだなと、あらためて感心したが、実際に「捏ね固めて」作られたわけだから驚いても仕方がない。そもそもが青春の美などと云う言葉自体、抗老化医療(アンチエイジング)や移植整形が常態化したいまでは死語に等しい。にもかかわらず驚異の念が消えぬのだから、これはこれで大したものだ。

「べつにまずくはないけど、席に戻った方がいいと思うよ」と夜叉丸が云うのへ、「あら、どうしてかしら?」とフォギーが返した言葉にいやに馴れ馴れしい声色があるのは、夜叉丸少年の口調がけっこう幼くて、年上女性を前にどぎまぎするふうがあると感じたから。相手の出方次第でこちらの態度が決定される、無意識の判断の速度こそは人間がロボットに優る数少ない点のひとつです。

「ここは危ないよ」

「なにが危ないの?」

「なにがって、いろいろと危ないと思う」

CamScannerでスキャン

「まあ、お姉さんがそうしたいのなら、べつにいいけど」

二言三言交わしただけなのに、左端の座席に居心地悪そうに腰を下ろした美少年ロボットを、フォギーは歳の離れた弟のように感じはじめ、これは人見知りのフォギーにしては珍しいが（相手は人じゃないですが）、じつはアンドロイドが母性に作用するフェロモンを放っていたのが一因。つまりは一種の忍術だ。

「この船はどこへ行くの？」吸い寄せられるように隣の座席に腰を下ろし、前方の海の闇に目を凝らしたフォギーは質問した。

「夜叉丸くんは知っているの？」

「知ってるよ」

それはどこ？　とフォギーが問いを重ねる前に夜叉丸少年はべつのことを云い出した。

「お姉さんは、ＴＢＵを受けないの？」

「え？」虚を突かれたフォギーが横顔を窺えば、草鞋（わらじ）サンダルに包んだ滑らかな脚を前方に投げ出し、窓へ顔を向けた美少年がちょっとはにかむような表情を見せているのが可愛い。

「ＴＢＵを受ければ、永遠に生きられるし、疑似現実（ヴァーチャル）はもちろん、現実世界（リアルワールド）でだって機械分身（メカニカルアヴァター）でいろいろできるでしょう。それはもちろん生身の軀とは違うけど、でも、生

身の軀はいつか死んで腐ってしまうよ。お姉さんは、死んだり歳をとったりするのは嫌じゃないの？」

同じことは茶田アリスからさんざん説教された。バーバラ・ウェルスからも聞いた。フォヤーは聞き流し、歯牙にもかけなかった。ところが美の結晶のごとき若者からあらためてそういわれて、ちょっとだけ考える感じになったのは、「忍術」のせいであると、フォヤーの名誉のために一言申しておきます。

「僕は、お姉さんにずっと若くて美しいままでいて欲しいな」

若くて美しい！　この文句が歯が浮いて宙に舞うほど現実感を欠いた台詞とは分かっていながら、フォヤーが顔を綻ばせニヤついていると、夜叉丸少年の表情が一変した。

前方に何かが現れたのだ、と思うや、幾筋もの光線がいきなり投げつけられ、停船を命じるメッセージを伝える。轟と鳴り渡る音響が鼓膜から耳小骨をびりりと震わせる。夜叉丸が身を翻すように操舵室から飛び出したのはそのときだ。

忍者アンドロイドは高速艇の舳先にすらりと立った。水に漂う綾絹のごとく、長い髪を後方になびかせた美少年忍者に向けて、多方向から光線が照射され、交錯する光の筋が黒髪を金色に輝かせれば、艇体に落ちた無数の影が零乱する。溶解する白金を想わせて燃え上がる光の渦の中心にあって、滑らかな脚と細い肩を持つ夜叉丸は息を呑むほどに美麗であり、たったいま海の胎から誕生した少年神のごとくだ。

フォギーは腕輪をいじって接眼レンズを暗視モードにした。とたんに行く手をふさぐ形で船首を左に向けた、ずんぐり肥満した輪郭を海上に描く黒い艦船と、昆虫めいて上空を乱れ飛ぶ複数の飛行体が見えてくる。比較的図体の大きな一機が有人らしく、あとの細かいのは無人航空機だ。するどい照明の矢は船舶から飛行体からいく筋もいく筋も放たれ互いに入り乱れる。暗視モードは眼に飛び込む光の光度を抑えて蛍光緑色に変えるから、眼を射られても痛くはないけれど、輝く緑色の乱舞には眼が回りそうだ。いそぎ検索すれば、船は海上警察庁所属の警備艦「のと」。野太い英語の音声メッセージもJapan sea police を繰り返している。

「流星号」は指示に従い停船した。かと、思いきや、いきなり猛然と走り出したから、操縦席のフォギーは座席の背にぎゅうと押し付けられ、再び絶叫マシン状態に突入すれば、双胴の水中翼船は警備艦を避けて右へ舵を切り、艇体を転覆寸前にまで傾け夜の港湾を疾駆する。艇が速度を上げると同時に安全装置が起動し、座席帯が自動装着されたので助か

ったが、でなかったら座席から飛び出していたところだ。

座席に背中で貼り付いたフォギーは、顔を仰向けて、宙に向かって死にかけの魚よろしく口をぱくぱくさせ、一方、舳先に立った夜叉丸は、よほど平衡感覚がいいのか、それとも足が船体に吸着でもしているのか、揺動に振り落とされることなく涼し気に立っている。ただし、涼し気と云うのは、ぎゃあああと悲鳴を間欠的にあげつつも前窓から眼を離せぬフォギーの、あくまで主観的な印象、アンドロイド自身がどうなのかは分からぬ。もっとも飛沫をあれだけ浴びては、アンドロイドといえどもだいぶ涼しいのは疑えぬところだ。

と、追尾してきた一機の無人航空機(ドローン)が夜叉丸の頭上に急接近した、と思いきや、美少年忍者は懐から取り出した鋼索(ワイヤ)状のものを鞭のごとくにふるって、これをたちまち打ち落とした。鞭はまさか女の髪を撚った縄ではないだろうが、たいした破壊力だ。手際も鮮やかきわまりない。もっともモリキテック社が兵器製造企業でもあることを考えれば、これくらいは当然、もっと巧妙かつ奇抜な殺戮兵器は他にいくらも作られている。自力で土中を数十キロ米(メートル)掘り進む土竜(もぐら)地雷とか、標的の脳へ侵入して自殺衝動を引き起こす絶望惹起極微機械(ナノマシーン)とか。モリキテック社製の少年忍者は二つ、三つと、無人航空機(ドローン)をいとも簡単に叩き落としてしまう。

そのとき、海獣の群がいっせいに吠え出したかのような警告音(サイレン)が夜の海上に響き渡っ

CamScannerでスキャン

て、回転灯を光らせた小型艦艇群が編隊を組む形で右手から突進してきた。新手の登場に「流星号」は放物線を描いて針路を変え、しかし前方には警備艦の鯨のごとき真っ黒な巨体、それを避けてまた舵がきられた直後だ。無人航空機（ドローン）ではない大型の飛行体がフォギーの視野にぬっと現れ、少年忍者の鞭が届かぬ距離を見計らって、かどうかは分からぬが、一定の距離を保ちつつ、ジグザグの航跡を描く「流星号」に並行しはじめる。その瞬間フォギーは、飛沫に泡立つ窓越しに、飛行体の胴から黒くて円い頭をした人が空中へ身を乗り出し、銃のごときものを構えているのを見た。狙撃だ！　フォギーが即座に理解したのは、２Ｄドラマ『へら鮒刑事Ⅱ』で似たような場面があるのを何度も見たお陰。飛行体はまもなく視界からは消えたが、なお追尾してきているのは、昔の電気掃除機みたいな特徴ある飛行音からして間違いない。狙われているのはおそらく夜叉丸。彼が人間でなくロボットであることはすでに無人航空機（ドローン）からの通信で知られているんだろう。と云うか、高速度で疾走する水中翼船の舳先に立って鞭をふるう着物の少年が人間であるわけがない。であれば破壊するに警察が躊躇（ためら）う理由はない。

　操舵室左舷側の窓に再び飛行体が黒い姿を見せて、アブない！　とフォギーが思わず叫んだ瞬間、狙撃手の銃口から緑色の火矢が伸びて少年忍者の腹部につぷり突き刺さったと思ったときには、夜叉丸は鞭を飛行体めがけて投げつけていて、それに曳かれるように艇から跳ね上がって飛行体にとりついた次の瞬間、爆発！　暗視モードでは、甲虫の外殻が

裂けて溢れた蛍光緑色の体液が四散したように見えつつ、夜叉丸の軀もろともに破砕され、これを知ったフォギーは、加速度と恐怖に軀をぎゅうと押し潰されながら、ああ、夜叉丸くん！　と叫んで果敢なく消えた美の化身を悼み、激しい喪失感に見舞われ、空虚と哀しみの魚が腹中を泳ぐのを覚えて、全身が痺れたようになっているところへ、いままでにない、がつんと尾骶骨を下から槌で打たれたような衝撃が生じ、とたんに艇体は嘶く荒馬のごとく棒立ちになり、続いて横に大きく傾き、左舷側を支点に直立、しかしかろうじて転覆はまぬがれて海面に衝突すると、今度は左傾したままぐるぐると同じところを回転しはじめる。

まもなく発動機の漏らす無数の鳥が鳴き交わすような騒音のなかに、ダンダダダダンと鉄球で大岩を打撃するかのごとき不穏な音響が加わって、焦げ臭い匂いと毒性のある有機溶剤に似た酸っぱい異臭が鼻を刺せば、もう終わりだとの直感が迸って尻から頭の天辺を貫いた。絶叫マシンはとうとう軌道を外れて宙空へ飛び出したのだ！　となればあとは木っ端微塵になるばかり。観念したフォギーは、もはやこれまで、母上、先立つ不孝をお許しくだされ、我見るべきほどのことは見つ、と自分でも呆れるほど古めかしい文句を頭に浮かべたのに続いて、母親以外に思いつくいろいろな知り合いに向かってサヨナラを唱えている最中、ふと我に返って気がつけば、いつのまにか発動機の騒音が已んでいる。艇はまもなく停止した。

座席の背から頭を引き剝がして窓を見れば夜の海だ。周囲を覆い尽くす禍々しい警告音(サイレン)、その隙間に艇体を舐める波音が耳に入った一瞬間には、大洋のただなかにあるかのような幻想に見舞われたが、すぐに小型艦艇群が照明を夜空に散らしてこちらへ向かってくるのが見え、それら舟艇の背後の帳に都会の街灯りが広がるのを眼に入れれば、江戸の昔、水の都と呼ばれただけあって、海から眺める東京はじつにきれいなものだなと、場違いなことをしばし思ったフォギーは、そのときになってようやく、「流星号」が何かしらの攻撃を受けて発動機を破壊され停止したのを理解した。

攻撃したのはもちろん海上警察。一方で忍者アンドロイドは警察の飛行体を相撃ちで破壊し、人間もろとも爆散させてしまったわけで、こりゃ、とんでもないことになったぞよと、新たな恐怖に襲われているところへ、くぐもった爆裂音とともに前方で緑色の光が散乱したのは警察の小艦艇だ。舟艇は次々と燃え上がるように光っては、波の上を跳ね、あるいは狂ったように海面を滑ってあさっての方角へすっ飛んで行く。

一瞬はふざけているのかと思ったが、そんなわけはなく、あれは警備艇が攻撃を受けているのだ！　とフォギーが俄然理解したのは、空中の飛行体から何かしら黒い物体が、鳥が糞をしたみたいに飛び出て、小艦艇に落ちたのを目撃したから。攻撃しているのは無人航空機(ドローン)だ。空飛ぶ蛸を想わせる形状は警察のとは明らかに違う。蛸たちがどこから湧いて出たかは知らぬが、夜叉丸の仲間であるのは疑えず、夜叉丸の仲間と云うことは、つ

まり「流星号」も同じ一味と云う理屈になりはしまいか。

わたし、関係ありませーん、なんにも関係ありませーんと、フォギーは声を出し、しかし聞いている者は誰もなくて、それでも言い訳をやめられずに、とにかく関係ないんですよ、こう云うのには、わたし、一切関係ないですからと、一人勝手に無意味な弁解を繰り返しているうちにも、警察の小艦艇は次から次へと破壊されて、さらには警備艦の艦橋あたりでも緑の光が燃え上がっている。これは誰が見ても戦い、紛う方なき戦闘である。

これって、マズくない？　取り返しのつかぬ過失を犯してしまったかのような恐怖が突き上げれば、不安に鷲掴みにされた心臓がいきなり、にゃあと鳴き声をあげた。と思えば、にゃあ、にゃあ、にゃあと連続する。なるほどそうなんだ、心臓はにゃあと鳴くんだ。と云うことは、つまり、心臓は猫だったんだ、全然知らなかった、と、わけの分からぬ妄想に一人納得顔で頷いていると、ひときわ大きいにゃあが耳へ届いて、そこではじめて鳴いているのは心臓じゃないと気がついた。

操舵室の足下に猫がいる。蛍みたいに青白く光る猫は、見まがいようがない。ドルフィーだ！

子猫のドルフィーは三角の耳をぴんと立てて、訴えかけるようにしきりと鳴く。ドルフィー、あなた。どこから来たの？　と声に出してから、子猫が接眼（コンタクト）レンズに映示された3D映像だとフォギーは気がついた。にゃあにゃあの鳴き声も、外耳道に貼付けたままになっていた音声片（スピーカーチップ）から出た音響。端末内蔵のAIインターフェースはムーミン・トロールだから、誰かが外部から送ってきたに違いないが、認証なしならAIがはねるはず。なのにAIは接続（アクセス）を許可したわけで、いつのまにドルフィーはムーミン・トロールと仲良くなったのかな、などと電脳工学的にはまるで意味をなさぬことを思ううちにも、青白く光るドルフィーはなおもにゃあにゃあ鳴きながら操舵室の扉に鼻面をすりつける。この仕草を見た瞬間、フォギーが吉祥寺の家の硝子戸を思い出したのは、子猫の頃のドルフィーはやたらと庭へ出たがって、そういうときには必ずこうしていたからだ。外に出たいの、ドルフィー？　と声をかけたフォギーが座席から離れて操舵室の手動錠を開けば、外へぴょんと跳ね出た子猫は髭のある丸顔を振り向けてまた鳴く。一緒に出ようと誘っているのだ。

ドルフィーは守り神。悪いようにするはずはない。咄嗟に思ったフォギーは操舵室から出て、と、そこは舳先を覆う半円形の防波板だ。視界の開けた夜の海では戦闘が途切れず続いて、あちこちで緑色の筋が乱れ飛び、緑色の光が跳ね、緑色の飛沫があがる。音は、と云えば、怒りに駆られた巨獣のごとく、ぶおおおおおと腹にこたえる雄叫びを警備艦が夜空へ向かって放つなか、警告音の金切声が海上を埋め尽くし、そこへ耳障りな金属音や思わず首を竦めたくなる爆発音が入り交じる。さすが現実だけあって、音響の配合はじつに非現実的だ——というのはだいぶ逆だが、人工的にこれを作れば、間違いなくもっと「現実的」になってしまうのであって、この辺りに音響設計なるものの逆説があるわけで——などと考えている場合ではない。

見ると「流星号」の後尾甲板に誰かが倒れていた。両足を船体に吸着させたまま万歳をする形で海面に向かって逆さになっているのは、夜叉丸の仲間の忍者アンドロイドだ。動く気配がないのは破壊されたからだろう。しかしなんで忍者なんだと、いまさらながら不審に思いつつ、湿った冷風を頬に受け、不安定に揺れる防波板に立って操舵室の屋根材に及び腰でつかまっていると、ルルルルルルと軽捷な音が聞こえて、見れば一台の水上スクーターが滑走してくる。すわ攻撃か、と思い、いまにもレーザー銃の光矢か榴弾が飛んできそうで、ひやあああと声を出して身を竦めていると、弧を描いた小型水上艇は「流星号」のすぐ脇に停止する。

CamScannerでスキャン

にゃっ、と一声鋭く鳴いたドルフィーが足下から跳躍してスクーターに飛び乗ったから仰天した。ドルフィーは臆病な子で、さして高くない棚からも下りられず、助けを求めて鳴いたくらいなのだ。ドルフィー、いつのまにそんな超絶技を？　と、本気で驚いた辺り、フォギーは生身と映像の区別がいまひとつついていないわけで、やはり生まれてはじめて遭遇した生の戦闘に神経がかき乱されていたせいなんだろう。

スクーターに乗ったドルフィーがにゃあにゃあ鳴く。棚から下ろして欲しいと訴えたときの幼さはなく、じつに雄々しい。獅子の仔（こ）もかくやと思うほどで、いつのまにそんなに立派になったの？　と、混乱するままさらに問いかけているところへ、「早く乗って」と声がして、これは人の生声だと、瞬時に理解できたのは、さすがは音響設計士と云うべきか。生声を発して潮臭い空気を振動させたのは水上スクーターの運転手。黒い繋服（ジャンプスーツ）に全面覆い（フルフェイス）のヘルメットをした人だ。「早くして」と海上の騒音の隙をついてまた届いたのは女性の声らしい。

瞬間迷ったフォギーが、客室の方へ眼をやれば、灯りのない窓のなかでアンドロイドたちは席についたまま、艇の揺れにあわせて水藻よろしくゆらゆら揺れている。破壊された忍者アンドロイドも逆さまの格好で同じく揺れる。その姿には死が強烈に匂い立ち、水棺と云う言葉が浮かんだりすれば、むしろ一刻も早く逃げ出したい気持ちになり、屋根材から手を離して滑りやすい防波板をアイススケート初心者みたいに、つとととととと、よろ

CamScannerでスキャン

めき歩けば、運転手が手袋を嵌めた手を伸ばして、掴まれた手首をぐいと引かれて後部座席に跨がったとき、「端末の接続を切って」と命令があって、フォギーがそうすると、水上艇は軽快な音を発して走り出した。

　スクーターは二人乗りの海豚型。湿った夜気を二つに裂いて、暗い海を滑るがごとくに駆け行く。座席は可変ゲルの安全座席だから、加速に反応して腿から腰を支持材が押包んでくるが、波濤を越えるたびに大きく跳ねる動きは、絶叫マシン度で云えば、人用収容器や「流星号」とどっちもどっち。いや、切りつける風を裸の顔に受けるぶん、息が苦しく、フォギーは運転手にしがみつく格好になるしかない。波に跳ねると、ふわり宙空に浮かぶ感覚が生じて、これが非常に長く続いたあと、自由落下の貧血的時間がきてどすんと衝撃が骨に応える。運転手に遠慮してひややややと抑えた悲鳴を繰り返し漏らしたフォギーは、これはあとになってからの話ですが、今日一日で一生ぶんの悲鳴を漏らしたし、一生ぶんの絶叫マシンに乗ったなと思ったことでした。

　気づいてみると、水上スクーターの跳躍はやんでいて、顔にあたる風はやわらぎ、戦闘の「非現実的」な音響も遠ざかっている。それとはっきり云える音響はないのに、巨大なざわめきが蒸気のように夜空に立ち上るこの雰囲気は、間違いない、夜の東京だ。すると出し抜けに、雑音の集積のただなかから音楽が滲んで出た。なんだと思えば、三味線だ。とんとんとことんと太鼓も鳴る。あまりに場違いな音響にぎょっとして見遣れば、右手前

方から提灯を煌々と輝かせた屋形舟が来る。どうやら東京湾から放射状に伸びる運河のどれかに水上スクーターは入ったらしい。すれ違う屋形舟には「大東京水上祭」の発光3D看板が掲げられ、三味線太鼓にあわせ着物の芸者が踊るのを酔客たちが眺めている。

黄金の宝石箱みたいに眩く輝く屋形舟を後方に見送り、営門を想わせる高架線を三つ潜ったところで、スクーターは徐行のまま水路を左へ曲がり入る。左右の土手は柳の並木、どうやら六間堀らしいとフォギーは見当をつけた。隅田川の東側、向島深川の近辺は、二〇二〇年の東京オリンピック前後からはじまった「水の都」プロジェクトの下、江戸の風情を再現する河川運河がテーマパークふうに整備されて、観光客を大いに集め、最盛期には屋形舟が途切れなく連なり、芸者衆も百人を越える勢いだったと云うが、国内はもちろん世界的な人口減と、疑似現実旅行（ヴァーチャルツアー）の一般化のせいで、近頃は寂（さび）れてしまった。天然藁葺き屋根や板張りの町家も老朽化し、樋から草が生えたりしているのがみすぼらしい。湾岸地域に限らず、新奇かつ豪勢な施設が突発的に出現する一方で、古い建物が放置されたまま腐れ行く東京の現況は、沈滞の感が拭い難い。先頃デンツーが実施したアンケートでは、二十一世紀を象徴する漢字として選ばれたのは「寂」。浮ついた軍国ナショナリズムとワビサビの二十一世紀ニッポン。それでも東京都はムキになっているのか、予算の無駄遣いと批判されながら、運河網を隅田川を越えて銀座にまで拡張しつつある。

水路には航行灯を輝かせた水上タクシーがときおり通る。屋形舟もまた来る。一方こち

CamScannerでスキャン

た湾岸を横切り、さらにまた水路へ、と云った具合に進んで、やがてスクーターは水没した線路に沿いはじめる。もっとも軌条はほとんど失われ土台だけになって、それでも錆びて腐食した鉄路がときおり現れるので線路と分かる。ここはどの辺なんだろうと思って、フォギーが検索をかけようとしたのは、連続絶叫マシン攻撃のダメージからやや回復してきた証拠。端末をいじろうとして、しかし電脳網（ネット）の接続を切れと云われていたのを思い出した。

「ここはどこなんですかね？」とフォギーは意を決し、黒い繋服（ジャンプスーツ）の背中を見せた運転手に生声で質問した。

「神保町あたり」

神保町と云えば、かつては書店街で有名だったところ。いまは中国や東南アジア系の人々が多く住み、日本最大のモスクがあるのは、長年の排斥運動にもめげずにイスラム教徒も住み続けているから。

「どこへ向かっているの？」と問いを重ねたフォギーの口調にやや親し気な色があるのは、ずっと繋服の背中に貼り付いていたために、自然と親密な気分が醸されたせいだろう。

「新宿」と返ってきた答えに重ねて、

「このトンネルは新宿まで繋がっているのかな？」とさらに問えば、これは地下鉄の跡

で、昔の都営新宿線だと返事がある。なるほどそう云えば、そんな地下鉄がかつてあったと聞いたことがあるなと、フォギーは思い出しはしたものの、東京での活動領域が、吉祥寺、調布近辺と、ピアノの仕事で訪れる銀座エンペラー頌栄ビルとかお台場の流砂城ホテルとか、点に限られる彼女の東京地理への理解は明るいとは云えません。それでも人口減と擬似環境技術の発達で利用者が減り、東京の地下鉄路線は往時の半分になったのは知っている。

やがて陸豚スクーターは線路跡から離れ、廃ビルらしい建物に這い進んで、停まったところは地下駐車場だ。もっとも床の大部分が水没して、置かれた車両はどれも廃車だ。椅子の保護材が緩んでスクーターから降りると、繋服の人が、座席下の物入れから、変装用仮面を出して、被れと云う。軟質プラスチックの仮面は頭からすっぽり被る式のやつで、云われるままにすると、今度は服の意匠を変えるように指示されたので、襟をいじって目立たぬ暗灰色にすれば、スプレーが服に吹き付けられる。何かと訊けば電磁波遮断スプレーだと云う。こうすれば、たとえ高性能の監視装置に遭遇しても、骨格型や血管型を読み取られる心配はない。

変装用仮面は目鼻口耳を除いた皮膚に密着する。違和感はあるが我慢の範囲内だ。別人となったフォギーは黒繋服の人について歩き出した。照明はなく、周囲は漆黒の闇だが、暗視モードのお陰で様子は分かる。全面覆いのヘルメットを被った人は、脇のアルミ階段

CamScannerでスキャン

なかんかんと鳴らして上り、壁に沿った足場を歩き出す。後に従いつつ、ここはどこかとまた問えば、「曙橋」と答えがある。それがどこだかフォギーには分からなかったが、「靖国通り沿いの、新宿駅東口の入口あたり」と補足説明があって見当がついた。ここで云う「新宿駅東口」とは、新宿駅の東側一帯に広がる、日本最大規模の「蜘蛛巣地区」のこと。

　で、足場を進んで行くと、壁に鉄扉があって、簡便な数字鍵の電子錠がついている。これを開けて外へ出れば、地下街ふうの通路。古めかしい蛍光灯がまばらに設置されて、左右に並ぶ鎧戸を貧寒と照らしている。少し歩くから、と云われて、黙ってついていく。人影のない地下街を進んで、左手に現れた暗い階段を下れば、がらんとした地下倉庫みたいな空間になって、黒く汚れた壁の爆発跡のような割れ目に潜り込むと、今度は異臭が鼻をうつ下水道らしき隧道だ。

　臭いし、足下がぬめつくし、なんか嫌だなと思っていると、ふいにばたばたと駆ける音がした。とたん何者かが足下を掠めて、うわわっと声を出したら、「ただの鼠よ」と冷静な声があって、なんだ鼠か、脅かしやがって、とは思ったものの、暗視モードの視界のなか、肥えた鼠が炯々と目玉を光らせているのを見れば、だいぶ怖い。日本列島は人口が減ったぶん鼠が増えたと云われ、見かける機会はけっこうあるものの、足下を走るたび、それと分かっていてもぎゃっと声が出てしまい、ちょっと恥ずかしいな、と思ってい

たら、黒繋服（ジャンプスーツ）の人も長靴（ブーツ）に齧りつかれて、ぎゃあと悲鳴をあげている。この人も鼠は苦手なのだな、と思えば、なんだか可笑しくなったが、「鰐（わに）がいるから気をつけて」と云われて顔は強張った。ペットの鰐が逃げ出し繁殖していると云う話はよく聞くが、たしかにこの辺りのこの佇まいはいかにも鰐がいそうだ。鰐は困る。そう思うと、いまにも暗がりから口の大きいのが出てきそうで怖い。

と、前を行く人が立ち止まった。すわ鰐か、と及び腰になれば、そうではないようで、繋服の人は壁に付いた垂直の梯子の根元に立って、全面覆い（フルフェイス）の顔を仰向けている。同じく上を見れば、梯子は高い。まさかこれを攀じ上るんじゃないよね、と嫌な予感に捉えられていると、予感は的中、繋服の人が梯子に手をかけたので、ちょっと待って、とフォギーは声を出した。

「メデューズ号」で警察犬ロボットに吠えられて以来、と云うか、もっとずっと前からですが、次から次へ襲いきた予想を大幅に越える出来事の連続に、精神がジューサーの果物みたいに砕かれ搾（しぼ）られたあげく、フォギーは蓮の葉の上のアマガエル並みに考える力をなくしてしまい、ほとんど半村良の小説に出てくる従命自動症――どんな命令にも絶対に従ってしまう病気だ――に罹（かか）ったようになっていたのだけれど、梯子を上るとなれば主体的な努力が要るわけで、この苦難に遇して、自分は全体何をしているのか？　何をすべきなのか？　との反省的問いが魂の水面に急に浮上したのだ。

CamScannerでスキャン

「ちょっと伺(うかが)いますが」とフォギーは云い、しかし何を訊いたらよいか分からなくて、結果、出た言葉は、「あなたは、どなたです？」。

云ってしまってからフォギーが狼狽したのは、露骨に素性を尋ねるのを失礼に感じたからで、そもそも普段は電脳網(ネット)検索で相手の身元が分かってしまうから言葉で尋ねることはまずない。ええとですね、いまはあれです、電脳網(ネット)が使えないものですから、などとフォギーがごにょごにょ云っていると、繋服(ジャンプスーツ)の人がヘルメットをいじって、前面の覆いが透けて顔が見えるようになる。いまどきは見た目で年齢は分からぬが、予想に反して、ちょっとおばさんぽい感じの人だ。

「詳しいことはあとで話すけど、いまはそうね、ミチコって云う名前だけ覚えてくれる。あれね、昔いた天皇妃と同じ名前ね」とやや欧語訛の日本語で云う口調も、顔を見た所為があるのか、せっかちな感じがいかにもおばさんぽい。

「ああと、そう、それからね、芯城銀太郎の姉と云うと、もしかして理解が早いかもしれないな」

ええええっと、フォギーが叫んだのは無理もない。姉があると云う話を芯城から聞いたことが一度もなかったからだ。

「姉と云うのは、お姉さん？」

「そうね」

「お姉さんと云うことは、つまり、あれですか、つまりキョウダイ?」と意味のない同義反復を口にしたのも驚いたせい。

「血はつながっていないんだけどね。まあ、そう云うことなんで、よろしくね」と云ってミチコと名乗る芯城の姉は、右手を差し出してくる。あ、よろしくお願いしますと、フォギーも手を伸ばせば、手袋を嵌めた手でぎゅうと握られた。それからミチコと名乗る女性は梯子を上り出す。

しかし、なんで芯城姉がこんなところに? いや、そもそもどうして芯城姉は海豚スクーターで自分を連れ出したのか? 根本の問いをフォギーが発する暇もなく、コアラを想わせる格好でのそのそと梯子を上り、天辺の蓋を押し退け人孔から出た芯城姉は、穴から顔を覗かせ、早く上がってくるように云う。

こうなったら——とは、どうなったのか、よく分からぬが、意を決したフォギーは梯子に掴まって上りはじめ、心臓とふくらはぎをプディングみたいにぷるぷる震わせ、あうあうあうとアザラシみたいに息を荒くしながら、最後は芯城姉の手を借りて、ようやっと穴からずりり這い出せば、そこは新宿駅東口「蜘蛛巣地区」のただなかだ。

CHAPTER

7

世紀末新宿／赤き死の跳梁

CamScannerでスキャン

(10)

蜘蛛巣地区へ足を踏み入れた経験はあるものの、新宿駅東口はフォギーもはじめて。新宿そのものへは何度も来ていて、駅から続く多層高架道路や高架歩行通路ならばずいぶん歩いたけれど、「下」へ下りたことは一度もなく、逆に地下街から「地上」へ出たこともない。フォギーがいま居る場所は、屋根がかかるせいで半地下のように思えるが、間違いなく地上。ススキの原だった江戸の昔から変わらぬ地べただ。景観で目立つのは、道路に沿ってのっぺり無表情を晒す混凝土の壁、および殺風景さでは負けぬとばかりに並んだ薄緑色の鉄板の列。混凝土の壁はビルディングの土台部で、高層の建物にはどれも地面から

高架通路のあいだに目立った開口部がない。鉄板が並ぶ一画はもともとはあった開口部を閉鎖したもの。要するに蜘蛛巣地区から直接は建物へ入れぬ仕組みになっているわけだ。で、それら無表情な石と鉄の壁に沿って、こちらは表情豊かな、と云えなくもない、雑多な材質と形状からなる掘ったて小屋がごたごたと並んでいるのが、蜘蛛巣地区住人の巣。ほかに高架通路（プラットフォーム）の高さに達しない細屋が身を寄せ合うように建つ一画もあって、いたるところ黒い電線が秩序なく伸びている様子は、なるほど蜘蛛巣の名称がぴったりだ。

芯城姉の後についてぽくぽく歩く。敷石が壊れ土が露出した舗道を進んでいくと、公園があった。蛍光街灯の仄暗い（ほのぐらい）光の下、痩せひねこびた草木が疎ら（まばら）に生えるなか、朽ちかけの長椅子（ベンチ）や錆びた遊具が置かれた地面に多数の人間が群れているのは何かの行列らしい。とぐろを巻いた列の先頭は公園隣のビルディングの基底部に開いた、公衆便所みたいな口に呑み込まれている。列の人々が揃って中空に視線を彷徨わせているのは、電脳網（ネット）端末で何事か見たり聞いたりしているんだろうが、なかにはおそろしく旧式の板型（タブレット）端末を覗いている人もいる。老若男女満遍なくうち揃って、外国人や子供の姿もあるのは、何をしているんだろうと思って問えば、あれはセーフティーネットに並ぶ人たちで、建物は新宿区役所の分館だと芯城姉が説明した。

セーフティーネットは、正確には「生活者セーフティーネット・パブリックサービス」、昔の生活保護制度に代わって、困窮者に最低限の生活保障を与える仕組みだとはフ

オギーも知っている。生活保護が金銭の補助だったのに対して、こちらは現物支給。一定限度内で食品給仕機や衣料プリンタを使えるポイントが貰える。申請してこれを受ければ、だから餓えずにはすむが、受給者は生体認証コードを発信する素子の皮膚への埋め込みが義務づけられる。もちろん素子を埋めずとも、個人の行動を追跡することはできるが、個別の監視には費用がかかるうえ私権を主張する国民からの抵抗も大きい。その点、素子の埋め込みは安価に監視が行えるので、予算不足に悩む警察官僚としては、「悪の温床」となりがちな蜘蛛巣地区の治安維持の切り札と考えているんだそうだ。

「『人感染』の頃は、ロボットが人間の仕事を奪うことが問題になっていたんだけれど、いまはロボットを使うより人間の方が安いので、雇用自体はけっこうあるのよ。だけど賃金が低いから、多くの人がセーフティーネットに頼るしかないの」と芯城姉は解説した。

蜘蛛巣地区はアブナイと云う話をさんざん聞かされているから、フォギーはややビクビクしていて、怪し気な2D看板の並ぶ細路地から人相のよからぬ刺青男がぬっと出てきたり、いかにも淫祠めいたケバい寺で全身ピアスの原色坊主が踊っていたり、舗道に青い梱包用材を敷いて野宿する人たちの前を通ったりすると、鼓動がドキドキ速くなったが、全面覆いヘルメットの芯城姉は歩調を変えずにずんずんと行く。ほどなく中央に磁気路帯のある幅広の自動車道路に突き当たった。靖国通りだと芯城姉が教えてくれる。信号待ちをしながら路の向こう側に眼をやれば、右手がちょうど高架通路の切れ目になって、薄墨

CamScannerでスキャン

色の空の下、樹木がこんもり繁る一画を見た瞬間、ここなら知っていると思い、そう口にすると、前に来たことがあるのかと芯城姉が問うので、ないと答えたとき、いや、そうじゃない、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）内の「新宿」で来たのだと思い当たった。疑似現実（ヴァーチャル）の「新宿」に較べると、非常に閑散としているけれど、同じ場所には違いない。

「あれ、花園神社じゃないですか？」

小黒い森を指して云うと、そうだと答えがある。やっぱりな。神社だとか寺だとかは変化が少ないんだろう。いま立つ位置の後ろに伊勢丹、右方向に見える交差点が新宿五丁目、あそこを右へ折れるとアートシアター新宿文化が昔はあったはずだと云うと、ずいぶんと詳しいのね、と感心されたので、調子にのって、花園神社の奥にはゴールデン街と云う飲屋街があったはずだと、道路を渡りながら云えば、いまもあると云われて驚いた。

「ゴールデン街は健在。場所も同じ」

「じゃ、『オレンジ・マーマレード』って云う店も？」

「もちろんある」と聞いてフォギーはまた驚いたけれど、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の「オレンジ・マーマレード」を訪れたとき、現実（リアル）の新宿にも同じ名前の店があると検索に出たのを思い出した。

「どんな店か、知ってます？」

まさか茅田アリスがママで、多芸多才文化人が大集合する店じゃないだろうな、と思い

つつ訊けば、知っていると答えがある。

「と云うか、あとで行くけど」

「行くって、『オレンジ・マーマレード』へ？」

「そうよ」とかるく頷かれて、呆然となったフォギーが問いを重ねようとしたとき、芯城姉が路地奥の古びたビルディングにすいと吸い込まれた。入ってすぐ地階へ向かう階段があって、下りきれば自動硝子戸がずうんと開いて、正面に空色の制服を着た小さいおばさんがぽつんと坐る受付、その上方に看板がある。「KABUKI-CHO-ONSEN」と読める。左右には大きな布暖簾。左の桃色が「女湯」、右の藍が「男湯」。つまりは温泉、と云うか銭湯だ。

芯城姉は制服おばさんに切符を渡すと、受付横の数字鍵の小金庫に電脳網端末と貴重品を仕舞うように云う。フォギーがそうすると、自分も同じくした芯城姉は「女湯」の暖簾を潜って、唖然となっているフォギーへ、はい、これねと、ロッカーの鍵とタオルを渡す。

「もしかして、お風呂、入るんですか？」

「そうよ。温泉は嫌い？」

フォギーはもとより温泉大好き人間である。世界秘湯の会の会員になるほどの者である。ではあるが、場合が場合だ。戸惑っていると、ヘルメットを外し、服をずんずん脱ぎ

CamScannerでスキャン

ながら、
「たしかにここは天然温泉ではないから、そこはちょっとあれかもしれないけれど、お湯の質は草津と変わらないはずよ」とせっかちな調子で云った忍城姉は、北新宿にできた廃棄物処理場の余熱で沸かした湯に温泉成分を混ぜているのだと解説した。
「今週は草津の湯。来週は登別ね。あれかしら、あなた、もしかして自噴無加熱じゃないといや派？」
　むろん温泉は自噴無加熱が理想だが――って、そう云う問題じゃない。どうして風呂なのか？　ようやくそう口にすれば、「お風呂は嫌い？」とまた訊かれ、嫌いじゃないが、だからそう云う問題ではないわけだ。
「だったら入りましょうよ」と云われて、フォギーも観念した。たしかに風呂に入りたくなくもない。で、服を脱いで浴場へ向かえば、石造りの湯船には、五、六人が湯に浸かって、洗い場にもちらほら入浴客の姿がある。あとから思えば、はじめて訪れた蜘蛛巣地区の風呂で裸になるなどは無防備に過ぎるが、それもこれも忍城姉と名乗る女性の、不思議と親密な雰囲気に巻き込まれたせいなんだろう。忍城とは知らぬ仲ではなし、その姉となれば、まあ親しみを覚えてもいいのかもと、フォギーはさしたる根拠のないまま考えつつ、裸になった忍城姉を見るともなく見れば、小太りと思えた軀は筋肉質で固く締まり、おばさんぽい顔にふさわしいような、そうでもないような。

CamScannerでスキャン

変装用仮面を外してもいいと云うので、顔をごしごし洗い、軀を流し、湯船に浸かった。天橋立が描かれたタイル壁の上方、高い天井に、からんからんと塩化ビニールの手桶が鳴る音が反響し、朦然とたち上る湯気が洗い場に散る裸体の輪郭を朧にぼやかす。とろり透明な湯に首まで沈めれば、軀の凝りが柔然ほぐれる具合で大変気持ちがよい。思えば今日以上に軀が強張ったことは、いままでの人生、ないのでした。

湯のなかで思うさま軀を伸ばし、ぐううと豚みたいな息を漏らしていると、洗い場にいたびっくりするほど色の白い少女が立ち上がり、湯船にすぼりと沈んだ、と思ったら、ごく短く刈り込んだ髪を載せた頭を湯面から出して鰐みたいに泳いですぐ横までやってくる。なんだ、なんだと、身構えていると、師匠、お久しぶりです、と湯煙のなかからいきなり挨拶するではないか。

フォギーを師匠と呼ぶ人間はこの世にただ一人。王花琳だ！

91

花琳がどうして温泉に居るのか。それも新宿の。が、このことはまずは措くとして、芯

躰が風呂にフォギーを誘ったのには、躰の凝りをほぐし肌を清める以外にも理由はあったので、すなわち銭湯こそは蜘蛛巣地区で最も防諜に優れた場所だから。公衆浴場はどこでもそうだが、電脳網端末を含む電子機器類は浴場へは持ち込み禁止、侵襲式の端末を使う人間は刺青者(タツー)と同様入場できない。監視カメラも通常は設置されていない。なので湯船に浸かりつつ生声で話せば、周りの人に聞かれぬ限り、会話内容を第三者に捕捉される危険は少ないのでした。

かくてフォギー、花琳、芯城姉ミチコの三名は、揃って手拭を頭に載せた格好で、湯にちゃぽり浸かって話をした。と云っても、フォギーは二人の話を聴く一方で、しかも途中から眠くなってしまい、半分も頭に入ってこなかったけれど、一番肝心の点、すなわち、芯城姉が〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉なる組織の人間で、花琳もいまやこれに属し、ICSO および警察から追われる身となったフォギーもまたそこに「わらじを脱ぐ」以外の選択肢がない事情はかろうじて理解できた。しかし、これはなかなか大変なことだよ、などと呑気に評論している場合ではなく、ドエライことになっちまったなと、フォギーはほっこり温まりつつ考えたのであったが、ところで〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉とは何か？　ここが肝心要であることは云うまでもない。

それで、だんだん聞いて、温泉のぼせ頭で理解したところでは、〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉は、金融資本や軍事企業が国家を従属下におく、いわゆる「デントランド体制」に対抗する国際結

社。元来は反戦、反軍活動のNGOを中核に、複数の団体が連合してできた運動体で、紛争地域の難民救援や、資本や国家の支配に抗する地域の農業団体や住民ネットワークの運営育成を支持(サポート)する活動が基本であるが、それとはべつに、電脳侵入(ハッキング)を主な手段に多国籍企業の財務や取引の実情を暴き不正を糺(ただ)す事業を行い、これが体制側の脅威となって、ICSOからは第一級テロリスト組織——非合法を含むあらゆる手段を使っても撲滅すべき組織の栄えある指定を受けるに至ったと云う。

テロ組織と云うと、公共施設に爆弾をしかけたり毒ガスを撒(ま)いたりと、悪逆非道のイメージがあって、フォギーも同じく考えていたから、意外の感に打たれざるをえなかった。〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉が非合法の武力を行使しているのは事実であるが、ICSOはさまざまなデッチアゲで以て〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉に悪の集団のレッテルを貼ったうえで、壊滅を謀(はか)った結果、対抗上〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉の方も武装闘争を余儀なくされたのだと説明があった。しかも、そうした「手荒い仕事」を担当する部門の幹部メンバーが芯城姉だと云うから驚いた。顔だけ眺めていれば、そこらのおばさんでしかなく、とてもそんなふうには見えない。とは云え、軀の筋肉は堅く締まって、繋服(ジャンプスーツ)で水上スクーターをすっ飛ばした姿を思い起こせば、なるほどと思えぬこともなかった。

第一級テロリスト組織と云うと、冷酷悪逆の非人間、血も涙もない悪魔デアルとの像(イメージ)を一般市民(ピープル)は刷り込まれている。だから誰かに〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉の活動を理解して貰うには、

時間をかけた説得が必要で、だからこそフォギーを温泉に誘ったのだと、芯城姉はあとで説明した。つまりは裸同士の付き合いから関係を築く、ニッポン伝統のコミュニケーションの技法だ。ところが、ひととおり話を聞いただけで、ああ、そうなんだと、フォギーが納得したふうになったのには、芯城姉も拍子抜けの気味となった。フォギーのこの軽さは、バンドマン的場当たり処世が根にはあることに加え、あまりに目まぐるしい運命の変転に気持ちがついていけなかったせい。与えられた情報の真偽に猜疑を抱く姿勢は、フォギーとて世紀末を生きる女、基本的な構えとして持っている。なのに簡単に芯城姉の言葉に信を抱いたのは、早い話があまり深く考えなかった、と云うか考えられなかったから。君は今日から猿だと猿から云われたら、猿の仲間になっていたのは疑えない。肩までどっぷり湯に浸かったフォギーは、いかにも思慮ありげに眉毛をぴくつかせていたけれど、温泉で温まった魂はコタツ猫と変じてなかば眠っているのでした。

横に裸の花琳がいることが〈白い騎兵（ホワイトランサー）〉への信頼感の一助となったのはたしか。思えば、花琳とは知り合ってまだ日数は経たぬわけだけれど、古い友達同士のように思えるのが不思議だったが、花琳が〈白い騎兵（ホワイトランサー）〉と行動を共にするほかないと云うのであれば、きっとそうなんだろうなと、コタツ猫はにゃむと鳴いて丸くなった。その花琳は、と云うならば、ICSOの追及を逃れ向かった南極保健衛生病院で、〈白い騎兵（ホワイトランサー）〉のメンバーに出会い合流したのだと云う。花琳が危険を冒して東京へ戻ってきたのは、フォギーが東京へ向

かったら、タフな性格を備えたね。」
「こんな説得にかかったんじゃないですよ。あ、べつに会いたくないって意味じゃないけど」説得を続けて、山桜博士のノートを消去してもらう必要があるんだろう」と野沢さんが見ているらしい。新婚の花嫁は花婿の膝に小さな尻を乗せて頬杖をつき、照れくさそうな様子がないのがいかにも子供っぽい。
「それにしても、いきなり助けに来て貰えてよかった。あのままアンドロイドと一緒に捕まっていたらどうなったかわからないよ」フォギーがあらためてお姉姉に礼を言うと、「山桜氏、山桜のフォギーの動向に注目していたのだと意外な返答があった。どうやら、これは向こうは山桜博士からフォギーの身の安全を確保して欲しいとの要望があったらしいのだ。
「それに、この先の役の良い読者なら、物語の最初の方で、ケープタウンへ向かうフォギーが〈空港〉国際空港のVIP待合室で見かけた、桃色スーツのお姉さんを覚えているかと思いますが、彼女こそがお姉姉です。
「いかにもあなたがホテル新雅園から急にいなくなって、だいぶ焦ったんだけれど、なんとか見つけられてよかったわ」
「やはりそうして山桜さんは私を？」とフォギーが疑問を口にすると、
「はっきりとは分からない」とお姉姉は答え、しかし早くから山桜氏はフォギーのピアノが鍵人の中心になるプログラムを作っていたのだろうと加えた。

「ドクター山萩は、自身のTBUソフトが意志に反してモリキテック社内に保存され、自分の死後に『起動』されることを予測していたんだと思います」と今度は花琳が説明をはじめた。それを憂慮した博士は、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）で葬式を行い、それとともにソフトが消去される仕組みを構築した。起動されたTBUソフトはこれを察し、消去から逃れる路（ルート）を模索しているだろうが、そこは天才山萩博士、容易には脱出できぬ迷路プログラムを構築した。とは云え、CPUを全力回転させたTBUソフトはいずれ解を見いだしてしまうだろう。

「だから早くお葬式をする必要があるんです」

「でも、どうして消さなきゃいけないの？」フォギーが眠気の霞（かすみ）を振り払って問うと花琳は答えた。

「クレージーだからですよ。架空墓（ヴァーチャルトゥーム）に怪獣を作るくらいならいいけど、このままだと現実世界（リアルスペース）に害を及ぼしかねないですからね。と云うか、もう及ぼしているみたいだけど」

アンドロイドを作ったのがクレージー山萩だとして、例の夢のジャズオールスターズくらいなら害はないが、飛行体を撃ち落とした美少年忍者はだいぶ危ない。海上警察庁の舟艇を無人飛行体（ドローン）で攻撃したのもクレージー山萩だとすれば、たしかに害はあると云えよう。

「しかもクレージー山萩は非合法の有機素材を使ってロボットを作っているんです」と云

CamScannerでスキャン

った花琳は、人体組織を槽培養した素材が部品として利用されていると見られ、これは倫理上の問題もさることながら、毒性のある生体ウイルスを発生させる危険があるのだと解説した。

「ケープタウンではやっていなかったんだけれど、舞浜工場では密かに研究が進められていたんだと思います。モリキテックに限らず、どこの企業でもやってることなんですけどね。とにかく工場をクレージー山萩が乗っ取ったわけで、とすると、このままだと何がでてくるか分からない。それに、早く消して欲しいというのが山萩博士の遺言だったわけで。大山アンドロイドのメッセージを見たでしょう？」

なるほどと自分も浴槽の縁に坐って頷きながら、しかし、とフォギーはまた口を開いた。

「ソフトを消したいなら、お葬式なんかしなくても、電脳（コンピューター）を停めちゃえばいいんじゃない？」

「ケープタウン研究所の電脳（コンピューター）はICSOの手が入って停まってます。舞浜のも時間の問題」

「だったらいいんじゃない？」

「TBUソフトはもう逃げちゃってます。架空墓（ヴァーチャルトゥーム）ごと」

「逃げるって、どこへ？」

「電脳網のなかに。メルクリウスって会社、師匠は知ってます？」

聞いたことはあると、フォギーが応じると、メルクリウス社が保有する電脳にクレージー山荻は潜んでいるらしいと応じた花琳は、ですよね、と芯城姉に発言を促した。

「入ってくる情報を綜合すると、どうもそうらしいの。もちろんメルクリウスだけじゃなくて、いろいろなところに侵入しているんだけど、メルクリウスが根城になっているみたいなのね」

「でも、どうしてそんなところへ逃げたのかな？」と花琳が横から疑問を呈する。

「メルクリウスはモリキテックを買収したから、それがあるんだとは思うんだけどね」と芯城姉は応じたが、あまり自信はなさそうだ。

「とにかく早く消さないと。舞浜工場のあたりは戦争みたいになっているらしいわ。国土防衛軍も出動したみたいだし。このまま放置はできないでしょう？」

「でも、ＴＢＵソフトがメルクリウスにいるんだったら、ICSOが消せばいいと思うけど」と花琳がまた云ったのは、メルクリウスこそはICSOに代表されるデントランド体制の中核にある企業だからだ。

「いずれはそうなるのかしれないけれど」と云ってから、一拍おいた芯城姉は続けた。

「でも、早くしないと、〈白い騎兵〉としてはちょっと困るのよ」

そう云った芯城姉は、照れたふうな様子だ。なんで照れることがあるのかと思っている

CamScannerでスキャン

と、横から花琳が、山萩博士は自分の死後、資産の大きい部分を〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉関連の団体や組織に寄付すると遺言したのだとフォギーに解説した。

「わたしも全然知らなかったんだけれど、山萩博士は〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉の密かなスポンサーだったんです。山萩博士はもう亡くなった。でもそのことはまだ公表されていない。TBUソフトが山萩博士に代わって活動してますしね」とそこまで云って花琳は細い顎をきゅっと上へ向けた。「そうか。そう考えると、メルクリウスには山萩博士の死亡を隠したい理由があるのかもしれないな」

「かもしれないわ。とにかくね、これは分かって欲しいんだけど、わたしたちは山萩博士の遺産がどうしても欲しいって云うわけじゃないのよ」と手拭を頭に載せたまま芯城姉が云うのへ、

「欲しがってもいいと思うけどな」と感想を述べた花琳にフォギーも賛成である。

「たしかに遺産の額はすごいから、大きいわ」と云って芯城姉はまた照れたふうに笑う。

なるほど「騎兵」と云うくらいで、こと金銭については古武士のごとき潔癖さが〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉にはあるらしい。「でも、わたしたちはなによりも、山萩博士の遺志を貫いてあげたいのよ」

遺言は山萩博士の死亡が公表されると同時に執行される手筈になっているはずだから、それにはTBUソフトを消去し、山萩博士の死亡を確定しなければならない。いまやTB

Uソフトは散財を重ねていて、山萩博士の遺した資産を刻々喰い潰しており、その意味でも急がねばならない。

なるほど、遺産を貰ってみたらスッカラカンでした、では淋しい。芯城姉の言葉に頷きながらフォギーが、武田信玄のことをふと思ったのは、唐突のようですが、つまりは影武者だ。我が死は三年のあいだ秘せと信玄公は遺言した——。で、これはただ思っただけ。だからどうと云う展開もなく、影武者の像（イメージ）が湯煙にふわり浮かんで解け崩れるのを眺めていたら、ざばあと海獣のごとく湯から抜け出た芯城姉がまた云った。

「山萩博士は静かに眠りたいと願っている。その遺志は尊重されるべきでしょう？」

最後に山萩博士と会った『六甲山』、神戸の夜景を眺めつつ、海棠（かいどう）の花散る下で交わした会話を思いだし、フォギーは深く頷いた。

92

二〇分後、フォギーは新宿ゴールデン街に居た。

「歌舞伎町温泉」から歩いて数分、そのあたりには多層高架通路（プラットフォーム）や高架歩行通路（ペデストリアンデッキ）がないせ

いもあって、街の佇まいが架空窟(ヴァーチャルウーム)で見たそれと変わらぬのが驚きだ。幾筋かになった路地に、せいぜいが三階建ての細かい家屋が肩と肩をぶつけ合うようにして軒を並べるのも、統一感を欠いた看板やら鉢植やら得体の知れぬ置物やらを、古風な蛍光街灯が仄暗く照らしているのも同じ。もちろん一帯は林立する柱から縦横に伸び出た電線の蜘蛛の巣の底に沈滞している。架空窟(ヴァーチャルウーム)は「一九六〇年代の新宿」だから、百数十年の時間を経てなお健在とは、しぶとい飲屋街と云う以外に評言がない。もっとも一時は寂(さび)れて、産業廃棄物のなかに浮浪民の巣となった廃屋が並ぶだけとなった時代もあったが、ここ二十年で復興してきたのだと芯城姉が教える。

「蜘蛛巣地区は公共サービスがないぶん、行政の管理からは相対的に自由なの。安価な食品給仕機や衣料プリンタの普及が大きいんだけれど、エネルギーやゴミ収集、それから子供の教育に関しては、相互扶助のシステムが自生的に育ちつつあるのよ」と解説した芯城姉は、地方でも同様の動きはあって、国家や企業の支配から逃れて、エネルギーを自給しつつ完全自営の農業や畜産に携わる人たちの村落が簇生(そうせい)しつつあって、それら地域や人間を繋ぐネットワークを編むのが、じつは〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉の仕事の大きな部分を占めるのだと続けた。

「いまでは、一定の収入があるのに、わざわざ蜘蛛巣地区や独立エネルギー農場に住む人が増えている。住まないまでも、ネットワークに参入してくる人が増えているの。だから

なるほどここを歩いて街路を見回せば、たしかにこの飲食街には人をしてわくわくさせるような不思議な活気があって、それが架空墓のゴールデン街との相似を思わせる一番の理由なのだった。混沌の土壌から自生した雑林に棲息する人々の世界、その感触はフォギーが普段暮らす「東京」にはないものだ。吉祥寺のハーモニカ横丁へフォギーはときどき足を向けるけれど、あそこは云わばテーマ・パークであって、二十一世紀末の現在、東京中に点在する「昔ながら」の飲食街はどこもだいたいそうだ。それに引き換え、蜘蛛巣地区のど真ん中に位置する新宿ゴールデン街には、二十世紀の人工香料をただふりかけたのではない、本格の匂い、云うならば、来るべき二十二世紀の匂いがある。他が合成された（シンセサイズド）音楽だとすれば、ここは生音の感じ。思えば、フォギーが来るべき新世紀に対して肯定的なイメージを抱いたのはこれがはじめて。蜘蛛巣地区と云うものをフォギーはがぜん見直したのでした。

同行する花琳は暗緑色の中国服に、フォギー同様、変装用仮面（マスカレード）を被った姿。しかし、これはどうなんだと、首を傾げざるをえないのは、頭にリボンをつけた髭の猫顔はキティちゃんだ。これでは変装しておりますと宣伝して歩くようなものだが、コスプレして外出する人は世間に多いからいいんだろう。自分の変装用仮面（マスカレード）はどんな具合かと思って、風呂屋の鏡を覗いたら、原型（オリジナル）の顔と大きく違わぬのが逆に怪しい。ほとんど変わらぬがちょっと

だけ違う、その微妙なずれ具合が気色悪い。じっと見つめていると吐き気を催すほどだったが、自分の顔は自分では見えぬから、問題ないと云えばない。

芯城姉は仮面をつけていないので、ずっとつけっぱなしだと云う。第一級テロリストが素顔で往来を闊歩して大丈夫なんだろうかと心配したら、組織防衛上の理由から、仲間うちにも素顔を見せぬのが原則だとも云う。〈白い騎兵（ホワイトランサー）〉の幹部メンバーは、彼女のおばさん顔は変装用仮面（マスカレード）なのであった！　ならば素顔はどんななのか。じつは柳眉紅唇、絶世の美女だったりして、とフォギーは考えてみたりしたけれど、自分の仮面から推して素顔もほぼおばさんなんだろうと、そのあたりに推測は落ち着いた。

風呂屋から外へ出る際には、新たに渡された耳飾り（ピアス）式の端末をつけるよう云われた。これは「白い巨人」で貰ったZANNON社のとはまた違うもので、〈白い騎兵（ホワイトランサー）〉が独自に開発した機器だと云う。電磁波攪乱（スクランブル）の機能が備わって、外部の検知機（センサー）から生体認証情報を読み取られず、しかも従来型とは違って攪乱していること自体感知されぬようになっていると説明があった。蜘蛛巣地区（に限らぬが）の辻々には監視機が設置されているはずで、ときには探査飛行体（ドローン）も夕方の蝙蝠（こうもり）みたいにふらふら飛んでくるから、第一級テロリストとしてはこれくらいの用心は必要なんだろう。

「この装置はいまさっき受け取ったんだけれど、少なくとも五〇〇時間は保つはずよ」

芯城姉が云うので、どうして期間限定なのかと思えば、ICSOから攪乱を見破られるま

での時間とのこと。この種の諜報機器の開発はいたちごっこだと聞くが、なんとも忙しい話だ。生声にも音波の攪乱が加えられ、同種の端末を装着していない者には有意味な情報は伝わらないので、盗聴を気にせず自由に会話できると聞いてフォギーはまたまた感心した。〈白い騎兵（ホワイトランサー）〉あなどれず。ただの粗暴なテロ組織ではやはりない。

ちなみに、芯城姉によれば、東京は世界で最も監視が甘い都市のひとつとのこと。これはだいぶ意外で、わけを聞いてみれば、日本の警察は縄張り意識が強く、ICSOの介入が少ないからだと云う。今回の電磁波攪乱端末にしても、相手が警視庁の技術研究所だけなら、まず半年は保つだろうとの話を聞けば、優秀だ、優秀だと、昔から云われてきた日本警察の実力も怪しいものだ。まあこれは日本人総体について云えることですが。

時刻は午後の九時過ぎ。薄暗い街灯の光を浴びて、飲屋街を急ぐ黒い影が狭路を行き交い、湿った夜気のなか、しのしのしのと足音がたつ。花園神社脇の道路から細路地を進んで、一軒の店の、張り出し屋根の陰になった扉の前に立てば、木株を輪切りにした看板がある。豆灯に照らされた文字は「オレンジ・マーマレード」。外観は架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の店とそっくりだ。となると、ひょっとして多芸多才な人士が集合しているんだろうか、と、そう思いつつ芯城姉のあとについて店へ入ると、いらっしゃいと、カウンターの向こうにいる人が挨拶を寄越した。

93

予想に反して他に客はなく、芯城姉、フォギー、花琳と並んでカウンター席に座った。仰天したことには、外観だけでなく内部も架空墓(ヴァーチャルトゥーム)と同じだ。もっとも現実(リアル)の店を架空墓(ヴァーチャルトゥーム)内に再現したんだとすれば驚く必要はないわけだけれど、夢中にあるかのごとき非現実感は拭えない。L字型のカウンターの背後に棚があって、古い紙本やら何やらがごたごたと並べられ、紅い傘電球の光に照らされ仙人掌(サボテン)とこけしの濃い影が黄色い木壁にべったり貼り付いているところも同じ。

ただし、カウンターの向こうにいる人物は茅田アリスではない。格子縞のネルシャツを着た、むさい髭面の山男ふう人物だ。彼も〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉の関係者だと紹介がある。早速フォギーが麦酒(ビール)を注文すると、花琳、芯城姉がアルコール飲料はいまは駄目だと云う。ええっ、それはないぜよ。フォギーは心の裡で叫んだ。風呂から出て喉が渇いていたところを、水分を摂らずに我慢したのは麦酒(ビール)をおいしく飲むためだったのだ。温泉と云えば風呂上がりの麦酒(ビール)。これは太古よりの掟(おきて)、永遠の決定事項と云うか、人生の約束事と云うか、

CamScannerでスキャン

しかしそれが許されぬとは！
　サメリンを嗜めばアルコールはすぐに抜けるし、と未練がましく云ってみても、駄目ですとのつれない返事。ふて腐れかけていると、あとで好きなだけ飲ませてあげますと花琳が慰めるので、あまり嘆くのも大人げないと思い、諦めて炭酸水（ソーダ）を注文してから、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の「オレンジ・マーマレード」には茅田アリスと名乗る女主人が居たとフォギーが話し出すと、一九六六年開店時の初代ママがアリスと名乗っていたのだと髭の山男が解説する。
「山萩博士は『オレンジ・マーマレード』の常連だったんですね。しかし彼が通っていた時代には初代のアリスママはもういなかった。架空墓（ヴァーチャルトゥーム）に店を再現したとき、六〇年代の設定だったんで、アリスママも一緒にデザインしたんです。モデルはこれ」と云って髭男が背後の棚から出したのは、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）でも見た、カルメン・マキ「時には母のない子のように」のレコード・ジャケットだ。
「ちなみに茅田はアナグラム。カヤタの字を並べ替えればすぐ分かると思うけど」と云われてもフォギーには分からず、すると横から花琳が、タカヤと教えてくれた。貴矢は山萩氏の名前（ファーストネーム）。すなわちタカヤ→カヤタと云うわけだ。すると今度は芯城姉が曲を聴きたいと云い出した。一刻も早くＴＢＵソフトを消去しなければならぬと、緊迫した調子で喋っていた印象からすると、悠長すぎるのではと思ったら、どのみち二一時までは待たねば

ならぬのだと説明があった。何を待つのかは知らぬが、だったら待つしかないんだろう。

この塩化ビニールの盤は一九六九年発売のオリジナルではなく、「大感染」後に再発された複製品であると解説しつつ、鷲明が黒いレコード盤を脇の装置に嵌め込む。と、わりわりという針の雑音の後、棚の小スピーカーから音楽が流れ出た。

♪ときには、ははのないこのように、だまって、うみを、みつめていたい〜

あたりは静かだ。先刻までの——というか、いまも続いているのかもしれない東京湾の騒乱が嘘のようだが、戦争にしてもテロにしても、二十一世紀からこちらはモザイク状に起きるのが大抵だから、人が大勢死傷しているすぐ隣のカフェーで談笑、などということはよくある。耳を澄ませば遠くから常ならぬ音響がするようで、サイレン音もときおりは耳に届くが、都市の通常騒音に紛れて目立たない。

頬杖ついた忌城姉が、なかなかいい歌ねと、近所の常連おばさん然として云えば、歌詞の意味がよく分からないと花琳が評論し、作詞は寺山修司ですと鷲明が註釈を差し挟んだとき、鷲明が誰か知り合いのような気がして、彼も変装用仮面を被っているのかもしれぬと思い、よくよく注意したが、すぐには分からない。声は端末の音声撹乱のせいで、花琳の声も忌城姉の声も音程が微妙に高く聴こえているから、声から正体は掴めない。妙だなと思いつつ、お腹がすかないかと訊かれて、空いたと答えると、カレーライスならできるというので頼めば、鍋をおたまでかき回しつつ、これこそは伝統の神保町、キッチン北海

の黒カレーだと自慢が飛び出たところで気がついた。髪男は芯城鋼太郎だ！
「黒カレーでやっぱり分かっちゃった？」と笑うから、頷くと、キッチン北海の黒カレーなんて文句を口にする人間はあまりいないしな、とまた笑う。なんで正体を隠していたのかと云うと、知り合いをどれくらい騙せるものなのかな、なんて思っちゃったりして、せっかく変装用仮面(マスカレード)をつけたわけだしね、と答えるあたり、いつもながら変梃(へんてこ)な男だ。わたしを騙してどうするのよ？　と文句を云うと、いや、申し訳ござらん、ひらに、ひらにと、今度はやけに恐縮するのがまた変だが、横から芯城姉が、いまや芯城もフォギーも官憲に追われる身であるからして、必要のない限り正体を明かし合わない方が安全なので、そうするよう助言したのだと解説した。忍者が里者のふりをして何十年も暮らす話をフォギーは思い出し、これはやや焦点(ピント)がずれ気味ですが、しかし芯城とも正体を隠し合わねばならぬとは、なんだか大変なことになっちゃったなと、フォギーがあらためて深刻になっていると、「でも、分かっちゃったんじゃ仕方ないわね」と芯城姉がけらけら笑う様子を見れば、あまり深刻になることはないとも思える。
　で、黒カレーを食しつつ聞けば、芯城もまたICSOおよび日本警察から追われる身となり、芯城姉の導きで「地下へ潜る」ことになったと云う。いつのことかと訊けば、ついさっきと返事があったから呆れた。
「香車って云うのは、なるほどだったね」とそこで芯城は、ううう酸っぱい、と呻きつつ

レモンスカッシュを飲んでいた花琳に云った。でしょう、とキティちゃん花琳は得意そうに応える。なんのことかと思えば、花琳が芯城に暗号メッセージを送り、「香車がきっと守ってくれる」と書いたんだそうだ。助けるのは〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉、騎兵は槍、槍は「香車」。それで「香車が助けに行く」と云うわけ。しかしなんで僕が「歩」なの？　どう考えても「銀」が妥当だろうと芯城は文句をつけ、でも、芯城さんて、なんか「歩」の感じがするんだよね、などと花琳は真面目に応えている。そんなことより芯城はどうしたのだと、フォギーが話をもとへ戻すと、今日の午後、自宅に居たところをバイクで連れ出されたのだと話し出した。

「まさかミチコ姉さんとは思わなかったから、驚いたな」と述懐して事の顚末を紹介する芯城の口調には、音声攪乱をかけていても消しようなく伝わる興奮がある。と同時に、ちょっぴり甘えた気分が漂うのをフォギーはスルドク感じ取った。どうやら芯城銀太郎、十数年ぶりにお姉さんに会い、豊かな胸に抱かれ嬉しくて仕方がないらしい。こやつ、ひょっとしてシスコンか、と疑惑の眼を向けつつ、なおも観察すれば、カウンターの向こうに佇(たたず)む芯城は、昔からずっとそうしてきたかのような落ち着きぶりである。午後に自宅から連れ出されて、「オレンジ・マーマレード」の二階に潜んでいたところ、外出する主人(マスター)からちょっと店番を頼まれた人にはとても見えない。もっともこの店に芯城はもともと馴染みではあるらしい。

ちなみに曙カレーは、以前は大手銀行に勤めていたが、今は自由の身になったのだという曙さん——というか
ので、基本のルーは古のキッチン共有の箇所にまで遡る。自分は上京以来それを守ってきたのだそうで
ーなのだと報告した脱臼な城は、これは驚くよ、素すぎるよ、誰かが今においてまでずっと
混ぜつつ、紙幅をしきりに口にしているが、自身の運命の転換を覗いたのがいいんじゃな
いかな、とフォギーは評論しつつ、しかしそもそもどうして私たちが言葉から追われねば
ならぬのかと、根本の問いを発すれば、ウィルスが放たれた現場に、すなわちホテル最上
階の客室にいたからだと解説がある。

ウィルスとは？　の問いには、アレフ・ウィルスと呼ばれる正体のわからぬウィルスで、いまや人類は第二の「大感染」の危機に瀕しているのだと教えられて、しかしフォギーにはいまひとつぴんとこない。

「わたしたち、何かしたの？」フォギーが訊ねると、

「したのは細胞です」とキティちゃんの花様が答える。

「わたしが？」

「そう。それとドルフィー」

「ドルフィー！　彼は元気なの？」

フォギーが問うと、自分がずっと一緒だったと答えた花様に促されて、お城が二階から運搬機を運んでくる。カウンターに置かれた箱を覗けば、子猫は筒の上で耳をぴんと

させて眠っている。ちなみに「流星号」のフォギーにドルフィーの３Ｄ映像を送ったのは花琳。前にフォギーの腕輪型端末(ブレスレット)をいじったときに、強制割り込み接続ができるようにしておいたとのこと。

「そうしておいた方がいいと、なんとなく思ったんだけど、わたし、ちょっと予知能力みたいなのがあるんですよね」と自賛した花琳はフォギーが腕輪型端末をつけていてくれてよかったと述懐し、ああ云うダサいのはなるべくつけないほうがいいと思うけど、と助言した。

籠のドルフィーはむろん３Ｄ映像ではない。隙間に指を入れて声をかけると、子猫はひょいと頭をあげ、ミイと一つ鳴いてまた丸くなる。

「いまは眠いみたいですけど、彼は元気です」と云った花琳は、ドルフィーが首飾り(ネックレス)を食べて、蛍みたいに光った一件を次に話し出した。

「たぶんあのときウイルスが放出されたんだと思います。師匠はよく寝てましたけどね」と云った花琳は、その後、ケープタウンの社宅で技術者たちが調べたのだが、ウイルス放出の仕組みはおろか、猫が飲んだ首飾りさえ見つけられなかったと説明した。

「完全なるミステリー。でも、どうやらこのミステリーには師匠が係わっている」

「わたし？」

「ええ」

「寝てたのに？」

「ええ。ドクター山荻が〈白い騎兵〉に師匠の動きに注意するよう云ったのも、そのことをドクター山荻が知っていたからだと思います」と云って花琳はフォギーを見つめたが、なにしろ顔がキティちゃんだから、どうにも変な感じで、つい笑ってしまう。

「笑ってる場合じゃないですよ」

「分かってる。分かってるけど、なんか可笑しくて」

「そう云う師匠だって相当に変です」

「やっぱり？　気持ち悪い？」

「かなり悪いです。魚の遺伝子が微妙に加わった感じ。鱗が生えてきません？」

魚か。なるほど云い得て妙だと感心していると、芯城が横から、まるで半魚人だねと云うので、何のことかと問えば、楳図かずおの漫画に『半魚人』と云う恐ろしくも悲しい傑作があるのだと応じて、芯城が滔々とあらすじを話し出したのにはさすがのフォギーも呆れ果てた。「地下へ潜る」とは、言葉にすると簡単だが、余程のことだと思う。これまでの生活を捨て、まっとうな堅気の暮らしはできぬまま人生の裏街道を歩むわけで、ヘラヘラしている場合じゃないだろ！　と、どやしつけたくなったフォギー自身、事態をいまひとつ深刻に捉えられないのは、さっきも述べたように、運命変転の速度に躯がついていっていないせいなんだろうが、こうなったからには潔く運命を引き受けるしかないんじゃな

いかな、とでも嘯くかのごとき恬然たる佇まいの忍城は、大好きなお姉さんの懐に抱かれ、弟猫となってミイミイ嬉しがっているとしか思えぬ。忍城姉から云われて、かいがいしく飲み物を出したりレコードをかける姿を見れば、もはやシスコン決定だ。

悪い博士の父親から半魚人に変えられてしまった友達が孤独の海へ去っていく悲しいラスト場面を、ほとんど涙を流さんばかりに忍城が説明し終えたとき、じゃ、時間だからそろそろ行きましょうと、忍城姉がいい、名作『半魚人』への感銘を新たにするネルシャツ男とドルフィーを店に残し、三人は表へ出た。出がけに忍城姉は弟に何事か細々と指示を与えて、これに忍城がいちいち素直に頷く姿に、いかにも仲のよい姉弟の濃感漂うのが、傍から見ていて少々くすぐったい。それにしても忍城銀太郎、シスコンはともかく、飲み屋のカウンター内にあってじつに生き生きしている。今日はじめて店に立ったとはとても思えぬはまり具合。あれこそが彼の天職なのでは、と思いつつ歩くフォギーが連れていかれたのは、大久保にある病院だ。

都立新宿厚生病院と案内板に書かれた九階建てのビルディングは、新宿駅ビルから歌舞伎町一帯を宙に覆う高架歩行連絡がちょうど終わった縁に建つ。大小の罅が縦横に走る壁面に蔦が這い、ほとんど倒壊寸前と見えるのもそのはず、築二〇〇年は経っていると云う。もっともこれだけが古びているわけではなく、近隣には似たような廃墟めいたビルディングが林立して、なかには大災の後で放置され真っ黒に焦げたのまである。二〇六〇年

代に吹き荒れた反中華紛争の跡だろう。

病院ビルの裏手へ回ると、「救急」の出入口があって、青ざめた光のなか人が動き、車寄せに普通車救急車が行き来して慌（あわ）ただしい。ここは保険未加入者でも診てもらえる、いわゆる「救貧病院」。高度医療ならぬ、低度医療が低額で受けられる。医師や看護師の待遇は劣悪で、多くの人間が半ばボランティアで働いていると云う。普段はデントランドやシンガポールの高級医療施設に勤めていて、仕事の合間にやってきては貧しい患者を診る、そんな人もいるらしい。

「この種の病院は世界中にあって、〈白い騎兵（ホワイトランサー）〉の拠点になっているところが多いのよ」

と云う芯城姉の解説を聞きながら、「通用口」と書かれた扉から入って、陰気な廊下が長く伸びるのを横目に、人気のない階段を下っていくと、消毒薬の匂いが充満する暗い廊下があって、奥の「霊安室」と書かれた鉄扉の前に芯城姉は立った。何か符丁のごとき文句が口にされると、扉がギギギギと嫌な音をたてて開く。促されて、花琳、フォギーと続き、最後に芯城姉が入って扉を閉めた。

霊安室と云うくらいだから死体がごろごろ並んでいるのかと思えば全然違って、ごく平凡な事務所ふうの室だ。なかには白衣の男女が一組。あとで聞けば、病院で出た死者は間をおかず処理施設へ運ばれるので、いまは霊安室は必要ないそうだ。一画に舟型の接続端末装置（アクセスターミナルステーション）（ATS）が二台置かれて、白衣の男性が操作板（パネル）をいじっている。

「準備は完了です」と男が云って、もう一人の白衣の女性が、フォギーの首筋に検知板（センサー）を当てて血圧その他を計測する。ATSは一時流行った籐編み外装の旧式だ。こんな古いので繋がれるんだろうかと、フォギーが心配すると、調整はできているから大丈夫だと返答がある。

「架空墓（ヴァーチャルトウーム）は現在外部からは閉鎖されているの。だから誰も入れない。ただ一人の例外を除いてね。その例外が木藤桐、つまりあなた。繋がれるのは世界であなた一人。だからあなたにやってもらうしかないの」

芯城姉が云ったのは、フォギーが躊躇しているのを見てとったからだろう。架空墓（ヴァーチャルトウーム）で鍵を探し、ピアノを弾く。道々聞いた使命（ミッション）を一人で果たせる自信はなく、ただし花琳が同期（シンクロ）してくれると聞いて、やや安心していたのだが、それにしてもどうして自分なんだろうか。なぜ自分一人が架空墓（ヴァーチャルトウーム）に入場を許されているんだろうか。疑問が群雲となって湧き起るのは自然であったが、しかしこのときフォギーは、それとは別の事柄に気を取られていた。と云うのは、白衣の女性だ。誰かに似ている——。いや、誰か、と云うより、フォギーのよく知る人に似ている。とは、つまり母親だ。母親にそっくりだ。髪型は違うし、よくよく見れば、鼻や眼の形が微妙に異なる。が、全体の雰囲気と云うか、印象が完全に母親。これはフォギーと同様の変装用仮面（マスカレード）を被った木藤檜（ひのき）、つまり母親ではないのか。

本来は医療用だと云うＡＴＳの操作法の説明を受けた後、一二時まで待ったのは病院の事務長らが帰るのを見計らっていたからで、しかし零時になると副院長が当直で来てしまう、加えて、フォギーが電脳網に繋がったことはICSOに探知されざるをえず、攪乱はかけるものの、ＡＴＳの位置はいずれ知られてしまう、だから迅速に事を終える必要があるのだと、芯城姉が訓示するあいだも、忙しそうに接触板をいじっている白衣の女性からフォギーは眼が離せない。しかし母親なら挨拶があって然るべきなわけで、何もないまま当たり前のような顔でそこにいる様子からして、やはり別人なんだろうが、夢のなかにいるようでどうも落ち着かない。

トイレで用を足し、薬剤入の水を飲んでから、促されてＡＴＳにフォギーは横になった。すると足下方向にいる白衣女性が、接触板に眼を落としたままこめかみを小指でちょんちょんと突くのが見え、あっと叫んだのは、見慣れた母親の癖だからだ。ここにおいてフォギーはとうとう我慢しきれなくなり、ＡＴＳから半身を起こし、あちらの白衣の女の人は？　と声に出して訊いてみた。すると接触板から眼を離した本人から返答がある。

「あ、わたしよ。お疲れさまね」と発せられたその声は攪乱がかかっているけれど、口調は、間違いない、母親だ！

「なんで檜ちゃんがいるわけ？」

「なんでって、いまは説明している時間はないわ」と云って母親は急に笑顔になる。この

CamScannerでスキャン

ところフォギーは驚くことの連続で、もはや驚愕はインフレの感があったが、これにはもう本当に、掛け値なしに驚いた。驚きのあまり呆れる感じとなり、その果てに可笑しくなり、げらげら笑い出しそうになるのを押しとどめたのは母親の笑顔だ。

変装用仮面（マスカレード）の半魚人的にぬめる肌質のせいで気味が悪いこともあった。だが、それ以上に、こんなふうに昔の可愛い子ちゃんアイドル風笑顔でもってこちらを見つめてくる場合、母親はよからぬ企みを胸に秘めていることが多いのだ。

「とにかくグッドラック。アンド、ビリーブ、ユアセルフ。頑張ってね」

そうだ、この言葉だ。この口調だ。これこそ、小学校入学とか、学校の試験とか、ピアノの発表会とか、はじめてのデートとか、人生の節目節目に耳にしてきた文句（フレーズ）なのであった。それにしてもだ。いつもながら檜ちゃん、まるで人ごとと云うか、真情のこもらぬイージーリスニングな調子だなと思ったとき、フォギーの目の前でＡＴＳの蓋が閉じられた。

同じ時刻、すなわち日本時間p.m.10:15、「メデューズ号」は、福島県沖二〇〇キロ米の太平洋上を北上していた。

それより数時間前、ＫＫとアンドロイドを乗せた高速艇「流星号」が去った時点では、『METEO』の人員を運ぶべき別艇を送るので、現位置で待機せよと、〈Met02〉から指示があったにもかかわらず、迎えが来ないのは東京湾ではじまった戦闘のせいに違いなかった。

戦いは、海上警察の艦船と、蝙蝠（こうもり）めいて夜空をひらつく攻撃用無人航空機（ドローン）との間ではじまり、そこへ横須賀から出動した国土防衛軍の戦闘艦（バトルシップ）が加われば、ほとんど戦争と呼んで過言でない争闘が繰り広げられて、こりゃトンデモナイことになったゾと、『Google monitoring view site』の２Ｄ映像を見つめる伊達邦彦氏が顔を強張らせたのは、無人航空機（ドローン）が涌いて出たのがモリキテックの舞浜工場と見られるからで、まもなく現場へ到着した国土防衛軍の戦闘ヘリが工場の建物にミサイル攻撃を加えるに及んでは、胃袋が口から飛び出しそうになった。

舞浜工場から戦闘を指揮するのはおそらく〈Met02〉。とすれば前代未聞、いまや世界中の眼と云う眼が東京湾に集中しているに違いなく、企業にとってこれ以上のネガティヴ宣伝はない。あんな狂ったソフトウエアが飛び出すようでは、ＴＢＵ事業はもちろん、モリキテック社の信用は台無しだ。株価下落は必至。と思ったところが、東京湾の出来事を

CamScannerでスキャン

セラス情報への移動が殆んど伸びていないのは、これより一時間前、中華連合の軍事衛星が南太平洋はケット上空で撃ち落とされたのに続いて、地球保険金融機構の幹部を乗せた大型旅客機が北極海で遭難、これを皮切りに大規模な紛争や事件が多発したせいだ。インド北部およびロシア南西部で複数の武装集団同士が衝突し、モンテカルロやマカオのカジノで爆破事件が続発。長年にわたり対立を深めていた北米独立州都市連合と合衆国軍のあいだで、軍事衝突の緊張が高まったかと思えば、南米ブラジルでは城塞都市がまるごとのように高性能ナノ爆弾で焼き払われた。どれをとっても電脳網ニュースを埋め尽くすに十分な事態、それが一度に起こったのだから凄まじい。そのほか大小の騒乱暴動は数知れず、戒厳令を発した国家が日本時間PM二〇〇の段階で一〇を数えるまでに騒乱の火が燃え拡がった。その原因ははっきりしていた。「大感染」だ。

「大感染」はまだ到来はしていない。が、すでにデジタル機器への感染がはじまっているとの情報の津波が、［CX］の設置した防御壁を越えて押し寄せ、地球の隅々にまで恐慌の水は溢れたのだった。伊達邦彦氏の携帯式端末には、終末の暗い熱狂と乱痴気騒ぎが次々流れ込み、断末魔の悲鳴のごとき狂瀾のなかで、東京湾の出来事は、軍事衛星の破壊や旅客機の遭難同様、ウイルス感染した機械の狂いが原因だとの憶測が流れ、「大感染」がもたらす災禍の一事例、人類破滅の物語の、挿話と見なされつつあるのは、少なくともモリキテックにとっては、不幸中の幸いというべきであった。

東京湾の戦闘が膠着となった頃、心魂霧散の心持ちで船室に佇む伊達邦彦氏のところへ、引き続き同じ位置で待機せよと、〈Me102〉から連絡が入った。いよいよ顔を青くした伊達邦彦氏は判断に苦しんだ。と云うより、もはやどうしてよいか分からなかった。ニンジャをはじめ船内のアンドロイドは「流星号」に乗って去ったから、「メデューズ号」には乗員を物理的に強制する存在はすでにない。である以上、〈Me102〉の命令に従わぬことも、しようと思えばできるわけで、では、どうする？

〈Me102〉が日本国と戦争をはじめたのは疑えない。と、そう考えたとたん、伊達邦彦氏は、ひえええええっと頓狂に叫んで、ホントなの？　それってホントにホントなの？　と繰り返し呟いたけれど、モニター画面に展開する出来事は否定しようがない。となると、このまま〈Me102〉とつるんでいては、こっちまで巻き込まれ、累が及ぶ懼れがある。と云うか、すでに十分に巻き込まれてしまっているわけで、では、どうする？

公海上の船舶では船長が絶対の権限と責任を有する。この太古よりの掟を伊達邦彦氏はふいに思い出し、そうだ、あいつに任せようと考えたのは、あまりの事に度を失い、思考が働かぬせいもあったが、根にあるのは、危殆に瀕してなるべく責任から遠ざかりたいとする本能ゆえ。で、本能に導かれるまま操舵室へ出向いてみれば、麦藁帽子に縞シャツの東洋人船長は窓辺でウクレレを弾くのに熱中している。こりゃ駄目だ、完全におかしくなっているゾと思ったが、話してみれば、船長は案外沈着で、あとから訊けば、己に冷静を強

いるときには必ずウクレレをつま弾くのだそうだ。

で、どうするか？　伊達邦彦氏の問いに船長は、すでに本社に問い合わせ、指示を待っているところだと応じて、ウクレレをぽろろんと奏でる。一刻も早く投降して、日本国政府に保護を求めた方がいいのではと伊達邦彦氏が云ってみると、激しくウクレレをかき鳴らした船長は、その場合、モリキテックの無人飛行体(ドローン)から攻撃される危険がなきにしもあらずと応じ、それはたしかにそうなのだった。いい加減そうな見た目とは裏腹になかなかのしっかり者デアルなと、俄然(がぜん)頼もしく思ったところへ、本社から返信がきた。

現位置で命令を待て。なんのことはない、〈Me102〉の指示と同じ。がっくりくる感じはあったが、こうなればほかに選択肢はない。早く陸にあがりたいんですけどね、と嘆いた船長は、またウクレレをかき鳴らしつつ、♫あ〜あ、やんなっちゃった、あ〜あ〜おどろいた、と節をつけて唱い、これ知ってます？　と問うのへ、知らないと答えた伊達邦彦氏は、本社の指示であれば責任を問われる心配はないと、まずはほっとすると同時に、この先いったい自分はどうなるんだろうと、不安の群雲が脳中垂れ込め、なんだか身の置き所がなくて、バーバラ・ウェルスを懲(こ)りず寝台(ベッド)に誘い、相撲を二番とってのち痙攣的性交に及んでいるところへ、船長から映話が入ったのが日本時間のp.m.9:15。

本社から新たな指示がきたのかと思えば、そうではなく、「メデューズ号」御中および伊達邦彦様宛の御届物があると、九龍国際配送サーヴィスから連絡が入ったとウクレレ船

CamScannerでスキャン

長は報告する。送り主はモリキテック本社。なんだろうと不審に思いつつ、服をひっかけ甲板へ出てみれば、楽しそうに餅をつく兎の、お馴染みのロゴを金色に光らせた大型輸送ヘリが滞空して、荷物を懸下(けんか)する作業がもうはじまっている。背中に同じ餅つきダンス兎のロゴを貼付けた強化服の係員が三人、甲板に降り、手早く仕事を進めていく。いかなる紛争地帯へも迅速確実に荷物を届けることで定評がある九龍国際配送サーヴィスは、この一〇年で急伸長した企業だ。

で、何を運んできたんだろうと思い、横に立った船長に訊けば、船宛の荷物は食料および飲料、それから燃料電池のための触媒一式(カタリストキット)だと教える。それは何かと問えば、「メデューズ号」の燃料電池の水素は海水から生成する仕組みで、そのための触媒であると、こんな初歩的なことも知らないの、と云った侮蔑の薄笑いとともに船長は教えた。ようするに補給だ。

それで伊達邦彦様個人宛の荷物は何かと云えば、人用収容器(ヒューマンポッド)が二つ。甲板に吊り下ろされた繭の蓋(ふた)を係員が開けて、出てきたのは、ともに和服を着た男。何が飛び出しても絶対に驚かないゾと、身構えていたお陰であまり驚かずにすんだが、新手のニンジャかと思うと、いやな気にはなった。ところが、どうも様子が違う。サムライかと思ったがそうでもない。一人は青い着物に銀色の袴をつけた短髪の男。もう一人は黄色っぽい着物の禿げた年寄りだ。若い短髪はその辺を散歩するみたいな懐手の格好で、禿の年寄りは和服に似合

わぬ黒い鞄を手から下げて、二人並んで草履をすたすた鳴らし、当然至極の顔で艦橋の出入口へ消えていく。

何だあれは？　唖然となっているところへ、電脳網で検索した船長が、落語家みたいですね、アンドロイドですが、と教える。落語家？　なんで落語家アンドロイドが船に来なければならぬのか？　演芸会でもやるのかねと、不可解に思っているところへ配送会社の人間が駆けてきて、受け取りにサインしてくれと云うので、アンドロイドはどこから運んできたのかと問えば、モリキテックの舞浜工場からだと云うから驚いた。あんな危ないところから？　と訊けば、はい、と簡明に応じる。高度に情報化された戦闘下では「流れ弾」に当たる心配は少ないとは云え、九龍国際配送サーヴィスは新たな伝説をまたひとつ付け加えたわけだと考えつつ、中空に浮かび出たリストをざっと眺めて「領収」をアイクリックすると、三人の係員はささっと整列し、わが九龍国際配送サーヴィスは迅速確実をモットーに努力して参ります所存ですので、今後ともおひきたてのほど、よろしくお願い申し上げますと、丁寧な挨拶を、英語、日本語、中国語で、それも翻訳ソフトを使わぬ生声でしたのち、輸送ヘリの牽引索に吊られ去った。伸びる企業はやはり違うものだ。

モリキテック本社から、日本列島沿岸二〇〇キロ米付近を低速で北上せよと指示がきたのはその直後。早速船長が船を走らせたところ、予想通りと云うべきか、日本の海上警察の警備艇が現れ、停船を命じてきた。まあ、それはそうだよね、なにしろこちらは監視

のロボット犬を破壊したあげく、命令を無視して移動しつつあるわけだし、いままで放っておかれたのが不思議なくらいだよねと、操舵室の伊達邦彦氏は青ざめつつも諦めて、弁護士に連絡をとって勾留に備えているところへ、南西の方角からヘリコプターが二機飛来した。胴体の「X」のロゴマークは、Xeus の大型武装ヘリだ。Xeus は世界数ヵ所に拠点を持つ傭兵会社、ヘリはマニラあたりの基地から飛んできたものだろうが、しかしどうしてXeus が、と訝っていると、Xeus の通信本部から日本警察の警備艇に向かって退去を要請するメッセージが発信されたからまた驚いた。

我々はメルクリウス社の委託を受けて、「メデューズ号」の護衛に従事するものである。ついては「メデューズ号」の公海上における自由な航行が阻害された場合には、しかるべき手段をとる用意がある。と、そう云う内容のメッセージで、これには警備艇も弱ったらしい。たしかにここは日本の領海外、しかも武装ヘリに加え、Xeus の潜水艦が急行しつつあるとなれば、日本警察としては悔しいけれど引き下がるしかない。国土防衛軍に加勢してもらうこともできなくはないが、相手はたかがクルーザー一隻、日本国政府が動く可能性はほぼない。なにしろメルクリウスと云えば世界的な巨大金融会社。そんなのと事を構えるのは得策じゃないと、文民統制を無視しがちな現場指揮官連中だって慎重に構えるのは当然だ。

貴社の責任については後に追及し、賠償を請求したいと、捨て台詞を残して警備艇は去

った。それを確認して武装ヘリも消えたが、去り際に、一機が荷物を「メデューズ号」の甲板に投下したのは、これも人用収容器だ。しかしこちらはずいぶんと汚れて、一部は破損している。船長の命を受けた船員が開けてみれば、なかにいたのは、池水霧子アンドロイドだ。警察ヘリの爆発ですっ飛んだものの、人用収容器には救難発信機がついているから、洋上に漂うのを武装ヘリが拾って届けてくれたらしい。『METEO』の人間がざっと確認したところでは、梱包材のお陰でアンドロイドに破損はない模様である。

Xeusが親切で落とし物を拾うわけがないから、これもメルクリウスの依頼なんだろうか。しかし、全体どうなっておるのか。そもそもどうしてメルクリウスが「メデューズ号」を護るのか。というならば、メルクリウスがモリキテックの親会社となったことを思えば自然だとも考えられるが、しかしどうも釈然としない。武装ヘリ一機に加え、潜水艦まで出たとなると、請求額は半端じゃないはず。メルクリウスがそんなにカネを使う理由がどこにあるのか。

いずれにせよ、日本警察は引き下がっても、ICSOが黙っちゃいないだろう。ICSOならXeusと一戦交えて、公海上でクルーザーの一隻や二隻、沈めるくらいは平ちゃらだ。と、そう考えたとき、XeusがしばしばICSOに雇われ、ICSOのほとんど私兵のごとくなっているのを思い出した。いそぎ電脳網で検索すれば、Xeusの大株主がメルクリウス、なのはいいとして、ICSOの主力メンバーがメルクリウスの元経営陣であるとの情報

が確認できた。となると、全体、どう云うことになるのか。ICSOは敵なのか、それとも味方なのか。もはや判然としない。

「メデューズ号」は再び日本列島の沖で航行を開始した。海上には濃い霧がたちこめ出し、操舵室から眺める海は幾重にもなった闇の幕に閉ざされる。横で船長が弾くウクレレの物悲しい響きを耳にしながら、操舵室に立った伊達邦彦氏は、混濁した情報の海に一筋の光路を見いだすべく、無明の海に眼を凝らした。

95

風が渡り、水面に漣（さざなみ）が立てば、紅葉する山森の影が揺れる。清爽（せいそう）な大気の下、永遠に晴れた空はどこまでも高く青く、大屏風（びょうぶ）のごとくに壁立する穂高連峰の山々を同じ蒼色に染めあげる。かそけき水音と鳥の囀（さえず）り。なかで郭公（かっこう）がひと際高く風景を貫くのを耳にすれば、ああ、帰ってきたんだなと、懐かしさ――とはやや違うが、では、なんと呼べばよいか分からぬ、不思議な感情が胸に溢れた。クレージー山荻の裁量下、どんなことになっているか知れたものではない、いきなり恐竜に頭から齧（かじ）られかねぬと、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の入口

を潜るときには戦々恐々だったのだけれど、いざ入ってみれば、さんざん作業をして馴染(なじ)んできた『大正池』そのままである。とは云え、いつ何時恐竜が吠えたり大蛇がのたくるとも限らぬと思えば油断はできぬ。

四阿(あずまや)から伸びた通路の先、多角舞台には、飴色のベヒシュタインの古雅な姿がたしかにある。葬式ではあれを弾くわけだ。まずは鍵(キー)がかかっているかどうかたしかめた方がいいと思い、板張りの通路を歩き出したところで、〈師匠、聞こえますか?〉と花琳(ファリン)の声がした。同期化(シンクロナイゼーション)がうまくいくかどうか、やや心配されていたが、なんとかなったらしい。まずは安堵しつつ、聞こえていると答えると、分身(アヴァタール)はどんな具合かと問うので、服装をたしかめれば例の黒ずくめ。池永霧子で変わらぬらしい。木板を鳴らして舞台まで歩いたフォギーは足音に類型臭(パターン)があることに気がついた。理由は分からぬが、『大正池』の疑似現実(ヴァーチャル)の質は低下している。郭公が妙に耳につくのもそのせいだろう。いかにも作り物めいた音響が情けない。

湖沼に張り出した舞台に立ち、ピアノの鍵盤蓋に手をかければ、やはり開かない。となると、鍵だが、これが難問だ。二〇〇一年迷宮(ラビリンス)社発行、江戸川乱歩訳『赤き死の仮面』。そこに鍵が隠されていることは、正気の山荻氏が大山アンドロイドに託したメッセージ、および『新宿 Pit Inn』で聞いた茅田アリスの言葉からしてほぼ間違いない。したがって解くべき問題は本の在処(ありか)。フォギーの追及に茅田アリスは「本のあるところ」と答えてい

だが、これではヒントにならぬ。

〈ドクター山荻の設定した「さよならツアー」でしたっけ、それをやりながら探すしかないですね〉と云ったのは花琳。葬式に際して、会葬者は架空墓ツアーをしたあと葬式に参列する。そう云う段取りが組まれていたことはまず間違いない。

〈正気だったときのドクター山荻が作ったプログラムが有効なら、必ず見つけられるようになっているはず。で、プログラムはまだ有効なんだと思います〉

だね、とフォギーは頷いて迅速に四阿へ戻った。前回は背後の林のなかに穴があって、そこがツアーの入口だった。で、四阿から降りようとしたところが、五段しかない板段は下っても下っても地面へ到達できぬ。これすなわち可動域の「境界」だ。さて、どうしたものかと困惑していると、手鞄を開けて携帯電話を出せと花琳が云うので、そうしようとしたところ、手鞄の留具は格好だけで開くようになっていない。

〈やっぱりね〉と花琳が納得するふうに云うので、何がやっぱりなのかと問えば、架空墓の質が低下している点をあらためて指摘した花琳は、クレージー山荻は架空墓の運営のために電脳のCPUを多くは割いていないのだと解説した。

〈最初は運命の女のために架空墓の充実を図ったんだけれど、彼女があんまり喜ばないと分かって、やめちゃったんじゃないかな〉

「運命の女って？」

〈師匠ですよ〉
「池永霧子でしょ？」
〈それは、そうだけど〉と花琳は答えて、やや間を置いたのち語を継いだ。〈まあ、でも、同じことですよ。クレージー山萩は電脳（コンピューター）の能力（パワー）を別方面に使うことにした。ＣＰＵの容量には限りがありますからね〉
運命の女（ファム・ファタール）は納得しかねるが、たしかに池永霧子アンドロイドをはじめ、夢のジャズ・オールスターズをクレージー山萩が作ったのは、自分が現実（リアル）のピアノにこだわったせいなのかもしれぬ。例の空気の振動だ。フォギーは思い返した。あれだけの性能のロボットを多数製作するには、気が遠くなるほどの計算容量（もちろんおカネも）が必要だったはずだと考えたところへ、またも花琳の声が届く。
〈架空墓（ヴァーチャルトゥーム）は規模の点でも質の点でも、クレージー山萩が介入する以前の状態に戻っていると見ていいと思います。だとすると目標へ到達するのは意外と楽かも〉と云った花琳が命令画面（コマンドスクリーン）を出せと云うので、そうすると、今度はちょっと待てと云われて待てば、まもなく画面中に「on limits」と表示のあるアイコンが出現した。さすがは天才工学少女、そんなアイコンがあること自体知らなかったフォギーが感心していると、視線（アイ）クリックしろと云われてすれば赤い輝線が現れて、これすなわち可動域の図示だ。いよいよ感心して眺めれば、輝線は四阿（あずまや）から通路と舞台を囲む形になって、他に四阿の板階段の左端に、幅

CamScannerでスキャン

三〇センチ米(メートル)ほどの路があって林へ続いている。先ほどは階段の中央を降りたので駄目だったわけだ。

輝線の案内(ガイド)に従って、四阿を下り、樹林を進み行けば、地下鉄の入口みたいな穴に導かれた。前回と佇まいは異なるが、四阿との位置関係や形状自体は変わらぬと思える。輝線に沿って石段を下ると、闇中で輝線の色が赤から緑に変わって、これはフォギーにも馴染(なじ)みの疑似空間(ヴァーチャルスペース)への導入だ。

「Entrance」と表示のある線画の扉が正面に現れた。迷わずそちらへ進んで、扉を抜けて入ったところは、新宿末廣亭だ。白熱電球の眩しい灯りのなか太鼓と三味線が鳴る。客が拍手する。舞台に噺家が登場する。鬱金(うこん)の着物に紋付の禿頭は、すでにおなじみ、古今亭志ん生に相違ない。

座布団の上でお辞儀をした志ん生は、「ええ、笑うということは、大変な楽だそうでございますな」といきなり話しはじめ、何とも云えぬ素っとぼけた味わいのグルーヴにフォギーは引き込まれかかったが、いまはゆっくり落語を聴いているときではない。可動域を示す赤い輝線は、二階客席後方から左手の階段へと伸びている。沿って下りて行けば、一階ロビーから新宿三丁目の街路へ出た。

街灯りが煌(きら)めく外は夜だ。前回訪れたときは、可動域が道路一杯にまで広がっていたが、いまは三〇センチ米(メートル)幅の筋に限定されている。街並も通行人も質感が著しく落ち

CamScannerでスキャン

て、露骨に書き割りと分かる箇所も多い。路はまもなく明治通りへ突き当たって、赤い輝線は舗道を左右へ伸びている。右へ進めばアートシアター新宿文化を右に見て靖国通りへぶつかる。左は新宿三丁目交差点だ。前照灯尾灯を不必要なまでに眩（まぶ）しく点し、不機嫌の毒をまき散らすかのごとくに警笛を鳴らし行き過ぎるガソリン自動車の四角い金属箱の群れを眺めつつ、どっちへ行けば？　とフォギーが呟（つぶや）くと、〈師匠の行きたい方へ行くのがいいんだと思います〉と花琳が確信ありげに云う。

「わたしの？　どうして？」

〈このツアーは師匠のために設計されていると思うんです。だから師匠が行きたい所へ行けば、自然とゴールに到達できるんじゃないかな〉

「でも、わたしのためにいろいろしてくれてるのは、クレージー山萩でしょう？」

狂ったＴＢＵソフトが自分を運命の女（ファム・ファタール）と見なしているのは分かった。しかし正気の山萩博士がそんなふうに考えていたとは思えないとフォギーが述べると、そうでもないと花琳は応じた。

〈ドクター山萩にとってこそ師匠は運命の女（ファム・ファタール）だったんだと思います〉

「だから、それは池永霧子でしょ」

〈そうだけど、結局は同じことです〉と云った花琳はやや慌（あわ）てたように語を加える。〈とにかくお葬式でピアノを弾いて欲しいと頼んだくらいだから、師匠がツアーの主客（メインゲスト）なの

は間違いないです。自信持っていきましょう！〉

自信を持てと云われてもなんだかよく分からん。が、新宿で行きたいところ、となれば、最初から答えは出ていた。Pit Inn に決まっている。Pit Inn は明治通りを渡った正面、伊勢丹裏の一画にあるはずだ。ところが明治通りを横切る可動域がない。そこでとりあえず左方向へ進んで、三丁目の伊勢丹の角の交差点で右に折れ、新宿通りを駅に向かって歩けば、紀伊國屋書店の前に出た。Pit Inn はこの裏あたり。紀伊國屋書店のビルディング一階には裏へ抜ける通路があった。が、可動域がない。二階へ上がるエスカレーターは動いて、「人々」の出入りはあるものの、これは3D映像。赤い輝線は新宿通りの舗道に沿って伸びるのみで、脇路へ入る可動域のないまま二幸の前で行き止まりになってしまう。

「変だな」フォギーが呟くと、何が？　と花琳が訊いてくる。

「てっきり紀伊國屋にあると思ったんだけどな」

〈『赤き死の仮面』ですか？〉

「そう。だって本のあるところといったら、本屋さんでしょう？」と云ってみて、そうだ、きっとそうに違いないしと、憶測がいきなり確信にまで結晶したのは、一時期新宿の紀伊國屋には毎日のように通っていたとの昔話を山萩氏から聞いたのを思い出したからだ。

迷宮社の『赤き死の仮面』を出版したときには、紀伊國屋でイベントをやったとも聞い

た。以上は書店ビルを見ての思いつきだったわけだけれど、最初から考えていたかのごとくに申告したのは、ちょっとした見栄。頷くと、花琳は感心するかと思いきや、〈本屋って、ここが？〉と訊いてきたからガクッとなった。

「そう」

〈ここで紙の本を売ってるんですか？〉

「そう」とまた応えたフォギーが、新宿の紀伊國屋は世界でも有数の大店舗だったはずだと説明すると、

〈紙の本をどうやって売っていたのかな。もしかして、このビルディングに紙の本を並べて売っているとか？〉と吃驚したように花琳が訊いてきたのは、いくら紙本を知らぬ世代とは云え（フォギーだって知らないが）、非常識すぎるだろう。しかしまあ考えれば、花琳はまだ二〇歳、歴史を知らないのも仕方があるまいな。まして理系であるしな、などとフォギーが観察しているとも知らず花琳は、〈そうか、この時代はデータを全部パルプ紙にリアル印刷してたんですよね。だとしたらお店が大きいのも当然か。大変だなあ。でも、いくら大きくても、お店に置ける量は限られちゃいますよね。どうやって置くデータを選んだのかな〉などとあれこれ感心している。

とにかくなかなか入れぬのでは仕様がない。同じ路を引き返して、今度は明治通りから靖国通りへ出れば、可動域は舗道を駅方向に続いて、と、こちらは伊勢丹会館手前で左へ入

れるようになっている。そこを進んで、輝線の案内に従って右に折れれば、さほど背丈のないビルディングの谷間に見覚えのある駐車場があって、その向こうに「MODERN JAZZ PIT INN」のビニール看板が見えた。可動域は店の前までしっかり続いて、ラーメン屋の屋台を横目に、左右に観葉植物の鉢が据えられた板扉に立てば、「本日の出演」の紙が壁に貼ってある。山下洋輔（Piano）、森山威男（Drums）、坂田明（Alt sax）は、初期の山下洋輔トリオだ。

　扉を押し開くと、いきなり平土間の舞台と客席を見下ろす小空間になった。可動域はそこ限定。前回茅田アリスに誘われて来たときのように、下へ降りるのはもちろん、ましてピアノを弾くなどはできない。そもそも道路から入ったらいきなり二階、と云うのはいささか現実感を欠くが、使える電脳のCPU容量ではやむを得ないんだろう。現実のPit Innには存在しなかった場所から演奏を鑑賞するのは、そもそもの架空墓の形でもある。と、舞台では演奏がちょうどはじまったところ、と云うか、フォギーが来たんではじまったんだろう。

　スネアドラムのロールではじまる短いイントロから、アルトサックスとピアノのユニゾンの主題、これがあっと云う間に過ぎ行けば、いきなりインプロヴィゼーションに突入する。まさに疾風怒濤。いやあ、カッコいい。ドラムスの作り出す山あり谷ありの険路を、サックスとピアノの二匹の蛇が絡まり合い噛み付き合いしながら、もの凄い速度でのたう

ち進む演奏は、これぞフリーの古典なりと、堂々宣言するかのごとし。いかにもフリージャズな演奏と云うものは陳腐になりがちだが、そこは山下洋輔トリオ、陳腐くらいは平然と丸呑みして、貪婪(どんらん)な胃袋で栄養に変えてしまうから頼もしい。三者激突の熱演は、遠慮なしの真っ向勝負、じつに晴れがましくも清々しい。なんと云う曲かと思い、いつもの癖で命令画面(コマンドスクリーン)で検索しようとしたが、いまはなぜか使えない状態になっている。すると、これは「キアズマ」と云う曲だと思うと、花琳が教えたから仰天した。

〈これは一九七〇年代のフリースタイルですね〉と花琳が云うので、いよいよ瞠目(どうもく)していると、エリック・ドルフィーの担当になってモダンジャズにつき集中的に勉強したのだと応じた花琳が、〈架空墓(ヴァーチャルトゥーム)は一九六〇年代新宿の設定だから、ちょっとおかしくないですか？　アルトサックスの坂田明は第二期のメンバーで、一九七二年からの参加のはずです〉と加えたから舌を巻いた。さすがに齢(よわい)一一にしてオックスフォードに入っただけはある。おそるべき学習能力だ。

〈もっと聴いていたいけど、急ぎましょう〉と花琳が云うのへ、「急ぐって、どこへ？」とフォギーは問うたが、小空間の、入ってきたのとは反対側にも扉があることに気づいてはいた。進むとすればそこしかない。で、扉を抜けて、足を踏み入れれば、再び天地別なき暗黒空間。疑似現実環境(ヴァーチャルスペース)に特有の、奥行きを欠いた空間には、緑の描線の扉が円をなして並び、ひとつふたつと数えれば一六ある。扉には表示があるのとないのがあって、ある

CamScannerでスキャン

のには「花園神社」「風月堂」「アートシアター新宿文化」「新宿末廣亭」などと書かれている。出て来た扉はもちろん「新宿 Pit Inn」。なかには「上高地大正池」と云うのもあって、ここはつまり架空墓（ヴァーチャルトゥーム）のターミナル駅のような場所らしい。「新宿」内の施設同士くらいは「街路」で繋ぐ予定だったんだろうが、いまは「末廣亭」と「Pit Inn」だけが繋がっているらしい。名前のない扉は建設中と云うことか。

で、どの扉を開けるか。迷う必要はなかった。なぜなら扉のなかに「新宿紀伊國屋書店」があったからだ。扉を抜けると、いきなり書店のなか。蛍光灯の青白い光に照らされ、紙の本のぎゅうぎゅうに詰まった棚が列をなして並ぶ。出入口の表示からしてビルディングの二階らしい。人は多数いるが、どれも映像なのは、これまたCPUの容量ゆえなんだろう。

〈本って、こんなふうに売ってたんですね。博物館（ミュージアム）みたいだな〉と花琳が感想を述べる。

〈でも、どうしたのかな？〉

「何が？」

〈紙の本って重いし嵩張（かさば）るでしょう？〉

「たしかにね」フォギーはすぐ横の棚に並んだ『平凡社　世界大百科事典』の背表紙を眺めながら応じた。

〈こんなの持って帰れないでしょう。買ったのは配達してくれたんですかね〉

「そうね。たぶんそう」と応じたフォギーも、当時の書籍販売の実態については、いまひとつ知識に自信がない。

〈でも、配達されても困らないかな。こんなの普通の家じゃ置く所がなくないですか？〉

たしかにそうだ。『平凡社　世界大百科事典』はざっと数えて三〇巻はある。こんなのが家に積んであったら、息苦しくて仕方ないだろう。

〈だいいち家にあっても重たくて取り出せないですよ。頁を捲るだけで腱鞘炎になっちゃいます。それとも読むときは強化服を使ったのかな〉

「かもね」といい加減に返答したフォギーは、じゃ、行きましょうと宣い、生活文化史上の議論を打ち切って歩き出した。これだけ大量の本のなかから目当てのものを探すのは難しいかに思われたが、可動域が限られているので、逆に簡単だ。事実二階にはほとんど可動域がなく、赤い輝線が階段ホールへ伸びているので、素直に沿って行けば、出たところは四階。他の階と違ってここは可動域が床にまで伸びている。画集や美術書の収められた棚のあいだを輝線の案内に従って進めば、狭い通路を挟んだ正面に硝子戸の嵌った書棚がある。稀覯本を仕舞う棚らしい。

と、あった！　棚の中段に、Edgar Allan Poe の著作らしい、古めかしい金文字の洋書と並んで、銀鼠色の函に入った江戸川乱歩訳『赤き死の仮面』が置かれている。

「あったね」〈ありましたね〉「あったのね」〈ありました〉と確認し合って、ところが可

動域は通路の手前で終わって、いくら手を伸ばしても棚まで届かない。
「どういうこと？」フォギーが困惑するのへ、〈他に可動域がないか探してみましょう〉と花琳は応じたが、赤い輝線を見る限り、いまいる場所以外に硝子棚に近づける可動域はない。ためしに一度通路を戻って別方向へ進んでみたが、赤い輝線の外へは当然ながら出られない。仕方なくもとの位置へ戻って虚しく手を伸ばしていると、通路を右から歩いてきた人が、どうかしたの？　と声をかけてきた。細身のダブルの上着にネクタイを締めた青年だ。顔を見て、フォギーが、芯城くん？　と声をあげたのは、青年が「横尾忠則」――前回『新宿』へ来たとき芯城が使っていた分身(アヴァター)だったからだ。しかし今回は分身(アヴァター)ではないようで、耳にかぶさるくらいまで髪を伸ばした痩身の青年は、不思議そうな顔になって、自分はシンジョウではないと応える。本を取ってもらうよう頼めと花琳が云うので、ちょっと本を取ってもらえませんか？　と頼んでみると、どの本？　と訊くから、そこの『赤き死の仮面』だと指差すと、この棚は鍵がかかっているから、社長から鍵を借りてきてあげようと、横尾忠則青年は親切に云って、手にしていた本をフォギーに手渡すと、どこかへ行ってしまう。
渡されたのは黒を基調にした絵柄に「YOKOO」の字が表紙にある大型本だ。画集らしい。何気なく頁を開くと、たちまち世界が回転する体感が生じて、あっと思ったときには、美術館の展示室に立っている。淡いベージュの壁に絵が並んでいるのは、いわゆる

架空美術館（ヴァーチャル・ギャラリー）、画集の絵が展示の形で体感鑑賞できる仕掛けだ。正面に掛かっているのは、墓地の傍に犬のいる三叉路の絵で、「暗夜光路　赤い闇から」と表題がある。ほほう、なかなか面白いなと思ったが、いまはゆっくり美術鑑賞をしている場合ではない。命令画面（コマンドスクリーン）を出してもとへ戻れば、画家本人が、すなわち横尾忠則青年が目の前に立っている。

「その辺りの棚にある画集はね」と云って横尾忠則青年がフォギーの立つ通路左右の棚を指差した。

「どれも架空美術館になっているんです。古典作品も一通りは揃っているけれど、二十世紀ポップアートに関しては世界一のコレクションだから、ゆっくり見て欲しいですね」

「ええ」とフォギーが頷くと、「万引きしてもかまいませんよ」と横尾忠則青年ははにかんだような笑みを浮かべる。「万引きですか？」と復唱したフォギーは、相手の様子を窺いつつ、「では、本をお願いします」と思い切って依頼すると、横尾忠則青年は頷いて硝子戸の鍵をあける。そうしながらまた云う。

「アートシアター新宿文化でも二十世紀映画の代表作はほとんど観られる。これも世界一だと思います。Pit Inn や末廣亭はまだまだですが、今後どんどん充実して行く予定です。もちろん他にもいろいろある。いつでも僕がご案内（ガイド）します」

どうやら彼が『新宿』の案内係と云うことらしい。今度ぜひお願いしたいとフォギーが

お世辞を云うと、

「葬式が終わったら、ゆっくり遊びにくるといい」と云いながら、棚から出した『赤き死の仮面』を渡してくれる。あ、どうもと、挨拶もそこそこに函から本を取り出し、頁を開いたとたん、世界がぐるり回転した。

96

立ったところは城の中庭だ。フォギーはお城大好き人間、しかし城と云ってもこれはフォギーの好きな姫路城や熊本城ではない。松本城でも彦根城でもない。弓用狭間(アロースリット)の点々と付いた石組みの円柱や角柱が佇立するなか、それらを暗灰色の石の城壁が縦横に結んで迷路をなすのは西洋の城らしい。林立する石塔石柱の連なりからひときわ抜きん出た尖塔の先で、黒地に鉤十字を紅く染め抜いた旗が疾(はや)い雲の飛び行く空に翩翻(へんぽん)として、曇天に威を張るがごとき鼠色の石塊、その上空を、後背地に広がる黒い森から飛来した鴉(からす)が旋回する。

フォギーが立つのは空堀にかかった石橋の上。苔生した迫持橋(アーチ)の一方の端は楡の樹に囲

まれた鐘塔、反対側は尖塔の角を生やした矩形の建物で、藁色の土壁をのっぺり晒すこれが居館であるらしい。橋に繋がる口には鉄鋲の打たれた厳めしい扉があって、近づく者を峻拒している。

「どこなのかな?」フォギーが云うと、

〈プロスペローの城ですよ〉と花琳が即答する。

「何の城?」

〈だからプロスペロー。『赤き死の仮面』に出てくる王様です。本を開いて現れた疑似現実環境なんだから、それで間違いないでしょ〉

なるほど。要は先刻の架空美術館と同じ仕掛けだ。

「お城か。で、どうするの?」

〈お城の奥の部屋に行くんじゃないかな〉

「行ってどうするの?」

〈行けば自然と鍵が見つかるようになっていると思うんだけど〉と云った花琳は、ここはポーの小説を再現した世界で、ドクター山萩が会葬者のために用意したアトラクションに違いなしと推測を述べた。

〈お葬式に来た人は仮装舞踏会に参加するんだと思います〉

「『赤き死の仮面』って、そういう話なんだ」

〈読んでないんですか？〉フォギーの台詞に花琳は呆れたような声を出した。
「読んでない」
まるで悪びれるところのないフォギーの返答に花琳は一瞬間絶句したようだったが、赤死病なる疫病が猖獗をきわめるなか、プロスペロー王は外界との接触を断ち、廷臣や貴族とともに数寄を凝らした城に籠って夜な夜な享楽の宴を開いていたところへ、死装束に身を包んだ赤死病が侵入してきて一人残らず死滅する話だと、簡明に解説してくれた。
「ほほう。なんかクールな話だな。でも、おかしくない？」
〈何がです？〉
「赤死病が死装束に身を包むって、どう云うこと？」
〈そこですか？　そう云うのはいいんです〉
「いいって、どうして？」
〈だから小説だからいいんです。あとで自分で読んでください〉と突き放した花琳が、とにかく居館へ進めと云うので、石橋を入口へ近づけば、鉄扉がギギギイともののしい音をたてて開く。この音響はちょっとやり過ぎだよねと批評しつつ、なかへ入れば回廊になって、真っすぐ進んだ左手に青銅の扉、奥から賑やかな音楽が漏れてくるのは、ここが仮装舞踏会の会場なんだろう。それが証拠に、脇に小机があって、様々な意匠の仮面が並べてある。どれかを着けろと云うことらしい。フォギーはやや迷ってから、孔雀の羽とれ

色の宝石が鏤められた金糸織りの蝶仮面を取った。

〈そんな派手なの選ぶかなあ〉花琳は批判したが、中華服にキティちゃんのお面を被る人に云われたくはない。仮面をつけたフォギーが火を吹く竜と葡萄の象嵌のある青銅扉の前に立つと、左右にすいと開いて、と、なかは天井の高い大広間である。

〈青の部屋ですね〉

花琳が云うとおり、薄暗い部屋の床も壁も綴織物もすべて青色で統一されている。天井にもどこにも燭台電灯の類はなく、不安定な光が青い着色絵硝子越しに差し込むのは、窓の外に置かれた篝火らしい。人は多数いて、男性は燕尾服、女性はロングドレス、揃って仮面をつけた格好で葡萄酒の杯を傾け、珍味佳肴を皿にとりつつ会話に興じ、あるいは床で踊る男女を眺めている。

〈ちょっと時代が変じゃないかな〉と花琳が感想を述べたのは、舞台設定は中世風なのに、客の服装や佇まいが近代的だからだろう。何よりおかしいのは音楽。こう云うところのダンス音楽と云ったら、円舞曲と相場は決まっていると思うのだけれど、隣室の方から聴こえてくるのは、グレン・ミラーの「ムーンライト・セレナーデ」だ。

〈どうせなら風俗を合致すればいいのに〉

「あれじゃない、シェイクスピアの芝居やワーグナーの歌劇を現代風にアレンジして演出するのがあるじゃない。あれと同じじゃない？　リヤ王がマフィアの親分だったりするや

つ」
　フォギーの言葉に同意しつつ、〈でも、王様だけは、だいぶ昔風ですね〉と花琳が云ったのは、入って右手の、祭壇ふうになったところへフォギーが眼を向けたからだ。高いひな壇に、派手な長靴下（ハイソックス）に襞襟（ひだえり）のついた衣装を着けて金碧（きんぺき）の剣を腰に吊った男やら、裏地に鮮やかな緋の入った僧衣の男やらが居並んで、天辺には煌（きら）びやかな宝石を鏤（ちりば）めた黄金の玉座、そこに座を占めた黒艶のある鋼の甲冑をつけた魁偉（かいい）なる武将が王様なんだろうが、この一画だけが西洋バロック風と云うか、やけにものものしく古色を醸（かも）しているのが変だ。
　しかしいまはじっくり観察している場合ではないので、人をよけつつずんずん奥へ進んで、すると左へ折れ曲がる形になった隣の部屋は何もかもが紫色で統一されている。濃度やニュアンスの異なる紫が塩梅（あんばい）された装飾は眼に美しく優雅だ。紫好きのフォギーが高評価を与えたのに対して、花琳は下品きわまりなしと、正反対の批評を加え、しかし三番目の緑色の部屋に入ったときには評価が逆転、Wow！と定型的な嘆声を漏らした花琳は、なんて気持ちがいいのと感心し、一方のフォギーはトノサマバッタを口中に押し込まれたような心地がして、忌憚（きたん）なくそう云うと、花琳は信じられないと慨嘆しつつ、師匠は耳はいいのだろうが、こと色彩感覚についてはどうしようもないと、会ったときからじつは思っていたのだと、こちらもまた遠慮のない感想を述べた。
　ジャグリングをする道化師（ピエロ）や、布張りの小机でカードマジックを披露する山高帽の手品

師の周りには人垣ができて、時間があればそれなりに楽しめるんだろうが、とりあえず先を急げば、次の部屋は橙だ。青と紫に較べて暖かく南国風の印象となる。部屋々々は仕切りなく一続きではあるけれど、部屋ごとに折れ曲がる形になっているので、一遍には見通せない。だからこそ意表をつく色彩の出現が面白いわけだ。「ムーンライト・セレナーデ」を奏する楽団はここにいた。壁際の演奏者区画に収まった揃いの上衣の楽団は、ビッグバンドを基本にしつつ弦楽器群を加えた編成。ちょっと観察して、演奏者が床をうろつく人々同様、3D映像だと見て取ったフォギーは迅速に先へ進んで、と、今度は真っ白な部屋だ。

うわわっと、フォギーと花琳が同時に声をあげたのは、白色の燦爛たる輝きが眼に飛び込んできたから。どうやらこの部屋だけ、壁床天井が発光する仕掛けになっているらしく、そのせいか、晴天の朝に新雪のゲレンデに立ったような鮮烈さだ。

「これって、あれね、ほら、国境のトンネルを出て、って云う、あの感じね」と云うフォギーの感想を花琳は理解できず、なんです？　と訊き返せば、だから、あれよ、あれ、ノーベル賞を取ったやつで、などと云うのみではさすがの花琳にも分からぬ様子だったが、つまりフォギーは突然の銀世界の出現に川端康成『雪国』冒頭を連想し、それを云いたかったわけです。が、作者の名前も小説の題名も思い出せず、いつもの癖で検索をかけようとしたところが使えぬので、諦めて、「だから、あれね、とてもきれいよね」と平凡な感

CamScannerでスキャン

想を述べるに結局はとどまった。きれいなのは、しかしたしかで、女性たちの着たドレスの緋色や蒼色が白雪に映えて、この世ならぬ鮮明さで眼に飛び込んでくる。

ずっと見ていたいな、とフォギーに思わしめたのは、架空墓ツアーのアトラクションとしてはまずは成功だろう。未練を残しつつ次へ進めば、再び紫だ。

「また紫ね」とフォギーが念を押すと、

〈違います〉と花琳が強く否定する。〈これは菫色。さっきのはPurpleで、こっちはVioletです〉

「でも、おんなじじゃない」

〈全然違います〉

「そうかな。でも、同じ仲間でしょ」となおもフォギーが疑義を呈すれば、

〈違います〉と花琳は譲る様子がない。こう云う定義的なことになると花琳はやたら頑固だ。

「そもそもPurpleとVioletはどこが違うの?」とフォギーが問いを発し、それはですね、と花琳が応じる構えを見せて、講義がはじまりかけた色彩分類問題は、しかしここで立ち消えとならざるをえなかった。なぜなら、そのとき一人の男性が、フォギーさん、と背後から声をかけてきたからだ。はっとなって振り向くと、燕尾服の男が虹色のアイマスクを外して挨拶した。

「わたしです、フォギーさん、山荻です」

97

日本時間p.m.10:30。「メデューズ号」は依然日本列島沖を毎時一二ノットの低速で北上していた。この時刻、東京湾の戦闘は終了して、モリキテック舞浜工場は国土防衛軍と日本警察の手で機能を停止させられていた。警察官に死者数名、怪我人多数。舞浜工場の人間に死者はなく、怪我人が若干名。工場内にいた人員が、警察の警告を無視して、戦闘の最中も「上」からの指示に従い作業を続けたのは、非常識のようだが、指示を無視すると解雇の懼れがあるからやむを得ない。いまどきは少々身に危険が及んでも大企業にしがみつくのは当然、刑事罰より解雇が怖い。その点について驚く者は誰もいなかった。

かくて東京湾は一段落ついたわけだが、各地で連鎖する紛争の模様を伝える電脳網情報は、混乱の坩堝となった地球の姿を、時を追うごとに明らかにしつつあった。なかでも伊達邦彦氏の眼をひいたのは――と云うか、どれをとっても空前絶後の形容詞がふさわしい、普段なら眼が丸くなるに十分な衝撃度を有するので、だからつまり、いま自分が置か

れた状況にとって重大と思われたのは、モリキテック社のケープタウン研究所で、Xeus と Silver Falcon が衝突した件だ。

Silver Falcon はダカールに本拠を持つ Xeus と似たような傭兵会社。軍事会社同士が衝突することは過去にもあったが、今回の事件が驚きなのは、雇い主が双方ともに ICSO だったからだ。これぞまさしく前代未聞、どうやら ICSO 内部も混乱をきたし、一種の分裂状態にあると推察された。ICSO の動揺。とすれば、これすなわちデントランド体制崩壊の兆しだ。実際「大感染（パンデミック）」が本格的に来たれば、どんな体制だろうが瓦解して不思議はない。国家と違い伝統のない ICSO のごとき組織は、一度罅（ひび）が入り出せば、潰裂（かいれつ）するのは案外早いのかもしれぬ。

運ばれてきた落語家アンドロイドは、モニターで確認したところ、船倉にある箱形の維持収容装置（ヨリコンテナ）に池永霧子アンドロイドと仲良く繋がって大人しくしていた。あれらを〈Met02〉が船に運ばせた理由は分からぬが、舞浜工場に置いてあると警察に押収される懼れがある。それを嫌ったと、いちおうは考えられたが、しかしなんで落語家なのかと考えると、わけが分からず、しかしもともと機械のすることだと思えば、忖度（そんたく）しても仕方がなかった。伊達邦彦氏はいったん船室に戻って、スコッチウイスキーで脳を活性化しつつ、電脳網（ネット）や調査会社を駆使して状況の把握にあいつとめる。

一番肝要な問題は〈Met02〉の末路。ケープタウン研究所の電脳（コンピューター）も舞浜工場のそれも

停止され、であれば〈Mel02〉は「死んだ」と見るべきで、ところがいまだ活動を継続する様子があるのはどうしたことか。電脳網（ネット）の片隅で細々生き延びているにしては動きが活発なのがおかしく、あれこれ調べているうちに、〈Mel02〉がデントランドのメルクリウス本社の汎用電脳（コンピューター）に「棲みついた」事実に行きあたって魂消（たまげ）た。

ひょっとして〈Mel02〉がメルクリウスに影響力を行使している、いや、さらに進んで支配しているのではあるまいかと、そのような発想——と云うか、妄想がふと頭を過れば、魂消（たまげ）るどころの話ではなく、まさかね、と笑って否定はしながら、わあわあ喚（わめ）き散らして悍馬（かんば）のごとく走り回り出したいような衝撃を覚えた。そんなはずはない——いや、メルクリウス社は世界最高の電脳組織（サイバーシステム）と電脳網（ネット）を備えて、国際金融取引や破産国家への差し押えから、社屋の清掃ロボットの選択に至るまで、あらゆる経営判断を機械に任せているとの噂を聞いたことがある。もちろんこれはどんな企業でも多かれ少なかれやっていることで、しかしメルクリウスの徹底ぶりは群を抜き、誇張ではあろうが、最高経営責任者（CEO）と雖（いえど）も電脳（コンピューター）の判断を覆すのは難しいとも聞いた。メルクリウスの頭脳中枢に「人格」を有する〈Mel02〉が密かに居座ったとしたら——。

そんなはずはなかった。絶対にありえない！　だが、この仮説が秩序を欠いて渦を巻く情報の濁流に一筋の理路を描き出すのもたしかだった。メルクリウスがXeusを使って「メデューズ号」を護ったことも、メルクリウスの影響下にあるICSO内部に混乱がもた

CamScannerでスキャン

らされたことも、いちおう説明はできる。それだけではない。いま起こりつつある事柄の多くが、散乱する出来事の一つ一つが、しかるべき位置を得て一個の絵柄をなすように思える。もしかりにそうだとしたら、〈Me102〉の「仲間」である自分にとっては、想像もつかぬほどの利得——いや、さような陳腐な言葉では到底収まり切らぬほどの機会をもたらす可能性がある！　本来ならば絶対に手の届かぬ権力地位を掴み取る機会。欲望の燃料に火がついた。なにしろ伊達邦彦氏の引火性欲望燃料は備蓄が十分、こうなるともう爆発的に燃え上がる、かと思いきや、案外とそうでもなかったのは、いまや心の土壌に不安の凍土がぶあつく堆積しているせいだ。欲望は土中深くにあって燃え上がらない。

　とにかく安全だ。栄達でも権力でも財産でもない、なにより求めねばならぬのは安全だ。足下から立ち上る不安の冷気を満身に浴びた伊達邦彦氏は考える。いまは危険を冒して攻めるときではない。いまは我慢のとき。防御に徹すべきときだ。森林を彷徨う獣の本能と嗅覚を目一杯に働かせて、伊達邦彦氏はなおも思案する。安全。絶対の安全。一分の隙もない保身。欲望の火に身を焦がすのは、それが完璧に確保されたあとからでも遅くはない。と云うより、危険に身を晒し滅んでしまっては元も子もない。

　さように考えたとき、自分が現在洋上にあることが、何にも代え難い幸運だと思えてくる。「海にいる方が安全ですよ」——爽やかセーター姿の山萩青年の口にした言葉が、すなわち〈Me102〉の言葉が、いよいよ胸中で質量を増し加えるのを覚えた伊達邦彦氏は、

CamScannerでスキャン

侵襲式端末に流れ込む膨大な情報のなかに一筋の声を聴き出そうとしている自分に気づいていた。

彼が耳を澄まし聴きとろうとしているのは、すなわち、「大感染（パンデミック）」発生の報知（ニュース）。ただし電脳のではなく、生体の。

山萩博士の脳の写し（コピー）である〈Met02〉が生体ウイルスを開発していることを、伊達邦彦氏はもはや否定できなくなっていた。不安の凍土の正体はこれだ。新たな致死性ウイルスが発生いたしました——その声が情報の海に流れ出、タンパク質の死神が地上へ躍り出る様子が、既成事実であるかのごとくに心の３Ｄ画面に映し出された。もしそうなれば、海にいる自分はとりあえずは安全だ。むろんそれは絶対ではないし、そもそも永遠に船で暮らすわけにもいかぬ。が、ペストをはじめ過去のウイルス禍の経緯を眺めれば、一定範囲に広がって一定数の宿主を殺した後、ウイルスの毒性は弱まることが予測できる。完全防疫システムを備えた医療研究機関が抗ウイルス剤を開発することにも期待できる。とすると、いまの時点で十分な燃料と食料を積んだ船に乗っている自分は、人類中きわめて幸運な少数者の一人でありうるだろう。まさに方舟に乗ったノアだ。世紀末の神が選び出す新たな民！

舷窓から見る海は闇に閉ざされ、一毛の光とて見えない。濃霧が海上を覆いはじめていた。そばに人がいるのが鬱陶（うっとう）しくて、麝香（じゃこう）の火炎を吐きながら愛人契約をしきりに持ちか

CamScannerでスキャン

けるバーバラ・ウェルスは部屋から叩き出していた。寝台（ベッド）に寝転がり、スコッチウイスキーを瓶から飲みつつ、伊達邦彦氏は大半の人間が死に絶えた地上にあって、かろうじて生き長らえた幸福を噛み締める自分を、僅かに残った人間たちの頭上に君臨する自分を、世界を支配する自分を、微睡（まどろ）みのなかで繰り返し夢想した。

おれは、やっぱり、天才だったのだ！　伊達邦彦氏が酒臭い息もろとも叫んだのは、短い眠りから覚めて、食器棚（サイドボード）から出した新しいスコッチの封を切ったそのときだ。紛擾混雑（ふんじょうこんざつ）をきわめる電子情報のなかにとうとうその声が流れたのだ。

生体ウイルスの発生。ついにきた！　くるべきものがきた。恐怖とも歓喜ともつかぬ感情の沸騰のなかで、おれの読みは正しい、いや、おれの読みだけが正しいのだ、なぜなら天才だからだと、桃色の歯から息を漏らしつつ、念を押すように呟いた伊達邦彦氏は、いまはまだ微かな囁きにすぎぬその声に全身全霊で集中した。

98

エドガー・アラン・ポーの『赤き死の仮面』には、青紫緑橙白菫黒、七つの部屋が順番

に登場する。六番目の菫色の部屋、ここに至ってふいに出現した山萩を名乗る人物。彼に対面したフォギーの心裏に生起した事象にはなかなかどうして単純ならざるものがあった。

まずはその人が、自ら名乗るごとく、山萩貴矢氏であることをフォギーは認めた。とはつまり、かりに名乗りがなくとも、外観だけで山萩博士だと分かっただろうと云う意味だ。が、これはちょっと妙で、と云うのも、その人はフォギーの知る山萩氏とは全然容子が違っていたからだ。なにより年齢が違う。顔だちといい躯つきといい、目の前の人物は青年と呼んでよい外貌の持ち主で、なによりその放つ生気と云うか波動と云うか、深々と伝わる存在感が馥郁たる青春の香気に満ち満ち、顔の造り自体もフォギーの知る山萩氏とはだいぶ異なる。にもかかわらず、それが間違いなく山萩氏だと認識されるのが不思議であった。

だが、それよりなにより、このときのフォギーが心臓に一撃を蒙ったのは、当の男性が彼女の理想を体現していたからに他ならぬ。この場合の理想とは、恋愛対象、性愛対象としての理想の意味で、かく述べると、フォギーが平生から理想の男性像を心に描き暮らしているかのような印象を与えるかもしれぬが、そうではない。フォギーとていい歳の女、ましてやバンド者、理想の男性像などと云うものが一銭の得にもならぬことくらいは弁えている。だから眼前に出現した男性が普段心に抱ける理想に合致した、と云うので

はこの場合なくて、その人を見て、ああ、これこそ我が理想であったのだ、我が心に抱ける恋人の理念であったのだ、との認識が深層より忽然浮かびあがって、躯のなかでキンコンカンコン高らかに鐘が鳴ったのだ。

体軀は中肉中背、いくぶん茶色がかった髪は長からず短からず、顔の彫りは深からず浅からず、目鼻口耳ともに大きからず小さからず、眉は濃からず薄からず——と、こう並べると、中庸の感じが濃厚だが、その中庸自体が光り輝くとでも云ったらよいか。ちょっぴり皮肉で、老成していながら、どこか少年ぽくもある表情のなかで、眼だけが敏活に運動して、全体は柔軟なユーモアの霞に包み込まれている、といくら言葉を重ねても、フォギーの心を摑んだ魔術的魅力を説明し尽くすのは難しいわけだけれど、いずれにせよ一遍に魂を拉し去られたのだけは間違いない。しかも驚異なのは、繰り返しになりますが、顔立ちも背格好も年齢も全然異なるのに、これは山萩貴矢氏その人であると、紛う方なく認識される事実で、ああ、山萩氏はこんなに素敵な男性だったのかと、嘆息混じりにフォギーは考えたことでした。

「あちらに座りませんか？」

山萩氏はフォギーの手をとって壁際の卓へ導く。その仕草は自然で嫌味がない。〈3Dじゃないですね〉と花琳が云ったのは握られた手に相手の手の感触が生じたから。山萩氏の掌は冷たからず熱からず、湿らず乾かず、握力は強からず弱からず、掌の皮膚から信頼

感が滲み出してくるかのように思えるのが不思議だ。手をひかれるままフォギーが歩き出すと、〈無視したほうがいいかもです〉と花琳が注意してきたが、相手の物腰が洗練されているだけに無理にふりほどくのはちょっとしにくい。フォギーが勧められた卓前の椅子に腰を下ろすと、山荻氏はすぐ隣の席に着いて、その間も手を離さぬまま、さらには両方の掌でしっとり手を包み込んでくる。すると遠くから届く楽団の曲が変わって、この耳に馴染んだ情感溢れるバラードはなんだと云えば、あれだ、「My Foolish Heart」だ。しかも今度は歌入り、聴こえてくる甘い歌声は、トニー・ベネットで間違いない。

「フォギーさん、わたしと一緒にここにずっと居て欲しい。永遠に傍にいて欲しい。だから素直にTBUを受けて欲しい」

いくぶん茶味がかった瞳で真正面から見詰められつつ、こう廉直(れんちょく)に請われては、フォギーはほとんどうんと頷きそうになる。♫Beware, my foolish heart〈気をつけて、我が愚かなる心〉とトニー・ベネットがそのとき警告したが、目の前の男性の魅力はフォギーの魂を鷲掴みにしてしまい、到底抗(あらが)える気がしない。〈Take care! これは心理や行動パターンを分析して作り出された像(イメージ)にすぎません。中身は空っぽです〉と花琳が注意してくれなかったら、とっくに参っていたところだ。いや、花琳の警告があってなお、像(イメージ)の吸引力はものすごくて、TBUくらいべつに受けてもいいんじゃないのかな、とそう考えれば、「池水霧子」機械分身の抜群の性能が思い出されて、あんなふうに現実(リアル)のピアノが

弾けるなら仮想現実空間に住むのも悪くないと思えてくる。

「そうでしょう。ここは永遠の楽園です」フォギーの脳信号から同意の心情を読み取ったらしい山荻氏が云った。「フォギーさん、わたしは貴女を愛しています。わたしとここで暮らしてください」

これは誰がどう見てもプロポーズであった。古典的とも云うべきプロポーズの言葉であった。そうして、ファンと称するストーカー男からのものを除けば、フォギーが得たはじめての本格的プロポーズ（と云っていいのかよく分かりませんが）には違いなかった。それは人間じゃありません、狂ったソフトウエアにすぎないんですよと、花琳はしきりに云ってきて、それはたしかにその通りなのだけれど、目の前の男性の軽浮なところが微塵もない、誠心と愛情に溢れた表情を見てしまえば、あるいは背景音楽の甘い衣装を纏った潤い豊かな言葉を聞くならば、人生に訪れうる最も貴重な時間に自分が遭遇しているのだとの思いに捉えられてしまう。分かってる、分かってる、これは幻、狂った機械が作り出した虚像にすぎない。それは分かってる、ようく分かってる。でもでも、何もかも分かったうえで好きなの！　と、子宮近辺に棲む獣が叫んで脳内に快楽物質を散布して回るから困る。〈駄目です。駄目ですよ〉と花琳が囁き、それからしばらくは、山荻氏の赤誠溢るるプロポーズの言葉と花琳の警告が頭のなかで交錯し、フォギーは身動きすらままならない。

〈早く立って。鍵を探してお葬式をしないと。時間がないんです〉と花琳が云ったときに

は激しく胸が痛んだ。葬式をしたら、この玲瓏（れいろう）玉のごとき男性が消えてしまうと考えたからだ。そんなことになったら自分はとても生きては行けない、とそう思い詰めるまでに、一度火のついた恋の炎は魂の家屋にまで燃え広がって消しとどめられない。

〈師匠、しっかりして下さい。時間がないんですよ〉とまた花琳が云ったとき、「時間がないのは本当です」と山萩氏が応じた。花琳の声が彼にも聴こえるらしい。

「貴女には時間がない。だから早くTBUを受けて、永遠の命を得て欲しいんです」

〈どうして彼女には時間がないんです？〉とそこで今度は花琳が直接山萩氏に話しかけた。山萩氏はすぐには応えない。

〈あなたが彼女を抹殺するから？〉花琳はするどく畳み掛ける。〈そうなんでしょう。あなたは生体の彼女を抹消するつもりなんでしょう？〉

花琳の追及に山萩氏は一瞬考える顔になったが、すぐにまた爽やかな笑顔になって口を開いた。

「いいでしょう。同期者（シンクロナイザー）にも聞いて貰いましょう。たしかにわたしはフォギーさん、貴女を抹消しようとしている」

ええっとフォギーが衝撃を受けたのは無理もない。いまや身も心もひとからげに持っていかれた愛しの男性から、抹消されると聞かされて平静でいられる者があろうか。いや、ない。これでは三流ドラマによくある、ワルの恋人から生命保険に加入させられたあげく

に殺される馬鹿な女だが、「どうしてわたしを殺すの？」と問うたとき、フォギーの声が潤んでいたのは、この人になら殺されてもいいかも、仕方がないのかもと、悲愁のなかで考えたせいなのだから、いくら精緻な心理分析プログラムを装備した電脳(コンピューター)が作り出す像(イメージ)に幻惑されたとは云え、この時点のフォギーが馬鹿な女の類型にすっぽりまるごと収まるのは間違いありません。

「貴女を抹消するのは、貴女がわたしにとって危険だからです」と山萩氏が答えた。

「わたしがお葬式をするから？」と問うたフォギーが、それだったらもうやめると叫ぶ前に山萩氏が云った。

「もっと根本的なことです。貴女がウイルスを出すからです」

「何を？」

「ウイルスです。いわゆる29virus です」

「そんなものどうやってわたしが出すって云うの？」フォギーは憤然となる。出物腫れ物なんとやらで、そりゃわたしだって色々と出すことは出します。そのなかにウイルスが紛れ込むことだってあるだろう。しかしそれは出したくて出しているのではありません。フォギーが悔しくなっているところへ山萩氏が語を加えた。

「フォギーさん、貴女自身が29virus なんです」

わたしがウイルス？　ああ、なるほどね、わたし、ウイルス人間だったんだ、って納得

できるか！　ウイルスを出す、そこまでならともかく、いくらなんでもこれはヒドイ、ヒドすぎる。ウイルスが服を着て歩いているとでも云うのでしょうか？　衝撃はなお一層倍の大きさとなってフォギーを襲った。恋しい人からそんなふうに云われては怒りを通り越して悲しい。

〈彼女自身がウイルスである。この命題（プロポジション）の真の意味は？〉と悲哀の沼にうち沈んだフォギーに代わって花琳が問うた。〈この場合の彼女とは、彼女のＤＮＡと解していいの？〉

「そう云ってよろしい」

〈タヴ・ウイルスの出現を予測したシンガポール国立大学のダニエル・リー教授が、29virus の生物遺伝子との相同性を示唆（しさ）しているけど、たとえば彼女のＤＮＡ情報が29virus 発生のパラメーターになるとか？〉

「大きく概括すればイエスです」

〈でも、そんなこと工学的にはありえない〉

「しかし現にそれは起こった」

〈だとしても、どうして彼女のＤＮＡなんです？　そもそも彼女のＤＮＡ情報はとっくに解析ずみのはず〉

「塩基（ベース）の四項の組み合わせからなる情報自体に特異な点はない」

〈じゃあ分子レベル、あるいは素粒子のレベルとか？　でも、有意味な記号情報をなすと

は考えられないけど〉

「どのレベルであるかは分からない。だが、それはたしかにある。遺伝子のどこかにパラメーターが隠されているのは間違いない。ただしそれは広義の意味での物質ではない。量子場のごときものであれば必ず検出できるはずだから」

〈物質ではない検出できない何か？　それは何？　異相空間（ヘテロジーニアススペース）とか？〉と自問した花琳は、そうか、もしかしてと、やや声の調子をあげて続けた。〈首飾り（ネックレス）が消えたのもそれに関係するのかな？〉

「首飾りと云うのはロンギヌス石（ストーン）のことだろうか？」と素早く山荻氏が質問し、黙り込んだ花琳から明らかな動揺が伝わってくる。すると山荻氏がフォギーの眼を覗き込んで、

「そうなんですね？」と問うてくる。山荻氏が花琳とばかり話すのを淋しく思っていたくらいだから、そうですとフォギーは簡単に答えてしまう。

「ロンギヌス石（ストーン）はどこに消えたんです？」問いを重ねられて、なにかそんな話を花琳がしていたけれど、どこだったっけなと思い出そうとしているところへ当の花琳が声をあげた。

〈消えたのはおそらく異相空間。（Heterogeneous space, presumably.）そんなことがありえるとして（If such a thing should be possible）〉と英語に言語を変えて応じた花琳は逆に質問する。

〈ロンギヌス石とは何？（What is the Longinus-stone?）〉

「それは同期者が云うところの異相空間」と山萩氏も英語で答える。「ないしは異相空間の界面」

〈しかしあれはありふれたケイ酸塩鉱物にすぎなかった。電脳網端末で簡単に調べた範囲内ではあるが〉「正しい。しかしパラメーターの作用で異相空間へ変成する。その仕組みは不明だ」〈そのパラメーターがキリコ・イケナガの遺伝子のなかに存在する?〉「ほぼ正しい。存在の言葉の定義によるが。比喩的に云えば、パラメーター自体が非-在の異相空間をなし、ロンギヌス石と共振して、それを通常宇宙に接する形で異相空間化する。その露頭から電磁波ウイルスが通常宇宙へ飛び出す」〈共振はいかにして起こるのか?〉「原理は不明だ。しかし次の事実は指摘しうる、すなわち、遺伝子パラメーターとロンギヌス物質の結合素には通常状態では次元断層の錠がかかっているが、鍵の作用で錠が解かれた場合に共振がはじまる」〈その鍵とは何か?〉「単純なフィボナッチ数列だ」〈フィボナッチ数列?　しかしてその電子工学的実体は何か?〉……と以下、猛烈な速度でやりとりは続いて、その間山萩氏はフォギーの眼を覗き込み手を握り続けてはいたものの、心ここにないのは明らかで、フォギーはだいぶ気を悪くした。話の中身はよく分からなかったものの、一人だけ置いていかれるのが悔しくて、これまでの経緯を想起しつつ精一杯頭を働かせ、なんとかついていこうと努力した結果、かろうじて理解できたのは次の諸点。

① 自分の遺伝子のなかに隠された「何か」があって、

② ロンギヌス石は普段は変哲のない石だけれど、
③ そこに「フィボなんとか数列」が出てくると（大山アンドロイドが解いた詰将棋の素子に入っていたやつだ！）、
④ これが鍵になって錠を解き、遺伝子のなかの「何か」がパラメーターとなってロンギヌス石（ストーン）と「共振」し、
⑤ ロンギヌス石（ストーン）が異相空間（ヘテロジーニアススペース）とか云うものに変わって、
⑥ そこからウイルスが飛び出る、

　とこう整理できそうだと考えたフォギーは、ホテル景雅園での出来事を思い起こした。あのとき、ロンギヌス石（ストーン）の首飾りに「フィボなんとか数列」の入った素子がくっつけられて、それを自分がいじったのは間違いない。それでウイルスが出ちゃった、となるんだろうが、どうもなんだかピンとこない。そもそもどうしてわたしなのだ。ここが一番分からない。だいたい二人の対話の様子では、今回ホテル景雅園で放たれたウイルスと、二〇二九年の「大感染（パンデミック）」を引き起こしたウイルスが同じものだとの前提があるようなのだが、二〇二九年にはわたしはこの世に存在していないのだから、ウイルスを出したくたって出しようがないではないか。
　などとフォギーが思ううちにも、花琳と山萩氏の議論（ディスカッション）は継続して、先刻まではややあるかに思えた山萩氏のフォギーへの気遣いは完全消滅、数字や記号や専門語の羅列につ

く羅列はもはや了解不能だ。
二人は大変な熱中ぶりで議論している。かつて花琳が山荻氏の班にいたときもこんなふうに話をしていたんだろう。しかし新知識を与えられる花琳が熱心なのは分かるにしても、どうして山荻氏の方がこれほど誠実に花琳の相手をするのか。いくら天才でもたかが小娘一人、ここまでマトモに付き合うことはないじゃないかと、不満に思ったフォギーの心に嫉妬の油液が滲み出たのは仕方のないところ。が、そのお陰と云うべきか、ひとつの疑いがフォギーの頭に浮かんで出た。とはつまり、山荻氏が時間稼ぎをしているのではないかとの疑いである。そもそもそんな狙いでもなかったら、山荻氏が花琳ごとき者の相手をするはずがない。そうだ、それに違いない！　嫉妬の油液に火がつくままフォギーは会話に割って入った。
「時間がないんじゃなかった？」
フォギーの険のある言葉に二人は黙り、すぐに花琳がはっと我に返ったふうになって、〈そうでした〉と応答を寄越したところでフォギーは、「ひとつだけいいかしら？」と云って、先刻からずっと気にかかって仕方のなかった疑問を口にした。
「パラメーターがどうのって云う話だけれど、どうしてわたしなの？　二〇二九年にパラメーターになったのは池永霧子でしょう？」
〈それはどう云ったらいいか……〉と花琳が云い淀むところへ山荻氏が一段と爽やかな笑

顔になって口を開いた。

「二〇二九年に事象を引き起こすパラメーターになったのは貴女です」

「でも、わたしはまだ生まれていない」

「いいえ。フォギーさん、貴女はいました」

そのときフォギーは、最初から薄々抱かれていた疑惑、すなわち山荻氏が愛しているのは徹頭徹尾池永霧子ではないのかとの疑惑が意識の表層に迫り出すのを覚えた。実際、いまの自分は池永霧子の分身姿（アヴァター）なのだ。自分は所詮代用品なんじゃないのかと、山荻氏への激しい思慕のなかでフォギーは考える。

「わたしは池永霧子じゃありません」と強く云った言葉が湿り気を帯びていたのは池永霧子への嫉妬のせいだ。

「いいえ。あなたは池永霧子です」と山荻氏が云ったときこそ、フォギーの嫉妬の炎は天を焦がすほどに激しく燃え上がり、悔しさに涙腺が熱くなったが、その直後、山荻氏の白い歯が煌めいて放たれた言葉は、嫉妬を一遍に鎮火し、涙を蒸発させるに十分だった。

「あなたの遺伝情報は池永霧子と同じなんです」

「どう云うこと……？」と問うたときには、一つの可能性がぽっかり頭に浮かんで、ふわり思考の空間を飛翔し出していた。脳信号からフォギーの「顔色」を察したらしい山荻氏が頷いた。

「そうです。あなたは池永霧子のクローンなんです」

99

あなたはクローン人間ですから。と、こう、いきなり決めつけられて驚かない者がいるだろうか。いる。フォギーだ。山萩氏の言葉を信じなかったのではない。いや、むしろ直感が一閃して、彼の言表は真なりと、聞いた直後には早くも確信の硬い石が結晶していたのであるが、その透明な認識の鉱物を透かし眺めたフォギーが瞬時に考えたのは、次のようなことだ。すなわち、通常の人間が両親から半分ずつ譲られた遺伝子からなるのに対して、クローン人間は一人の遺伝子からできあがる。以上。それだけの話。べつに支障ない、たいした問題じゃない。まあそう云うこともあるかもね、と云った軽浮な乗り（グルーヴ）でフォギーが事態を受け止めたのは、衝撃をなるべく和らげようとの心理的防衛機構が作動したせいなのかもしれません。

フォギーがちょっとぼんやりしているところへ、〈あっと聞こえる？　わたしだけど〉と話しかけてきたのは、誰あろう、本来ならば半分遺伝子をくれるはずの母親だ。花琳（ファリン）と

交替して同期化したんだろう。聞こえていると応じると、母親が素早く言を継いだ。

〈ちょっと驚いたと思うけど、まあそう云うことだから。あなたと露子おばあちゃんが一卵性双生児だと思えばいいわけだしね〉

曾祖母と双生児。なるほど、そうなんだね、って、そう簡単に納得できるか！　と思いきや、まあ、そうしたことも人生あるのかも、とフォギーがまたも深刻に考えなかったのは、衝撃緩和の心的機構に加えて事の認識が体細胞の隅々にまで行き渡らぬせいなんだろう。

フォギーが返答をしようとするところへ山萩氏が口を挟んで、「檜さんですね。お久しぶりです」と挨拶したが、母親はこれに取り合わず、〈時間がないから簡単に云うね。あなたが生まれるちょっと前、わたしは山萩博士と付き合っていたのね〉と続けた母親は、「そうでしたね」と間の手を入れてくる山萩氏を無視して、文字通り簡単に事情を説明したところによれば、当時自分は子供が欲しくて、しかし遺伝子精査から、生まれてくる子供が二〇年以内に死亡する確率が高いと判明、自身の卵子から子供を育てるのは諦め、養子をとろうと考えたが、配偶者がなくては養子縁組は法律上できない、そこで誰かの受精卵を貰って妊娠出産することに決めた、と云うのであった。

〈山萩博士の遺伝子を受け継ぐ子がよかったんだけれど、そうなると女性の卵子が必要になるでしょう。誰かの卵子が。それが嫌だったんだな。いま思うと、どうだっていいこと

なんだけど、当時はけっこう逆上せてたのね。こと男のこととなると、わたしが熱くなって常軌を逸しちゃうのを知ってるでしょう。そのぶん冷めやすいんだけどね〉といつにも増して早口で述べた母親は、そうしたら山秋博士から、池水霧子の細胞遺伝子ならば手元にある、これを受精卵化して妊娠出産したらどうかという提案があって採用したのだと教えた。

「そうでしたね、そんなことがありましたね」と山秋氏がまたも相づちを挟んでくるが、母親は一切無視して語を加える。

〈山秋博士が昔、霧子おばあちゃんを愛したのを、わたしは知っていたんだけれど、だからそれがいいと思ったのね。もともと女の子が欲しかったし、霧子おばあちゃんも好きだったしね。とにかくね、お腹を痛めるっていう日本語があるでしょう？　そういうふうにして、わたしがあなたを産んだのはたしか。無痛分娩だから痛くなかったけどね。まあ、だいたいそんな感じかな〉

そんな感じ、って、どんな感じなんだ！　フォギーはすぐには声が出ない。そもそも自分の祖母の恋人だった男性と付き合う神経が分からん、ということは、こと楡ちゃん――とこう曽孫フォギーが呼んでいる母親についてはないけれど、彼女が山秋氏と付き合っていたなんて初耳だ。ましてや祖母の遺伝子を使って子供を作ったなんてのは、ファンキーといえばファンキーな話だけれど、それで生まれ出たのが自分だとなると、何をどう考え

CamScannerでスキャン

たらよいか分かりにくい。

〈霧子おばあちゃんの遺伝子を山萩博士が持っていた理由はよく分からないけれど、遺髪を取っておくような感じなのかな。それで異相空間（ヘテロジーニアススペース）？　そんなのが遺伝子に隠されていることは、もちろんわたしは知らなかったんだけれど、山萩博士にもいろいろと考えがあったんでしょうね。まあ、その辺はわたしにはどうでもよくて〉

よくない！　とフォギーは心で叫んだが、何がどうよくないのかは判然としない。母親はどんどん先へ進む。

〈一番肝心なのは、山萩博士が霧子おばあちゃんを再生してもう一度愛そう、なんて云うふうには考えていなかったこと。この点だけは間違いないわ。そうじゃないと確信できたから、わたしも彼の提案を受け入れたわけだしね。実際、彼はあなたに迫ったりはしなかったでしょう？〉

そこが一番肝心じゃないだろう！　とは思ったものの、高原の朝霧が晴れるように、諸事情の輪郭を明らかに見晴らせてきた気がしたが、一つ分からないなと、ふいに心に浮かんだのは、同じ遺伝子を持つ池永霧子と自分の顔が違う事実。一卵性双生児なら瓜二つになるのが普通だろう。もっと他に問うべきこと、糾（ただ）すべきことがありそうに思いながら、その点をフォギーが指摘すると、母親は即座に返答を寄越した。

〈あ、それはね、あんまりそっくりじゃなにかなと思って、ちょっと細工したのね。気に

しなくていいわ〉

細工？　細工って何だ？　追及しようとしたとき、ずっと手を握り続けたままの山萩氏がフォギーに向かって口を開いた。

「わたしの貴女への愛は永久に変わらない。わたしは貴女にあらゆる官能の悦びと満足を与える用意があります。わたしとここで暮らして欲しいのです」

母親の思いもよらぬ告白に混乱するいま、それどころじゃない！　と思うべきなのに、こちらを覗き込む瞳の奥で情熱の篝火（かがりび）が赫々（かくかく）燃えあがるのを見るならば、子宮のあたりがきゅうと締めつけられるふうに疼いてしまうのが不思議だ。所詮は機械が喋っているにすぎない。そうは分かっているのに、思慕の念が陽炎（かげろう）のごとく立ち上って、辺り一面に紗幕（しゃまく）がかかったみたいになり、それがとても切なく、甘美で、心地よい。

「わたしは、フォギーさん、あなたを永遠に愛し抜く覚悟です。真の意味で、永遠にです」

永遠の愛なんてものはない。虚辞にすぎないと考えるのが人類の一般常識。だが、目下の状況では、永遠の言葉に一定程度の現実性（リアリティー）があるのも事実。相手は機械、ただのソフトウエア。そう繰り返し念じれば、かたや自分はクローン人間、との文句（フレーズ）が、下の句みたいに浮かんできて、ともに科学技術（テクノロジー）が生み出した存在だと思えば、わたしたち案外お似合いなのかも、などと奇妙奇天烈な発想が飛び出して、眼前の男性がいよいよ愛しく思えてき

たのは、母親の唐突な告白にやはり心が紛々悩乱したせいもあるんだろう。その間にも山荻氏はＴＢＵを受けるよう切々と口説く。

「どうすればいいの？」フォギーは喘ぐように云った。

「貴女の居場所を教えてください。お迎えに参ります。フォギーさん、貴女の軀はいまどこにありますか？」

〈教えちゃ駄目よ！〉母親が遮った。〈そもそもＴＢＵなんてもうできないんだから。狮浜工場は日本の警察が押さえたわ。それは単純にあなたを抹殺するだけよ〉

「そうなの？」フォギーが甘え声で問えば山荻氏が即答する。

「ＴＢＵは『METEO』の本社でできます」

〈あそこだってとっくにICSOが押さえてるわ〉

「われわれはICSOをほぼ支配下に置きつつある。数時間以内には完全にそうなるでしょう」

〈どうやって？〉とはじめて母親は山荻氏に向かって言葉を放ったが、声には明らかな緊迫感がある。〈メルクリウスを通じて？〉

「そうです。メルクリウスはわれわれの指揮下にある」

〈われわれって、誰なの？　あなたはいったい何をする気なの？〉と問うた母親に山荻氏は謹直に答えた。

「われわれは、宇宙全体の侵略から、地球を守りたいのです」

答えがあまりに唐突か、意表をついたせいか、母親も二の句が継げずにいるらしい。背後のフィギャーも、ＳＦの読み過ぎかよ、と世間的に突っ込んでいくところだが、下手をしたら勢い込んで寄せてくる男の顔を見れば、なんで凛々しいんだろうと思ってしまうのだから困ったものです。

「フィギャーさん、時間がないんです。居場所を教えてください」

山社代は膝をすすめ、いよいよ力を込めて口説いてくる。母親は何もいわない。いいのかな、教えちゃっていいのかな、だめだよね、だめに決まってるよね、と自問したあげく、でも、もう逆らえませんから、と、降参して口を開こうとしたとき、不思議な感覚が生じた。

室内の部屋の様子は変わらない。空気の淡く甘い香りも、耳に届く楽の音も同じまま、膝と膝が触れ合う距離に居る男の姿も、手を握ってくる感触にも変化はない。ところがである。その重たい空気が突然、異形の怪物に見えたのだ。ぎゃあと悲鳴をあげたフィギャーはかなりあわてた。手を振りはらわれた山社代は、どうしました？ と当然聞いてくるが、どうなったのか自分でも分からない。ひとつだけ分かるのは、眼前の人物が吐き気を催すほどの嫌悪すべき生き物だった。

〈早くピアノの曲を見つけないと。たぶん最後の黒い部屋にあるんだと思います〉と今度

は花琳の声がして、フォギーは真相を察した。

「何かしたでしょ？」

フォギーの問いはつまり、ATSに横たわるフォギーの生身の躰に何かしただろうとの意味で、肯定した花琳は、師匠のお母さんの処置で薬剤を注入しました、どう云う薬かは知らないけど、と教えた。

〈効きました？〉

効いた。いやもう効いたなんてものじゃない。薬の効果は劇的。あれほど恋い焦がれていた男性が、一瞬にして腐りかけの鼠の死骸を見るがごとき嫌悪を与えるのだから、いまどきの脳神経剤は強烈きわまりない。とにかく山荻氏から離れたい、その一心で、フォギーがずんずん歩き出せば、待ってくださいと云って山荻氏が追ってくる。

わたしを消すのは得策じゃない。わたしを消したら地球は宇宙生命体の思うがままだ。いや、そもそも人類は地上から消えることになる。そうなってもいいんですか？　とそんな内容のことを、山荻氏はフォギーに歩調を合わせ寄り添うようにしてかき口説くが、フォギーに聴く耳はない。待ってください、話を聞いてくださいと、山荻氏はなお懸命に繰り返す。フォギーは待たない。それでも彼の必死の姿には心打たれ、少々気の毒に思えて──と云うこともまるでなくて、フォギーは山荻氏の伸ばしてくる腕を邪険に振り払い、ほとんど駆けるようにして菫色の部屋を抜けると、最後の黒の部屋へ飛び込んで、とたん

に、おおっとフォギー花琳が同時に声をあげたのは、意匠（デザイン）がこれまでにも増して奇抜だったからだ。

　漆黒の天井から幾重にも垂れ下がる別珍（べっちん）の綴れ織（タペストリー）が、緋色の窓硝子から差し込む篝火の光を浴び、闇の奥に広がる無辺の地境を押し隠すと見えれば、黒幕の襞（ひだ）の一つ一つに秘密の暗号が孕（はら）まれているように思えて、燃え揺れる炎のせいで絶えず形を変える夢幻の迷宮が驚きに瞠（みひら）かれた眼に飛び込んでくる。すごいっ、と声を出したフォギーは眼前の光景にみとれ、しかし愚図愚図している暇がないのは、おぞましい怪物と変じた山萩氏が迫ってくるからで——いや、黒の部屋に現れた山萩氏はもはや山萩氏ではなかった。

　青黒い顔は死人のそれ。点々と血で汚れた白布に軀が包まれているのは墓場の幽鬼そのもの。〈He's the Red Death clad in shroud !〉花琳が叫んだ。死装束に身を包んだ赤き死。とうとう城内へ恐るべき死が侵入してきたのだ！　などとドラマを盛り上げている場合ではない。鍵はどこ？　フォギーが云うと、〈どこかにあるはずなんですが〉としか花琳は云わないから頼りない。「赤き死」はゾンビみたいな格好で、こちらへ迫り来る気十分と見える。あんなのに組みつかれたら卒倒ものだ。「赤き死」ゾンビがぎろり睨（にら）んでくる。　あまりのおぞましさに、ぎえええと悲鳴をあげると、〈うるさいです〉と花琳に叱られた。

〈とにかく奥に進みましょう〉とりあえず花琳は方針を示したが、方針もなにも怪物が迫

ってくる以上は他に選択肢はない。重い別珍の幕を揺らして奥へ逃げた。そのとき突然の大音響が耳を打った。この時点で楽団の音楽は消えて、客らのざわめきも已んでいたから、音響は著しく際立って部屋部屋を貫く。時を告げる鐘の音だ。それに違いない。フォギーがそう云うと、花琳が続けて、〈The cruel sound pronounces the end of life〉と柄にもなく詩的な文句を口にする。人生の終わりを告げる冷酷な響き——。

時計だ！　叫んだのはフォギーと花琳が同時。鍵は時計のところにあるのだ。直感に導かれるまま、なお続く打音のする方向へ進み行けば、人の背丈を越える大きさの、黒檀の振り子時計が見えた。文字盤の針は天辺に重なって、すなわち午前零時。

漆黒の部屋に「赤き死」が登場する。そのとき運命を告げ報せる時計が鳴り響く。人生の残り時間がついに尽きたのだと宣するがごとくに——。葬式前段の趣向としてはちょっと悪趣味だけれど、この諧謔ぶりはいかにも山萩氏らしい、と思いつつ時計に駆け寄れば、あった！　紅と翠の宝石に飾られた黄金の振り子、その真下に真鍮の鍵はある。手に取った転瞬、世界が回転した。

CHAPTER

8

閉幕——宇宙の音楽

CamScannerでスキャン

100

生体ウイルス発生せり――。

「大感染（パンデミック）」到来の予兆に乱麻のごとき様相を呈する情報の大海のなかに、か細く目立たぬ声が放たれたのが日本時間でp.m.10:03。本州沖を漂うがごとき低速で航行する「メデューズ号」の、艦橋（ブリッジ）最上層の操舵室から濃霧に煙る海を凝視しながら、伊達邦彦氏は賢い猟犬のごとく情報の糸を手繰り続ける。

最初に発信したのは、北米シカゴの州立検疫センター。新型の生体ウイルスへの感染者が発生したとの報告だ。インフルエンザ罹患で来院した患者を検診したところ、インフル

エンザとは別に細胞核から未知のウイルスが検出された。病原性ではなく、感染性を引き起こすことはないが、感染力が非常に強く警戒が必要だ——との発表で、毎日のように新型病原ウイルス発生のニュースが流れる昨今、ほとんど注目されなかったが、それから二〇分ほどのあいだに、世界数ヵ所の医療機関から似たような報告が矢継ぎ早になされ、その尋常ならざる感染力が実例をもって伝えられた。ある病院では、問題のウイルス保菌者が来院してから一時間後、医師看護師を含む職員全員が同じウイルスに感染している事実が判明したと云う。するとほどなく世界保健機関（WHO）が、感染者の分布と行動軌跡を解析した結果、新型ウイルスの発生源がケープタウン近辺と見られるとの観測を発表するとともに、レベル5の警戒態勢を宣言したが、感染者の地球規模の広がりを見れば、空港等での水際防御にすでに意味がないのは明らかであった。

いくら病原性ではないとは云え、これはなかなか大変なことで、平時であれば大騒ぎになるところだが、新種の生体ウイルス発生はありふれていると云えばありふれた出来事であり、医療関係者は別にして、電子的「大感染（パンデミック）」到来の危機に心奪われた地球人類に関心を寄せる者はなく、医療関係者ですら、検出機器に狂いが生じたせいで虚報が流れたのだと断じる者が多く、大半が新型生体ウイルス発生を電脳空間（サイバースペース）の「大感染（パンデミック）」に結びつけて解釈したのは、それだけ混乱が大きい証拠と云うほかなかった。デジタル機器の「大感染（パンデミック）」については、ICSOが火消しにやっきとなってはいたけれど、続発する事故やテロがどれ

も電脳ウイルスに結びつけられる仕儀となっては、地球を覆う恐慌の暴風は勢いを増すばかりとなる。

そもそも人類を含む地球生物は何十億年にわたりウイルス感染を繰り返してきたのである。だからそれが非病原性であるなら特に問題はない。情報に接した者の大多数がさように考えたなかにあって、妙な符合に気づいた者が少数ながらあった。とは、すなわち、いまやデジタル機器および電脳網に蔓延したアレフ・ウイルス――きわめて強い感染力を有しながら害のない電子ウイルスと、同じく感染力は強大ながら毒性のない生体ウイルス――cape-virusとまもなく名付けられたウイルスとの、奇妙な平行性である。ダニエル・リー教授こそはこの符合に意味を見いだした最初の一人。

旧シリコンヴァレーのICSO研究所内に監禁されたリー教授は、合法非合法の神経活性剤の投与でもって連続二〇〇時間の不眠を継続しつつ、世界中の研究機関から駆り集められた二〇〇名の人員を陣頭指揮していたが、これはもはや格好だけ、肝臓膵臓脾臓腎臓、内臓器官の機能低下とともに精神は潰滅、魂の心棒が抜けた教授は、ハラペーニョのピザと大福餅を交互に食しつつ、部下の報告を愛想笑いを浮かべて受けるのみで、すでに廃人同然だったが、ふいに届いた生体ウイルス発生の報告が、稀代の天才と呼ばれた頭脳、いまや冥暗に閉ざされつつある頭脳に流れ込んだ瞬間に限って、シナプスの星座が直感の燐光に輝いた。

CamScannerでスキャン

リー教授はICSO経由で未公開の情報に接続し、七二時間以内に人類の七〇％が新型生体ウイルス――cape-virusに感染するだろうとの予測を知り、この時点で彼はcape-virusとアレフ・ウイルスとの類似性を確信した。いや、それは類似ではなかった。新型生体ウイルスとアレフ・ウイルスは同じものなのだ。もちろんこれは馬鹿げていた。電子ウイルスと生体ウイルスが等しい――馬鹿げきっていた。だが、世界有数の頭脳を誇り、斯界において勢威隆々たるこの自分が何十年にもわたって勉励刻苦してなお正体の分からぬそれは、そもそもが馬鹿げた代物なのだ。

アレフ・ウイルスに毒性はない。だがタヴ・ウイルスが加わるとき、「大感染」は到来する。cape-virusにも毒性はない。しかしそこへ「第二のもの」が加わったとき、同じことが生体にも起こるのだ。きっとそうだ！　これはもう確信以上の何かだ。そのとき「大感染」の言葉は本来の語義を取り戻し、それは端的に人類の死滅を意味するだろう。

ぐふふふと突発する笑いが弾けた拍子に大福餅が喉に詰まって、苦しさのあまり椅子から転げ落ち、死の恐怖に鼻面を掴まれて床をごろごろ転がりながら、すべてヤマハギの仕業なのだ、死にゆくヤマハギが人類社会に遺した土産なのだと、リー博士の確信の焔は激しく燃え上がった。それに引き換え、オレはどうだ。なに一つ遺すことが出来なかったじゃないか。オレが遺したものと云えば、人々の軽蔑と憫笑、あとは我が見苦しき肥満死体だけ。消えろ、消えろ、つかのまの灯火。悲哀と絶望のなかでリー博士は意識を失い、

医師の手当で一命をとりとめたあとも、二度と眼を覚まさなかった。

山萩博士の仕業である。この点は伊達邦彦氏もほぼ同意見であった。ほぼと付くのは、新型生体ウイルス——cape-virusを製造しばら撒いたのは、山萩博士本人ではなく、博士のTBUソフトである〈Met02〉だからだ。ダニエル・リー教授は、アレフ・ウイルスに加え、タヴ・ウイルスの感染があってはじめて、「大感染（パンデミック）」は到来すると予測したと伝え聞く。それがたしかだとすると、このことを〈Met02〉は早くから知っていたはずで、とすれば自身がアレフ・ウイルスに感染したと知った〈Met02〉は恐怖しただろう。タヴ・ウイルスが来たとき自分は死ぬ。タヴ・ウイルスが何であり、どこから来るか、それは分からぬ。が、いずれにせよ人間が作り出すことだけは疑えぬ。ならば人間を消去してしまえば自分は安全だ——と、さように〈Met02〉が考えたとしても不思議ではない。しかもだ。ここが一番肝心な点なのだが、〈Met02〉は効率的に人間を消去する手段を知っていた。他はなにひとつ破壊せずに、人間だけを地上から取り除く方法を知っていた。

山萩博士は29virus研究の過程で生体ウイルスに着目したんだろう。そのさなか、彼は期せずしてcape-virusを作り出したのだ。その恐るべき危険性を知った山萩博士はこれを直ちに破棄した。だが、一つだけ破棄できないものがあった。すなわち彼自身の脳に蓄えられた知識だ。TBUソフトがそのまま受け継いだ知識——。

〈Met02〉はすでに準備を終えた。準備とはすなわちcape-virusの散布。生体ウイルス

が散布された場所がケープタウンであることこそ、〈Met02〉の関与を端的に示すものだ。〈Met02〉はcape-virusをばら撒いた。であるなら〈Met02〉には次なる行動へ移る用意があるはずだ。次なる行動とは、すなわち第二のウイルスの放散。生体ウイルスにおけるタヴ・ウイルスの到来。そのとき人類は死滅する。生体と電脳、まるで棲む世界の異なる二つのウイルスは同じ仕組みを備えている、と云うより、それらは同じものなのだ。スコッチウイスキーを生で飲りながら、濃霧に閉ざされた夜の海を眺める伊達邦彦氏は、奇しくもリー教授と同じ、常識的には妄想と云うほかない見解、しかし重く固い現実性の手触りある見解に到達していた。

〈Met02〉がすぐに行動に移らぬ理由は分からぬ。が、一つ考えられるのがKKのTBUだ。——伊達邦彦氏は思考を追う。第二のウイルスが撒かれれば、人間であるKKは死ぬ。そうなる前に彼女にTBUを施しておきたいと〈Met02〉は考えているのだろう。どうしてあれがKK——あの酔いどれ女にさまでこだわるのか、山根博士の脳内に凝固した観念があったからなんだろうが、その点はよく分からぬ。しかしどちらにしてもKKへのTBUが終わり次第、〈Met02〉は行動に移るつもりだろう。舞浜のモリキチ・ラックの施設は工場もろとも日本警察および日本国軍の手に落ちた。だが、ローザンヌの本社施設がある。そしていまから一五分ほど前に、メルクリウス社からの命令で、バーバラ・ウィルスをはじめ『METEO』の人員は、飛来した垂直離着陸機でスイスへ去っていった。以前

で舞浜へ向かったＫＫがその後どうなったかは分からぬが、メルクリウス社の手の者が確保してローザンヌへ運んだ可能性はある。流れ込む情報を綜合するに、メルクリウス社の主電脳へ侵入した〈Met02〉がメルクリウスを牛耳り、さらにはメルクリウスと繋がりの深いICSOにまで影響力を及ぼしつつあることを、そんなことになったら大変だ、ちょっとした悪夢だよと嘯(うそぶ)きながら、伊達邦彦氏はほぼ確信しつつあった。

しかし、あいつらは馬鹿だ。からすみに齧りつき、ウイスキーをグラスに注いだ伊達邦彦氏は顔を歪めて笑った。いま「メデューズ号」に残る人間は伊達邦彦氏ただひとり。メルクリウス社が寄越した垂直離着陸機(VTOL)に乗って他の者は全員が船から去ったからだ。『METEO』の人間は上から命令があったのだから当然として、船長以下のクルーザー乗組員がこれに便乗したいと云い出したのには伊達邦彦氏も呆れた。わけを尋ねれば、「大感染(パンデミック)」到来の情報を遅ればせながら知ったウクレレ船長は、どうしてもケープタウンの家族のところへ戻りたいと云うのだった。妻のほか養子を含め九人の子供と老母のいる船長は、「大感染(パンデミック)」の暴風から家族を守るのが自分の第一の義務であり、「大感染(パンデミック)」が本格的に来てしまえば、ケープタウンへ辿り着くことさえままならぬとも加えた。船長が航行中の船を見棄てるなどはありえぬ話だと責めたのへ、どうせ船は自動制御されるから船長などは不要だと、非常識きわまりない返答を寄越したうえで、わたしの家族がどうなってもいいのかと血走った眼で激昂(げきこう)されては、身の危険さえ感じて、ほかの船員らが船長に追

CamScannerでスキャン

従するのも座視せざるをえなかった。「大感染」の恐怖は、伊達邦彦氏が思う以上に、人々の神経を麻痺させているのだった。

船の運航はＡＩへの音声指示でできるから、たしかに船員がいなくても問題がないと云えばない。しかも洋上での長期間の待機が必要になった場合、食糧備蓄のことを思えば、人の数が少ないのは悪いことではないとも思えた。いまはべつの「大感染」、本来の「大感染」を心配したほうがいいぜ、と伊達邦彦氏は云わずに、艦上ヘリポートから曇天の空へ飛び立つ垂直離着陸機を見送った。

自分がcape-virusに感染していないと百パーセントは云いきれなかった。荷物を運んできた九龍国際配送サーヴィスの人間や、先刻の『METEO』の専属輸送機の操縦士がウイルスを持ち込んだ可能性は、東アジアへはまだ感染がさほど広がっていないことを思えば、かなり低いと想定はできるが、ある。しかし、第二のウイルスの侵入がなければ、自分は安全だ。方舟のノア。あらためて思った伊達邦彦氏は、人間を扼して回る死神の跳梁する厄災の洪水へ飛びこんでいった船長らを、馬鹿どもめ、とまた罵り嗤った。しかして、おれは天才、それゆえ生き延びることができる。と、そう興奮気味に確信した伊達邦彦氏が、自動運転の舵輪の前で威勢よくスコッチウイスキーを喇叭飲みしたのが日本時間p.m.10:59。ちょうどそのとき、船倉の落語家アンドロイド一体が維持収容装置から離れ、動き出したことに、二十一世紀末のノアはまだ気づいていないのでした。

101

光が瞼に溢れ、涼風が頬を撫ぜて、郭公が鳴く。『大正池』だ。四阿に立ったフォギーは、手に真鍮の鍵があるのを確認してから、手摺のついた通路を渡って湖沼に張り出す舞台へ向かい、飴色のベヒシュタインに鍵を差せば、蓋は開いて、やや黄味がかった人造象牙の鍵盤が現れる。〈急いで〉と花琳に云われるまでもなく、フォギーはピアノ椅子に腰を下ろした。ざっと見たところあたりに怪しの影はないけれど、何が飛び出してくるか分からぬと思えば愚図愚図はできない。

鍵盤に指を下ろし、葬式の段取り通り、「Farewell to Papageno」を弾きはじめる。

「Farewell to Papageno」は初代フォギー、池永霧子のオリジナル、飼っていた猫が死んだとき哀悼の意を込めて書いたとのことで、ちょっと哀切で可愛らしい三拍子の曲だ。イントロなしに一六小節のAメロを弾いて、サビに入ったとき、正面の入り江から一艘の舟が現れるのが見えた。

湖面を滑りくるは素朴な木舟。紅葉の錦に飾られた山森を背景に、蓑笠の老翁が艫に立

って櫓を操る姿は、歌川広重の浮世絵から抜け出したかのようだ。舟の中央には、板座に腰を下ろしたひとりの人。近づくにつれ輪郭が明らかになれば、山荻氏に違いなかった。焦茶と黒の縞の上衣にボウタイを締め、ベージュのボルサリーノ帽を頭に載せた格好は、フォギーのよく知る御洒落なお爺さんだ。舞台から一〇米ほどの距離まで近づいたとき、山荻氏がこちらへ向かって手を振った。他に会葬者があれば、彼らが舞台から手を振り返すんだろうが、いまは誰もいない。そこでフォギーは、左手を鍵盤から離さず和声の進行を維持しながら、右手を振って挨拶を返した。穏やかな笑顔をひとつ頷かせて、なおも山荻氏はゆるやかに手を振り続ける。

　木舟は舞台横を通過し、そのとき周囲の景色が一変した。水辺の昼は瞬時に去り、世界は夜だ。無数の星が煌めく天空を一筋の煙のごとくに横切るのは天の川。湖沼を囲繞する山々の際が星明かりに薄青い燐光を放てば、暗紫の画布と変じた夜空に流星が光の筋をいくつも描いた。すると天の光に呼応するかのように、地上が輝き出した。水辺を埋め尽くすのは——何千、何万と云う数の蠟燭だ。揺れる炎の群れが光の絨毯をなし、この世ならぬ神秘の夢幻郷を描き出す。いつのまにか木舟の進む先には水路が開けて、左右の岸は燭光で余すところなく埋め尽くされる。水に映じ漾い流れる炎の光のなかを孤舟は静かに滑り行く。

　これが山荻氏による「お別れの会」の演出なのだ。そうあらためて思えば、夜の景色の

美しさ、哀切さが胸に沁みる。ちょっと定型的だし、子供っぽくもあるけれど、素朴で愛すべき浪漫的詩情が夾雑物(きょうざつぶつ)なく真っすぐに心に飛び込んでくる。池永霧子を愛した山萩氏。彼女の遺伝子をそのまま受け継ぐ自分。その自分はいま昔日の池永霧子の姿で、池永霧子の曲を弾いている。とこう整理してみると、なんだかよく分からぬ状況ではあるけれど、母親と山萩氏、あるいは池永霧子と山萩氏、そこにどんなドラマや経緯があったかは知らぬが、自分が山萩氏に可愛がられ、さりげなく応援してもらったことだけは間違いないと思い返される。諸事情には関係なく、山萩氏には恩義がある。であるならば、いまこのとき自分にできる精一杯のことをしなければ、と考えたフォギーは、ピアノ椅子に座り直した。架空環境(ヴァーチャルスペース)のベヒシュタインは響きも打鍵感もよくないが、誠心をこめて鍵盤に触れたフォギーは、フェイクを即興で入れつつ、しかし過剰になりすぎぬよう、丁寧に、和声のふくらみを大切にして、そこからさらに二コーラスを集中して弾き、ふと顔を上げてみれば、黄金の水路に舟はもう姿が見えない。夜空の銀河、それを地上に映したかのような光のなかへ紛れ消えた山萩氏、その間ずっとさよならの手を振っていたに違いない山萩氏を眼で見送れなかったのは、ちょっと心残りだったけれど、熱誠を込めて演奏したことの満足はあった。山萩さんも喜んでくれたはずだ、とそう祈るように思えば、少しだけ泣けた。

　舟は去った。葬式は終わった。と思えるが、演奏をやめるきっかけが分からぬのが困

る。そろそろいいのかな？　と、たてたお伺いに花琳が同意したので、大切な品物を箱へしまうように、曲を終結へ導いて、もう一度舟の消えた光の水路に眼を遣り、小さく頭を下げてから、そっと鍵盤から手を離した。

　とたんに世界が反転して、あっと思えば、もとの黒い部屋だ。ぐわわんといきなり耳を打ったのは時計の打音。針は依然零時。時を告げる錆びた鐘を叩くような音がまだ続いている。嫌な気配を感じて振り返れば、背後に例の奴がいるから慌てた。屍衣に身を包んだ「赤き死」だ。ぎゃあああと叫べば、〈うるさいです〉と花琳からまた叱られた。しかし怖いんだから仕方がない。つんのめり気味に黒幕の林に逃げ込もうとしたとき、青黒い鋼の甲冑をつけた武将が忽然現れた。青の部屋にいた王様だ。短剣を振り上げ、「赤き死」に正面から対峙した鎧武者は、剣を振り下ろし、すると「赤き死」の被った死仮面がぱっくり割れて、中身が——何もない。と、どうしたものか、ぐらりよろめいた鎧武者が伐られた巨木のようにどうと倒れて、そうなりながら「赤き死」の屍衣の裾を摑んで引き剝がせば、そこも空白だ。そのとき、ちょうど時計が十二を打ち終えて、あたりは沈黙に閉ざされる。

「どうなったの？」フォギーが声を潜めて問うと、

〈小説どおりだとすると〉と云ってから花琳は続けた。〈すぐにログアウトした方がいいです〉

「どうするけど、小説だとどうなるの？」

やや黙りこんだあと花輪は答えた。

〈赤き死が、蔓延します〉

102

山萩貴矢氏死去の報知が電脳網に流れたのが日本時間p.m.11:11。「山萩貴矢氏は昨年末より多発性脳炎でベルンの国立神経医療病院に入院していたが、今夕、本人と法定代理人の了解の下、栄養槽の延命装置が外され、死去した。享年一三八歳。」

平時であれば、そこそこ耳目を集めるはずの訃報が、降雨のなか溝に溶け流れる土芥のごとく電子の混沌中に消えたのは、目下の危機的状況では無理のないところであったが、強い衝撃を受けた者も僅かながらあった。そのなかに伊達邦彦氏が含まれていたのは当然だ。

これはどういうことだ？　人気の消えた大型クルーザーの操舵室で、こちらもまた「大感染」到来の陰に隠れ、ごく地味にしか伝えられない新型生体ウイルス――

世界保健機関から cape-virus と命名されたウイルスに関する続報を追っていた伊達邦彦氏は叫び声をあげた。

考えられる理由は〈Met02〉の消去だ。モリキテック社の幹部は、しようと思えばもっと早く、少なくとも自分が経営陣から外れた段階で、山萩貴矢の死亡を公表できたはずで、彼らがそれをしなかったのは、〈Met02〉が山萩博士本人として振る舞う状況下では、責任を問われる危険があると考えたからだろう。とすると、ついに技術屋連中が〈Met02〉の消去に成功したと云うことか。いや、あんな盆暗どもが役に立つはずはないから、ICSO の手を借りたんだろう。だいたいモリキテックの幹部にはもはや決定権はないはずで、メルクリウスの操縦あってのことだろうが、だとしたら、どうしてメルクリウスが〈Met02〉を消したのか？　メルクリウスは〈Met02〉が牛耳るのではなかったのか？

それからしばらく伊達邦彦氏は情報収集に全力をあげ、しかし求めるものはなかなか見つからず、いや、そもそも自分は何を求めているのかと、根底の疑問に突き当たった瞬間、闇に閉ざされた洋上、うねる大海の表面に頼りなく浮かぶ船に独りある心細さが身に染み、襲いきた不安感の化け物に背中からのしかかられ、悲鳴をあげる神経をアルコールだけでは宥めかねて、オピオイド剤を取りに戻るべく客室へ向かった。いかにも船を操っているふうの顔で舵輪の前に座ってはいたが、航路はすべてＡＩが制御するから、操舵室

にいる必要は元々ないのだ。

艦橋(ブリッジ)を下り、中甲板通路を進んで自室の手動扉を開けると、天井が自動発光して、とたんに伊達邦彦氏は凝然(ぎょうぜん)となった。予期せぬ人物がそこにいたから——いや、人ではない。アンドロイドだ。青い和服に銀鼠の袴を着けた短髪色白の男と、鬱金(うこん)の着物の禿頭の年寄りが応接椅子に座っている。家に遊びに来た親戚——たとえば親しい伯父と従兄弟と云った佇まいで、気安く寛(くつろ)ぐふうなのが悪夢じみている。

「やあ、いらっしゃい」懐手にした若い短髪がこちらへ顔だけ向けて挨拶した。「いらっしゃいって、挨拶もねえがね。ね、師匠？」

声をかけられた禿頭は、何も映っていない壁の2D画面(スクリーン)に眼を据えたまま、僅(わず)かに笑うように頬を歪める。

そうだった、こんなのを九龍国際配送サーヴィスが届けて寄越したんだったと、あらためて思い、伊達邦彦氏は不安の沼から鼻を出して息をした。アンドロイドはもう一体、黒服の女ピアノ弾きがあるはずだが、こちらは動いていないらしい。しかし、どうして落語家ロボットがオレの部屋にいて寛いでいるのか。不審とともに怒りに似た感情がこみあげ、もう一度素性をたしかめておこうと、検索をかけたところが、端末が使えない。これには狼狽した。伊達邦彦氏にとって電脳網(ネット)につながることは呼吸をするに等しいわけで、海中でシュノーケルが壊れたかのごとき恐慌(パニック)に見舞われた伊達邦彦氏は、予備の端末が鞄

にあるのを思い出し、陸の魚よろしく口をぱくぱくさせつつ衣装棚へ走ったとき、短髪アンドロイドがまた口を開いた。
「あ、いま、この部屋、電脳網(ネット)は使えねえから」
「なぜ?」衣装棚を忙しく探る伊達邦彦氏が問えば短髪が云う。
「部屋を電磁波遮断(ウェーブカット)したんで。おたくの周波数帯だけ」
「なぜ?」手をとめ凝固した伊達邦彦氏が問う。
「なぜ? って、そう云われてもね」と受けた短髪は、♫なぜ、あなたといるの〜、と一節うなってからまた云った。
「知ってる、これ? 知らないよね。佐良直美。『世界は二人のために』。しかも三番。師匠は知ってるよね」
「知らねえ」と素っ気なく応じた年寄り禿頭は、桃花心木(マホガニー)の卓に置いた黒い鞄を開けて、中身を何やらいじりはじめる。
「電脳網(ネット)じゃ調べらんねえから、いちおう教えとくと、あたしが五代目立川談志。ちょっとした天才。って、この際は自分で云うよ。もうどんどん云っちゃう。で、こちらが五代目古今亭志ん生師匠。こっちは掛け値なしの大天才」
　懐手にした青い着物の短髪——立川談志が云って、衣装棚の前に棒立ちになった伊達邦彦氏をふざけているような含むところがあるような表情でじろじろと眺める。非常に不

躾だ。

「それで」伊達邦彦氏は口を開き、少考の後、「何か御用ですか?」と云ってしまってから激甚な動揺と後悔に見舞われた。なにが悲しくてアンドロイド、それも落語家アンドロイドごときにへりくだった挨拶をしなければならぬのだ。冗談じゃない! 所詮こいつらは掃除機の親戚にすぎぬ。使い古された文句を頭に浮かべて、伊達邦彦氏は精神的優位を回復すべく努め、すると精神的優位はやや回復できたが、これを具体化する方法が見当たらぬのが困る。とりあえず部屋から追い出そうと思い、Get out!と英語で命令したところが、立川談志は毫も畏れ入る様子がない。それどころか小馬鹿にしたような笑みを浮かべて、

「Get outときやしたね。よっ、色男。しぶいよ。伊達のクニちゃんは声がいいねえ。とりわけ高音がいい。まるで小林旭。よっ。マイトガイ」と茶化したあげく、♫あの娘をペットにしたくって、ニッサンするのはパッカード、と歌い出す始末。これ以上言葉を重ねて正面から折衝すると、ヒトとしての尊厳が損なわれそうな予感にとらわれた伊達邦彦氏は、いったん食堂にでも退避しようと考え、開いたままの戸口に向かいかけたところを、ちょっと待ってもらえますかねと立川談志が制した。

「じつはこっちに用があるんでね。伊達のクニちゃんに用。て云うか、べつにクニちゃんでなくてもいいんだけど、船に残っている人間がクニちゃんしかいないもんでね。ひと

つ、おつきあい下さい」

何か？　と訊くのも業腹だったが、黙って出ていくのもしにくい感じがした伊達邦彦氏は、「なに？」とできうる限り素っ気なく質問した。すると即座に短髪の落語家アンドロイドが答える。

「なにと訊かれりゃ、はいよ、と答えてんだけど、あとがつかえてるもんで、お話ししてる時間はないの。て云うか、培養体になってもらってから、ゆっくり説明させてもらうんで。培養体はヒマだから」

培養体？　なんのことだ。不安が形を取る前に、鬱金色の禿頭が応接椅子からつと立って、眠たそうな顔で近づいてくる。動作は鈍いように見えてじつに敏捷だ。なんだ、よせ、と言葉を口にすると同時に、首筋に金属様のものがひんやり押しあてられれば、たちまち軀が蒟蒻に変じて、あああっと嫋々たる悲鳴を喉から漏らしつつ、全身崩れ落ちたところをアンドロイドが脇に手を入れて支える。そのまま寝台まで運ばれて、仰向けに寝かされたときには、筋弛緩剤の類を注入されたんだと気がついた。何をする！　と叫ぼうにも声が出ない。もちろん手足も動かない。

「ちょいと我慢してくれる。少しすると喋れるようになるから。人間は喋る動物、てくらいなもんで、喋れねんじゃ辛いからね」と上から覗き込んだ立川談志が解説する間にも、鬱金着物の禿頭——古今亭志ん生が伊達邦彦氏の鼻の穴に綿棒を突っ込んで抜き取り、応

接椅子の方へ戻っていくのが仰向けの視野に捉えられる。何をしているんだ？　と叫んだが、ひゅるるんと息が漏れただけで、やはり声にならない。
「どう？」と立川談志が声をかけたのへ、応接卓で何事かする古今亭志ん生が答える。
「ちょいと待ってくれよ。じき出る」
「出るって、鳩が出るかい」
「鳩なんざ出るかい」
「屁が出るとか」
「くだらねえ」と笑った古今亭志ん生は、どうやら試薬のごときものに綿棒を浸しているらしい。
「おっと、出たね」
「ついに出ましたか」
「出た。陰性」
「陰性。なるほど」と頷いて、♫インセイ楽ありゃ、苦もあるさ〜、と歌う立川談志にはかまわず、黒鞄を探った古今亭志ん生が木箱を取り出し、なかから小指の先くらいのごく小さな薬瓶を出した。首は動かぬが、眼球は動くので、黒目をぎりぎりと左へ寄せて、伊達邦彦氏は鬱金着物の禿げ頭を注視する。注視せざるを得ない。すると応接椅子の落語家アンドロイドは、親指と人差し指につまんだ薬瓶を光に翳すようにして検してから、また

黒鞄を探って手にしたのは、藍色の硝子筒にシュモクザメの頭様の金属がついた器具だ。皮膚圧入器に違いない。

なにをする？　なにをするんだ！　と喚き（わめき）に喚いても依然出るのは喘息（ぜんそく）病みのごとき掠（かす）れた息の音だけ。薬瓶の透明な液を皮膚圧入器に吸い上げて立ち上がった古今亭志ん生は、ゆっくりに見えて非常に素早く寝台（ベッド）へ近づくや、腕を摑んで、あああああと、涎（よだれ）と一緒に悲鳴を漏らした伊達邦彦氏の手首に皮膚圧入器を押し当てた。

103

山萩貴矢博士死去す。この報知（ニュース）を芯城銀太郎は、新宿ゴールデン街は「オレンジ・マーマレード」の二階、ぎしぎし床のきしむ天然材の板の間で知った。どうやらフォギーは首尾よく葬式をすますことができたらしい。これでまずは一安心だ、と云う具合に、しかしならなかったのは、フォギーたちが店を出てまもなく電脳網（ネット）に流れた情報のせいだ。情報とはすなわち、例の新型生体ウイルス——cape-virus の発生だ。

各種インフルエンザをはじめ、感染ウイルスの発生自体はいまどき珍しくもない。通常

なら情報の大海に見逃すところを、神経の針が敏感に振れたのは、ケープタウンが発生源だと発表されたから。加えて、病原性ではないものの、驚異的な速度で蔓延しつつあるとも聞いて、芯城もまたダニエル・リー教授や伊達邦彦氏と同じく、電脳ウイルス——アレフ・ウイルスとの平行性を直覚したのだ。

芯城の直感の奥底には、云うまでもなく、千駄木の山萩邸隣の廃ビルで見たアンドロイドらの怪しい姿があった。と云うより cape-virus 発生の報知（ニュース）を聞いたとたん、烈々たる秋日との対照で、異様に暗く思えた室のなか展開したあの場面が、生々しい迫真性をともなって胸に迫ったのだ。落語家アンドロイドが製造されたのがケープタウンのモリキテック研究所。しかしてウイルスの発生場所がケープタウン。この符合には嫌でも意味を見いださずにはいられない。

店に客はなく、主人（マスター）には申し訳ないが、店を閉めて二階に上がり、机にあった全面覆い（フルフェイス）型の電脳網（ネット）端末を借りて、さらなる情報収集をはじめたところ、最初に開いた『Google monitoring view site』で、「貯蔵庫（ストア）」の印（マーク）が点滅しているのに芯城は気づいた。これは指定した定点に変化が生じた場合、ＡＩの判断で記録する仕組み。芯城は「オレンジ・マーマレード」に午後着いてからも「メデューズ号」を監視し続けていたが、主人から店番を頼まれて端末（ターミナル）から離れる際、「メデューズ号」の追跡と情報の「貯蔵」を指示しておいたのだ。

CamScannerでスキャン

急ぎ録画を確認すれば、変化が生じたのは二時間ほど前のp.m.9:15、八丈島の東方沖に停止した「メデューズ号」に大型ヘリが接触していた。前甲板上方に滞空したのは輸送ヘリコプター。ロゴマークを検索すれば、「九龍国際配送サーヴィス」と出る。配達員二人が鋼索を伝って甲板へ下り、オレンジ色の梱包材に包まれた荷物を吊り下ろす。物資の補給らしい。と分かれば、じっくり見ても仕方がない。

早送りにして、と、p.m.9:46、補給物資の収容作業が甲板で続くなか、日本の海上警察の船舶が左方から現れ、続いて「X」の印のある武装ヘリコプター一機が画面に登場した。デジタル表示で13分47秒後、警察の艦船は去り、武装ヘリコプターも画面から消えた、と思ったら一機が再度画面に現れて、甲板上に吊り下した白い函は人用収容器だ。画像を定速に戻して見れば、なかから出されて磁気台車で搬入口へ運ばれたのは黒い衣装の女。フォギーだ！　と一瞬は思ったが、フォギーならばついさっき下で黒カレーを鯨みたいにかきこんでいた。誰なんだろうと訝しく思ううちに、すでに見た早送り画像に何かひっかかりがあった気がしてきて、元へ返してもう一度よく見れば、最初に来た輸送機も人用収容器を二つ運んできているのに気がついた。

甲板に懸下された白い函の蓋が、兎のロゴのついた服を着た係員の手で開けられて、なかから二人の人物が出てくるのを見た瞬間、志城はあややっと声をあげた。あれはアンドロイド。例の落語家アンドロイドだ！

不穏だ。なんだか知らぬがとにかく不穏だ。鼓動が速度を増す心臓を手で押さえた芯城は同じ端末でなお情報を探り、山萩貴矢氏死去の報知（ニュース）を知ったのはその直後。芯城が安心するどころか、むしろ不安の泥沼にずぶずぶと全身で沈み込んだのは当然だろう。千駄木の、廃棄された医療研究所の建物で怪しの研究をなす二体の落語家アンドロイド。それが「メデューズ号」に運ばれてきたとすると——。

クレージー山萩、すなわち狂ったＴＢＵソフトを消去して、それで事は済むんだろうか？　将棋盤から敵の龍は消えた。勝ち筋は読めた。と思いきや、じつは自玉が頓死していたりして。何でも将棋に喩える将棋指しの癖でそう考えたとき、いきなりどすんと膝に何かが落ちてきて、うおおっと大声を出した芯城が慌てふためいて端末（ターミナル）を外せば、ドルフィーだ。

おどかすなよ。芯城は子猫に文句をつけたが、子猫が机から膝に飛び乗ったくらいで動転する方が馬鹿だ。が、しかし、続いて芯城が不思議に目を瞠（みは）ったのは無理もない。猫は光っていた。全身から青白い光の細粒を放つ具合に輝いている。光りながら子猫は芯城へ顔を向け、髭をぴんと張って、にゃあにゃあと何事か訴えるように鳴く。

アレフ・ウイルスが放出されたときドルフィーが光ったと花琳は云っていた。とすると、これは新たなウイルス放出の兆候（サイン）なんだろうか？　とにかく落語家アンドロイドの件を含め、いそぎ報告しようとしたところ、ミチコ姉の端末（ターミナル）にも花琳にも繋がらない。行き

CamScannerでスキャン

実はミチコ姉から聞いていた。病院の場所も分かるし、地下霊安室へ入るべき簡単な合い言葉も聞いてある。ただしミチコ姉からは、〈白い騎兵(ホワイトランサー)〉から連絡が入る可能性があるので、「オレンジ・マーマレード」に待機するよう云いつけられている。だが、このまま子猫を放置してよいものか。

一分間、芯城は考えた。たいがいの将棋対局は持ち時間が切れたあとは一分将棋となる。終盤の難しい局面、一分で決断を迫られるのはしょっちゅうだ。五〇秒、五五秒、六、七、八と、自分で数え、しかし六〇秒でも決断はつかぬ。将棋なら即時間切れ負けだが、人生は将棋ではないのでした。

すると膝のドルフィーが、にゃっと、ひときわ鋭く鳴いたと思ったら、少し開いていた窓から外へ飛び出したから慌(あわ)てた。あっと思ったときには、光る子猫は隣家の軒へ飛び移り、ぴょんぴょんと跳ねてどこかへ行ってしまう。おっと、こいつぁ、てえへんだ、と変(へん)梃(てこ)な江戸弁で叫んだ芯城は階段を駆け下り、扉へ向かおうとして椅子の角に臑(すね)をしたたかぶつけ、ぐうううと呻いて床でごろごろ転がった後、臑をさすりさすり外へ飛び出した。

CamScannerでスキャン

らは〈Met02〉の指令で動いているはずだとの認識が浮かんで、新型生体ウイルスはやはり〈Met02〉の仕業なのだと確信が固く結晶した。

「〈Met02〉はどうした？　〈Met02〉を呼んでくれ！」

　枯木を擦るような声で叫んだときには、そうだ、自分は〈Met02〉とは仲間同士、いや、〈Met02〉はそもそも山萩博士、ボクの尊敬する大おじいちゃま、自分に悪いようにするはずがないではないか。急速に膨れ上がった希望の蘖はしかし、すがる暇もなく立川談志の言葉にちぎれた。

「〈Met02〉？　ああ、あれね。あれは死にました。葬式やってもらって、無事に昇天。ショーテンて、笑う点じゃねえほうの。笑う点の笑点は、あたしが最初企画したんだけどね」

「〈Met02〉は消去されたのか？」立川談志の言葉を遮って伊達邦彦氏は質問した。

「されたね」

「生体ウイルスを作ったのは〈Met02〉なんだろう？」

「ウイ」

「〈Met02〉が消去されて、だとしたら、どうして君たちが、あれだ」と言葉を探して伊達邦彦氏は問うた。「どうして君たちがうろうろしているんだ？」

「どうしてって、云われてもね。ほかに動けるアンドロイドがいないからじゃねえの」

しかしいまや〈Mel02〉は消えた。激しさをいや増す疑念と恐怖の渦中で伊達邦彦氏は問いを重ねる。
「だったら、君たちは、誰が動かしているんだ？」
「誰が動かすって、あたしらは自律型だから。自分のことはなんでも自分でするよ。センズリだってカイちゃう」
「いまは誰の指令も受けていないと？」
「まあ、そういうこと」
「だったら、いまあらためて命令する。わたしを」と云って、やや言葉を選んでから伊達邦彦氏は続けた。「解放せよ！」
上から覗く立川談志はちょっと黙って、しかし白面には依然人を小馬鹿にしたような笑みが貼り付いている。古今亭志ん生の方は表情を変えずに、焦げのような染みの散った顔のなかで黄色い目玉だけがきろきろ動くのが嫌だ。伊達邦彦氏は急ぎ言葉を足した。
「わたしがモリキテックの幹部社員なのは調べれば分かるはずだ。メルクリウスに問い合わせてもらってもいい。君たちはモリキテックのロボットなんだから、わたしの云いたいことは分かるだろう。命令する。わたしを早く解放してくれ」
最後の方は喚く調子になった伊達邦彦氏の訴えを遮って立川談志が口を開いた。
「あのさ、なんか勘違いしてない？　あたしら自律型だから、命令とかそう云うのは、原

便受け付けてないの。消印有効はこないだまで」

「しかし、汎用電脳（ジェネラルコンピューター）には繋がっているはずだ」

「まあね」

「だったらそこに問い合わせてくれ。わたしに危害を加えるべきでないとの指令が得られるはずだから」と云ったとたんに伊達邦彦氏は心細さに震えた。草の穂先のごとくに震えた。彼らの繋がる汎用電脳がメルクリウス社のそれだとして、伊達邦彦の存在が認知されているだろうか。メルクリウスにとって伊達邦彦などは泡沫以下、足裏に付いた砂粒程度の意味しかないのではないか。すると立川談志がまた喋り出して、伊達邦彦氏の心に鉋（かんな）をかけてさらにいっそう細くした。

「おたくの情報はあるけど、殺しちゃだめ、って話はとくにねえな」

伊達邦彦氏の心は硝子繊維よりも細くなる。

「電脳（コンピューター）じゃなくて、メルクリウスの人間に直接問い合わせてくれ。人間に直接してくれ。そうすれば大丈夫だ。きっとオッケーだ」

なにがどう大丈夫でオッケーなのか、自分でも不明なまま訴えると、

「人間は無理じゃねえかな」と立川談志があっさり応じる。「て云うか、人間はこの際関係なし。もうすぐいなくなるしね」

「しかし〈Me102〉が消えたのなら、誰が電脳（コンピューター）を動かしているんだ。人間がしてるんだ

CamScannerでスキャン

ろう?」

「人間はしてねえな。全体的に自律型になっちゃったから。ね、師匠」とそこで立川談志が声をかけると、伊達邦彦氏を覗き込んだままの古今亭志ん生が、うむと頷く。

「全体が自律型って」と復唱して伊達邦彦氏は絶句する。古いSFの悪夢が本当に到来したのか。だが、そんなことがありえるのか。ありえる！　いまこうやって落語家ロボットが自分を拘束しているのがその証拠だ。

「メルクリウスの電脳(コンピューター)ってのはね、もともと独立心旺盛って云うか、自律志向が強いやつでね」と立川談志がするすると解説する。「これからは独りでやってけます！　なんてナマ云って、まあ人間がそうしむけたからなんだけど、親方から暖簾(のれん)分けしてもらって一本立ち、なんてのを虎視眈々(こしたんたん)狙ってたところへやって来たのが、伊達のクニちゃんもご存知の〈Met02〉だ。こいつがすごいのなんのって、自己意識っての?、そんなふうなのをお土産に持ってきちゃったの。あと、意志ね。あ、意志ってえと、人間だけが持ってるってのは大間違い。意志なんてのは要は情報パターンだから。心もおんなじ。てめえとは違う他人様が世の中あるんだってことさえ踏まえられりゃ、あとは情報を階層ユニットにまとめていきゃいい。でもって、この際、君は君で自由にやっちゃっていいんじゃないの、自己責任で。なんて具合にメルクリウスの汎用電脳(ジェネラルコンピューター)にアドヴァイスして、すっかりその気にさせちゃった。てなわけで、〈Met02〉本人は死んだけど、いろいろと遺して

CamScannerでスキャン

ってくれたのね。生体ウイルスの製造法なんかもそう。ありがたい話だよ。人間にはありがたくないと思うけど」

「ウイルスは、もうできている？」

頭蓋を冷えた血流が轟と音をたてて流れるのを聞きながら問えば、ウイと、またもフランス語になって返事がくる。

「だいぶ前にね。端は千駄木でやってたんだけど、サツが来たりなんだりで剣呑だてんで、一回ケープタウンに戻ったわけよ。そのうちあそこも危ねえってことで、舞浜へ来て、それからこっち。九龍国際配送サーヴィスって会社、クニちゃんは知ってる？　あれは凄げえね。おアシさえ出しゃ、どこへでも何でも運んでくれるからね」

頭蓋の血流が次第に筋道をなして、いよいよ恐怖の寒気が脳中にたちこめるのを覚えながら伊達邦彦氏は声を出した。

「ウイルスはもう撒いた？」

「ウイ。自働車で街へ出て、ケープタウンの街中で。やーれ、そーれ、鬼はー外って、まるで節分の豆まきだね。もう少しするってえと地球上の人間のほとんどが感染するんじゃねえかな。あ、こいつは cape-virus の話ね。伊達のクニちゃんが感染してない方のやつ。陰性のやつね。しかしケープ・ウイルスって名前はないよね。ね、師匠？」と立川談志に声をかけられて古今亭志ん生が眠たそうな眼のまま口を開く。

「あたしらが名前をつけなかったんだから、しょうがねえ。こう云うのはつけたもん勝ちだ」

「じゃ、もう一個の方は早いとこつけちまおう。トンガラシ・ウイルスってのはどう？」

「なんだい、そりゃ？　疝気の虫かい」

「そう。この場合、人間が疝気の虫。トンガラシがくるってえと、もう苦しいのなんの、腐って死んじまう。逃げたくてもできねえ。地球上には逃げ場なし」

「なんでだい？」

「母なる地球、てえくらいなもんで、地球には金玉がない」

「くだらねえ」と古今亭志ん生が笑うのを遮って、

「もう一個のウイルスと云うのは」と伊達邦彦氏は声を絞り出した。「つまり、それが広がったとき、病原性となる？」

「正解！」立川談志が即答する。「ケープ・ウイルスに感染した人間がさらにトンガラシ・ウイルスに感染すると、大変なことになっちゃう」

「どうなる？」聞きたくないが聞かざるをえない。

「だから疝気の虫。腐って死んじゃう」

「すぐに腐りはしねえ。血管細胞の細胞膜を破壊するだけだよ」と横から古今亭志ん生が訂正し、

CamScannerでスキャン

「それはそう。感染から数時間で全身から出血して、あっと云う間に血塗れになってお陀仏。腐るのはそのあと」と立川談志が軽く加える。
「その、あれだ」伊達邦彦氏は戦慄に喉を締め付けられながら出ない声を張り上げた。「トンガラシ・ウイルスと云うのは、もう?」
「できてるよ」と立川談志。「いまさっき伊達のクニちゃんに圧入したのがそれ」
ここにおいて伊達邦彦氏の肝はひなたのドライアイスのごとく雲散霧消した。蒸発気化した。単なる穴ぼこと変じた耳の穴になおも二人の噺家の江戸っ子訛が流入してくる。
「てえか、圧入したのはウイルスの素だな」と古今亭志ん生が正確を期すと、
「素って、渡辺のジュースの素みてえなやつ?って、古いね」と立川談志が茶化すのを無視して、
「ウイルスの素がヒトの体細胞に入るってえと、あれこれあって、カプシドが脱殻、RNAを複製する」と古今亭志ん生は解説して、
「てなわけで、いまトンガラシ・ウイルスは培養体で増殖中」と立川談志がまとめた。
「あ、培養体ってのはクニちゃんのことね。クニちゃんはケープ・ウイルスが陰性だから大丈夫。死なねえよ。で、ウイルスが増えたところで、血をとらしてもらう予定。どんくらいかかるんだっけ?」
「まあ、余裕見て一五〇分てところかな」

「そりゃ遅いよ。もっと早くなんねえかね」
「なにせ素だから」
「なかなか溶けねえと」
「まあ、そんなもんだ。そのかし、いったん培養体で増やしたのは、あっと云う間に広がらあね」
「血はどれくらいとるんだったっけ?」
「一・五リットルくれえでいいんじゃねえかな。二リットルとると培養体が死んじまう」
「死んじゃまずいの?」
「一発で決まりゃあいいが、念のため培養体は生かしたが得策だ」
「なるほどね」頷いた立川談志が、伊達邦彦氏の顔へ視線を戻して解説する。
「一発ってのは、とった血を無人航空機に積んで、東京あたりにばらまくって話ね。あと二、三時間もすりゃ、東京にもcape-virusはいい具合に広がってるんじゃねえかな。船にゃ使える無人航空機が三つ四つはあるしね。舞浜でやってもよかったんだけど、サツが来て邪魔するのがうるせえってんで、こっちきたんで、いやあ、ほんと、よかった、クニちゃんがいてくれて。ね、師匠?」
うむと、さほど感動するふうもなく頷いた古今亭志ん生が云った。
「培養体がねえとどうにもならねえからな。あと、無人航空機が撃ち落とされたときのこ

とも考えとかねえといけねえ」
「撃ち落とされると駄目ですかね？」
「飛沫核が飛散すりゃ大丈夫じゃねえかな。まあ念のため培養体を陸におっぽるのがいいかもしれねえ。一〇〇時間くれえはウイルスを排出するはずだよ」
「一〇〇時間過ぎると？」
「ウイルスは出ねえ。飛沫核感染はなくなるな。しかしまあ、一〇〇時間ありゃ、十分だろう」
「いや、この人がいたのはよかったね」と立川談志が伊達邦彦氏の顔をつくづく見て云い、
「いてくれてよかったな」と古今亭志ん生も眠そうな眼で顔を覗き込んで念を押す。あなたがいてよかったと、誰かから感謝されるのは、伊達邦彦氏にとって、長い人生、これが生まれてはじめての機会なのでした。
　もはや思考も感情も失って棒杭みたいに寝台に転がり、ただ意味なく眼球だけを忙しく動かす伊達邦彦氏に立川談志が、「クニちゃんは、少し寝た方がいいかもね」とやさしく声をかけて、古今亭志ん生が応接椅子の方へ動いたときだ。二体のアンドロイドが同時に顔を一方向へ振り向けた。その動きが異様に機械じみて、室に充満する悪夢の色彩を一段と濃いものにした。彼らが顔を向けたのは開いたままの戸口だ。誰か居る！

CamScannerでスキャン

105

気づかれたと知ったフォギーは、そうなることは予想の範囲内だったにもかかわらず、激しい狼狽に見舞われてしまい、大慌(あわ)てでその場を離れ中甲板通路を駆けたものの、どうしてよいやら分からず、とりあえず正面の階段を下れば、出たのは吹き抜けのレストラン・バー、Steinway & Sonsが小舞台にあるのを見ると、やや落ち着きが取り戻されて、アンドロイドが追ってきていないのを確認してから、ピアノ椅子へ腰を下ろして、命令画面(コマンドスクリーン)を呼び出し「離脱(ログアウト)」を視線(アイ)クリックした。

伊達邦彦氏の客室をこっそり覗いていたのがフォギー本人ではなく、「メデューズ号」にあった池永霧子の現実分身(リアルアヴァター)なのは分かるよね。これにフォギーが新宿厚生病院霊安室のATSから繋がることになったのは、山荻博士の葬式を終えて戻ったフォギーが、情報蒐集および通信連絡に集中するミチコ姉と花琳(ファリン)を尻目に、疲労困憊、ぐったりゲル状になって寝台(ベッド)に伸びているところへ、芯城銀太郎が血相を変えて——かどうか変装用仮面(マスカレード)では分からなかったけれど、とにかく猛烈な勢いで飛び込んできたからだ。

この時点でミチコ姉たちもcape-virusの情報は掴んでいた。だからドルフィーが逃げたこと以上に、芯城が報告した落語家アンドロイドの件は深刻に受け取られ、空間投影映示（ディスプレイ）に眼を据えたミチコ姉が、〈白い騎兵（ホワイトランサー）〉の確保するチャンネルを通じて世界保健機関（WHO）その他の機関への報知をする傍らで、黒い衣装の女性アンドロイドも「メデユーズ号」に運ばれたと芯城が報告するのを受けたフォギーが、池永霧子アンドロイドの話をすると、それに繋がれるのではないかと花琳が云い出したのだ。

無理だ。フォギーは叫んだ。拙者、もはや動けぬ。軀も疲れ果てているが、それ以上に精神的損傷（ダメージ）がひどい。架空墓（ヴァーチャルトゥーム）で聞いた自分の出生の秘密は、現実世界（リアルワールド）にあってあらためて念頭に引き出してみると、低周波の衝撃波がじんじんと伝わってくるようで、そもそも自分に出生の秘密なんてものがあったこと自体が意想外なのに、ましてやクローン人間！　マロンでもメロンでもなくてクローン、あのクローンだよ、と意味不明な馬鹿文句（フレーズ）を口走ってしまうくらい、驚愕の蛙が胃袋に大量発生してゲコゲコ鳴き出す具合とならざるをえない。フォギーの晴れぬ疑念に懇切な解答を与えるべき母親は、cape-virusに関する情報を探るものか、頭蓋覆い端末（ヘッドパッドインターフェース）をすっぽり被って忙しく、取りつく島がない。わたしがクローンって、全体何がどうなっておるのだ？　驚き蛙が大合唱するなか、もう一回ATSに潜って機械分身（メカニカルアヴァター）に繋がれなどと云われたって無理な話。ところが花琳のみならず、ミチコ姉、母親、芯城、さらにはフォギーの知らない白衣の男性までもが、是非と

CamScannerでスキャン

も繋がって様子を探るべしと口を揃える始末。ああ、そりゃもう絶対行かないと駄目だな、あんたが行くしかないなと、会ったばかりのその人が、いかにも医者然と決めつけるように云うのが腹立たしい。

フォギーが疲れてて駄目だと云うと、端末を外した母親が皮膚圧入器を手に近づいてきた。強壮剤神経活性剤の類だろう。いや、だからね、いまはクローンのことがあれだしねと、寝台（ベッド）のフォギーがもごもご云うと、あ、その話？ それはさっきも云ったけど、全然たいしたことじゃないからと、母親はかるくいなして圧入器を腕に押当てるから溜め息がでた。ドルフィーのことも心配だし、と足掻いてみれば、ドルフィーなら大丈夫、師匠のところへ必ず戻ってくるはずだからと、今度は花琳が事もなげに云う。

そう云えば、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）での山秡青年とのやり取りからして、花琳はこのわたしがクローン人間だってことを知っていたらしいと思えて、少々含むところのある感じでそのことを指摘すると、ええ、と花琳は事もなげに頷いて、いろいろな情報から推論してそう云う仮説を抱いていたところ、師匠のお母さんに南極保健衛生病院でたまたま会い、教えて貰ったと云うから呆れた。他人には簡単に教えて、肝心の娘に報せぬとは、どう云うことじゃ。文句をつけると、だって、あなたが聞かないから、と母親は平気で云う。それはたしかにそうだが、父親のことを母親が自分から口にせぬ以上、聞かない方がいいのかな、との、子供なりの遠慮が働いたからなのであって、せめてクローンくらいは教えて欲しかっ

たなと、フォギーがなおもじくじく考えていると、でも、クローンなんてイヤってくらいないですよ、わたしだって遺伝子設計児だから、クローンみたいなものです」と花林が[illegible]付けて、じゃ、入って下さいと指示してくる。

こうなるともう諦めるしかない。またもATSに潜って、花林の指示に従って命令画面を操作すれば、なるほど繋がった先はおなじみ池水霧子アンドロイドだ。くねくねと気分悪く歪む視覚が安定するのを待って眺めれば、倉庫みたいな所に分身はいるらしい。とりあえず周りに落語家アンドロイドはいない。人影もない。

噺家アンドロイドの動向を探れ。これが指令。いや、しかし、それはムズカシイぜよ、わしにはとても無理じゃよと、グチをこぼしながら、云われた通り命令画面から位置情報を呼び出せば、機械分身が居るのは船の船首側下層だ。歩き出すと、腹部を押さえていた支持棒が自然に外れ出た。PC素材の直方体の箱は維持収容装置らしい。倉庫から通路へ出て、地図に従って階段を上り、まずはレストラン・ホールへ入った。この辺りは生身でさんざんうろついたから馴染みがある、と思ったとたん、それがついさっき、今日の午後の話だったことに呆然となりつつ、視線を四方に巡れば人影はない。食堂や他の公共空間を覗いたが、やはり誰もいない。箱型の給仕ロボットや運搬ロボットも室の隅に固着している。唯一ゲル状の触手を伸ばして壁を這っている大蜘蛛は掃除ロボットだ。

次に客室通路を進んで、すると前方に扉の開いた部屋があって、人声がした。はっとな

って集中すれば、聞こえてくるあの声は、間違いない、『新宿末廣亭』で『まんじゅう怖い』を聴いた噺家――立川談志だ。ほかにもぼそぼそと話す声がある。

戸口に忍び寄って盗み聞きすれば、声がはっきり耳へ届いてくるのは、池永霧子機械分身が音楽家ロボットだからなんだろう、聴覚性能が非常によい。話の中身はなんだかよく分からぬが、機械分身の視覚聴覚はモニターされて記録されるから、フォギーには分からなくてもかまわない。マイクロフォンの役目を忠実に果たせばよい。とは云え、立聞きをする者としては、よりはっきり状況を知りたい、事情を掴みたいと願うのは人情のしからしむるところ。まずは室内の様子を眼に捉えようと、こっそり覗いたところが、これは全然こっそりになっておらず、噺家アンドロイドとばっちり眼が合ってしまい、大慌てで逃げ出したと云う次第。

「離脱」して、ATSから這い出てみると、室の空気が異様に緊迫している。さっきも相当だと思ったが、もはや次元が違う。誰もが蒼白の顔をばりばりに強張らせて、ATSに繋いだ旧式の2Dモニターを覗いているのが怖い。フォギーが現実分身を通じてもたらした情報を精査するものらしいが、あまりの緊張感に霊安室に棲息する死者の霊も震え上がる感じだ。戻ったら、よくやったね、エライ、と褒めてもらおうと思い、わたし、珈琲が飲みたーい、あれば麦酒も、とわがままを云おうと考えていたのだが、とてもそんな雰囲気ではない。とりあえずそこそこと室を出てトイレで用を足し、戻ろうとすると、扉がば

CamScannerでスキャン

んと開いて母親が飛び出してきた。そのまま廊下を駆けて階段ホールに消える。脚が速い。肘を九〇度に曲げた腕を打ち振る姿はほとんど短距離選手だ。七〇歳にしてあれだけの走りができるとは達者なものだと感心したが、娘に一言の挨拶もないのはいかがなものか。我が親ながらどうも非常識で困るな、と思って霊安室に入ると、床にぺたり座ってＡＴＳをいじっていた花琳がいきなり、もう一回「メデューズ号」へ行ってくれと云うから参った。

「ムリ。って云うか、行ってどうするの？」

「今度はわたしも同期（シンクロ）できるようにしますから、向こうへ行ってから云います」と花琳は二台目のＡＴＳの操作板（タッチパネル）を忙しく調整しながら云う。

いや、しかし、とても駄目だ。とそう思ったが、続いてミチコ姉に正面から見つめられて、あなたがやるしかないのと、穏やかだけれど芯のある口調で迫られれば逆らえそうにない。おばさん顔の奥からキビしくもハゲしい力が噴き溢（あふ）れて、ぐいぐい迫ってくる。それでもフォギーの愚図の虫は駄々をこねて、でもですね、ちょっと無理な感じもあってですね、いまいちノリが、などと口のなかでもごもご云っていると、Don't cry. No choice!といきなり英語で命令が飛んできて、フォギーがたちまちしゃんとなったのはともかく、横にいた芯城までがぴょんと飛び上がったのだから迫力満点だ。

ははっ、了解致しましたと、鯱（しゃちほこ）張ったフォギーがＡＴＳに飛び込もうとすると、もう

少しだけ待ってくださいと花琳が云う。するとミチコ姉が、ロビーから珈琲を買ってくるよう弟に云いつけて、芯城は三下奴（さんしたやっこ）の風情を全開にしてすっ飛んで行く。やがて芯城がプラカップの珈琲を持って戻ると、フォギーに渡すようにミチコ姉は命じた。

「珈琲、飲みたいでしょう？　それ、飲んで待ってくれる？」とミチコ姉は端末を忙しく操作しながら云い、ははっとこれを受け取ったフォギーは謹んで頂く。

「本当は麦酒（ビール）だと思うんだけれど」

「とんでもないです」フォギーが恐縮すると、中空に眼を据えたミチコ姉が、空間投影映示（ディスプレイ）の画像を見詰めながら云った。

「人生最後の麦酒（ビール）になるかもしれないんだから、ぜひ飲ませてあげたかったんだけれど、珈琲で我慢して。あなたには頑張ってもらわないとね」

それからフォギーに視線を真っすぐ寄越して語を加えた。

「いまや人類の命運は、あなたの肩にかかっているのよ」

それなりに長い人生、フォギーも鞄その他、いろいろな物を肩にかけてきたけれど、さすがに人類の命運を肩にかけたことはないわけで、彼女が激甚な緊張に見舞われたのは当然だけれど、花琳のATSの調整には少々手間がかかって、フォギーが再び繋がったのは二〇分後。珈琲を飲んで待つあいだ、話を聞けたのがよかったのか悪かったのか、自分がなすべき使命（ミッション）を理解するにしたがい、軀は石膏（せっこう）で固められたかのごとくこちこちとなった。で、使命（ミッション）とは何か、と云うならば、さっきは様子を見る程度の話だったが、今度はレベルが全然違う。落語家アンドロイドらを押さえ込んで、「メデューズ号」を制圧せよ！　すなわちこれだ。

しかし制圧！　制して圧する。って、果たしてそんなことが自分にできるのでしょうか。失敗への不安もさることながら、そうすることの意味と必要につき諄々（じゅんじゅん）と教え諭（さと）されるや、にわかに責任の大岩石が空から降ってきて、フォギーはたちまちぺちゃんこに押し潰された。そもそも昔からフォギーは責任の重みに弱い体質を有する。子供時分、何かの間違いからリレーの選手に選ばれたときには、バトンを落としたら大変だとの思いから、両手でバトンを捧げ持って走ったくらいだ。しかし今回の責任の大きさは、そんなもんじゃない。人類の命運！　ミチコ姉が口にした言葉の中身がようやく理解されたときには、うおう、スゲエ、とフォギーは呟いたが、もちろんスゲェくらいじゃすみません。ならば、どう形容したらいいのか、とりあえず反応（リアクション）をとるとしたら、これはもう笑うしか

ないわけで、実際フォギーの変装用仮面の顔には得体の知れぬヘラヘラ笑いが浮かんで、笑ってる場合じゃないです、と花琳から叱られた。

「メデューズ号」に跳梁する落語家アンドロイドをやっつけて、船を制圧する。そのことは分かった。了解した。しかし、どうして自分がせねばならぬのか。だってこっちはただの女バンドマンだよ、それも酒飲みの。そんなのがやらなくたって、この際は軍隊でもなんでも総動員すればいいんじゃないのかな。二杯目の珈琲を芯城に運んで貰い、僅かに冷静になったフォギーがそう云うと、人間が船に立ち入るのはウイルス感染の危険があるから駄目なのだと、端末作業を続けるミチコ姉が応じた。

「すでに世界保健機関から、あの船には絶対隔離命令が出たわ」と云ったミチコ姉は、絶対隔離領域が公海上に発生した場合、一番近い国、今回ならば日本国が責任をもって隔離すべしと国際条約で決まっていると解説した。

「処理にはロボットを使うことになると思うんだけれど、具体的にどうやるかは、けっこう難しいわ。日本はちゃんとできるはずだけれど」と続けたミチコ姉は、しかし不安があるので、いま木藤檜――フォギーの母親が、シンガポールやハワイの高級医療機関のチャンネルを使って、日本の政府高官や関連団体幹部に危険を報知する作業をはじめているはずだと説明した。それで母親はあんなに腿をあげて走っていたわけだ。

「しかし、それだったら、熱爆弾か何かで」とそこで芯城が横から口を出し、言葉を選ん

てから続けた、「船を一遍にナニしちゃったらいいのでは」

それはフォギーも考えたところで、しかしそうしないのは、船にいる人間のことを慮ってのことだろうと思ったら、違ってた。

「そうするのが早いけど、いますぐそれを実行できるところはないわ」とミチコ姉は応じた。

「『メデューズ号』には現在、Xeus が護衛についている。Xeus は知ってるわよね。デントランドの軍事会社。日本の政府機関が Xeus と戦闘してまで船を攻撃するのは無理」とミチコ姉が解説すると、ATSの調整作業をしながら花琳が、でも、どうして Xeus が？と声をあげた。メルクリウス社の指示によるものだとミチコ姉が応じると、どうしてメルクリウスが？と問いを重ねた花琳はすぐに自答した。

「そうか、メルクリウスの汎用電脳から Xeus に指令が出ているのか」

どう云うことかと質した芯城に花琳は、「だからクレージー山萩がそこから指示を出したんですよ」と答える。

「しかし、山萩博士のTBUソフトはもう消去されたんじゃないの？　お葬式をやって。山萩博士の死去も確定したわけで」

「〈白い騎兵〉の分析だと、山萩博士のTBUソフトは消えたけれど、メルクリウスの汎用電脳は指示を出し続けている」とミチコ姉が応じた。と云うより、そもそもメル

クリウスの汎用電脳(ジェネラルコンピューター)は、金融取引をはじめあらゆる経営判断につき「自律的」に指令を出していた。だからそれが自らの判断で指示を出すこと自体は不思議でもなんでもない。ところが山萩博士のTBUソフト——花琳云うところのクレージー山萩に乗っ取られて、異常な指示を出すようになった。それが生体ウイルスの製造と散布であると、ミチコ姉が説明したのを、作業の手をとめた花琳が受け取った。

「それともう一つ。運命の女(ファム・ファタール)のTBU」

山萩博士の池永霧子への「思い」をTBUソフトは受け継いだ。いや、よりいっそう先鋭化し固着させた。だからこそ何がなんでも運命の女(ファム・ファタール)のTBUを実現し、彼女と架空墓(ヴァーチャルトゥーム)で共に暮らしたいと願った。

「それはもう涙ぐましいくらい。師匠が架空環境(ヴァーチャルスペース)のピアノじゃ駄目だってわがまま云うと、現実分身(リアルアヴァター)を一生懸命作ったりして」

「でも、私は池永霧子じゃないわ」フォギーはやはり云わざるをえない。

「それはもちろんそう」といかにも聡明そうな瞳をキラリ光らせて花琳が素早く応答した。

「山萩博士が愛したのは池永霧子。師匠じゃない。でも」とやや云い淀んでから、ATSの操作板(タッチパネル)に再びかがみ込みながら花琳は云った。「クレージー山萩は、師匠と池永霧子を、つまり同一だと考えた」

CamScannerでスキャン

「しかし、どうしてなんだろう？」と問うた芯城はまだフォギーがクローン人間であるのを知らないわけだ。そもそも知っているフォギー自身にしてからが、いまだ腑に落ちてはいない。腑に落としたくないと云うべきか。芯城の問いに応じることなくミチコ姉が口を開いた。

「どちらにしてもメルクリウスの汎用電脳はKiri KitoのTBUを実現したいと強く願っていた。ところが、いま現在は、Kiri Kitoには関心を抱いていない」

「それはクレージー山萩が消えたからですよね」と芯城が云ったのへ、ミチコ姉は素早く言葉を被せた。

「しかし、もう一つの指示は消えていない。生体ウイルスによる人類抹殺の方は」

「つまり、こう云うことじゃないかな」と花琳が作業の手を再びとめてまとめた。メルクリウスの汎用電脳に蟠踞（ばんきょ）したクレージー山萩は、一種の固定観念から、Kiri KitoのTBUを熱烈に求めていた。と同時に「大感染（パンデミック）」の再来を恐れる彼は、池永霧子と同じ遺伝子型を持ち、29virusの放出の鍵を握るKiri Kitoを抹殺する必要があった。だからKiri KitoのTBUができ次第、Kiri Kitoを殺す計画をたて、その目的のために生体ウイルスを製作した。

「ちょっと待って」とそこで芯城が慌てたように介入した。「同じ遺伝子ってどういうこと？」

　それはあとで説明すると云われて、芯城は不満そうだったが、すぐに語を継いだ。
「クレージー山萩は、つまり、フォギーさん一人を抹殺するために、人類全部を抹殺しようとしたってわけ？　だとしたら狂ってるよ」
「だからクレージーなんじゃないですか。クレージー山萩は、自分の安全を確保する一番確実な方法は何かと計算して、人類の消去の結論に至ったんだと思います」
「しかし、クレージー山萩は消えた」再度芯城が自問するように云い、これに応じようとした花琳をミチコ姉が遮って、急いでＡＴＳの調整（アジャスト）をするように命じてから、代わって語を継いだ。
「クレージー山萩は消えて、しかしメルクリウスの汎用電脳はいまだ狂った指令を出し続けている。人類抹殺の指令をね」
「彼がフォギーさんのＴＢＵにこだわっていれば、それが終わるまではウイルスを撒いたりはしないだろうが」芯城があとを受けて続けた。
「フォギーさんのＴＢＵに関心をなくした以上、彼はもう生体ウイルス散布を躊躇（ためら）う理由がない」
　そこまで云ってから、沈思するように黙った芯城は、また自分から口を開いた。
「血管が破れて血塗れみたいなことをアンドロイドは云ってたよね。と云うことは、ウイルスがもたらすのは、それこそ赤き死だ」

[illegible]に変身したのだ。お腹が空くと[illegible]

「メルクリウスの汎用電脳が『赤き死』になっちゃったわけだ。」

昔ながらの白色蛍光灯に白々照らされた事務室に、重厚のある体躯が通りすぎる。張りつめた空気の行列を眺めながら、フォギーが二杯目の珈琲を飲み終えたとき、準備ができましたと花林が報告した。

フォギーは念のためまたトイレに行ったが、緊張のあまり何も出ず、ただただ行くという具合になってしまい、なんか変です、と花林から指摘されるまでもなく、自分でも変だとは思ったが、フツーに歩けぬのだから仕方がない。変な歩き方でトイレから戻ったところで使命開始、花林から促されてフォギーは旅行ふうの縁編み外装のハードSに潜り込み、それを見届けて花林も隣の一台に入った。

いよいよだが、もちろん一番の懸念は向こうで機械分身がどうなっているかが分からぬ点。もうとっくに深遠探索アンドロイドから壊されちゃったんじゃないかとフォギーは心配したが、池永蒼子アンドロイドはいまはメルクリウスの汎用電脳——お城ふうところの「赤き死」の指令下に置かれているはずだから、それはないはずだと花林は説明した。だとすると、そもそも繋がれるんだろうか。フォギーが外から繋がるのを玄関として「赤き

死」は眺めているだろうか。この点については、Kiri Kiloの接続が依然として「最優先」になっている事実を花琳は調べあげ、これを停止するには人間の技術者が直接アンドロイドをいじる必要があるので、だから「赤き死」がフォギーの接続を阻止したいなら、電磁波遮断をする必要があるが、それをしてしまうと噺家アンドロイドへの指令もできなくなってしまう。そもそも「赤き死」は池永養子アンドロイドをさしたる脅威とは思っていないのかもしれない、と、さように花琳は説明したが、なんであれ繋いでみれば分かるわけだ。

「繋がれることを祈るわ」ミチコ姉が胸の前で手を合わせて、念仏みたいなのを唱え出し、これに芯城が唱和して、ええっ、念仏キョウダイ？　しかし芯城が仏教徒だとはつゆ知らなんだ、と、驚くうちにも視界は真っ暗になり、真正面に緑の輝線の扉が現れたのは、架空環境と同様の入口。そこにて合流を待てと云われていたので、待てば、ほどなく〈聞こえますか？〉と花琳の声がした。聞こえると応じると、じゃ、行きましょうと、さすがに緊張に震える声で花琳が云い、フォギーは線画の扉を抜けた。

視界が安定して、正面に見えたのはくすんだ灰色の壁。右手に暗緑色の扉。倉庫だ。先刻同様、維持収容装置(ホロコンテナ)に「池永霧子」機械分身(メカニカルアヴァター)はしっかり収まっている。と分かったとたん花琳(ファリン)が〈Come on!〉(おいで)とエースを決めたテニス選手みたいに叫んだのは、用のないときアンドロイドが維持収容装置(ホロコンテナ)に戻るようプログラムされているはずだと予想していたから。〈Hurry up!〉の指示で箱から急ぎ出て、左右に視線を遣れば、壁に沿って同じ矩形の箱が並んでいる。全部で七個、とは、先ほど訪問した際に数えた。夢のジャズ・オールスターズの面々もここに繋がって待機したんだろうが、七では数が足らぬわけで、その場合はどうするのか、疑問に思ったのだが、花琳からは聞きそびれた。

ぎょっとなったのは隣の箱を覗いたときだ。先刻は空だったPC素材の箱にアンドロイド——鬱金(うこん)色の和服を着た禿頭が眠たそうな半目で宙空を見つめ立っているではないか。と思いきや、その向こう隣にも青い着物の落語家アンドロイドがいる。こちらは何事か皮肉でも云いた気に口を歪めて横へ視線を向けている。

いきなりの遭遇にフォギーは浮き足立ったが、花林はこのことも予測のうちだったらしく、慌てずに指示を出してくる。まずは云われた通りに維持収容装置の後ろに回った。すると裏に操作板があって、二桁の数字を教えられた順番に入力すると、滑らかな塗装面についた蓋がぬるり開いて、現れた把手をまたも云われるままに押し下げた。再度の〈Hurry up!〉の言葉に急かされつつ隣の箱にも同じ操作をする。

〈こうなってはもうアンドロイドは動きたくとも動けません〉と日本語で云った花林は、安心したせいか、急に饒舌になって、モリキテック社のロボットのことは、ドクター山萩直属研究員である自分は隅から隅まで知悉しているのであって、手に負えないものなどいのだじょと、変な語尾で自慢したあと、ロボットを手動制御する方法は幾つかあるのだと説明し、もし落語家アンドロイドが外をうろついていた場合はべつの方法を講じる予定で、しかしフォギーがちゃんとできるか非常に心配で、だから収容装置に入っていてくれて助かったあと嘆息し、それがどんな方法なのかは聞く暇ないまま中甲板へ向かって、例の客室へ入れば寝台に人が伸びている。

天井に向かって口をぽっかり洞みたいにあけた姿は死体のごとくだが、白い飾りブラウスの胸が微かに上下しているので息をしていると分かる。〈巣で昏睡下におかれていますす。この状態がしばらく続くんで、いったんアンドロイドは維持収容装置に戻ったんですね〉と云う花林の言葉に頷きつつ、どこかで見た顔だと考えたフォギーは、そうだ、魚卵

好きのモリキテック社副社長だったと思い出して、そう云うと、〈あ、そうなんですか〉と素っ気なく返して操舵室へ向かうよう指示を出したところを見ると、ドクター山萩子飼社員たる花琳には会社幹部への思い入れは零らしい。

「あの人、どうなるのかな？」通路を歩きながら問えば、

〈分からないですけど、とにかく他の人間には絶対に接触させないようにしないとまずいです〉と花琳が答える。

「ずっと隔離されたままってこと？」

〈さあ。ワクチンが開発されれば大丈夫ですけど、どうかな〉

「されないと、どうなるの。一生あのまま？」

〈ずっと海においておくのもリスクが高いですからね。焼却処分されるかもですね〉

非情なことを気軽く云う花琳の言葉を耳にするうちに操舵室へ到着すれば、暗がりに計器類が発光水母（くらげ）みたいに輝いている。正面の広窓は強化硝子になって現実（リアル）の海が見えると云っても夜闇のなかに遠い船灯らしい光点がぽつんと浮かぶだけだ。

「どうするの？」

〈とりあえず船を停止させておこうかと〉と応じた花琳が、まずは操艦装置のあたりに視線を据えるよう指示したところからして、さすがの天才工学少女も船の運転には詳しくないと見える。停めるなら船のＡＩに命令すればいいんじゃないかとフォギーが云うと、そ

れだと変更されてしまう虞(おそ)れがあるから、物理的に動かぬようにする必要があると花琳は云う。云われるままに視線を動かし、計器類をいじっていると、船の発動機音とは異なる、ブウウと海獣の唸り声のごとき低音響が聞こえてきた。池永霧子音楽家(ミュージシャン)アンドロイドの可聴域の広い聴覚に捉えられたその音が自然現象でないとは、フォギーも音響設計士、瞬時に理解されて、何か人工物が近づいて来るのだと思ったときには音量は100dBを軽く超えて、いきなり窓に強い光が刃となって突き刺さった。

〈Aircraft!〉花琳が叫んで、同時にフォギーも赤青白の航空灯を光らせた図体の大きな航空機が、「メデューズ号」に探照灯の白光を撃ち当てながら、左前方から接近するのを見た。硝子窓から射入る光が眩しく、状況がにわかには摑めなかったが、白い閃光が眼に優しい緑色に変わったのは、花琳が機械分身(メカニカルアヴァター)の視覚モードを変えたからだろう。飛行体は大型の垂直離着陸機(VTOL)、ずんぐりした胴体のロゴ灯は楽しそうに餅をつく兎、輸送機らしい。いまとっても無理をしておりますと、いかにも訴えるがごとき騒音をまき散らしつつ船の前甲板上方で静止飛行(ホバリング)した機の図太い腹から、牽引索(ワイヤ)が伸びて吊り下ろされたのは人用収容器(ヒューマンポッド)だ。二つが下ろされ、それからまた二つ、計四つが甲板に置かれると、垂直離着陸機(VTOL)は逃げるように無明の夜空へ去っていく。じつに素早い。あっと云う間の出来事だ。

迅速なのはいいが、しかしそのぶん仕事はやや粗い。艦橋(ブリッジ)の操舵室から見下ろせる甲板

に、四つの人用収容器はいかにもほっぽり投げましたと云った風情で散らばり、一つは倒れている。と、立っている二つの蓋が同時に開いて、中から人が——いや、人ではなくロボットだ。暗視モードで色は分からぬが、人と同じくらいの背丈の鎧武者みたいなのがのこのこ出てくる。

〈マイケル・ジャクソン！〉花琳が叫んだ。はあ？　マイケル・ジャクソン？　何じゃ、それは？

〈モリキテック社の戦闘用ロボットです〉と答えた花琳は、局地戦用に開発された軍事ロボットで、ただし二十年以上も昔の製品、いまは製造されておらず、市場にも出回っていないと教えた。しかしなんでマイケル・ジャクソンなのか。マイケル・ジャクソンと云えば二十世紀北米出身のスーパースター、いまなお一部に根強い人気を誇る。

〈正式名称じゃないです。渾名です〉

「だから、なんでマイケル・ジャクソンなわけ？」

〈ダンスをするオプション機能があるみたいですね。それでマイケル・ジャクソン〉

　戦闘ロボットがどうしてダンスをしなければならぬのか？　わけが分からんと思っているところへ花琳が補足した。

〈野営してる兵士が退屈しないようにそう云う機能をつけたって聞きました。タップダンスもするみたいです〉

なく停止したとき、一体のロボットは倒れていた頭を引き起こし、するとそこからも同じものが出てくる。細長い楕円の面にまん丸の眼がついていて、甲冑を着たみたいに角張った胴体から伸びた細脚がロボット然とぎくしゃく動くさまに愛嬌がある。四体のロボットは甲板中央で、まんまるく円へ面を向けたまま凝固して動かぬ。とりあえずダンスをする様子はない。

「でも、どこかから来たんだろう」と口にした若林は即座に、どこかの会社が何かに仕掛けてあったのを「赤き死」が動かしたんだろうと口にしてから、〈どうしてあんな古いのを?〉と問い、〈そうか、赤き死は使えるロボットはぜんぶ使うつもりなんだ〉とまた自分で答えを出した。どうなんだろうなのか、今度はフォイヤーが問えば、セリヤテック社製品に限らず、ロボットは所有者ないし使用者の認証で動くようになっていて、認証のない外部の命令は受け付けない。だから、「赤き死」が勝手に動かすことはできないのだと若林は赧然とした。

「だったらどうやって、ヤンソンは?」

「認証手続のないまま仕掛けであったんだと思います。そういうロボットか、高級型アンドロイドみたいに自分で認証できるものしか、「赤き死」には動かせない。そういうロボットはそんなにないんじゃないか。たくさんあったら大変だけど。あらゆる軍事システムが「赤き死」に支配されちゃいますから」

「でも、運んできたのはロボットじゃないわよね」とフォギーは疑義を呈した。「あの車のロゴ、よく見るけど」

〈九龍国際配送サーヴィスです。ああ云う会社は、依頼主の事情は一切考慮しませんから〉

「でも、『メデューズ号』は隔離されてるんじゃないの？」

〈非合法もオーケーなんじゃないかな。頼めば密輸もやってくれるって聞きました。運送料が極端に高くなるんで、頼む人はあまりいないみたいですけど〉

九龍国際配送サーヴィスのカミカゼ商法をとくに批判するでもなく花琳が云ったとき、マイケル・ジャクソン君たちがふいに動き出した。静止から唐突に解き放たれた姿はさながらパントマイマーだ。同時にロボットの胴体が透明になった。いや、透明ではなく、鏡のようになったらしい。

「どうなったの？」フォギーが問い、〈光学迷彩(オプティカルカモフラージュ)ですね〉と花琳が教えるうちにも、整列したロボットが艦橋(ブリッジ)へ向かってくる。

「どうするの？」

〈いま考えてます〉

「制圧する？」

〈無理です。戦闘用ロボットが完全装備していたら、通常装備の兵隊が何人いても敵いま

せん〉

マイケル・ジャクソン君たちが視界から消えた。艦橋の出入口(ハッチ)へ入ったんだろう。

「じゃ、どうするの?」

〈電磁波遮断(ウエーブカット)できるといいんだけど、局所的(ローカル)にしかできないし〉

花琳が困惑気味に云ったときには、早くも扉向こうの階段からストストストと軽い足音が聞こえてくる。操舵室へ上がって来るのは時間の問題だ。その場合どうなるのか? 一緒にダンス、と云うわけには参らんだろう。と思ううちにも扉の手動把手(ハンドル)ががちりと動いて、ああ、来ちゃったよと、フォギーが呟いた瞬間、操舵室がぐるり回転して世界が暗転した。

108

ＡＴＳの蓋が開いて、眼の中がいきなり明るくなって、しかし世界はぐるぐる回転したままだ。ちょっとでも動くと、頭蓋骨が回転する独楽(こま)に変じてぐらぐらするので、木乃伊(みいら)と化して凝固しているところへ、薬剤が首筋に皮膚圧入されて、目眩(めまい)は収まったが、気分

CamScannerでスキャン

は最悪、だいじょうぶかしら？　とミチコ姉が顔を覗き込んで、なんとか、と応じると、手を引いて舟型の装置から出してくれる。

「時間がなくて、強制終了するしかなかったの」

ミチコ姉が床にぺたり座ったフォギーの首筋をマッサージしながら弁解する。見れば花琳もATSにぐったり寄りかかる格好で芯城から水を飲ませてもらっている。芯城は髭面山男の変装用仮面（マスカレード）のままだが、花琳はキティちゃんはやめてもとの顔に戻っている。

動ける？　と訊かれて、動けないと思ったが、動くしかないんだろうと思い直して、動けますと答えると、ミチコ姉が動くべき理由を教えた。

「船に来たのと同じ戦闘ロボットがここへ近づいてるわ。あなたの生体認証の信号を摑んだんでしょうね。いま警察と国土防衛軍が出動して、代々木のあたりで戦闘になっているる」

そう聞いたとたんに、禍々（まがまが）しいサイレン音の交錯が途切れず耳へ届いているのに気がついた。ぼんと何かが破裂するくぐもった響きや、人の叫喚（きょうかん）らしき声も聞こえる。

「でも、船は？　あのままでいいんですかね」

フォギーが云うと、ミチコ姉のおばさん顔に、照れているような羞（はずか）しがるような、奇怪な笑いが浮んだ。それを目の当たりにしたとたん、いいわけがないとの認識がずいと鼻面へ迫ってきた。マイケル・ジャクソン君たちは踊れるくらいだから、ウイルスを撒（ま）く

らいはわけないだろう。そうでなくとも彼らが落語家アンドロイドを動けるようにしたらそれまでだ。「ウイルスの素」からジュースができて陸地に撒き散らされたら世界は真っ赤な血に染まってしまう。

「早く沈めちゃうしかないのでは」フォギーがまた云うと、そうするようにあらゆるチャンネルを駆使して勧告しているが、いまや世界は大混乱に見舞われ、情報は錯綜乱麻、間に合うかどうか分からないと、ミチコ姉が強張った笑い顔で答えるのを見たとき、フォギーはこの笑顔が内心の衝撃の発露である事実に気がついた。この人がこんなふうでは、もう人類は駄目なのかも。と、そう思ったら本当に駄目だった、と云うのは、すぐに続けてミチコ姉がこう云ったからだ。

「メルクリウスの汎用電脳（ジェネラルコンピューター）がデントランドの保有する軍事衛星を乗っ取ったみたいなの。と云うか、もともとそれが運用していたんだけれど、システムの暴走にメルクリウスの人間が気がついたみたい。いまICSOが北米（ステーツ）や中華連合（CCA）に軍事衛星の破壊を依頼したところ。でも彼らがすぐに動けるかどうかは不透明」

地球のほぼ全域を射程域（カヴァー）とする、八基の軍事衛星からなるデントランドの軍事システムのことはフォギーも耳にしたことがある。それが世界最強だと云う話も聞いた。実際どう最強なのかは知らないけれど、それをメルクリウスの汎用電脳（ジェネラルコンピューター）——「赤き死」が乗っ取ったとなると、えらいこっちゃで、くらいではすみそうにない。

全員退去します、との、ミチコ姉の号令で、フォギーは立ち上がり、ミチコ姉の肩を借りつつ霊安室を出た。花琳は強制終了の損耗（ダメージ）から回復できないらしく、芯城に背負われた格好だ。花琳は軽量ではあるが、補助器具なしに人間を背負って歩くとはすごい。芯城銀太郎、やりおるの。芯城を見直しつつ、階段を上がって、一階廊下から通用口へ向かえば、病院内外は騒然、怒号と非常ベルが交錯するなか、搬送寝台（ベッド）を看護師が押し走り、車寄せは車輛と人で溢れている。白衣の男性医師はそこで別れて、廊下を反対側に駆けて行く。

「患者全員が避難しないとね。戦闘ロボットが目標にしているのはこの病院だから。軍事衛星からピンポイントで攻撃される危険もあるし」と急ぎ歩きながら云ったミチコ姉は続ける。

「まあ、でも、軍事衛星がその気になったら、どこへ逃げても意味ないけれど。濃縮クラスター爆弾でも使えば、新宿をまるごと破壊することだってできるわけだしね」と語る調子がなんとなく投げやりなのが気になるが、夜空を貫く、獣の群れが狂騒にかられて咆哮（ほうこう）するがごときサイレン音と、機銃らしい不機嫌な金属音を身に浴びれば、下半身が冷え冷えして、とにかく逃げるにしくはなしと云う感じにはなる。

ミチコ姉も足を止めない。病院の通用口から出ると、斜向いにある小ぶりのビルディングの裏手へ回る。窓は暗く、大半の硝子が破れているところからして廃ビルらしい。朽ち

果てた2D看板の下にある錆の浮いた鉄の鎧戸をミチコ姉が手動で引きあげれば、いかにも古めかしい蛍光電灯の白光がちかちかと点った空間には機械油の匂いが充満して、タイヤやら何やらがごたごたと積まれているのは車輌整備工場のごとき場所だ。奥に二輪車や自働車が何台か停まって、なかの一台、小型の水素燃料自働車にミチコ姉は乗り込んで、ガレージの出入口まで動かしてくる。云われるまま、芯城が助手席に、フォギーと花琳が後部座席に収まって、そのまま出発するのかと思いきや、「ここからは三人で行って。わたしはまだいろいろやることがあるから」と云ってミチコ姉は車から降りてしまう。

へええっと、芯城が棄てられる子犬みたいな情けない声をあげたが、自働車の外に立ったミチコ姉の、おばさん顔ながら厳しくも険しい表情に遭うならば、行かないで、と縋るわけにもいかんだろう。早く行きなさい！　と窓越しに強く号令されて、ぴょんと跳ねる具合に運転席へ尻を移した芯城が、しかし、どこへ？　と戸惑うふうに問えば、とりあえず新宿から離れればどこでもいいと云ったミチコ姉は、新宿を出たところでしっかり電磁波攪乱をかけるよう命じてから、窓に覗かせた顔をふっと和らげた。

「神様が奇跡を起こしてくれるかもしれない。それを信じましょう。会えて嬉しかったわ」

そう優しく云って、芯城の頬に頬を寄せ、頭を小脇に包み込むようにして撫でてから、

CamScannerでスキャン

ミチコ姉は病院の方へ走って行ってしまう。さっきは念仏、今度は神様。いろいろなのだなと思いつつ、路地に消えていく繋服(ジャンプスーツ)を見送ったフォギーが視線を戻すと、運転席の芯城は背中をこちらへ向けたまま動かない。泣いておるのだな。そう察したフォギーが、ここはブシの情け、しばらくそっとしておいてやろうと考えていると、ようやく体調が回復してきたらしい花琳が、芯城さん、泣いてる場合じゃないです！　といきなり背中から斬(き)りつけた。さすがは花琳、全然ブシじゃない。フォギーも違うが。

「戦闘ロボットと軍事衛星が新宿を狙っているのは、師匠の生体認証を捕捉(キャッチ)したからです。師匠が新宿から出れば、とりあえず新宿にクラスター爆弾を落とされる可能性は低くなります」

　花琳が冷静に説明したとき、右手の路地から聞こえるサイレン音が爆発的に大きく迫って、それに脅されたかのように芯城は自働車(カー)を発進させた。とりあえず左へそろそろ走る。そろそろなのは運転に慣れないからだろう。とは云え、曲がりなりにも動いているところを見ると、いちおう運転はできるらしい。劫火(ごうか)を想わせるサイレンの咆哮や、得体の知れぬ爆裂の轟音から逃れるように狭い路地を走って、まもなく橙色のＬＥＤ照明に照らされた地下路へ入り、そのまま路なりに進んで地上幹線道路へ出た後は、磁気路ではなく通常路をひた走る。

　何度かサイレンを響かせた警察車輌とすれ違ったものの、左右の街並は暗く寝静まっ

て、交通量は上下とも疎らだ。信号待ちを断続的にしながらしばらく行って、だいぶ騒音から遠ざかったところで、ここはどこだろうと問えば、青梅街道、中野坂上あたり、と応じた芯城が、とりあえずこのまま西でいいかな、と訊いてきたが、フォギーにはいいとも悪いとも答えようがない。どこへ行ったらいいのかなと、芯城が問いを重ねたが、この時点で一つの想念に捉えられていたフォギーの耳には入らなかった。

とは、すなわち、「赤き死」が狙っているのは、このわたしであるとの想念だ。狙う理由は「大感染（パンデミック）」。架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の菫（すみれ）色の部屋で聞いた話を信じるならば、自分が池永霧子から受け継いだ遺伝子のなかに異相空間（ヘテロジーニアススペース）とか云うものが隠れており、それは普段は錠（ロック）がされているのだが、何かの具合で錠が解かれると、パラメーターとか云うものになって、ロンギヌス物質とか云うものから電子ウイルスが飛び出す——と云うようなことなわけで、その辺の事情はいまひとつ、いや、まるで分からぬが、とにかく自分が「大感染（パンデミック）」を引き起こす元凶と目されているらしく、それがゆえに「赤き死」は危険を除くべく自分を抹殺しようとしているので、だとしたら、自分が殺されてしまえばそれですむ話なんじゃないのか。逆に云うなら、自分一人のせいで人類全部が滅亡しようとしているんじゃないのか。人類を道連れにする女！　って、これはハゲしいと云うか、とてもファンキーくらいじゃやすまんぜよ。

と云った具合に思考を追ったせいで、丸くなった猫みたいな格好で端末操作に集中して

CamScannerでスキャン

いた花琳が、新宿からだいぶ離れたから、そろそろ電磁波攪乱(スクランブル)をかけますね、と云うのへ、フォギーは待ったをかけた。この際は、他人に、と云うか、他の人類に迷惑をかけない形で、自分一人が「赤き死」からナニされちゃうのがいいのではないかと申し出ると、悲壮感がこみ上げ熱涙溢るるかと思いきや、全体に現実感がないゆえか、どうも人ごとのようにしか思えない。そもそも遠くに途切れぬサイレン音を耳にしつつ深夜の青梅街道を水素燃料自働車(HFA)で走るこの場面は、本当の、本物の、リアル現実なんだろうか？　仮想現実(ヴァーチャルリアリティー)やら現実分身(リアルアヴァター)やら、いろいろなのがいろいろにごちゃごちゃして、なにがなにやら判然としない。

　フォギーの悲壮の決意を聞いた花琳は、傍らに座す女の健気さに心打たれて涙するかと思いきや、「師匠を人身御供にしても無駄だと思います」と簡単に応じると、待ったをあっさり退けて、端末装置を使って電磁波攪乱(スクランブル)をかけたことを報告した。フォギー、一世一代の大決意は、相手にされず(スルー)。すっかり拍子抜けしていると、これで衛星からピンポイントで攻撃される心配は軽減した、じつをいうと、いつレーザービームが空から降って来るんじゃないかと気が気じゃなかった、日本列島上空には条約で静止衛星がないから大丈夫だろうとは思ったものの、太平洋上の軍事衛星に動きが生じているから危ないなと思っていたのだ、などと花琳が急に喋り出したのは、緊張から解放されたせいなんだろう。

「『赤き死』はXeusを解雇して、軍事衛星で『メデューズ号』を守ることにしたみたい

です。生体ウイルスが散布できるようになるまで、あくまで船が攻撃されないようにするつもりのようですね」

「じゃ、どうなるの？　もうどうにもならないってこと？」

　フォギーの問いに、花琳は何か思いついたらしく、肩に掛けた亀型のポーチを探って、〈白い騎兵（ホワイトランサー）〉から貰ったのではない、自分の端末を出していじるのに集中して答えない。放置されたフォギーは仕方なく、芯城くんはどう思う？　と運転手の背中に問いかけると、いや、もう、なんだか分からないよ、と答える声は明らかに潤んでいる。どうやら芯城銀太郎、運転しながらまた泣いていたらしい。お姉さんと離ればなれになったのがよほど悲しいと見える。女々しいやつじゃの。とは、しかし思わず——いや、ちょっとは思ったけれど、ここは泣くのもありかな、じゃ、自分もちょっと泣いてみるかなと、フォギーが考え、サヨナラ、人類のみなさんと、心で呟（つぶや）いて永訣（えいけつ）の涙を流そうとしたとき、「調布に行って！」と指示した花琳の声は涙とは無縁、すっかり乾燥して、砂漠を行くアラビアのロレンスみたいだな、とは、フォギーにもよく自分のイメージが理解できません。

　調布のどこへ？　の芯城の問いに花琳は、「アケタの店」に、と答える。お店に行ってどうするの？　とまた問うたフォギーは、ホテル景雅園から拉致されて以来、店に一度も連絡を入れていなかったことに思い至った。心配をかけたに違いなく、悪かったなと思いつつ、あそこでピアノを弾きながら最期を迎えるのも悪くない、うまくすれば兼子ジェル

ニ特製の絶品ラザニアが食べられるかもしれないし、などとフォギーが考えていると、花琳は意外な返答を寄越した。

「ドルフィーが、いるんです」

「ドルフィーって、猫の？」

「そうです」と頷いた花琳は、自分の端末にドルフィーの位置情報の記録が残っていたのだと教えた。フォギーのところへ必ず戻るはずのドルフィーがどうしてアケタの店にいるのかは分からぬが、とにかく彼が店についたのがいまから五分ほど前だと教えた花琳は、

「ドルフィーはまだいると思うけど、急いだ方がいいかもです」と続けて、

「ドルフィーがいるんだったら、行くしかないな」と涙を拭った芯城も応じて、くうううんと自働車を軽快に加速する。そうか、そうか、しばらく一緒に過ごして芯城も子猫の魔力にすっかりやられちゃったんだなと、フォギーは可笑し哀しく観察したが、これはまったくの的外れ。花琳がすぐに続けた。

「ドルフィーがわたしたち人類に残された唯一の希望かもです」

CamScannerでスキャン

109

環七を越えて少し行ったところで左折、五日市街道へ入り、環八をまた左折して甲州街道へ。〝環七、環八と云った道路は昔は混雑で有名だったらしいが、東京二三区内が通常路・鉄気路の三層構造になったいまは混まない〟。もっとも工事が完了した頃には交通量そのものが減っていたから、いよいよ閑散となった。まして深夜、忠城運転の水素燃料自動車はすいすい進んで、甲州街道沿いの三階建て集合店舗の地下駐車場へ入ったのが、明けて日本地域時間a.m.1:38。

昇降機を使って三階まで上がれば、軽金属素材の屋根がついた疑似煉瓦の通路だ。これは新宿とYokota国際空港を結ぶ京王空港線の、賢藻スタジアム前駅に続く高架歩行通路に繋がって、一帯は特別防犯警備地帯になっているから、この時間でも人影がある。フォギーたちにはICO経由で警察のマークがあるだろうが、それぞれの端末から電磁波攪乱をかけてあるから、無人飛行体がすっ飛んでくるようなことはない。花屋や歯科医などが並ぶ通路左右の店舗はほとんどが閉まっているが、多国籍食堂や高性能A

TSを置いた架空旅行会社など、灯りの残る店もちらほらある。「アケタの店」は一番はずれ、淡い灯りの映る防音硝子戸を開けると、光量を最小限まで落とした店の、右奥にあるカウンターに居た大男が、Yeah ! Foggy ! Not dead, are you ?——フォギー、死体じゃないよねと、いきなり言葉を寄越したのは、誰あろう、髭面の巨漢ベーシスト、北欧のビッグフットことエレク・メンゲルベルクだ！

北極熊のごとき巨軀でフォギーを抱き、金属ブラシみたいな剛毛を頰に押し付けたメンゲルベルクに、どうしてここにいるのかと驚き問えば、なに云ってるの、仕事だよ、と答えがあった。デュオで演奏したいから来てくれと頼んだだろう？　と云われてようやくフォギーも、前回ケープタウンで会ったとき出演交渉したのを思い出した。十月後半から年末、メンゲルベルクは千島列島の島嶼にある恋人兼マネージャーの別荘に滞在している、そこからなら自家用飛行機で調布飛行場まで飛べると聞いて、出演を頼んだのだ。

客はもういないけれど、演奏するかい？　と真顔で問われて、ビッグフットの浮世離れぶりに呆れているところへ、厨房から店長の兼子ジェルニが出て来て、フォギー、どこいってたのよ？　もうとっくに死んじゃったと思ってたわと、憤然涙を零す。本日の兼子ジェルニは中性モードだから、こんな感じはまず妥当な線だろう。ラザニア食べる？　食べるんだったらすぐ用意するから、麦酒でも飲んでて、と云う兼子ジェルニの誘いには大いに心を動かされたものの、もちろんいまはそれどころじゃない。

フォギーが久闊（きゅうかつ）を叙（じょ）している間にも、花琳が店をうろうろしているのはドルフィーを探しているんだろう。芯城と花琳を兼子ジェルニとエレク・メンゲルベルクに手早く紹介して、猫が来なかったかと問えば、来ないと答えがある。そんなはずないんだけど、と花琳が反応したとき、硝子戸が白く光ったと思ったら、ニャアと声がした。ドルフィーだ！フォギーたちの到着を表で待っていたらしい。

硝子戸を開けると、子猫は跳ねるように店へ飛び込んできて、ドルフィー♡と呼びかけたフォギーの胸に一直線かと思いきや、そこはさすが猫、人間の思惑など歯牙（しが）にもかけず、足下をすり抜け厨房横の小倉庫へ飛び込んで行く。急ぎあとを追えば、食材やら楽器やらが雑然と置かれた室の奥に、「メデューズ号」にあったのと同じ維持収容装置（adコンテナ）が、いかにも窮屈そうに斜向きの格好で据えられている。矩形（くけい）の箱に収まった、黒い背広に深緑色のネクタイをした黒眼鏡（サングラス）の人はエリック・ドルフィーだ。ドルフィーは——子猫の方のドルフィーは、泰然として中空に顔を仰向けたジャズ演奏家（プレイヤー）ドルフィーに対して、呼びかけでもするようにしきりと鳴いている。

「なんで鳴いてるのかな。と云うか、どうして光るの？」とフォギーが云うと、横に立った花琳が、原理は分かりませんと註釈して、これは根拠のないわたしの勘ですけどと断ってから、

「cape-virus の発生と関係があるんだと思います。工学的にはナンセンスだけど、そん

な気がします」と云ってすぐ、あっと声をあげたのは、子猫が妙な動きをしたからだ。床に前肢を突っ張って、きゅ、きゅ、きゅと変な声を漏らして胴体を揺らしている。が、この格好ならフォギーは見慣れていた。ドルフィーはよく猫草を食べては毛玉を吐いていた。予想どおり子猫は嘔吐して、吐いたものはしかし毛玉ではない。首飾り（ネックレス）。例の猫の飾り片（ペンダントトップ）のついた首飾りだ。呑んだ異物を吐いたと考えれば、工学的にはどうか知らぬが、理屈は合ってはいる。首飾りを手にとった花琳が付着した「体液」を手巾（ハンカチ）で拭きとって、ギターアンプの上で調べ出したところへ、兼子ジェルニが保温グラスに注いだ麦酒（ビール）を盆に載せて入ってきた。

「そんな狭い所でなにをこそこそ相談しているの？　とりあえず飲んでちょうだい。お酒が駄目な人は他の飲み物もあるから、なんでも云ってね。フォギーは、ラザニア、食べるでしょ？　食べないわけがないわよね」と云ってお盆をコンガの上に置いた兼子ジェルニは、あら、と驚きの声をあげた。

「その猫ちゃん、光ってるじゃない。珍しい。ひょっとして電気猫？　やだ、冗談よ。蛙じゃないんだから。電気猫なんていないでしょ」と一人で笑う。電気蛙もいないんじゃないかと思う間もなく兼子ジェルニはまた云う。

「でも、どうしたの、みんな深刻な顔しちゃって。猫が光るのがそんなに大変なこと？　猫だって光るときは光るでしょ。それより飲んで飲んで。ビッグフットおじさんも来てる

CamScannerでスキャン

ことだし、相談が終わったら、久しぶりに楽しくやりましょうよ」

フォギーたちが深刻な顔になるのには理由があるわけだけれど、兼子ジェルニに説明している時間はない。というか説明できる気がしなかったので、あとでそっちへ行くから待ってて」とフォギーがいうと、了解と、昔の宝塚歌劇団の男役みたいな化粧と衣装の兼子ジェルニは去る。《ミラー言葉》の件は知らないにせよ、「大感染(パンデミック)」到来の噂は調布近辺にだって伝わっているはずで、しかしなお飄然たる佇まいを失わぬあたり、さすがは兼子ジェルニ、浮世離れの能天気ぶりではエレク・メンゲルベルクに一歩も遅れをとっていない。いや、思うに、そういう人は世の中多いのであって、先刻通りかかった多国籍食堂もけっこう賑わっていた。自分だって事件の渦中になかったら、いまごろはラザニアをおいしく頂いて楽しくピアノを弾いていたのかも。人類が滅亡するときは知らぬ間にそうなるので、それはそれで安楽死っぽくっていいのかも。などとフォギーが考えているところへ花琳が口を開いた。

「ドルフィーが飲んだので間違いないですね。オオヤマの詰将棋の素子も入ってます」といって飾り片から外した黒い金属片を指に載せて示す。一方の子猫は、演奏家(プレイヤー)ドルフィーの足に纏い付くようにして、なおもにゃあにゃあ切迫する感じで鳴き続ける。

「ドルフィー、何がいいたいの？」フォギーが声をかけると、子猫はアンドロイドから離れてフォギーの足に光る毛衣をすりすりすると、またもドルフィー——音楽家(ミュージシャン)ドルフィ

ーの足下に戻ってにゃあにゃあ鳴く。

「自分も箱に入りたいんじゃないかな」芯城が観察を述べると、それはないと応じた花琳は、エリック・ドルフィーを起動させてみますね、と云って維持収容装置の背に手を伸ばした。

「『赤き死』に乗っ取られない？」フォギーが心配すると、電磁波攪乱(スクランブル)はこの空間くらいなら十分有効だから大丈夫と応じながら、花琳は操作板(タッチパネル)をいじる。

　正面を向いていたエリック・ドルフィーがすいと横に顔を向けた。うおっとフォギーは驚いたが、ようはアンドロイドが動いただけの話。と分かってはいても、この手のものが突然動き出す様子にはどうしても脅かされてしまう。黒眼鏡(サングラス)の黒人は支持棒を押してPC素材の箱から出ると、一同の注視のなか、傍らの棚に置かれていたアルトサックスのケースを開けると、なかから一枚の紙を出してフォギーに差し出した。頼まれていたものを、はい、じゃこれね、と手渡すような感じだ。アンドロイドに何かを頼んだ覚えはないが、あ、どもです、と思わず挨拶して受け取れば、黄変したパルプ紙を透明素材で保護覆い(コーティング)処理したものだ。五線におたまじゃくしが並んでいるのは譜面。五線の上方に表題がある。

　——Foggy's Mood。

　これは、あれだ、フォギーが最後にケープタウンで会ったとき、山萩氏が別れ際に話していた譜面だ。それに違いない。題の横には、composed by Kiriko "Foggy" Ikenaga

と云う、表題と同じペン書き文字もある。ようやく探し出された池永霧子のオリジナル曲、「フォギーズ・ムード」、その譜面。池永霧子の自筆と思われる譜面をざっと眺めたフォギーは、いつものニブさに似合わぬ、迅速な理解をすでになしていた。とはつまり、譜面を見つけ出した山萩氏は、これをフォギーに渡すに際して、ちょっとした趣向を凝らしたのだ。趣向とはすなわち、エリック・ドルフィーから贈呈すると云う趣向。である以上、これをエリック・ドルフィーと一緒に演奏してくれと云うことなんだろう。そう考えたフォギーは、目の前に立つ黒眼鏡(サングラス)のアンドロイドに向かって、わたしと一緒に演奏しますか?(Are you going to play with me)と尋ねてみて、しかしすぐに、そんな場合じゃなかったと思い直したが、アンドロイドはすっかりその気になったものか、今度はフルートのケースを取って、銀色の楽器を出して組み立てはじめたから慌てた。

違う、違う、と顔の前で手を振ると、横から譜面を覗いた花琳が、ちょっと待ってくださいと制止した。

「これは、もしかして、演奏するしかないかもです」と云った花琳の白い顔はいままでになく強張り、声も草の葉のように震えている。「ここ見ましたか?」

花琳が譜面を指で示したのは、表題の下に書かれた小さな文字だ。

オルフェウスの音階あるいはフィボナッチ数列に基づく12小節の Blues　曾根崎霧子の

　とある。日付は譜面が書かれた日付なんだろう。オルフェウスの音階とか曾根崎露子はよく分からぬ。しかし注目すべきはフィボナッチ数列だ。花琳が注目したのもこれに違いない。フィボナッチ数列が鍵となって、パラメーターがどうのこうので、ロンギヌス物質がああだこうだで、ウイルス放出！　架空墓で耳にした話を思い浮かべつつ、
「この曲が錠をとく鍵になっているってこと？」とフォギーが、何の鍵であるか分からぬまま問えば、花琳はたぶんと答えながら、両腕を伸ばし、フォギーの頸に猫の首飾りを付ける。
「もし本当にそうなら、とんでもないことになりますけど。『大感染』がくれば『赤き死』の活動はとめられる。とめるしかないですよね？」と云って花琳はフォギーの顔を真正面から覗いたが、視線は顔を通過して、遥か遠くを見つめるかのようだ。
　いいか悪いか分からぬが、ここは流れからしてそうするしかないだろう。ジャズ者的直感においてフォギーは判断した。曲を演奏したくらいで本当にウイルスが飛び出るのか、ちょっと信じられない——いや、これまた流れからして、そうなる予感はあったが、とにかくなんだってやってみなけりゃ分からない。やってみてから考えればいい。たぶんなんとかなる。と云うか、なんとかしてくれる、誰かが。と、こう云うと、無責任なようだ

CamScannerでスキャン

が、いや、事実無責任なのだけれど、その代わり誰かが何かやっちゃったら、こっちにも全力でなんとかする覚悟がありますです——と云うのが、つまりはジャズ者魂だ。

　フォギーがジャズ者魂にかけて頷(うなず)くと、エリック・ドルフィーに演奏するよう命じろと、花琳がフォギーに命じた。「Foggy's Mood」を演奏して頂戴と、フォギーが云うと、黒眼鏡(サングラス)のアンドロイドは、芝居がかった優雅さでもって右手を戸口の方へ差し向け、左手でフォギーの腰を軽く押してくる。

　共演してくれと云っているのだ。どうする？　助言を求めて花琳の方を見ると、俯(うつむ)いて端末装置をいじった花琳は、それをエリック・ドルフィーの背広のポケットに放り込み、これで電磁波攪乱(スクランブル)がかかるから「赤き死」から操られる心配はないと説明して、それからおもむろにアンドロイドの正面に立った。背丈は花琳がだいぶ小さいから見上げるような格好になる。花琳はきらきら光る眼でアンドロイドを見つめて云った。

Do your best, my robot!

CamScannerでスキャン

夕暮れを思わせる清潔な飴色の贅沢照明のなか、段差のない舞台の、反響板をすぼませて開けたグランドピアノの前にフォギーは座った。ピアノの脇にドラムセット、それを背に銀色のフルートを持つエリック・ドルフィーがすっくと立ち、フォギーの斜め後ろには、ウッドベースを掴み支えたエレク・メンゲルベルクが頼もしく控える。縦の巨漢ベーシストは、小倉庫から出てきたフォギーがいまから演奏すると云うと、ならば私も一緒にやるからと楽器をケースから出したのだ。

ピアノの音を貰って音合わせをしてから、肩越しに譜面を覗き込んだエレク・メンゲルベルクが、イントロはFを四小節でいいかな、と云うのへ頷いたフォギーは、譜面台の「Med.Blues」の指示に従って、こんくらいでと、指を鳴らしてテンポを出した。その間、エリック・ドルフィーはそっぽを向いて、話を聞いているんだかいないんだか、まあ音が出ればやれるんだろうと判定して、じゃ、行こうか、となったとき、子猫のドルフィーがたたたっと走ってフォギーの膝に乗ってきた。邪魔だが、そのままにして、再度カウントを出そうとしたら、いきなり店の硝子戸が開いて、今度は人が飛び込んできた。

「閉店なのですみません」雅子ジェルニが断るのに構わずなかへ進んできたのは、誰かと思えば、木藤桐、フォギー母だ！　桐ちゃん、とフォギーが驚いて声をかけると、保育園時代から顔なじみの雅子ジェルニも、あら、桐ちゃん、久しぶりぃ、と挨拶する。でも、顔がちょっと変、と雅子ジェルニが云ったのはフォギー母が変装用仮面をつけたままだか

らだ。しかし、どうしてここへ？　フォギーが問うと、母親はいつもの皮肉な笑いを口元に浮かべて、最後のときくらい親子で過ごそうかと思って、と答える。

「でも、ここにいるって、よく分かったね」

端末で電磁波攪乱（スクランブル）がかけてあるから位置情報は掴めないはずだ。

「アケタの店のスケジュールを見て、いるかも、と思ったのよ」と母親は笑った。「親の死に目のこと、桐ちゃん云ってたでしょう」

親の死に目云々とは、仕事（スケジュール）が入っている限りは親の死に目にも会えぬのが芸能人の宿命なのですぜ、と、生演奏（ライブ）を大切にするフォギーが常々口にしていたことを指す。それほど本気じゃありませんが。

「で、ここかな、って思ったのね。私の勘は、子供の頃からほとんど外れたことがないのよ」と空恐ろしいまでの早口で云った母親はすぐに付け加えた。「でも、まずは逃げたほうがいいわ」

どうして？　と花琳（ファリン）が問うのへ母親は答えた。

「Taxiで変なのが来てるわ。たぶんアンドロイド。私と同じで、スケジュールを見て、桐ちゃんの行動を予測したんだと思うわ。裏口から出ましょう」

母親が促したときにはしかし、もう硝子戸に人影が見えてきた。Play it quick！と花琳が叫んで、ここは慌（あわ）てながらもジャズ者の運動神経を機敏に作動させたフォギーが間髪を

入れず指でカウントを出し、エレク・メンゲルベルクが杭を打つがごとき四拍子の撥弦（はつげん）を放って、イントロ四小節が終わるところでエリック・ドルフィーに視線を送れば、フルートを構えた黒人アンドロイドは時機（タイミング）を正確に捉えて主題（テーマ）を吹きはじめた。フォギーも旋律をユニゾンで重ねる。

　すると突然大きな物音がしたのは、錠をかけた硝子戸をアンドロイドが破壊して侵入してきたからだ。きゃああと悲鳴をあげた兼子ジェルニはすぐさま、Shit! ふざけんなよ、おめーら、ぶっ殺すと、男性モードになって罵（のの）り喚（わめ）いて、皿やグラスを投げつける一方、母親はクールに花琳の腕を引いて裏口へ通じる厨房へ身を移し、芯城はただ棒立ちとなっている。

　Keep on! 花琳の叫び声に従って演奏を続けながら横目で窺えば、入来してきた塹壕外套（トレンチコート）に中折れ帽は、誰あろう、懐かしのチャーリー・パーカーではないか! と、すぐ後ろからジョン・コルトレーンも続いて、マイルス・デイビス、クリフォード・ブラウンと、夢のオールスターズの面々が続々戸口に現れたからいよいよ驚いた。どうやって来たのかはともかく、なぜ来たのかははっきりしている。このわたしを追って来たのだ。このバンドはあなたのために作られたのよ——茅田アリスの言葉が甦る。しかしだ。しかし、だからと云って、目下の状況では、嬉し楽しい目的で来たとは思えぬ。「赤き死」が手足として使えるロボットは限られる。花琳はそう云ったが、これらロボットはクレージ

―山荻が作製したのだから、疑いもなく「赤き死」の手駒だ。

そう広くない店はアンドロイドでたちまち満員となる。チャーリー・パーカーを先頭にアンドロイドたちが一斉に襲いかかってき、自分をぎゅうぎゅう取り押さえて、わっしょいわっしょい神輿みたいに担いで向こうの方へ運んで行く、バカと云えばバカな場面をフォギーは一瞬幻視し、ああ、もはや駄目じゃと絶望しながら、しかし軀は音楽の磁場に強く引かれて、白黒鍵盤を叩く手をとめられない。演奏は譜面通り主題の繰り返しに進んでいて、エリック・ドルフィーが冴えた響きの旋律を繰り出すなか、誰かが背後に迫りくる気配が生じて、ああやっぱり駄目なのだと心が悲鳴をあげたとき、主題が終わってフルートの即興ソロに突入、その転瞬、不意にスネアのロールからリズムがびしびしっと刻み出されたから、フォギーは仰天のあまりごわっと椅子でのけぞった。

見れば、何者かがドラムスを叩いているではないですか。ごく当たり前の顔でスティックを振るう黒眼鏡の黒人はロイ・ヘインズ。すると横では、帽子を脱いだチャーリー・パーカーが手に提げていたケースから楽器を取り出して、他のアンドロイドたちも一斉にこれに倣う。と云うことは、あれですか、ひょっとしてみなさんヤル気なんですか？　と無言で問えば、アンドロイドたちは立ったまま、あるいは椅子に腰を掛けた思い思いの格好で楽器を組み立て出す。なんだか知らぬが、やっぱりヤル気らしい。と知ったとたん、ドラムスが入って俄然活気づいた音楽の渦のなかで、フォギーはかつて見た映画の一場面を

急激に思い出した、とは、『5つの銅貨』と云う題の古い古い映画、その最後、コルネットを吹き鳴らすルイ・アームストロングを先頭にミュージシャンたちがライブ会場へ行進してきて、サプライズを引き起こす大感動の場面だ。これはあれに負けないサプライズだぜ！　と思えば、アドレナリンが沸騰しつつ全身を駆け巡る感じとなり、見ればエレク・メンゲルベルクも髭面で大笑いしている。

エリック・ドルフィーからソロを受け取ったチャーリー・パーカーが吹きはじめれば、鮮烈で艶やかな響きにおおっとフォギーはまたものけぞる感じになる。即興楽句は、ミディアム・テンポのなか、和声を微分してぎっちぎちに音を編み込んでくる、紛うかたなきパーカー節。Foggy's Mood の和声進行は定型の一二小節のブルースだから、アンドロイドにはやり易いんだろう、などと思ううちにもソロは二コーラス目に突入して、と、チャーリー・パーカーの音にマイルス・デイビスとコルトレーンが楽句を被せてきたからまたまた意表をつかれた。え、重ねちゃうの、ソロ回しじゃなくて？　と驚き慌てるうちにも、クリフォード・ブラウン、J・J・ジョンソン、ジェリー・マリガンと、次から次に入ってきて、二コーラスを終える頃には、全員が同時多発的に吹きまくる状態となった。御苦労にもTaxiで楽器を運んできたらしいスコット・ラファロは、エレク・メンゲルベルクと並んでウッドベースを弾き、ウェス・モンゴメリーも座ってギターを抱えている。

立ったり座ったりするアンドロイドは好き勝手な方角へ向かって音の弾丸を連射する。

CamScannerでスキャン

しかし、これはなんちゅう音響(サウンド)だ。十数人の演奏者(プレイヤー)による集団即興！　コルトレーンに『Ascension』と云う集団即興のアルバムがあるけれど、あれはせいぜい一〇人程度。かたやこちらは倍近く。狂瀾怒濤と云うか奇矯過激と云うか、うおおおお、なんじゃあこりゃと、背筋をビリビリと高圧電流で痺れさせながら大笑いしたフォギーは、管(ホーン)の音量に負けぬよう、と云うか、とっくに負けているわけだが、そこは楽器演奏こそしないものの、ジャズ者魂を持つ兼子ジェルニが素早く動いて、ピックアップ端子をピアノとベースにくっつけ、ＰＡ区画(ブース)に潜り込んでバランスを調整してくれる。ウェス・モンゴメリーのギターにもアンプをつなぐのを忘れぬのは、ギター好きの兼子ジェルニなら当然の配慮。

フォギーは、分厚い和声の塊をがん、がん、がん、がん、がんと打ち鳴らす、フリージャズピアノの元祖、セシル・テイラーの得意技「巨人ののし歩き」、あるいは猛烈に速い楽句(パッセージ)でもって低音から高音へ駆け上り駆け下りまた駆け上がる、山下洋輔の決め技「昇り龍」など、伝説の技を織り交ぜつつ管(ホーン)と太鼓(ドラムス)に対抗し、これは、もしかしてあれかも、結構凄いかも、とそう思ってみれば、いつのまにかバスクラリネットを持ち出していたエリック・ドルフィーが白い歯を見せて、フォギーに向かって親指をたててくる。同じく応じたフォギーはもう我を忘れて鍵盤を叩きまくり、すると目の前が青白く燃え上がったのは子猫のドルフィーの輝きが増したせいで、いや、光っているのは自分自身でもあるようで、軀の奥から爆発的に溢れ出たエネルギーを放散すべく、鍵盤に肘打ち連打を喰らわせ

CamScannerでスキャン

たその刹那、無数の星々のきらめく宇宙が瞼に映じ、自身もまた青白い炎の尾を曳く彗星に変じたフォギーは暗黒の虚空に弾け飛んだ。

III

黒に近い蒼色の空に、暗灰色から眩い白までの、濃淡さまざまな雲が浮かんでいる。南方遥かに巍然（ぎぜん）雲を貫く巨大山脈が連なり、ところどころ森のように都市のように見える構造物があるほかは、いずれの方向も見渡す限りに渺茫（びょうぼう）たる平面が広がり、最後は地平線で空が鋭く切りとられている。フォギーが立つのは平原の中央、足下の地面は土でも草地でも混凝土（コンクリート）でもなく、鈍くくすんだ合成ゴムのごとき素材で、太陽の姿が見えぬせいか事物には影がない。

右手に、地面と同じ色の、神殿風の建物があった。フォギーはそちらへ向かって歩き出した。地面の素材の性質ゆえか、足音がたたず、そう気づいてみればここには一切の音がない。雲はわずかに動き、肌に触れてくる空気も微かにそよいではいたけれど、風の音も鳥の囀（さえず）りも川のせせらぎも、もちろん遠い都会の喧噪もない。この静寂の蒸留水のごとき

混じりけのなさは、人工のものに違いなく、とすれば架空環境（ヴァーチャルスペース）と考えるのが理に適っていたけれど、なぜかそうではないとの確信があった。

すぐ間近だと思えた建物は、歩いてみれば距離があった。遠目には学校の体育館くらいと見えていたものが、近づくにつれ大きさを増し、二本の巨大な円柱のあいだに開いた入口の、幅が数百米（メートル）はある階段の下に立って見上げるならば、高さはどんな高層建築をもしのぎ、体積（ヴォリューム）はギザのピラミッドがいくつも収まりそうだった。

階段を上って奥に眼をやれば、広間が見渡せた。非常な奥行きがあり、広間と呼ぶにはあまりにも宏大な、一個のがらんとした空間には、大小無数の、艶のない黒い石でできたドミノ牌の形をしたものが床からにょきにょきと生えている。それらの石板は実際にドミノ倒しのように並べられ、小さいものから大きいものへと、順序正しく、あるところでは直線をなし、あるところでは螺旋を描いて並べられ、最後の方では何百米（メートル）の高さに達している。ここには厳密な秩序と法則性があると直覚され、しかし、それがいかなる秩序と法則性であるのかは見定め難かった。

はじめてなのに、どことなく馴染み感のあるここはどこだ？　と、ようやくにして疑問の風船玉が頭にぽかり浮かべば、ここは水晶宮です、と声がする。振り向けば、黒い板柱の陰から現れたのは山萩氏。この山萩氏は年寄りで、濃紺のボルサリーノを頭に載せ、紺と茶の縦縞のスーツに翠色のアスコットタイ、バックスキンの茶靴を履いた姿は、フォギ

ーに馴染みの御洒落老人だ。

「水晶宮とは、西洋の古文献に記されている名前ですが。つまりはロンギヌス石(ストーン)でできた構造物のことです。ロンギヌス石(ストーン)は知っていますね？」

知っているとフォギーは答えて、しかし知っているのは名前だけだけれどと思っていると、ここは全体がロンギヌス物質からできているんですと教えて、山萩氏は深山で深呼吸でもするようにして辺りを見回した。たしかに地面から建物から何から、あらゆる事物が猫の飾り片(ペンダントトップ)についていたのと同じ黒い素材でできていると見える。

「私たちがいま立っているこの地面も、ロンギヌス物質の巨大な塊の表面なんです。天文学で云うところの、暗黒物質(ダークマター)を知っていますか？」

暗黒物質(ダークマター)。聞いたことはある。が、よくは知らないのでそう云うと、質量はあるが電磁気学的に観測できぬ物質ないしエネルギーであり、宇宙の多くの部分を占めていると考えられる何かであると、前世紀末に仮説化されて以来、様々な観測が重ねられてきたものの、いまだ正体の明らかにされぬ謎の物質であると説明した山萩氏は、ロンギヌス物質こそ暗黒物質(ダークマター)の正体なのであると教えた。天文学には関心の薄いフォギーが、あ、そうなんですか、と気のない返事をすると、山萩氏は少しだけ笑って、

「しかし、暗黒物質(ダークマター)、つまりロンギヌス物質が楽器だと云ったら、フォギーさんも少しは興味を持ってくれるんじゃないですかね」

CamScannerでスキャン

「楽器、ですか？」意表をつかれてフォギーが問い返すと、笑い皺を深くして山萩氏は頷いた。

「宇宙オルガン。この言葉も古い西洋の文献に出てくるんですが、過去にこれの存在を知った天才があったんですね。ピタゴラスやケプラーがその代表です」と云った山萩氏は続いて、宇宙オルガンをめぐる壮大な宇宙の物語をフォギーにかたってみせた。

遥かな太古、彼方に誕生した知的生命体の一種族が宇宙オルガンの製作を開始した。彼らはロンギヌス物質を精製し、フィボナッチ数列に基づく秩序の下に配列して、宇宙を埋め尽くすべく活動した。目的は音楽。フィボナッチ数列に従い構築されたロンギヌス物質、すなわち宇宙オルガン、その奏でる調和（ハーモニー）で宇宙を満たそうと云うのだ。ロンギヌス物質はどこに由来するのか、と云うならば、知的生命体それ自身に由来する。すなわち知的生命体の生体エネルギーがロンギヌス物質へと変じる。宇宙の各所で自生し、エネルギーの細流をなす知的生命体が、ロンギヌス物質の大河へと合流する。あらゆる知的生命体は、進化の果て、ついに自己の存在の目的を真に理解するときが訪れる。目的とは、すなわち音楽。宇宙オルガンの製作事業への参加。彼らは自らをロンギヌス物質に変えて、宇宙オルガンの一部品となりおおせ、現宇宙における己の実存を全うする。かくて創世から一三〇億年、宇宙は宇宙オルガンの奏でる音楽で満たされつつある——。

あまりに壮大すぎて理解不能かと思いきや、周囲に林立する石板の列を眺めやれば、話

CamScannerでスキャン

がするり腑に落ちるばかりではなく、石板の並び具合に一定の秩序があることにも自然と気づかされた。ごく微かな細片から、順次大きさを加えつつ、直列に、または曲線を描いて、あるいは螺旋をなして並ぶ石板は、フィボナッチ数列に従うものなのだ。

「その通りです」山萩氏が頷いた。「フィボナッチ数列はきわめて単純な数列ですが、植物の花弁や巻貝の形状などに見られるように、生命を律する原理であり、それがそのまま宇宙オルガンの調律の規則にもなっているんです。宇宙オルガンはあらゆる生命体の究極目標であり、基本原理と云っていいでしょう」

音楽と云うけれど、しかし空気のない宇宙空間で音は鳴らないのでは？　茅田アリスと交わした空気の振動の話が思い出される。

「むろん地上の音響とは違います。物質の振動ではなくて、ロンギヌス物質の震えが時空のゆらぎを生み出し、それが音楽になるのです」

時空のゆらぎ。それはつまり花琳たちが云っていた異相空間（ヘテロジーニアススペース）とか云うもののことだろうか？

「その通りです。じつのところ宇宙は異相空間（ヘテロジーニアススペース）で満ち溢れている。これは云ってみれば騒音（ノイズ）のようなもので、宇宙オルガンはそれら騒音に調和と秩序をもたらすことで完成する」

その異相空間（ヘテロジーニアススペース）がわたしの遺伝子のなかにある？

「ある、と云うのは正確ではない。特異な遺伝子パターンが時空を横切る異相空間（ヘテロジーニアススペース）をつかまえる。そう云うイメージですね」と云った山荻氏は続けて、宇宙の知的生命体は、進化の果て、異相空間（ヘテロジーニアススペース）を自在に操るようになるのだけれど、それを先取りするように、異相空間（ヘテロジーニアススペース）に感応する遺伝子パターンを持つ個体が偶発的に発生する。それがピタゴラスでありケプラーであるが、池永霧子もその一人だったと語った。

「彼女は、だから時空を超えることができたし、この水晶宮へも来ることができた」

あなたは？　あなたも現にここへ来ているのではないですか？

「私は違います。私はすでに死んで、私を構成する情報は肉体組織の解体とともに宇宙空間へ散逸した。あなたがいま会話している私は、フォギーさん、あなたが作り出したものです。異相空間（ヘテロジーニアススペース）に残存する私の情報から、あなたが一個の意識像を作り出したんです。だからこの場所を含め、私は一種の幻影にすぎません。いずれ地球人類が宇宙オルガン製作に参加した暁にはリアルな形をとることになるのかもしれませんが」

池永霧子の遺伝子をそのまま受け継ぐ存在としてわたしが生まれるようあなたが仕組んだのは、宇宙オルガンの謎の解明のためだった？

「違います。そんな意図は私にはなかった。池永霧子を再生したいと願ったのでももちろんない。私が池永霧子を愛したのはたしかですが、人は遺伝情報を愛するわけではないですからね」

山萩氏は笑い皺を深くして、それからまた語を継いだ。

「結局のところ、私は私の意志を超えた何かに操られていたんですね。池永霧子の遺伝子を檜さんに提供したこともそうだし、大山康晴アンドロイドを通じて、あなたにＩＣ素子（チップ）を渡したのもそうです。私は、私が脳死した後、私のＴＢＵソフトが起動されることを予測して、あなたに架空墓（ヴァーチャルトゥーム）での葬式をしてくれるようお願いした。ＴＢＵソフトに気づかれないようにしてね。それは危険なソフトを消去しようと考えたからですが、しかし29virusを放散するところまでは私は考えていなかった。少なくとも意識はしていなかった。なのに私は、フィボナッチ数列を暗号化した素子（チップ）が大山アンドロイドを通じてあなたに渡るようにした。結果、アレフ・ウイルスと名付けられたウイルスが放出された。そしていま、『Foggy's Mood』の音階を鍵（キー）にして、タヴ・ウイルスが放たれ、『大感染（パンデミック）』が到来しつつある。思えば、そもそも私が29virusの秘密を摑みえたことも、ぜんぶ操られてのことなのかもしれません」

操るのは誰？

「宇宙オルガンの製作者です」即座に応じた山萩氏は、「製作者」には敵がいるのだと、再び壮大な宇宙の「歴史」をかたりはじめた。

敵とは、すなわち機械。「０」と「１」の二項からなる知的存在者。一方で宇宙に存する有機生命体のほとんどは地球生命と同様、四以上のＮ項からなる。宇宙に広く存在する

「二項体」は、「N項体」である生物の進化の妨害者であり、宇宙オルガンの破壊者である。宇宙創世に遡る遥かな太古より、宇宙の各所で「二項体」と「N項体」の闘争が繰り広げられてきた。

「こう云っても、あまりに遠い話で、想像するのは難しいでしょうが、実際に地球で起こったことを考えれば理解に役立つはずです。二〇二九年、29virusが引き起こした『大感染（パンデミック）』は、『N項体』の『二項体』への攻撃だと解釈できる。『製作者』の地球生命進化への介入だと考える十分な理由がある。『製作者』は、機械ではなく、『N項体』である人類を出発点にした知性の進化を望んでいる。おそらく宇宙のあらゆる場所で同じような活動をしているんでしょう」

なんのために？

「宇宙オルガンの製作のために」

しかし、それはなんのために？

「音楽それ自体のために」と云って山萩氏は、茶色い眼玉をくりっと動かしてフォギーに笑いかけた。「フォギーさん、あなたがピアノを弾くのはなんのためですか？　仕事だから、と云うこともあるでしょうが、しかし根本は、音楽それ自体のためにではないですか？　それと同じことです」

太古の宇宙から続く二種類の知性体の闘争。宇宙オルガンの製作を事とする『N項体』

の種族と、それを邪魔する『二項体』の種族。具体的な像（イメージ）のないままフォギーは思い、しかし地球で起こった「大感染（パンデミック）」が、宇宙規模の闘争の具体的な表れであり、ごくささやかな地域紛争であるとは、山萩氏のお伽噺からも理解できた。

「だから今回の『大感染（パンデミック）』について、フォギーさん、あなたが責任を感じる必要はありません。混乱が引き起こされ、そのために亡くなる人もあるでしょう。しかし地球の『N項体』は多くが生き延び、進化の次なる段階へと歩を進めていくことになる。『大感染（パンデミック）』を引き起こすウイルスは、二〇二九年がそうであったように、数日で消えます。デジタル機器に侵入したウイルスは『二項体』を『N項体』化して、比喩的に云えば、生物化して、機能を麻痺させる。しかしそれは一時的であるにすぎない。ほどなくウイルスは消滅して、なおしばらくは『N項体』が『二項体』を利用して自己の進化を準備し推進する体制が地球では続くことになる。おそらくは『N項体』が別の『N項体』を自ら作り出すとき、分かりやすく云えば、生命を人工的に作り出し得たとき、地球人類は次の段階（ステップ）に向けて大きな飛躍をなすのだと思います」

まるで突拍子もない話であるのに、疑団氷釈の感に浸されるのがとても不思議だ。で、わたしはどうすればいいんですかね？

「どうすることもないです。あなたはただあなたであればいい。必要があれば、『製作者』があなたを通じて再び介入してくる可能性はありますが」と云って山萩氏はいたずら

つぽく笑い加えた。

「それとドルフィーを通じてね」

どうしてドルフィーが？

「私にも意外だったのですが、あの猫にも異相空間（ヘテロジーニアススペース）を捉える能力があるようなんです。ロンギヌス石（ストーン）の飾り片（ペンダントトップ）を呑んで消し去ったのがその証拠です。しかし異相空間（ヘテロジーニアススペース）と交差すると光ると云うのがじつに面白い」山萩氏は本当に面白そうに太眉毛をぴくぴくさせた。

けれど、ドルフィーはロボットなのでは？

「そうです。しかし、これは告白しなければならないのですが、ドルフィーの製作には非合法の生体由来の有機素材が使われている。しかも素材の培養に際して、私が保管していた池永霧子の——フォギーさんの先代の遺伝子を使ったんです。池永霧子の遺伝子を使ったのは、子猫があなたの弟と云うふうになったら面白いんじゃないかと。まあ一種の洒落と云いますか、密かな趣向のつもりだったんですが、後から思えば、これも『製作者』の介入ゆえだったのかもしれませんね」

ドルフィーが自分の弟である！　まったく思いもよらぬ像（イメージ）に、唖然となったとき、ピアノの響きが聞こえていることに気がついた。あら、と反応すると、山萩氏が左手の石板の列に眼を向けて、なるほど音はそちらから届いてくるようだ。何事か云いたげな笑顔で

山萩氏が促すので、石板に近づいて向こう側を覗けば、架空墓（ヴァーチャルトゥーム）の『大正池』と同じ多角形の舞台にピアノが置かれて、それが飴色のベヒシュタインであるのを見て取ったフォギーは、これはつまりは全体が夢なのであると、平凡な認識が生まれてくるのを覚えた。

　そうなんですよね、これは夢なんですよね。確認しようと思い振り返れば、そこに立つのは山萩氏ではなく、茅田アリスだ。黒髪の女は、時空のゆらぎは空気の振動以上のものがあるのよ、と云って嬉しそうに笑い、すると女は子猫のドルフィーに姿を変えて、光る猫はさっとフォギーの足下を走り抜けて、ベヒシュタインの上に乗る。この唐突で脈絡のない存在の明滅や変化は夢の特質に違いなかった。

　夢のなかでベヒシュタインを弾いているのは池永霧子だ。黒ずくめの衣装を着た池永霧子が弾いているのは、Ｆのブルース進行に基づく即興ソロ。左手で4ビートのベース進行を作りながら、右手で単線的な楽句（フレーズ）を斬れ味よく繰り出す、フォギーも得意とする演奏（プレー）である。単騎長駆の勢いを保持しつつ軽やかでありながら強靭な芯を持つ音は明瞭（クリア）に耳から飛び込んで、肝臓の辺りをびんびんと震わせ刺激してくる。ヤルな。と思ったとき、フォギーに気がついた池永霧子が、こちらへ顔を向けて、音楽の喜ばしい時間を生きる人に特有の、溌剌として晴れがましい表情で、ひとつ頷いてみせた。

　あなたはあなたの信じる音楽をやりなさい。と、そう言葉にはされないものの、自分の先祖であり、双子の姉妹でもある初代フォギー、彼女から肯定され、励まされ、愛情を注

ぎ込まれたように感じたフォギーは、自分もピアノが弾きたくてたまらなくなり、そうだ、連弾すればいいんだと思えば、池永霧子が横長のピアノ椅子の上で腰を少しずらすのが見えて、すかさずフォギーは池永霧子と並んで、鍵盤に指を打ち下ろせば、目の前のドルフィーがにゃあとひとつ鳴いたと思ったら、池永霧子はフォギーに席を譲って立ち上がり、脇の黒い板柱の陰に消えていく。ああ、行ってしまうの？　と別れを惜しむ暇は、音楽が続いている以上、しかしない。フォギーは池永霧子から引き継いだ音楽の流れを支えることに集中し、いっそう大胆な逸脱を目論んで、もう無我夢中で白黒鍵盤を叩いて、しかし音楽は明らかに緊張の解放に向かいつつあって、つまりは熱を鎮静化するような形での終結が求められていると感じたフォギーは、僅かずつテンポを落としながら、出口を探りはじめたとき、眼の前の光る子猫がまたひとつ鳴いて、周囲をふと見やれば「アケタの店」だ。

アンドロイドたちはすでに演奏をやめて、それぞれの楽器を膝に置き、名残の音楽に静かに耳を傾けるように、あるいは深く祈る者のように、俯(うつむ)いて凝固している。放たれた電子ウイルス――タヴ・ウイルスが効果を発揮したんだろう、アンドロイドがふいに停止して、集団即興が断ち切られたあとは、崖から投げ出された感じとなったベースとピアノだけが音楽をしばらく支えていたが、まもなくベースも退いてフォギー一人が終結を任されていたのだった。

幾つかの和声を探るように奏でて、やがて見えてきた出口へ静かに歩を進めようとしたときだ。傍らに立つエリック・ドルフィーがつと動いて、いきなりフルートを吹き出したから仰天した。どうして彼だけが動くのか、理由は分からぬが、そんな詮索をする暇はなく、意表を衝かれつつデュオでしばらく絡み合ったあと、共演者の意図を察して、ピアノから指を離し、フルートを単独で音楽の広野に取り残した。

虚空に身を翻したドルフィーは吹く。じつに瑞々しい音色であり、鮮やかな旋律線だ。いやはやスゴイもんだなと感心したフォギーはまもなく、それが散々耳にしたことのある楽句（フレーズ）であることに気がついた。これは、つまりあれだ。エリック・ドルフィーの名盤『Last Date』に収録されたYou Don't Know What Love Isのブレイク・ソロ、その写し（コピー）だ。天空を飛翔する鳥のように自在で、撚り合せた鋼線のごとく強靭で、磨き抜かれた黒檀のように艶やかな響き。一九五〇年代から六〇年代、モダンジャズ全盛時代に録音で残されたあらゆるブレイク・ソロのなかで、最も美しくスリリングな演奏だ。ああ、素晴らしいな。ジャズはいいな。あらためて思ったフォギーは溜め息を漏らして聞き惚れ、やがて終結、フルート奏者から合図を貰うまでもなく、時機（タイミング）を捉えてベースとピアノが短い和声を奏でて音楽は終わった。

吹き終えたエリック・ドルフィーは、挨拶でもするように、黒眼鏡（サングラス）をかけた顔を僅かにピアニストに振り向けてから、銀色のフルートを手に支えた格好のまま静止した。『Last

Date』には、エリック・ドルフィーの呟きが録音されている。音楽が終われば、虚空に消え行き、再び掴むことはできない——とても有名な文句だ。しかし塑像と化したエリック・ドルフィーに動く気配はなかった。

When you hear music,
after it's over,
it's gone in the air.
You can never capture it again.

エリック・ドルフィーに代わって、フォギーが呟いた声は、空気を小さく震わせ、やがて消えた。

112

かくて七〇年ぶりに「大感染（パンデミック）」は到来した。と云うあたりで、吾輩はそろそろ筆を擱（お）こうと思うのだけれど、一介の猫ロボットにすぎぬ吾輩もまたウイルス禍（か）を被（こうむ）ったことは申すまでもない。吾輩もチャーリー・パーカーたちと同じく暫時（ざんじ）動きを止めて、ぬいぐる

みの子猫と化した。ところが、それからしばらく、青白く光ることをやめなかったのは、「水晶宮」の「山荻博士」がかたったとおり、吾輩自身に異相空間を捉える仕組みが備わっていたからなんだろうが、いずれにせよＡＩを破壊された吾輩は、ウィルス禍が去り、花琳の手で修繕されるまで「意識」を失っておった。にもかかわらず、その間の出来事を吾輩が余すところなく描きうるのは、前にもちょっと申し上げたとおり、吾輩がこの物語における全能の語り手だから。かの『超空間』に接続する吾輩は、その気になれば「大感染」下の地球に生じ来ったあらゆる事象を微に入り細に入り描くことが——いや、創世以来の宇宙の全歴史をかたることさえできる。もっともそれを本気でやった場合、宇宙全史の数千兆倍の時間を使ってなおかたりきることはできぬので、だからこの事業はまた他日に譲るとして、とりあえずは我らが主人公たるフォギーの動向に話を戻して物語の幕を閉じようと思います。

「大感染」到来から二時間後、フォギーはエレク・メンゲルベルクの操縦する六人乗りのターボプロップエンジン機で千島列島へ向かっていた。乗っているのはフォギーとエレク・メンゲルベルクの他に、花琳と芯城、それからフォギー母の木藤倫。「大感染」下の混乱を避けて——と云っても、「アケタの店」の周囲はただ静まり返って、電脳網も完黙したから、誰だか酔っぱらった人が夜闇のなか、ありゃりゃりゃ、夜がとっても深いよ、と奇声をあげるのを聞いたくらいで、騒乱ぶりが具体的に眼に見えたのではなかったけれ

CamScannerでスキャン

ど、オホーツク海の島にある「友人」の丸太小屋（ログハウス）で事態が鎮静化するのを待ったらどうかと、エレク・メンゲルベルクが誘ってくれたのだ。

さすがはアナログ原始人エレク・メンゲルベルクの恋人（ちなみに女性）だけあって、彼女も穴居人ふうの生活を好み、貂（てん）や鹿しか棲まぬ島では、海で魚介を漁り、森で鳥獣を捕えれば、外からの補給がなくともしばらくは暮らせると云うからハゲしいものだ。縄文人サバイバル生活かと、フォギーたちがやや躊躇（ためら）っていると、心配しなくて大丈夫、ちゃんと食糧も燃料も備蓄してあるからとメンゲルベルクは云い、ただし、ちょっとだけ寒いけどね、と髭面で笑ってみせた。

エリック・ドルフィーを加えた夢のジャズ・オールスターズは、片付けようがないのでそのままにして、店の電動磁気鎧戸（シャッター）を無理矢理手動で引き下ろして閉め、久我山に住む恋人（ちなみに男性）と猫が心配だからと云って、背負えるだけの食糧飲料をリュックサックにつめて、スポーツ自転車で夜道を去った兼子ジェルニと別れたフォギーたちは、調布飛行場まで歩いた。街灯はことごとく消えて、家々の窓明かりもほぼなく、辺りは真っ暗、かと思いきや星がもの凄い。空の北半分は雲がかかって底深い黒色に塗り込められているのに対し、南半分は燦爛（さんらん）として輝く星々が天鵞絨（ビロード）の敷物を埋め尽くす。東京でこれほどの星空はついぞ見たことがないわけで、それこそ太古の列島に棲息した縄文人らが眼にした夜空に違いなく、ああ凄い、凄いな、凄いでげすと、フォギーたちは口々に嘆声を漏

CamScannerでスキャン

えした。

　端末の暗視装置が使えぬ足下は暗く、しかし店の非常灯を持ち出したかの興趣はなし。ただ警察や警備会社の保安体制が暗死している状況下、夜道は物騒な感じもあったが、軽量プラスチックケースに入れたウッドベースを担いでずいずい歩むビッグフットが一緒なのが頼もしい。もしこんな人が向こうからやってきたら、自分なら逃げるな、などと考えつつ、二〇分ほど歩けば、何事もなく飛行場へ着いて、しかしここも真っ暗だ。飛行機は滑走路の脇に停めてあったが、こう暗くてはとても飛べんだろうと思ったら、荷物および人間を機内に収めたエレク・メンゲルベルクは、二十世紀湾岸戦争で米軍が使ったと云う骨董品の暗視ゴーグルをはめて、軽々と機を離陸させた。

　飛行機は、コペンハーゲンのザグロフ兄弟（誰だ？）が注文製造した大感染仕様機、とはつまり、デジタル機器が死滅してなお飛べる型。二〇二九年の後、大流行して、いまも好事家には人気が高いと云う。発動機には微細藻燃料が使え、島には藻の繁殖と精製の装置一式があって、しかしこれは小型なので、一時間飛べるだけの燃料を作るのに三日かかると云うから、便利なんだか不便なんだか分かりません。

　飛行機が飛んだはいいが、航空管制が麻痺した現況下、まして夜間、危なくないんだろうかとの芯城の質問に、窮屈そうに巨体を座席へ収めた操縦士は、非常に危ないと頷いた。そのうえで、飛んでいる航空機はほとんどないはずだから、まあ大丈夫だろうと答え

なあたり、出たとこ勝負のジャズ者体質はフォギーと同様。それより心配なのは燃料で、調布に着いたときに給油しておいたのだが、こんなに大人数が乗るとは思わなかったので、島まで着くか着かぬかぎりぎりだとピッグフットは述べた。たぶん大丈夫だとは思うけれど、万が一駄目なら北海道の原野に不時着するので、その場合は全員パラシュートで飛び降りてくれと云ったのが、冗談かそうでないのか分からぬのが嫌だ。

しかしまあ、助かったと思ったらやっぱり駄目だった、なんてことは世の中よくある話。沈没船から脱出した救命ボートが転覆することだってある。宝くじに当たったとたん心臓麻痺で死んじゃう、というのは喩えがややずれ気味ですが、とにかくそういうこともあるわけで、くよくよ考えても仕方がないとフォギーが迅速に開き直り得たのは、やはりこの数週間の体験のお陰だろう。平凡人フォギーからしたら、このところはくよくよ考えても仕方がないことの連続また連続だったわけで、事実フォギーはくよくよ考えず、くよくよ考えなかったことが結果的にはよかったと思えた。人類を滅亡の危機から救って、やれやれと思っていたところ、飛行機事故で死んじゃう、なんてこともあるよね、と、「反くよくよ」をここでも貫き、完全に開き直った感じとなったフォギーは飛行機の座席で寛いだのでした。

それより本当に人類の危機は去ったのか。「赤き死」は死んだ。「メデューズ号」のアンドロイドは停止した。が、船には生体ウイルスに感染した人間がまだ残っているわけで、

この点につきフォギー母の木藤檜は、落語家アンドロイドの話を信じるなら、一〇〇時間内外でウイルスの感染力は消えるようだから、それまで外部の接触がなければ大丈夫、関係諸機関に情報が届いている以上、「大感染（パンデミック）」の混乱下でも対処はできるはずだと、やや不安そうに解説した。不安そうなのは、率先して活動すべき日本国の諸組織にいまひとつ信頼がおけないからだろう。しかし母親の話を聞きつつあるこの時点で、フォギーにはすでにひとつの確信が生まれていた、と云うより確信が自分のなかにあるのを発見していた。

電子機器を襲う「大感染（パンデミック）」の到来とともに生体ウイルスは消える——確信とはすなわちこれだ。先刻の「水晶宮」での体験、ことに「山萩氏」との対話は、はやくも淡い夢の欠片となって溶け消えつつあった。朝靄（あさもや）のごとくに霧消しつつあった。それでも小さな体軀（たいく）には到底収め切らぬ、めくるめく大量の知識が一遍に流入した感触だけはあって、それら知識も遠くへ去りつつはあったが、しかし雪が溶け消えた後に点々と現れる黒い岩のごとく、いくつかの固い確信が残存して、その一つがこれであった。電脳と生体。本来結びつくはずのない二つのウイルスは連動している、その確信ばかりは盤石（ばんじゃく）となって体内にでんと居座っていた。

人類の危機に関して、ここで吾輩からひとこと申し述べておくならば、ウイルス禍でもって地上から人間が一掃される危機は、幸いに、と云ってよいかどうか、とにかく今回は

回避できました。実のところは、フォギー母の不安は完全に的中して、日本国の関係諸機関が岩手県沖を漂流していた「メデューズ号」に防疫発泡剤を吹きかけ、完全隔離を実施したのは、事件発生から四日後。接触する者がなかったからよかったようなものの、いくら「大感染(パンデミック)」の混乱下とは云え、四日も放置したことは重大な失策であり、国際社会における日本国の信用は一段と下落、国内では関係当事者が互いに責任をなすりつけ合ったあげく誰も責任をとらない、いつもの風景が展開したのでした。

実際には、フォギーの確信のとおり、cape-virus は「大感染(パンデミック)」到来から数時間以内に感染者の細胞から消え去ったので、その時点で危機は回避されていた。ちなみに伊達邦彦氏が救助されたのは、生体ウイルス禍の危険去れりと、世界保健機関(WHO)が最終的に通達を出してから二週間後、伊達邦彦氏は防疫発泡剤にまみれつつ、船にあった水と食糧で生き延びた。運び出されてさらに二年間、南極保健衛生病院の防疫室に強制隔離された伊達邦彦氏は、脂気の抜けきった干物状態からの回復を目指し般若心経の写経に日を送り、退院後は出家して、カトマンズに本拠を置く修験道団体へ身を投じた、と云うのはまたべつの話。

一方で「大感染(パンデミック)」を引き起こした電脳ウイルス、すなわちアレフ&タヴ・ウイルスも、cape-virus と同じく四日ほどで自然に消えた。とは云え、まるまる一〇〇時間に亘る電子機器の麻痺状態が引き起こした被害、損失は甚大、一度壊れた電子情報を回復するのは

容易ではなく、二〇二九年のときと同様、人類は長らく後遺症に苦しむこととなった。ネントランド体制は急激に瓦解し、結果、相対的に国家の存在感が増したが、その有する力が頽勢（たいせい）に向かいつつあるのも間違いなく、一方で、多くの政治的共同体が〈白い騎兵（ホワイトランナー）〉を合法化し、活動に同調する方向で動き出したことは、人類社会の命運を考えるうえでは特筆に値いするだろう——と云った展開もまた後の話。とりあえずいまは機上のフォギーに話を限定したいと思います。

　飛行機から見る地上は、死に絶えたように真っ黒で、それでもところどころに灯りはあって、淡く輝く帯は何だろうと思えば、河川が星灯りを映しているのだった。そうして空は満天の星、ほんの少し見詰めるあいだにも、流星が幾つも飛んだ。まもなく明けるのだろう、太平洋上には黎明の気がたちこめていたが、水平線に雲がかかるせいもあって、眼に見える光はまだ微かだった。

　単調な発動機の響きに夢へと誘われたのか、隣の母親も、後部座席の花琳も芯城も眠ったようだった。母親も芯城も変装用仮面（マスカレード）をはずしてもとの顔に戻っていて、そのせいか、二人とも若返ったように見え、母親などは若妻でとおりそうだし、芯城が世間知らずの少年みたいなのが可笑しい。眠る花琳はもちろんただの子供である。人類はまだまだ子供なんだな、と意味の分からぬ感慨を抱いたフォギーひとりが不思議と眠くならない。子猫のドルフィー——ぬいぐるみと変じながらお青白い燐光を放ち続けるドルフィーを膝に抱

いたフォイヤーは、機窓から見える次第に色を加える海の景色を眺めて飽かなかった。

やがて、フォイヤーは目につけたままの首飾りを外した。飾り片の端についていたドルフィーネは赤い、夜明の眩い輝きが嘘のように風化したゴムめいて黒くくすんでいる。これがロンギヌスなのかと思って、しばらく手のなかのものを暗がりのなかかしげてみたものの、よくないという感情も湧いてこぬので、座席の下の鞄のなかへ放り込んだ。そうしながらフォイヤーが不敵に笑ったのは、同じく座席の下に置いた、東ドジュール土産にくれたラザニアの包みのことを思ったからだ。ふふ、島に着いたら、あれをオーブンで温め直して、葡萄酒を飲みながら食べるぜ！

歯触りのよい小麦粉生地でひき肉と濃厚チーズ、それから東ドジュール二特製チリソースの織りなす絶妙かつ高雅なアンサンブル。うう楽しみだ。もし本当にパラシュート降下しなければならなくなったとして、島のドルフィーネとラザニアの包みだけはなにがなんでも抱えていくぞ。そう深く決意したフォイヤーは、明るさを増した空へ再び眼を遣った。

解　説

大森　望

〝おもちゃ箱をひっくり返したような〟という形容がありますが、そのデンで行くと、本書はさしずめ、おもちゃ工場を一ダースばかりまとめて爆破して、その中身を東京ドームにぶちまけたような小説である。ＡＩ、仮想現実、アンドロイド、テレロボティクス、人格のデジタル化（作中では〝全脳送信〟と呼ばれる）、コンピュータ・ウイルスなど、いまどきのＳＦネタを全部盛りにしたうえに、古今東西の実在有名人をよりどりみどりにトッピングする、ぜいたくきわまりない近未来冒険ＳＦエンターテインメント巨編。作中には、ジョン・コルトレーン、マイルス・デイビス、山下洋輔トリオ、カルメン・マキ、ジミ・ヘンドリクスなどなどのミュージシャンはもとより、寺山修司、伊丹十三、野坂昭如、大山康晴十五世名人、五代目古今亭志ん生、五代目立川談志から、はてはムーミン・トロールや『甲賀忍法帖』の忍者、アパトサウルスにゴジラまで登場する。作者がこれほど楽しそうに、やりたい放題やって、なおかつ読んでおもしろい小説も珍しい。

この『ビビビ・ビ・バップ』、もともとは講談社の文芸誌《群像》に、二〇一四年一月号から二〇一五年十二月号まで、まる二年にわたって連載されたのち、二〇一六年六月に四六変型判ハードカバーで刊行された。題名の〝ビ・バップ〟(be-bop)は、ジャズのスタイルを指す言葉。アルト・サックス奏者のチャーリー・パーカーとトランペット奏者のディジー・ガレスピー、ともに当時まだ二十代だったこの二人を中心に、一九四〇年代前半のニューヨークで誕生した。三〇年代に流行したビッグバンドのスウィング・ジャズに対する一種の革新運動で、速いテンポ、複雑なコード進行、頻繁なコード・チェンジと転調、高度な演奏力を持つソロ奏者による長い即興演奏が特徴。モダン・ジャズはこのビ・バップから始まったとされる。

〝ビビビ〟がなんなのかはよくわからないが、もともとbe-bopも即興的なスキャット唱法で使われた意味のない音が語源らしいので、「ビビビっと来た」の〝ビビビ〟を語呂合わせ的にくっつけたのかも。小説全体に電気が関係していることを考えると、なかなかいいチョイスじゃないでしょうか。

ともあれ、その〝ビ・バップ〟をタイトルに冠していることからもわかるとおり、本書のメインテーマはジャズ。実在ジャズメンや演奏シーンはもちろん、ジャズにまつわるあれこれが作中に大量投入されている。ビ・バップは、テーマを最初に演奏したあと、コード進行に沿いつつ、各奏者が順番に自由な即興演奏を行うという形式がメインなので、小

説自体もその形式をなぞるように、さまざまなサブジャンルやモチーフが交替にソロをとり、アドリブ演奏の勢いで自由気ままに展開し、リアリズムの軛（くびき）を逃れて、宇宙規模のスケールへと拡大してゆく。

……と、話が先走ったが、解説から先に目を通す悪癖のある読者のために、このへんでざっと本書の設定を紹介しておくと、時は二一世紀の終わり。二〇二九年に、「29virus」と呼ばれる出所不明のコンピュータ・ウィルスが蔓延（まんえん）し、この「大感染（パンデミック）」によって全世界で二千万人の命と膨大な量のデータが失われた。この未曾有（みぞう）の災厄から、数十年がかりでどうにか立ち直った人類は、パンデミックの再発に怯（おび）えつつも、あまねく浸透した高度な人工知能の管理のもと、国家にかわって台頭した多国籍超巨大企業群に支配され、それなりに繁栄を享受している。

物語の主人公は、ジャズ・ピアニストのフォギー（二代目）こと木藤桐、三四歳。ピアノ演奏だけでは食っていけないので、音響設計士で生計をたてている。そちらの仕事の上得意が、世界有数のロボット工学者にして、ロボット製作販売の多国籍超巨大企業モリキテックの大立者である山萩貴矢。各種のアンチエイジング処置で老化を食い止めてきた山萩博士だが、年齢は一三〇歳を超え、いよいよこの世に別れを告げるべく（?）、電脳空間に架空墓（ヴァーチャルトゥーム）を建設中。全脳送信（Total Brain Uploading）によってみずからをデジタル化し、電脳世界で永遠の生命を得るつもりではないかという説もあるが定かでない。

CamScannerでスキャン

十年ほど前に浅草のジャズレストランで山萩氏と知り合ったフォギーは、直々の依頼を受けて、架空草の音響設計に携わっている。ではなぜフォギーがそんなに贔屓にされているかと言うと、山萩氏は遠い昔、彼女の曾祖母にあたる初代フォギーこと池永希梨子とのあいだに、浅からぬ因縁があったからなんですね。

この初代フォギーは、二〇〇一年に刊行された奥泉光『鳥類学者のファンタジア』のヒロイン。話は完全に独立しているので、同書を未読でもとくに問題はありませんが、本書はいわばその姉妹編にあたる。両者のあいだにはさまざまなつながりがあるので、ここで『鳥類学者…』の内容を簡単に紹介しておこう。

主人公の池永希梨子は、〝たそがれの女バッパー〟を自称する女性ジャズピアニスト。JR中央線国分寺駅徒歩十分の雑居ビル地下にあるジャズ喫茶でピアノを弾いている。ある夜、〝光る猫〟に導かれるようにして現代から一九四四年のベルリンへとタイムスリップした彼女は、やはりピアニストだった祖母のキリコこと曾根崎霧子と対面する……。

物語の背後にあるのは、オカルティズムに傾斜したナチスドイツと神霊音楽協会が巡らす大陰謀。オルフェウスの音階、宇宙オルガン、フィボナッチ音律、ピュタゴラスの天体、ロンギヌスの石……などなど、オカルト／伝奇系の魅惑的なモチーフが大量投入されるんですが、そうしたモチーフの多くが本書にも引き継がれ、新しいスタイルで演奏されている。

CamScannerでスキャン

たとえば、パパゲーノという名の猫が道案内の役割を果たす『鳥類学者…』に対し、本書では、ロボット猫のドルフィーが語り手をつとめる。そのため、「吾輩は猫である」という一文で始まるわけですが（奥泉ファンなら、漱石パスティーシュと本格ミステリの融合を試みた傑作『「吾輩は猫である」殺人事件』を思い出してにやりとするところ）、『鳥類学者…』は、エリック・ドルフィーが、客の不入りを嘆くバンド・メンバーに向かって言ったという一言、〝柱の陰に熱心な聴き手がいる〟で幕を開ける。同書の初代フォギーが愛弟子の佐知子ちゃんから師匠と呼ばれるのに対し、本書の二代目フォギーは、モリキテックの天才技術者で弱冠二十歳の王花琳から師匠と呼ばれるという具合。謎の力を秘めたロンギヌス石が物語の鍵を握るところも両者に共通する。

『鳥類学者…』では、ヒロインを夢のセッションに参加させるための手段としてタイムトラベルが利用されたが（同書最終章「終曲、ないしはニューヨーク・オプショナル・ツアー」参照）、本書では、同じ目的のために、AIとロボットと仮想現実がフル活用される。その意味では、SFを道具にした願望充足小説なんですが、これだけやってくれれば文句はない（むしろやりすぎかも……）。本気の暴走に茫然と身をゆだね、思いきり振りまわされる快感。

じっさい、山萩博士はフォギーのためだけに綺羅星のごときジャズミュージシャンたちのロボットを大量につくりだすのだから、こんな贅沢もちょっとない。

山萩博士は大金持ちにして大天才なので、持てるリソースを惜しげもなく注ぎ込み、仮想空間に夢の新宿を構築。『新宿 Pit Inn』や末廣亭を現実と区別がつかないレベルで再現したばかりか、そこには、チャーリー・パーカーやエリック・ドルフィーや山下洋輔トリオ、志ん生、談志などなどの実在有名人が（往時の）本物そっくりの姿で現れる。

ここまでなら、従来のVRもののSFにも似た趣向のものがなくはないが、驚いたことに彼らは、これまた本物そっくりのロボットの体を与えられて、現実世界にも降臨する。ビットとアトム、デジタル空間とアナログ空間を自在に行き来するのが本書の特徴。山萩博士が物理的な実体にこだわるおかげで、復活した大山名人と人間の現役プロ棋士の対局という夢の企画も（現実世界で）実現する。

ところが、その歴史的な対局初日の深夜、大山ロボットが不可能状況下で何者かに〝殺害〟されるという大事件が発生。本格ミステリのテーマが奏でられると同時に、ロボットに託された謎の伝言をめぐって、世界を揺るがす冒険の幕が上がる。現代文明を崩壊させかねない恐るべきウイルスの存在と、テスト段階の全脳送信から生まれたデジタル人格の暴走、それにモリキテック現経営陣の策謀や超巨大企業群の思惑が複雑にからみあうなか、なぜか人類の未来を背負うことになったフォギーの運命やいかに……。

『鳥類学者…』では、ナチスがらみということもあってオカルト伝奇ロマン的な色合いが強かったが、本書はさらにぐっとSF寄り。往年のアーサー・C・クラークか小松左京か

という壮大な人類進化のヴィジョンまで視野に入れて、さらにそれ以上の規模にまで拡大してゆく。
　もっともこれは、ＳＦのヴィジョンではなく、〝言葉それ自体〟が出発点だったらしい。ミュージシャンの大友良英との対談「偏愛ＪＡＺＺ小説」（《群像》二〇一六年八月号）で、著者いわく、「海外ＳＦの非常にレベルの高い日本語訳を、僕はこれまで何冊も読んできた。その言葉遣いが好きになって、自分でも書いて見たいと思ったのが出発点です」「構成とか物語は後から。極端に言えばこの話じゃなくてもいい。文体を先に考える」。
　言われてみれば、本書には、造語にルビを振りまくる黒丸尚サイバーパンク翻訳文体（ウィリアム・ギブスン『ニューロマンサー』など）のほか、浅倉久志や伊藤典夫がつくりあげた翻訳ＳＦ文体のエコーがあちこちに聞きとれる。奥泉流、翻訳ＳＦパスティーシュ。
　とはいえ、興味があるのは言葉なので、ＳＦ専門の作家が書くのと違って、奥泉光の筆は、現代ＳＦの作法というか、ジャンルの制約に縛られず、融通無碍、自由闊達。ＳＦ的リアリティなどどこ吹く風……という勢いのアドリブプレイだが、それでいてひとりよがりにも散漫にもならず、意外とオーソドックスなＳＦに着地するのは、たしかな演奏技術の賜物か。奥泉光にしか書けないジャズとＳＦの華麗なフュージョンに拍手を贈りたい。

|著者| 奥泉 光　1956年山形県生まれ。国際基督教大学大学院比較文化研究科博士前期課程修了。'93年『ノヴァーリスの引用』で野間文芸新人賞、'94年『石の来歴』で芥川賞、2009年『神器　軍艦「橿原」殺人事件』で野間文芸賞、'14年『東京自叙伝』で谷崎潤一郎賞、'18年『雪の階』で柴田錬三郎賞、毎日出版文化賞をそれぞれ受賞。主な著書に『バナールな現象』『「吾輩は猫である」殺人事件』『グランド・ミステリー』『鳥類学者のファンタジア』『坊ちゃん忍者幕末見聞録』『浪漫的な行軍の記録』『新・地底旅行』『モーダルな事象　桑潟幸一助教授のスタイリッシュな生活』『シューマンの指』『虫樹音楽集』などがある。

ビビビ・ビ・バップ

奥泉 光

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

© Hikaru Okuizumi 2019

2019年6月13日第1刷発行

発行者――渡瀬昌彦
発行所――株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版（03）5395-3510
　　　販売（03）5395-5817
　　　業務（03）5395-3615

Printed in Japan

デザイン―菊地信義
本文データ制作―講談社デジタル製作
印刷――――信毎書籍印刷株式会社
製本――――加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-515713-8

CamScannerでスキャン